# とある最強系主人公達の放蕩記

Hagalaz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

# 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある最強系主人公達の放蕩記

【Ｎコード】
Ｎ８４７１Ｉ

【作者名】
Ｈａｇａｌａｚ

【あらすじ】
友人達と異世界へ！？
隕石によって死亡した主人公達。
なんだかんだで転生した先はリリなの世界！？
は？世界平和の為に貢献しろ？良いだろう。私の用事のついでにな。

本局監査、はじめました。

# 宝具まとめ（前書き）

作中で御剣が使用した宝具及び、作者が考えた宝具一覧です。
Ｆａｔｅシリーズで出た宝具に関しては原作を参照してください。
注意！これらは作者の妄想の産物であり、独自解釈も含まれます。
割と有名どころの物しか無いので、過度の期待はしないで下さい。
たまに更新します。

更新履歴：２月７日　投稿
２月９日　『万人に訪れし終末（アトロポス）』　『金色獅子皮（レオン・ネメア）』　『禁鞭（きんべん）』　『盤古幡（ばんこはん）』　『金蛟剪（きんこうせん）』　『傾世元禳（けいせいげんじょう）』　『ソロモンの指環』　追加
２月１４日　グラム改訂。『雷霆（ポボス）の恐怖』追加
２月１７日　『轟く五星（ブリューナク）』　『炎天落とすは明星の矢（サルンガ）』　『光輪纏いし黄金の弓（ブラフマダッタ）』　『三都焼き払いし三叉戟（トリシューラ）』追加
２月１９日　『抜けば玉散る氷の刃（むらさめ）』　『勢州千子右衛門尉村正（せいしゅうせんごうえもんのじょうむらまさ）』　『布都御魂剣（ふつみたまのつるぎ）』　『天之尾羽張（あめのおはばり）』　『天羽々斬（あめのはばきり）』　『天叢雲剣（あまのむらくものつるぎ）』　『鋼鉄の乙女は　血化粧で　微笑んでいる（ギヨティーヌ・ドゥ・シャティモン）』　『天罰の断頭台（デン）』　追加
２月２４日　『四宝剣（しほうけん）』　『山河社稷図（さんがしゃしょくず）』　『如意羽衣（にょいはごろも）』　『九竜神火罩（きゅうりゅうしんかとう）』　『斬仙剣（ざんせんけん）』　『太極符印（たいきょくふいん）』　『番天印（ばんてんいん）』　『陰陽鏡（おんみょうきょう）』　『梱仙縄（こんせんじょう）』　『乾坤圏（けんこんけん）』　『火竜？（かりゅうひょう）』　『青雲剣（せいうんけん）』　『混元傘（こんげんさん）』　『黒琵琶（くろびわ）』　『花狐貂（かこてん）』　『叫名棍（きゅうめいこん）』　追加　その他色々補足修正
３月２３日　『竜鱗鋼身（ドラゴン・スケイル）』　『黙示の獣（アポカリプテック・ビースト）』　『絶世なる光輝の剣（デュラ・クリタ・ユガ）』　『栄光の黄金期（ンダル）』　『ＡＺΩＴ（アゾート）』　追加。その他追記修正。

8月5日　『紫綬羽衣(しじゅはごろも)』　『打神鞭(だしんべん)』　『五火七禽扇(ごかしちきんおう)』
『金霞帽(きんかぼう)』　『土竜爪(どりゅうそう)』　『混元珠(こんげんじゅ)』　『劈地珠(へきちじゅ)』　『開天珠(かいてんじゅ)』
『拌黄珠(ばんこうじゅ)』　追加　その他追記修正。

8月27日　『大典太光世(おおでんたみつよ)』　『鬼丸国綱(おにまるくにつな)』　『数珠丸(じゅずまる)』
『陸奥守吉行(むつのかみよしゆき)』　『避来矢(ひらいし)』　『降妖宝杖(こうようほうじょう)』　『上宝沁金(じょうほうしんき)』
『芭蕉扇(ばしょうせん)』　『冷艶鋸(れいえんきょ)』　『賽唐猊(さいとうげい)』　『硬き稲妻(カラドボルグ)』
『釘?(んていは)』
吼(オハン)え猛る黄金の盾』　『煌炎剣リットゥ』　追加。その他追記修正。

# 宝具まとめ

北欧神話

『魔狼縛りし魔法の紐（グレイプニル）』：対獣宝具ランクＡ　レンジ１～４　最大補足１～４頭

かつて世界を食らうとされた魔狼・フェンリルをラグナロクまで繋ぎ止める魔法の紐。
猫の足音、女の髭、岩の根、熊の腱、魚の息、鳥の唾液から作られた。
これらは、グレイプニルを作るのに使用されたため、この世に存在しなくなったといわれる。
魔獣、怪獣の類であれば、例外なく縛り付けられる。
それ以外の者には丈夫な紐でしかない。

『撃滅せし雷神の槌（ミョルニル）』：対城宝具ランクＣ～Ａ＋＋　レンジ１～１０　最大補足１～１００人

北欧神話に登場する、雷神トールが持つ北欧神話中最強の槌（ウォーハンマー）。
その威力はそれを受けて生き残った生き物は、かのヨルムンガルドだけであったと伝えられる程。
それも海水がクッションになり偶然助かっただけであり、当たり所が悪ければ即死だったと言われている。
投げれば相手を打った後に再び手元に戻り、掲げることで雷を呼び出すこともでき、大きさも自在に変えることができるとされる。
また、他者を生き返らせる際に振るわれたり、葬儀の際、儀式を聖

別するためにも用いられた。
本来扱うには帯と、鋼鉄の籠手（メギンギョルズ）が必要。

『大神宣言（グングニル）』：対軍宝具ランクＡ＋＋　レンジ１～９９　最大補足１人

北欧神話最高神、オーディンの持つ柄がトリネコで出来た槍。その穂先にはルーン文字が刻まれている。
一度放たれれば、必ず標的を貫き再びオーディンの手元に戻ってきたと言う。
オーディンは戦神であると同時に、全てのルーン文字の秘密を知る大魔術師でもあり、グングニルはその杖としての機能も併せ持ち、『祈願成就』の能力を持つ。
前述の放たれれば標的を貫く、と言うのはその能力の一端に過ぎず、その力は戦に於いて勝者を決定する程強力。
だが、槍としての側面が強い為、戦いに関する願いを叶える様特化され、万能の願望器では無い。

『破滅招きし魔杖（レーヴァテイン）』：対神宝具ランクＡ＋　レンジ１～９９　最大補足９９９柱

エッダ詩の一つ『フョルスヴィーズルの言葉』に登場する、輝く雄鶏ヴィーゾプニルを殺しうる唯一の武器である。
だが、レーヴァテインを手に入れるにはヴィーゾプニルの尾羽が必要、と言う堂々巡りの謎かけになっている。
一般的に剣のイメージが強いレーヴァテインだが、神話中に明言はされていない。
ヴィーゾプニルが住むのはユグドラシルの頂きである事から、それ

を撃ち落とす矢、槍、細枝であるとも言われている。
このレーヴァテインを持つのが炎の巨人スルトの妻、シンモラであることからラグナロクの際、スルトが振るう炎の剣と考えられている。
また、失われしフレイの剣、そしてミストルティンもまた、レーヴァテインと同一視されている。
これらの共通点は神殺しの武器、と言うことであり、神々に仇なす武器の総称とも考えられてる。
前述の剣、槍、矢、杖の４形態を持つ神殺しの武器。
いずれも炎を吹く武具だがその炎は対象が燃え尽きるまで消えることは無く、炎熱耐性に依って威力が減衰されない。
また、武器による直接攻撃、炎のいずれもが相手の神性が高ければ高いほど与ダメージが大きくなる。

『再誕（グラム）せし怒りの刃』：対城宝具ランクＡ＋＋　レンジ１～９９
最大補足９９９人

北欧神話に登場する竜殺しの剣。バルムンク、ノートゥングのモデル、即ち原典である。
元々はオーディンが林檎の巨木に突き立てた剣。これを引き抜けば戦神たる自分の加護を与える、と告げ、ガウトランドの王子シグムントが引き抜いた。
その後、シグムントは常勝不敗であったが、ある時戦場に現れたオーディンの槍、グングニルによってグラムを砕かれてしまった。
その後、シグムントの息子、シグルズが悪竜ファフニールを倒す為、砕かれたグラムの破片から新たに剣を鍛え直すよう養父レギンに頼み、レギンは３度目にして見事グラムを鍛え直した。
１４０ｃｍの長剣。砕かれた際にオーディンの加護は失われたが、石や鉄をも容易く切り裂く名剣。

神与の聖剣だが、シグルズが養父レギン、そして自身の義兄の１人、グトホルムをグラムで殺した事で魔剣に堕ちてしまった。
太陽剣の名を冠する『最強の魔剣』。刀身は太陽を模しており、その様はミニチュアの太陽その物。
その内部温度は１５．７　×１０の６乗度、表面温度だけでも約６０００度になる。
刀身が何かに触れると、コロナが噴き出し、触れるものを焼く。その温度は１０万度にも達する。
この剣は竜の因子を持つ者に追加で大ダメージを与える。
真名解放すると刀身が砕け散る事で内部太陽を解放し、使用者以外全てを焼き尽くす。効果範囲は使用者を中心に約２０Ｋｍ。
刀身が砕けようとも、残った柄に持ち主の魔力を充填することで再び宝具としての機能を取り戻すことが出来る。
が、途方も無く莫大な魔力が必要になる為、基本的に真名解放は１度きり。

『竜鱗鋼身（ドラゴン・スケイル）』：対人宝具ランクＡ＋＋　レンジ０　最大補足１人

北欧神話に登場する英雄シグルズは悪竜ファフニールを殺害した際、全身にその血を浴びた事で不死身の肉体を得た。
この宝具はファフニールの血液を濃縮したもので、普段は鱗の装飾が施された籠手の形をしている。
この籠手を装備している間、物理攻撃に対してはほぼ無敵の肉体を得る。
真名を解放する事で鱗に封じられていた血液が溢れだし、その全身の殆どを覆う竜鱗鎧に変貌する。
これによって、宝具・魔術・呪いを含むすべての攻撃を完全無効化する。が、シグルズの伝承の通りに鎧は肩甲骨の間だけは覆わず、そこだけが唯一の弱点となる。

また、この宝具自体が竜の因子を持つため、竜殺しの武器や能力の前では相手のランクに応じて弱体化する。

ギリシャ神話

『医神携えし蛇の杖(カデュケウス)』：対人宝具Ａ＋＋　レンジ１　最大補足１

ギリシア神話に登場する名医アスクレピオスの持っていたヘビの巻きついた杖。
対象者の体力、魔力を完全回復し、欠損した四肢すら復活させ、死者蘇生さえも可能。
かつて、医神の一面も持つアポロンの子であるアスクレピオスは、その医術で死者すら蘇らせた。
しかし、死者の国の王ハデスに嘆願されたゼウスは死者蘇生の罪により、アスクレピオスを雷霆でもって撃ち殺した。
その伝説に基づき、死者蘇生を行えば雷霆でもって罰せられる。

『万邪退け(アイギス)し山羊革の盾』：対人宝具ランクＡ＋＋　レンジ１　最大補足１

アテナ女神の持つ盾で、ペルセウスがメドゥーサの首をとりアテナに献上し、アテナはこのアイギスの真中につけたという。
アイギスは、ギリシア神話最高神であるゼウスの乳母のヤギ、アマルティアの皮を使用した盾で、その山羊の皮の加護により、破邪の力を持つと言われる。
盾としては最高ランクに位置する防具で、ゼウスの『雷霆(ケラウノス)』でさえ傷を付ける事が出来なかったとされる程。

ありとあらゆる攻撃を自動で防ぎ、メデューサの首によって攻撃してきた者へ状態異常：石化（移動、攻撃等、行動が一切行えなくなる。）を与える。
石化判定は対象の―ＭＡＧ（魔力）で行われ、Ａ以上ならば状態異常：重圧（プレッシャー）（敏捷に大きなマイナス効果。２ランクダウンさせる）で済む。Ｂ以下でもすぐさま石化するわけではなく、―ＭＡＧ（魔力）に準じた速度で石化は進行する。

『万象映せし神与の盾（ロー・アキレース）』：対人宝具ランクＡ＋　レンジ０　最大補足１人

ギリシャ神話の英雄、アキレースが宿敵ヘクトールと戦った際に用いた盾。
アキレースは友のパトロクロスに防具を貸すが、パトロクロスはヘクトールとの戦いで殺され、武具は戦利品として奪われてしまった。そこでアキレースの母テティスは鍛冶の神ヘパイストスに、代わりの防具をアキレースに与えるよう求めた所、貸し与えられたのがこの盾である。
限りなく真円に近い盾であり、中心から大地、空と海、太陽、月と星座、その周りを人々で溢れた２つの美しい都市が、その周りを３度目の農耕をおこなう畑、収穫される畑、葡萄摘みが行われる葡萄園が三等分に描かれ、更にその周りをライオンに襲われる牛の群れとライオンを追い払う牛飼いとその犬、牧羊場、ダンスフロアで踊る若い男女が、そしてその外側を海の海流が取り巻いている。
これらは世界全体を物質的にカプセル化したものであり、即ち世界そのものとも言える。
この盾を貫くには世界を貫きうる概念、即ち対界宝具でなければならない。

『金色獅子皮（レオン・ネメア）』対人宝具ランクＡ＋　レンジ０　最大補足１人

ギリシャ神話に登場する大英雄、ヘラクレスの纏う皮鎧。
ヘラクレスの十二の難行の１つ、ネメアの獅子退治の際手に入れた皮を元に作られた物。
ネメアの獅子は怪物大母エキドナとその息子オルトロスの子であり、竜に近しい幻想種。
その守りはありとあらゆる武器を受け付けず、唯一獅子自身の爪でのみ、その皮は切り裂けたと言う。
所持者自身の武器でのみ、この皮鎧は傷付ける事が出来る。Ａランク以下の攻撃は例外なく無効。
空に獅子座が浮かんでいる間、物理的なダメージではこの鎧を傷付ける事は出来ない。

『空翔ける靴（タラリア）』対人宝具ランクＣ　レンジ０　最大補足１人

ギリシャ神話の英雄ペルセウスがヘルメスより賜わった空翔けるサンダル。
履いていれば空を自由に駆け回れる。
大気を踏みしめて走る為、速力は所有者の敏捷に依存するが、この宝具自体に敏捷を１ランク上昇させる能力を持つ。

『雷霆の光輝（アルゲス）』：対人宝具ランクＡ＋＋　レンジ０　最大補足１人

ギリシャ神話の主神ゼウスの持つ身軽な鎧。ゼウスの持つ雷神としての力を鎧としたもの。
雷霆で編まれたこの鎧の前には、並大抵の武器では歯が立たないど

ころか逆に消し炭にされてしまう。
また、鎧の放つ光は強力で人間では耐え切れず、対峙しただけで灰になってしまう。
ゼウスはこれの他にも、『雷霆(ポボス)の恐怖』という鎧も持つ。

『雷霆(ポボス)の恐怖』：対人宝具ランクＡ＋＋　レンジ０　最大補足１人

ギリシャ神話の主神ゼウスの持つ重厚な鎧。ゼウスの持つ雷神としての力を鎧としたもの。
雷と言う大自然の力に対する根源的な畏怖、神としてのゼウスに寄せられる畏怖を形にした鎧。
対峙した相手に恐怖のバッドステータス、更には運以外の全ステータス３ランクダウンを与える。
ゼウスはこれの他にも、『雷霆(アルゲス)の光輝』という鎧も持つ。

『雷霆(ケラウノス)』：対人宝具ランクＡ＋　レンジ１～９９　最大補足１人

ギリシャ神話の主神、ゼウスの雷。またはゼウスの別名。
ゼウスが罪人を裁く際に使う雷で、火の神プロメテウスや医の神アスクレピオスを貫いたのもこの雷。
神罰の具現でもあり、罪人がこれをかわす事は不可能。

『死神携え(ケーリュケイオン)し双蛇の杖』：対人宝具ランクＡ＋　レンジ１～５　最大補足１人

ギリシャ神話の神ヘルメスの持つ一対の羽のついた双蛇の杖。
アスクレピオスの杖(カデュケウス)と混同されがちだが、こちらは羽が付いていて

蛇も２匹。
指し示した相手の生気を吸い取る事で深い眠りに誘う杖。
この場合の深い眠りとは永眠のことである。

『海王の三叉鉾（トリアイナ）』：対城宝具ランクＡ＋　レンジ１～９９　最大補足９９９人

海王ポセイドーンの権能を示す銛。嵐や津波、洪水や風という海の力と、地震や地割れと言った大地の力を操ることが出来る。
これは、元々ポセイドーンが大地の力を司っていた神である事に由来する。
ポセイドーンは海洋神であると同時に、地下水の支配者、泉の守護神でもあり、トリアイナで大地を突くとそこから海の如く大量の湧水が噴き出す。

『万人に訪れし終末（アトロポス）』：対人宝具ランクＡ　レンジ１～１０　最大補足１人

運命の女神モイライ三姉妹の末妹、アトロポスの名を冠した鋏。
予めその相手に定められた『寿命』を強制的に断ち切り死に至らせる能力を持つ。
相手を視界内に収め、鋏の刃を鳴らす事で発動する。回避判定は存在せず、耐える事も不可能。
元々死が定められている存在ならば、例え不老不死となった人間でさえ死に至る。
生まれた時から寿命という概念が無い、または死を内包していない存在には通じない。

『抜けば玉散る氷の刃(むらさめ)』：対軍宝具ランクＡ　レンジ１～２０　最大補足２００人

『南総里見八犬伝』に登場する刀。
元は鎌倉公方足利家に伝わる重宝であり、人を斬れば刀身に帯びた水気が血を洗い流すと言う。
また、刀身から霧を生じ、山火事や掛火を消す等、水に纏わる能力も持つ。
真名を解放すると、刀身から濃霧が溢れだし、レンジ内に満ち、霧の迷宮を生み出す。
この霧の中では全ての物が混迷に包まれ、自身すら定かでは無くなる。この霧は直感Ａすら阻害する。
この霧から出ようとしても、方角が分からず、永劫霧の中をさまよい続ける事になる。
唯一、村雨を持つ者だけが霧の迷宮から脱する事が出来る。

『勢州千子右衛門尉村正(せいしゅうせんごうえもんのじょうむらまさ)』：対人宝具ランクＡ＋＋　レンジ１～３　最大補足１人

徳川家に仇をなす「妖刀」として人口に膾炙している、言わば妖刀の代名詞である。
元は伊勢から東海道に掛けて活動していた刀鍛冶一派の作品を指すものだったが、徳川家康の祖父、父、更に嫡男信康が謀反の疑いで死罪となった際、介錯に使われた刀も村正の作であったと伝えられ、その上関ヶ原の戦いの折、東軍の武将織田長孝が戸田勝成を討ち取

るという功を挙げ、その槍を家康が見ている時に、家臣が槍を取り落とし、家康は指を切った、更には家康夫人である築山御前を小藪村で野中重政が殺害して斬った刀も村正、元和元年五月七日、真田幸村が大坂夏の陣で徳川家康の本陣を急襲した時家康に投げつけたと云われる刀も村正という伝承がある。
これらの伝承から、徳川家と対立する立場の者には逆に縁起物の刀として珍重され、宝具となるまでに至った。
『村正』と言う名自体に寄せられた信仰、畏怖の両方を受け宝具となった為、明確な所有者は居ない。
信仰、畏怖、その両方が『妖刀』村正に向けられたものであり、故にこの刀は名実ともに最高クラスの妖刀である。
所有者は幸運以外の全ステータスを4ランク上昇されるが、かつて徳川幕府を呪った人々の怨念によってスキル：精神汚染Ａ（精神が錯乱している為、他の精神干渉系魔術を高確率でシャットアウトする。ただし同ランクの精神汚染がない人物とは意思疎通が成立しない。）を受ける。
精神汚染の方向性は殺意。目に映る全ての人間に殺害衝動を抱く様になる。

『童子切安綱（どうじきりやすつな）』：対人宝具ランクＡ＋＋　レンジ1～3　最大補足1人

源頼光が丹波国大江山に住み着いた鬼、酒呑童子の首を切り落としたという伝承を持つ刀。
刃長二尺六寸五分（約８０．３ｃｍ）、反り？元（はばき）にて約一寸（３．０３ｃｍ）、横手にて約六分半（１．９７ｃｍ）、重ね（刀身の厚さ）ニ分（約０．６ｃｍ）。造り込み（しのぎづくりいおりむね）は鎬造、庵棟。
腰反り高く小切先。地鉄は小板目が肌立ちごころとなり、地沸（じにえ）が厚くつき、地斑（じふ）まじり、地景しきりに入る。刃文は小乱れで、足よく

入り、砂流(すなが)し、金筋(きんすじ)入り、匂口深く小沸つく。帽子は小丸ごころに返り、掃き掛ける。茎(なかご)は生ぶ。先は栗尻。鑢目(やすりめ)は切。目釘孔１つ。

佩表に「安綱」二字銘を切る。

現存する刀であり、天下五剣の一刀にして国宝。東京国立博物館に保存されている。

江戸時代に町田長太夫という試し切りの達人が、６人の罪人の死体を積み重ねて童子切安綱を振り下ろしたところ、六つの死体を切断しただけではなく、刃が土台まで達した、という逸話が残っている程の切れ味を誇る。

また、酒呑童子の征伐に用いられた他にも、松平光長が幼少の頃、「疳の虫」による夜泣きが収まらないのでこの刀を枕元に置いたところたちどころに夜泣きが止んだ、浮かんだ錆を落とすために本阿弥家に持ち込んだところ近隣の狐が次々と本阿弥家の屋敷の周囲に集まってきた、等の様々な逸話が伝わっている。

日本有数の鬼殺しであるが、それはこの刀の本質では無い。

真の能力は『種族殺し』。この刀の元の名は『血啜(ちずす)り』であり、その名の通り刀身から血液を吸収する。

そして、その中に含まれる因子を学習し、その種族に対する攻撃性を習得する。

数多の人々を斬り殺した事、そして鬼の棟梁である酒天童子を殺害した事で、人と鬼に対してはほぼ絶対的と言っても良い殺害能力を持つ。

また、酒天童子は八岐大蛇(ヤマタノオロチ)の子だと言う伝承も残っており、それによって微弱ながら龍殺しと神殺しの能力も持つ。

『大典太光世(おおでんたみつよ)』対人宝具ランクＡ＋＋　レンジ１～３　最大補足１人

平安時代後期の筑後の刀工・典太光世の作。

現存する刀であり、天下五剣の一刀にして国宝。現在は前田家に伝

わった文化財を保存、管理する「前田育徳会」が所蔵している。
刃長６６．１ｃｍ、先身幅２．５ｃｍ、元身幅３．５ｃｍ、反り２．７ｃｍ。
茎から刀身の五分の一ほどまで鎬筋に沿って「腰樋（こしひ）」と呼ばれる様式の樋を掻き、同時代の太刀と比べて非常に身幅が広く刀身長の短い独特の体配を持つのが特徴。
元は足利将軍家の家宝であったが、足利家の没落により流出し豊臣秀吉の所有となる。
前田利家の四女豪姫が原因不明の病気にかかったとき、大典太光世を借りて枕元に置いたところ、不思議なことに病気は治癒した。
だが、大典太光世を返すとなぜか病気は再発してしまう。太刀を借りては返し、借りては返しを繰り返していたが、結局豊臣秀吉は大典太光世を前田家に贈り、やがて豪姫の病気も完治したという。
古来から日本では守り刀という考えがあるが、大典太光世はその最高峰であったといってもよく、病魔退散の能力を持つ。
この刀の周囲には常に聖属性の結界が展開され、その内部にいる人間には呪いや病魔の類に罹らない。
詰まりは状態異常無効、治癒の効果を結界内の人間に与える。
また、その切れ味は鋭く、江戸千住の小塚原で行われた試し切りにおいて試し切りを行った際、積み重ねた死体の２体の胴体を切断し３体目の背骨で止まった程。

『鬼丸国綱（おにまるくにつな）』：対人宝具ランクＡ＋　レンジ１～３　最大補足１人

鎌倉時代初期、山城国の京粟田口派の刀工で、粟田口六兄弟の末弟である国綱の作。
刃長二尺五寸八分（約７８．２ｃｍ）、反り一寸一分（約３．２ｃｍ）。
鎌倉時代に入り、太刀の刀身の反りが大きくなり、またそれまでの

太刀に顕著であった「腰反り」から刀身全体が均等に反っている「輪反り」へと移行した時期の太刀で、先代、また後代の「太刀」と比べても大きな反りを持つ。
現存する刀であり、天下五剣の一刀にして皇室御物。現在は皇室御物として宮内庁の所蔵となっている。
北条時頼が夢で小鬼が現れて悩まされるという病にかかった折、国綱が夢に現れ、錆を取るよう言われた。
そのとおり錆を取り、抜き身で立てかけておくと、小鬼形の火鉢の足を国綱が倒れて切り落とし、それ以降時頼の病は治ったという。
この事から国綱は鬼丸国綱と号されたと伝えられる。
また、この伝承から払魔（ふつま）、鬼殺しの能力を持つ。
余談だが、天下五剣のうち鬼丸国綱だけは「御物」であるために国宝及び重要文化財としての文化財指定を受けていない。

『数珠丸恒次（じゅずまるかねつぐ）』：対人宝具ランクＡ　レンジ1～3　最大補足1人

刃長８１．１ｃｍ、反り3．０ｃｍ。太刀銘で『恒次』の銘が切られており、平安時代の刀工、青江恒次の作とされているが、備前恒次の作との説もある。
現存する刀であり、天下五剣の一刀にして重要文化財。現在は尼崎市の本興寺に保管されている。
日蓮が所持していたとされる太刀で、日蓮が甲州身延山へ入山したとき、護身用として信者から贈られたと伝えられ、柄に数珠を掛けていたことからこの名が付いたとされる。
日蓮没後は他の遺品とともに身延山久遠寺に保管されていたが、享保年間から大正まで一時行方不明となっていた。
数珠丸の銘と日蓮上人が所有していたという事から退魔の力を持つ。

『陸奥守吉行（むつのかみよしゆき）』：対人宝具ランクＥ－　レンジ１～３　最大補足１人

幕末の志士、坂本竜馬が所有していた刀。
江戸初期に打たれたもので、名刀ではあるが近代までは無名だった。
この刀の特異性は何よりも『斬り付けた相手を殺さない』事にある。
坂本竜馬は江戸の千葉道場で塾頭を務め北辰一刀流免許皆伝の腕前であった。
にも拘らず、この刀を抜いても他者を殺めた事は無かったとされ、
この伝承が元となってこの刀は『不殺』の刀となった。

『布都御魂剣（ふつみたまのつるぎ）』：対神宝具ランクＡ＋＋　レンジ１～９９　最大補足９９９人

記紀神話に現れる霊剣。ふつ、とは物を断ち切る音を示すものであり、この剣は物質は当然の事、『概念』、『現象』さえも断ち切る。
神武天皇は神武東征の折、ナガスネヒコに敗退し熊野山中で危機に陥った。
そこで天照乃命（あまてらすのみこと）は高倉下（たかくらじ）を通じ、この剣を神武天皇に渡した。
すると、この剣の霊力に依り神武天皇の軍勢を取り巻いていた毒気は祓われ、軍勢はたちまちの内に活力を取り戻し、後の戦では大勝利を収めた。
また、この剣を示す事で荒ぶる神を鎮める事も出来る。
長さ２ｍを越える巨大な直刀。元は雷と剣の神、建御雷之男神（たけみかづちのかみ）の持つ剣であり、建御雷之男神（たけみかづちのかみ）はこの剣を用いて葦原中国（あしはらなかつくに）を平定した。
所有者とその味方の両方にスキル：対呪Ａ（呪いに対する耐性。Ａランクほどになれば如何なる呪法を以てしても呪われる事は無い）と活性Ａ（永続的な体力回復。Ａランクともなれば、即死しない限

りは瞬間的に回復する）を与える。
真名を解放する事で雷を纏った極大の斬撃を放つ。この斬撃は物質的、概念的にも防御不能。
斬撃判定は先端部だけだが、撒き散らされる雷に依って周囲にも多大なダメージを与える事が出来る。
この剣自体が神として祭られているので、独自の自我を持つ。
また、この剣は刃物として最上級の格を持ち、更に元々の持ち主が剣神にして雷神、建御雷之男神（たけみかづちのかみ）であるが故に、その加護で所有者は金属、火、雷には害されなくなる。

『天之尾羽張（あめのおはばり）』：対神宝具ランクＡ＋＋　レンジ１～４　最大補足１柱

日本神話に登場する刀であり、天之尾羽張神（あめのおはばりのかみ）という神。
別名は伊都之尾羽張（いつのおはばり）。
『古事記』の神産みの段において、伊邪那岐命（いざなぎのみこと）が迦具土神（かぐつちのかみ）を斬ったときに使った十拳剣。
火の神である迦具土神（かぐつちのかみ）を斬り殺し、火・雷・刀に関する神々を生み出した。
その最たる一柱が建御雷之男神（たけみかづちのかみ）である。
迦具土神（かぐつちのかみ）を斬り殺した事で、炎殺しの能力を持つ。
この剣の所有者は一切炎に害される事は無く、この剣の一振りはありとあらゆる炎を吹き散らす。
神殺しの武器であり、この剣自身もまた神である為、強力な対神性を持つ。

『天羽々斬（あめのはばきり）』：対神宝具ランクＡ＋　レンジ１～４　最大補足１柱

須佐之男命(すさのおのみこと)が、八岐大蛇(ヤマタノオロチ)を退治する際に使用した十拳剣。
八岐大蛇(ヤマタノオロチ)の尾を斬った時、この剣の刃が欠けたので、尾を裂いてみると剣が出てきた。これは不思議なものだと思い、天照御大神にこの大刀を献上した。これが天叢雲剣(あめのむらくものつるぎ)のちの草薙剣(くさなぎのつるぎ)とされる。
八岐大蛇(ヤマタノオロチ)を倒した剣である為、竜の因子を持つ者に追加ダメージを与える。
また、八岐大蛇(ヤマタノオロチ)は水をつかさどる水神でもあった為、これを倒したこの剣は対神宝具として扱われ、神性をもつ者に追加ダメージを与える。

『天叢雲剣(あまのむらくものつるぎ)』：対神宝具ランクＡ＋＋　レンジ１～４０　最大補足９９９柱

日本国三種の神器の一つ。日本に於ける皇族の武力の象徴とされる。
かつて出雲の国を荒らし回っていた八岐大蛇(ヤマタノオロチ)を須佐之男命(すさのおのみこと)が退治した際、尾を切りつけると持っていた天羽々斬(あめのはばきり)が欠けてしまった。
そこで須佐之男命(すさのおのみこと)が尾を裂くと、現れたのがこの剣である。
八岐大蛇(ヤマタノオロチ)は水神でもあり、その尾から現れたこの剣も水の属性を帯びている。
鞘から抜き放てばその刀身は雲を纏い、この雲自体も刀身の一部である為、本来の刀身の間合い以上の範囲を攻撃できる。
真名解放は剣に宿る八岐大蛇(ヤマタノオロチ)の魔力を解き放つ事で八頭の水でできた龍首を生み出し、
それを操り攻撃出来る様になる。

『避来矢(ひらいし)』：対人宝具ランクＡ＋　レンジ０　最大補足１人

平安時代中期の武将・藤原秀郷が、百足退治の礼として龍宮の王からもらったという伝説のある大鎧。
その兜鉢は１５枚の鉄板を重ねて作られており、一行には六点ずつとがった星が打たれており、その内部は空洞になっている。
非常に重いが、飛んできた矢が避けて通るという伝承を持つ。
飛び道具に対して絶対的な防御能力を誇る。飛来する物は決して命中することは無く、それは飛び道具の余波による物も例外ではない。
が、代償として敏捷が１ランク低下する。
この鎧は『避来矢大権現』と呼ばれ唐沢山神社の御神体となっている為、この鎧自体がスキル：神性Ｃを持ち、それ以下のランクの宝具による攻撃は軽減され、通常武器による攻撃は無効化される。
が、この鎧に宿っているのは前述の龍宮の王なので、龍殺しの武器に対して上記の効果は適用されない。
宿っている龍神は所有者が幸運判定に成功すると、相手の弱点を教えてくれる。

## 中国神話

### 『雷公鞭』：対界宝具ランクＥＸ　レンジ１～９９　最大補足９９９人

中国の伝承、小説「封神演義」における黒点虎に乗る道士、申公豹の武器、宝貝。
申公豹が太上老君から授かったもので、随意に雷を起こし、形あるものを焼き尽くし粉砕できる。
影や魂まで溶かすという。
放たれる雷はユーラシア大陸を横断する程の射程も誇る。
仙界の中心地、崑崙山にもかなう武器がないのではないかともいわ

れる威力を持つ。
藤竜版で結界を破壊していたので対界宝具に分類。

『六魂幡(りくこんはん)』：対軍宝具ランクＥＸ　レンジ１～９９　最大補足９９９人

金鰲山の教主、通天教主(つうてんきょうしゅ)の宝貝。スーパー宝貝(パオペイ)の１つ。着衣が渦となって相手を飲み潰す。究極的には飲み込んだ相手を“無”にまで縮めることができる。
仙人界二大教主の持つ宝貝にふさわしいだけの能力を持つ。
また、身に纏う事で攻撃を吸収する防具としても使用可能。

『大極図(たいきょくず)』：対界宝具ランクＥＸ　レンジ１～９９　最大補足９９９人

仙人、太上老君(たいじょうろうくん)が所有する巻物。
乾坤（天と大地）を開き、陰陽（物事の相反する性質）を分かち、四象（春夏秋冬、若しくは水火土石）を治めると謂う。要するに「この世全ての物質や現象を、自在に操作出来る」事が可能。
世界に満ちる力の全てを操る事で味方を癒す、または自身を強化させる事も出来る。

『禁鞭(きんべん)』：対軍宝具ランクＡ＋＋　レンジ１～９９　最大補足９９９人

金鰲島出身の道士であり殷王朝の太師（軍師）にして金鰲三強の一人、聞仲(ぶんちゅう)が持つスーパー宝貝(パオペイ)。

能力は使用者から半径数Ｋｍ以内の敵を打ち据えるだけ。しかし単純な打撃故の防ぎ難さ、一撃で相手を屠る攻撃力、更には虚実を入り混ぜる事で対処し辛くなっている。

『盤古幡（ばんこはん）』：対城宝具ランクＥＸ　レンジ１～９９　最大補足９９９人

三大仙人の一人にして、崑崙十二仙の頂点に君臨する崑崙山の教主、元始天尊（げんしてんそん）の持つスーパー宝貝（パオペイ）。
見た目は黒い球体。一定空間内の重力係数を自在に操る能力を持つ。最高は重力万倍。

『金蛟剪（きんこうせん）』：対城宝具ランクＢ＋～ＥＸ　レンジ１～９９　最大補足９９９人

金鰲島出身の道士であり金鰲三強の一人、趙公明（ちょうこうめい）の持つスーパー宝貝（パオペイ）。
使用者の生命エネルギーを元に龍を召喚する能力を持つ。召喚中は持続的に生命エネルギーを消耗する。
全長数Ｋｍに及ぶ巨大な黄金龍が最強召喚。
龍は独自の意志を持ち、自身のランクより低い宝貝（パオペイ）を食べてしまう。
白と黒の双龍～Ｂ＋相当
七色の七龍～Ａ＋＋相当
黄金龍～ＥＸ
七色の七龍までは龍の数によってランクが変動する。

『傾世元禳（けいせいげんじょう）』：対軍宝具ランクＡ＋＋　レンジ１～９９　最大補足

９９９人

金鰲島出身の仙女であり殷の皇后、しかしてその正体は齢１００を数える大妖狐、妲己（だっき）の持つスーパー宝貝（パオペイ）。
精神操作系の宝貝であり、誘惑（テンプテーション）を筆頭に様々な状態異常を効果範囲内の相手に与える。
また、封神演義内最高性能の防具でもあり、同ランク程度の攻撃では傷１つ付かない。

『四宝剣（しほうけん）』：確率変動宝具ランクＥＸ　レンジ１～９９　最大補足９９９人

古代中国神話における人間創造の女神、女禍（じょか）の持つ宝貝（パオペイ）。
物の存在する確率を変動させる能力を持つ。
そこに『有る』物を『無い』事にするのではなく、存在しつつも存在しない、と言うあやふやな存在に相手を堕とす。
そうなった場合、世界はそれを不確定因子として修正する為、消滅させられてしまう。
防御する、吸収する、と言った次元には最早存在しない宝貝（パオペイ）。
パワーを押さえた接近戦時ならばともかく、フルパワーで放たれた場合、一撃で１つの星が滅ぶ。
何度も世界を破壊し、創り直してきた正真正銘最強の宝貝（パオペイ）。

『山河社稷図（さんがしゃしょくず）』：結界宝具ランクＡ＋＋　レンジ１～４　最大補足１０人

女禍（じょか）の持つ宝貝（パオペイ）。
本体でもある無数の蛇が、相手の周りの世界を食らい無窮の牢獄に

閉じ込める。
五感を奪われ時の流れすら淀む世界で心を壊す精神宝貝。直接相手の生気を食うことも可。

『五火七禽扇(ごかしちきんおう)』：対軍宝具ランクＡ　レンジ１～２０　最大補足１～３０人

金鰲島出身の仙女であり殷の皇后、しかしてその正体は齢１０００を数える大妖狐、妲己(だっき)の持つ宝貝(パオペイ)。
その名の通りに青、赤、黄、白、黒、即ち木火土金水の属性を持つ５色の炎を放てる扇。
全ての属性の炎を同時に放つことで無属性の衝撃波を放つことも可能。その衝撃波は辺り一面が灰燼と帰す程。

『金霞帽(きんかぼう)』：対人宝具ランクＡ　レンジ０　最大補足１人

金鰲島出身の仙女であり殷の皇后、しかしてその正体は齢１０００を数える大妖狐、妲己(だっき)の持つ宝貝(パオペイ)。
被る事で使用者の姿を隠すことが出来る。また、被っている間は逆に姿を隠している者の姿を見抜くことが出来る。

『如意羽衣(にょいはごろも)』：対人宝具ランクＡ＋＋　レンジ０　最大補足１人

妲己の義妹で、正体は雉鶏精(ちけいせい)の妖怪仙人、胡喜媚(こきび)の持つ宝貝(パオペイ)。
文字通り、使用者を何にでも変化させる能力を持つ。不定形である風はおろか、素粒子にさえ変化させられ、通常の宝貝(パオペイ)ながら、スーパー宝貝(パオペイ)さえも凌ぎ得る能力を秘めている。

変化した相手が人物ならば、その人物の持つ能力も再現される。
変化に必要とされるのは使用者の想像力。イメージに綻びが有ると、変化できないか、出来ても不完全なものとなる。

『紫綬羽衣（しじゅはごろも）』：対人宝具ランクＡ　レンジ１～１０　最大補足１～９９人

妲己の義妹で、正体は瑠璃琵琶（るりびわ）の妖怪仙人、王貴人（おうきじん）の持つ宝貝（パオペイ）。
仙界に住む毒蛾の繭から紡いだ糸で織られており、周囲に毒の鱗粉を撒き散らす能力を持つ。
その効果範囲は風向きに左右されるが、毒粉は非常に強力であり、一般人ならば一呼吸だけでも命に関わる。
毒粉だけで無く、空中浮遊とかなり高い防御能力を持つ。
しかし、毒粉も羽衣自体も熱には弱く、短時間炎に晒されただけで効力を失ってしまう。
ただし、後者の羽衣自体の耐熱能力は使用者の力量に左右される。
因みにこの羽衣は金鰲島大司教、通天教主（つうてんきょうしゅ）の手織り。

『落魂鐘（らっこんしょう）』：対軍宝具ランクＡ　レンジ１～３０　最大補足１００人

崑崙（こんろん）十二仙、霊宝大法師（れいほうだいほうし）の持つ宝貝（パオペイ）。
ハンドベルの様な見た目ながら、それから発せられる音を聞いたものは魂を砕かれ、絶命する。
防ぐには純粋に耳を塞ぐか、使用者以上の魔力を持っていなければならない。

『九竜神火罩（きゅうりゅうしんかとう）』：対人宝具ランクＡ　レンジ１～５　最大補足１人

崑崙十二仙の一人、太乙真人の持つ宝貝。
普段は肩に装備されているアーマーの様な形態だが、真名を解放すると相手に向かって飛んでいく。
拘束用の宝貝で、仙界でも有数の硬度を誇る。
閉じ込めた内部の相手を、九頭の竜の形をした火炎で焼き付くす事も出来る。
前述の通り拘束用の宝貝だが、その硬さからシェルターの様に使う事も出来る。

『斬仙剣』：対人宝具ランクＢ　レンジ１～３　最大補足１人
崑崙十二仙の一人、玉鼎真人の持つ宝貝。
皮の鞘に納められた一見変哲もない刀だが、その切れ味は斬られた事さえ相手に気付かせない程。
持ち主である玉鼎真人の技量も相まって、その剣速は音速を超える。

『太極符印』：対軍宝具ランクＡ＋　レンジ１～２０　最大補足９９９人
崑崙十二仙の一人、普賢真人の持つ宝貝。
元素、重力などを操り、また敵の行動パターンを記憶するなど多機能なコンピューター宝貝。
スーパー宝貝、『盤古幡』と『大極図』を元に元始天尊が作ったもの。
水素を分解して水素原子を作りだし、放射性物質である三重水素を生成する事で小規模な核爆発を起こす事も可能。

『番天印』：対軍宝具ランクＡ　レンジ１～５０　最大補足５００人

崑崙十二仙の一人、広成子の持つ宝貝。

平時は直径２０ｃｍぐらいの印鑑（朱肉がいらないタイプ）だが、戦闘時に生物的な展開をして片腕を覆う重砲になる。

まず有視界範囲内の全ての敵に「番天」と書かれたターゲットロックオンを行い、次に砲身から誘導性の光線をロックした全員に向かって発射、的確に致命傷を与える大量殺戮宝貝。

押印は破壊する事は可能。押印しなくとも発射は出来る。

『陰陽鏡』：対軍宝具ランクＡ　レンジ１～５０　最大補足５００人

崑崙十二仙の一人、赤精子の持つ宝貝。

片面が白く、片面が赤い鏡。赤い面で一度照らせば相手を昏倒させ、二度照らせば相手を殺し、三度照らせば相手を血水にする。白い面は助けるときに使うが、血水となったものは助ける事ができない。

鏡は複数枚ある。

『梱仙縄』：対人宝具ランクＢ＋　レンジ１～９　最大補足１人

崑崙十二仙の一人、懼留孫の持つ宝貝。

相手に向かって投擲すると自動的に相手を捕え、梱仙縄を切ろうとすると、よりきつく締めあげられる。

『打神鞭』：対神宝具ランクＢ　レンジ１～８　最大補足１～３０人

元始天尊の直弟子にして周の元帥、太公望の持つ宝貝。

長さ三尺六寸五分の木製の鞭で、２１に分かれた節に四道の符印が施されている…のだが、その様はまるで伸縮式の指示棒。
基本的な使用方法として真空波のようなものを形成して敵に飛ばす。また、全力使用することによって竜巻を起こすこともできる。風の結界を張って敵の攻撃をそらすことも可能、と応用に富んでいる。操る風は唯の風ではなく、一種の生体エネルギーなので物理的でない攻撃にも有る程度干渉できる。

『乾坤圏(けんこんけん)』：対人宝具ランクＣ　レンジ１～９９　最大補足１人

太乙真人(たいいつしんじん)の弟子、？？(なたく)が生まれた時から持っていた銅輪。
真名解放し投げつける事で発動する。
相手を坤（大地）とし、その他を乾（天）とする事で、『乾坤圏(けんこんけん)』は相手に向かって落下し続けて行く。
その為、相手との距離が有ればある程、相手がかわせばかわす程、威力は上がって行く。
手元に戻す時は手元を坤とする事で『乾坤圏(けんこんけん)』は戻って来る。

『火竜?(かりゅうひょう)』：対人宝具ランクＢ　レンジ３～８　最大補足１人

妲己の配下で原型が蟷螂の妖怪仙人、陳桐(ちんとう)の持つ宝貝(パオペイ)。
竜の吐いた炎を鍛えて造られたと言われている。
ブーメランの様な形状をしており、投げて相手に当たらなかった場合は自動的に戻って来る。
火竜?(かりゅうひょう)は高熱を帯びており、通った後には火炎が残る程。

『土竜爪(どりゅうそう)』：対人宝具ランクＣ　レンジ０　最大補足１人

崑崙十二仙の一人懼留孫の弟子、土行孫と聞仲付きの秘書官、張奎の持つ宝貝。
装備することで土の中を自在に移動できる様になる。また、爪の部分をミサイルのように飛ばして直接攻撃も可能。
しかし、張奎は土行孫以上にこの宝貝を使いこなしており、土を自在に操って周軍と崑崙側の同士を生き埋めにして進軍を妨害した。
崑崙側と金鰲側の宝貝開発能力の差もさることながら、宝貝は使用者によって能力が左右される、と言う見本でも有る。

『青雲剣』：対人宝具ランクC　レンジ1～5　最大補足1人
魔家四将長兄、魔礼青の持つ宝貝。
本体の刀身とは別に、斬撃時に予測不可能な位置へ切っ先を複数形成する初見殺しの宝貝。

『混元傘』：対人宝具ランクB＋　レンジ0　最大補足1人
魔家四将次兄、魔礼紅の持つ宝貝。
攻撃を反射する能力を持つ傘。強力な斥力フィールドを展開し、攻撃してきた相手にその攻撃を返すリフレクター宝貝。通常の射撃武器としても使用可能だが、吸収したエネルギーが無ければ撃てない。

『黒琵琶』：対軍宝具ランクA　レンジ1～60　最大補足100人
魔家四将三兄、魔礼海の持つ宝貝。
地水風火をあらわす四弦の張られた琵琶。

弦を弾けば地震・洪水・暴風・火事を引き起こすことができる。
また、音色を聞かせた相手を混乱させ同士討ちを誘う事も出来る。

『花狐貂(かこてん)』：対城宝具ランクＡ＋　レンジ１～８０　最大補足６００人

魔家四将(まかよんしょう)末弟、魔礼寿(まれいじゅ)の用いる獣型攻城兵器型宝具(パオペイ)。
浮遊移動しながら城壁などを破砕しつつ飲み込む。鉄人２８号のようなコントローラーで遠隔操縦可能。
剛性と弾性を兼ね備え、熱兵器や光学兵器の類もはじくという強力極まりない装甲を誇る。
大型の宝具だが、ポケットに入るぐらいに小型化できるのでギリギリまで接近を気取られない。
活動エネルギーを飲み込んだものを消化することで賄う為使い手の負担も軽く、戦線に複数投入することができる。

『混元珠(こんげんじゅ)』：対軍宝具ランクＢ　レンジ１～４０　最大補足１～１００人

聞仲配下、九竜島の四聖が一人、高友乾(こうゆうけん)の持つ宝具(パオペイ)。
水の形状を自由に操ることができる珠。
操れる水の量は使用者の能力に依存するが、水はもう１つの珠から調達することができる。
当然、片方を水が大量に有る所に浮かべておかないと実力を発揮できない。

『劈地珠(へきちじゅ)』：対軍宝具ランクＢ　レンジ１～４０　最大補足１～１

００人

聞仲配下、九竜島の四聖が一人、楊森（ようしん）の持つ宝貝（パオペイ）。
掌に埋め込まれた珠によって高速で地形を変化させ攻撃、防御、足止めを行ったり、地霊を吸い上げ味方の体力を回復したりする汎用宝貝。
四聖の持つ宝貝（パオペイ）全てに共通するが、攻撃範囲は広いが接近戦には不向きと言う欠点を持つ。

『開天珠（かいてんじゅ）』：対軍宝具ランクＢ　レンジ１～４０　最大補足１～１００人

聞仲配下、九竜島の四聖が一人、王魔（おうま）の持つ宝貝（パオペイ）。
外套に仕込まれた無数の珠によって構成される宝貝（パオペイ）。
珠一つ一つに爆発力と飛行能力を持ち、空中からの広範囲爆撃やオールレンジアタックを可能にする。
爆発の威力は高く、山を１つ崩す事も容易い。

『拌黄珠（ばんこうじゅ）』：対軍宝具ランクＢ　レンジ１～４０　最大補足１～１００人

聞仲配下、九竜島の四聖が一人、李興覇（りこうは）の持つ宝貝（パオペイ）。
空中を浮遊する球体で、李興覇はこれにまたがっている。
球体表面から熱線を複数放つが、１発１発の威力は低い。また、相手の射撃武器を自動回避する性質を持つ。

『叫名棍（きゅうめいこん）』：対人宝具ランクＣ　レンジ１～１０　最大補足１人

聞仲配下、張圭芳（ちょうけいほう）の持つ宝貝（パオペイ）。
呼んだ相手の神経を支配することができるメガホン。相手の名前が判らないと使用できない。
聴覚を元にした効果である為、耳栓程度で防がれる。

『照魔鏡（しょうまきょう）』：対人宝具ランクＢ　レンジ１　最大補足１～４人

魔物や妖怪の正体を明らかにする、または人間の持つ魔性の部分を映し出す鏡。
これで覗かれると過去や考えている事がダダ漏れに。
どこかの外道神父に渡してはいけない。
別名、照妖鏡、ラーの鏡。

『如意金箍棒（にょいきんこぼう）』対人宝具ランクＢ　レンジ１～９９　最大補足１人

『西遊記』に登場する、斉天大聖（せいてん）・孫悟空の持つ伸縮自在の鉄棒。
別名、『天河鎮定神沁鉄（てんがちんていしんしんてつ）』。
中国最古の王朝・夏の王、禹が洪水を防ぐために海に沈めた巨大な柱、海底を均す為の棒、禹が江海の深さを測定した際のおもりとも言われている。
別名の通り、この棒は神沁鉄（しんしんてつ）と謂う特殊な金属で出来ているので滅多な事では壊れない。
大きさ、長さは自由自在だが、重量だけは一定で一万三千五百斤（約８ｔ）。

『降妖宝杖（こうようほうじょう）』：対人宝具ランクＢ　レンジ１～２　最大補足１人

『西遊記』に登場する、捲簾大将・沙悟浄の持つ降魔の杖。
かつて沙悟浄が天界の役人だった頃、天帝・玉皇上帝から授けられた物。
降妖宝杖は黄金の芯が通った月桂樹で出来ており、周囲には連珠が配置されている。杖の片側には箆型の刃、もう片側には半月型の刃が付いている。その刃の材質は月から取り出された摩訶不思議な金属で作られている。その刃に触れた妖怪はたちどころに浄化されて消滅してしまうと言う。
重さは五千四十斤（約３ｔ）。

『上宝沁金釘？』：対軍宝具ランクＢ＋　レンジ１～４０　最大補足３０人

『西遊記』に登場する、天蓬元帥・猪八戒の持つ？風の武器。
かつて猪八戒が天界で天の川の水軍を指揮する天蓬元帥の任務を賜っていた時、天帝・玉皇上帝から下賜された宝物。
それは道教の神、太上老君が自ら神沁鉄を鍛えて作った武器で、玉の様な９本の歯と金環が付いており、六曜五星が飾られている。
太上老君が鍛えただけあって、孫悟空、沙悟浄、猪八戒の持つ武器の中で最も立派に見え、神々しく輝いていると言われる。
振り上げると焔を巻き上げ、振り下ろすと吹雪が舞い、敵を広範囲にわたって倒す事が出来る。
重さは五千四十斤（約３ｔ）。

『紫金紅瓢』対人宝具ランクＢ　レンジ１～１０　最大補足１人

『西遊記』に登場する鬼・銀角が持つ、名前を呼ばれて返事をした者を内部に吸い込み、溶かしてしまう瓢箪。

偽名であろうと返事をすれば吸い込んでしまう。

『芭蕉扇』：対軍宝具ランクＢ＋＋　レンジ１～５０　最大補足１００人

『西遊記』に登場する、翠雲山に住む鉄扇公主が持つ南方風の団扇。
１扇ぎすれば大風を起こし、２扇ぎすれば乱雲を呼び、３扇ぎすれば豪雨を降らす能力を持つ。
その風は孫悟空が鉄扇公主と戦った際、孫悟空が１扇ぎで七日七晩の間飛ばされ続けた程。

『冷艶鋸』：対軍宝具ランクＡ＋　レンジ１～９９　最大補足９９９人

『三国志演義』に登場する実在の武将、関羽雲長の持つ青龍偃月刀。
鍛冶匠達がこの偃月刀を鍛えていた時、空から一閃の光芒が走り、金床に置かれた刀身を貫いた。その閃光が治まると、そこには青龍の姿が刻まれた冷ややかな蒼さを放つ青龍偃月刀が出来上がっていたと言われている。
真名を開放して振ると、龍の姿をした極大斬撃が放たれる。その威力は大地に亀裂が奔り地が裂ける程。
関羽は学問を好み文武両道、信義に厚く義理堅いその様は多くの信仰を集め『三界伏魔大帝神威遠震天尊関聖帝君』と言う神として祭られている。

『賽唐猊（さいとうげい）』：対人宝具ランクＡ＋　レンジ０　最大補足１人

『水滸伝演義』に登場する梁山泊百八星の１人、徐寧（じょねい）が持つ薄羽で編まれた金色の鎧。
この世に二つとない代物で、徐家に代々伝わる家宝。軽くて着心地が良いうえに刀で斬れず、矢を通さない丈夫な鎧だったと伝えられる。
因みに賽唐猊とは、獅子よりも強いとの意味を持つ。

キリスト教

『生命の実（エデンズ・シード）』（真）：対人宝具ランクＥＸ　レンジ０　最大補足１人

エデンの園の中央に植えられた生命の木の実。
知恵の実、生命の実をともに手に入れると、神に等しき存在になるとされている。
故に人間が食べると、神に等しい力を得る。
本編で登場したのは、その名を冠しただけのロストロギア。

『ソロモンの指環』：対人宝具ランクＥＸ　レンジ０　最大補足１人

旧約聖書の中で、ヤハウェの命を受けた大天使ミカエルよりソロモン王に授けられた真鍮と鉄でできた指輪。
様々な天使や悪魔を使役し、所有者にあらゆる動植物の声を聞く力を与える。

天使を使役する場合は真鍮の部位を、悪魔を使役する場合は鉄の部位を投げ当て、呪文を唱えるといかなる魔神も強制的に従わせる事が出来る。
神性、魔性、いずれかを持つ者に対して、絶対の命令権を持つ宝具。元からの契約を打ち破り、神霊や大悪魔であろうと例外は無く強制的に指輪の使用者と隷属の契約を結ばせる能力を持つ。

『黙示の獣（アポカリプテック・ビースト）』：対軍宝具ランクＥＸ　レンジ１～９９　最大補足９９人

かつて存在し、現在は存在せず、そして終末の時、赤き竜と共に現れる獣。
赤き竜より同等の力と権威を与えられ、善を汚し悪へと誘惑する呪詛で構成された、７つの頭と１０の角を持ち、それぞれの角に冠を持つ緋色の獣。
その身体はヒョウに似て、足は熊、口は獅子の様。冠にはそれぞれ神を冒涜する名が刻まれている。
ただそこに存在するだけで世界を侵す最悪の獣。
その身を構成する呪詛は常に気化し、周囲を侵食し汚染し続ける。
常に気化し続けると同時に、周囲の大源（マナ）を吸い上げてその身を再構成し続ける。
そして、大源（マナ）を吸い尽され呪詛に侵された土地はいずれ死を迎え、撒き散らされる呪詛で人は悪徳の道へと堕ちてゆく。
呪詛に耐える為には神性か神、若しくは天使の加護を必要とする。

『魂刈り取る大鎌（デス・サイス）』：対人宝具ランクＢ　レンジ１～３　最大補足１人

魂の刈り取り人、死神の持つ大鎌。
死神による魂の刈り取りは神に託された仕事であり、不可侵の物である為、神性を持つ物にしか防げない。

## 仏教

『降魔三鈷剣（ごうまさんこけん）』：対人宝具ランクＢ＋＋　レンジ１～３　最大補足１人

不動明王の持つ、退魔の剣であり、人々の煩悩を断ち切る剣。
人の持つ根源的な煩悩、すなわち貪（とん）・瞋（じん）・癡（ち）に応じて威力が変動する。
だが、切り裂かれるのはあくまでも煩悩であり、その刃は肉体を傷付ける事は無い。
しかし、その精神的ダメージは多大なものであり、戦闘不能とするに十分である。

『羂索（けんじゃく）』：対人宝具ランクＢ＋　レンジ１～１０　最大補足１人

不動明王の持つ、悪を縛り上げ、また煩悩から抜け出せない人々を救い上げるための投げ縄。
相手が悪人で有ればある程拘束はきつく、羂索自身も丈夫になる。

## ケルト神話

『万物薙ぎし光輝の剣（クラウ・ソラス）』：対城宝具ランクＡ＋＋　レンジ１～９９

最大補足９９９人

銀の腕のヌァザが持つ魔剣。
炎と光を放って輝く宝剣で、魔の四都の１つ、フィンジアスが奉戴しウスキアスが守護していた剣であり、ダーナ神族の至高の四宝のひとつでもある。
その刀身には呪文が刻み込まれ、一度鞘から抜き払われれば敵はその一撃から逃れ得ないとされ、魔族フォモールとの死闘・モイトゥラの戦いでは敵軍の大将である剛力王インジッヒの首を、一閃で打ち飛ばしたという。

『轟く五星（ブリューナク）』：対軍宝具ランクＡ＋＋　レンジ１～９９　最大補足９９９人

トゥアハ・デ・ダナーン（ダーナ神族）の太陽神ルーが所持する宝槍。
クラウ・ソラスと同様に、魔の四都の１つゴリアスが所有しエスラスが守護していたもので、ダーナ神族の四つの至高の宝の１つでもある。
穂が５本に分かれており、放たれると轟く唸りと強雷を纏って敵を貫き、そのまま次から次へと自ら敵を求めて飛び回り、全ての敵を打ち倒すと再びルーの手元に舞い戻ってくるとされる。
ブリューナクとは『貫くもの』という意味であり、この槍に貫けない物は無い。
５つに分かれた穂先がまるで掌の様にも見え、それ故にルーは『長腕のルー』、『光り輝く腕のルー』の異名を持つ。
真名を解放する事で穂先の１つ１つが敵に向かって飛んでいく。
この穂先には因果逆転の呪いが掛かっており、放たれる前に既に当たる事が確定している。

また、穂先自体が纏う雷光の余波で周囲にも多大なダメージを与える。
手元に残る柄は司令塔であり、離れた穂先をある程度操る事も出来る。

『大なる激情（モール・アルタッハ）』：対人宝具ランクＡ　レンジ１～２　最大補足１人

ケルト神話の英雄、ディルムッド・オディナの持つ２振りの剣の１本。
いかなる相手であろうとも、一刀の下に斬り伏せる能力を持つ。
相手の最大ＨＰ＋１のダメージを相手に与える為、必ず相手を打倒する事が出来る。

『小なる激情（ベーグ・アルタッハ）』：対人宝具ランクＢ＋　レンジ１～２　最大補足１人

ケルト神話の英雄、ディルムッド・オディナの持つ２振りの剣の１本。弐撃決殺の能力を持つ。
まず刀身で相手に斬りつけると刀身が粉々に砕け、相手の身に降り注ぎ、体内に侵入する。
そして、柄を投げつける事で刀身の欠片１つ１つが元の刀身となり、相手を内側から串刺しにする。
だが、一撃目を当てても二撃目を当てられなければ全くダメージは与えられない。

『硬き稲妻（カラドボルグ）』：対人宝具ランクＡ　レンジ１～９９　最大補足９９人

ケルト神話の第2期、アルスター神話に登場する英雄、王弟子フェルグス・マク・ロイヒが持つ長剣。
1振りで3つの丘の頂きを切り落としたと言う伝承を持つ。
真名を開放し振る事で刀身が伸び、その間合いは虹の端から端に届く、と言われる程。
また、切れ味も凄まじく、鉄をバターの様に切り裂いたとも伝えられる。
フェルグスとアルスターの光の御子クー・フーリンはフェルグスが師匠の師弟関係であり、叔父と甥で、養父と養子で、友人でもあったが、フェルグスが王に裏切られコノートに亡命した後、アルスターとコノートの間に起きた『クーリーの牛争奪戦』でフェルグスはコノート陣営につき、クー・フーリンと戦うことになった。
しかし、かつての自国と戦う事、盟友クー・フーリンと戦う事を避けたかったフェルグスはカラドボルグの鞘のみを持ってクー・フーリンの陣営を訪れ、自分を殺すようにクー・フーリンに頼んだ。
だが、丸腰の相手を切る事は戦士の矜持に反する、とクー・フーリンは告げて退却し、その時にフェルグスとクー・フーリンは次から交互に勝ち負けを譲り合うという誓い(ゲッシュ)をした。
しかし、互いの陣営の最強格の戦士が勝負を避け続けた結果、戦争は膠着状態となり痺れを切らしたコノートの魔女王メイヴがフェルグスのことを臆病者と罵る。
こうなると不名誉を何よりも嫌うケルトの戦士は戦いに赴かざるを得なくなり、フェルグスは部隊を率いて戦場に向かったが、彼は戦場でクー・フーリンの姿を見るとその場から立ち去り、あろうことかクー・フーリンを背後から襲おうとしたメイヴを妨害し、クー・フーリンを窮地から救った代わりにフェルグスは魔女王メイヴの信用を失ってしまった。
これ以降クー・フーリンはフェルグスが死ぬまで彼と戦うことは無かった為、カラドボルグの所有者には1度だけ勝ちを譲る、という誓い(ゲッシュ)を後に立てている。

フェルグスが最も有名なカラドボルグの持ち主だが、フェルグス亡き後、カラドボルグは数人のアイルランドの英雄達の手を転々としたとされる。

『吼え猛る黄金の楯（オハン）』：対人宝具ランクＡ＋　レンジ０　最大補足１人

アルスターの王、コンホヴァル・マク・ネサが持つ四本の黄金の角と、四つの黄金の覆いが付いた名楯。
持ち主に危機が迫ると大海が轟く様な音で吼え、それを周囲に知らせる。
その音は周囲の味方の楯にも伝播して行き、それを聞いた敵を怯ませて行動不能にする。
その能力と共に楯としても優秀で、かのフェルグス・マク・ロイヒの持つ名剣『硬き稲妻（カラドボルグ）』に３度斬り付けられても傷１つ付かなかった程。

アーサー王伝説

『聖槍（ロンゴミアト）』：対人宝具ランクＡ＋　レンジ２～５　最大補足１人

アーサー王伝説に登場する槍。
先端から血の滴る純白の槍で、その正体はロンギヌスの槍である。
イエス・キリストの処刑の際、生死を確認する為にこの槍を左脇腹に突き立てた百卒長ロンギヌスは、その滴る血を盲目の眼に受け、視力が回復した。
ロンゴミアトから滴る血はイエス・キリストの物であり、その血を

受けた者はありとあらゆる傷が癒える。
この槍を所有する者は世界を制する力を与えられると言う。

『真白き柄(カルンウェナン)の小剣』対人宝具ランクC　レンジ1　最大補足1人

アーサー王が持っていたとされる、刀身は漆黒、柄は純白の短剣。
所謂鎧通しで、鎧による防御力の上昇を無効化する。

『不可視(グウェン)の外套』：対人宝具ランクC　レンジ0　最大補足1人

アーサー王が持っていたとされる、纏った者の姿を消失させるマント。
見た目だけでなく、内部の気配や音をも隠し、探知の術も防ぐ。

『疾風纏う閃光(ベドリバント)の槍』対人宝具ランクB＋　レンジ2～5　最大補足1人

アーサー王伝説の円卓の騎士が1人、ベディヴィアの持つ槍。
ベディヴィアは隻腕でありながら、サー・ケイ、サー・ガウェインに引けを取らぬ勇士であったとされ、2人よりも速く敵陣に辿りつき、一番槍を幾度も上げた。
この槍は所有者の俊敏を2ランク上昇させ、ＳＴ判定3倍、命中判定を2倍とする。
また、真名解放は一瞬のうちに9回に及ぶ刺突を繰り出す。

『簒奪(クラレント)されし王権の剣』：対人宝具ランクＡ（Ｂ）　レンジ1～3

最大補足1人　（）内は本来のランク

聖油王の戴冠式のため、ウォリングフォードの武器庫に保管されていたアーサー王の重宝。
だが、アーサー王がランスロット討伐の為に遠征した際、モードレッドに奪われてしまった。
この剣の所有者はカリスマCを得る。（本来は王権としてカリスマB、軍略Bを得る）
モードレットには本来の儀式に則り委譲されていない為、その性能を落としているが、同時に新たな能力も付加された。簒奪剣としての能力、即ち切りつけた相手の体力、魔力の吸収である。
吸収した体力、魔力は所有者に還元される。

『無駄無しの弓（フェイル・ノート）』：対人宝具ランクA　レンジ2～10　最大補足1人

アーサー王伝説の円卓の騎士が1人、トリスタンの持つ弓。
人間でも獣でも、射手が狙った場所に必ず矢があたるという伝承を持つ。
因果逆転の効果を持つので、かわすには相応の幸運（ラック）と俊敏が必要。

フランス叙事詩

『不滅（デュランダル）なる絶世の剣』：対人宝具ランクA＋＋　レンジ1～3　最大補足1人

フランスの叙事詩、『ローランの歌』に謳われる英雄ローランが

持つ剣。
出自には様々な伝承が有り、ローランの歌では天使からローランに授けられた剣として登場する。
窮地に陥ったローランがデュランダルを奪われまいと大理石に叩き付けた所、剣は折れず、逆に大理石が裂けた伝承はあまりに有名。
対人宝具としては、その切れ味によって防具に依る防御力の上昇を無効化する能力を持つ。
だが、相手の武器、防具に同様の『傷付かない』伝承が有った場合、その対象を弾き飛ばす。
また、柄には聖バジルの血、聖ピエールの歯、聖デュニの毛髪、聖母マリアの衣服の一部が収められており、其れによって強力な退魔効果も持つ。

『絶世なる光輝の剣（デュランダル）』：対城宝具ランクＡ＋＋　レンジ１～９９
最大補足９９９人

フランスの叙事詩、『ローランの歌』に謳われる英雄ローランが持つ剣。
出自には様々な伝承が有り、ローランの歌では天使からローランに授けられた剣として登場する。
窮地に陥ったローランがデュランダルを奪われまいと大理石に叩き付けた所、剣は折れず、逆に大理石が裂けた伝承はあまりに有名。
柄には聖バジルの血、聖ピエールの歯、聖デュニの毛髪、聖母マリアの衣服の一部が収められている。
対城宝具としてはその柄に納められた４つの聖遺物の力を解き放ち、聖属性の極大斬撃を放つ能力を持つ。
前述の伝承から、この斬撃には防具による防御判定は適応されない。
この宝具の最大の特徴としては、この斬撃は柄の聖遺物の力を解放しただけの物である為、使用者の魔力を殆ど消費しない点にある。

『清らかなる至高の剣（オートクレール）』：対魔術宝具ランクＡ　レンジ１～３　最大補足１～４人

フランスの叙事詩、『ローランの歌』に登場する、フランク王シャルルマーニュ大帝に仕える１２騎士「パラディン」の一人、オリヴィエ卿の持つ名剣。
握り柄は黄金、柄頭に水晶の飾り玉がついており、すさまじい威力を誇る。刃は茶褐色に施した鋼。
その刃は魔法の掛かった物ならば、如何なるものであろうとも切り裂く事が出来る。
如何なる不浄もを退ける清廉な剣であり、これを装備している者は一切の魔術を受け付けない（対魔力Ａと同じ効果）。
また、刀身の腹で触れれば、その相手に加護を分け与える事もできる。
だが、この加護を受けている者はその加護の続く限り魔術を使う事が出来ない。

『壮麗なる歓喜の剣（ジョワイユーズ）』：対人宝具ランクＡ　レンジ１～３　最大補足１人

フランスの叙事詩、『ローランの歌』に登場する、フランク王シャルルマーニュ大帝の持つ王権を示す剣。
柄にロンギヌスの槍の穂先が収められている。
所有者の全能力を２ランク上昇させる能力を持つ。また、カリスマ、軍略、黄金律をランクＡ相当で習得させる。

『冷徹（アルマース）なる慈悲の剣』：対人宝具ランクＢ＋　レンジ１～３　最大補足１人

フランスの叙事詩、『ローランの歌』に登場する大司祭、チュルパンが最後に振るった剣。
褐色の鋼の刀身を持ち、『氷の刃』とも称される鋭い切れ味と美しさを持っていたと伝えられる。
切りつけた対象に氷結効果を与える。防ぐのに必要なのは耐久では無く魔力セービングスロー。
この剣を装備していれば、瀕死であろうが戦闘不能になる事は無い。だが、それはこの剣の冷気によって傷口が凍りついているからであり、戦闘終了時に適切な処置が無ければ死に至る。

『残酷（フスベルタ）なる炎熱の剣』：対人宝具ランクＢ＋　レンジ１～３　最大補足１人

この剣はシャルルマーニュ大帝に仕えていたとされる騎士、ルノー・ド・モントーバンの所有していた剣である。形状は一般的に言うフランベルジュ。
刀身には炎の魔力が宿り、切りつけた相手を内側から焼き尽くす。
防ぐのに必要なのは耐久では無く魔力セービングスロー。
また、その刀身は放たれる熱で陽炎が浮かび、元々波打った刀身と相まって形状が不鮮明になっている。

インド神話

『天空翔けし黄金の船（ヴィマーナ）』：対城宝具ランクＡ＋＋　レンジ１０～９

9　最大捕捉1～999人

古代インド最古の古典「リグ・ヴェーダ」叙事詩（ヴェーダの各スムリティ、特に『ラーマーヤナ』など）および叙事詩「マハーバーラタ」（バラータ族の戦争叙事詩の意味）に登場する、自在に空を飛ぶ乗り物。

ランクは搭載された兵器『万象遍く裁きし神炎（アグネア）』によるもの。

爆発の瞬間が「太陽を一万個集めたほど明るく煙と火が絡み合った光り輝く柱がそそりたった」と表現されており、また「死の杖のように恐るべき槍。その寸法は3キューブと6フィート。授けられたその力は、千の眼を持つインドラの雷（いかづち）、生けるもの全てを破壊した」と記されてある。

早い話が核兵器である。

『雷纏（ヴァジュラ）いし金剛の杵』：対軍宝具ランクA＋＋　レンジ1～50　最大補足60人

インド神話の雷神インドラの持つ武器。

インドラは邪竜ヴリトラをこの独鈷杵（ヴァジュラ）で殺した事から、竜殺しの特性も持つ。

ヴァジュラは聖者の骨から作られ、雷と雨を操るとされる。

真名解放すると、大気中に存在する水分と、雷を自在に操る事が可能になる。

真名解放せずに投げるだけでもB＋相当の投擲宝具として発動する。

その際には使用者の魔力を消費せず、周りに撒き散らされる雷も伴ってかなりの広範囲攻撃になるが、ヴァジュラが燃え尽きるまで直進する為完全な使い切り。

『炎天落とすは明星の矢』：対軍宝具ランクＡ＋　レンジ２～３０
最大補足１００人

インド神話の維持神ヴィシュヌの持つ矢。
正確にはヴィシュヌの数有る権現の１つ、ラーマの持つ矢。
ラーマはイクシュヴァーク王統に生まれた薔薇色の瞳を持つ英雄で、シーターと言う妃がいた。
ある時、シーターが羅刹王ラクサーシャに浚われた事でラーマとラクサーシャとの間に戦争が起こる。
これが抒情詩『ラーマーヤナ』である。
ラクシャーサは神にも悪魔にも傷付けられない体を持っていた上、人の武器では到底歯が立たなかった。
そこで人であるラーマがこの神矢を以てラクサーシャの脳天を射抜いた。
真名開放と共に射たこの矢には炎の翼が生え、スピードと破壊力が増大される。
矢が纏う膨大な熱量によって着弾点はもちろんの事、矢が通過した場所にもダメージ判定が有る。

『光輪纏いし黄金の弓』：対城宝具ランクＡ＋＋　レンジ２～９９
最大補足９９９人

インド神話の維持神ヴィシュヌの持つ弓。
正確にはヴィシュヌの数有る権現の１つ、ラーマの持つ弓。
聖仙アガスティヤより授かった黄金弓。元はヴィシュヴァカルマンと言う神が太陽神ヴィヴァスヴァットの光から作った物。
前述の通り太陽光を物質化した弓であり、更には神の創造した神造兵器である為、ただの矢であろうとランクＢ相当の対人宝具として打ち出される。

真名解放すると周囲の光を集めて加速させ無数の矢と成し、一斉に放つ。
その1本1本が膨大な熱量を持つ為、余波だけで戦場を壊滅させる。
サルンガと併用して真名解放した場合、対城宝具ランクEXとなり、太陽その物を放つに等しい一撃と化す。

『栄光の黄金期(クリタ・ユガ)』：対軍宝具ランクEX　レンジ1～99　最大補足999人

インド神話の維持神ヴィシュヌ、正確にはヴィシュヌの数有る権現(アヴァターラ)の1つ、カルキが持つ剣、粛清剣ヴェーンカテーシャ。その刀身から放たれる裁きの光。
天に掲げられたヴェーンカテーシャから放たれた光はレンジ内全ての人間に降り注ぎ、その罪を照らし出される。これは使用者さえ例外ではない。
その際、今まで人に与えた肉体的、精神的ダメージをそっくりそのまま受ける。
正義、大義によって行った殺害行為であれ、因果応報を体現するこの宝具の前には些細な事。
クリタ・ユガとは、人々から道徳が失われる末世、カリ・ユガの次に来る黄金期の事を言う。
しかし、その前に世界は審判を受け、罪無き者のみがクリタ・ユガを迎える事が出来るとされる。

『三都焼き払いし三叉戟(トリシューラ)』：対城宝具ランクA++　レンジ10～99　最大補足3箇所

ヒンドゥー神話の破壊神シヴァが片手に持つ先が3つに分かれた

戟。
トリシューラとはヒンドゥー語で「3」を意味する「ｔｒｉ」と「槍」を意味する「ｓｕｌａ」が組み合わさった語。そのまま三叉の槍の事でも有る。
3つの先端はそれぞれシヴァの権能（シャクティ）である、愛欲（ｉｃｃｈａ）、行動（ｋｒｉｙａ）、知恵（ｊｎａｎａ）を表している。
シヴァはこれを用いて3つの悪魔の都市「金でできた都市」「銀でできた都市」「鉄でできた都市」を焼き尽くしたという。
時折ピナーカと同一視されているが、ピナーカは弓である。
真名解放し投擲すると、最大3箇所の街を焼き尽くす。人、物、例外無く崩れ去りその街に連なる全ての物が滅ぶ。

## その他

『煌炎剣リットゥ』：対人宝具ランクＥＸ　レンジ1～3　最大補足1人

バビロニア神話最強の神、マルドゥクの持つ炎剣。
炎の剣リットゥは、智天使ケルビムとともにエデンを守るために置かれた剣の炎の原型（ラハット・ハヘレヴ・ハミトゥ・ハペヘット）。
人の望みによって作られながら、人の意思に影響されず生まれる「神造兵器」の一つ。
その象徴は『熱』。かつて地球がマグマの塊だった頃の熱量を柄の中に収めている。
刀身に刃は無く、噴き出し回転する焔で対象を焼き切る鎖刃鋸（チェーンソー）。
その熱はありとあらゆるものをプラズマまで昇華する程。

『天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）』：対界宝具ランクＥＸ　レンジ1～９９

最大補足９９９人

かつて混沌とした世界から天地を分けた究極の一撃。神の肉体から天地を生み出した剣から放たれる空間切断。圧倒的な熱量は擬似的な時空断層までも生み出す。

軽減するには対粛清ＡＣ（自然災害や神罰、世界干渉等への抵抗値）、相殺には同威力のダメージを与える攻撃が必要。

元来、エヌマ・エリシュに記された天地開闢の物語はマルドゥク神がティアマトの肉体から天地を生み出す、と言うものであり、その意味ではリットゥを用いたエヌマ・エリシュこそが正しいとも言える。

『黄橙色の死（クロケア・モルス）』：対人宝具ランクＢ　レンジ１～３　最大補足１人

ジュリアス・シーザーの持つ長剣。

黄金で作られ、決して壊れることがないという。

この剣を用いた攻撃は決して回避できないと言う伝承を持つ。

この判定回避に要求されるのはスキル：カリスマ。

ランク相当でＢ以上ならば抵抗（レジスト）できる。

『ＡＺΩＴ（アゾート）』：対人宝具ランクＥＸ　レンジ１～２　最大補足１人

アルファベットの最初の文字である「Ａ」、ラテン語の最後の文字である「Ｚ」、ギリシア語の最後の文字である「Ω」、そしてヘブライ語の最後の文字「Ｔ」を組み合わせた名を持つ短剣。

その柄尻には錬金術の技術の結晶、『賢者の石』が装飾されている。

賢者の石は純粋なエネルギー結晶であると同時に、物質を任意の物質へと変化させる触媒でもある。

そして、錬金術とは、ただ金を作る研究では無く、非金属を貴金属に変える様に、人の魂を更なる次元へと高める為の研究である。
その集大成である賢者の石を持つ者は魂が高次に押し上げられ半物質化し、無尽の魔力を得る事が出来る。

『秘せし神秘解き明かす宝札（アルカナ）（フォース）』：占術宝具ランクＡ＋　レンジ１～９９　最大補足９９９人

大アルカナ２２枚、小アルカナ５６枚からなるカードの束。
とある事柄に関して念じながらカードを引けば、必ずその未来に関係のあるカードが示される。
だが、詳細な説明は一切無い為、カードを引いた当人の解釈次第になるのが欠点。

『魂啜りし漆黒の剣（ストームブリンガー）』：対人宝具ランクＡ　レンジ１～４　最大補足１人

法と混沌のバランスをとるために、法によって鍛えられた混沌の力を持つ剣。
刀身の至る所にルーン文字が刻まれたこの漆黒の長剣は、マイケル・ムアコックのファンタジー小説『エルリック・サーガ』に登場する。
この剣の最大の特徴としては、独自の自我を持ち、傷付けた相手の魂を吸い取る事である。
この剣は度々所有者の手を勝手に離れ、自身の赴くままに殺戮を行う。
そしてその殺戮の対象は『所有者の最も愛する者』と言う呪われた魔剣でもある。
殆どのモノを切る事が出来るが、野生動物からは魂を吸い取れない

と言う弱点も持つ。
この剣は所有者に力を与え、幸運以外の全てのステータスを2ランクアップさせる。だが、その原典である魔剣ダーインスレイブ同様、一度抜けば誰かの魂を吸わせなければ収まる事は無い。

『噛尾刀（カウディ・モルダクス）』：対人宝具ランクＣ＋　レンジ１～３　最大補足１人

この剣はかつて偉大な竜退治の名人、ベロマリウスが所持していた剣であり、竜たちに非常に恐れられていた。
竜が近くにいると、勝手に鞘から飛び出してしまい鞘に収めることができない。
竜の因子を持つ者は、この剣の所有者に逆らえない。
それ以外の者にはただの長剣。

『朧（おぼろ）の短刀』：対人宝具ランクＤ　レンジ１～２　最大補足１０人

とある忍者の里に伝わる、拷問用の短刀。
この短刀で傷つけられた傷は全て幻覚であり、どれだけ相手を傷つけようが、刀身を鞘に納めればその傷は元に戻る。
１０本セット。

『鋼鉄（ジ）の乙女は　血化粧（アイアン）で　微笑（メイデン）んでいる』：対人宝具ランクＣ
レンジ１～２　最大補足１人

中世、ハンガリーの伯爵夫人バートリ・エルジェーベトが作らせたと言われている拷問具、『鉄の処女（アイアン・メイデン）』。
有る日、伯爵夫人がメイドに髪を梳かせていた時、メイドが誤って

伯爵夫人の髪を櫛に絡めてしまう。
激怒した伯爵夫人は櫛でメイドの心臓を貫いて殺してしまうが、その際、伯爵夫人の手に掛かったメイドの返り血を拭くと、その肌は金色に光って見えた。
そして、そのメイドが処女であった事から、処女の血を浴びると肌が綺麗になると信じた伯爵夫人が、村中の美しい処女を集め、血を絞り取るために作らせたのがこの『鉄の処女（アイアン・メイデン）』であると言う。
外見は高さ2メートルほどの大きさの、中が空洞の人形。
ただし、前面の左右に開く扉からは、長く太い棘が内部に向かって突き出しており、本体の背後の部分にも棘が植えられている為、閉じ込められた場合、全身を棘に貫かれ、痛みでショック死するか、いずれ失血死する、と言う残酷な処刑具である。
これに殺された数多の処女達の怨念と伯爵夫人の妄念に依って、この処刑具は宝具と化した。
内部に閉じ込められた人物から生気を吸い取り、使用者に与える。
対象が女性、それも処女である時、この宝具から逃れる事は出来ない。

『天罰の断頭台（ギヨティーヌ・ドゥ・シャティモン）』：対人宝具ランクB　レンジ1～2　最大補足1人

１７９２年にフランスで採用され、フランス革命後の恐怖政治で貴族たちを処刑した事で有名となった処刑具ギロチン。
とりわけ有名なのは王妃マリー・アントワネットの処刑だろう。
この宝具はギロチンの罪を裁断する面を取り出したもので、その刃は対象の今まで犯した罪によって重量を増す。
正確には、自身が犯した罪に対する罪悪感の重さ、対象を怨んでいる人間の怨念が刃の重量に反映される。

『光狼の咆哮（ベオウルフ）』：対軍宝具ランクＡ　レンジ１～１０　最大補足１～３０

光の力を持つ籠手と具足。
古代の英雄の名を冠した魔獣の力が封じられている。
魔力を光に変換することで１撃１撃の威力を増大させる事が出来る。
極限まで魔力を注ぎ込んで発動する『光狼の咆哮・獣帯横断（ベオウルフ・ゾディアック）』は、
本来近距離用のこの宝具唯一の遠距離攻撃である。

『闇魔刀（やまと）』：対界宝具ランクＡ＋　レンジ１～２０　最大補足２０人

「人と魔を分かつ」刀、または「闇を切り裂き食らい尽くす」とも言われている刀。
『魔界』に通じるとされる地獄門を起動させる鍵であると同時に、
地獄門を破壊するための剣でもある。

『ド・マリニーの時計』：対時宝具ランクＥＸ　レンジ１～９９
最大補足９９９人

見た目は銀製の懐中時計。
敵の時間を巻き戻して攻撃前の状態に戻したり、敵のスロー化、停止、自らの倍速化等が可能。
敵の攻撃と自分と敵自身を同時に巻き戻し、敵の攻撃を放たれていなかった状態にする事が出来たり、自分だけを攻撃を受ける前の状態に戻す事も可能。
ちなみに、この時自分自身の意識まで戻ってしまったりはしない。
攻撃を打ったことだけを残し、仮定をすっ飛ばす事も可能。
効果範囲及び時間停止できる大きさの限界は共に単一宇宙規模　。

時間停止の効果時間は、主観時間で約１０秒。
ただし、その直後にはまた再始動可能。
効果の同時使用も問題なく可能。

『オッカムの剃刀』：対概念宝具ランクＡ　レンジ１　最大補足１個

１４世紀の神学者オッカムが考えた哲学主題であり、「むやみに実体の数を増やしてはならない」　とするもの。
幾つかの事柄で十分説明できるにも拘らず、説明に最低限必要でない余計な存在がある場合、それらは不必要なものなのであるから削ぎ落とすべきである、とする考え方であり、この場合の剃刀とは、不要な仮説、概念を削ぎ落とすという行為のための比喩である。
それを刃として具現化したこの剃刀は、その物体本来が持つ概念以外を削ぎ落としてしまう。
幻想殺しと、この剃刀の相違点としては、前者は対象を消滅させるのに対し、後者は概念のみを消去するため、破壊はしないと言う点。
究極の反概念付与（アンチ・イデアエンチャント）。

『テルの矢は決して林檎に届かない（パラドックス・オブ・ゼノン）』対人宝具ランクＤ　レンジ１～９　最大補足１人

エレア派のゼノンの考えたパラドックスの一つであり、詭弁とも哲学的思考のための好問題とも言われ、「アキレウスと亀」に並ぶ有名な主題。物体の運動と極限に関するものである。
矢が飛んでいるとしたとき、ある瞬間には矢はある場所に位置している。僅かな時間だけに区切って見れば、矢は僅かしか移動しない。この時間をどんどん短くしていけば、その瞬間だけは同じ場所に留まっているであろう。次の瞬間にも、同じ理由で同じ場所に留まっ

ている筈である。こうして矢は、どの瞬間にも同じ場所から動くことはできず、従って矢の運動は不可能である、とするパラドックス。上記の背理論を骨子に、発射した後も無数の中間点にて進路を任意に変更させることが可能な矢。

つまり、一度発射した矢の軌道を自由に操作し必ず目標を貫く事が出来る。

だが、進路の変更が任意である以上、操作するのは撃ち手であり、肉眼で発射した拳銃の弾丸の軌跡と軌道を観測し把握し、尚且つ進路上の中間点を認識し干渉する事が必要不可欠となる。

ちなみに、上記の主題は微積分と極限の概念を用いることで説明が可能である。

『大魔導原典（グラン・グリモワール）』：対城宝具ランクＥＸ　レンジ１～９９９　最大補足１～９９９人

魔導書（グリモワール）の集大成。

現在、過去、未来に存在する魔導の業が全て記された魔導書。

邪神降臨の儀式から簡単な浮遊魔法まで有るので、凄まじく分厚い。

が、業の検索機能は有る。

この本に載っているのはあくまで術の名前、効果、呪文だけであり、この本を所有したからと言って、すぐさま魔導の業を使える訳では無い。

その為、業を使うには相応の魔力が必要。

御剣オリジナルその１。

『剣軍師団（けんぐんしだん）』対人宝具ランクＥＸ　レンジ１～３　最大補足１人

ヒトが手にした武器と言う概念の総体にして、過去、現在、未来の座に存在する武器の集合体。
これに傷付けられると、世界における因子の1つである『武器』に否定されるので相手は存在を保てなくなる。
ありとあらゆる概念、神秘を内包している為、この剣を防ぐ事はおろか、この剣が振られた時点で相手は切り裂かれているも同然であるが故に、相手の攻撃とこの剣が克ち合った時、相手の攻撃はキャンセルされる。
また、不死殺し、竜殺し、鬼殺し等の種族殺し、地水火風光闇、全ての属性をも持つ為、相手が如何な攻撃無効スキルを保有していようと無効化される。
攻撃に特化している為、所有者に恩恵を与えるタイプの宝具は影響が薄い。
それでも、この剣を装備している間は全ステータスが2ランク上昇する。

御剣は、この剣を体内に取り込む事で自身の魂魄を直接座にリンクさせ、全英霊の降霊を行い、神霊化が可能。その霊格は各神話の最高神を軽く凌駕する。
この状態の時は前述の剣としての攻撃力が失われるが、代わりに所有者を強化する宝具の効果が顕著になる。例えば星をも砕く筋力、光速移動、最高純度の神秘（宝具ランクA＋＋以上）で無ければ傷一つ付かない肉体、『座』と言う上位世界から無限に供給される魔力、常に完全な状態に保たれるが故の瞬時体力回復に超速再生等。
また、この状態ならば宝具を取り出し、装備する事も可能。その場合、溢れる魔力と上昇した霊格によって宝具のランクは1段階上昇する。

剣としての使用法もそうだが、これはあくまで座から宝具を借り受けているに過ぎない御剣には余るモノである。その為、使用した

場合、丸1日の能力封印のデメリットが存在する。
御剣オリジナルその2。

# 番外・8千ＰＶ&ａｍｐ;千ユニーク記念座談会　という名の反省会

作者（以下作）「土下座の体勢からおはこんばんにちは。とある最強系主人公達の放蕩記の作者、Ｈａｇａｌａｚでございます。」

御剣（以下剣）「同じく土下座でおはこんばんにちは。同上主人公その１　、御剣　仁でございます。」

作「このたびは拙作をご覧いただき誠にありがとうございます。」

剣「処女作にもかかわらず、多くのＰＶ、ユニークをいただけた事、深く、深く、感ｓｙ「ちょっと、ちょっと。」なんだよ今読者様方にお礼言ってる所なんだから。」

黒峰（以下黒）「いや、ぶっちゃけリリカルなのは人気の尻馬に乗っかっただけだろ。」

原口（以下原）「能力はパクリ、文章は作文並み、会話表現も分かりにくいこんな作品が読まれる理由なんざ、それ以外ないだろ。」

作「もうやめて！私のライフはもう０よ！」

剣「まぁそれは置いておいて。今回のこの座談会の主旨は、Ｍａｋｉｎｇ　ｏｆ　１～４話及び、主人公、ｓの詳細設定です。」

黒「完全な蛇足だな。」

原「誰が得すんだよそんなもん。」

剣「まぁ作者の言い訳だな。というわけで、そんなもん興味ねぇよ。という方はさっさと飛ばしていただいて結構です。」

作「要するに、何をコンセプトに書いたか、ということが言いたいだけです。お付き合いいただける方はチャンネルはそのままで。」

Ｍａｋｉｎｇ　Ｏｆ　１～４話

作「まずは序章。あらゆる作品において重要なつかみの部分です。」

黒「ＵＦＯキャッチャー並みに何も掴めない結果に終わったがな。」

作「カフッ！（吐血）」

剣「作者は１話において会話の書き分けの練習を試みたらしいが…」

原「結果はご覧のあり様だ。」

剣「ちなみに。私の口調は厨二時代の名残という裏設定もある。」

原「妙に古臭い口調だったり、高圧的だったりするあたりだな。作者もたまになっている。」

剣「お前達に怒っていたり、呆れているだけだったりもするがね。次は2話、第一章の始まりだ。」

作「この話で気をつけたのは台詞回しです。ネタを導入するタイミング、話の流れを作る事に主眼を置いています。」

黒「ちなみに、作中の俺達の馬鹿会話の大半がノンフィクションだ。作者とその友人たちとの会話が元になっている。」

作「あいつらにばれたら何て言われるか。次、3話です。」

剣「私とはやての会話シーンだな。」

黒・原「「このロリコンめ。」」

剣「違う!」

作「ヒロインの一人、はやての口調把握の為の回でもあります。」

剣「ええぃ次!4話だ!能力使用編だ。」

作「実は、本来のプロットではだいぶ違った話です。」

黒「そうなのか?いきなりかまくらとか、作者はとち狂ったのかと思ったが。」

作「実は、すずか若しくはアリサ誘拐→目撃して助けるといった風に考えていたのですが。」

剣「が?」

作「作者にはまだバトルシーンが書けませんでした。」

剣・黒・原「「「はぁぁぁぁ～（溜息）」」」

作「今こそ残酷描写注意の出番かとも考えていたんですけど。」

黒「そういやなんであれ付いてんだ？まだそんな描写ないだろ。」

作「…言っても笑わない？」

剣「それは読者が決める事だ。いいから言え。」

作「実は、序章で御剣が自分の死体を見ているシーンを書いていたのだけれど、」

原「表現力不足か。」

作「Ｅｘａｃｔｌｙ．（その通りでございます）」

剣・黒・原「だめだこいつはやくなんとかしないと（ＡＡ略）」

剣「それは置いておいて、私が能力を行使した時に鍵が云々とあったがあれは何だ？」

作「え～とですね。実は、設定に絡む話になるので後で言うつもりです。意味もなく入れたとかはありませんよ？」

剣「（怪しい）」

作「Ｍａｋｉｎｇ　ｏｆ　１～４話はこれくらいです。次は各主人公の詳細設定です。まずは現在出番最多、メイン主人公　御剣仁！」

剣「作者に３人均等に出番を割り振る技能が無いだけだろうが。」

Ｎａｍｅ：御剣　仁　（みつるぎ　ひとし）
Ｓｅｘ：　男
Ｂｌｏｏｄ　Ｔｙｐｅ：Ａ＋
Ｂｉｒｔｈ　Ｄａｙ：１２／２０　１９８９
ｈｅｉｇｈｔ：１８０ｃｍ
筋力Ｂ＋＋　敏捷Ｂ＋＋
耐久Ｃ　魔力？？
幸運Ｅ－　宝具（能力）ＥＸ
能力『剣軍師団（けんぐんしだん）』

作「だいたいこんな感じ。髪型は肩甲骨くらいまであるロン毛。黒髪黒目。右目は髪で隠れてます。あと眼鏡。」

剣「なんでＦａｔｅ表記だよ。あと魔力が？？になってる理由も添えて言え。」

作「わかりやすいからいいじゃない。？？の理由は現時点では秘密です。」

剣「で、なんだこの能力名は。」

作「語呂を追求した結果。」

剣「まぁいいが。これ、私が考えた事になっているんだよな。」

作「裏設定。一番痛かったのは御剣。」

黒「次は俺だな。」

Ｎａｍｅ：黒峰　亮　（くろみね　りょう）
Ｓｅｘ：　男
Ｂｌｏｏｄ　Ｔｙｐｅ：Ｂ＋
Ｂｉｒｔｈ　Ｄａｙ：０９／２５　１９８９
ｈｅｉｇｈｔ：１７８ｃｍ
筋力Ａ＋　敏捷Ａ＋
耐久Ｂ　　魔力？？
幸運Ｂ　　宝具（能力）Ａ＋＋
能力『冥獄娑悶（タルタロス）』

作「黒髪黒目。髪型はツンツン頭。能力で出せる粒は自在に消せます。」

剣「私より痛くない？能力名。」

作「作者の発想が貧困という事にしておいてください。それでは最後の一人。今のところまともな会話は馬鹿話のみ。原口　宗一！」

Ｎａｍｅ：原口　宗一　（はらぐち　そういち）
Ｓｅｘ：　男
Ｂｌｏｏｄ　Ｔｙｐｅ：Ａ＋
Ｂｉｒｔｈ　Ｄａｙ：０９／２７　１９８９

ｈｅｉｇｈｔ：１７９ｃｍ
筋力Ｃ　敏捷Ｂ＋
耐久Ｃ　　魔力？？
幸運Ａ　　宝具（能力）ＥＸ
能力『箱庭（はこにわ）』

作「黒髪茶目。髪の長さはクロノとほぼ同じです。ついでに言えば実は原口の能力は結界ではありません。」

黒「ん？２つ能力があるわけないよな？あぁ、あれか。まだ本気を出してないとかそんな感じの。」

作「今の結界は初期段階、という意味ですね。」

原「結局全員痛いんじゃねぇか。」

作「さて、今回はこれで終わらせていただきます。」

剣「果たして次回はあるのか。」

黒「あるなら５万ＰＶ若しくは５千ユニークだな。」

原「果たしてそんな日が来るのか。すべては読者様次第。それでは。」

全員「ありがとうございました！」

# 番外・3万5千ＰＶ&6千ユニーク突破記念　解説と解脱って似てると思う

海鳴市　風芽丘図書館館内　その一角

御剣（以下剣）「皆様おはこんばんにちわ。いつも当作品をご覧いただきありがとうございます」

はやて（以下は）「皆様の応援の御蔭で、３万５千ＰＶに到達いたしました」

剣「以前５万ＰＶ、と言っていましたが、５千ユニークも突破いたしましたし、本編の切りがいいのでここらで番外を。今後とも精進致しますので、是非今後ともご覧下さいますようお願いいたします」

は「拙い作品ですが今後ともよろしくお願いいたします」

二人は深々と頭を下げる。

剣「今回は対談形式で作中の能力について解説します」

は「本編中で説明するには長ったらしすぎる上に、完全な蛇足なのでこの場を借りて説明させていただきます。尋常でなく痛い内容もございますので、ご注意の程、よろしくお願いします」

剣「まずは私の能力、『剣軍師団（けんぐんしだん）』です」

は「作中では新旧アーチャー＋ガンダールブという説明しかされ

てませんね」

剣「できるだけ分かりやすく伝えようとしたのだが、簡潔にまとめると実際言いたかった事と少々かけ離れてしまってな。まぁこれはほぼ全員に当てはまる事だが」

は「それは流石に駄目なんちゃいます？（汗）」

剣「この能力は厳密に簡潔に言えば、座への接続による宝具召喚及び、本来の所有者の能力コピーです」

は「この説明だけで分かった人は読解力が凄まじいか、脳が厨二ですね」

剣「…意外に毒吐くな、はやて。
つまり、英霊エミヤの『無限の剣製』や金ぴかの『王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）』のように、特定の場所から召喚している点では変わりません」

は「エミヤが固有結界から、金ぴかが宝具で呼び出している様に、座に登録されている宝具を呼び出している、という事です」

剣「そして、呼び出した宝具を介して本来の所有者の一部（戦闘経験や技術）を降霊させてその能力を得ます。例えば、『刺し穿つ死棘（ゲイ・ボルグ）の槍』を呼び出した場合、クーフーリンが所有するスキル、矢除けの加護や仕切り直し等、更に槍術を習得します」

は「人格と基本スキルは御剣さんのままなんですね」

剣「あ～うん。まぁ。…その辺は触れないでくれ。ネタばれるから。『乖離剣（かいりけん）』や『干将・莫耶（かんしょう・ばくや）』といった持ち主がいない宝具は、

使用はできますが降霊ができません。また、元から存在するアイテム（宝具含む）を解析する事も出来ます」

は「本編で闇の書を手に取った時にやってますね。ちなみに、出せる宝具の限界は？」

剣「ランクＥＸまで」

は「…上限無いじゃないですか」

剣「次は黒峰の能力、『冥獄娑悶（タルタロス）』です。基本的には作中での説明の通り、粒子の生成、操作。
粒のサイズは原子サイズ、色は黒赤色。具体的には固まった血の色です。黒峰はこれを腕、足の形に形成して戦闘に用います。
また、この能力を補助に使う事で、黒峰は一時的な身体強化が可能です」

は「なんや有害チックな色ですね。本編中でかまくら作ってましたけど、限界量はあるんですか？」

剣「無い。血の色をしているだけで別に血ではないし、元は黒峰の魔力。強いて言えば、黒峰の魔力が尽きた時点で限界だ」

は「ステータスでは？？になってましたがあるんですね。魔力」

剣「詳細は秘密だが、有るか無いかで言えば、全員ある」

は「なんかまた後付け臭い設定臭がぷんぷんするんですけど」

剣「（冷や汗をかきながら）最後、原口の『箱庭（はこにわ）』です。この能

力、前回で言った通り、ただの結界ではありません」

は「そういえばそんなことも言ってましたね。で、結局何なんですか？」

剣「ズバリ、世界創造、文字通り神の箱庭を作る事だ」

は「うわ厨二臭っ！御剣さんのとええ勝負ですね」

剣「イメージでいうなら結界師より藤竜版封神演義の十天君だな。設定の後書きのできる、な」

は「それって最強じゃないですか？中を真空にするとか、入ったら死ぬとか」

剣「だからタイトルにあるだろう。最強系主人公って。ただ、完全な待ち戦術である事、設定は結界内部で行わなければならない、本人に影響の及ぶ設定は普通に影響受ける（完全な真空、重力倍増等）、等と無敵では無い」

は「結界、というか世界の強度はどれくらいなんですか？なのはちゃんのスターライトブレイカー＋で突破できるくらい？」

剣「曲がりなりにも世界だからな。世界に影響を及ぼす能力、Ｆａｔｅで言う処の対界宝具が必要になるな」

は「…リリなの陣敗北決定じゃないですか」

剣「そうとも限らんが。そも、実は話の進行上ここで隠してるだ

けで、私達全員にまだ隠し玉が有る」

は「え？じゃあこの対談の意味って？」

剣「現状明かせる範囲での能力公表。実はこんな事考えてんじゃね？や、こいつの隠し玉はこれだ！とか言ってきてくれる人はいないものかね。参考にさせて頂こうと思うのだが」

は「それはだめや！」

剣「え～長々と、俺が考えた能力はすごいんだぜ、話にお付き合い戴きありがとうございました」

は「こんなん書いてる暇があったらとっとと更新しろとか言われそうやな。事実作者も書いてる最中に思ったらしいし」

剣「次回の５万ＰＶ記念作品は主人公達の性格話か外伝かな。それでは、またいつか会えるその日まで」

剣・は「ごきげんよう！」

は「（ヒソヒソ）なんか打ち切り臭するな」

剣「（ヒソヒソ）長編のつもりなんでいつか行くだろう」

は「ならええけど」（フェードアウト）

## 番外・御剣イメージ像（注：挿絵あり）

作者（以下作）「…遂に…恐れていた事態に…」

御剣（以下剣）「あぁ。ばれたな。
　会話元や序章（プロローグ）で言ってた、昔の友人に」

作「昔の友人って言うか、中学1年からもう8年ずっと付き合いあるから、その表現はともかくとして。
　ばれた！とか思って焦ってたらこんな物送って来ました」

＞i4583－786＜

剣「これは…私か？」

作「そうらしい」

剣「目付き悪いな」

作「いや、こんなもんだと思ってた。
　て言うか作者が考えてた御剣像とほぼ同じ」

剣「…マジか」

作「大マジ。
　今回描いたのはこれ1枚だけだけど、その内他の2人も描くってさ」

剣「まぁ、それはともかくとして、この左上に細々と書かれてるのは何だ？」

作「作者と友人が偶にしてた会話。詳しく書くとこんなん。←

友「まるで駄目な作者…略して『マーダー作者』！！！」

作「失礼な上に意味変わってんじゃねぇか！誰が殺人者だ！」

友「１つの言葉で２つの意味…正に一石二鳥！！！」

作「使い方間違ってんぞ！そもそも、マーダーに『まるで駄目』なんて意味は無ぇ！」

友「一挙両得とも言う」

作「言わねぇよ！何も得なんかしてねぇよ！」

友「一粒で二度美味しいよな！」

作「おいしいのはお前だけじゃねぇかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

と書いてある」

剣「…苦労しているのだな」

作「…まぁね」

# 番外・３００万アクセス記念・その１　御剣×はやて恋人編（前書き）

これは３００万アクセスを記念したｉｆものです。
７章－４『花見』で御剣がはやての思いを受け止めていた場合のお話です。
では、どうぞ。

# 番外・３００万アクセス記念・その１　御剣×はやて恋人編

２０１４年　５月　海鳴市　御剣古美術店

「…遊園地？」
「はい。チケットが２枚手に入ったので、一緒にどうかな、と思いまして」

はやての告白を受け、所謂世間一般で言う処の恋人になった私達だが、あまりそういった事はしていない。
休日にははやてが店に来て他愛も無い話をし、その他にも私がはやての家に食事に招かれる事はある。
が、それは今に始まった事ではないし、いつも黒峰達や守護騎士達が居る。
２人きり、といった状況は早々無いと言っても良い。

「御剣さんにも御店がありますし、都合がつけばで良いんですが」
「いや、構わないよ。店はあの２人に任せても良いし、１日位なら休んでも問題は無いだろう」
「ほんまですか？じゃぁ、今週の日曜日でも構いませんか？」
「あぁ。大丈夫だ」
「じゃぁ、朝の１０時に迎えに行きます」
「いや、私が家まで迎えに行こう。」
「電車に乗りますから、ここの方が近いです。その方がいいでしょう？」
「…分かった。では、日曜の１０時だな」
「はい！」

日曜日　朝９時

ドザァァァァァ

外からは絶え間なく雨音が続いている。
風も強く、到底出歩ける状況ではない。
今日は約束の日曜日。
天気予報では快晴だった筈が、夜更け過ぎからこの有様だ。
これでは遊園地もまた今度にせざるをえまい。
そう思い、はやてに電話を掛けようとした時、裏口のチャイムが鳴った。
こんな雨の中、誰かと思いつつも裏口へ向かう。

「えへへ。来ちゃいました」
「はやて!?どうして、いや、びしょ濡れじゃないか。
早く上がれ。風邪を引く」

ドアを開けるとそこには、めかし込んだはやての姿が有った。
だが、傘をさしているにも関わらず、傘はその役を成していない。
はやての体は頭から濡れてしまっている。
もうすぐ初夏とはいえ、そのままでは風邪を引いてしまうだろう。

「湯加減はどうだ?」
「ええですよ～…すみません。御剣さん」

風呂を沸かし、はやてを脱衣所に押し込み、入浴させる。
そしてはやてが浴室に入ったのを確認し、服を洗濯する。
洗濯機は脱衣所にあるので、そのまま扉越しにはやてと話をする事にした。

「謝るぐらいなら、自分が悪い事をした自覚があるんだな？
何故こんな雨の中来た？無謀にも程がある」
「すみません…
雨で御剣さんと一緒に遊びに行けなくなると思ったら、居てもたってもいられなくなって…」
「守護騎士達達はどうした？流石に止めるだろう」
「多分、まだ私が外に出てる事に気付いてないと思います」
「…全く…（シャマル、シャマル。聞こえるか？）」
「（み、御剣さん！？どうしたんですか？）」
「（はやてが家に来ている。それだけ言っておこうと思ってな）」
「（えぇっ！？この雨の中を？）」
「（あぁ。雨が治まったら連れていくよ）」
「（すみません。お願いします）」
「（あぁ。）シャマルに連絡しておいた。
雨が止んだら送って行こう」
「はい…」
「…この雨の中無謀にも1人で来た事には怒っている」
「うぅ…」
「だが、そこまでして来てくれた事は嬉しいよ。
新しいタオルを出しておいたから使うと良い。
着替えは…すまないがとりあえず私の服を着てくれ」
「はい。分かりました」

そろそろ、はやてが風呂からあがるころかと思い、ホットミルク

を作っていると、丁度はやてが居間に入って来る。
「ほら、これを飲むと良い。温まるぞ」
「もう十分お風呂で温まりましたよ。まぁ、頂きます」
そう言ってホットミルクを受け取り、口を付けるはやて。
「遊園地ならまた今度行こう。
別段、今日で無ければならない訳でもあるまい？」
「そうですね。この雨じゃ出歩くのも無理でしょうし。
身にしみて分かりましたよ」
「まったくだ。」
「えへへ。…そう言えば、黒峰さんと原口さんは？」
「まだ寝ている。今日は店を休むと言ったら今朝方までゲームで遊んでいたらしくてな。
暫くは起きないだろう」
「へぇ～…御剣さん、１つお願いしても良いですか？」
「何だ？」
「御剣さんの部屋、入ってみたいです」
「…面白い物は何もないぞ？」
はやての要望に折れ、はやてを自室に招く。
見られてまずい物も、触れると危ない物も無いが、どこか気恥ずかしい物は感じる。
「ここが御剣さんのお部屋ですか。…何にもありませんね」
「だから見ても詰まらんと言ったろう？」
部屋の中には敷かれたカーペットに箪笥とベッド、それに部屋の

中央に置かれた丸いテーブルがあるだけ。
ここは基本的に寝る場所でしかないので、特に物は置いていない。
と、はやてを見ると、ベッドの下を覗き込んでいる。

「…一応聞くが、何をしているんだ？」
「いや、お約束かな～と。」
「そんな所には何もないぞ？」
「他の所には有るんですか？」
「何がだ？」
「エ…」
「え？」
「…言わせたいんですか？」
「何の事やら？」

そう言いつつ、私はベッドの縁に腰架ける。
さっきも言ったが、この部屋は基本寝るだけだ。椅子や座布団など無い。
はやてもその隣に腰掛けてくる。と、同時にはやてが可愛い欠伸をする。

「ふぅ……ぅ、ふぁぁっ、ん…」
「眠いのか？」
「昨日あんまり寝付けなかったので…お風呂にも入りましたし…」
「そうか」

そうして暫くすると、はやてが船を漕ぎ出す。
前へ後ろへとグラグラ揺れる様は見ていて危なっかしい。
少し躊躇ったが、はやての肩を寄せ、軽くはやての体を引く。
そうすると、はやては体を私の胸に預ける形になった。
両の腕を回すと、はやての小柄な身体はすっぽりと収まってしまい、

自然と二人の密着も深くなる。

「ふぁ…ん…」

少し身じろぎこそしたものの、すぐにまどろみ始めるはやて。
この様子では、寝付けなかったどころか、一睡もしていないのではないだろうか？
それだけ今日の事を楽しみにしていてくれたと思うと、自然と頬が緩む。
はやてを委ねたまま身体を後ろに。
丁度、壁が背もたれ代わりになってくれて、二人分の体重を受け止めてくれる。
鼻腔をくすぐる、微かなはやての匂い。
ほの甘く、どこか懐かしい匂いだ。
自分も使っているシャンプーの匂いも混ざっているが、そちらは慣れている所為かさほど感じず、むしろ、はやての匂いをくっきりと浮かばせる様になっている。

「ふ…ぁ…」

まだ少し湿った髪を撫でれば、はやては私の手の方へ頭を押し付けるように動き、それに合わせて体の向きも変わる。
2人して同じ方を向き、私がはやてを後ろから抱きかかえる形になる。
腕の中に感じるはやての体温。
先程まで風呂に入っていた事も有るのだろうが、少し熱いくらいだ。
だが、その温度も心地良い。
はやての眠気に引きずられる様に御剣も夢に落ちた。

「ん…ふぇ？」

暫くして昼過ぎ。

身動きが取れない事に違和感を覚えつつ、目を覚ますはやて。

良く見れば、目覚めの景色も常の物と違う。

辺りを見回し、視線が上を向いた瞬間、はやては声をあげそうになる。

が、驚きの対象が眠っている事に気付き、声を堪えた。

「…そっか、御剣さんの部屋に入ってそれで…」

自身が寝入るまでの経緯を思い出す。

窓の外を見れば、雨脚は少し弱まったものの、依然として雨は降り続いている。

体を起そうにも、前に回った御剣の腕が邪魔で動けない。

左腕も固定されてしまっている。

きつくは無いが、割としっかりとホールドされてしまっていた。

脱出を諦め、頭を御剣の胸板に乗せる。

ふと、それに気付く。

御剣からはもちろんの事、はやて自身が纏う服からも漂う、この部屋一杯に満ちる御剣の匂い。

汗臭い訳でもなく、香水の様なわざとらしい匂いでも無い。

形容し難いが、どこか安心する匂いだ。

「すぅ…すぅ…」

上を見上げれば、寝入った御剣の顔。

そう言えば、寝顔を見るのはこれが初めてである事にはやては気付いた。

マジマジと見つめた後、はやては御剣の鼻先をこしょこしょとくすぐってみたり、頬をぷにぷにと摘んでみたり、普段出来ない事をここぞとばかりにやっておく。

「ん…」

ふと、御剣の腕がベッドに落ちる。
弄っていた所為で流石に反応が有ったらしく、はやてを抱きしめてた腕が緩んだらしい。
これではやては自由になった…わけだが。
折角の御剣弄りの機会を、はやてが逃す筈も無い。
寧ろ体の向きを変え、御剣と身体を正面から向き合せた。胸と背中の密着が、胸と胸の密着に。
ここでクイズ。びしょ濡れだったはやて、ではその下着は？
1．そこまで濡れていなかった
2．濡れているのをそのまま着けている
3．はいてない
答え3、答え3、答え3、答え3、答え3…

「…ふぅ…」

つい溜息が洩れる。
恋人になって1ヵ月が過ぎた。にも拘らず、御剣はキスの1つもしてこない。
まぁ、こうして寄り添う事はよくある。だが、絶対にそれ以上手を出してこない。
大事にされている、と言われれば聞こえはいいが、自分に魅力が無いのではないかと不安にもなると言うもの。
身の回りにそう言った経験のある女性と言うのはいないので、この間ばったりスーパーでエイミィに会った時に聞いてみた所「ＹＯＵ

押し倒しちゃいなＹＯ」と言われた。

「…それはちょっと無いなぁ…」

実際、今の体勢的には、はやてが押し倒す格好になっているが、これを御剣が起きている時にやる、というのは顔から火が出んばかりに恥ずかしい。

「すぅ……すぅ…」

目線を上にやれば、変わらず眠り続ける御剣の顔。

「…」

息に合わせて薄く開いたり閉じたりする御剣の唇に、はやての視線は釘付けになる。

頬が熱い。鏡を見ずとも、自分の顔が真っ赤である事は想像に難くない。

徐々に近づくお互いの顔。

ゆっくりと、しかし確実に距離は縮まって行き…

「…ん…」

ベッドの上で目を覚ます御剣。

ふと窓の外を見やれば日が差している。どうやら雨は止んだらしい。

時計を見ればもう１４時だ。

起き上ってみれば、腕の中にはやてがいない。

もう起きたのだろうか、とリビングへ向かえば、果たしてはやてはそこに居た。

「はやて」
「…！！！？は、はい！なんでしょう！！？」
「…どうした？そんなに慌てて？」
「あ、ああ慌ててなんてませんよ？いつも通りですよ？」

それがいつも通りだったら、どれだけ忙しない事か。
不審に思いつつも、今はその事は置いておく。

「ん？黒峰と原口は？」
「あ、さっき出かけられましたよ？伝言があります」
「伝言？」
「はい。え～と、『ごゆっくりぃ』だそうで」
「…まぁいい。夕飯、食べていくか？」
「はい。あ、うちの子らも呼んでええですか？」
「あぁ。構わんよ。その代わりに、夕飯の準備を手伝って貰おうか」
「はい！」

いつも通りに過ぎる日常。
それもまた、一つの『世界』。

## 番外・３００万アクセス記念・その１　御剣×はやて恋人編（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：はい、番外と言う名のｉｆルート、御剣とはやてが恋人編でした！
やったかやって無いかはご想像にお任せします。
次の番外は、原口の話です。では。

# 番外・３００万アクセス記念・その２　原口、模擬戦をするの巻（前書き）

時系列的には六課開始前、３月頃のお話です。

# 番外・３００万アクセス記念・その２　原口、模擬戦をするの巻

吾輩は猫である。名前はまだ無い。
嘘だ。僕は猫でも無ければ名前も有る。
僕の名前は原口　宗一。
最近の影の薄さから言えば、名前なんて無いのも同然だけれど。
能力も地味だから印象に残り辛いのも分かる。
他の２人は星ぶっ壊すんじゃないの？みたいな破壊力を持ってるけれど、僕にはそんなものは無い。
だと言うのに…

「なんで僕を模擬戦に引っ張り出すんだよ？御剣」
「向こうの要望だからな。部隊への派遣に伴った、能力の詳細情報が欲しいんだそうだ。
お前は闇の書事件の時もその後も、それほど戦闘に参加していなかったからな。
データが少ないから提出しろだとさ。ついでに模擬戦で戦闘技能も測る気だろう」

ここは時空管理局本局内の訓練用シュミレータールーム。
用があるから付いて来い、と御剣に言われて付いて来れば、行き成り模擬戦をしろ、と来たもんだ。
僕は戦闘向きじゃないってのに。昔っから強引なんだよな…御剣は。
まぁいいけど。

「で？相手は？」
「本局航空武装隊きってのエースチームだそうだ。隊長の魔導師ラ

ンクは空戦Ｓ－。他はＡＡＡが５人だ」
「うぇぇぇぇ…お腹痛くなったから帰って良い？」
「駄目だ。そら、相手のお出ましだ」

御剣の台詞に釣られて、入口へ視線を向ければ、そこに居たのは筋肉ゴリラが５人。…５人？

「御剣、１人足りなくないか？」
「良く見ろ。先頭の奴の肩の上に一人居るだろ。」

本当だ。女の子が１人居た。
他のインパクトが大きすぎて分からなかったけれど、あの子も隊員なのだろうか？
そう思っていると、女の子が肩から飛び降り、僕等の前へ立つ。

「初めまして。本局航空武装隊１２４５部隊所属、第１分隊隊長チルル・パッソ一等空尉であります」
「こちらこそ初めまして。時空管理局本局次元航行部隊所属、御剣仁提督補佐だ。
こっちが今日君達に相手をして貰う「御剣！」何だ？すまない。少し待っていてくれ」

さっさと自己紹介してしまう御剣を引っ張り、声の届かない所まで連れていく。

「どう言う事！？相手の隊長があんな女の子なんて聞いて無いよ！？」
「言って無いからな」
「さも当然の様に言うなよ！」
「しかし女の子と言うがな…ハッキリ言って、彼女はその辺の男よ

り強いぞ？
ああ見えてベルカ式の達人だ。
周りのゴリラ共は言わば彼女のシンパだ。その強さに心酔して～とからしい」
「だからって…まぁいいや。僕が何言っても、今更変更は無いんでしょ？」
「理解が早くて助かる。では行こうか」

諦めたとは言え、自然と肩も落ちれば足取りも重くなる。
とりあえず気を取り直して挨拶としよう。

「初めまして。僕は時空管理局本局次元航行部隊所属、原口　宗一提督補佐。
今日はよろしくお願いするよ」
「宜しくお願いします。それでは、私はあちらで準備をしますので」

…あれ？なんか僕、邪見にされてない？

「では、これより模擬戦形式の技能測定を開始する。
本局航空武装隊１２４５部隊第１分隊、または原口提督補佐の戦闘不能を以て終了とする。
何か質問は？」
「はい！」
「ではパッソ一尉、どうぞ」
「御剣提督補佐は参加されないのですか？」
「あぁ。私は今日は審判役だよ。それに」
「それに？」
「私まで入っては、ただの苛めにしかならないだろう？」

…またはっきりと言ったなぁ…ほら、後ろの筋肉ゴリラ達が青筋立ててる。
空気読める癖に、どうでもいい相手には辛辣だよなぁ～相変わらず。

「ん？もう質問は無しかな？では、始め！」

御剣の開始の合図と同時に、筋肉ゴリラ共が手に武器（デバイス）を持って飛びかかって来る。
…こっちに八つ当たりは止めて欲しいんだけど。
そんな事をぼやいている内に、最初の一人が剣型のデバイスで切りつけて来た。
早い。でも、甘い。
振り下ろされた剣が僕の目の前ではじき返される。一瞬動きが止まった隙を突き、相手の首を掴む。

「飛んでけ」

相手の首と体に結界を作る。
その首を思いっきり蹴り飛ばすと、思ったよりもよく飛んだ。
目の前にあるのは首なしの体。
一応結界でつなげてあるので、意識は有るだろうし、死ぬ事も無い筈だ。
本人は何が起こったのか、と慌てている。
もう放っておいても何も出来ないだろう。
戦うのは苦手だ。さっさと終わらせるとしよう。

「『箱庭（はこにわ）・八獄（はちごく）其の参、衆合地獄（しゅごう）』」

たった一言。それで十分。
それだけで世界は変わる。いや、僕が変える。

シュミレータールームは一気に塗り替わり、一面の闇が広がる。
それはすぐ晴れた。晴れたと言っても明るくなった訳ではない。
暗闇が薄闇になっただけだ。と同時に

『ぐぁあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！』

あちこちから聞こえてくる絶叫。
八熱地獄の第参階層、衆合地獄。別名堆圧地獄。
大仰な名前を付けているけれど、別に大した技じゃない。
純粋に、結界に取り込んだ相手へ重圧を掛けているだけだ。
今までに行った後ろめたい事、罪の意識がそのまま重さとなってその身に圧し掛かる。
欠点は罪の意識なんて無い聖人や、生粋の極悪人には効かない事。
後は人間以外には効かない事ともう１つ位かな。
でも、人間である以上、この地獄からは逃れられない。
罪の意識で重みが増し、それによって罪を自覚する事で更に罪の意識は重くなる、その堂々巡りからはね。
僕？僕は展開と同時にこの世界から逃げているからね。
今は中に居るけれど、その世界の裏側に居る様な物。
世界を作ってから設定するのではなく、あらかじめ設定した世界を作る。
これが僕の結界の欠点だった、内部に居ると僕も影響を受ける、と言うデメリットを克服する方法。

「…もう良いかな」

辺りに響いていた絶叫が止んだ頃を見計らって、結界を解除する。
ん？殺してないよ？この衆合地獄の欠点のもう１つ。気絶して意識が無くなればそれまで、と言う事。

弱点と言う程の事は無いけど、止めはさせないって訳。

「ぐ…あ…」

「ん？」

驚いた。まだ動けるんだ。

解除が早すぎたかな？そう思っていると

「はぁあああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

隊長の女の子が籠手型のデバイスで殴りかかって来る。

完全に油断した。効きが甘かったらしい。やっぱり個人差があるのも欠点の１つかな？

そんな事を考えている内に、魔力で強化された拳は僕に一直線に向かい…

ギャイン！

寸前で止まった。

そこに見えない壁でも有る様に、隊長さんの拳は止まっている。

まぁ、そこには本当に壁があるんだけれど。『世界』と言う名のね。

僕の周囲にはオートで発動する防壁がある。

『箱庭（はこにわ）・八獄（はちごく）其の壱、等活（とうかつ）地獄』。

傷の自動修復機能も持つ、完全防御結界。

これを破ろうと思えば、Ｆａｔｅで言う所の対界宝具が必要になる。

間違ってもリリなの世界の魔法じゃ破れない。

「…」

隊長さんは立ったままピクリとも動かない。

目の前で手を振っても反応は無い。どうやら気絶した様だ。

「それまで。原口の勝ち。まぁ、分かりきってた事だがね。
しかし、相変わらず地味にえげつないな」
「御剣や黒峰に比べれば優しい方だよ。
それと、別に地味でいいよ。目立つのは好きじゃないし。
で？もう帰って良いの？」
「良いんじゃないか？救護班はさっき呼んだ。
もう私達にする事は無いだろう」
「じゃ、帰ろうか。今日の夕飯、何？」
「舌平目の煮付けだ」

後日、あの隊長さんから謝罪文と再戦の申し込みが来た。
全く相手が出来なかった事への謝罪と、模擬戦開始まで侮っていた事、もう一度戦って欲しいとの事だったが…
再戦は丁重に断った。僕は戦闘向きじゃないし。戦うのは好きじゃない。

# 番外・３００万アクセス記念・その２　原口、模擬戦をするの巻（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：はい、番外その２、原口メイン話です。

原口「っていうかいいの？僕が主役で」

Ｈａｇａｌａｚ「うん、まぁ。こっちとしても君を全然出してやれない負い目ってのがね」

原口「番外で主役張るよりも、本編で出番が欲しいんだけど」

Ｈａｇａｌａｚ「大丈夫。一応君キーパーソンだから。最終局面では大活躍（予定）だから」

原口「予定って…まぁいいや。僕の話が読みたい、と言って下さった方々、有難うございました！」

Ｈａｇａｌａｚ「出番が無い事からの同情票じゃない？」

原口「誰のせいだよ！『箱庭（はこにわ）・八獄（はちごく）其の捌、無限地獄（むげん）』！」

Ｈａｇａｌａｚ「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁ！！！（落下）」

と言う訳で（落下中）次回は番外その３、主人公、ｓ　ＶＳ　管理局です。

アンチ管理局を含むと思われますので、ご注意ください。では！

…いつまで落ちるんだこれ…

# 番外・３００万アクセス記念・その３　主人公、ｓ　ＶＳ　時空管理局（前書き

注意：ダークです。ブラックです。前２つ、特に御剣×はやて読了
間もない方にはお勧め出来ません！
それでも構わないと言う方のみお進みください。

# 番外・３００万アクセス記念・その３　主人公、ｓ　ＶＳ　時空管理局

事の起こりは、はやてが時空管理局に入った事だった。
当然、守護騎士達も時空管理局へ。
はやてに聞けば、今までの闇の書の被害者の人への罪滅ぼしだ、と。
そんなもの、はやてには関係無い。そう私が言っても、はやては悲しそうに首を振るだけだった。
守護騎士の罪は、主である自分の罪だ、と。

そして月日は流れた。
私達３人は度重なる管理局からの勧誘に嫌気がさし、店を畳んで別の土地に移り住んだ。
だが、それでも奴等は追ってきた。
私達はこの能力を世界の為に活かすべきだ、等とほざき、何処までも追って来る。
私達も、いい加減怒りを覚えた。
これ以上付きまとうなら、管理局に敵対する事も厭わない。
そう告げた次の日、私達は襲撃を受けた。
武装隊であろうバリアジャケットを着込んだ男達に囲まれ、どうしたものかと思っていると、見知った顔が現れた。
クロノだ。クロノは私達に抵抗するなら容赦はしない、と告げた。
其の時、私の中で確かに何かが切れる音がした。
怒りに身を任せ、クロノ達を薙ぎ払い、アースラを沈めた結果、私達は特級次元犯罪者として追われる身となった。
私達は今後の事を相談した。そして、ある１つの結論に達する。
管理局を潰そう。

私達はすぐさま行動に移した。
破壊したアースラ内の転送ポートを復元して利用。
各地の管理局の関連施設を片端から破壊した。
地上本部、研究施設、訓練校。果ては自然保護隊の施設まで。草の根分けて虱潰しに壊滅させた。
関連施設を全て破壊した私達は、遂に本局に乗り込んだ。
次々現れる管理局員達を塵芥の如く蹴散らしながら進んでいると、また見知った顔が現れた。
と言っても、最後に会った時は幼かった風貌も、今や少女とは呼べぬまでに成長していた。
彼女は言った。もう止めて欲しい、と。
私は答えた。それはできない、と。
意見は違った。ならば、する事は一つだった。
駆け付けた彼女の友人達が、黒峰と原口に相対している。
勝負はすぐに決した。否。勝負と呼べるほどの物は無かった。
圧倒し、殲滅し、蹂躙した。
彼女達の骸をその場に打ち捨て、奥へ、奥へ。
中心部に居た老人達を、そのＳＰごと吹き飛ばし、最後に本局を丸ごと消し飛ばした。

だが、それで終わりでは無かった。
全てを終えたと思い、地球に戻った私達を待っていたのは次元航行部隊総勢５０隻だった。
次々放たれるアルカンシェル。
だが、それも原口の結界の前では全てが防がれ、私達に毛ほども掠りはしなかった。
そして、私と黒峰の攻撃によって次々沈んでいく次元航行艦。
最後の一隻を沈め、ようやく時空管理局は壊滅した。

こうして私達は平穏な日常を過ごしている。

代わり映えのしない毎日。退屈ではあるが、穏やかに過ぎていく日々。

時折、ふと何かが足りない気がするのは気のせいだろう。

これもまた、一つの『世界』。

## 番外・３００万アクセス記念・その３　主人公、ｓ　ＶＳ　時空管理局（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：え～と…はい！ＶＳ管理局編でした！
…まだ何か言わないと駄目ですか？そうですか。
え～とですね。なんだか作風が違うと言いますか、作者が自分の書く作品はハッピーエンド以外は認めない派と言う事もあってか、こんなんなりました。
台詞をあえて省き、シリアスチックに。
短いので連日投稿で。

さて、気を取り直しまして、次回からは本編です。
では、またお会いしましょう。
…会ってくれますか？ではまた！

# 番外・４００万アクセス記念　膝枕で耳掃除は男の夢だと思う。マジで。（前書き）

番外です。
時系列はＳｔＳ直前。

# 番外・４００万アクセス記念　膝枕で耳掃除は男の夢だと思う。マジで。

海鳴市　八神家　リビング

事の始まりは単純な事だった。
いつもの様に食事に呼ばれ、いつもの様に皆でリビングで寛いでいた時の事。

「ん～～～…」

先程までテレビを見ていたヴィータが、何やら唸っている。
頭を振ってみたり、指を耳に突っ込んでは悶えていた。

「…耳の中に何か入ったか？」
「御剣か。ん～…耳の中でゴソゴソ言っててさ。変な感じでイライラする」

恐らくは耳垢が剥がれ落ちたのだろう。
私は耳掻きを取り出すと、自らの膝を叩いた。

「取ってやるからこっちに来い」
「ん～…うん。頼む」

ヴィータは少し考え込んだが、大人しく頭を乗せて来た。
頭の向きを調節し、光が耳の中に当たる様にする。
少しでも中が見える様にして、耳掻きをヴィータの耳の中に入れる。

「おうわっ！？」

「おっと」

と同時にヴィータが叫び声をあげる。
驚いたが手元は何とか固定した。

「いきなりどうした。危ないだろう」
「ご、ごめん。ゴソって音がしたからビックリしてさ」
「それは仕様が無い事だからな。我慢しろ」

そう言って私は手を進める。
小さな細穴に耳掻きを押し入れ、奥を探って行く。
中をさらう様に動かすと、僅かな手ごたえと共に、小さなポテトチップスの欠片の様な物が取れた。

「…これだな」

手元に用意したティッシュの上にそれを置く。

「ん？済んだのか？」
「音の元はな。だがヴィータ、暫く耳掃除をしていなかっただろう。事の序でだ。そのままでいろ」

そう言って私は再度ヴィータの耳に耳掻きを入れる。
今度はある程度まで入れた後、内壁を擦り上げる様に、だが優しく少し物足りないくらいに柔らかく。
耳の中を傷つけない様に細心の注意を払いつつ、耳の中を掃除する。

「ヴィータ、反対の方を向け」
「ん…うん」

緩慢な動作で逆向きになるヴィータ。反対側も同様に掃除していく。

「…よし。済んだぞ、ヴィータ。…ヴィータ？」

「…すぅ～～…すぅ～」

どうやら寝てしまった様だ。

規則的な寝息をたてて熟睡している。

「あら？ヴィータちゃん、寝ちゃったんですか？」

「あぁ。このままでは風邪を引くな。寝室まで連れていくか」

膝の上のヴィータをそのまま抱き上げ、寝室に連れていく。

ベッドにヴィータを寝かせ、リビングに戻ると、私が座っていた場所の横にはやてが座っていた。

特に場所を移す理由も無いので、その横に腰かける。

「…ヴィータ、気持ち良さそうでしたね」

「そうか？」

「えぇ。すっかり寝てまうくらいには気持ちよかったと思いますよ？」

そう言いつつはやては耳に手を当てたり、その場に置いておいた耳掻きをチラチラ見ている。

「…はやてもしてやろうか？」

「お願いします」

…即答だった。腿の所にはやてが頭を乗せて来る。

そっと耳に掛かった髪を避け、耳の穴を覗き込む。

「な、なんや恥ずかしいですね」
「そう言われてもな。見なければ危険だろう」
「な、なんでこんなに恥ずかしいんでしょうか…」
「普段他人に見られる場所では無いからだろう。自分でも見えない場所でもあるからな」
「成程」

ヴィータの時と同じように頭の位置を調節し、耳の中に耳掻きを入れていく。
今度は最初から、内壁を擦る様にしていく。
ゆっくりと、優しく。
時折ある抵抗感には最小限の力で。
入口付近を終え、今度は奥へ。見えない部分はより丁寧に。

「…うん。はやて、次は反対側だ」
「…はい」

はやてもまた、緩慢な動作で反対側を向く。
逆の耳も同様に。少しだけしつこく剥がれないものが有ったので、ほんの少しだけ力を込めて数回掻く。

「…よし、と。済んだぞ、はやて」
「ん～…あ、ありがとうございました」
「お粗末さまでした」
「それにしても…耳掃除上手いですね、御剣さん。ヴィータが寝てまうのも分かります」
「そうか？まぁ自分では分からんがな」
「そうだ、お返しに私が御剣さんの耳掃除、してあげます」
「ふむ。では頼む」

「はい！お任せ下さい！」

はやての腿に頭を乗せると、柔らかい感触が頬に当たる。
ふと、視界の端で何かが動いた。はやてがこちらを覗き込んでいる。

「おぉ…ヴィータの耳掃除を何回かした事ありますけど、やっぱり男の人の耳の穴って大きいんですね…」

耳元で話されている所為か、どこかくすぐったい。
そして…成程。これは気恥ずかしい。
先程はやてが言った様に、思ったよりも恥ずかしいものだ。

「じゃ、行きますよ」
「あぁ」

はやての声と共に、耳の中に異物が入って来る感触。
カサリとゴソリの中間の様な音がした。
耳の中と言う急所にも近い場所を他人に任せている所為か、どうしても少し体が強張る。

「ん～入口あたりはそんなに有りませんね…詰まらないです」
「そこで不満を言われても困るのだが…」
「じゃあ、奥行きますね」

ゴソゴソと耳の中で音がする。
耳の内壁を擦られる感触。先程自分がした事を、そのまま返されている様だ。
成程。確かにこれは…気持ち良い。そうしてやや忘我の境地にいると、突然の感触が耳の中を襲った。

「ふぅ」
「ぬぉっ！？」

思わず声が出た。
見上げれば驚いた顔のはやて。
まぁ、私も似たような顔だろう。

「ど、どうしたんですか？」
「どうしたと言われてもな。いきなり耳に息を吹きかけられたら、誰だって驚くと思うが…」
「え？耳掃除の後ってこれやるのがお約束じゃないんですか？」

この娘は何を言っているんだろう。

「どこ情報だそれは。第一、私はやって無いだろう」
「あ、そう言えばそうでした」

気を取り直して逆を向く。

「かゆいとことか有りませんか～」
「床屋か」

そんな事を言い合いながら、穏やかに過ぎる時間。

「…あそこだけ別空間だね。さしずめ、Ａ．Ｂ．フィールド（Ａｂｓｏｌｕｔｅ　Ｂａｃｏｕｐｌｅ　ＦＩＥＬＤ）か」
「おのれ御剣。いちゃラブしやがって」
「いいんじゃない？別に」

## 番外・４００万アクセス記念　膝枕で耳掃除は男の夢だと思う。マジで。（後書

あとがき（と言う名の言い訳）：４００万アクセス御礼！と言う事で番外…別名最近出番の無いはやて救済回です。
膝枕って…いいよね。

次は本編です。では！

# 短編集

## 誕生日

２００６年６月４日　海鳴市　市内　八神家

「はやて、誕生日おめでとう。これ、プレゼント」
「わぁ…ありがとうございます。開けてもええですか？」
「あぁ。感想は聞きたいからね」

はやては紙包みから中身を取り出す。
中から出てきたのは細かい装飾の入った手のひらサイズの黄金長方形の木の板。
中心には青い石が嵌っている。

「…綺麗…」
「護符（タリズマン）だ。手製で悪いが、気に入ってもらえただろうか？」
「はい！とっても嬉しいです！」

今日ははやての誕生日、ついでに守護騎士（ヴォルケンリッター）が来て一周年の記念も兼ねてのパーティー。
去年とは違い、なのはやフェイト、アリサやすずかもいる。

「御剣さん、でもええんですか？なんや真ん中の石、えらい高そうなんですけど」
「ただのオドントライトだ。そこまでの値はしない」

「オドン？」
「オドントライト。６月４日の誕生日石でもある」
「へぇ～。大事にしますね」
「あぁ」

桃

２００６年７月２７日　海鳴市　市街地　御剣古美術店

店の奥に、御剣とはやてがいる。
御剣が客足が一段落ついた所で、はやてを店の奥に招いたのだ。

「しかし、良い時に来たな」
「何ですか？」
「桃だよ。取引先から戴いたんだ。ほら」

瑞々しくたわわな桃が５つ深めの皿に盛られている。
大きくて張りも良く、歪みも傷もない、立派なものだった。
その見た目に違わず、甘い香りがふわりふわりと辺りを漂っている。

「少し待て。今剥いてくる」
「え～と、そのままじゃ駄目ですか？」

はやてがばつが悪そうに言ってくる。

「そっちの方がいいか？」

「いえ、やった事無かったんで…」
「わかった。どちらにしろ、洗ってくるよ」
程無く、産毛を落とされた桃を2つ持って御剣が戻ってくる。
「ほら。お絞りもここに置いとくぞ」
「あ、ありがとうございます」
御剣は桃の皮を軽く摘まんで手前に引く。
良く熟れた実は、少し皮をつまんで引くだけでするりと剥けて行った。
あっけ無く剥かれた薄いベルベットの様な皮の下には、濡れた肌の様に淡く光る果肉が有った。
大きく口をあけてかぶり付くと、甘い汁がすぐさま零れ出る。
繊維を含んだ、とろけるような舌触りの果肉を頬張っては嚥下していく。
あふれ出て滴る汁を、まるで口付けでもするように唇ですする。
大方を食べ終え、種を口に含んだところで、はやてがこちらをぼぅっと見ているのに気づく。
「…食べないのか？」
はやての持っている桃はまだ半分も減っていない。
「え？あ、た、食べます！」
「ん？「チリン　チリン」っと客か。すまん。ちょっと行ってくる」
そう言うと御剣は種を吐き出し、お絞りで口を拭って店に出て行った。

Ｓｉｄｅはやて

…あかん。

今たぶん私、顔真っ赤や…

自分でも顔に熱が篭っているのがわかる。

「…何やろう…」

呟きながら桃に齧り付く。

ドラえもん

「御剣さんて、ドラえもんみたいやね」

「…体型も声も似ていないと自分では思うのだが…」

あの青狸に似ていると言われて嬉しい人などいるのだろうか。

「ちゃいます。そのレアスキルですよ」

「…あぁ」

「で、タケコプターとかどこでもドアって使えるんですか？」

「あれは科学の産物だから無理だ」

「…残念です」

「だが、魔法で飛行も転送も出来るだろうに」

「あぁ、そう言えばそうですね」

「発展し過ぎた科学は魔法と変わらない、か。昔の人から見たら我

々は魔法使いだろうさ」
「ですね」

苦手

２００６年５月１５日　海鳴市　市街地　御剣古美術店

「こ、こんにちは！」
「ん？なのはか。一人で来るとは珍しい。
少し待て。目録をまとめ…終わった。で、何か用か？」
「え、ええと…」
「模擬戦ならもうやらんぞ…そうか、それがあったな」
「え？」
「いや、以前の事、謝っていなかったな。申し訳なかった。
過去を覗いた上、それを使って弾効してしまって」
「あ、いえ。本当の事ですから。
私が嫌われたくない、っていうのも、良い子を演じていたっていうのも。
でも、御剣さんと模擬戦やってよかったと思ってます。
フェイトちゃんとも、もっと仲良くなれたし」
「…そうか。こちらはぶん殴られてもしょうが無い、と思ってたんだがな。
で、何の用だったんだ？」
「はい！私と模擬戦してください！」
「…全力で？」
「はい！

私とフェイトちゃんとクロノくんとはやてちゃんと守護騎士（ヴォルケンリッター）の皆さんとで！」

「…いや、それはもはやイジメだろ…」

…ん？遠慮が無くなっただけか？

# 短編集（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：短編集です。
本編考えてる時に思いついたネタをつらつらと書いただけです。

誕生日

黄金長方形は1：（1＋√5）／2の長方形です。
名刺とかにも使われてます。
オドントライトはトルコブルーの石。
石言葉は攻撃と防御。
護符は、はやての為に御剣がメディアの技術で作った、安心の御剣ブランドです。

桃

桃は官能の果実。

ドラえもん

まぁ、元ネタも言われてますし。

苦手

O☆HA☆NA☆SHI後日談。

こんな感じです。

# 短編集　其の弐（前書き）

注意！
若干の性的描写？を含む可能性が有るかもしれません？

○○

今日も今日とて遊びに来たはやてだが、いつもと違い元気が無い。
ぼぉっとして動きにもメリハリが無い。
「はやて？どうかしたのか？」
「…え？あ、御剣さん、どうかしましたか？」
こうして話しかけても反応が遅れる。
具合でも悪いのだろうか。
「どうかしたのは、はやての方だろう。具合でも悪いのか？なら今日はもう帰れ。
何なら送って行く。」
「い、いえ。具合が悪い…とも違うんですけど…」
なぜかはやての歯切れが悪い。
「その……です。」
「ん？何だって？」
「その…生理…です。私、重くは無いんですけど、だるくなるみたいで。
ちょっと眠くてぼぉっとしてました。」
はやての顔は羞恥からか真っ赤だ。
「そうか。辛いなら奥で休んでもいいぞ。」
対して御剣は平然としている。
「…こういう事って男の人に言うと気まずくなるもんじゃないですか？」
御剣は不思議そうに首を傾げる。
「なにか問題が有るか？
体の生理現象なのだから、別段恥ずかしがる事でも無いだろう。

それに、それが無ければ子どもも産めない。」
「その通りと言えばそうですけど、あんまり他の女の人に言わん方が良いですよ？
それ。」
呆れたように、はやては言う。
「何故だ？…まぁ、私は男だからその痛みは分からんが。
女性は凄いと思うぞ？毎月1回腹が痛くなるなど、男では耐え切れんだろう。
もちろん、お前も凄いよ。はやて。」
そう言いながら御剣は、はやての頭を撫でる。
「…御剣さんはずるいです。」

## 大きさ

「御剣さんって大きいですよね？」
「平均程だろう。背が大きいと大きい、というのも迷信だ。
はやて？何故脱がす？」
「触ってどんなもんか測ってみようと思って。
…大きいですね。」
「確か黒峰の方がでかいぞ。
じっくり見た事は無いが。」
「そうなんですか？」
噂をすれば影。黒峰が現れる。
「俺の名前が聞こえたが何を…してるんだ？」
「あ、黒峰さん、御剣さんと比べてみて下さいよ。」
「…何を？」
「足のサイズを。」

# 唇

「御剣さん、唇荒れてません?」
はやてが唐突に言ってきた。
季節は冬。乾燥注意報が連日出る程だ。
実際唇に触れてみると唇の端が軽く荒れている。
「え～と…これどうぞ。
結構効くんですよ?それ。」
そう言うとはやては鞄からリップクリームを取出し差し出して来た。
指で唇に塗るタイプだ。
「そうだな。有りがたく使わせてもらおう。」
自身の能力に頼ると無駄に健康になり過ぎるので使わない。
唇が荒れる程度でエリクサーだのソーマだの使うわけにもいかないし、市販の物の方が手軽だ。
はやての行為を無碍にする訳にもいくまい。
「む…意外に難しいな。」
薬指に少量取り、唇に延ばそうとするも中々うまくいかない。均一に延びないのだ。
「あ、御剣さん、ちょっと動かんでくれます?」
そう言うとはやては私の手からリップクリームの容器を取ると、指に付けこちらに手を伸ばす。
「は、はやて?」
「あ、喋っても駄目ですよ?クリームがはみ出ますから。」
そのまま唇に触れられる。
はやての細く白魚のような指が私の唇の上を滑って行く。
「あ、やっぱり荒れてますね。」
こちらを覗きこんでくるはやて。

…無自覚ここに極まれり。

ゴミ

「痛っ！」
倉庫整理を手伝ってくれていたはやてが突然声を上げる。
「はやて！？どうした？」
「大丈夫です。目にゴミが入ったみたいで。」
上を向いて作業していたために、ほこりが目に入ったらしい。
「あぁ、擦るな。瞬きしろ。」
目を擦ろうとするはやての手を優しく掴み、瞬きをさせる。
「ん…ん～…駄目です…目の中がゴロゴロして…」
「…そうか。なら…」
はやての目蓋を指で開け、眼球を舐める。
「ひゃ！み！みみみみみみ御剣さん！？
何を！！？」
はやては目を白黒させている。
「取れたか？」
「へ？え？あ…取れました。
…でも御剣さん…一言有っても良かったんじゃないですか？」
「ん？あぁすまん。驚かせたか。念のため下に行って目を洗って来ると良い。」
「…分かりました。行ってきます。」
私がそう言うと、はやては逃げるように下の階へ降りて行く。
…怒らせたか？

## 短編集　其の弐（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：今回はアレな短編集です。
ＰＧ－１２くらいでしょうか？
この程度なら大丈夫かな～と。
ではまた次話で。

# 短編・赤い飴、青い飴。

海鳴市　市街地　御剣古美術店

「…どうしてこうなった。」
「何？御剣さん。」
はやての声はいつになく大人びている。
声だけでは無い。背は伸び、体つきも女性らしくなっている。
そう、言うなればＳｔＳはやてだ。
「確かにそういったアイテムが有る事は言ったが、なぜわざわざ使う？」
対して御剣の声はいつもとは違い高くなっている。
背も縮み、小学生の様な体躯だ。
「いや、でもちょっと楽しくないですか？」
「まぁ、ある種若返りの薬の様な物だしな。
しかし、もう戻してくれても良いだろう。」
「駄目です。もう少しだけ。」
「はぁ…」

事の起こりは今朝に遡る。
「御剣さんって何でも持ってるんですよね？」
「…まぁ、神話上に出てくる物や、有名な物語の中の物ならな。」
「じゃあ、若返りの薬とか歳をとる薬も有るんですか？」
「あぁ、それどころか不老不死の薬もあるが…それがどうした？」
「いや、昨日家の掃除しとったら古い漫画が出てきまして。」
「…手塚治虫か。」
「御剣さんって察しが良すぎません？」

「この話の流れならばメルモだろう。で、出せと？」
「出来れば見てみたいな～と。」

「で、なぜ私まで？」
「ええやないですか。可愛いですよ。今の御剣さん。」
「可愛いと言われて喜ぶ男などそうはいない。」
私達の目の前には赤い飴と青い飴の入った瓶が有る。
私は赤い飴を２つ、はやては青い飴を１つ其々食べた。
それによって２人の現在年齢は私が６歳、はやてが２５歳になっている。
「どうですか？御剣さん。大人の女性の魅力は？」
何やらくねくねしながらはやてが言ってくる。色気の欠片もない。
わざとらし過ぎるのだ。
「いいから瓶を返せ。私はもう戻る。」
そう言いながら瓶に手を伸ばすと、はやてに横から掻っ攫われた。
「はやて？何を？」
「フフ、フフフフフフフ。」
はやては不気味に笑いながら私を後ろから抱きかかえる。
瓶は私の手の届かないところに置かれてしまった。
はやてが放してくれなければ手が届かない。
「はやて、放して欲しいのだが？」
「御剣さんが私の魅力にメロメロになるまで放しません～ん。
あ、そうや。今はもう十年経ってますね。お嫁に来て下さい。
前に裸も見られた事ですし、責任とってもらいますよ？」
…誰か。誰でも良い。助けてくれ…

# 短編・赤い飴、青い飴。（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：メルモです。

## 短編・バレンタイン（前書き）

バレンタイン？
あぁ、地球をドーナツ状に覆っている…
御剣「それはヴァン・アレン帯だ」

# 短編・バレンタイン

バレンタイン

２００６年2月１４日　海鳴市内　市街地　御剣古美術店前

「で、みんな来たんや」
「う、うん。はやてちゃんもね」
「え、えと、闇の書事件ではお世話になったし」

今日はバレンタイン。
本命から義理、友チョコまで、女の子が男の人にチョコを贈る日だ。

「せっかくやし、みんなで渡そか」
「そ、そうだね」
「う、うん」

3人は同時に店に入って行く。

「「「こんにちは～～～」」」

しかし、誰もいない。
ふと、奥から甘い匂いが漂ってくる。古美術店には少々合わない匂いである。

「これって…チョコレート？」
「そうだね。行ってみようか」

店の奥、階段の上から匂いは漂ってくる。

「御剣さ～ん！」

「はやてか！？丁度良い！上がって来てくれ！」

３人は階段を昇って行く。

昇りきった所には居間の様な空間が有り、その中央にテーブルがあった。

しかし、その上には所狭しと並ぶチョコのお菓子。

ザッハ・トルテ、ガトー・ショコラ、オペラに始まり、チョコプリン、チョコスフレ、果てにはチョコタルト等の１０種類はあるチョコレート菓子が。

「み、御剣さん、これは？」

いち早く冷静さを取り戻したはやてが御剣に問い掛ける。

「今日はバレンタインだろう？　あの馬鹿どもがチョコを食いたいと言うのでな。

全く、私が作った所で女性から貰えたわけではないのにな」

「そ、そうですね。ところで、さっき「丁度良い」って言ってましたけど」

「あぁ、はやてには普段お世話になっているからね。そのお礼にと、ね。好きな物を食べて貰おうと思ってな。

なのは達も来たのか。なら序でだ。興が乗って作りすぎた。食べて行ってくれ」

御剣のその言葉に完全に自分達の作ったチョコレートを出すタイミングを挫かれた３人。

だが、御剣のチョコレートを食べた後に渡せばいいと思ったのが、乙女としての失策だった。

「「「！！！」」」

口に含んだ途端、芳醇な香りと舌を蕩かす高貴な甘さで、幸福感に包まれる3人。

とても美味しかった。素晴らしく美味しかった。

しかしながら、それは決定的な敗北を彼女達に伝えていた。

そう、自分達の快心作より、御剣の作ったチョコの方が美味しいと言う敗北を。

御剣の料理の腕が高い事は解っていた事だ。

解っていた事だが、乙女としての敗北感は大きく重かった。

はやてはその生い立ちから、自炊は当然の事だし、家族達にも、御剣にも好評だった料理の腕前には自信が有った。

なのはとフェイトは翠屋のパティシエ、桃子さん直伝のチョコクッキーを携えて来たのだ。

しかし、そんな自信を打ち砕く程に、御剣のチョコ菓子は美味しかったのだ。

だからこそ、彼女達は己の快心作を御剣に渡す事はできなかった。

「むぅ…なんでこんなにチョコの舌触りがええんやろう…」

「家のお母さんと変わらない位美味しいよ…」

「うぅぅぅぅぅぅ…」

ただ、残さず完食はしたが。

ホワイトデー

２００６年３月１４日　海鳴市内　市街地　御剣古美術店

「「「さぁ！召し上がれ！」」」
「あ、あぁ。戴くよ」

屈辱のバレンタインから一ヶ月。
今回は御剣に菓子を作らないよう頼み、渾身の一品を各自作り上げてきた。
居間のテーブルには一ヶ月前を彷彿とさせる様に菓子が並んでいる。
手作りマシュマロからクッキー、飴玉、ｅｔｃ　と、ホワイトデーのお返しとして定番が揃っている。

「…これやったら…」
「「いける筈！」」

３人の異様な気魄に押されながらも、御剣はクッキーを手に取る。

「あ…」

はやてが僅かに声を上げる。
御剣が手に取ったのは、はやて作のクッキー。
それも発酵バター、質の良いバニラオイル及びアーモンド粉を使用した、素晴らしく薫り高いクッキー（シロモノ）だ。

「あぁ、美味しいな。これは」

御剣が漏らした声に小さくガッツポーズを取るはやて。

「ほんま?気に入ってもらえて嬉しいわ。」
「これ、はやてが作ったのか。良い材料だな。

練りこんであるのはアーモンドか。うん。美味しい」
「気に入ってもらえて何よりです。
気に入ってもらえたついでに、先月のチョコの舌触りの秘密を…」
「それは駄目だ。企業秘密」
「むぅ…ケチやなぁ…」

次に御剣が手に取ったのはマシュマロ。

「これも…手作りか…なのはか？」
「…当たりです。なんで私だって分かったんですか？」

驚いたようになのはが言う。

「目線。こっち見ないようにチラチラ見てただろ」

そう言いながら口にマシュマロを放り込む。

「あ…」

御剣は暫く口を動かした後、それを呑み込む。
「ふむ、甘みも抑えられていていいな。美味しいよ」
「気に入ってもらえてよかったです」

最後はフェイトの飴玉。
淡い赤と薄いオレンジの飴が小さめのビニール袋に入っている。
その口には黒いリボンがされている。

「これは…綺麗な色だ。着色料じゃない…材料の色だね」
「はい。イチゴとミカンを使ってます」
「戴くよ。…うん。美味しい。後は大事に頂くとしよう」

概ね好評を得たことで機嫌を良くする3人。
…来年バレンタインのお返しにと作った御剣製のお菓子に、また打ちのめされる事になるが。

ブラックデー

「と言う事が先月有ったらしいな」
「言い残す事は有るか？」
「いや、バレンタインの時は兎も角、ホワイトデーの時はお前らも居れば良かっただろうが。
私にお返しするのが嫌で一日中居なかったお前らが悪い」
「何が悲しくてホワイトデーに男にお返ししなきゃいけないんだよ」
「そうだそうだ」
「バレンタインの時に散々貪り食っておいてその発言か。
だったら私もバレンタインに男にやるためにチョコを作るなぞ、もうごめんなのだが」
「すみませんでした。来年もお願いします」
「来年は今年の分も含めてお返しします」
「…現金な」

## 短編・バレンタイン（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳。）：季節外れの（今更）バレンタインです。
ちなみに作者は学生時代、男から本命を貰った事が有ります。
丁重にお断りしました。
あれは何かの罰ゲームだったのでしょうか。そうであって欲しいのですが。

# 短編・バレンタイン　ｉｎ　２０１２（前書き）

ハッピーバレンタイン。

# 短編・バレンタイン　ｉｎ　２０１２

２０１２年　２月１３日　八神家　キッチン

「で、ティアはどんなん作る気なん？」

明日はバレンタインデー。
女の子が好きな人に本命チョコを渡したり、日ごろお世話になっている人に義理チョコを渡す日でもある。
御多分に洩れず、ティアナとはやての２人も御剣達に送るチョコを作っていた。

「あんまり凝り過ぎたもの作ってもしょうがないし、簡単な物にするつもり。
はやて姉さんは？仁には本命でしょ？」

ゴドン！

ティアナからの何気ない一言に持っていたボウル（チョコ満載）を落としてしまうはやて。
顔は赤く、耳まで真っ赤だ。

「な、なななななな何で！？
何で私が御剣さんの事好きって分かったん！？」

「いや、見てれば分かるし。
て言うかしょっちゅう求婚してるくせに、何で今更恥じらうのか分

からないんだけど。」

　呆れたように言うティアナ。
対するはやては指先をくるくるさせながら、俯いている。

「いや、そのな。
その求婚自体も、御剣さんは冗談で流して来るやろうな～って言う打算の元に言うとる事でな。
そうやって直球で来られると…」

　ティアナは思った。
何この生き物可愛い。

「だったらこれを機に告白してみたら？
私、今年の6月から訓練校だから、お邪魔虫はいなくなるわよ？」

「いや、ティアの事、お邪魔虫とか思った事は無いねんけどな。
…そういやティアはどうなん？」

「な…何が？」

　はやての様子がうって変って問い詰めモードになる。
ティアナはたじたじになりながらも返すが、更に突っ込まれる。

「御剣さんの事。好きなん？」

「…っ！…嫌いじゃ…無いよ。…優しいし、私の我が儘も聞いてくれるし。
でも、この好きはＬｉｋｅ。Ｌｏｖｅじゃない。
あくまでも仁は兄貴分だから。家族よ」

「ふ～ん。
まァええけど。さて、ちゃっちゃと作ってまおか」

話題を切り上げ、コンロに湯煎用の鍋を置くはやて。

「そうね。あ、後ついでに1つ聞いときたいんだけど」

「何？」

「仮に、仁とはやて姉さんが結婚したら、私、はやて姉さんの娘になるのかな？」

「……おぉ。そういやそうやな。
…ちょっとお義母(かあ)さんって呼んでみ」

「嫌よ」

## 短編・バレンタイン　ｉｎ　２０１２（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳。）：即興でちゃちゃっと書き上げました。
今日はバレンタイン、と言う事で便乗。

さり気にこの２人の絡みを書くのは初だったり。
ではまた次話で。

# 短編・雛祭

海鳴市　市街地　御剣古美術店　３月３日　２Ｆ　リビング

「…どんだけでかいねんこれ」

そう言ってリビングの一角を見つめるはやて。
そこには天井ギリギリまでの大きさの雛段が有った。

「京都の老舗の物らしい。貰い物なので正確な値段は分からんが、軽く百数十万はするだろうな」

雛段の数は7。
だが人形一体一体も段も大きいため、全体としてもかなりの大きさになっている。

「ティアの為とはいえ、これは…」

「まぁ、先方もティアの事は気に入っているらしいからな。折角だから飾らせてもらった」

この雛人形は古美術店のお得意様から貰ったものだ。
なんでも、娘さんが御嫁に行ったのでもう要らなくなったとか。
店番や応対で気に入られたティアナに譲られる形で貰い受けた訳だ。

「で、肝心のティアは？」

「今日はまだ学校」

「ふ～ん。片づけるんやったら手伝いますよ？」

「いや、まだしばらくはこのままだ」

「え？そんな事したらティアがお嫁に嫁き遅れ…まさか御剣さん…」

はやてがジト目で御剣を見つめる。だがそんなものは知らんとばかりに御剣は続けた。

「そのまさかで合っている」

「…親馬鹿も程ほどにしといた方がええですよ？」

「少なくとも、全力の私に勝てないと彼氏とは認めん」

「彼氏でそれですか。ちなみに…結婚するには？」

「私達3人に勝つ事」

「あぁ、やっぱり」

そう言うとはやては呆れた様に肩を落とし、甘酒を啜った。

## 短編・雛祭（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：明かりをつけましょぼんぼりに。

と言う訳で雛祭です。

家にもでっかい雛段があります。妹のですけど。

ではまた次話で。

# 序章（前書き）

注意：死ぬほどご都合主義です。
主人公、Ｓの能力がどっかで見たことあったりしてもツッコミはなしで。
若干どころではなく厨二ですが気にしない方だけご覧下さい。
基本はリリカルなのは世界ですが、原作ブレイク、キャラの崩壊等あります。
オリ設定、主人公最強系が苦手な方はご遠慮ください。
処女作な上作者がアホなので文法の誤り、誤字脱字等あると思われますが、ご了承ください。

# 序章

厨二病、そう。少々オタク気質のある人間なら誰でも心当たりのあるあれだ。
自分はほかの連中とは違うと思い込んだりする軽度のものから、痛い設定を考えて実行する邪気眼系まで、症例は様々だ。
かくいう私もそんな時期があった。気の合う連中と、こんな能力があったら、とか、この漫画の世界に行けたら、とか、益体も無い話の一つとしてよくしたものだった。

なんだこの状況は？高校を卒業して大学に入り、同窓会で集まって飲んで食って騒いで、昔馴染みと三次会に突入した辺りまでは覚えている。
問題は自分の眼下に自分がいる、ということだ。
なにを言っているのかわからないだろうが、俺にもさっぱり（ｒｙ
ネタはともかくとしても、現状がいまいち理解できない。

何故私はマッパなのか、そしてなんで友人共も全裸で浮いているのか、そして極め付けが、目の前にいるいかにも死神ですといった格好をした不審者だ。骸骨が黒いローブ着て大鎌を持っている。
…十人に聞いたら十人とも死神と答えそうな格好である。決して死魄装ではない。

「いや、マッパの人に不審者呼ばわりはされたくないんですが」

黙れ。モノローグに口をはさむな。だいたいなんで私はマッパなんだ。

「精神体なんですから考えはダダ漏れですよ。マッパなのも同じ理由です」

精神体？なんでそんな事に？まさか死んだとか言い出さないだろうな？

「あ、正解ですよ。おめでとうございます」

は？

「いえ、ですから死んだんですよ、貴方。隕石がドーンと」

いやいやいや。ないだろ隕石って。じゃなにか？下の私は死体で、周りの連中も死んだ、と。

「はい。いやに落ち着いてますね、貴方。普通は取り乱すもんですけど。まぁ私が楽なので構いませんが」

それが取り柄みたいなもんだしな。

「それでは本人確認させていただきます。
姓名：御剣　仁
性別：男性
生年月日：１９８Ｘ年１２月２０日
相違点はございますか？」

え？そんだけ？個人情報認証それだけ？あってるけど。

「そうですよ?おや、他の方も気がつかれたようですね」

なにやらサクサク事が進行している。

しかし…死んだ?私が?実感が無いにも程がある。酔っ払って夢を見ている、と言われた方がまだ納得がいく。

だが、なんだろう。眼下の自分を見ていると何故か納得がいくのだ。

あぁ、自分は死んだのだ、と。

一通り確認とやらが済んだのか、死神（仮称）は全員を集め、こう言い放った。

「え～では皆さん。すいませんっしたぁ!!」

…土下座である。清々しいほどに。西洋風のなりのくせに妙に土下座が似合っていた。

というか自称死『神』の癖に土下座とかするのか。

「なぁ、どういうことだこれ?」

友人Aが困惑したように「誰が友人Aだ!」…お前もモノローグに口挿むのか、黒峰。

これが黒峰　亮。中学からの腐れ縁その1である。

「ていうか、もはや口から洩れてるがな」

「さっきまで死んだだのなんだの言われて、訳がわからなかった所にこれだしな」

こっちは原口　宗一。同じく腐れ縁その2だ。

「で?どういう事だ?何故謝る?」

これは私。

「え～とですね。今回の件はこちらの手違いと言うか、ミスと言うか、なんと申しますか」

ちなみに土下座は実行中だ。

「簡潔に言え」

「すみません。では説明させていただきます。まず、皆さんの寿命はまだ残っています」

「さっき俺達は死んだって言って無かったか？」

「はい。その点が私たちのミスです。本来貴方達はこの隕石で死ぬことは無かったのです」

「それがどうして？」

「この隕石で死ぬ人は本来貴方がたではなかったのです。それどころか、この隕石での死者はいない筈でした」

「は？」

一瞬考えが真っ白になる。意味が分からない。だとすれば、今ここでこうなっている私達は何だというんだ。

「ならなんで俺達が死んでるんだよ」

「すみません。我々にもわからないのです」

「んな無責任な…で？私達を体に戻せるのか？」

「…言いづらいのですが…不可能です。体の損傷が激しく、戻してもすぐに死んでしまいます」

「そんな！」

黒峰が叫ぶ。

「代わりと言ってはなんですが、別の人生をご提供いたします」
「何？蘇生は不可能なんじゃ？」
「ここではない別世界での人生になりますが、可能な限り、ご要望にはお答えします。
我々としても、今回の件はイレギュラーという事で対応する事になりました」
「それで許せと？ずいぶん虫のいい話だな。ん？別世界？」
「はい。どんな世界かは我々も関与できませんが、初期状態とでも言いましょうか、ステータス全ＭＡＸとかでもかまいません」
「ずいぶんなサービスだな。そしてメタだな」

別世界ねぇ。じゃあもうしょうがないと割り切っていくか。

「わかった。私はそれでかまわない。お前らは？」
「かまわん」
「同じく」
「では、ご要望があれば今のうちにお願いします。転生後の変更は不可能ですので」
「じゃあせっかくなんで、これこれこんな事は？」
「難しいですが…わかりました。でも一つだけですよ？他の方もお願いします」

…切り替えが早すぎるよなぁ。我ながら。

「では、転生を開始します。いってらっしゃいませ」

視界が暗転していく。
今更になって走馬灯が見えた。両親の事。大学の友人の事。

先立つ不孝というのならこれもそうなのだろうか。
遂に何も見えなくなった。今までの浮遊感が薄れてくる。
別世界とやらに着いたのだろうか。

## 序章（後書き）

あとがき（という名の言い訳）：始めました！あぁ石を投げないでくださいすいません。

完全な見切り発車です。設定の破綻、主人公達の心理描写不足、その他もろもろ言いたいことはおありでしょうが、是非生温かい目で見てやって下さい

## 1章－1　おいでませ　異世界（前書き）

主人公、Sの能力は他作品に出てくる能力の強化型です。

# 1章－1　おいでませ　異世界

「そんなこんなで、着いたわけだが」

辺りを見回すと2人の男がいる。
しかし、こんな奴らに見覚えはない。こんなイケメン共は知り合いにいない。
いないが検討は付く。

「お前等、顔を変えたな？」

そう。例の転生の際のスペック変更。結構な細かい範囲での設定ができた。
まぁ、こいつらの顔が変わっている事に気づけたのも、「お前もだろうが」そう。私も変えたからだ。

「何を言っている。これが私本来のハンサム顔だ！」
「「はいはい」」

ハモるな。
現状確認：服装　Tシャツ、ジーンズ
　　身長　１７５ｃｍ程
　　体格　痩せマッチョ
ここまでは共通。細かい所、髪型や当然顔は違う。
ついでに言えば私は眼鏡をしている。

「で？お前らもあれ、やってもらったのか？」

「おう」
「うん」

そう。あれ。厨二時代に考えた能力。まさかそれも有りとはな。
私はぶっちゃけＦａｔｅの新旧アーチャー＋ガンダールブ。
黒峰は粒子生成、操作。シャナの”嵐帝”フェコルー。
原口は空間操作。わかりやすく言えば結界師。

「やっぱ御剣だけ反則じゃね？」

名前からそう言い出したのはお前らだろうが。
まぁこういった設定に付き物なバランスブレイカーな訳だが。
使えても大っぴらには使えないだろうし、そもこの世界で戦闘とか起こるのか？
一応護身としては使えるだろうけど。
しかし、結局ここはどこなんだか。
遠くに町が見えるから文化圏だろうし、植生からするに温帯のどこかだ。
日本語通じるといいなぁ。日本語しか話せないし。
地球じゃない、とか言われたらもうどうしようもないが。
あのまま幽霊って事はさすがに無かったが、日本だとしてもこの世界に私達の戸籍はたぶんない。
そう考えておいた方がいいだろう。有るに越した事はないから確認しに行った方がいいか？

「なら市街地か？そこにあるかどうかはわからないだろうが」
「どっちにしろ生活するなら人里に出ないとな」

黒峰と原口がそれぞれ言う。
確かに食事もそうだが住居も必要だ。

「そうだな。とにかく情報を探すか」
結論から言えばやっぱり日本語圏だった。
「てことは日本か」
「これだけ日本語に溢れててたらな」
「実は外国で、外国語も日本語に変換されてたりしてな」
「なんというご都合主義」
「それは明らかな外国人に、日本語が通じたときに言え」

ちなみに戸籍も無かった。
ここが日本かどうか分からなかった様に所持金は０。
みつるぎは　めのまえが　まっくらに　なった。

「ポケセンはここにはないと思うぞ」
「少なくともその辺にいるのは普通の鳥とかだったもんな」
「いや待て、鳥がいるからポケモンがいない、というのはおかしい。サトシ達は一体何を食っているのか。という話に」
「ポケモンだろ？」
「ミルタンクのミルクやラッキーの卵はともかくそれはどうかと」
「じゃあ何食ってんだよ」
「夢とか希望とか」
「ゆめくいと申したか」

馬鹿話は置いておいても真面目にまずい。
職無し金無し戸籍無しの三十苦。
もう公園で草食って生きるしかないのか。

「つまりホームレスＮＥＥＴか」

「本出せるな。そしてゆくゆくは映画化！」
「それはただのホームレスだ。ん？本？」
「何だ？　万引きからＢ●●Ｋ●ＦＦへの転売か？」
「開封して帯取って注文用用紙抜いてから売れよ」
「そんな事するものか。この馬鹿共。図書館だよ」
「図書館か。判子をどうにかする所が難所だな」
「転売から離れろ」

そう言いつつ2人の頭を軽く叩く。
気を取り直して説明しようと口を開くと、更に口を挟まれた。

「図書館でなにするんだ？　本で満たせるのは食欲じゃなくて知識欲だろ。あと性欲」
「本じゃ腹は膨れないぜ？　別の場所は膨れるかも知れんが」
「下ネタは止めろ。まだ2話目だぞ。いいか、まず2手に分かれる」
「誰かが斬殺される件」
「まずは言いだっしぺから。」
「黙れ。茶化すな。いいか？現地の情報収集する奴と日雇いで何か仕事を探す奴だ」
「そして寝て待つ奴か。俺が立候補しよう」
「ＮＥＥＴ誕生。これでホームレスＮＥＥＴが書籍化か」
「…いいからジャンケンして決めるぞ。一勝ちが情報収集だ。ジャンケンホイ」
「「あ、ずる！」」

で、図書館に着いたわけだが。（あの後真面目にジャンケンした）
風芽丘図書館ねぇ。どこかで聞いたような…
まずは地図か…地図にはそんなに違いが無いな…
地理にはそれほど詳しくないが、世界地図くらいなら分かる。
次は新聞…今日は…5月4日？ＧＷの真っ最中か。

ん?今は２００…5年…待て待て、私達の享年（でいいのか?）が
２００９年の年末だろ?
転生と言っていたが時間軸は別なのか。

次は歴史か。え～と…ん?
車椅子の少女が居る。上の方の本を取ろうとしているようだ。
どうする?
↓1．当然手助けする。
2．司書の人を呼ぶ
3．無視する
まぁ、1だな。
気づいた以上はしかたない。
目線の先の本を取り、少女に差し出す。

「これかな?」
「あ、はい。ありがとうございます」

合っていたようだ。しかし…関西弁だろうか?イントネーションが変わっている。

「どういたしまして。」

特に用も無いので立ち去るとしよう「あの、すみません」ん?
少女がこちらを見つめている。端整と言うには少々大げさだが、それなりに整った顔立ち。
今はともかく、成長すれば美人になるだろう…何を考えているんだ私は。

「何か用?」
「え、とですね。もう少しお願いしてもええですか?」

そう少女は告げた。これが、私と彼女の出会いである。

## 1章－1　おいでませ　異世界（後書き）

あとがき（という名の言い訳）：はい。2話目です。しかしながらあれですね。すごいですね。リリカルなのは。投稿して一日で９００近くのユニークが。

まぁよくもこんなリリなのとは名ばかりの作品にお越し下さいました。

ようやく少女．H登場。
時間設定をA's公開の２００５年に。
携帯を小学生が持ってるのだからこれくらいかと。
実はプロットみたいなものはここで終了しています。今後の展開はいまだ纏まっていません。
収集に参加するのか、なのはやフェイトとの関係等、山積みです。
防衛プログラム戦には絡ませるつもりです。
3話はいつになるか分かりませんが、基本週1～2になると思われます。

では見てくださった皆様、ぜひ3話からもご愛顧お願いいたします。

# 1章－2　めぐりあい、海鳴

「すみません。荷物まで持ってもろて」
「いや。これくらいなんでもない。ここでいいのかな？」

なんだろう。気がつけば荷物持ちにさせられて、今はこの少女の家らしき物の前にいる。
しかしこの家…でかいな。住宅地の中でもそれなりな大きさだ。
何人住んでいるんだ？

「あ、はい。折角ですから上がっていってお茶でもどうですか？」
「いや、そこまでされるような事は「どうですか？」…いただきます」

しかし、家の人になんと説明するのだろうか？
小学生に連れられて、ノコノコ家までついてきた成人男性…
通報される前に帰るか。連行されたら一発アウト。
住所不定無職、おまけに戸籍の無い密入国者ときた。
最近は迂闊に子どもに親切にできないからな。交番に連れて行こうとして通報されたり。
まったく。一部の児童偏愛者のせいで寒い時代になったものだな。
ＹＥＳロリータＮＯタッチは基本だろうに。
紳士たるもの「どうぞ」ん？
気づけばテーブルに向い、椅子に座り、目の前には湯気の立つお茶がある。

「…キングクリムゾン？若しくは造物主（コード・オブ・ライフメーカー）の掟？」

「？」

この状況、スタンド攻撃を受けている可能性がある！訳もなく。
考えに没頭しすぎていたようだ。
仕様が無いのでお茶を戴いてさっさと帰る事にしよう。

「お家の方は？」
「あ、え、と。一人暮しなんです」
「へぇ」

一人暮らし？小学生が？…訳ありか。
しかし、このでかい家に一人暮らし。…小学生には私が感じるより随分と広く、さびしく感じるのだろうな。

「あ、ごめん。聞いちゃいけなかったかな？」
「もう慣れてますから。気にせんといて下さい」

ふむ。いいこだ。健気と言ってもいい。

「長居してしまったね。ごめん」
「こちらこそ、引きとめてしもうて。ありがとうございました。ご迷惑でしたか？」
「いや。楽しかったよ」
「その、ですね。またよかったら来て下さい。私、いつもはあの図書館にいますから」
「え？」
「あ、いえ、お暇だったらでええんです！」

なにやら、わたわたしながら言っている。

「ん。まぁこっちも暇と言えば暇だからね。また今度」
「あ、はい！ありがとうございます！」

うむ。ん？そういえば。

「すっかり忘れてた。名前。私の名前は御剣。御剣　仁。御御御付けの御に剣道の剣。それに仁徳天皇陵の仁」
「あ、すいません。私も忘れてました。私の名前は」

「で、人が汗水垂らして働いてたってのに、かわいい女の子とお茶して来たってか」
「なんというリア充。かくなる上は極刑をば」
「黙れ。その後が問題なのだ」
「問題？その場を見た近所のおばちゃんに通報されたか？」
「遂に知り合いから性犯罪者が。世も末だな。まだ２１世紀初頭だけど」
「あぁ、そこも言って無かったな。まとめて言おう。
ここはリリカルなのは、それもＡ‘ｓ前の世界だ。２００５年５月４日のな」
「「は？」」

「私の名前は、はやて。八神はやてです。数字の八に神様の神。で、ひらがなで、はやてです」

…八神…はやて？
待て待て、車椅子、図書館、一人暮らし、海鳴。

「…リリなの？」
「？」

「リリカルなのはってあれか？アニメの」
「あぁ、あのお前らが見ろ見ろ言ってたあれか」
「結局お前は見てなかったがな。原口」

そう。どうやらここはリリカルなのはの世界らしい。
年代まで覚えてないが、A、sの開始が6月4日だからちょうど一カ月前。

「で？」
「ん？」
「どうすんだ？それが分かったからには介入するんだろ？」
「折角の異世界だしね」
「いや、その前にすることがある」
「する事？」
「飯だ」

## 1章ー2　めぐりあい、海鳴（後書き）

あとがき（という名の言い訳）：三話です。週1～2とか言っときながらサクサク書けたもんで投稿とあいなりました。
これだけは言っておきます。主人公はロリコンではありません。

# 1章ー3　目覚める能力

夕刻　海鳴市内　某チェーンレストラン内

「…コンビニとかの方がよくないか？」
「節約よりはまず腹ごしらえだ」
「腹が減っては戦はできぬってね」
「稼いできた奴がそう言うなら構わないがな。
まずは成果報告といくか。まず、リリなの世界であり、基本は元の世界と変わらない。
時間軸は２００５年5月4日。A、s一か月前。はやてが車椅子に乗っていることから闇の書事件は確定」

ここまでで一度言葉を区切る。

「そんだけか」
「リリなの世界だと分かっただけで大躍進だと思うが。
そのうち来るだろう時空管理局に拾ってもらうとか」
「そういや今晩の寝床どうするよ。野宿か？」
「やはりホームレスＮＥＥＴの書籍化をするしかないのか。」
「いいかげんそれから離れろ」

そして店を出る。

「残金は…だいたい1万と5千ちょいか」
「待て。1日でいくら稼いだんだ。朝から夕方までだろう？」
「「工事現場の親方が色付けてくれた」」

「…お人よしすぎだろうその親方」
「天涯孤独で金もないと言ったら即採用だったぞ」
「…人情に厚いと言っておくか」

で、とりあえず公園に来てみたわけだが。

「金も余裕があるわけじゃないしな」
「首が無いのは金が無いのも同じって言うからな」
「すでに死んでるからな。その状況」

さて…と。結局ここで野宿か？段ボールがあればいいが…もしくは新聞紙。

「能力も地味に役に立たないな」

基本戦闘用だからな。…ん？能力？

「おい、黒峰」
「何だ？」
「かまくら作れ」
「征夷大将軍か」
「スケール大きいね」
「鎌倉幕府じゃない。雪で作るあれだ」
「まさかの能力初使用がそんな事って」
「うっさい。早くしろ」
「でもよぉ、どうやるんだろうな」
「…さぁ？何かこう…絞り出す感じとか？」
「絞り出すってなんだよ」
「いや。よくわからん。そういえば、本当にできるのか確認していなかったな」

「じゃぁお前らも確認兼ねて何かやれよ。」
「何かってなんだ」
まぁ試してみるか。
出すとすれば…剣とかか？まぁやってみるか。

――創造の理念を鑑定し
――基本となる骨子を想定し
――構成された物質を複製し
――製作に及ぶ技術を模倣し
――成長に至る経験に共感し
――蓄積された年月を再現する。

…何も出ない。アーチャーの方ではないらしい。

「あ、出た」

背後で声がした。…黒峰の手の上に何かの塊がある。
赤黒い粒。それが固まったような物。…血？

「方囲、定礎、結！　あ、出た」

原口の目の前に透明な立方体が浮いて、否、囲われている。
…あれ？私だけか？できないの私だけ？

くっ！黒峰と原口がニヤニヤしながらこっちを見ている。
あぁ、付き合いが長いとアイコンタクトで会話できたりするが、そんな年月は関係ない。
あれは『できないの？ねぇできないの？』と言っている目だ。
待て待て落ち着け。素数を数えて落ち着くんだ。素数は自分と1でしか割れない孤独な数字。私に勇気を与えてくれる。
2，3，5，7，11，13，17。そうだ。アプローチの仕方が違うんだ。
19，23，29，31，37，41。アーチャーじゃない。金ぴかの方だ。
となると…自分の背後から引き出す感じか？
剣の形を思い浮かべながら背後に手を伸ばす。
自分の中で鍵の開く音がする。…何か掴んだ。
引き出す。そこには何の装飾もない剣があった。

「「銃刀法違反者発見」」
「お前らそれが言いたかっただけか」

## 1章ー3　目覚める能力（後書き）

あとがき（という名の言い訳。）：はい。第４話、能力使用編です。あぁ引かないで行かないで。すいませんダサくてすみません。本格的にリリカルなのはに絡むのは次回からになります。しょうがねぇな、読んでやるかと思ったそこの貴方。今後ともよろしくお願いします。

# 2章－1　『世界』の流れ

５月１４日（火）昼　海鳴市　風芽丘図書館

「こんにちは」
「あ、こんにちは。お久しぶりです」

満面の笑みで迎えてくれた。…心が痛い。

「ごめんね。あの後少し立て込んでて。なかなか来られなかったんだ」
「いえ！　そんな、わざわざ来ていただいただけでも嬉しいです」

立て込んでいた。そう色々あったのだ。
『剣軍師団（けんぐんしだん）』から取り出した西洋鎧や日本刀を質屋に売ったり、衣食を整え、廃ビルを買って１フロアを住めるように改修したり（やはり身分証明書が無いと家は借りられなかった）。

「しかし半信半疑だったけど居てよかった。
今日は平日だから学校かと思っていたよ」

もちろん嘘である。はやてが学校を休学している事は知っていたし、本人も言っているようにほぼ毎日この図書館にいるはずだ。

「学校には行って無いんです。この足の診察で休む事が多くなったんで今は休学中。
自宅療養って事になってます」

「そうなんだ。今は…三年生くらいかな？」

話をしながらはやての家に向かう。

「あ、すごい。当たりです。聖祥付属小学校の三年生。あ、でも、後二十日で９才ですよ？」

「後二十日？…６月３日？」

「あ、今月は３１日まででしたね。６月４日です」

６月４日、闇の書が目覚める日。これによってはやての病状は悪化の一途を辿る事になる。

『剣軍師団（けんぐんしだん）』から『破戒すべきすべての符（ルール・ブレイカー）』若しくは『破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）』を取り出し、闇の書に突き立てれば、恐らくはやてとの契約が切れ、はやての病状は回復するだろうが…駄目だな。

闇の書が夜天の書に戻る事、はやてに『守護騎士達（ヴォルケンリッター）』の戦力は必要だ。

手段があっても使えない。はやてを苦しみから解放できるのに、それを行ってはならない。

全ては今後の『世界』の為に。

「…欺瞞だな」

そこまで考えて自嘲する。

Ｓｉｄｅ　黒峰＆ａｍｐ；原口

「で、なんでまたあいつがはやてと接触してんだ？」

「しょうが無いだろ。僕達は面識無いんだから」

「あいつが俺らを紹介すればいいだけだと思うが」

「腹立つから僕達だけで翠屋にでも行く？」
「未来の魔王とエンカウントか。ここからさきはセーブできないぜ！」

またずいぶんと長居してしまった。
はやてが夕食の準備があると言いだしたので、お暇させてもらおうとしたら食事に誘われた。

「一人分だけ作るのもなんですし、折角ですから食べていってください」

…一応弁解はするが何度も断った。が、結局押し切られる形になったが。
で、なぜこうなる。今、私の膝の上ではやては眠っている。いわゆる膝枕だ。
食事の後も談笑して、一緒にＴＶを見て、気がついたらこうなっていた。はやてを揺すってみる。
…起きない。
そろそろ戻らなければいけないのだが…しかたない。
はやてを抱きかかえてはやての部屋に向かう。
確か2階だったな。原作知識を元に探すと、すぐにそれらしき部屋を見つけた。
悪いとは思いつつ部屋に入り、はやてをベットに寝かせた所で気がつく。
闇の書がそこにはあった。

Ｓｉｄｅ　黒峰＆ａｍｐ；原口

「…遅いな」
「腹減ったな」
「なにやってんだ？あいつ」
「まだはやての所だったりしてな」
「夕食とかごちそうになってたら許さん」
「結局なのははいなかったしね」
「アースラにでも行ってたんじゃね？」
「シュークリームが美味かったのでよしとする」

見た目は普通の本でしかない。（鎖が巻かれているが）しかし手に取ればわかる。異様なまでの魔力、異質な雰囲気、そしてはやてに伸びるパス。
A、sのラスボス、闇の書の防衛プログラム。歴代の主の誰かが書き加えた闇の書の最大のバグ。
管制人格リインフォースが消えなければならなかった理由。

「あれ？御剣さん？あれ？私の部屋？」

と、そこで声が背後から聞こえる。はやてが起きたようだ。
振り向きながら、後ろ手に闇の書を元に戻す。はやてに気づかれないように。

「すまない。無断で部屋に入るのは不躾だとは思ったが、あのままだと風邪をひくと思ってね」
「いえ。ありがとうございます。あ、でも鍵かけんと」
「では下まで連れて行こうか？」
「そんなんしてもらわんでもええです。自分で行けますから」

顔を真っ赤にしている。照れているのだろうか？

「あ、せや。え～と、あった。御剣さん、これを」

はやてがなにかを差し出す。これは…鍵？

「合鍵です。これで閉めて行ってください」

さも名案の様に言ってくる。閉めた鍵はどうするのか。ポストにでも入れておけばいいのか？

「ん。わかった。ポストに入れておくよ」

「いえ。持ってて下さい」

…この子は何を言っているのか分かっているのだろうか。会って間もない名も知らぬ相手を家に招く事もそうだが、防犯意識に欠けている。

そう言うと、

「でも御剣さんは悪い人ちゃいますよね？」

…これである。将来男で苦労するタイプだ。

未来の部隊長がそんな人を見る目が無くていいのか。

「で、ごちそうになった挙句、膝枕までして来たわけか」

「そして合鍵まで貰って来たと」

「…何が言いたい？

言いたい事ははっきり言え」

「「このロリコン」」

違う！！！

## 2章－1　『世界』の流れ（後書き）

あとがき（という名の言い訳）：新章やがみけ編突入です。重ねて言いますが、御剣はロリコンではありません。
はやては何故御剣に懐いたのか、それほど深くない理由がそこにはあります。（ほんとに浅いんで気にしないでください。）
週1～2とか言いながらほぼ毎日投稿しているこの現状。更新が止まったらネタに詰まったと思ってやって下さい。ではまた次話で。

# 2章－2　闇の書覚醒

6月2日　海鳴市　はやて宅

「そういえばそろそろ誕生日だったね。何か欲しいものとかある？」
「え？　えぇですよ。ありがとうございます。気ぃ使こうてもろて。でも、こうして来てくれるだけで嬉しいですし」

今日も優雅に午後Ｔｅａ中。しかし、はやての誕生日、すなわち闇の書覚醒まで、残すところ後二日。
正確には、もう二日を切っている。

「いや、いつもお茶をごちそうになっているしね。ケーキくらい買ってくるよ。リクエストある？」
「あ～…じゃぁせっかくですし、お願いします。ケーキはなんでもええですよ」
「現金だね。甘いものは別かい？」
「御剣さん、こうと決めたら私がなんと言おうと買うてくるやないですか。なら言っても無駄でしょ？」
「ふむ。素直というか、これは諦められたかな？」
「その方が近いですね」
「ククッこれは手厳しい」

それからしばらく他愛も無い話を続けた後、今日の本題に入る。

「そうだ、君の事を友人に話したら、会ってみたいと言いだしてね。せっかくだから誕生会に連れてきてもいいかな？」

「御剣さんのお友達ですか？ええですよ。人は多い方が楽しいですし。せやけど、私の事、なんて話したんですか？」
「図書館で知り合った可愛い子」
「可愛い…」

そう言うと、はやては頬を朱に染めて照れている。
意図的にやっているとは言え、こちらも些か恥ずかしい。
顔がにやけ無いように気をつけながら話す。
…はやての動きがモジモジからウネウネに変わってきた。

「まぁ、料理とかもこっちで用意するよ。そのへんは心配しなくていいから」
「え、そこまでしてもらうわけにはいきません。って言っても聞かないんですね」
「そう言う事。明後日の夕方頃にまた来るよ」
「はい。楽しみに待ってます」

これではやてに黒峰と原口の面通しと、こちらに来てすぐの『守護騎士達（オルケンリッター）』との接触もできる。
まぁ、はやてが病院に担ぎ込まれた後だろうが。

６月４日　海鳴市　はやて宅　Ｐｍ４：００

うむ。睨んでる睨んでる。４対の視線がこっちを見ている。…こ

っちみんな。

「え…と。こちら、御剣さん。
私のお友達で、え～と何て言ったらええんやろ…不思議な人や。」

はやて、後で少し話がある。

「そんでこっちが右からシグナム、シャマル、ヴィータ、ザフィーラや。
三人は私の親戚で、誕生日のお祝いに来てくれたんよ。」

本編見てる時にも思ったが、それは流石に苦しいぞ、はやて。三人とも明らかに外国人にしか見えん。
ちなみにザフィーラは犬形態だ。

「な、Ｎｉｃｅ　ｔｏ　ｍｅｅｔ　ｙｏｕ」
「日本語で構わない」

シグナムに素気無く言われた。さいですか。知ってたけどね。
何と言うご都合主義。

「ご紹介にあずかりました、御剣です。御剣　仁。御御御付けの御に剣道の剣、仁徳天皇稜の仁で御剣　仁です」
「相変わらず捻くれた自己紹介だな」
「御御御付けとか日本人でもパッと出ないだろ」

黒峰と原口が突っ込んできた。インパクト重視で考えたものの、御御御付けが理解されなくて辛くなってきた所だ。いい機会なので今度から改めるとする…残念ながら。

「こっちが黒峰。黒峰　亮。そしてこっちが原口　宗一」
「「オイィーーーッス！」」

…長さんか。ほら見ろドン引かれた。
その後も和気藹々、とまではいかないまでも、それなりにいい雰囲気で誕生会は進んでいた。
ちなみに持ち込んだ料理はケーキも含め全て私の手製だ。
そう言うとはやてに嫁に来ないかと言われた。…どこからツッコむべきかわからんが、とりあえず、後１０年は早い。

「そういえば、御剣さん、私と話す時と、黒峰さんや原口さんと話す時とじゃ口調違いますよね」
「あぁ、こいつらは付き合い長いから。ついぞんざいに扱ってしまってね」

…何故か拗ねられた。話しかけてもソッポを向かれる。

「…わかったよ。はやて。これでいいか？」
「よろしい！」

やはり笑顔の方がいいしな。そこ、ロリコンロリコン言うな。聞こえているぞ。
やがて夜も更け、解散となる。そこをシグナムに呼ばれた。
美人のお姉さんに呼ばれて悪い気はしないので、物陰までホイホイついていく。

刹那、首に冷たい物が触れる。シグナムのデバイス、レヴァンティンが喉元に突きつけられていた。

「貴様、いや、貴様等、何者だ」
「通りすがりの一般人さ」
「ふざけるな！返答しだいでは切り捨てる」
「穏やかじゃないな。いいのか？主に黙ってこんな事をしても？」

シグナムの顔色が変わる。

「貴様、闇の書の事を知って、主に近づいたのか！」
「知ったのは出会った後だがね。しかし一般人に刃物を押しつけて問答とは、物騒な」
「とぼけても無駄だ。その魔力、ただもので有る筈がない」
「む。私にも、魔力はあるのか」
「戯言を。
分からぬのはリンカーコアが無い事だが、それでも尚その魔力量、主の為にも看過できん」
「別にはやてに何かする気は無い。闇の書を手に入れようって気も無い」

少し悩んだ後、シグナムはレヴァンティンを降ろした。

「…その言、信用する事が出来るとでも？」
「そう思うなら、剣を下げたりしないだろう？」
「…すまなかった。
まだ来て僅かの時しか過ごしていないが、ここは暖かく、否、我が主は暖かく、優しい方。必要以上に過敏になっていたようだ。重ね重ねすまなかった」
「もういい。今後ともよろしく、シグナム」
「承知した。御剣殿」
「…殿は止めないか？」

「で、はやての次はシグナムか。この節操無し」
「仁死ね」
…不本意な。誠（あれ）と一緒にするな。

## 2章－2　闇の書覚醒（後書き）

あとがき（という名の言い訳）：はい。意外と難産でした。書きなおし回数実に４回！それでもこんなもんです。

ヴォルケンズとの出会い編。実は当初ではいきなり切りあったりしてたんですが、あれ？それって今後に禍根残さね？という事で大改編。普通に誕生日会で会いました。

今後は時間が一気に飛びます。今度は１０月２７日、はやて病変になります。
次回も難産な予感がしますが、がんばりますので見守ってやって下さい。

では、また次話でお会いしましょう。さよなら、さよなら、さよなら。

## 2章－3　闇の書の真実

１０月２７日　海鳴大学病院　はやての病室前廊下

Ｓｉｄｅシグナム

ドガッ

壁を殴った痛みが私を苛む。

「何故！何故気づかなかった…」

「ごめん…ごめんなさい！…私…」

静まり返った廊下にシャマルの慟哭が響く。

「お前にじゃない。自分に言っている…」

何故気づかなかったのだ…御傍に居ながら！

我らの維持にも当然魔力が使われる。

基本的には我ら自身のリンカーコアで賄われるものの、足りぬ分は主から供給されていた。

それを知りながら！

深夜　海鳴市内　とあるビルの屋上

我らの足元には４人分の転送魔方陣が展開されている。

かつて、主はやてより賜わりし騎士甲冑に身を包み、愛剣（レヴァンティン）を構える。

心に去来するは主はやてとの誓い。
しかし、闇の書の守護騎士たる我らが活動することで主はやての浸食は進んだ。
なれば、その救済も我らが使命。
主はやて。申し訳ありません。ただ一度だけ、あなたとの誓いを破ります！

「我らの不義理を、お許しください！」
「そこまでだ」

突然の闖入者に皆反応する。
果たしてそこにいたのは…御剣殿だった。

「何故ここにおられる。御剣殿」
「それだけ魔力撒き散らせておいて、何故もなにも有るか」

…転送の為の魔方陣の撒き散らす魔力は確かに大きい。しかし…

「私が聞いているのは、どのような意図を持ってここに立たれたか、という事。
邪魔立てすると言うならば…」

レヴァンティンの切っ先を御剣殿に向ける。

「切り捨てる、か」
「そうです。仮にも私は『守護騎士（ヴォルケンリッター）』烈火の将。
邪魔立てするならば相応の御覚悟を」
「覚悟、覚悟ね。成程」
「…何が言いたいのですか」
「いやいや、覚悟はいい言葉だ。いい言葉は決して無くならない。

しかし、君たちにはあるのか?自らの主に罪を負わせる覚悟が」
「はやての道は血で汚さない!はやての為にも人殺しはしない!」

ヴィータが吠える。

「そんなものは覚悟では無い。『覚悟(かくご)』とは!暗闇の様な道を指し示す道標だ。
けして諦めない決意こそが覚悟を生む」
「我らは諦めてなどいない!否!諦めてなどいないからこそ抗うのだ!
闇の書の主の運命から主はやてを救うために!」

途端に御剣殿の顔が歪む。今まで見たことも無いような顔だ。

「運命、運命か。運命は嫌な言葉だ。嫌な言葉は決して無くならない。
運命なんてものは、運命について考えた時にだけ顔を覗かせる化け物だ。塵芥にも劣る」
「何が言いたい…言いたい事をはっきりと言え!」

ザフィーラが焦れたように叫ぶ。

「では、はっきりと言おう。君たちのやろうとしている蒐集行為、それは全て無駄だ」
「何…だと…?」
「思い出せ。君たちが今まで使えてきた主の事を。彼らは君たちが蒐集を完了した後どうなった?」
「それは当然、強大な力を…」

…何だ?思い…出せない?我らは主に仕え、そして蒐集を行い…

どうなった？
周りを見渡す。他の皆も困惑顔だ。

「第一級指定ロストロギア、『闇の書（Ｂｕｃｈ　ｄｅｒ　Ｄｕｎｋｅｌｈｅｉｔ）』。転生機能、無限再生機能を併せ持つ。
本来の名は「夜天の魔導書」、主と共に旅をし、各地の偉大な魔導師の技術を収集し、そして研究するために作られた、収集蓄積型の巨大ストレージデバイス。
しかし、歴代の持ち主の何人かがプログラムを改悪。破壊の力を使う「闇の書」へと変化した。
その改変により、旅をする機能が転生機能に、復元機能が無限再生機能へと変化してしまった。
これらの機能があるため、闇の書の完全破壊は不可能とされる。
また、真の持ち主以外によるシステムへのアクセスを認めない。
無理に外部から操作をしようとすると、持ち主を呑み込んで転生してしまう。
ゆえにプログラムの停止や改変ができないので完成前の封印も不可能。
完成後は、持ち主が闇の書の意志（管制人格（マスタープログラム））と融合することで、巨大ストレージデバイス「闇の書」に蓄えられた膨大な魔力データの魔力を行使できる。
当然蒐集した対象の魔法も使え、莫大な魔力がある分オリジナルを上回る威力を生み出す可能性もある。更にはサポートも闇の書の意志が行ってくれる。
ただし、所有者に選ばれても、蒐集によって魔導書を完成させた後に管制プログラム・防御プログラム双方の認証を受けなければ管理者権限を得られず、機能の全てを使用することはできない。
そして、自律思考を持たない防御プログラムの破損によりこの認証が正常になされず幾度も暴走を起こしている」
「…何を言っている？いや、何が言いたいのだ！」

混乱する思考を置き去りに叫ぶ。
そんな私を憐れむかの様な視線を向けたまま、御剣殿は口を開いた。
薄々と私自身が気付いていた、気付きたくなかった事を告げる為に。

「つまり、君たちが蒐集を行ったところで、はやては闇の書に呑まれて暴走する。」

Ｓｉｄｅ御剣

「そん…な」
「それじゃぁ…はやては…はやてはぁ…」
「はやてちゃん…」
「主…はやて…」

守護騎士達の顔は絶望に染まり、まるで明日、世界が終わると言われたかのようだ。

「…御剣殿。貴殿はどのようにしてそれを？」
「闇の書に直接。私には鑑定能力のような物が有ってね。
それで今までの顛末や闇の書の真実、そしてはやての辿る先も、ね」

シグナムの瞳に炎が宿る。

「なっ…それを知ってなぜ放置した！なぜ我らに告げなかった！なぜ主に明かさなかった！」
「告げて、明かして、お前らを消す、か？それは随分な重荷を背負う事になるな。

はやてから家族を奪い、加えてお前たちを殺した咎、と」
「っ！そ、それは…ならば！我らが現れる前に闇の書を」
「言っただろう。外部操作は受け付けないと」
「では…それでは…主はやては…」
「このままでは助からない」
「…それでいいのか！主はやては貴方を好いている！その好意を受けて何も感じないのか！」
「何も」
「っ！」

ビュッッ！

レヴァンティンが喉元に当てられる。

「ふん。いつぞやの問答の様だな。…どうした。遠慮はいらんぞ」
「…貴方は先ほど『このままでは』と言われた。…有るのだな、主はやてが救われる方法が！」
「クックッ存外に冷静だな。そう、その通りだ。では教えよう。はやてを助ける方法、それは…」
「それは？」
「蒐集だ」
「…」
「…」
「…」
「…いや、御剣殿。蒐集は無駄、と言われなかったか？」

守護騎士達の冷たい視線が突き刺さる。止めろ。そっちの趣味は無い。

「ただ闇雲に蒐集をしても無駄、という事だ」

「では？」
「蒐集を行い、はやてに真の主としての覚醒をさせる。
そして、闇の書の闇、防衛システムの改修をしてもらう」

## 2章－3　闇の書の真実（後書き）

あとがき（という名の言い訳）：第二章、閉幕でございます。
次話からはA、s本編に突入します。

黒「そんな事より今回俺達の出番が無かったんだが。」

作「だって君達ギャグ要員だし。今回はシリアスチックに攻めたかったんで。」

黒「それほどシリアスでも無いだろうが。ほら、原口、お前からも何か言ってやれ！」

原「…もう何か元から出番少ないからね。若干諦め入ったよ。」

黒「…。」

作「ではまた次話で！」

# 3章－1　回る運命の歯車　前編

某管理外世界

一面の砂漠。生命を拒絶するかのような照りつける日差し。
その只中にそれはいた。
茶色の甲殻、細長い胴体。
しかし、細長いと言っても、胴回りは優に大人8人が手を繋いだ程はある。

「あれか？」

シグナムに問う。

「そうです。この近辺の世界でも有数の存在。
相応に手強いでしょうが、それだけの事をする価値はあります」
「ふん。…岩竜か。しかし、今更だがその口調、疲れないか？」
「いえ。主はやてのご友人なれば」
「それの繰り返しか。はやても気にしてたぞ。シグナムが余所余所しいってな」
「な！い、いえ、私は『守護騎士（ヴォルケンリッター）』烈火の将。
範を示さねばならないのです」
「そこまで言うならもういいがな。さて行くか。…ん？」
「どうしました？御剣殿」

岩竜の様子がおかしい。何かを警戒するようにあたりを見回している。

「気づかれましたか？」
「いや、それなら逃げるなり向かってくるなりするだろう。
何かを感じ取った様に見えるが…」

その瞬間、砂中から勢いよく飛び出た影があった。
鰐だ。否、鰐というよりはもはや恐竜だった。遠目でも分かる程の迫力。
長さではともかく、サイズは鰐の方が岩竜より2周りは大きい。
岩竜も怯んだ様だが、すぐさま逃げ出した。しかしそれも虚しく失敗に終わる。
一噛みで絶命させられる岩竜。
鰐はそれを地面に叩きつけ、動かなくなったのを確認すると食事を開始した。

「な…」

シグナムが絶句している。流石に想像外だったのだろう。

「で？どうする？」
「…どうしようもありませんね。あの様子では岩竜は既に絶命しています。
そうでなくとも、あそこに割って入るのは…」
「岩竜など、最早どうでもいい。あの馬鹿でかい鰐をどうするか、と聞いたんだ」
「…正気ですか？」
「自分ではそのつもりだが？」
「無謀です。
岩竜を一撃で葬った事もそうですが、あれほどの巨体、生半可な攻撃では通じないでしょう」

「ならば、そこで見ているがいい。あぁ、そうだ。この機会にどの程度のものか見ておけ」
「何をですか？」
「私の実力の程、さ」

さて、大見え切ったはいいが、近くで見ると殊更でかいな。
その辺の山ほどはある…か？

「鰐、鰐ね。なら仮称としてベヒモスとでも呼ぶか。」

怪物、魔獣退治は英雄の仕事。ならば私に勝てぬ道理は無し。

「行け。『魔狼縛りし魔法の紐（グレイプニル）』！」

銀色の紐がベヒモス（仮）を取り巻いた後、縛り付ける。
かつて世界を食らうとされた魔狼・フェンリル。
それをラグナロクまで繋ぎ止める魔法の紐。魔獣の類ならばこれで拘束できるはず。

グオォォオオォォォオオオォォォオオオォォォォ

まるで大地が啼いているかのような音が響く。
ベヒモス（仮）が啼いている。
どうやら身動きが出来なくなったために怒り狂っているようだ。

「これは…！」
「さて、まだ蒐集はできないか？」
「え、えぇ。まだ抵抗力が強いためリンカーコアを取り出せません」
「では、もうひと押しといくか」

精神を統一し、自己の内面に意識を集中。この巨体にダメージを与えうる攻撃手段を模索する。
…あれか？

「シグナム、少し離れてろ」
「わ、わかりました」
「さて、死ぬなよ。『撃滅せし雷神の槌（ミョルニル）』（小）！」

取りだした槌をベヒモス（仮）の脳天に向けて投げつけ、真名を解放する。
雷を纏い飛翔するミョルニル。
北欧神話に登場するトールが持つ北欧神話中最強の槌（ウォーハンマー）。
その威力はそれを受けて生き残った生き物は、かのヨルムンガルドだけであったと伝えられる程。
手加減したとはいえ轟音を立てて崩れ落ちるベヒモス（仮）。
戻ってきたミョルニルを掴み、座に返す。

「さて、蒐集しようか。」

「蒐集完了です。しかし…凄まじい…」
「そうでもないさ。これでも手加減した。そもそもあれは私単体では碌に扱えぬ代物でね。
それより、これで何ページだ？」
「今回で１１、昨日ヴィータと黒峰が９ページで、今までのを合わせると、合計で４０８ページですね」
「やっと3分の2程度か」
「えぇ。魔導師以外の魔法生物だけではこんな物かと」
「特異な能力持ち程ページ数は多いが、その分倒すのは少し手間、

か。
　まぁ、それはしょうがない。サクサク蒐集するか。次に行くとしよう」
「はい…待って下さい。シャマルから通信が。…何だと?」
「どうした?」
「それが…海鳴市でヴィータが戦闘に入ったそうです。
相手は白い服の魔導師だとか」
「…何だと?」

時は少し巻き戻る。

Ｓｉｄｅヴィータ

集中して魔力を探す。

「…駄目だな」
「わからないのか?」
「いるのはわかる。でもどのあたりかは分かんない」

蒐集は遅々として進まず、はやての病状は刻一刻と悪化している。
このままじゃ…

「そんな事はさせねぇ!」

脳裏によぎる最悪の事態を頭を振って追い出す。
以前から時折感じる大きな魔力反応。それさえ蒐集できれば!

「いいのか?ヴィータ」

ザフィーラが問うて来る。

「何がだよ」
「魔導師からの蒐集はせぬよう、御剣から言われていただろう」
「知るか。シグナムはなんでかあいつに従う気みたいだけど、あたしには関係ない。
はやての命が一番大事だ」
「そうか」

そう言ってザフィーラは口を閉ざした。

「ちっ！埒が明かねぇ。ぶつかるまで封鎖領域を広げる」
「手伝うか？」
「いい。あたし一人でやる。ザフィーラはシグナム達のとこ行ってくれ」
「承知した」
「アイゼン！封鎖領域！」
「Ｇｅｆ？ｎｇｎｉｓ　ｄｅｒ　Ｍａｇｉｅ．」

そして…

「ごめん、なのは、遅くなった」
「ユーノ…くん？」
「くっ…仲間か？」
「Ｓｃｙｔｈｅ　Ｆｏｒｍ．」
「…友達「何をしている。この馬鹿が」え？」
「なっ！御剣！なんでここに！」
「人の言う事聞かない馬鹿を連れ戻しにな」

## 3章－1　回る運命の歯車　前編（後書き）

なかがき：長いので前後編に分けます。

『魔狼縛りし魔法の紐（グレイプニル）』：対獣宝具ランクA　レンジ1～4　最大補足1人

かつて世界を食らうとされた魔狼・フェンリルをラグナロクまで繋ぎ止める魔法の紐。

猫の足音、女の髭、岩の根、熊の腱、魚の息、鳥の唾液から作られた。

これらは、グレイプニルを作るのに使用されたため、この世に存在しなくなったといわれる。

魔獣、怪獣の類であれば、例外なく縛り付けられる。

それ以外の者には丈夫な紐でしかない。

『撃滅せし雷神の槌（ミョルニル）』：対城宝具ランクC～A＋＋　レンジ1～10　最大補足1～100人

北欧神話に登場するトールが持つ北欧神話中最強の槌（ウォーハンマー）。

その威力はそれを受けて生き残った生き物は、かのヨルムンガルドだけであったと伝えられる程。

それも海水がクッションになり偶然助かっただけであり、当たり所が悪ければ即死だったと言われている。

投げれば相手を打った後に再び手元に戻り、掲げることで雷を呼び出すこともでき、大きさも自在に変えることができるとされる。

また、他者を生き返らせる際に振るわれたり、葬儀の際、儀式を聖別するためにも用いられた。

本来扱うには帯と、鋼鉄の籠手（メギンギョルズ＆イルアン・グライベル）が必要。

# 3章－1　回る運命の歯車　後篇

海鳴市　市街地　封鎖領域内

「増援！？」

…なんだこの男子…男なんてクロノ以外に…いたな。名前が出てこないが。
…淫獣とか言われてた気が。

「あぁ、勘違いするな。こちらとしては今回の事は想定外でね。この馬鹿を連れ戻しに来ただけだ」

そう言ってヴィータの頭に手を乗せる。…撥ね退けられた。

「馬鹿ってなんだ馬鹿って！」
「黙ってろ。馬鹿を馬鹿と言って何が悪い。人の言う事丸ごと無視するとはな。
魔導師は襲うなって言っただろうに」

さて、この場をどう誤魔化すか。

「そういうわけでな。そこの白い子、すまないな。身内が迷惑をかけた」
「あ、あの、それはいいんですけど、なんで私に攻撃してきたか教えてもらえませんか？
理由を教えて貰えれば、何か御手伝いできるかもしれませんし」

「ふむ…確かに正当な要求だな…しかしながら、それは出来ない」
「フェイト…そこの子は管理局の嘱託職員だ。
事情を話してもらえれば何か出来る事があるかも！」

馬鹿。この淫獣、余計な事を。
ほら、ヴィータの目の色が変わった。文字通り。

「管理局の連中になんざ、言う事なんか何も無ぇよ！アイゼン！」
「Ｊａｗｏｈｌ．　Ｔ?ｄｌｉｃｈｓｃｈｌａｇ.」

ヴィータはアイゼンを振りかぶると、事態について行けず、油断しているフェイトに向かって振り下ろした。

「え?」

ガキッ！

が、それをさせるわけには行かない。
座から蛇が巻き付いた意匠の杖を取り出し、アイゼンを受け止める。

「くっ…！なんで邪魔すんだ！御剣！」
「人が折角穏便に事を済まそうとしてるというのに…
まったく。黒峰、こいつを押さえていろ」
「あいよ」

どこからともなく現れた黒峰がヴィータを小脇に抱える。ヴィータが騒いでるが無視無視。

「癒せ、『医神携えし蛇の杖（カデュケウス）』」

真名を解放し、杖をなのはに向ける。

「っ！なのはに何を！「黙っていろ」なっ！」

淫獣が何か言いかけたが、黙らせる。

瞬間、光がなのはを包み、数秒後、完全回復したなのはがそこにはいた。

「詫びとは言わんが、これで勘弁してくれ。（原口。準備は？）」

「（完了済み。いつでもいいよ）」

「（ヴィータ、合図したら封鎖領域を解け。）

ご迷惑をお掛けしました。では皆さん、ごきげんよう。（今）」

Ｓｉｄｅアースラ

「駄目、シグナルロスト！ごめんクロノくん。追い切れなかった…」

「いや、エイミィは悪くない。今のはどう見ても消え方が異常だ。

ただの転送の様には見えなかった」

「途中で出てきた時もだけど、消えた時も殆ど一瞬。いきなり反応が現れたしね」

「三人の内の誰かが転送（アポート）系能力者なのかもね。

あの杖も一瞬で現れていた。あの眼鏡の男…御剣と呼ばれていたな。

ないし、途中で現れた男…こっちは黒峰と言ったか。

若しくはあの女の子も含んだ全員か」

「全員がそうって…それじゃ追い切れないよ？」

「最悪の事態としては、手も足も出ない事だな。まずはなのはに事情を聞こう」

アースラ内　談話室

「で、いきなり攻撃されたんだな？」
「うん。話を聞こうと思ったんだけど、まるで聞いてくれなくて」
アースラ内にて、なのはへの事情聴取が行われていた。
「ふむ、事情不明、使用魔法はベルカ式が一人と全く未知の能力が一人。
おまけに転送先は不明。分からない事だらけだな」
「でも、あの眼鏡のお兄さん…御剣さん、悪い人じゃないと思うよ？
私の傷も直してくれたし、フェイトちゃんも助けてくれたし」
「そう言えば、どこも痛くないのか？
フェイトが到着した時は、かなりのダメージを負っていたように見えたが」
「うん。もうなんともないよ。魔力も回復してるみたい」
「…魔力回復魔法まで使うのか。厄介にも程があるぞ。（ぼそり）」

Ｓｉｄｅ御剣

「こんの大馬鹿が！！！」

ゴンッ！

「痛ったぁ！！！！！」

戒めの意味も込めて、ヴィータの脳天に拳骨を落とす。
ヴィータは頭を押さえたまま涙目でこちらを睨んでいるが、今回悪いのはヴィータなので無視して話を進めた。

「魔導師には手を出すなと言っただろうが！」
「…だって」
「はぁ…はやてが心配なのも分かる。
だが、それで管理局に目を付けられたら意味が無いだろう。分かったか？」
「…うん」

よろしい。まぁ、今回が初だし、闇の書が絡んでるとは思われないだろ。
念のためこの世界から離れたところで蒐集するか。
考えに耽っていると黒峰が声をかけてきた。

「で、御剣、どうすんだ？そろそろ良いと思うぜ」
「ん？あぁ、そうだな。原口、結界解いてくれ。シグナム達と合流する」
「ん。了解」

原口が指を鳴らす。すると何かが砕け散る音がして、『世界』が変わる。
そう。あの時どこかへ転送した様に見せかけて、実は原口の結界内に取り込まれただけ。
場所はなのはが突っ込んだビルの中のままだ。
まぁ、閉鎖領域が解かれて、壁の穴は元には戻っているけど。
まさか同じ世界に居るとも思わないだろ。

「東大デモクラシーってな」
「それを言うなら灯台下暗しな」

久々にこいつらの出番かと思ったらこれだよ。

## 3章－1　回る運命の歯車　後篇（後書き）

あとがき（という名の言い訳）：第三章、突入です。
この小説は片手間で読めるB級作品を目指しているので2千字程を目安に書いているのですが、長くなったので前後編編成です。
今回からオリ宝具も出てきました。出してしまいました。
今後宝具が出てくるたびにあとがきの所に書いておくので参考程度にご覧下さい。
ではまた次話で。

『医神携えし蛇の杖（カデュケウス）』：対人宝具Ａ＋＋　レンジ１　最大補足１

ギリシア神話に登場する名医アスクレピオスの持っていたヘビの巻きついた杖。
対象者の体力、魔力を完全回復し、欠損した四肢すら復活させる。
そして死者蘇生さえも可能。
医神でもあるアポロンの子であるアスクレピオスはその医術で死者すら蘇らせた。
しかし、死者蘇生の罪によりアスクレピオスはゼウスに雷霆でもって撃ち殺された。
その伝説に基づき、死者蘇生を行えば雷霆でもって罰せられる。

## 外伝・夏だ！海だ！海水浴だ！ポロリもあるよ！（前書き）

今回は５万ＰＶ突破御礼といたしまして、外伝となります。
馬鹿話なので頭使わずに読んでいただけると幸いです。

# 外伝・夏だ！海だ！海水浴だ！ポロリもあるよ！

海鳴市内　八神家　リビング

「海水浴？」
「はい。私のリハビリついでに皆で行こうと思ってるんです。御剣さん達もどうですか？」
「かまわない。しかし、海水浴か。普通リハビリってプールとかでやるものではないのか？」
「気分転換も兼ねてますから。私の病気、精神的な物もあるみたいで」
「そうか。で？いつ行くんだ？」
「え～とですね」

7月27日　海鳴市近郊　海水浴場　Ａｍ９：００

「「海だ～！！！」」
「どうした。暑さで脳が融けたか？」
「ノリが悪いなぁ、御剣。海だぞ？はしゃぐだろう？」
「誰だってそうする。僕だってそうする」
「…女性陣はまだか」
「スルーか」

十数分後…

「おまたせ～」

はやてがシグナムに抱かれてやってきた。

「いや。それほど待っていない」

「あれ？黒峰さんと原口さんは？」

「先に泳ぎに行った。…似合っているぞ。その水着」

「へ？あ、ありがとうございます…」

はやては白のワンピース型の水着を着ている。

左腰に黒糸で蝶の刺繍が入っているデザインだ。で、

「シグナム、暑くないのか？」

「っ！い、いや、そんなことはないぞ？」

…見ているこっちが暑い。

ウィンドブレーカーを着て、頭からすっぽりとフードを被ってしまっている。

「恥ずかしいのは分かったから、目立つからせめてフードを取れ」

「そうよ、シグナム。皆こっち見てるわ」

「この程度で恥ずかしいとか、烈火の将も大した事ねぇな」

ちなみにヴィータは縁取りのみ白い、赤いワンピース型の水着。

首には待機状態のアイゼンがぶら下がっている。

シャマルは薄緑のビキニで腰にパレオを巻いている。やはりクラールヴィントは持っているようだ。

「ヴィータ、今何と言った？」
「べっつに？戦いが本分の『守護騎士（ヴォルケンリッター）』、その烈火の将も腑抜けたもんだってな」
「…いいだろう。そこまで言うなら脱いでやろう！しかと見よ！我が生き様！」

いや、水着一つでそこまで言わんでも。

「で、ウィンドブレイカーを脱いだのはいいけど、結局恥ずかしくなってはやてをシャマルに預けて海に走って行ったわけだが」
「流石のあたしも割と本気で情けなくなってきた」
「ヴィータが煽るからだぞ？」
「いーんだよ。最近腹周りを気にしてたし。いい薬だろ」
「…お前らって、体型に変化あるのか？」
「そりゃな。食わなくてもある程度は平気だけど、余ったエネルギーは普通に脂肪になる」
「そんなもんか？」
「そんなもんだ」

さて、はやてとヴィータとシャマルは波打ち際で遊んでる。
シグナムは走って行ったまま行方不明…じゃないな。沖合の方で水飛沫が上がってる。
たぶんシグナムだ。
むしろ行方不明は黒峰と原口か。
さて、どうするか…

1．はやて達と遊ぶ。
2．シグナムの所に泳いでいく。
3．黒峰と原口を探す。

…また出たな、これ。
しかも前回と違って難易度高くないか？
あれか、今後のルートに関わるのか？
さて…本気でどうしよう…

## 1．はやて達と遊ぶ

「お～い」
「あ、御剣さんや。どないしたん？」

はやては大きな麦わら帽子を被っている。日射病対策か。ベネ（よし）。

「1人でいるのも暇なんでな。…砂の城か」
「おう。あたしとはやての力作だ」
「あぁ。器用なもんだ。ん？シャマルは？」
「飲みもの取りに行って貰ったんよ」
「そうか。あぁ、ヴィータ、砂は海水で湿らせるだけじゃなくて、押し固めてから成形に入れ。

耐久度が上がる」
「おぅ」
「詳しいんですね」
「詳しいって程のものでもない。慣れだ。慣れ。ヴィータ、そこはもうちょっと…」

しばらくするとシャマルが戻ってきた。

「それで3人して作ってたんですね」
「おぅ。すげぇの出来たぞ」
「確かに凄いですね」

そこにはそびえ立つ大きな砂の城が有った。
高さは1m弱、ヴィータとはやてが細かい装飾を入れていたので、見た目豪華な代物になっている。

「年甲斐もなくはしゃいでしまったな…」
「えぇやないの。御剣さん。楽しかったで。付き合うてくれてありがとうな。
ほんでも…崩すのもったいないなぁ、これ」
「まさか持って帰るわけにもいかんからな。潔く崩してしまうとしよう。はやて、やるか?」
「その前に写真撮ろか。シャマル、カメラ持っとったよな?」
「あ、はい。そうですね。じゃあ撮りますよ~」
「ほら、御剣さんも」
「ふむ。では」

そう言ってはやてを抱き上げる。いわゆる御姫様だっこだ。

「ちょ!御剣さん!?」

「どうした？今更照れる事もないだろう」
「そ、そうですけどいつもと違うて私水着やし御剣さん上半身裸やし（ぶつぶつ）」
「ん？ほら、顔上げて」
「もぅ…はい」
「いきますよ～！１＋１＝？」
「「「２！！！」」」

## 2．シグナムの所へ泳いでいく

沖のブイ傍

「はぁ…腑抜けた、か。確かにそうだ。この程度、以前は何ともなかったというのに」
「お～い！シグナーム！」
「！み、御剣殿！なぜここに！」
「泳いでいたら見かけたんでな。ついでだ」
「そうですか。私の事など御気になさらず、どうぞ行って下さい」

「…その格好、そんなに恥ずかしいか？」

シグナムは薄めの紫のビキニ型の水着だ。

別に紐とかではない。

「い、いえ。そんな事は…ありますね。これは些か…心許無い」

「そんなもんか。まぁ水着とか初めてだろうしな」

「そうですね。我らが戦い尽くめだった事もそうですが、泳ぎに海に来たのは初めてですから」

「なら尚の事経験しておけ。これからも幾らでも有る事だ。

それに、シグナムは美人なんだから誇っても良いくらいだぞ？」

シグナムは一気に赤面する。

「な！！！御剣殿！私をからかうのはそんなに楽しいですか！」

「からかった覚えなどないが…事実だし」

「！！！！」

ゴッ！！！

「ぶほっ！」

鼻っ面にシグナムの鉄拳を受けて水中に沈む。見えていたにも拘らず、拳に顔が吸い寄せられる様に命中した…これが所謂お約束…か…

人中に的確に打ち込まれた一撃で、痛みのあまり悶絶。そこが海中だという事も忘れて。

溺れかけ、無我夢中で何かを掴んだ。海面に辿り着いた途端、息を吸い込む。

「ゴホッゴホッ。シグナム、今のはひどくな…い…か…」

…目を開いて見えた光景に、思考が停止する。
ＯＫ。確認だ。私の手の中には布の感触がある。
その布は三角の形を二つ並べて紐で繋がっている。いわゆるビキニの上部分だ。
これがここにあるという事。それは。

「…シグナム」
「何でしょうか。御剣殿」

冷たいシグナムの声。照りつける日差しもなんのその。
極低温の世界（コキュートス）がそこにはあった。

「…ごめんなさい」

素直に謝ってビキニを差し出す。

「……」

後ろを向いて無言で着け直すシグナム。
…その沈黙が怖い。いきなり切りかかって来たりしないだろうか…
そうビクビクしているとシグナムがこちらを向いた。

「御剣殿」

いよいよ処刑か？

「…なんだ？」

普段通りを心掛ける。ただし気分は十三階段（グリーンマイル）。

「その…どうでしたか？」

そう言って顔を赤らめるシグナム。怒りでは無い。羞恥からの赤面だ。

…予想ＧＵＹの事態。

しかし選択肢しだいではＤＥＡＤ　ＥＮＤ若しくはＮｉｃｅ　Ｂｏａｔもありうる状況！

「…どう…とは？」

ここは慎重に。こちらの勘違いという事も「私の胸です」無かった～！！！

どうしろってのさ。素直にいうのか？見てない事にするか？

否。後者はあり得ない。ガン見してしまった以上、見てないとは言えない！

「え…と…」

「なんでしょうか」

「綺麗だったよ」

事実だ。美巨乳って感じ。

「…そうですか。」

…釈放？若しくは執行猶予付き？

「…」

…気まずい。だれでもいい。助けてくれ。

「ありがとうございます」

「へ？あぁ、いえ。こちらこそ」

唐突な謝礼にトンチンカンな返事を返す。

「…怒ってないのか？」

「いえ。悪いのは殴った私ですから。むしろ謝るべきは私かと」

…ここで言及すると抉れるな。

「ならこれで手打ち。お互いその件には触れない方向で」

「わかりました」

「そうだな。私ははやての所にでも行くよ」

「でしたら私も。折角ですから競泳でもどうです？」

「いいぞ。では、よ～い」

「「ドン！」」

3．黒峰と原口を探す。

うん。無いな。

何が悲しくて男女混合で来てるのに男側に行かんとならんのか。

「ん？」

人だかりができている。何かのイベントらしい。

…大食い選手権。激辛カレーを一番多く食べられた方に賞金１０万円。

…どうでもいいな。大食いに興味は無いし。

あぁ。どうでもいい。たとえエントリー欄に黒峰と原口の名前が有ろうとも。

「いや、何立ち去ろうとしてんだよ」

…黒峰に見つかった。

仕方ないので、振り向いて相手をする。

「お前らこそ何やってんだ。海に来て、こんなものに出なくても良いだろうに」

「わかってないな。海だからこそだ。こういったイベントも海水浴の醍醐味だろう？」

「理解できん。お前らだけでやってろ。…そういや原口は？」

「あいつは控室。セットの裏に居る」

「そうか。まぁがんばれ。優勝したら賞金はお前の小遣いでいいから」

「まじでか！…なんでお前が俺達の財布の紐握ってんだよ。お前は

俺の母さんか」
「お前らが無駄遣いばかりするからだろう」

そう。私達の財政管理は私がしている。
資金源が私の『剣軍師団（けんぐんしだん）』だという事もあるが、黒峰達の無駄遣いが目立ったため、小遣い制にしたのだ。
ちなみに一カ月2万。

「まぁ、がんばれ。原口にも言っとけよ」
「おう。軽く優勝してやるよ」
「能力使用したら10万は山分けな」
「な！」
「じゃあな。昼食には戻れよ」

さて。釘も刺したし、はやてのとこにでも行くか。

夕刻　電車内

「はやてちゃん達、疲れて眠っちゃったみたいですね」

はやてとヴィータは寄り添って眠っている。まるで姉妹のようだ。

「そうだな。随分と遊んでいたし、仕様が無い事だ」

闇の書事件まで後3ヵ月。

それまではこの平穏な時を、はやて達が過ごせるように。

「何格好つけてんだか」

「うっさい、黙れ」

## 外伝・夏だ！海だ！海水浴だ！ポロリもあるよ！（後書き）

あとがき（という名の言い訳。）：外伝です！本編には全く絡みません！
もし絡んでも選択肢２だけはありえません。
素晴らしきかな主人公補正！

今回５万記念ということでしたが、実はすでに６万近くのＰＶを頂いております！
次回は１０万ＰＶで外伝ｏｒ裏話になると思われます。
どうぞ今後ともよろしくお願いします！

# 3章－2　世界の修正

海鳴市内　廃ビル

「さて、出来るだけなのは達管理局と関わらないように来たわけだが、結局関わったな」
「今までの魔法生物狩りも無駄か」
「無駄ではないだろ。闇の書のページは溜まって行ったんだし」
「それはそうだがな。
しかし、無理やり話ぶった切って逃げたのは、逆にまずかったか？」
「一番まずいのは宝具を見られたことじゃね？」

それに関してはデバイスと勘違いしてくれる事を願うばかりだが。
ロストロギアと看做されるとな…本格的に管理局が出張ってきそうだな。

「もう来るものと考えといた方がいいだろ」
「因果なものだな」

やれやれ。世界の修正か。

Ｓｉｄｅアースラ

「今回の件は、各世界で報告されていた魔法生物襲撃事件と同一に考えていいだろう」
「クロノくん、なんで？今回はなのはちゃんが襲われただけで、魔

法生物はいなかったよ？」
「いままで襲われた魔法生物達は、皆リンカーコアの衰弱が見られた。
彼らの狙いはなのはのリンカーコアだったんだろう」
「リンカーコアを？なんで？」
「闇の書だ」
「闇の書！？第一級指定ロストロギアの！？」
「あぁ。僕の師匠に当たる人が助言してくれた」
「あぁ、アリアとロッテか。話したの？」
「いや。魔法生物がリンカーコアを奪われた事件が頻発していると聞いて連絡してくれた」
「ふ～ん。弟子想いだねぇ」
「分からないのは、高レベルの魔導師を襲い、撃破しておきながら、魔力蒐集を行わなかった事。
過去の闇の書の行動を考えると信じがたい事例だ」
「あの御剣って人が止めたんだったね。何か考えがあるのかな？」
「それも含めて今度会ったら聞くとしよう…気は進まないが、例え叩き伏せても、だ」

アースラ内　デバイスルーム

ヴィータとの交戦で傷ついたレイジングハートの修理が行われていた。
が、コンソールに表示されているのはエラーを示すサイン。
「ＣＶＫ７９２？」
「そうなの。レイジングハートが要求してるんだけど…これって…」
「ベルカ式…カートリッジ…システム？」
「とにかく、なのはちゃんにも聞いてみないと」

「え？レイジングハートが？」
「そうなの。どうも負けた事が悔しかったらしくて」
「分かりました。お願いします。私も、お話聞かせてもらうために必要だと思いますし」
「Ｓｉｒ．」
「え？バルディッシュ？」
「Ｐｌｅａｓｅ．」
「…うん。マリーさん、バルディッシュもお願いしていいですか？」
「え？…うん。分かった。一週間以内には済ませるわ」

アースラ　指令所

「そう。闇の書が」
「はい。１１年振りになりますね。…父さんが死んでから一度も姿を現さなかったのに…
なぜ今になって…」
「それは闇の書にしかわからないわ。
そうそう、グレアム提督の計らいで、私達がこの件の担当になったわ」
「提督が？…そうですか。しかしアースラは整備中ですが？」
「なのはさんたちの世界に常駐しての活動になるわ。
一連の事件の中心はなのはさんの世界らしいから。
事実、一連の事件は全て、なのはさんの世界から個人転送で行ける範囲に限定されているわ」
「あの辺は本局からかなり掛かりますから。…それも提督が？」
「えぇ。…提督はあの人の最後を看取った人ですからね。
未だにそれを気にしていらっるようだけど」

海鳴市内　八神家

「ヴィータ、なぜ御剣殿の忠告を無視して魔導師を襲った？」
「それに関しては悪かったと思ってるよ。あたしのせいで管理局に気づかれたんだし。
でも、蒐集が全然進んでないのも事実だろ？」
「進んでないと言っても半分以上は過ぎている。
御剣殿の見立てでは年内までに完成させれば間に合う」
「その見立ても本当に正しいのか分かんねぇだろ。
早く完成させる事に越した事は無ぇんだし」
「それはそうだが、それで主を罪人とするわけにはいかん」
「シグナムー、ヴィーター。お風呂上がったで～」
「はやてが出てきたな」
「あぁ。この件はまた御剣殿も交えて話し合うとしよう」

深夜　海鳴市内　某ビル屋上

扉が開いてヴィータが現れた。シグナムが気づいて口を開く。

「来たか」
「あぁ」
「全員そろったな。
管理局も本腰を入れ始めるだろう。出来るだけ遠くの世界へ行くべきだと私は思う」
「なるほど。了解した。御剣殿」
「ヴィータ」
「なんだよ。御剣」

「熱くなるなとは言わない。だが冷静でいろ。頭はクールに、心はホットにだ」
「言われなくても分かってるっての。あたしは騎士だ」
「ならいい。さて、今日もガンガン行くか。原口、転送補正よろしく。黒峰、お前はいつも通りでいい」
「なんか引っかかる言い方だな」
「他意はない。行くぞ」

世界は変革を許さない。
異邦人によって歪められた歴史は修正される。
世界の抑止力によって。

「介入しても大筋が変わらないなら、いっそのことやりたい放題やるって手もあるがな」
「なのはの魔王化を食い止めるとか。題して、なのは補完計画」
「なのは一人だけ生き残って赤い海の世界で『気持ち悪い…』。完璧だな」

君が何を言っているのか分からないよ。

## 3章－2　世界の修正（後書き）

あとがき（という名の言い訳）：3章の二話になります。
御剣達がどれだけ介入しようと、世界は元に戻ろうとします。
それと折り合いをつけるか、真っ向から反するか、今後にご期待下さい。
ではまた次回。

## 3章ー3　新たなる力

海鳴市内　高町家

「ねぇ、なのははあの人たちの事、どう思う？」
「あの人たちって、あの時の？」
「うん」
「え、と。私は襲いかかられてすぐ倒されちゃったから、よく、わかんなかったんだ」
「私もそれほど長い時間いなかったし、駆けつけてすぐにあの人たちは行っちゃって、全然お話できてないけど、そんなに悪い人たちじゃないと思った。
うまく言えないけど、悪意みたいなものを全然感じなかったんだ」
「そっか。闇の書の完成を目指してる理由とか、教えてもらえたらいいんだけど。
断られちゃったもんね」
「強い意志で自分を固めちゃうと、周りの言葉ってなかなか入ってこないから。
私も…そうだったしね。でも、言葉をかけるのは、思いを伝えるのは、絶対無駄じゃないよ。
言葉を伝えるのに、戦って勝つ事が必要なら、それなら、迷わずに戦える気がするんだ。
だから…強くなるよ。思いを貫くために」
「そうだね。私ももっと強くなる。一緒に頑張ろう。フェイトちゃん」
「うん。がんばろう。なのは」

某次元世界

「今だ！ヴィータ！」

赤黒く染まった腕で竜を押さえつけた黒峰が叫んだ。
竜の体のあちこちからは剣の様な骨が突き出ており、その先端から魔力による砲撃を放ってくる。
それらをザフィーラがシールドで防ぎつつ、黒峰と共に竜を押さえつける。

「でぇやぁぁぁぁ！！！」

ヴィータがアイゼンを竜の頭部に叩きつけると、しばらく棒立ちになった後、竜は力尽きたように倒れた。

「闇の書、蒐集」
「Ｓａｍｍｌｕｎｇ.」

ザフィーラがそう言うと竜の体内から光る球が現れ、闇の書に吸い込まれていく。
光球の輝きが薄れると共に、ページには文字が綴られ、ページが捲られて行く。

「今ので…3ページか」
「くっそう。でっけぇ図体して、リンカーコアの質は低いんだよな。割に合わないっての」

ヴィータがぼやく。

「御剣が倒したってのは１１ページだったらしいけど、そんな大物

滅多にいないしな」
「ぼやいてたって仕方が無いか。次行くよ。ザフィーラ、黒峰」
「ヴィータ、休まなくて大丈夫か？」
「平気だよ。あたしだって騎士だ。この程度の戦闘で疲れるほど柔じゃないよ」
「わかった」
「じゃあ行くか。西の方に何かでかいのがいる。そこへ行こう」
「おう」

12月9日　強装結界内

十名の管理局員がヴィータ、ザフィーラ、黒峰を囲んでいる。

「管理局か」
「でもチャラいよこいつら。返り撃ちだ！」
「問題は結界だな。かなり固そうだぞ」

しかし、管理局員達は一斉に散開して行く。

「っ！？」
「上だ！」

頭上を見上げる3人。
そこには大量の魔力刃が配置されていた。

「スティンガーブレイド！エクスキューションシフト！撃ぇ！」

何者かの号令と共に、頭上より迫りくる無数の魔力刃。

「下がれ、ヴィータ。迎え撃つぜ、ザフィーラ！！」
「おぉ！」

黒峰とザフィーラが手を前に突き出すと、粒子が渦巻いたようなシールドが形成される。
着弾と同時に魔力刃が爆ぜ、魔力刃の放ち手、クロノの視界が遮られる。

「少しは…通ったか？」

煙が晴れていく。
そこには無傷のザフィーラとヴィータが居た。

「一人いない！？っ！上か！」

黒峰は粒子に包まれ２ｍ程に大きくなった腕をクロノに振り下ろす。

「でやぁぁぁぁぁぁ！」

黒峰の攻撃をクロノがＳ２Ｕでいなす。しかし、大きく弾かれてしまい、体勢を崩してしまった。

「くっ何て力だ…」
「（クロノくん！）」
「（エイミィか。どうした？）」
「（武装局員、配置終了。それと強力な助っ人呼んでおいたよ！）」
「助っ人？まさか！？」

クロノが眼下を見下ろす。

そこには、なのはとフェイトが並んで立っていた。

「レイジングハート！」

「バルディッシュ！」

「「セーット、アーップ！！！」」

レイジングハートとバルディッシュが交互に認証を開始する。

「Order of the setup was accepted.」

「Operating check of the new system has started.」

「Exchange parts are in good condition, completely cleared from the NEURO－DYNA－IDENT alpha zero one to beta eight six five.」

「The deformation mechanism confirmation is in good condition.」

「Main system, start up.」

「Haken form deformation preparation: the battle with the maximum performance is always possible.」

「An accel and a buster: the modes switching became possible.

The percentage of synchronicity, ninety, are maintained.」

「Condition, all green. Get set.

「」
「Ｓｔａｎｄｂｙ，　ｒｅａｄｙ.」
「レイジングハート・エクセリオン！」
「バルディッシュ・アサルト！」
「「Ｄｒｉｖｅ　ｉｇｎｉｔｉｏｎ.」」

「あいつらのデバイス！あれってまさか！？」
「Ａｓｓａｕｌｔ　ｆｏｒｍ，　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　ｓｅｔ.」
「Ａｃｃｅｌ　ｍｏｄｅ，　ｓｔａｎｄｂｙ，　ｒｅａｄｙ.」

## 3章－3　新たなる力（後書き）

あとがき（という名の言い訳）：3章3話になります。
本文中の会話の大半は本編中の耳コピなので、間違っていたらご指摘お願いします。
なお、前話ラストのなのは補完計画の件が、他作品でも使われていたというご指摘がございました。
作者はその作品を呼んだ事が無いのでどのような内容か知らないのですが、ネタが被ってしまった事はお詫び申し上げます。
こんな作者でよろしければ今後ともよろしくお願いします。
では、また次話で。

# 3章－4　力の解放

海鳴市　上空

「強層型の捕獲結界か」
「ヴィータ達は閉じ込められた様ですね」
「さて。では突っ込むか」
「そうですね。では」

そう言ってシグナムはレヴァンティンを構える。

「待て、カートリッジがもったいない。私が穴を開ける」
「わかりました」

突進力、か。なら。

「出ろ。『神威の車輪（ゴルディアス・ホイール）』。乗れ、シグナム」
「これは…こんな物まで召喚出来るとは…」
「行くぞ。しっかり掴まっていろ。
駆けよ！ゼウスの仔らよ！『遥かなる蹂躙制覇（ヴィア・エクスプグナティオ）』！！！」
「なぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？」

シグナムの叫びが尾を引いて行く。

結界内部

「私達は、貴方達と戦いに来たわけじゃない。まずは話を聞かせて？」
「闇の書の完成を目指してる理由を！」
「あのさぁ、ベルカの諺にこういうのがあんだよ。『和平の使者なら槍は持たない』」
「「？」」
「話し合いをしようってのに武器を持ってくる奴がいるか馬鹿って意味だよ。馬ー鹿」
「な！いきなり有無を言わさず襲いかかって来た子がそれを言う！？」
「それにそれは諺ではなく、小話の落ちだ」
「ヴィータ…」
「うっせぇ！いんだよ細かい事は」
「こまけぇこたぁいいんだよ！」

場が白けきっていたその時、結界が割れ、剛雷が轟いた。

「Ａｒｌａｌａｌａｌａｌａｉ！！！」
「「「「！？」」」」」
「御剣か」
「御剣来た。これで勝つる！」
「なんだそりゃ」
「様式美。お約束ともいう。でもま、これで負けは無くなったな」

Ｓｉｄｅ御剣

「み、御剣殿。事前に一言言って欲しかったのですが…」
「言っただろう。行くぞ、と」

御者台から降り、周りを見渡す。

「ふん。どいつもこいつも雁首そろえてまんまと罠に嵌るとはな」

「うるせぇ。ちょっと油断しただけだ」

ヴィータが口を尖らせて言う。

「いいから、とっととここを出るぞ」

「とっとこ？公太郎か？」

「ふざけてる余裕はない。さっさと「待ってもらおうか」ん？」

「時空管理局執務管、クロノ・ハラオウンだ。話を聞かせてもらうぞ」

「だが断る」

「何？」

「この私の最も好きな事の一つは、絶対にＹＥＳと言うと思っている相手に、ＮＯと言ってやる事だ」

「くっ！ならば力付くでも聞かせてもらう！スティンガーレイ！」

「物騒だな。装填（セット）『刺し穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルグ）』、降霊（ロード）」

クロノの放った光線を矢除けの加護でかわす。

「欠伸が出るぜ」

「な！」

「隙有りぃ！」

容易くかわされた事に驚いたのか、怯んだクロノに蹴りをかまして吹き飛ばす。

「排莢（リリース）。さて、この辛気臭い場所を出るか」

「ま、待って！話を聞いて！」

「嫌なこった。以前はともかく、この場で先に仕掛けてきたのはそっちだろう」
「そ、それは…」
「ふん。下がれよ、全員。巻き込まれたくなければな。
起きろ、『乖離剣エア』」

背後に手を伸ばし、一振りの剣を抜き出す。
顕れたのは刀身の部分が3つの円筒の重なった形の剣。その表面には楔に似た文様が刻まれていた。
その円筒が唸りを上げて回転を始める。
回転は加速を続け、遠心力を加え、剣の威力をさらに高めていた。
回転した接続部分から漏れ出してくる膨大な魔力。
円筒は回転数を高め、人知を超えた烈風を巻き起こす。
極限を超えて高まった風圧は、世界をも切断する刃となって、乖離剣から噴出していく。

「『天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）』！！！」

そして世界が割れた。

「そんな！強層結界を一撃で全壊させた！？」
「結界貫通じゃない？いや、結界機能の破壊でも無い。何だ、今のは！？」
「（クロノくん！今、小規模だけど次元断層が！たぶん今の攻撃だよ！）」
「何！！？」

淫獣と戻ってきたクロノが何か騒いでいる。

「さて、管理局の方々には悪いが、今回はこれで帰らせてもらうよ。
手加減したとはいえ、手の内の一部も晒してしまった事だしな」
「待て！お前たちは闇の書がどういうものか分かって蒐集を行っているのか！？」
「わかっているさ。このまま蒐集しても、闇の書は暴走してしまう事も」
「何！？それが分かっていて何故！？」
「何故だろうな。（ヴィータ）」
「（おう。全員、目と耳を塞げよ。）アイゼン！」
「Ｅｉｓｅｎｇｅｈｅｕｌ．」

ヴィータが手に持った光球をアイゼンで打つ。
その瞬間、周囲を爆音と閃光が包んだ。

「引くぞ」
「あぁ」

音が止み、視界が戻った時には全員その場から消えていた。
遠くに転送用の魔方陣だろう光が見える。

「Ｍａｓｔｅｒ．」
「…うん。レイジングハート！バスターモード！
ディバインバスター・エクステンション！」
「Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．」

ガシャコッ　ガシャコッ

「ディバイィィィィン・・・・バスターーーーーーーーー！！！！！」

「おいおい、こっちに撃ってくるぞ」
「やれやれ。ここは任せて先に行け」
「死亡フラグ死亡フラグ」
「うっさい。良いから行け」

やれやれ。今晩は大盤振る舞いだな。ま、もう隠す必要もないか。
管理局は結局出張ってきた様だし。

「『燭天覆う七つの円環（ロー・アイアス）』」

右手を前方に突き出す。
そして、真名と共に顕れる光り輝く7枚の花弁。

ガガガガガガガガガガガガッ！

「おぉ、流石。1枚割ったか」

激突を終えるとそこには6枚になったアイアスがあった。
転送は完了したのか、私を残して他にはもう誰もいない。

「でやぁぁぁぁ！」

頭上から踊りかかるフェイト。しかし。

「電撃作戦（ブリッツ）か。だが甘い。『万邪退け山羊革の盾（アイギス）』」

アイアスを仕舞い、新たな宝具を呼び出す。
そして顕れる一枚の盾。一見何の変哲もない盾だ。

しかし、その中央には禍々しい怪物の首が付いている。

「な！？」

そしてアイギスの盾が発動する。

フェイトからの攻撃をまるで盾自身が意思を持つかのように防いだのだ。

それだけではない。

フェイトの体にはまるで自身が石になって行くかのような違和感があった。

「くっ！」

全速で離脱するフェイト。

「クロノ！下がって！何かおかしい！」

後続のクロノはその声を受けて急停止する。

「先ほどの剣と言い、今の盾、貴様！それはロストロギアか！」

「失われた遺産（ロストロギア）といえばそうだが」

「くっ！次元犯罪者とはな…神妙にしろ！３対１だ。逃げ場はない！」

「犯罪者とはひどい言われようだ。管理局ってのは動物愛護団体か何かか？」

「ロストロギアの不法所持、さらには使用して次元断層を引き起こした！

逮捕には十分過ぎる！」

「元の持ち主から借りた物を不法所持と言われてもね。

次元断層云々はともかくとしても、捕まる気は更々無いよ」

「借りた?どういう事だ!答えろ!
逃げようにも先ほどの様な手はもう通じないぞ!どうするつもりだ!」
「敢えて2番目の質問から答えるならば、君達全員を倒してだ。
1番目については黙秘しよう」
「何ぃ!もう手加減はしない!ブレイズキャノン!」

しかし、攻撃の全てはアイギスに防がれ弾かれる。

「…君たちでは絶対に私に勝てない。先にそれを言っておこう」

そう言って私は一冊の本を取り出す。
そして瞑目し、朗々と歌い上げる様に詠唱を開始した。

「万物の調停者にして古きもの　全てを従えし烈王の王　風の中心に座す　偉大なる御名において
万物の調停者のまたものたる　竜胆の我は　勅命により魔術を使役する
完成せよ　『シオネの円環』」

## 3章－4　力の解放（後書き）

あとがき（という名の言い訳）：3章4話です。
御剣の切り札その1、開帳です。
何人シオネの円環って分かるんだろ…
ではまた次話で。

『万邪退け（アイギス）し山羊革の盾』：対人宝具ランクA＋＋　レンジ1
最大補足1

アテナ女神の持つ盾で、ペルセウスがメドゥーサの首をとりアテナに献上し、アテナはこのアイギスの真中につけたという。
アイギスは元はゼウスの乳母のヤギの皮を使用した盾で、その山羊の皮の加護により、破邪の力を持つと言われる。
真名解放すれば、ありとあらゆる攻撃を自動で防ぐ。
また、メデューサの首によって攻撃してきた者へ石化効果を与える。

# 3章－5　解放される力

海鳴市外　上空

呪文の完成とともに御剣の周囲にはリング形の魔法陣が展開される。

「廻れ」

御剣の命令を受けて、回転を始める魔法陣。

「何だあれは…それに、僕達が勝てないだと？」

「考えてる暇はないよ！ディバインバスター！」

「Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ．」

桜色の光が御剣に襲いかかる。

しかし、アイギスに防がれるまでも無く、ディバインバスターはかき消えた。

「え！？」

「ＡＭＦか！？なら。ヴァリアブルシュート！」

「無駄無駄」

御剣が言うように、対ＡＭＦ用魔法であるヴァリアブルシュートもかき消えてしまう。

「何だ？あれは？ＡＭＦとは違う魔法無効化魔法？」

御剣は手にした本のページを捲って行く。

「さて、行くぞ。精々耐えきれ。
laguz（ラグーズ）？sa（イーサ）hagalaz（ハガラーズ）．契約に従い（ト・シュンボライオン）我に従え（ディアーコネートー・モイ）氷の女王（スタリネー・バシレイア）
来れ（エピゲネーテータイ）とこしえの（オーニオン）やみ！（エレボス）えいえんのひょうが（ハイオーニエ・クリュスタレ）！！
全ての（パーサイス）命ある者に（ゾーサイス）等しき死を（トン・イソン・タナトン）其は（ホス）安らぎ也（アタラクシア）
『おわるせかい（コズミケー・カタストロフェー）』」

「ひょ、氷結系魔法！？くっ！」

「クロノくん！？レイジングハート！カートリッジロード！」

「Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．」

ガシャコッ　ガシャコッ

「Ｗｉｄｅ　Ａｒｅａ　Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ．」

「クロノくん、フェイトちゃん！」

「あぁ！スフィアプロテクション！」

「うん。バルディッシュ、カートリッジロード！」

「Ｙｅｓ，ｓｉｒ．Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．」

バシュン　バシュン

「Ｄｅｆｅｎｓｏｒ　Ｐｌｕｓ．」

「なのは、フェイト！バリアジャケットの出力を上げろ！」

…暫く後、一面に吹雪が舞っている。

僅かな湿気さえも凍り付いてしまったのか、周囲の空気は乾燥しきっていた。

「さて、生きてるかな？…まぁいいか。私も離脱するとしよう」
「させないよ！」
「Ｒｅｓｔｒｉｃｔ　Ｌｏｃｋ．」
光の輪が御剣を覆う。しかしやはり何事も無かったかのようにかき消えてしまう。
「ふむ。直撃で無かったとは言え、ほぼ絶対零度、１５０フィート四方の広範囲完全凍結殲滅呪文を受けてなお、反撃してくるとはな。三本の矢の喩えでもあるまいし」
なのは達が姿を現す。しかし、髪やバリアジャケットの端は凍りついている。
「なんとか軽減はできたが…何て魔法だ…！」
「クロノ、ここで一旦引こう。向こうも積極的には攻撃して来てない」
「しかし！あの男の危険度は高すぎる！ここで逃がせば「クロノ！」っ！」
「ここで引こう。私もなのはも、クロノだって、もう限界に近い。そうでしょ？」
「だが…くそぅ…そこの！御剣とか言ったか！」
「人の名前を軽々しく呼んでくれる。何か用か？」
「お前達の目的は何だ！なぜ闇の書の完成を目指しておきながら、なのはからリンカーコアを奪わなかった！」
「２番目の質問から答えるならば、お前ら管理局に事が露見するからだったのだが。
事ここに至っては魔導師からの蒐集も視野に入れるとしよう。その方が効率も良いからな」

「何ぃ！？」

クロノは今にも飛びかからんばかりの形相で御剣を睨む。

「と言いたいところだが。このまま魔法生物からの蒐集でも十分事足りる。

1番目の質問に関しては、時が来れば伝えるとだけ言っておこう」

「どういう事？」

「なのは嬢は冷静だな。そこの執務官とやらも見習え。

何。いずれ君たちにも役に立って貰うという事さ」

「僕達がお前らに加担する事等無い！！！」

「クロノ！」

「もう話は終わりかな？ではこれで引かせてもらう。

また会おう、魔導師諸君。『天空翔けし黄金の船（ヴィマーナ）』」

虚空から顕れた金色に輝く船に御剣が飛び乗ると、ヴィマーナは目にもとまらぬ速さで飛び去った。

「エイミィ！捕捉は！？」

「（駄目。信じらんないくらい速い上に、途中で消えちゃった！）」

「…そうか。他の連中は？」

「（それも駄目。その空域一体に強力なジャミングが掛かってるみたい。）」

「クロノ、一旦本部に戻ろう？」

「そうだな。今後の対策も考えておかなくては。

たった一人に僕達が手も足も出無かった事、数々のロストロギアらしき物。

魔法を一切無効化する魔法陣、更には広域凍結魔法。

他の全員がこれらを使えるとなると…時空管理局全体に関わる事

件になるかもしれない」

## 3章－5　解放される力（後書き）

あとがき（という名の言い訳）：3章5話です。
なんだか読む人を選ぶ感が満載になってまいりました。
ではまた次話で。

『天空翔けし黄金の船（ヴィマーナ）』：対城宝具ランクA＋＋　レンジ1～999
最大捕捉1～999

古代インド最古の古典「リグ・ヴェーダ」叙事詩（ヴェーダの各スムリティ、特に『ラーマーヤナ』など）および叙事詩「マハーバーラタ」（バラータ族の戦争叙事詩の意味）に登場する、自在に空を飛ぶ乗り物。
ランクは搭載された兵器『神の炎（アグネア）』によるもの。
爆発の瞬間が「太陽を一万個集めたほど明るく煙と火が絡み合った光り輝く柱がそそりたった」と表現されており、また「死の杖のように恐るべき槍。その寸法は3キューブと6フィート。授けられたその力は、千の眼を持つインドラの雷（いかづち）、生けるもの全てを破壊した」と記されてある。
早い話が核兵器である。

## 外伝　１０万ＰＶ記念　シャマル（へ）のお料理教室（前書き）

ちなみに作者の今晩の夕食はハンバーグです。
書いてたら食べたくなりました。

# 外伝　１０万ＰＶ記念　シャマル（へ）のお料理教室

海鳴市内　八神家　キッチン

テレレッテテテテ　テレレッテテテテ　テレレッテテテテテッテッテ

軽快な音楽流れる中、台所に３人の人影が有る。
はやて、シャマル、御剣の３人だった。

皆さんおはこんばんにちは。御剣です。
先日、八神家で夕食に呼ばれた際、酸っぱい味噌汁を頂きました。
ええぇ。シャマルです。
このままではまずい（二重の意味で）ので緊急お料理教室の開幕と相成りました。

「今日作るのはヴィータの要望によりハンバーグだ」
「これならシャマルもできるんと違う？」
「が、がんばります！」

まずは材料。
（５人分）
●合いびき肉／５００ｇ　●玉ねぎ／大１と４分の１個　●卵／１個　●パン粉／大さじ４　●牛乳／大さじ４
●マ○クック、ブラックペッパーミックス／少々　●サラダ油／大さじ１　●赤ワイン

●ソース（赤ワイン1／4カップ、醤油大さじ1、みりん大さじ1、ブラックペッパーミックス適宜）

「まずは玉ねぎを細かくみじん切りにし、フライパンにサラダ油を熱して炒める。
　たまねぎは、加熱することによって辛味が甘みに変わるので、多めに入れると甘味がでて美味しくなる。
　フライパンにバター、もしくは油を敷き弱火で炒めるのがコツだが、電子レンジ５００Ｗで1分加熱した後フライパンで炒めても甘味がでる。
　また、時間がない時は　電子レンジ５００Ｗで2分くらい加熱をした後、たまねぎが透き通っているかを確認しながら加熱を続ける。
　玉ねぎの色が変わり、充分に柔らかくなったら火からおろしてさましておく」
「御剣さん手際いいですね」
「ほんまやな～」
「慣れだ慣れ。一人暮らししてりゃ嫌でも料理出来るようになるさ」

「次はボールに合いびき肉を入れ、あらかじめよく練っておく。
次に卵、牛乳に浸したパン粉、冷ましておいた玉ねぎを加えまんべんなくよく混ぜ合わせる。」

「粘土みたいで楽しいですね」
「まぁ、子どもが手伝ったりするからな」
「だからと言って食べ物で遊んだらあかんけどな」

「マ○クック、ブラックペッパーミックスを振り、さらに混ぜる。
粘りが出るまで充分に混ぜる」

「既製品だけどいいんですか？こういうのってこう…なんか匠の技

的な」
「いいんだよ。既製品てのは謂わばプロの技なんだから」

「混ぜ合わせたたねを5等分し、両方の手に交互にたたきつけ空気を抜く。
小判型に形成し真ん中を少しくぼませておく。」

「ここでちゃんと空気を抜かないと、焼成の時に割れるからな」
「「は〜い」」

「フライパンにサラダ油を熱してハンバークを入れ強火で両面を焼く。
火を弱めて中までじっくり火を通す。」

「あぁ、良い匂いや」
「まずは強火で焼いて周りを固めると、肉汁が閉じ込められて美味しくなる。
それと、私は弱火で焼く時に赤ワインを振って匂いを付ける」
「私もそれ出来ますか？」
「シャマルはまずレシピ通りに作る事からな」
「うぅ…」

「焼きあがったらハンバーグを取り出し、そのあとのフライパンに赤ワイン、しょうゆ、みりん、ブラックペッパーミックスを入れ一煮立ちさせる。
この時、きちんとアルコールは飛ばすようにな。
ただしやりすぎると匂いが飛ぶから気を付けるように。
そして付け合せの野菜、ハンバーグをお皿に盛り付け、ソースをかける。で、出来上がりだ」

「「「「「いただきます」」」」」
「あ～む。ん！美味しい！」
「ほんまやな～やっぱ御剣さんお嫁に来ません？」
「男は婿だろう。どっちにしろ１０年速い。シャマル、作り方は分かったか？」
「はい。きちんとメモしたので、大丈夫です」
「変なアレンジしなきゃ大丈夫だろうから、そこだけ見張っておけ」
「了解した。御剣殿」
「御剣さんもシグナムもひど～い」

談笑しながらの夕食。
穏やかな一時が流れていく。

海鳴市内　廃ビル

「で、俺らはチンした飯か。何という差別」
「これが所謂格差社会か。絶望した！資本主義の豚共めぇ～！！！」
「なら自分たちで何か買うなり作るなりすればいいだろう」
「その場合経費で落ちるか？」
「それは駄目」
「「ケチ」」

## 外伝　１０万ＰＶ記念　シャマル（へ）のお料理教室（後書き）

あとがき（という名の言い訳）：本日２度目の更新です。
御蔭さまで１０万ＰＶ突破いたしました。
毎日更新とはいえ、半月でここまで来られたのは一重にご覧になって下さった皆様の御蔭です。
次回は１５万、若しくは２０万ＰＶで番外、乃至外伝になります。

# 3章－6　対策と決意

時空管理局　本局　ギル・グレアム提督執務室

「そうか。御苦労。一度戻って来なさい」
「はい。父さま」
「うむ」

壮年の男性、ギル・グレアムは眉間を挟み、瞑目する。

「闇の書の覚醒…『守護騎士（ヴォルケンリッター）』の出現。主の容体悪化による蒐集開始。
ここまでは計画通りだった。しかし…」

何故か守護騎士たちは魔導師からの蒐集を行わず、魔法生物からのみ蒐集している。
その原因は恐らく例の青年たちだろう。殊更に、そのリーダー格だろう御剣なる人物。
その指示を受けて守護騎士たちは活動していると見ていいだろう。

「本来主にしか従わぬ守護騎士が何故…」

問題はそれだけでは無い。
監視に当たらせたリーゼアリアの報告によれば、彼は多種多様なロストロギアを使役し、魔法を無効化し、更にはデュランダルを使用した、エターナルコフィンに勝るとも劣らぬ広域殲滅氷結魔法まで使用したと言う。

規格外にも程がある。既にクロノからは増援と次元航行部隊の出動要請もあった。
曰く、管理局の障害となりうる存在だと。

海鳴市　八神家

「今日は鱈鍋やで～」
「良かったのか？俺達まで呼ばれて」
「構しませんよ。鍋は皆で食べてこそや。すずかちゃんも来る筈やし」
「そのうち御剣も来るよ。連絡はしといたし。「ピンポーン」ほら、来た」
「あ、シャマル、お出迎えして。私はお鍋見とくから」
「はーい」

「こんばんわ～」
「こんばんわ」
「あれ？御剣さん、すずかちゃんと一緒に来たんですか？」
「いや。玄関先で会ったんだ」
「おじゃまします。はやてちゃん」

海鳴市内　ハラオウン家

アースラスタッフが深刻な顔で一堂に会している。
「さて、今回の闇の書事件だが、想定以上に難しい案件になってきた」
「御剣さんもだけど、他の人も同じくらい強いのかな？」

「分からない。だが、彼だけがあの場に残った事を考えれば、彼が一番の実力者なのかもしれない」
「うん。あのロストロギアもだけど、あの魔法も凄く強力だった。私達が全力で防いでも無傷とはいかなかったもん」
「あれは恐らく氷結属性の広域攻撃魔法だ。フェイトのサンダーレイジや僕のスティンガーブレイド・エクスキューションシフトとは桁違いだけどね。ランクにすればオーバーSだろう」
「それって勝ち目無いんじゃ！？ねぇ、クロノくん。艦隊司令部は何て？」
「映像も添付して申請したんだが、駄目だった。出す出さないの問題じゃなく、出られる艦隊が無いらしい」
「ロストロギアの事を別にしても…あの魔法陣の事も有るしね」
「…なのはのディバインバスターにレストリクトロック、僕のヴァリアブルシュート、その両方が無効化された。あれはいったい…」
「その事なんだけどクロノくん、これ見て」

一同の眼前に投影モニターが表示される。
そこには、様々な数値や円グラフが表示されていた。

「これは…あの空域の魔力素量と魔力量？」
「うん。御剣さんがあの魔法陣を展開してから、急激に減ってるんだ。
もしかすると、あれは魔力素や魔力を吸収するのかもしれない。御剣さんはなぜか影響を受けていないようだったけどね」
「そうなると厄介だな…こっちの攻撃は通らずに、向こうから強力な魔法を一方的に受ける事になる」
「…ねぇ、クロノ、あの魔法陣は魔力を吸収するんだよね？　だったらフェイトの電撃魔法なら通じるんじゃないかな？」

今まで考え込んでいたユーノが口を開く。対抗策を考えていたらしい。

「サンダーレイジか。だが、あれは時間がかかるだろう。その時間稼ぎをどうするか…」

「あたしが格闘仕掛けりゃいいんじゃない？」

同じように黙っていたアルフが口を開く。

「いや、僕のスティンガーレイをあっさりかわした事からも、格闘能力もそれなりだろう。

くっ…何だこれは。本当に手も足も出無いじゃないか」

「それに、またあの人が1人で残るとも限らないしね。他の守護騎士達もいるんだし。」

「向こうから接触してくるまで、手を拱いて見ているしかないのか…」

「そんなこと無いよ！」

今まで黙りこくっていたなのはが口を開いた。

その目には堅い意志と決意が見える。

「なのは…」

「無駄なんかじゃない！私だけでも何回でもお話聞かせてもらう！」

「何を意固地になっているんだ、なのは。

分かっているだろう。もう僕達の手に負える相手じゃ無くなってる」

「だからって諦めたくないの！決めたんだ！

…ヴィータちゃんが私に攻撃してきた時必死だった。何か、何か理由があるんだよ。

私はその力になりたい。こんな事しなくてもいい道を、もっと皆が幸せになれる方法を探したいの」
「…わかったよ。なのは。クロノ、あの人たちが出たら私も出る」
「君たちは…分かった。ただ、出来るだけ戦闘は避けろ」
「うん。ありがとう、クロノくん」
「君はこうと決めたら絶対に曲げないだろう。僕は精々その後始末をするさ」

海鳴市内　ビル屋上

ハラオウン家近くのビルの屋上に、御剣と黒峰、それに原口が立っている。
視線は揃ってマンションの一室に向けられていた。

「はぁ…困ったもんだ」
「切り札その１の使用、牽制目的だったんだが、効果は無しか」
「寧ろ火に油？ますますやる気っぽいぜ」
「次も出てくる、か。二手に分かれるしかないのが痛いな」
「ヴォルケンズと俺達の二人組でないと、俺達が闇の書を呼べないからな。
原口も戦闘向きじゃないし…シャマルは、はやてを誤魔化して貰う為に残って貰う事が殆どだ」
「行こうと思えば行けるけど…時間はかかるね」
「現在のページ数は？」
「捕まる前の蒐集で５９３ページ。あと少しだ」
「仕方ない。そろそろはやてに伝えるか。闇の書の事」
「そうだな。もう容体も悪化し始める頃だ。頃合いかもな」

幾多の思惑の元、闇の書は完成に近づく。果たして最後に待ちう

ける物は…

「というか御剣、なのはの事、どうする気？」

「なのはに勝っちゃったら駄目だろ。復活→強化→再戦フラグ立つに決まってんじゃん」

「うっさい。まさか負けるわけにも行かなかっただろうが」

## 3章－6　対策と決意（後書き）

あとがき（という名の言い訳）：3章6話です。
今回御剣が妙に過大評価されていますが、どちらかと言えば他の二人の方が手がつけられません。
切り札その1の全容はまた後日明かされます。
最終決戦辺りで。
ではまた次話で。

## 3章ー7　君の名

12月10日　朝　海鳴市　八神家　はやて寝室

「ふ…くぁぁぁぁふ…」

もぞもぞと布団が動き、はやてが目覚める。
かわいらしい欠伸と共に、伸びをするはやて。

「なんやろう…何か変な夢見たような…」

隣ではヴィータが眠っている。…一向に起きる気配はない。

「せや、今日はお昼から御剣さん達が来てくれるんやった」

最近では離れがちだった家族のみんなも、今日は家に居ると言っていた。
今日の昼食は何にしようかと心躍らせつつ一階に向かう。

「お邪魔します」
「は～い。上がって下さい」

昼になって、御剣達がやって来た。
にこやかに挨拶する裏で、思念通信では剣呑な内容が交わされていた。

「こんにちは。（黒峰、尾行の類は？）」
「こんにちは。（無い。原口、結界展開）」
「こんにちは。（了解。人除けと認識阻害でいいね）」

そして食後。居間に全員が集まり、顔を突き合わせている。

「で、改まってどうしたん？皆神妙な顔して」

はやての言葉に守護騎士達は顔を見合わせると、一斉に頭を下げた。

「主はやて、まずはお詫び申し上げねばなりません」
「我らが騎士の誓いを破りし事、いかなる処罰もお受けします」
「ど、どしたん、皆して？何か悪い事でもしたん？」
「これを」

シグナムは闇の書を差し出す。
偽装スキンは解除され、完成間近まで蒐集された闇の書が晒される。

「これって……理由聞いてもええ？」
「それについては私から言おう」
「御剣さん？ってせや！御剣さんあのな、これはな、」
「心配せずとも私達は関係者だ。否、共犯者と言っても良い。なにせ蒐集には私達も参加していたからな」
「へ？な、何でなん？御剣さんも魔法使いやったん？」
「厳密には違う。本題に入るがはやて、最近急に胸が苦しくなる事は無かったか？」
「え！？な、無いよ」
「誤魔化しは無駄だ。石田先生からシグナムとシャマルが聞いてい

る。
　原因は闇の書の浸食。理由は蒐集を覚醒から暫くの期間行わなかった事だ」
「ちょ、ちょっと待って下さい。何でそんな事急に」
「そのままそれが、シグナム達が蒐集を行った理由だからだ。蒐集を行わなければはやて、君は長くは持たなかった」

　シグナムが勢いよく立ちあがる。

「御剣殿！もう少し言い方というものがあるのでは？」
「事実だ。だが、ただ蒐集をしても闇の書は暴走し、はやては闇の書に取り込まれてしまう。
　そこで私達が協力を申し出た。１つは単純に蒐集の協力。２つ目、こちらが本題になる」
「…何ですか？」
「はやて、君に闇の書の改修をしてもらう。闇の書の闇、防衛プログラムの改修を」
「分かりました」

　やけにあっさり承諾するはやてに若干肩すかしを食らった様な表情をする御剣。
それを誤魔化す様に咳払いを１つすると、御剣は話を続けた。

「…早いな。他に聞く事は？」
「え～と、改修ってどうすればええんですか？
　私そんな事やった事無いんですけど」
「まずは管制人格を呼び出すことになる。シグナム、闇の書をはやてに」
「はい。主はやて、どうぞ」

はやてはシグナムから闇の書を受け取る。
受け取るもはやては、闇の書を眺め透かししている。

「闇の書に管制人格の起動をお命じ下さい。それで最後の守護騎士が現れます」
「わかった。闇の書、管制人格に会わせて？」

濃紫色の光を発しながら浮かび上がる闇の書。
はやての眼前にはベルカ式の魔法陣が展開されている。

「主はやての承認、及び蒐集４００ページ、確認。管制人格、起動します」

魔法陣から顕れたのは、１０代後半の女性。
長い銀髪に赤い瞳、黒い服を着ている。

「…貴方が管制人格さん？」
「そうです。主はやて。こちらでお会いできるとは思っておりませんでした」
「あぁ、今日の夢に出てきた人やね。会えて嬉しいわ」
「さて、管制人格、私の事は分かるかな？」
「御剣殿ですね。蒐集中の事は見ておりましたので」
「そうか。でははやてに防衛プログラムの改修案の指導を」
「しかし、現在の主はやてでは防衛プログラムの改修はできません。真の主としての覚醒を得ても、本来の壊れていない防衛プログラムは最早存在しません。
再構築しようにも、わずかな時間での改修はとてもではありませんが不可能です」
「そのための私達だ」
「…どういうことですか？」

首を傾げ問う管制人格。…その仕草には何処となく可愛いらしさが有った。

「闇の書の完成と同時にはやては闇の書に取り込まれ、管制人格が表に現れ、その後防衛プログラムが暴走する。そうだな？」

「はい。防衛プログラムの起動までですが、凡そ３０分程です」

「それを私達で抑え込む」

「…不可能です。今回の闇の書は魔法生物が主な魔力原です。魔導師のリンカーコアであれば私に回される魔力量が多くなりますが、今回の蒐集で集められた魔力は大半が防衛プログラムに回されている。

今の防衛プログラムを抑え込むのは至難の業です」

「問題無い。私達は兎も角、私達の能力を嘗めるなよ？蒐集中にも見ていただろう」

「…分かりました。主はやて、よろしいですか？」

「うん。よろしゅうな。…管制人格さんって呼びにくいなぁ。名前って無いん？」

「…いえ、私は闇の書の管制人格。それ以上でもそれ以下でもありません」

「ん～…あかん！私が名前付けてあげる！私は闇の書の主やから」

「い、いえ、主はやて、いいのです。私にはそのような「決めた！」え？」

はやては少し考え込んだかと思うと、すぐさま顔を上げた。

「リインフォース！」

「リイン…フォース…」

「そうや」

「し、しかし…」

「つべこべ言わんの。
闇の書の主の名において汝に新たな名を贈る。強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のエール、リインフォース」
「…ありがとう…ございます…」
「よろしくな！リイン！」
「…はい」

## 3章ー7　君の名（後書き）

あとがき（という名の言い訳）：3章7話です。
命名の儀も滞りなく終わりました。
はやてはまだ夜天の書の事は知りませんが、リインフォースには救いになったと思ってください。
ではまた次話で。

# 3章－8　会合

１２月１８日　海鳴市　ハラオウン家

アースラスタッフは今日も会合を開き対策を話し合っていた。が、その表情は皆一様に暗い。

「あれ以降全く接触が無いのも不気味だな」
「何回か転移反応は有ったんだけど、監視網にも引っかかって無い。実はもう蒐集が終わってるとかはないよね？クロノくん」
「それは無い。
闇の書の魔力はかなり大きいから、完成したらセンサーに引っからない訳が無いんだ」
「私達に見つかるのを避けてる、とか」
「あれだけの実力者がか？
戦闘を避ける理由も特に思い当たらないし、それは無いだろう」

ピンポーン

「誰だ？フェイト、友達が来ると言っていたか？」
「ううん。今日はアリサもすずかも、お稽古事だって言ってたから来る筈が無いよ」
「まぁいい。エイミィ、見てきてくれ」
「了解」

「こんにちは」

挨拶もそこそこに、いきなりクロノに首筋へＳ２Ｕを突き付けられる。

「…いきなりそんなもの突き付けるのは、客人に対する応対としてどうかと思うんだが」

「黙れ。何故ここが分かった。いや、何の目的でここへ来た！」

「以前言っただろう？時が来れば伝えると。時が来たのさ。蒐集は最終段階に入った。

あ、そこのお嬢さん、これを。詰まらない物ですが。皆さんで食べて下さい」

「あ、どうも」

差し出す紙袋にはとらやの文字。この為にわざわざ買いに行ったのだ。

「クロノ、まずは話を聞きましょう。」

「リンディ提督、しかし」

「こちらに交戦の意図は無いよ。その心算ならマンションごと吹き飛ばしている」

「「「「「…」」」」」

「っと、失言か。今日来たのは他でもない。闇の書封印の協力要請の為だ」

「…は？」

「言いたい事が伝わらなかったか？

闇の書の防衛プログラムを破壊するから手伝え、と言ったんだが。」

クロノ達に今までの詳細と経緯を説明する。はやての事は、ぼやかしたが。

「…言いたい事はわかった。
だが、それならそれで何故最初に我々に協力要請をしなかった？
そうすれば戦闘など起こらなかっただろうに」
「そこまでそちらを信用していなかった事も一つ、そして何より話し合いができる雰囲気でも無かったのでね。
それに、協力しろと言っても魔法生物への蒐集をさせてはくれなかっただろう。それでは困るんだ」
「…魔導師からの蒐集では駄目なのか？まぁそれもさせるわけには行かなかったが」
「こちらの事情でね。で、そちらの返答は？手柄が欲しいというのなら、くれてやるが？」
「…暫く考えさせてくれ。上層部との兼ね合いもある。我々の一存で決めるわけにもいかない」
「そうか。では期限を設けよう。１２月２４日。こちらの作戦決行予定日でもある。
もちろん、協力しないからといって恨みはしないさ。
妨害するのならその限りでは無いがね」
「…わかったわ。クロノ、グレアム提督の所へ行って折衝をお願い」
「分かりました」
「さて、これで失礼させてもらうよ。長居するのも問題だろうしね」
「待って！」
「ん？」
「なのは？」

立ち去ろうとした御剣へ、唐突に声が掛かる。
先程から何も言わなかったなのはが立ち上がり、御剣を見据えていた。

「なんで最初に会った時に聞いたのに、言ってくれなかったの？」
「…言いたい事が良く分からんが。君に説明した所で何らかの事態の進展が見られた訳でも無い」
「そんな事！」
「君に何が出来た？否、君だけでは無い。管理局に彼女は救えない。善では彼女は救えない。
誰かを傷つける事は確かに悪だ。
だが、誰かを救うために、１を救うために１００を切り捨てるのは悪か？
友人が死に瀕している時、何かを切り捨てて友人を救うのは悪か？
あぁ、法的には悪だろう。
それを友人が望まないというならそうかもしれない。
だが、別に私は彼女の為に動いているわけではない。
他の誰でも無い、自分の為に。
救えるのならそれが罪だろうと行おう。自分が他人のせいで傷つくのは嫌だからね」
「で、でも！だけど！」
「時間の無駄だな。確固たる信念の前には理想論など塵芥に等しい。
自らの信念を曲げてでも事を為そうとする意志に、そのようなあやふやな考えで立ち塞がるな。
…では私はこれで。また会おう。できれば味方としてね」

御剣が去った後…

「どう思われます？艦長。…どうぞ。」

エイミィはリンディに、御剣の持ってきた羊羹を差し出す。

「ありがとう。…信用はしきれないわね。何か裏が有るのか、とも思わせられたわ。
でも、彼の実力を持ってすればこんな小細工は意味無いわ。
分からないのは、なのはさんとの会話を聞く限り、私達に積極的に協力を求めていない。
なのに何故、危険を冒してまでこちらと接触するのか…意図が全く読めないわ。
…あら、美味しい。」
「私達に捕まってもすぐ逃げれる算段が有ったとかですかね？
闇の書の防衛プログラムどころか、次元艦隊と戦っても勝ちそうですもんね、彼。」
「それとも、今回の闇の書は彼でも自信が無い程に強大なのか。」
「それはぞっとしない話ですね。」
「それより気になるのは、なのはさんと御剣さんの会話の中でででた『彼女』と言う単語。
これは恐らく…」
「今回の闇の書の主は女性、と言う事ですね」
「そうね。その可能性は高いでしょう。
…エイミィ、クロノに連絡して。
恐らくグレアム提督は、今回の闇の書事件について、何か知っているわ」
「わ、分かりました。でも、どうしてそうお考えに？」
「勘が半分。でも、クロノにグレアム提督の使い魔さんが闇の書の存在を仄めかした事で、今回の闇の書事件が発覚した。
リンカーコアが衰弱した魔法生物が多数発見された、これだけでは闇の書と断定するのは難しい。
でも、そうだと断言していたらしいわ。なら、何かしらの確信を持っている可能性が高い」

海鳴市　市街地　廃ビル

「ただいま。」
「おかえり。どうだった？」
「概ねこっちの予想通りの反応。期日は伝えておいた。計画に変更無し。そっちは？」
「調整にもう少し掛かるらしい。だが、間に合わせると言っていたよ」
「そうか。…原口、どうだ？いけそうか？」
「無問題（モウマンタイ）」
「なんで中国語だよ。まぁいいか。さて、大詰め（クライマックス）だ」

## 3章－8　会合（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：3章8話です。
御剣の性格が分かりづらくなっていますが、基本は悪に義憤し、善を嘲笑するタイプです。

次話で遂に闇の書の闇、防衛プログラム登場です。
ではまた次話で。

## 3章ー9　防衛プログラム

１２月２４日　某管理外世界

一面の海の広がる世界。
はやても含めたヴォルケンズと私達は、蒐集を完了させるべく魔法生物を捕獲していた。
「５匹目ゲット。これで十分か？」
「こいつらが一匹当たり１ページ程だからな」

捕まえているのはイルカの様な魔法生物。
攻撃手段はほとんどないがいかんせん逃げ足が速い。
現在のページは６６１ページ。
これで完成は確定したような物。

「御剣、次元転移を感知した。来たぞ」
「わかった。原口は展開準備。私は答えを聞きに行こう」
「了解した。予定通り後１０分で蒐集を行う」

アースラ艦内

「感知しました。いえ、こちらに信号を送っているようです」
「では、そちらに進路を」
「艦長、部隊の展開を行います。よろしいですね？」
「…そうね。お願い、クロノ」
「では」

そう言うとクロノは艦橋を出て行った。

「いいんですか？艦長？」
「しょうが無いわ。上層部の決定ですから」
「闇の書ごとアルカンシェルで破壊すべし、ですか」
「そんな事をしても闇の書は転生するだけだというのに…」
「グレアム提督も熱心に反対されていたそうですね」
「提督は独自に永久封印を考えていらしたから」
「デュランダルによる永久凍結ですか。
はやてと言う女の子の事を考えれば、あまり褒められた手段では有りませんね」
「それよりも褒められない手段を私達はとろうとしているわ」

ビービッ！

「レーダーに感あり。艦長、前方に人影、御剣さんです」
「モニターに出して。音声も」
「（さて、答えを聞こう。静観か、協力か、若しくは敵対か）」
「…クロノ」
「（ストラグルバインド！）」
「（これは…そうか）」

御剣の体を展開した魔法陣から伸びる魔力で編まれた縄が捕捉する。

「（大人しくしろ。そのバインドは容易くは抜けられない）」
「（やれやれ。まぁ、予想通りだな。わかった。私はこのまま何もしない）」
「（何だと？まぁいい。そこで見ていろ）」
「（あぁ、見ておこう。お前達の所業をな）」

御剣の顔は俯いているため、クロノにも見えなかったが、何とも言い難い顔をしていた。
そう、言うなれば『計画通り』と言った様な。

「（何？どういう…っ！？何だこの反応！？エイミィ！？）」
「前方、信号発信地点から強大な魔力反応！闇の書が完成したと思われます！」
「（くっ…時間稼ぎが狙いか。艦長！）」
「えぇ。アルカンシェル、バレル展開！」

リンディが目の前の箱に始動キーを差し込むと、周囲を包んでいた箱状のファイアリングロックシステム（火器管制機構）が赤くなり、環状魔法陣が不規則に周囲に展開される。

「ごめんなさい。…アルカンシェル！発射！」

アースラの前方に3つの巨大な環状魔法陣が展開される。
光球の収束が終わり、遂にアルカンシェルが発射された。

「アルカンシェル着弾確認！空間歪曲開始します！」

アルカンシェルは撃ち出される弾体自体に攻撃力はほとんどなく、着弾後一定時間の経過によって発生する空間歪曲と反応消滅で対象を殲滅する魔導兵器。

「反応消滅終息。視界、クリアになります。対象領域サーチ…え？」
「どうしたの？」
「それが…闇の書の反応…健在です…」

エイミィが顔を青くしながら報告する。

「なんですって!?」

着弾地点を中心に百数十キロは何も無い空間が広がっていた。
否。中心にのみ存在するものが有る。
大きさはゆうに１０ｋｍを越していた。聳え立つ巨体は海中に没して尚、天を衝かんばかり。
頭は鰐の様に長く伸び、背には巨大な漆黒(くろ)い甲羅を背負っている。
その甲羅からも剣山の様に棘が生えている。棘と言ってもその１本１本が山の様で、その連なりはまるで山脈の様な有様。
血の様に赤い尾は蛇、否、龍の様な形で頭も付いている。
そう、ソレはまるで伝説に謡われる神獣、玄武の様であった。
その威容、異様、偉容は歴代の防衛プログラム、その中でも最大ともいえるだろう。

「な…に?あれは…」
「そんな…」

モニターにクロノが表示される。その背後には縛られたままの御剣が居た。

「（艦長、これは!?アルカンシェルは確かに着弾したはず!）」
「（何の事は無い。アルカンシェルとやらにあれが耐えきっただけさ）」
「（何だと!?）」
「（私達は魔法生物からのみ蒐集を行った。６６６ページ。それだけの魔法生物の集合体。
翼を持った虎に人間は勝てない。２種類の可能性でそれだけの力を得る。
ならばそれ以上の、４００を超える生物たちの集合体は?

しかも相応の魔法力を有した魔法生物のキメラ。果たしてどれだけの力を持つか）」

「そんなものを解き放ったのは貴方達でしょう!?どうするつもり？」

「（何も。何もしない。私はあれに近づかない）」

「（貴様ぁ！！！）」

「（勘違いするなよ?あんなもの、当初の予定では現れない筈だったのだから。

あれを呼び出したのは君たちだ）」

「…どういうこと?」

「（私達はまず、闇の書を完成。

はやてと管制人格、リィンフォースを融合させ、闇の書内部から新しい防衛プログラムをインストール。

その後、古い防衛プログラムのみを分離。それを消滅させるはずだった）」

「では何故あんな事に?」

「（何故?単純な事さ。

闇の書がアルカンシェルを防ぐために防衛プログラムを起動したのだろう。

結果、古い壊れた防衛プログラムのまま起動された）」

「そん…な…」

「（さて、呆けている暇は無さそうだぞ）」

「え?」

「艦長!闇の書から膨大な魔力反応!こちらに向けて攻撃してきます!これは…」

防衛プログラムの前方に魔法陣が形成される。

口内に集束される魔力。その魔力量は人智を遥かに超えていた。

## 3章－9　防衛プログラム（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：3章9話です。
いよいよクライマックス。
防衛プログラム顕現です。
今後はかなり厨二な内容になって行くと思いますが、お付き合いいただける方はどうぞ今後ともよろしくお願いします。
ではまた次話で。

# 3章－10　契約

アースラ艦橋

「ディストーションフィールド、全力展開！！！　急いで！！！」
「了解！　クロノくん！　急いで艦内に！」
「（分かった。お前も来い！）」
「（これさえ解いてもらえれば何て事は無いんだが。
あぁ、面倒くさい事になったものだ）」
「（良いから来い！！！）」

御剣とクロノ達武装隊が収容されると同時に、アースラに向けて迫る漆黒の光条。
アースラを呑み込まんばかりの太さだ。

「総員対ショック体勢！！！」

アースラ艦内隊員控室

「なのは、なんだか様子がおかしいよ」
「うん。何か慌ただしい様な」
『総員対ショック体勢！！！』
「「え？」」

瞬間、凄まじい衝撃が２人が襲った。

「なのは！」

「フェイトちゃん！」

響く轟音と震動。しかし、暫くするとそれらは収まった。

「…大丈夫？なのは。」

「うん。大丈夫だよ。」

パシュン

扉が開く音とともにクロノと連れられた御剣が入ってきた。

「無事か？　２人と…も…」

「この有事になんという根性。いや、有事だからか？」

２人の今の体勢はフェイトがなのはに覆い被さる様になっている。そんな状態で見つめあっていれば、いらない誤解も受けようというもの。

「く、く、くくクロノ！？ち、違うよ！？　これはって御剣さんが何でここに？」

「この考え無しに捕まってな」

「考え無しとはなんだ！そもそも君がちゃんと説明すれば！」

「その前に人の事を問答無用で捕まえて、アルカンシェルを放ったのは何処の誰だったのかな。

最近頓に記憶力が落ちていてな。差し支えなければ教えて欲しいのだが」

「ぐっ！」

「（クロノ、あぁ、なのはさん達の所にいたのね。丁度良いわ。御

剣さんを連れて艦橋に来なさい）」
「わかりました」
「クロノくん、何がどうなってるの？」
「艦橋に行くまでに話すよ」

アースラ廊下

「えぇ！？　いきなり攻撃したの！？」
「どうして？　まずは話し合ってからでも、遅くは無かったんじゃないかな？」
「話し合うも何も、僕達には、上層部からの攻撃命令が出ていた。それを無視する事は出来なかったんだ」
「だからと言って、私達にさえ何も言わずに撃つとはね。私は怒っても良いんじゃないか？」
「うるさい！　黙って歩け！」
「横暴だね。後で後悔しても知らんぞ？」
「何が言いたい！？　っと、もう艦橋か。中でじっくり話を聞かせて貰うからな！」
「だからもう遅いと言うのに…」

アースラ艦橋

「現在防衛プログラムは沈黙、一切のアクションを起こしていません。
おそらくこちらの出方を窺っているのかと」
「…御剣さん、貴方ならどうにかできるかしら？」

少し考え込んだ様にすると、リンディは御剣に問うた。

「無理」

「…早いわね」

「その台詞は若干傷つくな」

「？」

「どうなさいますか？艦長。アルカンシェルが通じないとなると…」

「その件だが、恐らくだが通じなかったのではない。

単純にバリアなりで防がれたのだろう。

恐らくは魔法遮断型のバリアか…若しくは純粋な防御バリアか。

私達が蒐集した生物に、そういった能力持ちがいた」

「それはどういった手段で倒したんだ？」

「物理攻撃。ヴィータが殴ってバリアを壊した」

「…ベルカの騎士ならともかく、僕達にそんなスキルは無い」

「なら諦めろ」

「待って下さい。バリア解析完了。

あれは単純なバリアでは有りません！　４層構造の複合バリアです！」

エイミィの台詞に、御剣を除く全員がエイミィの方を向く。

「４層？」

「はい。まず第一層、一番外部の魔法遮断バリア、第二層目の物理無効バリア、第三層目、高エネルギー粒子対流バリア、そして最後、第四層目は超高温のエネルギー膜によるバリアです！」

「成程。どれも蒐集の時にお目にかかった連中だな」

「攻撃時にはバリアは展開できないだろう。その時に攻撃出来れば」

「それは駄目。さっきの攻撃の時は必要なだけしかバリアは開いて無かった」

「蒐集の時はどうしたんだ？」

「一層目に相当する奴はさっきも言ったがヴィータが。二層目は私の魔法で。
三層目の奴は黒峰が。最後の奴も私の魔法だな」
「なら、御剣さん達が協力してくれればなんとかなるんじゃ！？」
なのはがさも妙案の様に言ってくる。
「だが断る」
「ふざけるな！　分かってるのか！　このまま放っておけば次元世界全体の問題になるんだぞ！？」
「お前こそふざけるな。
最早終わった事ではあるが、お前達が協力とまで言わずとも、静観していればこんな事にはならなかった。
だというのに、その責を私に押しつけられても困る」
「お前が協力すれば奴を倒せる！　なのに何故協力しない！？」
「お前等の虫の良さに呆れてるだけさ。
協力を申し出た相手を裏切り、いざ問題が起きたら頼るのか」
「それは…」
「クロノ、下がりなさい」
「艦長！？　しかし！」
リンディ提督は深々と頭を下げる。
「「艦長！？」」
「虫の良いお願いと言うのは分かっています。しかし、そうしなければ世界の危機になりえます。
どうか、お力を貸して下さい」
「…条件が有る。
今回の件での私達と『守護騎士達（ヴォルケンリッター）』及び闇の書の主、八神はやての無罪放免。

以後本人達が望まない限り接触するな。その2つだけだ」
「わかりました。可能な限り遵守します」
「では行ってこよう。ただ、当然見ているだけなど許さん。そこの三人組、手伝え」

クロノとなのはとフェイトは、お互いに顔を見合わせる。

「…というわけで、言質は取ってきた。これで無罪放免だ」
「何がアルカンシェルのせいだよ。当初の予定から暴走する筈だったろうが」
「だが、予定より防衛プログラムが早く出てきたのも事実だ。どう転んでも管理局じゃ、今の防衛プログラムは倒せないだろうしな」
「まぁいいさ。やる事に変わりは無いんだろ？」
「あぁ。そこは変わらない。さて、暴れようか。お前達も全力出していいぞ」
「やっとか。待ちくたびれたぜ」

## 3章－10　契約（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：3章10話です。
良く言えば皆で力を合わせて立ち向かいます。

次話では普通にラスボスフルボッコです。
あ、出てきてませんけど、ユーノもアルフもいます。
ではまた次話で。

## 3章－11　闇の書の最後

某管理外世界

「しかしでかいな。いつぞやのベヒモス（仮）がまるで豆粒だ」
「俺たちなんて芥子粒だな」
「寧ろミジンコ？」
「さて、まずははやてが出てくるのを待たなくてはな…」
「（その必要はないです。今そっち行きますから）」
「ふむ。順調に事は済んだか。（丁度良い。ついでに守護騎士達も呼び出してくれ）」
「（はい！　守護騎士システム起動！　皆！）」

空中に光の柱が立つ。
眩いばかりの閃光が晴れると、そこには中央の光球を中心に、守護騎士達が四方に立っていた。

「我ら、夜天の主の元に集いし騎士」
「主ある限り、我らの魂、尽きる事無し」
「この身に命ある限り、我らは御身の元に有り」
「我らが主、夜天の王、八神はやての名の元に！」

口々に告げる守護騎士達。
ヴィータの口上と共に光球が割れ、中からはやてが現れる。

「夜天の風よ、我が手に集え！　導きの風！　リインフォース！
セーットアップ！」

掛け声とともにはやての体が騎士甲冑に包まれていく。

髪の色は薄くなり、瞳も青に変わる。

「御剣さん、リインが防衛プログラムへの魔力供給をカットしてくれました。

今やったらバリア壊したら壊れたままです」

「そうか。よくやってくれた」

「夜天の…王？」

「そうだ。今日をもって闇の書は終わる。今あるのは夜天の書だ。

さて、始めるか。黒峰。まずはお前とヴィータだ」

「おう。行っくぜぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

黒峰の背後に巨大な粒子の柱が立ち上る。

瞬く間に伸びあがった粒子は人型になり、そこには巨人の上半身が聳え立っていた。

頭からは牛の様な弐本角が前方に伸びている。

「ヴィータ！」

「おう！鉄槌の騎士ヴィータと！　黒鉄の伯爵グラーフアイゼン！」

「Ｇｉｇａｎｔｆｏｒｍ．」

「轟天！」

「爆砕！」

「「『巨人の一撃（ギガントシュラーク）』！！！」」

黒峰の拳とアイゼンのギガントフォームがバリアの第一層を粉砕する。

如何なる魔法であろうと遮断するバリアも、大質量の激突が生み出す衝撃には耐え切れなかった。

「次！魔導師３人娘！」

「その括り方は無いんじゃないかな…」

「まぁまぁ。行こうか」
「よろしくな。２人とも」

御剣の声に合わせ、３人の少女が杖を執る。

「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン！　エクセリオンバスター、フォースバースト！」
「Ｂａｒｒｅｌ　ｓｈｏｔ．」
「ブレイク！」
「フェイト・テスタロッサとバルディッシュ・アサルト！　撃ち抜け、雷神！」
「Ｊｅｔ　Ｚａｍｂｅｒ．」
「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け。石化の槍、ミストルティン！」
「Ｅｘｃｅｌｌｉｏｎ　Ｂｕｓｔｅｒ．」
「シューーーート！！！！」

なのは達の複合射撃で第二層目のバリアも砕かれ、周囲にガラスの破片のようなものが降り注ぐ。
しかし、いい加減闇の書の防衛プログラムも黙っていない。
甲羅から無数に生えている棘の先から、なのは達に向けて砲撃魔法を撃ってくる。

「盾の守護獣ザフィーラ！　攻撃など通させるものか！　ておぁぁぁぁあぁぁぁぁぁぁ！！！」
「フェイトになにすんだい！！！」

しかしそれも虚しく、ザフィーラの障壁とアルフのラウンドシールドに防がれた。

「次！　もう一丁黒峰！　シグナム！」
「また俺か！　まあいい、あれなら！」

黒峰の巨人の右手に、大量の粒子が集束されていく。

「承知！　剣の騎士、シグナムが魂、炎の魔剣、レヴァンティン！
刃と連結刃に続く、もう一つの姿…！」

シグナムが鞘を柄尻に合わせると、レヴァンティンが姿を変える。

「Ｂｏｇｅｎｆｏｒｍ．」
「翔けよ！　隼！」
「Ｓｔｕｒｍｆａｌｋｅｎ．」

巨人が手にするのは黒き直剣。
巨人はそれを腰溜めに構えると、体を限界まで捻る。

「食らえ！　大一文字！」

高エネルギー粒子もシュトゥルムファルケンと直剣に吹き散らされた。

「グレアム総督、お貸し頂いたデュランダル、使わせていただきます」
「ラスト！　行くぞクロノ！」
「命令するな！　行くぞ、デュランダル！」
「Ｏｋ，Ｂｏｓｓ．」
「来い！　『大魔導原典（グラン・グリモワール）』！！！」
「悠久なる凍土　凍てつく棺のうちにて　永遠の眠りを与えよ　凍てつけ！」

「Ｅｔｅｒｎａｌ　Ｃｏｆｆｉｎ.」
「偉大なる死の女神　ヘルの名に於いて　其が世界　顕れん！　『暗き霧の国（ニブルヘイム）』！！！」

ランクＳオーバーの高等広域凍結魔法と絶対凍土の具現により、凍結し砕け散る第四層バリア。
これによって防衛プログラムは全てのバリアを剥がされた。

「原口！」
「了解！　いくよ、穿て！」

原口の掛け声とともに防衛プログラムの全身至る所に結界が張られる。

「砕けろ！　『世界崩壊（ワールド・ディストラクション）』！」

一斉に砕ける結界。
世界の崩壊に引きずられる様に結界の有った場所は抉れてしまっている。
苦痛に喘ぐように吼える防衛プログラム。
しかし、抉れた先から新しい肉で埋まり、あっという間に回復していく。

「（駄目！　生半可な攻撃じゃ通じないみたい！）」
「決して、原口が生半可な攻撃をしているわけじゃないんだがな」
「あんまりでかいと、結界だけで潰せないからね」

そうこうしている内に防衛プログラムが動き出す。
尾の龍頭（ドラゴンヘッド）に魔力が集束し、こちらに狙いを付ける。

「くっ！　鋼の軛！」
「『世界破壊（ワールド・ディストラクション）』！」
「ストラグル・バインド！」
「チェーン・バインド！」
「今のうちに大きいのを準備しろ！　ストラグル・バインド！」

ザフィーラ、原口、ユーノ、アルフ、クロノが其々の技で龍頭（ドラゴンヘッド）を攻撃する。

「「「了解！」」」
「「おう！」」
「全力全開！スターライトブレイカーｅｘ！」
「雷光一閃！プラズマザンバー！」
「響け！終焉の笛！ラグナロク！」

なのは、フェイト、はやて、三人の最大攻撃魔法が構築されていく。

「『約束（エクス）された！」

それはかのアーサー王が湖の精から授かった、至上の聖剣。
人々の「こうあって欲しい」という願い、戦士達が今際に懐いた栄光への願望が形と成った神造兵装であり、星の鍛えた「究極の幻想」。

「『漆黒纏（ジェノサイド）いし！」

黒峰の巨人の右腕に膨大な量の粒子が集束していく。
一定の質量を持つ物は重力さえも、空間をも歪める。そう、ブラックホールの様に。

密度を極限にまで高められた巨人の右腕による手刀は、空間をも裂く一撃と化す。

「「「ブレイカーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！」」」
「勝利の剣（カリバー）』アアアアアアアア！！！！！！！」
「撃滅の拳（ブレイバー）』アアアアアアアア！！！！！！！」

なのは、フェイト、はやてのトリプルブレイカー。
『約束された勝利の剣（エクスカリバー）』。
『漆黒纏いし撃滅の拳（ジェノサイド・ブレイバー）』。
5人の合体攻撃によって露出する防衛プログラムのコア。
しかしそれも一瞬の事。
あっという間にコアは肉に埋もれてしまう。

「そんな！」
「まだ足りないの！？」
「原口！　分かってるな！」
「うん！」
「全員時間稼ぎ頼む！　3分だけでいい！」
「わかった！　3分だな！　全く無茶を言う！　全員行くぞ！！！」

全員が闇の書の闇に向かうと、御剣は手に持っていたエクスカリバーを座に還す。

「さて、うまくいくかな？」

そう呟くと、御剣は右手を掲げ、集中する為に目を閉じた。
脳裏に描くのは1振りの剣。御剣に確証は無い。ただ、漠然と出来るだろう、という意識はあった。

それをするとすれば、今をおいて他には無い。

「吾請いしは原初の剣　原初の１　始まりの１　終わりの１　終末の１　終末の剣
其は堅牢なりし守護の剣　其は頑強なりし討ち手の剣　其は暴虐なりし覇王の剣　其は公正なりし賢王の剣
吾、座より請うは始原の１　終焉の１　出でよ、『剣軍師団（けんぐんしだん）』」

そうして顕れたのは、先程の文言にそぐわない青銅のみすぼらしい剣。

「全員下がれ！」

しかしそれは世界の一部。
ヒトが手にした武器と言う概念の総体。
過去、現在、未来の座に存在する武器の集合体。

「『否定（カラミティ）され崩壊せし森羅万象（エンド）』！！！」

放たれたのは漆黒の光条。
ソレが相殺しようと闇の書の闇が放った光線とぶつかると、まるで光線は放たれていなかったかのように掻き消え、闇の書の闇に直撃した。
切りつけられた物は『武器』という世界における因子の１つに否定される事になり、消滅する。
それが『剣軍師団（けんぐんしだん）』の能力。
それを証明するかのように、ボロボロと崩れて消滅していく防衛プログラム。
完全に崩れ去った後にはコアだけが残っていた。
それをユーノ、アルフ、シャマルの３人が地軸を挟んだ反対側に転

送する。
転送先に待機しているのはアースラ。

「コアの転送！　来ます！　転送中も尚生体部品を修復…いえ、コア自体の崩壊が加速しています！」
「アルカンシェルのチャージ完了！　いつでも撃てます！」
「アルカンシェル、バレル展開！」
「ファイアリングロックシステム、オープン」

リンディが目の前の箱に始動キーを差し込むと、周囲を包んでいた箱状のファイアリングロックシステム（火器管制機構）が赤くなり、環状魔法陣が不規則に周囲に展開される。

「…アルカンシェル！　発射！」

アースラの前方に3つの巨大な環状魔法陣が展開される。
光球の収束が終わり、再度アルカンシェルが発射される。

「効果空間内の物体、完全消滅。再生反応、ありません！」
「反応終了時まで警戒。再度確認の後、準警戒態勢へ移行。その後、現場担当員の回収を」
「了解！」

「…終わったの？」
「そうらしいな…これで終わりだ。御剣…君には世話になっ…た…何だその格好は」

クロノが目をやれば、御剣は黒峰に吊下げられている。

「最後のあれはやると暫く能力が使えなくなるのでな。普段は『空翔ける靴（タラリア）』で飛んでいるが今は無理だ。だからこうして運んで貰っている」
「しまらねぇよな」
「そ、そうか。事情聴取も兼ねて僕達の母艦に来てもらっていいだろうか？」
「まぁいい。条件は遵守してもらえるのだろうな？」
「あぁ、分かっている」

こうして闇の書事件は終わりを告げた。
ふと見ると、クロノが眉を顰めている。

「と言うか、やっておいて何だが、この世界への被害が甚大だな」
「いや、全く問題ない」
「え？」
「原口に封時結界を張っておいて貰った。外界には全く影響は無い」
「如才無いにも程が有るだろう。全く気付かなかった…つくづく君達は反則だな」

## 3章－11　闇の書の最後（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：3章11話です。
遂に決着。闇の書は夜天の書に戻りました。
原作では損壊が激しいとかで破壊されましたが、拙作では、はやてとリインが修復したため問題無く稼働しています。
次話でA、sも終わりです。
ではまた次話で。

『大魔導原典（グラン・グリモワール）』：対城宝具ランクEX　レンジ999　最大補足1～999人

魔導書（グリモワール）の集大成。
現在過去未来に存在する魔導の業が全て記された魔導書。
邪神降臨の儀式から簡単な浮遊魔法まで有るので、凄まじく分厚い。
業を使うには相応の魔力が必要。
御剣オリジナルその1。

『剣軍師団（けんぐんしだん）』対人宝具ランクEX　レンジ1～3　最大補足1人

ヒトが手にした武器と言う概念の総体にして、過去、現在、未来の座に存在する武器の集合体。
これに傷付けられると、世界における因子の1つである『武器』に否定されるので相手は存在を保てなくなる。
ありとあらゆる概念、神秘を内包している為、この剣を防ぐ事はおろか、この剣が振られた時点で相手は切り裂かれているも同然であるが故に、相手の攻撃とこの剣が克ち合った時、相手の攻撃はキャンセルされる。

また、不死殺し、竜殺し、鬼殺し等の種族殺し、地水火風光闇、全ての属性をも持つ為、相手が如何な攻撃無効スキルを保有していようと無効化される。
攻撃に特化している為、所有者に恩恵を与えるタイプの宝具は影響が薄い。
それでも、この剣を装備している間は全ステータスが2ランク上昇する。
御剣オリジナルその2。

『空翔ける靴（タラリア）』対人宝具ランクC　レンジ0　最大補足1人

ギリシャ神話の英雄ペルセウスが、ヘルメスより賜わった空翔けるサンダル。
履いていれば空を自由に駆け回れる。
大気を踏みしめて走る為、速力は所有者の敏捷に依存するが、この宝具自体に敏捷を1ランク上昇させる能力を持つ。

## A、s　エピローグ

２００６年４月１０日　聖祥小学校

「はやてちゃん、復学おめでとう」
「おめでとう。はやて」
「ありがとう。よう分からん事もあるやろうから、そん時は頼ってええかな？」
「もちろんだよ」

今日は始業式。
長い間休学していたはやても完治の目処が立った事により復学する事になった。

「もう大丈夫なんだよね？」
「うん。闇の書はもう夜天の書になって呪いもとけたし、うちの子らの維持も私の魔力で足りてるみたいやから」
「そっか。でも勿体無いよね。『守護騎士（ヴォルケンリッター）』もリインさんもはやてちゃんも管理局に入らないなんて」
「そうそう。はやても結構な魔力なんだから入ったら結構いいとこまで行けると思うんだけどね」
「うん。それは私もそう思う。なのはちゃん達とも仲良くなれたし、そう言う進路も有りやと思う。
　でも、御剣さんに言われたから」
「何て？入るなって言われたの？」
「子どもが小学生から将来の事とか考えなくていいって」
「…ん～？普通に酷い事言って無い？」
「子どもの内は遊んどけとも言われたなぁ。
え～と、何やったっけもうチョイ、ニュアンスが違った様な…」

「管理局？」
「はい。管理局に入らないかって」
「あんの狸。いけしゃあしゃあと」
「え～と、リンディ提督じゃなくて、レティ提督って人が」
「レティ？…運用部の人か」
「凄い！　知ってるんですか？それも御剣さんのレアスキルですか？」
「あ～うん、まぁ…」
「ん？それで、どう思います？」
「そうだな。管理局は慢性的に人手不足だから、積極的に勧誘しているらしいし。
はやては確か広域Ｓランクだろう？加えてヴォルケンズ。
管理局にとっちゃ喉から手が出る程だろうな」
「やっぱり、そういう事なんですかね。…入った方が良いんでしょうか？」
「…はやて、どうこうしろとは言わんさ。
でもな、小学生で将来の事を決めようなんて早すぎる。
大人になっても自分のしたい事が分からない人だっている。
やりたい事が見つかったらそれでいいさ。応援ぐらいしてやるよ。
もちろん管理局に入りたいならそれでいい。
ゆっくり考えていけ。まだまだ人生長いんだ。今は遊んでるくらいでちょうどいい」
「そんなもんですか」
「そんなもんだ。
まぁ、就労法に真っ向から喧嘩売ってる所には、余り入って欲しくは無いがな」

「みたいな事を」
「ん～…間違っても無いけど…」
「何だかね」

海鳴市　市内　八神家　リビング

今日も今日とてはやてに御呼ばれ。

「…いい加減食費とか払った方がいいんじゃないか？」
「結構な頻度でお世話になってるよな。僕達」
「…どうだ？はやて。そろそろこちらの良心が痛いんだが」
「えぇですよ。そんなん。ご飯の代わりに楽しい時間を貰ってますし」
「「「…」」」
「というかそういう事だと…」
「我等の立場が…」
「守護騎士の皆は尚の事、気にせんといてええよ。家族なんやし」
「「「「…」」」」

ザフィーラは犬だがな。
ちなみに今は子犬フォーム。どうやらアルフと仲良くなったらしい。
犬同士何か感じる物でも有ったのか。
シグナムは相変わらず剣道場で師範をやっている。子どもにはそれなりに人気だそうだ。
ヴィータはゲートボール。爺ちゃん婆ちゃんのアイドルらしい。
シャマルは料理を除く家事全般。料理も若干の改善が見られてきた。
リインフォースはまだこっちに慣れていないので特には無いが、家事をシャマルから習っている。
料理だけは、はやてからだが。

なのはとフェイトは正式に管理局に入るらしい。
２人ともに嘱託だから当然と言えば当然か。
そういえば、条件の履行についてだが、結論から言えば、クロノ達は満たせなかった。
…私達への保護観察。
罪科は問わないが、執務官からの監視がある。
この場合クロノだが。どうも譲歩した結果らしいが…
まぁ、元闇の書の主とその守護騎士はもちろん、さまざまなロストロギアを多用し、（管理局ではそういう扱いらしい。説明したのに。）魔法生物を襲撃した私達も管理局としては野放しには出来なかったのだろう。

「君達に頼みが有る」
「だが断る」
「…話くらい聞いてくれ。君達に嘱託として管理局に協力してもらいたい」
「だが断る。こちらにも仕事は有るんでな」
「「お断りします」」
「…当然報酬は相応に用意するつもりだ。提督クラスの年収を用意しても良い」
「間に合ってます」

事実間に合っている。
私達の収入は、年収に直せば２０００万は軽く超えているのだ。
古美術のブローカー紛いの事をしているが、審美眼と鑑定眼には自信がある。
名刀、名剣の類は高く売れるしな。

ちなみにお得意様に月村家とバニングス家もいる。

「恥を忍んで言えば、管理局は人材不足なんだ。
君達の様な人材は是非とも引き込みたい。何でもとは言わないが、たいていの願いは叶えよう」

「…有事の際にこちらへの制約が一切なしなら構わんが、お前たちの魔法は非殺傷とやらなのだろう。
私達にそんな器用な真似は出来んぞ」

「相手を殺害さえしなければ構わない。それに相手が非殺傷で無い時にまではそんな制約はしない。
それに、有事以外で君達を時間的に拘束する事は無い…はやて達への監視も緩めよう」

「それで脅したつもりか。交渉はもっとうまくやれ…依頼として頼むなら、考えておいてやる」

…何だかまた、妙な事に巻き込まれる気がするがな。

「あきらめろ。介入した時点で予想は付いてたろ」

「向こうが頼って来るまでは普通に暮らしてようぜ」

…つかの間の平穏じゃなきゃいいが。

## A、s　エピローグ（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：A、s編完！
ということでA、sエピローグになります。

今後の御剣達の立ち位置は管理局御用達のフリーランスのレアスキル持ち、と言った感じです。
はやては管理局に入りませんでした。
罪を償うという事が無ければ、海鳴で静かに暮らす方を選ぶと思うんですよね。

今後はオリ編や短編を含みつつStSに向かって行きます。
今後とも拙作をよろしくお願いします。
ではまた次話で。

## 外伝・O☆HA☆NA☆SHIしようよ。（前書き）

なのはが比較的酷い目に会います。
なのは好きは注意。

# 外伝・O☆HA☆NA☆SHIしようよ。

２００６年５月１０日　海鳴市　市街地　御剣古美術店（元・廃ビル）

はやてから用が有ると言われ、昼の休憩時間に来るように言った所、それになのはも付いて来ていた。
そして今、私の目の前には、頭を下げたなのはが立っている。
そして、意を決したように、なのはは私にこう言った。

「私と勝負してください！」
「だが断る」
「御剣さんバッサリやな…」
「いくらはやての頼みといえど、そんな面倒くさい事やっていられるか」
「そんなこと言わんと、私の顔を立てると思って」
「…はやては、私となのはをそんなに戦わせたいのか？」
「いや、ほら、その、悔しくないんですか？　女の子にここまで嘗められて悔しくないんですか？」
「そうですよ！　悔しくないんですか！」
「「悔しくないんですか！」」

黒峰と原口は黙ってろ。減給するぞ。

「逆になんで御剣さんはそんなに戦いたくないん？」
「女の子相手に殴る趣味は無い。だいたい、忘れてるかも知れんが、私は非殺傷とかは出来ん」

はやてが小首を傾げている。

「え？でもシグナムも出来ないけど、偶にフェイトちゃんと模擬戦やってますよ？」

「あいつは手加減と言うか、バリアジャケットを抜かない様にしてるからな。

そうだ。私にはバリアジャケットも無いじゃないか。これで出来ない理由は分かったな。さぁ、帰った帰った」

「明らかに後付けですね。」

そうこうしている内に店内に新たな人物がやってきた。

「そう言わず、お願いできないかな？」

「…クロノ？」

「なのはにも色んな経験は大事だし、君の実力を測るのにも丁度良い機会だ」

「…後者がメインだろう。知らんぞ。未来のエースが死んでも」

「君はそんな事はしないと信じてるよ」

「…はやて、なのは、正直に言え。こいつに言われたのだろう？」

「そ、そんな事無いよ？負けっぱなしで悔しいから、リベンジしたいだけだよ？」

「そ、そそそうや。なのはちゃんの希望を叶えてあげようとしただけや」

…ばればれだな。

「…分かった」

「本当か？」

「…あぁ。ただし、なのは、今持てる全力で懸かって来い」

「…はい。わかりました」

海鳴市　上空　封時封鎖強層結界内

「原口にアルフ、ユーノ、シャマル、ザフィーラによる結界か。そこまでするか？」
「そうでもしないと壊れそうなんでね」
「まぁいいか。気にせず戦えるって事で。さて、準備は良いか？なのは？」
「はい！いつでも！」
「…そうか。では始めよう。クロノ、合図を」
「制限時間無し、バリアジャケットの完全破壊、戦闘不能、戦意喪失をもって決着とする。
では…始め！」

「ディバインバスター！！！」

開始と同時に先制したのは、なのは。

「危ないな」

しかし、御剣もそれを読んでいた様にかわす。

「アクセルシューター！」

無数の桃色の光弾が御剣を襲う。
３６０度、御剣目掛けて光弾が襲いかかる。

「『破魔の赤薔薇（ゲイ・ジャルグ）』」

しかし、御剣も取りだした真紅の槍で迎え撃つ。

「どっちが勝つと思う？クロノ、はやて？」

「「御剣だな（さんや）」」

「え？何で？」

「なのはを軽んじている訳じゃない。だが、御剣にはあの魔法陣が有る。

君や僕の様に魔力変換資質がないなのはには、勝ち目は薄い」

「それに、なのはちゃん私と同じで近距離苦手やろ？

接近戦に持ち込まれたら、もう御剣さんのペースや」

しかし、御剣は『シオネの円環』も使わず、近距離にも入らず、なのはの攻撃をあしらい続けている。

「はぁ、はぁ、どう言う、はぁ、つもりですか？」

「何がだ？そちらの体力の消耗を待っているだけだが？」

「正々堂々勝負してください！」

「何を言っている？こうしてちゃんと勝負しているだろうが。

相手の疲れを待つのは基本戦術。お前だってバインドを使うだろう。それと同じさ」

「そんな…ずるい…」

「御託はここまでだ。そら、そろそろ行くぞ」

そう言うと、御剣は一気になのはの懐に飛び込む。

ガキャン！

「うあっ！」

シールドを展開するも、それもバターを熱したナイフで切るように切断される。
なのはもかろうじて、レイジングハートで受け止めたが、レイジングハートの杖部分にざっくりと切れ込みが入っている。

「あきらめろ。一人で来た時からお前の負けは決まっている」
「え？」
「私は今持てる全力で、と言った筈だが？」
「で、でも！そんな！私の我が儘に他の人を巻き込むなんて！」
「ふん。そんな程度の絆なのか。お前達の友情と言うのは」
「え？」
「我が儘を言った程度で離れていく友人など友人でも何でもない。喧嘩しようが、いがみ合おうが友人ならすぐに仲直り出来るだろう。

フェイトとは友達じゃないのか？クロノとは？ユーノとは？はやてだって頼めば君の方についただろう」
「でも、そんな事したら…」
「嫌われる、か？」

なのはが怯えたように身を竦める

「さぁ。切開の時間だ。膿を残らず吐き出すがいい。『照魔鏡（しょうまきょう）』」

御剣の手の上に一枚の鏡が顕れる。
何の変哲もない鏡だが、中には幼いなのはが映っていた。

「成程、幼少時、家族から相手にされなかった事が有ったのか。故にお前は誰にも迷惑を掛けないように、誰にも嫌われないように立ち回ってきた。
　穏やかで誰にでも好かれる明るい少女を演じ、「…やめて」自らの正義感の強ささえも利用して、好かれようとし、「やめて」その実、何かを悩み始めると一人で抱え込んでしまい、他人には一切相談せずに自分一人で解決しようとする「やめてったら！！！」」
なのはが大声を張り上げる。
「それの何がいけないの！！！私は一人で何でもできる！誰にも迷惑を掛けない！それはいけない事！！？」
「さてな、それは私ではなくフェイトに聞いてみると良い。自らを救ってくれた相手を助けようにも、それを相手が望んでいない。
　くくっ…なぁ、どう思う？フェイト」
　なのはがフェイトの方向を振り向く。
その表情は綯る様な、射抜くような視線をしていた。
「…やりすぎたか？」
「いいんじゃねぇの？っつうかお前外道過ぎ」
「どっかのド腐れ外道マーボー神父か」
「この機会に、他人に頼る事の大切さを教えておこうと思ったんだが…失敗か？」

## Ｓｉｄｅフェイト

なのはが私を頼ってくれていない事は気づいていた。
それでもよかった。私は…なのはの傍に…

「フェイト…ちゃん…」
「な…のは…」
「…」
「…」
「…」
「ごめんね。迷惑だったかな？」
「な、なんでフェイトちゃんが謝るの！？」
「ううん。私の押し付けで、なのはに迷惑が「そんな事無いよ！」え？」
「そんな事無いよ。フェイトちゃんの事が迷惑なんて、思って無いよ」
「…なのは、私はなのはになら、迷惑掛けてもらってもいいよ」
「え？」
「私はなのはに助けてもらったから。
今の私は、なのはの御蔭であるから。
なのはに頼って貰えるのは…嬉しい。
だから、なのはなら…いいよ」
「フェイトちゃん…」

「…で、そうなった訳か」
「…はい」
「フェ～イ～ト～ちゃ～ん」

…なのはがフェイトにべったりくっ付いている。

「…よかった…な？」

「…はい」

フェイトは華が綻ぶ様に笑った。

…いやいやいや。なんでそこでそんなに良い笑顔なんだ。

## 外伝・O☆HA☆NA☆SHIしようよ。（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：２０万～３０万ＰＶ御礼作品になります。
…お礼…？
なのは好きの人には申し訳ありません。刺さないで下さい。

なのはには他人に頼ることを覚えさせようとしたのですが…なんだろう？
ではまた次回。

『照魔鏡（しょうまきょう）』：対人宝具ランクＢ　レンジ１　最大補足１～４人

魔物や妖怪の正体を明らかにする、または人間の持つ魔性の部分を映し出す鏡。
これで覗かれると過去や考えている事がダダ漏れに。
どこかの外道神父に渡してはいけない。
別名、照妖鏡、ラーの鏡。

# 外伝・温泉だよ！全員集合！！！（前書き）

例によって馬鹿話です。

# 外伝・温泉だよ！全員集合！！！

海鳴市内　八神家　リビング

「温泉？」
「はい。私のリハビリついでに皆で行こうと思ってるんです。御剣さん達もどうですか？」
「かまわない。…前もこんな話をしたな。で、いつ行くんだ？」
「えっとですね…」

２００６年１２月３１日

「大晦日に温泉か」
「美女たちと温泉だ。何の文句が有る？」
「「いや、無いが」」
「なら黙っていろ。酔うぞ」

現在車で移動中。アースラスタッフのオペレーターＡの運転する車に乗っている。
闇の書事件解決一周年も兼ねて、なのは、フェイト、はやての関係者が集合している。
参加メンバーは高町家、ハラオウン家、八神家、それにアリサと月村家。
アリサとすずかには既に魔法の事はばらしたらしい。
高町家も然りだ。

海鳴市　郊外　海鳴温泉

「着いたようだな」
「ここか。古臭い宿だな」
「失礼だろうが。趣が有ると言え」

婦人の湯

「わぁ～～～～初めてや。こんなお風呂」
「成程。これは銭湯とはまた違った趣ですね」
「はやて、あれ何？」
「ん？あれは打たせ湯やね」

「そっか。『守護騎士（ヴォルケンリッター）』達もはやても温泉は初めてなんだ」
「フェイトちゃんは今年の初めに一緒に来たもんね」
「うん。まだ結構恥ずかしいんだけど」

殿方の湯

「露天風呂は無いのか」
「パンフレットに依れば有る筈だが…あのドアだろう」
「そうか。では行ってくる」
「言っておくが、女湯の露天風呂とは反対方面だからな」
「…なん…だと…？」
「覗く気だったのか。命知らずめ。士郎さんや恭也もいるってのに」
「僕もいるんだが」
「お前より士郎さんの方が怖い。見て見ろあの傷。歴戦の勇士って感じだ」
「確かに。筋肉も鍛えられていて無駄が無い。しかし君達もそれなりに鍛えているだろう」

「そうでもないよ。僕を含めて3人とも、ほぼ能力で反則使ってるから」
「…なんてスキルの無駄使いだ」

海鳴温泉　卓球場

「と、言うわけで温泉と言えば！」
「卓球か」
「Ｅｘａｃｔｌｙ.（その通りでございます。）」
「御剣殿、タッキュウとは？」
「台の上からボールが落ちないように打ちあうゲーム。相手の陣地にボールが入らなかったり、自分の陣地で2回ボールが跳ねても負け」
「むぅ。なかなかに高度な遊びですね」
「公式ルールはもっと面倒くさいけどね」
「籤作ったから参加する人は引いて～」

皆で籤を引く。3と書いてある。私の番は二番目らしい。

「では第一回戦！フェイトＶＳシグナム！」
「子供の部と大人の部で分けろよ」
「フェイトちゃ～ん！頑張って！」
「シグナ～ム！頑張れ～！」
「シグナム。私は負けられません。なのはの為にも！」
「私も負けるわけにはいかん。主の為に！」
「では」
「あぁ」
「「勝負！！！」」

台の上を凄まじい勢いでピンポン玉が行き来している。

「（ここにきて尚早い…目で見えない球が出てきた…
…今はかろうじて追えているが…いつまで続くか…）」
「（重い…一撃一撃では向こうの方が上。
今はスピードで誤魔化してるだけ…早急に決着を！）」

得点は両者マッチ。デュースは無しだ。
フェイトのライジングショットをシグナムが受け損ね、ロブ気味になる。

「貰った！」
「いいや。それも…作戦の内！」

フェイトが打ったスマッシュをカウンター気味に還すシグナム。
果たしてボールの行方は…

同時に審判（御剣）をみる両者。判定は…

「アウト。よってフェイトの勝ち」
「やった～～～！！！フェイトちゃん凄い！」
「な、なのはの応援の御蔭だよ」
「申し訳ありません。主はやて」
「ええよ。敵は御剣さんが取ってくれるから」
「いや、なんで私が」
「取ってくれんの？敵」

その上目づかいはわざとか？はやて…

「…わかったよ。フェイトとは…次か」
「その前に僕だが」

「第二回戦！御剣ＶＳクロノ！！！」
「さて、はやてに頼まれているのでね。さっさと終わらせてもらおう」
「初心者だからと侮ってもらっては困る。先程の一戦の間にルールは完全に理解した」
「では二回戦！始め！！！」

「で、瞬殺か」
「だってフォルト連発してたしな。クロノが」
「私…ほぼ立っていただけなんだが」
「くっ…何故だ！」

「第三回戦！俺ＶＳ恭也！」
「っていうか士郎さんは？」
「何か桃子さんと出て行った。今頃いちゃついてんじゃね？」
「お前ら俺に応援の台詞とか一切無しかよ」

「がんばってね。恭也」
「…あぁ」
「畜生！あんのリア充が！叩き潰してやるぜぇ！！！」
「わ～い。黒峰が凄く咬ませ犬っぽ～い」
「では始め！」

「…負けた…いや、いきなり球が消えるとか無くない？」

「「負け犬乙」」
「ふぅ。何とかなったな」
「お疲れ様、恭也。はい、お水」
落ち込む黒峰を尻目に、忍に甲斐甲斐しく世話される恭也。
「…試合にも勝負にも負けてるし」

「…第四回戦…すずかＶＳ美由希さん…」
「…一気にテンション落ちたな」
「はい始め」
「そして司会もぞんざいだ」
すずかが勝ちました。
「結果発表もぞんざい…」

「では準決勝一回戦、フェイトＶＳ御剣！」
「あ、立ち直った」
「そんなものだろ。黒峰だし」

「御剣さん、魔法戦は兎も角、負けません」
「こちらもはやてに頼まれているのでね。…負けんよ」
「では始め！」
一回戦に負けず劣らずの高速戦闘。

「…早いな…リミッターを外させてもらう！」
「え？あっ！」
「マッチ御剣！」

一瞬の隙をついた一球でポイントを奪う。

「リミッターなんて、してませんよね？」
「その場のノリだ」
「え？あ！嘘ついたんですね！」
「まさかこの程度で動揺するとは思わなんだ。すまん」
「ゆ、許しません！てい！」

しかし、興奮した所為か力み過ぎたフェイトの打球は、台に触れることなく床へ落ちていった。

「勝ったぞ、はやて」
「心理戦とか結構えげつないな御剣さん」
「あの程度で心理戦て。本気でやったら引かれるからやらん」
「本気でやったら、引かれる程えげつないんですね」

「次～恭也ＶＳすずか。すずか頑張れ」
「お前…司会だろ…」
「みみっちい…」

「てい！」
「それ」
「えい！」

「なぁ、なんでいきなりこんなほのぼのしてるんだ？」
「妹の友人と、友人の兄だからな。お互い遠慮してんじゃね？」
「あ、恭也が勝った」
「これで私の相手は恭也か」
「御剣、勝て」
「…お前はなんか色々と駄目だな。黒峰」

「決勝戦！御剣ＶＳ恭也！！！」

ちなみにすずかＶＳフェイトはフェイトが辛うじて勝った。

「ふ…恭也、いつかお前と決着を付ける日が来ると……特に思って無かったぜ！」
「御剣さん…俺もこんな日が来ると……思ってませんでした！」
「…では始め～」

「（くぅ…なかなかな強さ…こやつ…出来る！）」
「（神速についてきた！？くっ…勝てるか！？）」

「なぁ、これって卓球だよな？」
「あぁ」
「何で人が一瞬消えたり、球が消えたり増えたりしてんの？」
「…そうだな」

「（ここだ！）食らえ！必殺裏面チキータ（バックハンドの横回転

系のフリック）！」
「なっ！くそ！」

甘く打球が返る。
「はっ！ていや！」

御剣のバックハンドスマッシュが決まる。
「ふっ…ペンホルダーは伊達では無い！」
「くっ…まだまだ！」

恭也はしゃがみ込みながらラケットを縦に振り下ろし、ラケットの裏面で球を切り回転をかける。

「あ、あれは！」
「知っているのか！黒峰！」
「あれは王子サーブ！福原愛選手が多用することで有名なサーブだ！」
「無駄無駄無駄無駄カットカットカットカットカット！！！！！」

しかし御剣はペンドラからカット主戦型にスタイルを変えて失点を失くす。

「ていうか、ペンでカットマンて」
「大半の読者おいてけぼりだろ」

殿方の湯

卓球で随分と汗をかいたので温泉に入り直す。

「…そう言えば、何故汗をかくと分かっているのに、温泉の後は卓球と相場が決まっているのだろうか…」

誰ともに無く独り語散る。

「さっぱりしたから卓球しようって事じゃないですか？」

「あぁ、そういう考えも有るな」

…ん？何故返事が…

「…なんでさ」

「何がです？」

さも私がおかしい事を言ったようにはやてが返してくる。

そう、はやてが。

「一応聞くがはやて、君は何故男湯に居るんだね？」

「ここの温泉１０歳まではどっちに入ってもええんですよ。

折角なんでこっちのお風呂はどんなんかな～と」

「…そうか」

意図せずに肩が落ちる。何故こうも羞恥心に欠けるのだろうか。

去年から随分と言ってきた筈なのだが、警戒心と言う物をもう少し持ってほしい。

もう第二次性徴も始まるころだろうに。

そのなりで平然と男湯に入る、とかは慎むように言うべきか。

「ん？」

はやてがこっちをじっと見ている。なんだか気恥ずかしい。

「…どうかしたか？」

「いえ、御剣さん筋肉凄いな～、と」

はやて、その歳で筋肉に目覚めるのはどうかと思うぞ。

「ザフィーラの方がよほどだと思うが」

バリアジャケットなど着た日にはピッチピチの筋肉が…言っていて気分が悪くなった。

「でもザフィーラはいつもは犬ですから」

…既に主からも犬扱いか。哀れな。

ん？もしや男に妙に警戒心を抱かないのもそのあたりに起因するのか？

「さて、私は露天風呂の方行ってきますけど、御剣さんは？一緒に行きません？」

「…私にどう答えろと言うのかね（ボソリ）」

「え？何か言いました？」

「いや、何も。私はもう暫くこちらの湯につかっているよ」

「そうですか。気が向いたら来て下さいね」

そう言うとはやてはペタペタと露天に続くドアの方へ歩いていく。

「きゃっ！」

と、足を滑らせたのかバランスを崩すはやて。

「っ！」

急ぎ後ろに回って支える…が、私も濡れる足場に踏ん張りきれず、倒れてしまう。

「はやて！」

とっさにはやてを抱えて庇う。

「…無事か？どこかぶつけたりしなかったか？」

「え？あ、はい…あ、ありがとうございます」

「そうか、よかっ「お前ら何してんの？」…た…」

はやてに怪我が無いと知り、一息つく間もなく降りかかる声。

油の切れたブリキの玩具の様に回らない首をなんとか廻らせると、そこには黒峰が腰タオルで仁王立ちしていた。

「…え～と、あぁ、うん」

転んだ拍子に肌蹴たのか、巻いていたバスタオルが取れてしまっているはやて。

湯船から飛び出たせいで何も纏っていない私。

そして体を起こしたせいで、はやては私に跨る形になっている。

その2人を交互に見た黒峰は何かを納得したように頷く。

「…何を納得したのか一応聞こう」

「その…うん。ごゆっくり」

カラカラカラ…パタン

無情に響く引き戸の音。

「待て待て待て！！！話を聞け黒峰ぇえええええええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！」

叫びは無情に響き渡るも、脱衣所の黒峰は何も言わず、浴衣を着た後顔を出し、

「大丈夫。俺には分かってるよ御剣。愛の前には年齢なんて些細な事さ。…頑張れ」

等と似合わない口調でほざき、そのまま出て行った。

「…はやて、とりあえず退いてくれるか？」

「あ、はい」

…この後どうしたものか…

結局、黒峰は何を言っても聞いてくれず、はやてに賛同を得ようにも何故か、ぼぉっとして返事をしてくれなかった。

…私が何かしたか？

## 外伝・温泉だよ！全員集合！！！（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：外伝・温泉編です。

新年からはオリ編に突入する予定です。

ではまた次話で。

# 外伝・御剣ＶＳ黒峰

海鳴市　市内　市街地　御剣古美術店

「そういやな、」

今日も遊びに来ていたはやてが何の気なしに口を開く。
それが今回の引き金になるとも知らずに。

「御剣さん達って誰が一番強いん？」

…その瞬間、店内の空気が凍った。

「…はやて、そう言う事は一概に決まらない物なんだよ」

黒峰が困ったように口を開く。
ここは火消しに回った方が良いだろう。

「そうだぞ、はやて。状況や条件、その他諸々の要素の絡む戦闘で、誰が一番とかは決まらない」
「そうそう」
「まぁ、実際戦えば最後に立っているのは私だろうがな」

最後に事実を添えるのも忘れない。
だが不思議な事に、私の台詞と時を同じくして空気に亀裂が走る。

「み、御剣。そう言う事を言うと程度が知れるぜ？」

何だろう。なんとなくだが、あくまでなんとなくだが。
私は今馬鹿にされたのだろうか。
言われっぱなしと言うのは気に食わないので言い返す。
「ふん。自信が無いのか？まぁ、私は事実を言ったまでだが」
「く、くくくくくく」
黒峰の顔に影が差す。
「いいだろう。分かりやすくはっきりさせよう」
「私は一向に構わん！！！」
と、言うわけで第一回、御剣古美術店最強決定戦、御剣ＶＳ黒峰。
「原口さんはええの？」
「あ、うん。僕は戦闘向きじゃないしね」
そんな原口は戦闘用結界担当。
いつぞやの、なのは戦と同様の結界が張られる。
「ねぇ、なのは。なんでこんな事になっているの？」
「なんでも口喧嘩からしいよ。どっちが強いかって」
「あぁ、そう言う事。私も御剣さんとは１対１で戦ってみたいかも」
「フェイトちゃん、意外とバトルマニアだよね（汗）」
「ルールは、以前のなのは戦とだいたい同じだ。
制限時間無し。相手の戦意喪失、戦闘不能で終了。準備はいいか？」
「いつでも」

「どこでも」
「…本当に喧嘩したのか？君たちは？まぁいい。僕が合図したら開始。いいね？」

二人ともに頷く。
クロノは十分に2人から距離を取る。

「では…始め！」

瞬間、甲高い音が響き渡る。
御剣が取りだした絶世剣デュランダルと、黒峰の赤黒く染まった拳がぶつかり合った音だ。
デュランダルはその切れ味は大理石をも切り裂くと伝えられる。
しかし、切れない物はどうなるか。
答えは単純、弾くのだ。
密度を増し、硬度を高めた黒峰の拳は大きく弾かれ、黒峰が体勢を崩す。
畳み掛ける御剣。しかし黒峰も体を硬化させ防ぐ。
一撃ごとに吹き飛ばされる黒峰。しかし、全くダメージは受けていない。

「ちっ」

御剣は絶世剣を仕舞い、新たに紅い槍を取り出す。

「『破魔の赤薔薇（ゲイ・ジャルグ）』！」

結界の外で観戦中のなのはが竦む。

「うぅ…あれは駄目」

「あぁ、なのは、結構危なかったもんね」

ゲイジャルグの効果は魔術的な効果の無効化。
その効果は宝具であれど無効化する程。
確かにそれであれば、黒峰の硬化も無効化できる。
しかし、黒峰もただ黙っていない。
離れた距離を利用して、拳や足を模した塊を御剣に向け撃ちだす。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！！！」
「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄！！！」

その全てを紅槍で薙ぎ払う御剣。両者は全く均衡していた。

「これって決着付くのか…」

クロノがぼやく。

「まだどっちも本気じゃねぇよ」

ヴィータがそれに気付き、答える。

「そういえば君たちは彼らの本気と言うのは見た事あるのか？」
「いや。蒐集中は、黒峰も御剣も底は見せてない感じだったけどな。
御剣の方は防衛プログラムん時が一番本気だったんじゃねぇの？」

「オラァ！！！！！」
「無駄ぁ！！！！！」

両者共に埒が明かないと判断したのか、睨み合ったままの静寂が

続く。
先に動いたのは黒峰。右手に粒子を集め、槍の様な形に形成する。
「あれだとまた無効化されるんじゃ？」
「何か考えがあるんだろう」
クロノが言った通り、黒峰は槍を構え、
「死にさらせぇぇぇぇぇぇ！！！」
投擲した。
そして何本も同じ様にして投げつける。
亜音速で飛来する黒槍。
「チッ、『燭天覆う七つの円環（ロー・アイアス）』！！！」
仮にゲイジャルグで薙ぎ払っても、加速した粒子に襲われるだろう。
そう予想した御剣は、座から華盾を取りだす。
あわや命中する直前、御剣の右手に光り輝く大輪の花が咲いた。
花に触れた端から砕け散る黒槍。
しかし花も徐々に散っていく。
「これってどっちが勝ってるの？」
「黒峰だな。あの華盾は丈夫だが、徐々に削られている。
御剣が何か打開策を見せない限りは勝ち目は無いだろう。
ま、御剣も黙ってやられる口では無さそうだが」
クロノが御剣の方へ視線をやる。御剣の左手には一冊の本が有った。

「幽界にありて隔てられ　時において今はない
だが遠くにありても　風だけは今も故郷にある
我が故郷の精霊達よ　故郷の風よ　帝国を守れ　帝国の誇りを守れ
偉大なる故郷の大地
緑の王にして柊の我は嘆願す　ここなるは故郷の土　ここもまた紫の帝国　永遠の落日の国
我は大地と契約せり　一人の農夫　地を耕し　万物の均衡を図りし一つの天秤
古き盟約によりて　我は命の麦穂を刈りとるものなり　生もて次に伝えたり
完成せよ　『双面の護り』。」

黒峰の周囲に高速で飛びまわる2つの円盤が顕れる。
円盤は無限の幻影を生み出し、あらゆる死角から黒峰を攻撃をする。

「くっ！」

黒峰も攻撃を中断せざるをえず、黒槍の雨は止んだ。

「我は全ての母の母　美の極北　全ての恋の源たる　赤の赤に嘆願す
それは一人の女より始まる女の鎖
赤にして薄紅の我は　万古の契約の履行を要請する
我は母を助けるため　命を与えられし一人の娘
クラン・ロールより現れて　歌を教えられし一人の情熱
我は生み出す贖罪の檻　我は号する心を縛る美しき牢獄
完成せよ　『絶愛の檻』！」

すかさず御剣も畳み掛ける。無数の茨が顕れ、黒峰を縛り上げた。

「チェック！」
「まだまだぁ！」

しかし黒峰も茨を引き千切り、円盤を撃ち落とす。

「しぶといな…
清聴せよ！　アーデラスウード　アーデラスウード
邪悪なる暗黒神　美と地獄の王に太古の同盟を持て要求する
大魔術師シモンの系譜、炎熱の魔女の妻たる我は　地獄の炎をもて敵を焼く
完成せよ！　『地獄の炎』！」

御剣は邪悪なる暗黒神、美と地獄の王、堕落したもの、蹂躙するもの、ひしめくもの、様々な名を持った邪神に呼びかけ、赤と黒の火柱を生みだした。
瞬く間に黒峰はそれに呑み込まれてしまう。

「ちょ！あれ黒峰さん死んだんとちゃう！？」
「あぁ、はやて、大丈夫だよ。あいつ、絶対あれ位じゃ死んだりしないから」

ヴィータの言うように火柱が止んだ後には黒光りする丸い塊があった。
罅が入り、砕け散る球体の中からは殆ど無傷の黒峰が出てくる。

「っぶねぇな」
「時よ！」

御剣が叫んだ瞬間、黒峰が吹き飛ばされる。

「てめっそれは反則だろ！」
「はっ！戦いに反則など無い！勝てばぁ！よかろうなのだぁぁぁぁぁ！」
「いいぜ、分かった。…ならば！」
「「時よ！」」
「止まれ！！！」
「加速せよ！！！」

そして一瞬でボロボロになる両者。
黒峰の至る所には切り傷が。結構深い傷もある。
御剣の至る所には痣が。左腕は有らぬ方向を向いている。

「ってえな。『屈折延命（ハルペー）』や『必滅の黄薔薇（ゲイ・ボウ）』まで持ち出しやがって…」
「そっちこそ馬鹿力でぶん殴りやがって…肋骨やら左腕やらあちこち折れただろ」

黒峰の傷から流れる血は止まる気配を見せず、御剣の動きはどこかぎこちない。

「次で最後か」
「お互いにな」

御剣は乖離剣を取り出し、黒峰の背後には大剣を持った巨人が顕れる。

「『天地乖離（エヌマ）す！』」
「『漆黒纏（ジェノサイド）いし！』」

両者の攻撃体制移行で空間が軋む。
しかし、その動作ですらお互いにダメージを受けていた。
御剣は体を捻った際に血反吐を吐き、黒峰は体中の傷から血が噴き出し風に舞う。

「開闢の星（エリシュ）』！！！」
「撃滅の拳（ブレイバー）』！！！」

海鳴市内　市街地　御剣古美術店（臨時休業）

「なぁ、やっぱお前ら馬鹿じゃね？」
「何がだ」
「必死こいてた俺達に何たる言い草。謝罪と賠償を要求する」

2人は現在治療中。
御剣の怪我は、肋骨が肺に刺さっていたのに体を捻ったせいで悪化。
大量の吐血で失った血液を補うために安静。
黒峰の怪我は、ゲイ・ボウの呪いは御剣が解呪したが、ハルペーによる傷は縫合後の自然回復待ち。

「いや、最後の方とか、なのはやはやてが卒倒してたぜ？
フェイトも顔面蒼白だったし」
「…それはすまない事をしたな」
「反省してます。だが後悔はしていない」

ちなみに結局引き分け。

両者K．O．だ。私も黒峰も失血多量で気絶。
映像を見ても倒れたのは全くの同時だった。

「次は俺が勝つ」
「私はもうやらんぞ。疲れるし」

ふぅ。管理局に手の内全部晒すのも癪だしな。

時空管理局本局　会議室

「以上が、クロノ・ハラオウン執務官から提出された、彼らの戦闘記録です」
「…凄まじい、としか言えんな」
「えぇ。しかし、彼らを上手く利用できれば管理局に多大のメリットが得られるかと」
「…いいだろう。引き続き監視するようハラオウン執務官に通達せ

」よ

## 外伝・御剣ＶＳ黒峰（後書き）

あとがき（という名の言い訳）：外伝・最強決定戦編です。
まぁ、作中通り決着なんてつかないんですけどね。

次は短編集でしょうか。
ではまた次話で。

# 外伝・流星（なのは）落つ

２００７年　海鳴市内　市街地　御剣古美術店

「みみみみみみみみみ御剣さ～～～～～ん！！！！！！！！」

私が新しく仕入れた物を目録にまとめていると、フェイトが店の中に突撃して来た。
フェイト、ドアが壊れるから止めてくれ。ボロく見えるけど結構な値するんだ、それ。
とりあえず水でも与えて落ち着かせようと腰を浮かせた途端、凄い勢いで引っ張られてしまう。
私、太っては無いけどそれなりに目方有るんだが。
黒峰、原口、留守番よろしく。

時空管理局本局　集中治療室前

「で、なのはが怪我したから私に治してほしい、と」

首がひっこ抜けるんじゃないかと思う程頷いているフェイト。
確かもうすぐ執務官試験の筈なんだがいいんだろうか、勉強しなくて。

「だから、『医神携えし蛇の杖（カデュケウス）』で治せ、と」

本当に千切れるんじゃないかと思う程加速するフェイトの頷き。

「だが、ここは病院だろう。既になのはの治療も終わっている。

私が手を出す事などもう無い」
「でも！なのははまだ目が覚めてなくて！」
「そのうち目は覚めるだろう。待っておけ。それより、いいのか、執務官試験」
「それよりなのはが！」
「自分のせいで落ちたと知ればなのはは落ち込むぞ？」
その台詞で俯いてしまうフェイト。
「はぁ。しかし、何が原因で怪我をしたんだ？何か無茶でもしたのか？」
しかし、フェイトは力無く首を振る。
「前に御剣さんに疲れた所を突かれてから、なのははちゃんと休息は取ってました。
随伴していた部隊の人に聞いたら、直前まで反応が無かったのに、突然人型の未確認（アンノウン）が現れて、部隊は大規模魔法で半壊。
動けなくなって襲われかけた人を庇って、なのはは怪我をしたって」
「…そうか。なのはの自業自得と言う事は無さそうだな。
分かった。これを」
御剣は小瓶を取り出しフェイトに渡す。
「御剣さん、これは？」
「エリクサー。傷だけならすぐに治る。なのはの目が覚めたら飲ませろ。
ただし、その後は入院期間と同じだけ休ませろよ。傷は治るが、体力までは完治しない。

それが約束できるなら渡す」
「分かりました。絶対に休ませます」
「ならいい。ここまでしたんだ。執務官試験には受かれよ」
「は、はい！」

執務官試験

時空管理局本局　なのはの病室

「なのは、お願いだから休んでて」
「でも、もう大丈夫だから。元気だから。フェイトちゃんはもうすぐ試験でしょう？」
「そんなのより、なのはの方が大事だよ。
御剣さんの御蔭で傷は治ったけど、体力はまだ回復してない筈だよ」
「だから大丈夫だって。お医者さんからもお墨付き貰ってるし」

２人が揉めているとドアが開き、御剣が入って来る。

「やれやれ、やっぱりな。そろそろ訓練させろとか言い出すと思った」
「御剣さん！御剣さんからもなのはに言って下さい！」
「だから大丈夫だって！もう何ともアイタッ！」

なのはの脳天に御剣の拳骨が入る。
まるで漫画の様なたんこぶを押さえて、なのはは唸っている。

「み、御剣さん…それはやりすぎじゃ…」
「フェイトが甘やかしすぎなだけだ。

なのは、これ以上駄々を捏ねるならベッドに縛り付けるぞ」
「で、でも、皆が怪我をしたのはわたしのせいだからぁ痛い！！」
2発目の拳骨がなのはに下る。
「ふん。なのは。お前は神様か何かか？お前がどれだけ強ければ誰も傷つかないんだ？」
「み、御剣さんには分からないんです！誰かが目の前で傷ついて、自分には何も出来ない悲しさが！
そんなのはもう嫌だから！強くなりたいんです！」
「…少し…頭冷やそうか」
数分後、部屋の隅で耳を塞いで震えるフェイトとベッドにぐったりと横たわるたんこぶだらけのなのは、それに未だ憤懣遣る方無い様子の御剣がいた。
「よ、嫁入り前の女の子の頭を小突きまわすなんて…」
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい母さんごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」
「戯けが。まずは目の前のフェイトが傷ついている事に気づけ」
「御剣さんのせいでフェイトちゃんが傷ついてますけど」
御剣が拳を握るとなのはが竦む。条件付けは済んだようだ。
「自己管理も出来ない奴に誰かが救えるものか。誰かを救いたいなら、自身は常に万全であれ。
生き急ぎ過ぎなんだよ。どいつもこいつも」
そう言いながら御剣はなのはに氷嚢を渡す。

「…はい」
「まぁ、分かったなら良い。正規の入院期間が済むまで大人しく寝てろ」

# 外伝・流星（なのは）落つ（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：外伝・なのは事故編です。
毎日更新を目指して来ましたが、流石に年末はきついですね。
新年からは新章、ＳｔＳへ繋ぐためのオリ編になります。
ではまた次話で。
皆さま良いお年を。若しくは新年明けましておめでとうございます。

# 4章－1　仮面の男

第３６管理世界

無数に聳える無数のビル群、その中でもひと際大きいビルの屋上に彼らは居た。
彼らはこの世界の最高権力者。人生の栄華を極めた老人たちである。

「管理局への通告は？」
「５時間前に完了しました」
「よろしい。これで我々は独立戦争に突入する事になる」
「だいたい、何故我々が兵器を廃棄せねばならないのだ」

彼らは数年前、時空管理局と名乗る組織から接触を受けた。
時空管理局の要求は２つ、管理世界となる事、質量兵器、魔力に頼らない兵器の廃絶。

「先に次元世界へ至ったからと言って、大きな顔をされてはたまらん」
「それは私も同感だね」

突如として聞き覚えの無い声がする。
ここは関係者しか立ち入れぬ会議室。数名の護衛を除けば彼らしかいない筈だ。

「だ、誰だ！？」

開け放たれた窓縁に男が立っている。
身の丈は2mに満たぬ程。しかし、その手足は異様に細長く、針金でできた人形を思わせる。
何より異質なのはその白い仮面。
十字の目に耳まで裂けた口。右目の下には涙を思わせる石が嵌っている。

「こんにちは。はじめまして。さようなら。貴方達の死神です」
「ふざけた事を！誰か！こいつをひっ捕らえろ！」
「無駄無駄」

男はそう言うと空中に身を投げ出す。

「ば、馬鹿め。ここが地上何階だと思っている」
「だが待て、今の男、どうやってここまで来たのだ？」
「奴は管理局の尖兵では？空戦魔導師であればこの程度の高さ…」

『残念。管理局なんて関係無いよ』

外から大音声が響く。

「ど、どこから！？」
「あそこだ！上！」

先程の男は船の様なものに乗っている。その船の外装は不気味な事に骨で出来ているようだった。
しかし、場違いにも程がある。その船は空を飛んでいるのだから。

『君達に言う事はたった一つ。死んでくれ。自分で。面倒くさいし』

「ふざけた事を！」
「何様のつもりだ！」

『神様さ。で？さっさと死んだ方が身の為だと思うよ？まぁ結果的には変わらないけど』

「断じて否！」
「そうだ！我々は管理局などに屈さぬ！これはこの世界の総意である！」

しかし男はおどけるようにこう言い放った。

『あぁ、わかってはいたが、悲しいな。悲しい。悲しい。悲しすぎる。
こんな悲劇は他に無い』

ご丁寧に泣き真似までして見せる。

「何を言っている！？」

『あぁ、折角だから教えておこう。
私は管理局の尖兵などではない。言ったろう？君達この世界の住人の死神さ』

そう言うと男は両手を高く掲げて詠唱する。

『其は混沌より出でし　闇と夜の落とし子　死（タナトス）　その名を持って
汝らに終末を。』

『終焉の時（ジ・エンド・オブ・デス）』

「ぐっ！？」
「がっ！？」
「これは！？」

それは純粋な死と言う概念。生きとし生けるもの全てに約束された終末。
そんな物を受けて生きて居られる生物などいない。仮面の男が乗る船を中心に広がる死の波動。
それが星の裏にまで達した時、この世界に生きる物はいなくなった。
人間はもちろんの事、微生物の一匹に至るまで。
たった一人の例外を除いて。

「さてと、ここも終わり。まったく。なんて時代だよ。あの馬鹿共の子孫がこんなに広がるなんて」

２００９年４月１１日　海鳴市　聖祥付属中学校　入学式会場

「進学おめでとう、はやて。ついでに、なのはとフェイトも」
「ありがとうな、御剣さん。と言ってもエスカレーター式やからそんなに感慨無いんやけどな」
「相変わらずな扱いだね。もう慣れたけど」
「うん。そうだね」

なのはとフェイトは若干げんなりした様に呟く。
闇の書事件から3年。はやては完全に回復した。車椅子も不要になり、元気に駆け回っている。
一方、なのはは去年、空から落ちかけた。
依然正体不明の未確認（アンノウン）に襲撃を受け、入院を余儀なくされた。

まぁ、入院を強要したのは私とフェイトの約束だが。
その約束を忠実にこなしすぎたせいでフェイトは執務官試験に落ちた。
訓練に行こうとするなのはを引きとめる為に頑張りすぎたらしい。
まぁ、私が出て行って拘束したが。
2回目で受かりはしたものの、1回目で落ちたのは、なのはのせいでは無いとは言い切れない。
まぁ、愛ゆえにフェイトはなのはにどうこう言ってはいない。
しかし、入院期間を終えてからの訓練で魔導師ランクがSに上がるとは。やはり高町家は戦闘民族なのだろう。
なのはの怪我の事で、はやては管理局に入る気が完全に失せたようだ。
まぁ、年頃の女の子が進んで怪我をしそうな所には行くまい。元々はやては後方支援だから怪我はしにくいが。

数日後　海鳴市　市内　八神家　リビング

「しかし、もう4年か」
「そうですね。でも御剣さん達に出会ってまだ4年しか経ってないんですね」
「濃い日々だったしな。だがはやても大きくなったものだ」

座っているイメージが多かったせいか、立てるようになってからは顕著に大きくなっていると感じた。

「御剣さんは見た目変わりませんね」
「20半ばで老け始めたら、それはそれでショックだよ」

居間を見渡す。子犬フォームのザフィーラがヴィータに遊ばれている。

庭に視線を向ければ、シャマルが洗濯物を干していた。

「そういえばシグナムは？今日は稽古の日だったか？」

「いえ、何でもクロノ君に頼まれて管理局のお手伝いに行くとか」

「は？クロノが？」

「何でもベルカの古い遺跡が見つかって、碑文の解読の手伝いって言ってました。

戦闘とかもないやろうし、夕方には帰ってくるって」

「…本人が良いなら何も言わんがな」

## 4章－1　仮面の男（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：皆さま明けましておめでとうございます。
新章オリ編です。
A、sで仮面の男が出なかったのは、このオリ編のためだったりします。
道化の仮面の男って一々書くのもなんですし。
なお、なのはとフェイト、はやての出番はこの章では今回で終わりです。
ではまた次話で。

# 4章ー2　碑文

時空管理局本局　資料保管室

一枚の石板を前に、シグナム、ユーノ、クロノの3人が集まっている。

「これがその碑文だ」
「古代ベルカの文字で書かれた碑文石（エピタフプレート）。
難解な語句や言い回しが多くて解読は難航している。
シグナム達古代ベルカの騎士の意見も聞きたくて来てもらったんだけど、どうかな？」
「…だいたいで良いなら読める」
「本当！？じゃぁお願い！訳して欲しい！」

「分かった、訳すぞ。
それは凄烈なる死の抱擁。熾烈なる狂乱の宴。
王は宴を催した。戦勝の宴。虐殺の宴。
王が招くは1人の道化。道化は唄う、王の愚劣を。
王は怒りて斬刑に処す。道化の首は尚も唄う。
王の愚劣を。王の暴虐を。王の浅慮を。
道化の首は呪いを残す。王を呪い、国を呪う。
道化は死。死の権現。その名は…ここからは読めないな。
文字自体が崩れてしまっている。意味を成していない」

クロノが考え込んだ後口を開く。

「…どういう意味だ？何かの物語か？」
「ううん。それは無いよ。仮にも王クラスの遺跡から見つかった碑文だ。
もしかしたら、あの遺跡の持ち主の死因に関係するのかも」
「恐らくは戦乱期の物だろう。碑文中にも戦いに関する文が有る。それ以降王と言えば聖王になるしな」

「と言った内容でした」
「それは喋って良いのか？機密とか」
「寧ろ意見が聞きたいそうです。御剣殿はどう思われますか？」
「王が病気で死んだのを、物語風に准えただけの様な気もするが、それだとわざわざ碑文にする意味が無い。
何かの警告か？」
「では今回王の墓が暴かれた事で呪いが漏れると？」
「さぁ？その時は管理局に頑張ってもらえば良いさ」

海鳴市　市街地　御剣古美術店（元・廃ビル）

「君に協力を要請に来た」
「もう今月の分の保護観察日誌は出したろうが。帰れ。原口、塩。袋ごと投げつけろ」

１ｋｇの塩を袋ごと原口が投げつける。

「そぉい！」

難なくかわすクロノ。まぁ、当たるとも思って無かったが。

「危ないな。まぁ話を聞いてくれ」
「だが断る」
「君のその台詞も何回目だろうね」
「お前は今まで食べたパンの枚数を覚えているのか？」
「…君は碑文の事を覚えているか？」
「あぁ、シグナムが解読したんだろう？何だ？本当に呪いが漏れたか？」
「その通りだ」
「…なん…だと…？」
「第３６管理世界。近年次元航行技術を開発した世界で、管理局が接触したが、それに抵抗。
あわや戦争になりかけた、いや、なった」
「管理局も結構物騒だよな。で？」
「しかし、いざ次元航行部隊がその世界を訪れると、その世界全ての人間、いや、全ての生命が死滅していた」
「待て。それで何故呪いの話が出てくる？」
「被害者達には全くの外傷が無いにも拘らず、ほぼ同時の死亡時刻だった。
大規模な魔法行使でもあんなことにはならない」
「誰かが特殊なロストロギアでも使ったんじゃないか？」
「…君が言うとなんだかな。そういったロストロギアが今まで観測された事は無い。
だが、もしかすると、墓を暴いた際、なんらかのロストロギアが流出した可能性もある。
…それに証拠が有る」

そう言うとクロノは投影スクリーンに一枚の写真を写す。

「これは？」
「さっき言った世界の街中の監視カメラの映像だ。少し拡大しよう。

…ここだ」

クロノが映像の有る一点を指し示す。
そこには、あからさまに怪しい人物が映っていた。

「ピエロの仮面？」
「そう。道化師の仮面だ」
「成程、碑文にある道化の件か」
「そうだ。タイミングから考えても否定はしきれない」
「だが、道化が呪ったのは王とその国だろう？何故全く関係ない世界を滅ぼす？」
「それはわからない。…御剣、君のロストロギアの中に魔法が全て載っている、という本が有ったな。
少し調べてくれないか？」
「『大魔導原典（グラン・グリモワール）』か。まぁそのくらいならいいが。
詳細を言え。被害者に外傷は無いんだったな。後、範囲は星単位で無差別でいいな？
そして人間だけではなくあらゆる生物が死滅、と」
「あぁ。星全体の生物がほぼ同時に死んでいた」
「少し待て」

『大魔導原典（グラン・グリモワール）』のページが独りでに捲れていく。
数秒後、ピタリと止まったページを見て御剣は言った。

「…見つけた。が、何とも趣味の悪い…」
「早いな」
「それ程の業となれば数は少ない。『終焉の時（ジ・エンド・オブ・デス）』だ」
「で、それはどんな物なんだ？」
「死の概念を相手にぶつけて殺す業さ。範囲自体は任意だが、対象域中の生物は例外なく死ぬ。

節操の無い業だ。ただ、範囲に比例して消費する魔力も大きくなる。
地球サイズの惑星1つとなると私でも少しきついな」
「…実は君がやったんじゃないだろうな？」
「私は次元航行は出来ないし、第一やって何の得が有る？」
「それもそうだ。謝罪しよう。…使用者は分からないのか？」
「無理。これは辞典みたいなものであってデータベースじゃない。
そっちはユーノに当たれ」
「ありがとう。協力に感謝する」
「帰れ。そして二度と来るな」

しかし、またもや私達は管理局に巻き込まれる。新たな事件、死
の道化師事件に。

「やっぱ塩撒いとくか」
「碌な話じゃ無いと思ったが。やっぱあれか。疫病神か」

…私の幸運（ラック）のせいか？

## 4章－2　碑文（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：4章2話です。
オリ編、と言う事で設定や話の流れに破綻が有るかもしれませんが、容赦なくご指摘ください。
なお、作中での疑問が有ればネタばれにならない範囲でお答えします。
次話では新キャラ（…と言っても原作キャラですが。）が登場します。
ではまた次話で。

# 4章－3　死の道化師事件

海鳴市　市街地　御剣古美術店

「君に協力を要請に来た。…断られようと何度でも来るぞ」
「だが断…先手打つな。まぁいい。話せ。聞くだけ聞いてやる」

応接室まで案内し、クロノと向かい合って座る。

「例の道化師の件だが、どうやらまた出たらしい。また別の管理世界でも星丸々が滅んだ。
管理局としても、この事態は看過しておくわけにはいかない。
事件名は死の道化師事件に決まった」
「星丸ごとねぇ。豪快な話だな。ヒトラーも毛沢東も真っ青だ。
まぁ、頑張ってくれ」
「…この話を聞いても協力する気は無いのか」
「無い。私にも仕事は有るし、わざわざ他の世界の面倒など見ていられるか」
「…これを」

クロノは紙切れを差し出す。小切手だ。

「…これは？」
「受けてくれればそれだけで、これだけ出そう。うちに支給された今回の件の捜査費用の1／3だ。
ちなみにアルカンシェル一基に相当する」
「高く買ってくれたものだな」
「こちらとしても出せる限界の金だ。どうだろう？」

「…扱いは完全なスタンドアローン、乃至ワンマンアーミー。いかなる時においても誰の指揮下にも入らん。
能力使用に制限は無し、能力使用によって破壊された物品に関しては管理局が負担。
私達とはやて達への監視の緩和。監視期間の残り3年を1年にしろ。
こんな所か。これを条件に受けよう」
「わかった。全て通るだろう。5分程待ってくれ」

そう言うとクロノは投射モニターを開き、何事か打ち込んだ後こちらに向き直る。

「身分証明書を発行する。それと、暫くはアースラに乗ってもらう事になるだろう。
2、3日後に出発だ。準備しておいてくれ」

ピピピッ

「来たな。…全ての条件の通過、後、これが管理局世界での身分証明書になる」

そう言うとクロノは端末を3つ渡してくる。

「だが、ワンマンアーミーに関しては、管理局(こちら)からも1人、付けさせてもらう」
「監視か。まぁそれくらいなら良いだろう。そいつの名前と役職は？」
「ティーダ・ランスター三等空尉だ。首都航空隊からの出向となっている」

…どっかで聞いたような？

数日後　アースラ内　転送ポート

「初めまして。ティーダ・ランスター三等空尉であります。今後、よろしくお願いします！」
「よろしく、ランスター三等空尉。私は御剣　仁。管理局特別執務官補佐だ」

　このあり得ない官職は、要するにクロノの補佐官と言う事が言いたいらしい。
有事だけとは言え、執務官に準ずる役職らしく、一応私は二尉扱いだそうだ。

「彼は元々首都航空隊所属なのだが、今回の件は如何せん人手が足りなくてね」
「まぁ、それは建前で、クロノ執務官がご執心な協力者を監査して来い、とも言われましたがね」
「…それは言っていいのか？」
「えぇ。私にはどうでもいい事ですから。事件解決の為にも、そんな事は後回しでいいんです」
「何とも良い性格だな」

「で、どこに向かっているんだ？」
「調査の結果、今回の2件には共通点が有る事が判明した」
「共通点？」
「いずれの世界も、その世界の最高権力者の先祖があの世界出身だったんだ」
「あの世界…遺跡のあった世界か。…成程。あの国の末裔の国って事か」

「あぁ。管理局が発見したその条件に合致する世界は3つ。残念ながら実際はもっと多いだろう。未発見の世界にも末裔が存在する可能性は有る。
僕達が向かっているのは3つの内の1つ、前2件の世界から最も近い、第31管理世界だ」
「しかし、お前の話だと、最初の事件の第36管理世界は最近まで時空管理局とは関係なかったんだろう？
何故昔の、別の世界の末裔がいるんだ？」
「ベルカにおける戦乱期には、あちこちの世界に難民が散って行った。
滅んだ国を捨てて逃げたなら、他の世界にその末裔が居てもおかしくは無い」

第31管理世界　上空

「ここか。この世界への通達は？」
「完了しています。既に管理局との協力体制によって、惑星全域に警戒態勢が取られています」
「そうか。では、その報告待ちか」
「はい」
「…ランスター三等空尉？」
「何でしょうか？御剣特別執務官補佐殿？」
「…別に敬語で無くても構わんぞ？私は正規の命令系統には属していないしな。
後、御剣だけで良い」
「そうですか？では、私の事もティーダでお願いします。御剣さん」
「わかった」

ビービービー！

クロノから貰った端末がけたたましく鳴る。

「（御剣！転送反応があった！そこから北西に２ｋｍ先だ！）」

「ティーダ！遅れるなよ！」

「はい！」

眼下には鬱蒼とした森が広がっている。

道化師の仮面を被った男は、仮面の口元に手を当てて考えている風なポーズを取る。

「さてと、次はここか。あの馬鹿王の末裔はどこかな？」

「偉い奴がいるのは、やっぱり一番高い所だろうな」

「あぁ、君もそう思うかい？何で偉そうな奴って皆高い所にいるんだろうね？」

「そうしていないと自分の優位性が崩れるんだろう。

若しくは自分より下の階層の人間を物理的にも見下したいからじゃないか？」

「ふむ。なかなか興味深い意見だ。ところで…君は誰だい？」

男の頭上には２人の男が立っていた。１人は管理局員のバリアジャケット。

もう一人は西洋鎧を崩したような軽装に身を包んでいる。御剣だ。

御剣は、自身の保有する宝具をその身に纏っていた。

胸部と右手の肘から先、両足の腿から先のみが白銀の鎧に包まれている。

左手には指無しグローブ、首と両肩と腹部は薄めの生地で出来た黒い服に、ズボンは黒いジーパンだ。

「お前が道化師か。こちらは時空管理局特別執務官補佐、御剣　仁

二尉相当官だ」
「同じく時空管理局所属、首都防衛隊出向、ティーダ・ランスター三等空尉だ」
「道化師とは。また見たまんまの愛称を付けてくれたもんだね」
「まぁ、分かりやすいからいいだろう。それが嫌なら名乗るんだな」
道化師は頭を振る。
「ううん。別にそれで良いよ。
それで、時空管理局とやらが何の用かな？私は忙しいんだけれど？」
「その用事を止めにな」
「貴様の行為は無差別に他者を殺害する。よって管理局法に基づき、貴様を逮捕する！」
「だが断る」
「…まぁ、使用元は私ではないし、別に誰が使おうとも構わないけれど」
「何を言っているのですか？御剣さん？」

## 4章－3　死の道化師事件（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：道化師と邂逅、4章3話です。

新キャラはティーダでした。

分かった人も何人かいらっしゃいそうですね。

黒峰「新キャラ出してる暇が有ったら俺達を出せよ。」

作者「無理。作者の力量的に動かせるのは3，4人が限度だから。」

黒峰「開き直りやがった…」

# 4章－4　仮面の真実

第３１管理世界　首都北西部　森林地帯上空

森の上空では3人の男が睨み合っている。

「やれやれ。なぜ君達の言う事を聞かなければならないんだい？君達には私とあの馬鹿の末裔の因縁なんて関係ないだろう」
「関係が無いからこそ、かね。いずれにせよ、私はただの雇われさ。お前にはここで落ちてもらう。それが雇用主の意向でね」
「おぉ、怖い怖い。そんな怖い事を言われたら…」

道化師は二匹の蛇の巻き付いた一本の羽根の生えた杖を取りだす。

「こうせざるを得ないねぇ。『死神携えし双蛇の杖（ケーリュケイオン）』」
「な！ティーダ！下がれ！『万邪退けし山羊革の盾（アイギス）』！！」

道化師の持つ杖から出た灰黒色の光弾をアイギスが弾く。

「へぇ。やるじゃないか。じゃぁこれは？『魂刈り取る大鎌（デス・サイス）』」

道化師は禍々しい大鎌を取り出し御剣に切りかかる。

「アイギス！」

御剣はアイギスで防ごうとする。しかし、アイギスは徐々に押され、御剣に鎌が迫る。

「っ！馬鹿な…」
「死神の刈り取りは誰にも邪魔できないのさ。さぁ、諦めて死んで」
道化師がそう言い放った瞬間、道化師の額で魔力弾が弾ける。
「御剣さん！大丈夫ですか！？」
「ティーダか！？恩に着る！『約束された勝利の剣（エクスカリバー）』！！！」
一瞬緩んだ鎌の隙を突き、距離を取り、エクスカリバーを放つ。
道化師のいた場所を黄金の光帯が埋め尽くした。
光が止み、視界が回復すると、そこには何も残っておらず、眼下の森も焼き払われ、焼け野原になっている。
「…何処だ！」
しかし、御剣は警戒を解いていない。
「御剣さん？どうしたんです？もうあいつは何処にも…」
「上！」
御剣の声に従い、ティーダが上を向くと、彼らの頭上に仮面が浮いていた。
道化の仮面だけがフワフワと浮いている。
「やれやれ。あの体は気に入っていたのにね」
仮面の口が動き声を発する。
御剣はその様子に眉一つ動かさず応じた。
「やはりそちらが本体か」

「本体？どういう事ですか？御剣さん」
「見ての通りさ。あの仮面がこの呪いの本体。
かつて斬首された道化師のデスマスク」
「御名答。まぁ、細部が違うがね。私は昔からこの姿だよ。
斬首された時に仮面を被らされていた男には気の毒な事をしたねぇ」
「成程。お前は誰かに生み出されたマジックアイテムって訳だ」
「正解！まぁ、私は持ち主の恨みを晴らすだけのモノだがね」

仮面は右往左往しつつケタケタと笑い声を上げる。

「もう国は滅び、最早今を生きる人々からは忘却された。
今更お前の出る幕など無い」
「ん～そういうわけにもいかないのさ。これは契約だからね」
「契約？」
「そ。前の持ち主は気前が良くてね。私に魂を全てくれたのさ。
私の力はもうスッゴイ上がってね。
色んな道具も使えるのさ。ほら、例えばさっきの杖とか」
「『死神携えし双蛇の杖（ケーリュケイオン）』か。
医の神でもあるヘルメスの持つ杖。触れた者を死に至らしめる宝具」
「らしいね。私はそんな話知らないんだけど」
「…時間稼ぎはもう良いか？」
「おや、ばれたか。まぁいいさ。もう仕込みは済んだ」

「何だと？…まさか！ティーダ！」

御剣が振り返ると同時にティーダの体は空高く吊り上げられる。

「さて、こいつの体を頂くか」
「み、御剣さ…ムグッ！？」

そう言うと仮面はティーダの顔に被さる。

「ティーダ！」

「フ、フフフ…なじむ…なじむぞ。実によくなじむ！

何だこいつは！？外面に比べて内面は随分とドス黒いじゃないか。

ヒャハハッ！成程！努力が認められないのか。それは可哀想に。私が力をあげよう。

代わりにこの身体を頂くがね」

「ちっ！『無駄無しの弓（フェイル・ノート）』！『雷霆（ケラウノス）』！」

円卓の騎士トリスタンの持つ、人間でも獣でも狙った場所に必ずあたるという伝承を持つ弓。

大神ゼウスの放つ雷撃たるケラウノスを鏃とした矢。

「死んだら私を怨め！ティーダ！」

御剣の放つ一撃は正確に仮面を貫いた…かに見えた。

「…っな！そんな馬鹿な！？」

ティーダは顔面にシールドを展開し御剣の攻撃を防いだのだ。

加えてバリアジャケットの耐電性も味方した。

しかし、大神ゼウスの雷霆を一魔導師に防げるわけが無い。

仮面が力を貸したのだ。その仮面に蓄えられた魔力でティーダのシールドとバリアジャケットを補強。

見事御剣の一撃を防いだ。

しかし、その余波でティーダの体は焼け焦げ、あちこち炭化している。

にも拘らず、まるで時計が巻き戻るようにティーダの体は再生していく。

「成程な。生半可な手加減はしない方が良さそうだ。
良いだろう。来い！『雷公鞭（らいこうべん）』！！！」

御剣の手中に奇妙な形の鞭が顕れる。
3段重ねのアイスクリームの上から数本の鞭が伸びている。
しかし、御剣が1度打ち鳴らしただけで周囲に轟音が響く。

「さて、これはどうだ？」

そう言うと御剣は仮面を被ったティーダに向けて雷撃を放つ。
先程の雷撃など小手調べと言わんばかりの剛雷。
幾重にも束ねられた雷がティーダに降り注ぐ。

「がきくこきおじおｊｇｒはうｈぐｓｈｓｋ！！！！」

ティーダは雷撃を耐える為のシールドに、耐電フィールドを形成する。
雷撃を耐えるティーダの口からは最早意味の通じる言葉は出てこない。

「もう…少し…」

御剣が呟くように、ティーダの顔から仮面は外れかけていた。
雷が止む。ティーダの体は最早焦げていない部分を探す方が難しかった。

「『破魔の赤薔薇（ゲイ・ジャルグ）』！！！！」

御剣の一閃が仮面を捕える。

ティーダは渾身の力で避け様とするも、ゲイ・ジャルグの穂先が仮面に掠る。
それで十分だった。
一時的に力を失った仮面はティーダの顔から外れ、落下する。
それを御剣に掴まれ、御剣の取り出した刀に「斬空刃無尽衝！」乾いた音とともに粉微塵にされた。

「ティーダ！待ってろ！今治す！『医神携えし蛇の杖（カデュケウス）』！」

ティーダの傷は見る見る内に治って行く。

「う…あ…み…みつる…ぎ…さん…」
「喋るな！じっとしていろ」
「すみ…ません…私のせいで…」

ティーダの傷は完治した。しかし、ティーダは意気消沈し、俯いてしまっている。

「お前の所為じゃない。対応しきれなかった私にも非は有る」
「そんな…み！御剣さん！後ろ！」

ティーダの声に振り向くとボロボロの仮面が浮いていた。

「ク、クカキコケココココクカカカカカカカカカ！！！！」
「…しぶといな…ティーダ、少し待ってろ」
「は、はい」
「さて、再生すると言うのなら、その欠片の一片までも残さず消し去ってやろう」
「コクコクカ！！！
カケキクキキキケカクコ！！！！！！」

## 4章－4　仮面の真実（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：４章４話です。
出したのは自分ですが、オリ宝具の多い事多い事。
←だけでかなりの時間が。
ではまた次話で。

『死神携えし双蛇の杖（ケーリュケイオン）』：対人宝具ランクＡ＋　レンジ１～５　最大補足１人

ギリシャ神話の神ヘルメスの持つ一対の羽のついた双蛇の杖。
アスクレピオスの杖と混同（カデュケウス）されがちだが、こちらは羽が付いていて蛇も２匹。
指し示した相手を深い眠りに誘う杖。
この場合の深い眠りとは永眠のことである。

『魂刈り取る大鎌（デス・サイス）』：対人宝具ランクＢ　レンジ１～３　最大補足１人

魂の刈り取り人、死神の持つ大鎌。
死神による魂の刈り取りは神に託された仕事であり、不可侵の物である為、神性を持つ物にしか防げない。

『無駄無しの弓（フェイル・ノート）』：対人宝具ランクＡ　レンジ１～１０　最大補足１人

アーサー王伝説の円卓の騎士が1人、トリスタンの持つ弓。
人間でも獣でも、射手が狙った場所に必ず矢があたるという伝承を持つ。
因果逆転の効果を持つので、かわすには相応の幸運（ラック）と俊敏が必要。

『雷霆（ケラウノス）』：対人宝具ランクA＋　レンジ1～99　最大補足1人

ギリシャ神話の主神、ゼウスの雷。
またはゼウスの別名。
ゼウスが罪人を裁く際に使う雷。
火の神プロメテウスや医の神アスクレピオスを貫いたのもこの雷。

『雷公鞭（らいこうべん）』：対界宝具ランクEX　レンジ1～99　最大補足1～999

中国の伝承、小説「封神演義」における黒点虎に乗る道士、申公豹の武器、宝貝（パオペエ）。
申公豹が太上老君から授かったもので、随意に雷を起こし、形あるものを焼き尽くし粉砕できる。
影や魂まで溶かすという。
仙界の中心地、崑崙山にもかなう武器がないのではないかともいわれる威力を持つ。
藤竜版で結界を破壊していたので対界宝具に分類。

# 4章－5　死を忘れるな

奇声をあげて仮面は御剣に襲いかかる。

「板切れ風情が！！！」

御剣は手に持つ刀で切り払うも、引っ切り無しに仮面は躍り懸かる。

切り付けた傷はすぐさま直り、絶えず御剣を狙う。

「キカカココキカ！ココカカキキカケクカケカカキ！！」

「っち！何言ってんのか分からん！さっさと消えろ！

光射す世界に　汝ら暗黒　棲まう場所無し！

渇かず　飢えず　無に還れ！『レムリア・インパクト』！！！」

御剣が大魔導原典（グラン・グリモワール）を取り出し、左手に持つと、ページが独りでに捲られ、唐突に止まる。

御剣が右手を翳し詠唱すると、仮面をすっぽり覆いつくす範囲で結界が張られる。

そしてその内部に異界の無限熱量を放射。

魔力の奔流によってあらゆる存在を灼き尽くし、無限重力で潰す。

内部の物を消滅させた後、業名を叫ぶと同時に結界そのものを握りこむように消滅させた。

仮面は跡形も無く消滅したかに思われたが、数瞬後には何事も無かったかのようにそこに在った。

「どんな再生力だ…」

「キカカケカカカキキカカケカキ『死を忘れるな（メメント・モリ）』」

「業はそのままなのか…メメント・モリ？
どういう…！しまった！」

そうつぶやいた御剣の心臓が大きく拍動する。次の瞬間、御剣の心臓は拍動を停止した。

「み！御剣さん！」
「カカカカハカハカハカハハハハハハ！いやはや。中々の相手だったよ。
だが私は滅びぬ！何度でも蘇るさ！！」
「貴様！御剣さんに何を！？」
「ん～大まかに言えばショック死。
人に起こりうる全ての死に方を一度に脳内に叩きこんだからね。
さて、君の体を再度貰うよ。この世界を滅ぼさなくてはね」

しかし、仮面が飛びかかろうとし、ティーダが構えたところで、仮面は後ろから何者かに掴まれる。

「1度ならず2度までも、私がそれを許すと思うか？」
「な！？何故お前が生きている！？
生物である以上あの業からは逃れられない筈！お前は不老不死だとでも言うのか！？」
「い～や？純粋な人間さ。
ただ単に身代わりを用意しておいただけだ。この人造人間（ホムンクルス）をな」

そう言うと御剣は人形の様な物を見せる。
御剣の掌中には、出来そこないの様な肉人形があった。

「だ、だったらもう一度！『死（メメント）を！」

「『マホトーン』」

御剣が呪文を唱えると、濃い藍色の線が鎖のように仮面に絡み付いていく。

光の鎖は魔力を遮断する輝きを帯びていた。マホトーン。

封呪の為の魔法であり、魔力を使う者に対しては絶大な効力を得る魔法。

「体の無い今のお前では、呪文しか使えまい。

その呪文も今封じた。大人しく滅びろ」

そう言うと御剣は仮面を空高く放りあげ、詠唱を開始する。

「荒ぶる螺旋に刻まれた　女神の路の涯の地で
血まみれ　磨り減り　朽ち果てた
聖者の路の涯の地で
我等は再び　聖約を果たす
其れはまるで御伽噺のやふに
眠りをゆるりと蝕む淡き夢
夜明けと共に消ゆる夢
されど　さの玩具の様な宝の輝きを
我等は信仰し　聖約を護る
我は光　夜道を這う旅人に灯す　命の煌き
我は闇　重き枷となりて路を奪う　死の漆黒
我は光　眸を　己を　世界を灼く熾烈と憎悪
我は闇　染まらぬ　揺らがぬ　迷わぬ　普遍と愛
愛は苦く　烈しく　我を苛む
憎しみは甘く　重く　我を蝕む
其れは善　其れは悪　其れは享受　其れは拒絶
其れは　純潔な　邪悪な　交配の儀式

結ばれるまま　融け合うままに堕胎される
その深き昏き怨讐を胸に　その切なる叫びを胸に
埋葬の華に誓って　祝福の華に誓って　我は神話を紡ぐ者なり」

詠唱を完了した御剣の右手には奇妙な金属製の箱があった。
均整な形状をしており、非地球的な生命体を象った奇怪な装飾が施されている

「開け。『輝くトラペゾヘドロン』」

御剣の言に従い、独りでに開く箱。
その内部には輝く黒い多面体が収められていた。
多面体は、直径約１０ｃｍ程のほぼ球形の結晶体で、不揃いな大きさの切子面を数多く備えている。
その色はほぼ漆黒で、ところどころ赤い線が入っている。
多面体は、箱の内面に触れることなく、金属製の帯と奇妙な形をした七つの支柱によって、箱の中に吊り下げられている。

重力＝愛の方式に従い落下してきた仮面を御剣は見据える。
そして輝くトラペゾヘドロンを目の高さに掲げると、ただ一言だけ言った。

「消えろ」

それだけで仮面は消滅し、もはや復活する事はなかった。
捻じ曲がった神柱。狂った神樹。刃の無い神剣。
在り得ざる物質。同時に存在しえぬ物質。神々の禁忌。
輝くトラペゾヘドロンにより、道化の仮面はかつて旧神によって旧支配者が封じられた異界に引きずられ、この世界より存在を否定された。

「…終わったんですか？」
「あぁ。アースラに通達を頼む。これでこの事件は解決だ」

アースラ　艦橋

「お疲れ様」
「事実疲れた。私は休むから地球に着いたら起こしてくれ」
「いや、その…だな。君にはこれから本局へ向かって貰う」
「…何？」
「今回の事件には犯人がいない上、明確な証拠はこのアースラの記録だけだ」
「だから事情聴取させろ、と？」
「そうなる」
「…行ってやるから、すぐに済ませろ」

## ４章－５　死を忘れるな（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：４章５話、決着です。

分かる人にはすぐ分かると思われますが、デモベです。

実は、クトゥルフ神話のアイテムは以前から出ていますが。

次話で４章完結。その後は短編集なり、５０万ＰＶ突破御礼なりの後、ＳｔＳ導入部へ。

といった予定です。

では今後ともよろしくお願いします。

# 4章－6　結果報告

時空管理局本局　会議室

壇上に御剣が昇り、今回の事件の報告をしている。
会議室には１０人程の人間がいる。

「以上だ。何か質問は？大きく手を挙げてはっきりと聞け」

次々と掲げられる手。

「ではそこの、そう、貴様だ」

御剣のぞんざいな言い方にいら立ちながら、男は口を開く。

「まず、今回の件での犯人の逮捕を行わなかった理由から。
本体が仮面だったから良かったものの、危うく生死不明となるところだった」
「単純だ。ここで逃がせば被害が拡大すると判断し、全力で任務に当たっただけの事。
また、私の鑑定能力で仮面が本体と言う事には気づいていた。次」
「今回の件によって該当世界の首都近くの森林が丸ごと焼け野原になった。
この責任はどう取るつもりだ！？」
「事前の取り決め通り、私が破壊した物品に関しては管理局が弁償するように。次」
「管理局員への一方的な攻撃！意志疎通の可能性もあっただろうに何故！」

御剣の眉根が僅かに寄る。

「仮面に…乗っ取られている事は明白だった。
結果論ではあるが、その管理局員はもう完治している。次」
「この事件はロストロギアによるものだが、実は貴君が出した物では？」
「何が言いたいのかさっぱりだな」

御剣が肩をすくめながらそう言うと、偉そうなその男はふんぞり返りながらこう言った。

「実際は貴様が犯行に及んだのでは？
事実、道化師は貴様の能力に酷似した能力を持っていた！
その仮面も貴様が元々所有していたものではないのか！？」
「あの仮面は他者の体を乗っ取り、対象を死に至らしめるまで追い続ける効果のロストロギアに、魂まで奉げた奴がいて、その冥府に落ちかけた魂を介し、死の伝承を持つアイテムを召喚出来るようになったものだ。
私と通ずるなど馬鹿にされているとしか思えんな。あんな物と一緒にされては困る。
第一、世界を滅ぼして私に何のメリットが有る？次」

また別の男が言う。

「今回の件で、君には多大な報酬が渡された筈だ。それを得るための自作自演だったのでは？」

御剣の目が細まる。口元は笑っているが、目が笑っていない。

「…私には貴様の言っている意味が分からんな。
そう言うならば私が今回の件を起こしたという証拠を持ってこい。
さもなくば名誉棄損でしかないぞ?今の発言は議事録に残っている。
覚悟だけはしておけ。次」

しかし、もはや手を挙げる人間はいなかった。
それを確認すると御剣は壇上で一礼して会議室を出た。

御剣が去った後も高官たちは議論を続けている。

「…どう思われますか?」
「アースラの観測情報の中には、奴が魔法を封じる未知の魔法を使った様に見える物もある。
あ奴を放っておけば管理局に後々反旗を翻さないとも言い切れない」
「では処理を?」
「いや、失敗した場合のリスクが大きすぎる。
奴と敵対した場合、管理局にも多大な影響が出るだろう。上手く利用する事が重要だ」
「はっ!」

時空管理局本局　待合ロビー

甚く疲労した風に御剣がやってきた。

「はぁ…なんで私がこんな事まで…」
「お疲れ様です。どうぞ。コーヒーです」

ティーダは紙コップを2つ持ってきて、一方を御剣に渡す。

「あぁ、ありがとう、ティーダ。君も取り調べか」
「はい。私と御剣さんの証言、それにアースラの観測情報だけが証拠ですから」
御剣は大きくため息を吐く。
「…まぁ、もう終わったがね。その…すまなかったな。幾ら完治したとはいえ、随分と重傷を負わせてしまった」
御剣はコップを置き、深々と頭を下げる。
「いえ、元はと言えば、油断していた私が悪いんです。寧ろ、止めて下さった事に、お礼を言いたいくらいです。あ、お礼と言えば、私、昇進が決まったんです。今回の事件で」
「…二階級特進か？」
「凄いですね。お見通しですか。死んだわけではありませんが、御剣さんは特別階級なので昇進は無いそうで、その分私が。手柄を横取りしたみたいになりますが。明日付けで一尉になります。…御剣さんの御蔭ですよ」
「そう…か。そう言ってくれると助かる。危うく本当に二階級特進させてしまうところだったがね。…ティーダはミッドチルダ首都に帰るんだったか？」
御剣の台詞に苦笑しながらティーダは答える。
「はい。通常勤務に戻ります。妹もミッドに置いてきてますし」
「妹さんがいるのか。私も店を閉めて来たからね。出来るだけ早く戻りたいんだが」

「御剣さんは正規の管理局員では無いんでしたね」
「あぁ。緊急時の雇われ。傭兵と言った方が近いかな」
「それでも…執務官補佐なんですね」
「まぁ、特別執務官補佐とか訳の分からない役職だがね。平時には管理局とは一切の関係は無い。管理世界での身分証明にはなるらしいが」
「…私、執務官を目指しているんです。でも、もう何度も落ちていて…そろそろ、諦めようかとも思っているんですが、なかなか…」
「諦めきれない、か。知り合いにも1人いたよ。執務官試験受けた奴」
「その人は…受かったんですね」
「あぁ。1回落ちたけど、二回目で受かった。もう朝から晩まで机にしがみ付いてな。その分受かった時は嬉しそうだったな」
「…私も…その喜びを味わいたいですね」
「出来るさ。私の友人ならな」

ティーダは目を見開く。

「…友人…なのですか？」
「おや、やはり自分を痛めつけた奴を友人にするのは嫌か？戦場に一緒に立って、勝って帰れば戦友さ。住む世界は文字通り違うがね」
「…ありがとう…ございます」
「まぁ、執務官試験に受かったら酒でも奢るさ。楽しみにしているよ。まぁ、今はこれで…な？」

そう言うと御剣はコーヒーの入ったコップを差し出す。

「…はい！」

## 4章－6　結果報告（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：オリ編導入部終了です。
後は短編とＳｔＳ開始部分です。

ではまた次話で。

## 5章－1　墓前の誓い

２００９年　第1世界　ミッドチルダ西部　ポートフォール・メモリアルガーデン　１９号第５区画１６番地

立ち並ぶ墓標、その一角。空には曇天が広がり、今にも雨が降り出しそうだった。

先程掘り返されたばかりの真新しい土の色をした墓標の前に、少女は立っていた。

２房に纏められた赤橙色の髪、その身に纏う服は少女の悲しみを写したかの様に黒く、先程まで行われていた葬儀にこの少女も参加していた事がうかがえた。

それもその筈。その墓は少女のたった1人の肉親。かけがえのない兄の物なのだから。

少女の手には、銃の玩具が握り締められていた。

それが何物にも代えがたい宝物であるかのように、少女はその玩具を胸に抱きしめている。

「隣、構わないかな？」

そんな少女の横に立つ影が有った。その声の主は長身の男だった。

許可を求めて来た癖に、少女の返答を待たずその横に跪く。

男はその手に持っていた花束を墓前に供えると、手を合わせ瞑目した。

少女はその男を横目に見る。

年の頃は兄よりもやや上だろうか。目鼻立ちの整った顔は、幼い少女にも見目麗しいものに映った。

と、男が目を開く。何故か気恥ずかしさを感じた少女は咄嗟に目を

逸らした。

「…済まなかった。急いで来たんだが、間に合わなかった様だ」

男は少女の方を向いて告げる。少女はその表情に驚いた。
先程まで葬儀に参列していた者はこんな悲しそうな表情(かお)はしていなかった。してくれなかった。

「…貴方はお兄ちゃんの事を馬鹿にしないの？」
「…何？」
「お葬式に参加した管理局の人は、お兄ちゃんの事を無駄死にだって…部隊の面汚しだって…」

男の表情が疑念に満ちたものに変わる。そしてそれはすぐさま怒りの表情に変わった。
その表情に少女が怯えると、慌てた様に男は表情を和らげた。

「そんな事を言うものか。
私が知る限り、君の兄さんに匹敵する程の男は管理局に1人居るか居ないかと言った所だ。
君の兄さんは決して、決して貶められる様な人では無い」

そう言い放った男の顔は、少女には嘘など吐いている様には見えなかった。
周囲が無能と言い放つ兄の味方をしてくれる。
初めて会ったにも関わらず、少女はこの男の事を信用し始めていた。

「…貴方はお兄ちゃんの…友達？」
「あぁ。出会ってそこまで経っては居ないがね。戦友…さ」

そこまで言うと男は懐から水筒の様な物を取り出し、墓標に振りかけた。

「…これ、お酒？」

周囲に立ちこめるアルコール臭に少女が眉を顰めつつ問う。

「あぁ。いつか呑もうって約束だったんだがな…」

そう答えつつ、男はスキットルから一口煽る。そして残りを全て墓標に振りかけた。

最後の一滴までかけ終えた男は、スキットルの蓋を締め、懐に仕舞い直すと、少女の方に振り向いた。

「…君は…これからどうするんだ？」

「…お兄ちゃんは言っていた。お兄ちゃんは執務官を目指してるって。

私が証明する！ランスターの銃弾は無能じゃないって。

そして、お兄ちゃんの果たせなかった『執務官』の夢を引き継ぐ！」

少女の誓いの叫びが、静寂の中に響き渡る。

暫くして、少女の頬に水滴が光った。

「…雨ね」

そう呟くと少女は天を仰ぐ。

空は今にも泣きだしそうではあったが、まだ降り出してはいない。

その姿は男に一つの決意をさせた。

「…そうか。だが、その道は高く険しいだろう」
「覚悟は出来てるわ。後悔もしない」

少女のその瞳には一点の曇り無く、自身の目標を見据えて邁進する為の気力に満ち満ちていた。

「そういえば、ちゃんと名前を聞いていなかったわ。貴方のお名前は？」
「御剣、御剣　仁。御剣がファミリーネームだ」
「御剣…うん。覚えた。私はティアナ。ティーダ・ランスターの妹、ティアナ・ランスター」

そしてティアナは微笑む。
その微笑みは恐らく彼女が生来持ちえた輝きを全て備えている。
その様に御剣は感じていた。

「ティアナ、君に聞いておくことが有る。」
「何？」
「それはね…」

## 5章－1　墓前の誓い（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：久しぶりの更新です。
ティーダには悪いのですが、死んでもらいました。
御剣達によるティアナの魔改造が始まります。
どのくらいかと言えば、なのは相手に善戦出来るくらいには。
凡人弱めの頭脳戦ティアナが好きな方には怒られそうな内容になって行くと思われます。
では。

# 5章－2　日常

２０１１年４月２５日　海鳴市　市街地　御剣古美術店　２階
居住フロア　リビング

３階の自室で御剣は目を覚ますと、リビングのある2階へ降りて行く。
するとキッチンにはすでに誰かがいて、朝食の用意をしている。
あの2人がそんな殊勝な事をするわけが無い。となると残るは1人。

「おはよう」
「おはよう。毎朝早いな」
「まぁ、衣食住の面倒見てもらってるしね」
「そうか。あいつらもそのうち起きてくるだろう。料理は私が見ておく。
今のうちに学校の準備をすると良い。ティア」
「うん。そうする。仁」

あれから2年。ティアナを引き取った御剣は、彼女を海鳴に連れて来ていた。
御剣達同様に、日本での戸籍を取得したティアナの現在の名前は、ティアナ・Ｌ・御剣。
今年で１２歳になる聖祥付属小学校の６年生だ。
ちなみに、小学校卒業と同時に陸士訓練学校を受ける、と言いだした。
しかし御剣が反対。
訓練学校受験の条件として御剣が提示した、１対１で御剣に一撃入

れられたら、と言う条件を満たせず敗北。
現在、御剣に勝つべく特訓中。
現在の魔導師ランクは陸戦ＡＡ相当（推定）。
ただ、御剣に勝とうと、攻撃に特化しすぎたせいで幻術魔法を完全に習得していない。
御剣達を兄の様に、はやて達を姉の様に慕いながら過ごしている。

「行ってきま～す！」

裏口に続くリビングの扉を開けながらティアナが言う。
当然服は聖祥付属小学校の制服だ。

「あぁ。気を付けてな」
「うん。亮と宗一も起こしといて。ご飯冷めちゃうから」
「起きてこない奴が悪い。朝飯を食いっぱぐれようと知った事か」

昨日遅くまでゲームしていた奴に同情の余地は無い。

「またそんな事言って。あ、もう行かなきゃ。今日は少し遅くなるから」
「日が暮れるまでに帰れよ」
「もう子供じゃないんだから。じゃ、今度こそ行ってきます！」

ティアナはそう言うと一階の裏口へ向かう。暫くして裏口の引き戸が閉まる音がした。
ティアナが出て行ったあと、新聞を読みながら紅茶に口を付ける。
ティアナは未だ、執務官の夢を諦めていない。
飛行魔法適性が無い事から、士官学校も空戦魔導師も諦め、陸士として経験を積みたがっている。
今年の初めに中々の善戦を見せたものの、最終的に私に負け、訓練

学校入学権取得はまた次回に持ち越された。
元々多才では無いティアナは幻術系を捨て、原口に頼んで集束系の特訓をしていたらしい。
高ＡＭＦフィールド内での魔力弾生成訓練とでも言うか。
そのおかげで弾核形成速度と射出速度は恐らく同年齢だった頃のなのはより上だ。
総魔力量と魔力放出量は流石に劣るが。
拳銃型のデバイスを用いた変則ミッド式は変わらない。
デバイスはクロノ経由で、マリエルに金は惜しまず作らせたストレージ。
銀色の回転式拳銃に漆黒（クトゥグア）の自動式拳銃。
威力重視のイタクァ（大口径カートリッジ×５）には銃剣（バヨネッタ）が。
連射速度重視のクトゥグア（カートリッジ×２０＋１）にはアンカーが取りつけられている。
誘導性を排した速射性と、魔力の過剰圧縮による反発が生み出す弾速によって、実際の拳銃に近い戦闘方法を取る。
ティーダが得意だった遠距離狙撃も習得し、最近では相手をするのにも一苦労だ。

「…何でこうなるかね？」

呟きつつ、紅茶を啜る。ティアナを引き取った事に後悔は無い。
何の因果かティーダと友誼を結んだものの、彼を救えなかった。
しかし、ティーダが原作キャラだと思いだしたのは、ティアナの存在を知った時だった。
彼が事件で死ぬ事を知っていて救えなかった、その罪滅ぼしを私はしているのかもしれない。
彼の死因は原作通り、違法魔術師追跡中の殉職。因みに、その違法魔術師は私が捕えた。
まぁ、捕える際に少しばかり抵抗したので、痛覚を持って生れて来

た事を後悔させてやったが。
ティーダも執務官を目指していたエリート。それでも任務中に殉職はする。
なのはとて落ちた。ならば、せめてティアナには相応の実力を持たせて入局させたい。
フェイトも執務官になり、子どもを保護したりしてはいるが、この『世界』には悲劇が多すぎる。
人がいる限り罪は消えない。それは誰にも覆せない。

「ぅお～は～よ～ぅ～」

地の底から響いてくるような声。振り向くと黒峰が起きて来ていた。

「お早う。原口は？」

黒峰に問うと、黒峰は欠伸しながら答えた。

「起こしといた。そろそろ降りてくるだろ」

黒峰はそう言いつつ席に着く。

「そうか。ティアが作ってくれた朝飯が有る。温めて食え。私は開店の準備に行く」

そう言って私は席を立つ。
現在時刻は9時35分。少し急がなければ、開店が遅れる。
少々のんびりし過ぎた様だ。

「おう。今日の予定は何だ？」

「そうだな…倉庫の陰干しをするか。そのつもりでいてくれ」
「おう。原口にも伝えとく」
「頼む」

そう言って私は階下へ降りて行く。今日も良い天気だ。

夕刻　御剣古美術店

「ただいま」

ティアナは帰ってくる際、大体店側から入る。
今日もその例に洩れず、店番をしているとティアナが帰ってきた。

「御帰り。どうした？遅くなるんじゃなかったのか？」

現在時刻は６時過ぎ。
遅い時間と言うには早すぎる。

「学校終わってからはしばらく経ってるから、十分遅いと思うけど。
それに、日が暮れる前に帰れ、って言ったのは仁の方でしょ？」
「…あぁ、そんな事も言ったな。
まぁいいか。手を洗っておいで。もう店は閉める」
「どうしたの？今日は随分と早いのね」

御剣古美術店の営業時間は朝１０時から夜７時まで。
日によってまちまちではあるが、ときどき店主（御剣）の気分で早仕舞いする事が有る。

「客足が絶えて久しい。今日はもう客は来ないさ」

「そう。最近お客さん減ったわね」

大口の顧客はそのままだが、小物、茶碗や湯飲み、皿を買う客はこの所減っていた。

「小物はみんな１００均とかで済ますんだろ。うちが扱ってるのは、基本的に古美術だからな」

店仕舞いをしながらティアナと話す。

「だったらもっと集客考えたら？広告出すとか。折角街中に有るんだから」

腰に手を当ててティアナが言って来る。

そこまでする気は無いんだが…と言うか広告って何をアピールするんだ？

バス広告とかか？

「元々道楽さ。そこまでしなくても、このままで別に不自由なく暮らしていける。

それだけの蓄えはある」

既に口座の残高は９桁を超え、１０桁に届こうとしていた。

後は働かずとも生活できる。

「勤勉なんだか怠惰なんだか…」

ティアナが呆れたように言って来る。

「働かないと人間が腐るからな。とはいえ…そろそろ纏まった休みでもとるか。
…ティア、どこか行きたい所は有るか？」

折角の休みだ。どこか遠くで過ごすのも悪くない。
温泉とかでもいいな。

「ん～…行きたい所、ねぇ。…兄さんの所かな？」

少し悩んだ後、ティアナは答えた。

「ティーダの？」
「うん。兄さんも年1回じゃ寂しいかなって」

そう言いながら、ティアナが微笑(はにか)む。
ティーダの墓参りは毎年命日に行っている。

「となるとミッドチルダか。ティアはいつから休みなんだ？」
「29日。5月8日まで休みよ」

即答するティアナ。
…本当に黄金週間(ゴールデンウィーク)だな。

「長いな。となるともうGWは休みで良いか」
「いいの？」

こちらを窺うように上目遣いで見てくるティアナ。
これで断れる奴はそういないだろう。

「あぁ。この連休はミッドチルダに旅行といくか」

「うん。楽しみにしとくわ」

## 5章－2　日常（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：ティアナ魔改造編第2章。
ティアナを強化しようと考えたら、結局2丁拳銃に。
イタクァのイメージモデルはS&W　M500、クトゥグアのイメージモデルはFN　Five－seveN。
大口径カートリッジは．500S&Wマグナム弾。
カートリッジは5．7mm弾。

カートリッジに反動とかは無い様なので、小学生でも2丁拳銃も可能と判断しました。
銃自体が重いことは重いですが。

黒峰はティアナに体術を仕込んでます。
そのおかげでティアナは近接も一通り出来ます。
偶に黒峰の趣味でガン＝カタとかやらせようとしてます。
ティアナは嫌がってますが。

次回はミッドチルダへ。
次は2月頭になると思われます。ではまた次話で。

## 5章－3　空港

２０１１年４月２９日　ミッドチルダ北部臨界第８空港　上空

「…そろそろ着く時間だな。」

「亮、宗一、起きて。もう飛行機着くって。」

「ん…くぅっと。」

「ふぁぁぁぁぁぁぁぁぁ。」

眠っていた２人は伸びをしている。
御剣古美術店家族旅行ｉｎミッドチルダ１日目。
まずはミッド北部にとった温泉地のホテルにチェックイン。
１泊した後西部のティーダの墓参りついでに観光して１泊。
その後首都（クラナガン）へ。ホテルアグスタ宿泊の後、東部のパークロードへ。
そう予定を立てていた。
…過去形だ。
なぜならば。

「…今日か…すっかり忘れてた。そんなイベント。」

「もう何年も前の事だもんな。」

「実質７，８年か。そりゃ忘れるわ。」

そう。例の空港火災事件。
爆発音が聞こえたと思えば避難勧告。
ティアナは避難したが、私達は協力して消火、救出作業中。
何故かって？ティアナに頼まれたからだよ。
でなければとっとと別ルートでホテルに行っている。
まったく心優しい子に育ってくれたもんだよ。
誰に似たんだか。

「お前だろ。」

「お前だな。ツンデレな所とかそっくりだ。」

黒峰と原口が異口同音に言って来る。
待て、誰がツンデレだ。デレの対象は誰だ！？

「「ティア。」」

…まぁ、若干の猫可愛がりが有る事は認めよう。しかし、どこにツンがある？

「危険な所に行かせたくないから、身を呈して止めてるくせに。」

「相手を思う故の厳しい態度。ツンだな。」

お前等は全国のお父さんに謝れ。
ま、ティアナの正義感は生来か。

馬鹿話をしつつも捜索は実行中。
黒峰の粒子を拡散させ探知、その後原口に結界で保護してもらい、

私が消火。
一段落ついた所で道が3つに分かれている場所に出た。
黒峰が粒子で探っているが、どうやら結果は芳しくない様だ。

「…駄目だな。上昇気流が強くて探れない場所が有る。」

「となると、そこにスバルやギンガがいる筈だよな。」

原口の言葉に頷く。

「今まで見つけて居ない上、なのは達はこの近辺にいない筈。
管理局も災害担当の救助隊しか来ていない。
…探れない個所は？」

「3つの道全部。それも奥の方だ。どうする？」

閉じていた目を開き黒峰が問うてくる。

「3手に分かれるか。火がしだいに回ってきてる。急ごう。」

私が進んだ道は瓦礫に塞がれていた。火の手もかなり強くなっている。

「仕方ない。突き破るか。『光狼（ベオウルフ）の咆哮』。」

御剣の両手足に白い籠手と具足が顕れる。
この籠手や具足の隙間からは白い光が漏れている。。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ…」

力を溜める御剣。右籠手の輝きが一段と増す。

「はぁ！！！」

渾身の右ストレート。

閃光と轟音の後、瓦礫の山は崩れ去り、その後には大穴が空いている。

「…今の衝撃で崩れたりしないよな？」

そう言いつつも進むと、今まさに女神の彫像に潰されそうなスバルを見つける。

「私の所為か！？」

急いで駆け寄り、構え、右拳に力を溜める。

「…ライジングドラゴン！！！」

倒れて来た彫像を回転を加えたジェットアッパーで殴り飛ばす。

「間に合ったか。無事か？」

振り返りざまにスバルに問うが、戸惑うように聞いてくる。

「…だ、誰？」

「質問を質問で返すな…いや、何でも無い。」

スバルが小首を傾げている。

「まぁ、何でもいいさ。さて、ここから出るか。立てるか？」

スバルは腰が抜けたらしく、立てないでいる。
流石にこの火の中を連れまわす訳にも行くまい。

「…私も魔王とか言われるのか？」

溜息を吐きつつ再度ベオウルフに力を込める。

「さて、安全な所まで一直線ってやつだ。」

そう言いつつ構える。
右拳を握り締めて腰溜めに構え、左手は薬指と小指のみ折り曲げ、天井へ向ける。
右籠手の輝きは先程より増し、御剣の背中には3対の光の翼が現れた。

「『光狼（ベオウルフ）の咆哮・獣帯横断（ゾディアック）』！！！」

真名と共に放たれる白色の光帯。
天井はもちろん、天すら貫いてそそり立つ光の柱。
光が止んだ後には天井に大穴が空いていた。

「さて、行くか。」

私はスバルを抱えると空けた穴からその場を去る。

Ｓｉｄｅ黒峰

黒峰の向かった方は火の勢いがいくらか弱まってきていた。

「これなら、俺が他の所行った方が良かったか？」

道のあちこちにいた、バリアの中で眠る要救護者を辿ってきたが、何やら大きな吹き抜けのホールに出る。

「…いない？」

要救護者の証言から、こちらにギンガが来た事は間違いない筈だ。黒峰は辺りを見渡す。

「きゃあ！？」

突然の悲鳴。

黒峰が眼下を見下ろすとギンガが落ちそうになっていた。

「っと、『悪魔の右腕（デビル・ブリンガー）』！」

黒峰が右腕を前に翳すと掌から更に腕が伸び、ギンガを掴む。

「よっ！」

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

黒峰の右腕はギンガの腰の辺りを掴み持ちあげる。
いきなりの浮遊感に悲鳴を上げるギンガ。
黒峰がギンガを受け止めた時には気絶していた。

「…俺の所為か。」

誰かがこの場に居れば間違いなく突っ込んだであろう台詞を残し、
もう誰もいない事を確認した後、黒峰はギンガを抱えて元来た道を
戻って行く。

ミッドチルダ北部臨界第8空港　緊急避難所

「お待たせ。」

スバルを救護班に引き渡し、ティアナの所へ向かう。
俯いていたティアナは私の姿を認めると駆け寄ってきた。

「ううん。私がお願いした事よ。寧ろ私が行くべきだった。」

「お前の魔法は攻撃一辺倒だろうが。
専用装備が無いと消火できない癖に何言ってんだ。大人しく私達を
頼れ。」

「うん。ありがとう、仁。亮と宗一は?」

「そろそろ来ると思うぞ。」

しばらくすると2人とも戻ってきた。

やはりギンガは取り残されていたらしく、黒峰が回収したらしい。

「黒峰。残っている人は？」

黒峰は少し探るようにすると答えた。

先程探れなかった場所も鎮火して来たので、問題無く探れる筈だ。

「…いや、もういない。ギンガが保護した人たちも原口が転送した。」

「そうか、原口、黒峰、先にティア連れて離れてろ。

後、管理局の連中に通達。救助隊引かせるように。」

「お前は？」

「この火災を消す。『海王の三叉鉾（トリアイナ）』」

そう言うと御剣は黄金色（きん）に光る鉾を取り出す。

先は三叉に分かれ、銀の鎖が柄に巻かれている。

「わかった。これ以上空港壊すなよ？」

「手加減はする。轟け。」

御剣が鉾を一振りすると、俄かに空港近くの海が波立つ。

海は荒れ、空は曇り、雷鳴が轟いている。さながら嵐の様だ。

事実、暫くすると海面に巨大な竜巻が現れた。

竜巻は空港を呑み込み、瞬く間に火は消えた。

「さて、宿に向かうか。」

戻ってきた御剣は何事も無かったように言った。

「随分時間が経ったな。チェックイン出来るか？」

「事情を話せば大丈夫なんじゃね？」

まるで飛行機が遅れた程度の事の様にあっけらかんと話しあう３人。

「…さっきまで大火災の中にいたとは思えない台詞ね…本当に非常識だわ。」

ティアナは呆れたように言うと３人の後を追う。

ミッドチルダ北部臨界第８空港火災事故　報告（抜粋）

死者０　火傷、瓦礫の下敷き等による怪我人多数　行方不明者０

協力者からの要救護者全員確認と同時に海上に発生した竜巻により鎮火。

救護協力者の通信によれば、竜巻は協力者の起こした物であり、その制御下に有るとの事。

事実、鎮火後すぐさま竜巻は止み、空港以外に竜巻の被害は無し。

この火災により、第８臨界空港は閉鎖。

火災の原因は輸送中のロストロギアの暴走によるものと思われる。

しかし、該当ロストロギアは火災の影響で紛失してしまい、消息不明である。

協力者は以下の3名。

管理局特別執務官補佐　御剣　仁　二尉相当官
同　黒峰　亮　二尉相当官
同　原口　宗一　二尉相当官

この件に関する彼等からの報酬の要求は無し。

以上

## 5章－3　空港（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：空港火災編です。
御剣達はＳｔＳの事はもう、うろ覚えです。

去年の１２月から出来るだけ毎日更新でやって来ましたが、若干話に詰まり始めたので、２，３日おきの更新になると思われます。
連日での更新が可能なら、します。
ではまた次話で。

『光狼の咆哮（ベオウルフ）』：対軍宝具ランクＡ　レンジ１～１０　最大補足１～３０

光の力を持つ籠手と具足。
古代の英雄の名を冠した魔獣の力が封じられている。
魔力を光に変換することで１撃１撃の威力を増大させる事が出来る。
極限まで魔力を注ぎ込んで発動する『光狼の咆哮（ベオウルフ）・獣帯横断（ゾディアック）』は、本来近距離用のこの宝具唯一の遠距離攻撃である。

『海王の三叉鉾（トリアイナ）』：対城宝具ランクＡ＋　レンジ１～９９　最大補足１０００人

海王ポセイドーンの権能を示す銛。
振るう事で嵐、津波、地震を起こせる。
周囲に水が無くとも使えるが、消費魔力が増える。

# 5章－4　接触

海鳴市　市街地　御剣古美術店

「困った事になった。」

家にやってきたクロノが開口一番にそう言い放つ。
裏口で立ち話も何なので、奥の応接室で話す事にする。

「何の事だ？」

席について、テーブルを挟みクロノに問う。
ミッドチルダでの旅行を終え、無事帰宅したのが昨日。
今日は店も開けていない。
そんな時、クロノから通信で今日来ると言うから待っていたのに、いきなりこれだ。

「空港火災の件だ。」

呆れたように言うクロノ。

「あぁ。あれか。何だ？私が天井ぶち破った事か？」

結局火災で封鎖される事にはなったが、天井に大穴を空けたのは少しマズいか、とは思っていた。
だが、あの火の海の中をスバルを連れて避難する事は、私でもきつかっただろう。

そう考えると私の選んだ道に取り残されたのがスバルだけだった事、黒峰の選んだ道にギンガが居た事は幸運だった。

「その事は良い。緊急事態だったしな。問題は君達が大方の救助者を救ってしまった事だ。」

クロノの発言に肩を竦めた。

口元が意図せず上がる。

「助けたのが悪い事だってか？」

「そうじゃない。寧ろ君達には感謝すべきだろう。」

「では何が問題だと？「はい、お茶。クロノさんも。」あぁ、ありがとう。ティア。」

「いただきます。」

ティアナが持って来てくれた茶を啜りながら聞く。

ティアナはすぐさま盆を持って行ってしまった。

「救助隊のプライドってやつさ。」

苦笑いをしつつ言うクロノ。

「管轄外の人間に横から掻っ攫われて悔しいってか？馬鹿らしい。」

「現場ではそうでもないが、上、要するにお偉い連中がね。」

「で？それがなんで困った事になるんだ？

私達が上層部に睨まれてるだなんて今に始まった事でもないだろう。

」

「君達の入局の催促が凄い事になっていてね。一応全て断っているが。」

そう言うとクロノは肩を竦める。

「なるほどね。
有能な局員の確保は重要って事か。
序でに一々莫大な報酬を払うよりも通常の給与体制に組み込んでしまえ、と。」

「そう。事実君たちへの報酬は桁外れだとの声もある。
それと、君たちは基本的に第９７管理外世界にいるだろう？
この辺りはアースラの管轄だからね。
そのせいで君たちは僕の私兵、とも言われている。」

「へぇ。それはそれで良いかもね。
管理局よりはお前になら尻尾振ってやってもいいさ。」

おどけて舌を出して『ハッハッハ』と犬の真似をして見せる御剣。

「冗談じゃない。手綱も握れない私兵なんてこちらからお断りだよ。」

「そう言うと思ったよ。しかし、私達は一応お前の部下じゃ無かったか？」

私がそう言うと、クロノは再度苦笑した。

「書類上はね。
ただ、特別に官職を与えられ、管理局の指揮下に入らない、と言うのは中々に厄介な立ち位置だ。
それだけは覚えていて欲しい。」

クロノは真剣にこちらを見ている。

「私達を快く思わない連中が何かしでかす、と？」

「そこまでは分からない。
君達には反感と同じくらい称賛も有るからね。
今回の件は次元世界ではなく、ミッドチルダでの事件だ。
君たちは一躍有名人だよ。」

「そうか。まぁ、今度ミッドに行く時は気を付けるよ。」

「あぁ。そうしてくれ。
今日の所はお暇しよう。おっとそうだ。
忘れていた。なのはとフェイトから伝言。
『模擬戦してください』だと。」

席を立つ途中で思い出したようにクロノが言う。
ちなみに2人との戦績は23戦22勝1分けだ。
引き分けたのが前回。
なのはは落としたものの、その隙にフェイトに切りかかられ、互いの喉元に剣を突き付ける結果となった。
一生の不覚。

「…懲りないな。
いっそわざと負けるか？」

「それがばれたら、２人とも怒るだろうがな。
で？返事は？」

「仕様が無いから受けてやる。
日時やらの細かい所は、そちらで決めていい。」

「そうか。確かに伝えよう。
ではまたな。」

「あぁ。」

クロノが去ったのを確認して、待機させていた通信端末を開く。
空中に投影される立体モニター。
黒一色の画面に赤い字で「Ｓｏｕｎｄ　Ｏｎｌｙ」と表示されている。

「すまない。待たせた。
で？この端末のアドレスを知っている者はそういないんだが？
どちら様かな？」

「（これは失礼した。名乗るのを忘れていたよ。
私の名前は―ジェイル・スカリエッティ（・・・・・・・・・・・・）。
科学者を生業としている。）」

時間は少し遡る。
クロノが来る直前、私に支給されている通信用端末に着信が有った。
この端末にかけてこられるのは、管理局でもごく一部のはず。

発信者も非通知で不審に思ったが、一応出てみればこの画面だ。
丁度クロノも来たので待たせていたが、本当に未だ待っているとは思っていなかった。

「で？その科学者さんが私に何の用かな？
長旅から帰ってきてまだ間もなくてね。
用件は早急に済ませてくれ。」

リビングのソファに腰架け、足を組んで画面に向き合う。
こちらの様子だけ、向こうに筒抜けと言うのは腹立たしいが、今はその事は置いておく。

「（その旅路で随分と活躍したようだね？
今ミッドチルダでは、君たちの事で持ち切りだよ。）」

「らしいな。
只の一般市民には過ぎた評価だと思うがね。」

肩を竦め、湯呑の茶を啜る。
先ほどよりも冷めているが、猫舌の私には丁度良い。

「（そんな事は無いさ。
むしろ、君たちに何も報いない管理局の方がどうかしているのさ。）」

「…どうやら管理局の人間ではないらしいな。
無駄話はそこまでだ。用件は何だ？」

「（それでは本題に入ろう。君たちの力を貸りたいのだ）」

「…依頼か？」

「（契約だよ。私の目的の為に力を貸して欲しい。
もちろん、十二分な報酬は用意するつもりだ。金は言い値で払おう。
）」

「だが断る。」

「（何故かな？まだ契約内容も言っていないが？）」

「実に単純な理由だ。
たった一つのシンプルな答えだ。
顔を見せない様な奴の依頼は受けない。
依頼したきゃ自分の足でここまで来い。ではな。」

そう言って通信を切る。
まぁ。ああ言ったが、絶対にその契約を受ける気は無いよ。Ｄｒ．スカリエッティ。
さて、どうしたものか。
あり得ないとは言い切れなかったものの、まさかスカ博士が出てくるとは…
ＳｔＳにも私達は介入する事になるか。
ティアナを引き取った時、否。
ティーダと知り合った段階から懸念はしていたが。
問題はＳｔＳにおけるはやての不在。
すなわち機動６課が設立されないという事。
その辺はどう動くのかねぇ？
ま、私達が関わらなけりゃ関わらないで良いんだが。
スカ博士の目的の邪魔をする気も、管理局の秩序とやらを守る義理も無いし。

双方、勝手にやってくれ。

## 5章－4　接触（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：スカ博士登場。

スカ博士がやろうとした事って、管理局以外にデメリットって有ったんでしょうか？

一般市民には、特に影響無い様な。

まぁ、彼の目指す、生命操作技術の完成、そのための空間作りというのは、ずっと引き込もってりゃ良いんじゃね？

とか思いますが。

ではまた次回。

# 5章－5　御剣ＶＳティアナ

２０１２年　１月９日　海鳴市　近郊　森林

静かな早朝。
小鳥たちが囀り、辺りには冬らしい張りつめた空気が流れている。
そんな中向き合う人影が２人。
ティアナと御剣だ。
ティアナはバリアジャケットを、御剣もいつぞやの鎧を身につけている。
ティアナのバリアジャケットは、原作の訓練校時代の物と形こそ同じだが色は異なり、黒地に所々オレンジが入っている。
また、ベルト部分にはマガジンがいくつも付いており、上着の内側にもクイックローダーが付いている。

「さて、準備は良いか？ティアナ・ランスター？」

あえて愛称ではなく本名で呼ぶ。
ティアナもその意図を察したのか無言で頷いた。
森には２人だけでなく立会人として黒峰、結界担当の原口、その他観客も居る。

「御剣はティアのバリアジャケットを抜かない様にな。」

黒峰がこちらを見つつ言って来る。
しかし、こちらもそんな粗忽者ではない。

「分かっている。そこまで間抜けじゃない。」

頷く黒峰。

「では、陸士訓練校入学権取得試験2回目、御剣ＶＳティア！
前回通り、ティアは御剣に有効打を入れるか、御剣に負けを認めさせたら勝ち。
御剣はティアに負けを認めさせたら勝ち。ただし、ランクＢ以上の攻撃用宝具禁止。
位置について！」

黒峰の言葉で2人が身構える。
現在の彼我距離は５ｍ。御剣には一足で詰められる距離であり、ティアナには遠距離攻撃の手段が有る。
互いに互いの間合いの範疇。

「用意！……初め！」

刹那弾け飛ぶ両者。
御剣は飾り気のないロングソードを手に、ティアナの方へ。
踏み込みだけで大気が震え、剣は空気を薙ぎ払う。
方やティアナは、クトゥグアで弾幕を張りながら後退。
兆弾、散弾、イタクァの牽制砲撃。手を変え品を変え、御剣から逃げる。
森に逃げたティアナを追って、御剣も森へ入り、2人は森の中へと消えた。

Ｓｉｄｅティアナ

一度目の交差。
剣を手に躍り懸かって来る仁を牽制しながら引くので精一杯だった。
怖い。怖い恐い。
あまりの恐さに歯の根が合わなくなりそうだ。
前回、仁に負けた記憶が蘇る。
畏怖と恐怖が手と手を取ってラインダンスでこちらにやって来る。

「ヤバ…怖すぎて自分でも何考えてんのか分かんなくなりそう。」

相変わらず仁は強い。
1年前には骨身に染みて理解した。
はやて姉さん、シグナムさん、エイミィさん、誰に聞いても仁は強いと言っていた。
でも、話で聞くより実際見た方がずっと良く分かった。
仁は、強い。
今回の1合を取っても分かる。
まずはその身体速度。
見えたのは踏み込みまで。
剣が振りかぶられたと思うと、手から先が消えた。
とっさに避けられたのは僥倖だった。
更にはその膂力。
地面に叩き付けられた剣が、まるでお豆腐にナイフを刺したみたいに地面を切り裂いていた。
当たっていたら、ううん。防いでいたら死んでいたんじゃ無いんだろうか？
極めつけはその動体視力。
カートリッジの魔力を全部集束させた後拡散させる散弾。
銃口の向きから弾道を読ませない為の兆弾。
私の体を使った死角からのイタクァの砲撃。
その全てを仁は見てから避けている。

これは中々に厳しい。接近してからの銃撃は避けられると考えていい。
それなら…

「…さぁ。１年の修練の結果、見せてあげるわ。仁。」

ティアナの口角が吊り上がる。
それは、極稀に御剣が見せる笑みに似ていた。

Ｓｉｄｅ御剣

「ふぅ。」

足を止め一息つく。
ティアナを追って森に入ったは良いが、すっかり見失ってしまった。
この森は常緑樹が多く、シイやカシが大部分を占める為、冬でも緑が濃い。
この場所を指定したのはティアナだったが、これが狙いか？
しかし、教えたのは私だが、あの二丁拳銃、中々に厄介だ。
クトゥグアのカートリッジ弾数は２０＋１。
１発１発の魔力量は大したことは無い。
だが、それを集束、加速して打たれると痛い。
鎧の上からでも痣ぐらいにはなるだろう。
更には兆弾、散弾。
弾種を切り替えて撃たれると対応に追われて追撃がし辛い。
散弾を連射された日には、ロングソード１本では無傷では済むまい。
実際何発かは鎧を掠った。
加えてときどき来るイタクァの砲撃魔法。
大口径カートリッジ１発の魔力全てを使うが、当たれば私でもそれなりにまずい。

クトゥグアの連射に慣れたあたりで撃たれると、かなり厳しい。

「…強くなった事を祝福すべきなのだろうが…」

それも私を倒すため、となると心中は複雑だ。

まぁ、私に有効打を与える事がこの試験の合格条件。

さて、何をしてくるか…

そう思った瞬間、背筋が凍る。

とっさに屈むと、先程まで頭の有った場所を濃いオレンジの魔力弾が通って行った。

「狙撃か！」

すぐさま魔力弾の飛んできた方へ走り出す。

雨の様に降り注ぐ魔力弾。

しかし攻撃は単調な上、牽制目的なのか、1発1発の魔力量も少なめだ。右へ左へ避けながら接近する。

魔力弾は木の梢から撃ち出されている。

木の幹を踏みつけ一足飛びに梢まで飛び上がる。

が、そこにティアナはいなかった。

代わりにあったのはオレンジ色のスフィア。

それも魔力が尽きたのかすぐに消えた。

「…オートスフィア？」

あっけに取られたのもつかの間。

梢に着地すると同時に右足に巻き付くオレンジの魔力糸。

途端に右足から力が抜ける。

「くっ！『アトラック＝ナチャ』か！？」

ティアナの習得している数少ない補助魔法、アンカーとしても使える魔力糸を生みだす魔法。
元々はただの魔力糸を出すだけだったのだが、私が捕縛用に、と弄った結果、巻き付いた相手の魔力を拡散させ、脱力感を与える効果を付随させた。
…この場合も自業自得と言うのだろうか？

「うおぉぉぉぉぉ！？」

一気に梢から引きずり降ろされる。
なんとか体勢を立て直して着地すると同時に襲い来る魔力弾の嵐。
右足が封じられ碌に立つ事もままならない。
転がって避け続けるも、木にぶつかってしまう。

「『燭天覆う七つの円環（ロー・アイアス）』！」

魔力弾の降り注いでくる方向に翳した右手に顕れる、巨大な7枚の花弁。
花弁を散らす事無く、魔力弾は全て弾かれた。

「甘いわよ。仁！」

花弁の向こう側からティアナの声がした、と思った瞬間、私の横にティアナが現れる。
『燭天覆う七つの円環（ロー・アイアス）』は確かに投擲武器、要するに飛び道具に対しては絶対的な防御を誇る。
しかしだ。その大きさ、花弁自体が発光している事から、視界が奪われがちだ。
さらには顕現中はその場から動けない。

とっさにアイアスをしまい、左手に持っていたロングソードを突き付けるも、懐に入り込まれる。
そして左腕を掴まれたかと思うと地面に叩き付けられた。

「ぐふっ」

私の口から息が漏れる。
逆一本背負いとは…黒峰だな。

「取った！」

間合いを取り、こちらにイタクァの銃口を向け、フルリロードするティアナ。
猛獣が吼えるような音を5度立てて、シリンダーが一周する。
イタクァの銃口に集まる魔力。
密度を高められた魔力は互いに反発し、赤い雷が銃身に走っている。

「『集中集束（コンセントレイト）！ファントム・ブレイザー！』」

迫るオレンジの光線。
だがティアナ。間合いを取ったのは失敗だったな。
残念ながら私の勝ちだ。

「『魔術筒（マジック・シリンダー）』。」

着弾までの一瞬のうちに、右手の指に挟んだ口紅サイズの筒を2つ、ティアナに投げる。
筒は一瞬で巨大化し、ファントム・ブレイザーを呑み込む。

「そら、返すぞ。」

呑み込まれた筈のファントム・ブレイザーが、もう一方の筒から
そのままティアナに放たれ

ガシャァァァン

……
ティアナが砕け散った。

「…は？」

瞬時には理解できず思考に空白が生まれた刹那、「チェック。」
頭の後ろで撃鉄が起きる音がした。
後頭部に伝わる冷たい鉄の感触。

「…まいったね。いつの間に幻術なんて覚えたんだ？」

両手を上げて降参する。
…手加減していたとは言え、この世界に来て初敗北だ。
しかも慢心、油断が原因。元ネタの癖が移ったか？
オートスフィアなんて、私が知らない魔法を習得している時点で、
幻術の可能性も気付くべきだった。

「極最近よ。１分も持たないし、魔力を一気に持っていかれるけど。
囮にはなったでしょう？この『ミラー・オブ・ニトクリス』。」

「いつ入れ替わったか聞いても良いか？」

「仁を投げ飛ばしてすぐよ。

仁にも気付かれなかったなら、大体の相手に効きそうね。」

まったくだ。

思わず笑みが零れる。

「何がおかしいの？

私なんかに負けたのが悔しくておかしくなった？」

「酷い事を言うな…違う。嬉しいのさ。

あぁ。弟子に抜かれた師匠の気分てのはこんな感じか。」

そう言いつつ、ティアナの頭に手を乗せ、髪を梳くように撫でる。

「でも、手加減されてた。」

大人しく撫でられつつも、頬を染め不貞腐れた様に呟くティアナ。

「ふん。本気の私に勝てたら、それはもう次元世界最強だろうよ。」

「暗に自分が最強って主張してない？」

ジト目で見てくるティアナ。

「あぁ。そうさ。私はこの次元世界で最も強い。だからな、ティア。」

撫でていた手を止め、ティアナの瞳を見つめる。

「自信を持て。お前は強い。

手加減していたとはいえ、私に勝ったのだから。」

こちらを見つめて力強く頷くティアナ。

「さて、ではティア。約束通り、陸士訓練校の入学試験を受験する事を認めよう。
当然ながら、試験に落ちたらまたこちらで生活するように。
まぁ、私達がみっちり訓練したんだ。寧ろ訓練校の方が楽かもな。」

少し茶化すように言う。
…無言で腕を払いのけられた。

「分かってるわよそんな事…バカ。」

「信頼している、と暗に含ませたんだが？」

「…それも分かってる。
…仁？」

「なん…っと。」

答えようとすると、ティアナがこちらに寄りかかって来る。
ティアナの顔は私の胸に押し当てられて、表情を窺い知ることは出来ない。

「私ね。決めた事があったの。もう泣かないって。
次泣くのは、執務官試験に受かった時だって。
でもね…今、ちょっとその決め事、守れそうにないの。
嬉しくて…仁に褒めてもらえて…認めてもらえて…」

ティアナの肩は震えている。

背中に手を回し、優しく抱きしめる。
ティアナが落ち着くまでそのままの体勢で数分。
背中を子どもをあやす様に撫でてやると落ち着いたのか、顔を上げて離れるティアナ。

「うん。ありがと。仁。」

「どういたしまして。
胸くらいなら、いつでも貸してやる。
今日明日に出発ってわけでも無ければ、二度と会えん訳でも無かろうに。」

「うん。」

結界外

「…こっちからも見えとるっちゅう事に、気ぃ付いて無いんかな?」

不貞腐れた様に口を尖らせて言うはやて。

「御剣は変なとこ抜けてるからな…あり得ないとも言い切れない。」

## 5章－5　御剣ＶＳティアナ（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：模擬戦ティアナ勝利Ｖｅｒ．です。
途中で何度も御剣が勝ちそうになりました。危ない危ない。
どうしても戦闘回は文字数が増えますね…読み辛かったらすみません。

ティアナの魔法、『アトラック＝ナチャ』、『ミラー・オブ・ニトクリス』は両方ともデモベの魔法のアレンジです。
後者はＮＡＲＵＴＯの影分身も入っていますが。

次回からは新章、ティアナ訓練校編です。
暫く御剣の出番が無くなります。
ではまた次話で。

# 6章－1　入学

００７２年６月　時空管理局武装隊　ミッドチルダ北部　第４陸士訓練校

「……試験をクリアし、志を持って本校に入校した諸君らであるからして、」

今日は陸士訓練校の入校式。
大講堂に集合した新入生を前に教官が挨拶を述べている。

「管理局員、武装隊員としての心構えを胸に、」

集合した新入生の中には、スバルとティアナの姿もあった。
1人は志半ばで果てた兄の遺志を継ぐため、もう1人はあの日憧れた背中を追いかける為。
それ以外の者達も其々の夢の為に。

「平和と市民の安全の為の力となる決意を、しかと持って訓練に励んで欲しい。」

『はいっ！』

決意も新たに声を合わせる新入生達。
それを聞き、講堂を見回した教官は満足げに頷き、言葉を続けた。

「以上！解散！1時間後より訓練に入る。各院、仮割り当ての部屋へ移動！
2人部屋のルームメイトは、試験結果及び面接によって決定された、

当面のコンビパートナーでもある。
円滑に過ごせるよう努力するように！」

３２号室前

「…３２号室？」

「あ、はい！そうです。」

入り口でばったり会った２人の初会話がこれである。

「私、ティアナ・Ｌ・御剣。１３歳。」

「わ、私はスバル・ナカジマ、１２歳です！
今日からコンビでルームメイトですね！よろしくお願いしますっ！」

「正式な班とコンビ分けまでの仮コンビだけどね。
挨拶はこれくらいにして、荷物置いて、着替えて行きましょう。
あと、立場は対等なんだから、敬語じゃ無くていいわ。」

「は、はい…じゃない。うん。」

言う事だけ言ってスバルを置いて部屋に入るティアナ。
どこかそっけないティアナの態度に戸惑いながら、子犬よろしくスバルはティアナの後を追った。

訓練場　倉庫内

「スバルだっけ。デバイスは？」

「あ、わたしベルカ式で、ちょっと変則だから……持ちこみで、自前なの！」

初の訓練前で騒然とする倉庫内で、各々が規格の訓練用デバイスを選ぶ中、スバルとティアナのコンビだけが少し離れた所にいた。

「自分で組んだローラーブーツと、リボルバーナックル！インテリシステムとかはないタイプだけど、去年からずっとこれで練習してるの。」

手馴れた様子でデバイスを装備したスバルが、誇らしげに2タイプのデバイスをティアナに紹介した。

ティアナはそれらを冷静に分析する。

ローラーブーツは自分で組んだというだけあって、特色のない魔力駆動の規格品である。

陸戦魔導師ならば、妥当な機動力の確保方法だと言えるだろう。

しかし、右腕に装着したナックルの方はかなりの高級品だと見抜いた。

近代ベルカ式は次世代魔法だし、搭載されたカートリッジシステムもコンパクトで新しい。

「格闘型…前衛（フロントアタッカー）なんだ。」

「うん！」

ティアナの呟きに反応して、能天気に返すスバル。

ティアナはそんなスバルを横目で見つつ、自身もデバイスの準備を始める。

「御剣さんは？」

「あたしも自前。ミッド式だけどカートリッジシステム使うから。

変則式で纏められたみたいね。」

肩に提げていたガンケースから二丁の拳銃型デバイスを取り出すティアナ。
解体していたパーツを組み合わせ、カートリッジ入りのマガジンを装填する。
手になじませた後、腰のガンホルダーにデバイスを突っ込んだ。

「わ、銃型！珍しいね。かっこいー！」

しかし、スバルは銃型という点に眼を輝かせた。
ティアナはそんな子供っぽい反応に冷めた視線を返す。
ティアナに無言の釘を刺されたスバルがビクッと震えた。
そんなスバルの反応を目の端で捕えつつも、やや人見知りで自分から他人に踏み込まない性分であるティアナは、素っ気無く視線を外すと出口へ足を向ける。

「さ、準備済んだなら行きましょ。
いきなり合わせろ、なんて言わないから安心しなさい。」

「う、うん。」

それだけ言って、すたすたと歩いて行ってしまうティアナ。
スバルはまた、そんなティアナの後を追って訓練場に入った。

「次！Ｂグループ、ラン＆ａｍｐ；シフト！」

最初の訓練はコンビによる機動と陣形の即時展開。
訓練場の設備を利用した基本的な訓練だ。

「障害突破して、フラッグの位置で陣形展開。わかってるわよね？」

「うんっ！」

二人組（コンビ）での行動の仕方はすでに理解しているが、それはあくまで知識としてでしかない。

冷静なティアナとは裏腹に、スバルは若干緊張していた。

「３２……セット！」

教官の合図で位置に着く二人。

「前衛なんでしょ？フォローするから先行して。」

「うん！」

力強いスバルの返事に感心しつつ、視線をフラッグに注ぐティアナ。

だが、スバルのローラーブーツの回転数が、過剰に上がっているのにティアナが気付いた時には、全てが手遅れだった。

「３２……セット！…ゴーッ！」

教官の号令と同時にスバルが飛び出した。…トップスピードで。

「えっ！？ちょ…んっ！」

土煙を上げて一直線にフラッグへと驀進するスバル。

少々過剰とも言える魔力を注ぎ込まれたローラーブーツは、主人の求めに応じて加速した。
そして、誰よりも早くフラッグを確保したスバル。
だが、肝心のパートナーは、未だ到着出来ていなかった。
土煙が晴れた後から走って来るティアナ。
しかし…

「３２！馬鹿者、なにをやっている！
安全確認違反！コンビネーション不良！視野狭窄！腕立て２０回だ！」

結果は不合格。
教官に叱責され、二人はいきなり意気消沈した。

「足があるのは分かったから、緊張しないで落ち着いてやんなさい。」

「ご…ごめん…」

「いいわよ。
次はちゃんとやってよね。」

「はい～ッ！」

次の訓練は垂直飛越。壁などの遮蔽物を一人が足場となって飛び越える、やはり基礎的な訓練だ。
足場役が両手を組んで相手の足がかりとなり、跳ぶ力と押し上げる力で高い壁を乗り越える。
そして上の相手に引っ張り上げて貰う、というものだ。

多少息を合わせる必要はあるが、それほど困難な事ではないはずだ。
何より、これならば緊張で力んでも、プラスにはなれど、マイナスにはならないだろう、とそんな甘い考えを持っていた事がティアナにとっての不幸だった。
自分に待ち受ける運命も知らず、ティアナは名誉挽回しようと意気込むパートナーに声を掛ける。

「届かないとぶつかって痛いんだから、しっかり上まで飛ばせてよ。」

「うんっ！」

気合い十分、スバルは頷いた。
スバルも、自分の膂力には自信が有った。
これならば、と相方の期待に答える為、魔力で身体強化（フィジカル・エンチャント）して備える。

「いち　にーの……「え？ちょ、ちょっと待ちなさ」「さんっ！！」

次の瞬間、上空高くティアナの体が舞い上がる。
木の葉のように吹き飛んだ相棒を見上げ、スバルは慌てる。

「あああっ、しまったぁ！」

吹き飛ばされながらも、どこか冷静な部分で思考を続けるティアナ。
…後で一発殴ろう。
空中で錐揉みしつつ、本能的に口から漏れる悲鳴を噛み殺しながら、ティアナは黒い決意を固めた。

墜落死が確実な高度で勢いが衰え、落下が始まる。
どうしたものか、と対処を考えるティアナの視界が地上を捉え、自分を追って走り出すスバルの姿が見えた。

「動くな！訓練中よ！！」

上空から聞こえたティアナの一喝にスバルが硬直する。
ここでスバルが持ち場を離れれば、更にミスが決定する。それは許容出来なかった。
片方のミスはもう片方が補う。だからこその”コンビ”なのだ。
この程度で失敗などと判断されては困る。
それに、吹き飛ばされる事にかけては、ここに居る誰よりも慣れている自信があった。
とは言え、この高さは未経験だが。

「さぁ、失敗したら死ぬわね。これ。」

そう口では言ってみるものの、失敗する気などさらさら無かった。
訓練初日で相棒のミスによって事故死など笑い話にも…
いや、いつかあの世で会ったら、亮か宗一に笑い飛ばされそうだ。

「せーのっ！」

腕と足を振り、体を地面に対して平行にする。
次に重心を後ろに引っこ抜き足を下に。
足裏が地面にぶつかると同時に膝で衝撃を吸収。
そのまま腰、肩、手と回転しつつ衝撃を吸収。
転がった勢いもそのままに立ち上がるティアナ。
一連の流れを見守っていたスバルを含む訓練生達が感嘆の声を漏らす。

「ご、ごめんなさい！御剣さん、大丈夫っ！？」

大地に仁王立つティアナの方へ、スバルが心配そうに駆け寄ってきた。
それをジロリと一瞥しながらも、同じく歩み寄ってきた教官に向き合う。

「３２番…」

「特に問題はありません。『多少』パートナーに力みがあったようです。」

睨み付けるような教官の視線を平然と受け流して、平然とティアナは言ってのけた。
自分が原因である、と理解出来ているスバルは、ハラハラと二人の様子を見守っている。
しばしの沈黙の後、教官は訓練を続行しろ、とだけ短く告げて、去って行った。

「…御剣さん…」

「…」

「本当にごめんなさい…失敗を取り返そうと思って…」

「…色々言いたいし、一発ぶん殴ろうとも思ってたんだけど、とりあえず一つだけ言う事があるわ。」

「な、何？」

「あちこち痛くて、動けないから運んで。」

着地の衝撃は分散しただけで、消滅したわけではない。
足は痺れ、歩く事もままならない。
服の下で見えない所にも痣が出来るだろう。
訓練場の地面に紅い華が咲かなかっただけで御の字ではあるが、痛い物は痛いのだ。
ティアナは青筋を浮かべて、暫くの付き合いになるパートナーに苛立ち紛れに告げた。

## 6章－1　入学（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：ティアナ訓練校編です。
6章においては御剣達の出番はそれほどありません。
魔改造されたティアナがどう本編と違うか、と言う話になります。
ではまた次話で。

# 6章－2　コンビ

第４訓練校　訓練場　夕刻

「あ、あの…ホントごめん……」

訓練が終わってからはずっとこれだ。
先程から口を開けば謝罪ばかり。…まぁ、反省はしているという事なのだろう。
しかし、考え事の最中に声を掛けられればついつっけんどんな言い方になってしまう。

「謝んないで。うっとうしい。」

本日の訓練での成果、それは暴走する相方をフォローし続けた事による精神的な疲労と、暴走する相方の所為で課せられた訓練場の清掃だった。
まぁ、件の相方の所為であちこちに空いた大穴を見て居れば、教官の言う事も尤もだと思えてくる。
人型サイズのモノがただ地面を殴っただけで穴が空く、と言うのは見慣れているが、アレみたいにレアスキルを持っているのならばとにかく、ただの身体強化（フィジカル・エンチャント）だけでというのは…

「あたし、もっとちゃんとやるから……
御剣さんに迷惑掛けないように！」

ここでようやくティアナが顔を上げた。
こちらを見つめているスバルの目を無言でじっと見る。
次第に目力負けしていくスバル。

スバルが完全に目を逸らしてしまい、俯いてしまった所でティアナが口を開いた。

「…あのさぁ、気持ち一つでちゃんとやれるなら、どうして初めからちゃんとやらないの？」

「え、あ…うぅ…」

「どこのお嬢が遊び半分で冷やかしに来てんのか知らないけど、ここはそんなに気楽な場所じゃないわ。死ぬ前にとっとと帰れば？」

「あ、あたしは別にお嬢でも、遊びでも…真剣だし…本気で！」

「ならいいわ。」

「へ？」

「もう良いって言ったのよ。今日はまだ初日だしね。大目に見といてあげるわ。でも、次また同じような失敗したら、その脳天ぶち抜いて、このグラウンドに紅い華咲かせるからね。」

「え〝っ、は、はい！」

随分とあっさり許して貰えたと思えば、決して目が笑っていない脅し文句。

あの目は本気でやる気だ。ティアナの視線に本気でビビってスバルは縮こまってしまう。

そんなスバルを尻目に、ティアナはさっさと掃除道具を片手に清掃を始めてしまう。

「返事だけは良いのね。
まぁいいわ。ちゃっちゃと終わらせましょ。」

「い、いいよ。御剣さんは休んでて。
あたしの所為なんだから。あたしが全部やる！」

「馬鹿言わないで。これは私にも課せられた罰よ。
それを他人に任せてのうのうとしてられる程、人間腐って無いわ。」

「で、でも、この罰は私の失敗の所為だし、御剣さんは別に悪くないんだから休んでて。」

そんなスバルの方には一瞥もくれず、淡々と清掃を続けるティアナ。
どうしたものかとスバルがオロオロしていると、ティアナが口を開いた。

「”コンビ”なんでしょ？私達。
なら一蓮托生よ。ま、正規のコンビが決まるまでの仮コンビだけど。
それでも、あんたの罰は私の罰で、私の罰もあんたの罰。
あんたの手柄は私の物で、私の手柄もあんたの物。
簡単な理屈よ。」

そういうとティアナは手を止め、スバルの方を向き、片側の口角を吊り上げて不敵に笑ってみせた。
その大人びた魅力と迫力を秘めた笑みに、スバルは射竦められる。
本当にこの少女は、自分より１つ年上なだけのだろうか？

どんな生き方をすれば、この人の様になれるのだろう。
あぁ。自分は憧れてばかりだ。
救ってくれたあの人に憧れ、自分よりしっかり者の姉に憧れ、未だ届かぬ母に憧れ、そしてまた自分より少し年上なだけの人に憧れ、いつになったら辿りつけるのだろうか。
胸に淀んだ思いを払い、努めて明るく答える。

「う、うん。私！頑張るよ！
御剣さんにもう迷惑掛けないように！」

先程の言葉を思い返し、ティアナからのパートナーとしての言葉と信頼に、答えようと心に誓う。
対するティアナは笑みを消すと、普段の冷めた仕草で溜息を吐いた。

「返事だけはいいわね。言葉じゃなくて行動で応えなさいよ。」

「わかった！　わたし、頑張るよ！！」

「それじゃあ、まずはこの掃除をさっさと終わらすわよ。
その馬鹿力でこの穴もちゃっちゃと塞いじゃって。後で私が均すから。」

「了解！　……ねっ、折角コンビになれたんだし、『ティアナさん』って呼んでもいい？」

「分かりやすい馴れ合い方ね。こっちは『スバル』なんて呼ばないわよ、『ナカジマ訓練生』。」

「ええ～っ、コンビでしょー？」

「あたしが頼れる位になれば、考えるわ。
…そうね。明日の朝、ちょっと付き合いなさい。」

「え？何で？」

「見た所、あんたは自分の馬鹿力をちゃんと使えてないわ。
早めに矯正しといた方がお互いの為よ。覚悟しときなさい。みっち
り扱いてあげるから。」

「う…っ、がんばります…」

少しだけ距離を縮めた二人の会話は、暫く訓練場の片隅で続いた。

前途多難ではあるが、とりあえず一歩前進。
ティアナ・Ｌ・御剣、スバル・ナカジマ、２人の訓練校生活は、ま
だ始まったばかり。

## 6章ー2　コンビ（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：お待たせしました。第6章2話です。

切りの良い所で区切ったら今回はなんだか短くなりました。
次話はもう少し早く更新出来ると思います。
ではまた次話で。

# 6章－3　訓練

第４陸士訓練校　９月　屋外訓練場

ガキュン！　ガキュン！

構えた右手のクトゥグアから2発分の薬莢が飛び出す。
それと同時に空気を切り裂いて、濃いオレンジの魔力弾が放たれた。
深い木立を蛇のように掻い潜って、森の奥の木に貼られた的に寸分違わず命中する。

「…よーし、３2番いいぞ。」

「ありがとうございます。」

…内心はヒヤヒヤ物だった事を無表情の仮面に隠して、ティアナは言った。
相変わらず弾丸誘導は少し苦手だ。
それでも外す気は全く無いが。
足元に落ちている薬莢を拾い、腰に付けた廃莢入れに入れる。
ティアナのデバイスは完全オリジナルなので、その規格に合ったカートリッジも、自分で用意しなくてはならない。
ワンオフ物に付き物の悩みではあるが、相応の信頼をティアナはこのデバイスに注いでいた。

「しかし、精密射撃には自信があるようだな？」

暗に、お前のしたことはお見通しだ、と言われたティアナが苦笑する。
この訓練は標的までの障害物を利用して魔力弾の操作性を高める為のものだ。
ティアナが放った魔力弾は二発。
うち一発は指示通り、射線上にある木々を避けるように弾道を操作して命中させた。
しかし、もう一発の魔力弾は、本来不可能に見える標的まで直線で繋いだ僅かな隙間を、限界まで集束させた弾丸で縫うように放ったのである。
もちろん、結果は二発とも、ど真ん中に命中だ。

「その能力は武器になるだろう。活用していけ。」

一つの目的を達するのに、教科書に書かれている事をそのままなぞる必要は無い。
現場で求められるのは結果だ。臨機応変に状況に応じて対処出来なければならない。
その場その場に応じた対処の恐ろしさは、身を持って知っている。
戦闘に於いて、引き出しは多ければ多い程良いという事も。
…あの引き出しの多さはもはや反則だが。
非才のこの身に修められる魔導には限りがある。
ならば、その限られたモノで戦場を生き抜く。
その為の技術は身につけて来た。

「…だが、何故その様な無理な体勢になるのか…
関係が有るのか？」

「え゛！いや…その…」

ティアナの射撃スキルは凄まじく高い。
魔道バレルを展開させる事で、最大１Ｋｍの距離の的も撃ち抜ける。
だが、比較的近距離を打つ際に、何故か無理な体勢で撃ってしまう。
拳法の型の様な体勢になったり、脇を開き、右手は胸に寄せ、左手を突っ張る様にして撃ったり。
それもこれも、銃の扱いの基礎を学んだ相手の所為だ。
二丁拳銃と言うスタイルはいい。
だが、ガン＝カタだの、双銃術だの果てには四丁拳銃だの言いだす始末。
あんな曲芸染みた撃ち方をやらせようとする兄貴分のせいで、こんな人前で恥をかくのだ。
結局、その拳法だかなんだか分からない戦闘法は習得しなかったが。
なにが戦闘力が２．２倍になる戦闘法だ。

「流石御剣さん！私達に出来ない事を平然とやってのける！
そこに痺れる！憧れるぅ！」

だが、後ろの観客（オーディエンス）には受けたらしい。
当初から感じていた変則デバイス持ちへの奇異の視線も薄れ、純粋な憧れの視線が増えて来た事はティアナも肌で感じていた。

「どうぞ！御剣お姉さま！」

そう言ってタオルを差し出してくる女子。
それを皮きりに次々に押し寄せる集団。

「ちょっと！抜け駆け禁止よ！順番！」

「良いじゃない！早いもん勝ちよ！」

「罵って下さい！」

だが、なんだこの扱いは？

と言うか同期なのだから、お姉さまと呼ばれるのは明らかにおかしいだろう。

あと、最後の奴前へ出ろ。人を何だと思っているのか。

教官が慰める様に肩に手を置く。振り向けば憐憫の眼差しを向けられた。

ティアナは盛大に溜息を吐く。

ティアナが訓練校に入校して3ヵ月。訓練は順調であった。訓練は。

## 32号室

ティアナが訓練後のシャワーから戻ると、珍しくスバルが自室のデスクに向かっていた。

…最近、シャワーを浴びている時の周囲の視線が怖い。

あれは最早、凝視とかのレベルでは無い。胸やら腰やらに穴が空くかと思う程だ。

多少げんなりしつつ、ルームメイトに声を掛ける。

この3ヵ月で随分と親しくなったものだ。本コンビでもこの組み合わせだったし。

「なんだ、もうアンケート書いてるの？」

「あ、御剣さん。おかえりー。」

そう言いつつ顔を上げ、手をひらひら振ってくるスバル。

机の上には、卒業後の配属希望先を記入する為のアンケートが置かれていた。

「…まあ、どーせ提出するわけだしね。あたしも書いちゃお。」

自分に割り当てられた引き出しから、自分もペンと紙を取り出して書き始めるティアナの横で、人知れずスバルの瞳が光った。
机に向かうティアナとは反対に席を立ち、書き終えたアンケートを仕舞う動きを見せながら、素早く背後に回り込む。
足音と息を殺し、抜き足、挿し足、忍び足で、ティアナの書くアンケートを肩越しに覗き込もうと画策した。
だが、それはあっさり失敗に終わった。

「チェック。はい、死んだ。」

唐突に硬い感触が顎を持ち上げ、冷や汗を流しながら視線だけ下に向けると、いつの間にか下から突き上げるように向けられたイタクァの銃身が見える。
鼻先には鋭く光る銃剣（バヨネッタ）。
加えて肩越しに向けられるティアナの極寒の視線を受け、スバルは必死に命乞いする。

「ちょっ！まっ！止めて！非殺傷でもイタクァ（それ）は死ねるって！」

「安心して。非殺傷なんて酷い事しないわ。
脳味噌吹き飛ばして、痛みも感じさせず送ってあげる。」

「そんな優しさは要りません！出来心ですスミマセン！」

溜息を1つ吐くと銃口を下ろすティアナ。

「…まぁ良いけど。何？見たいの？」

「いや、あのー…その、興味があるっていうか……コンビとして？」

初の訓練時から好んで強調するようになった”コンビ”という言葉の出所を探って、ティアナは以前の自分を叱り飛ばしたくなる。腹立ち紛れに、驚異的な早さでスバルのアンケート用紙を奪う。

「あんたには関係ないでしょ。まったく…そーゆーあんたはナニ希望よ？」

「あっ、早！？」

「備考欄『在学中はティアナ・Ｌ・御剣訓練生とのコンビ継続を希望します』？やめてよね、ぞっとしない。」

「みーなーいーでー！」

必死に妨害しようとするスバルの攻撃を、ティアナはアンケートを読みながらヒラヒラかわしていく。上、左、右、下。フェイントを掛けられ完全に翻弄されて、スバルは涙目になりつつあった。

「だいたいね、在学中のコンビなんて一時的なものよ。必要以上に馴れ合ってどうするの？卒業してそれぞれの配属が決まった時、後腐れなく別れることが出来る。

同僚として不安なく互いを見送って往ける。それが訓練生として理想的な付き合い方よ。
あんたもちょっと独立する意思を持ちなさい。」

もはや恒例となったティアナの説教がスバルを厳しく叱責する。
しかし、それでもめげずにティアナのアンケートを覗き込んだスバルは瞳を輝かせた。

「あ、でも御剣さんも災害担当志望になってるよ。わたしと一緒だね！」

「…まぁ、陸士隊の中では門戸が広い割には昇進機会が多いから。
でも、あんたと同じ部隊とは限らないでしょ？」

「そんなつれないこと言わないでよー。あぁ、でももし御剣さんと一緒なら心強いなぁ。
そうなれたら、頑張って名コンビを目指そうね！」

「はいはい。なれたらね。」

何故に仮定の話で、そこまではしゃぎまくれるのか。
スバルにここまで好意を抱かれる理由が全く思い当たらないティアナは再びため息を吐いた。
定番となった二人の温度差のあるやりとりを続け、やがて話題は週末の休みの予定になる。
普段は週末も練習に費やしているが、今週はグラウンド整備の為、久しぶりの休みを取る事になる。

「御剣さん、週末のお休みどうする？」

「ちょっとパークロードの方まで行って来るわ。」

人と会う約束がある。
半年と経っていないが、気心の知れた相手どころか、家族同然の、否。
家族と会うのだ。

「御剣さんも！？
あたし、おねーちゃんとパークロードの方へ遊びに行く約束をしてるの。
それで、ご飯とおやつ奢ってくれるって話だから、御剣さんもよかったら……」

「遠慮しとくわ。私も待ち合わせだし。
まぁ、相手も人見知りはしないだろうけど、いきなり会わせるのも変でしょ。」

しかし、スバルもそんなティアナのツンとした対応には慣れたもので、聞いてないかのように話を続ける。

「おねーちゃんも御剣さんに、ぜひぜひ会ってみたいって。」

「む…」

…なかなか小賢しい切り出し方だ。
自分ではなく家族を引き合いに出す辺り、ティアナの性格を分かっている。
あの男の性格なら待ち合わせ相手に連れが居る程度、笑って済ましそうではあるが…

「午前中から夕方まで、半日だけだから。ね？」

「あんたのお姉さんには申し訳ないけど。」

「ね？」

ティアナは、まるで子犬の様に縋る様なスバルの目を見ぬように視線を逸らしつつ、その懇願を切り捨てる。

「…また今度ね。」

## 6章ー3　訓練（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：次回でやっとこ主人公登場。

次話は少し遅れそうです。

ではまた次話で。

# 6章－4　再会

ミッドチルダ東部　パークロード

「…あたし、思うんだ。
あんたのその異様なワガママさと強引さだけは、見習うべき所があるって！」

「褒められたー♪」

結局聞き出された待ち合わせの場所は同じ。
折角なので、と一緒に行く事になった。
これも天の采配か。神様はきっと私の事が嫌いに違いない。
私も神様（あんた）が大っ嫌いだ畜生め。
気を取り直してスバルに問う。ここまで来たのだ。腹を括ろう。
なに、大した事じゃない。コンビもどきの姉に挨拶するだけだ。

「それで、お姉さんどこ？」

「えーとねー…あ！」

「スバル！」

休日で人々が行き交う中、スバルは手を振る姉の姿を見つけた。
訓練生のスバル達にとって一足先に進んだ、現役陸戦魔導師、ギンガ・ナカジマ。
陸士１０８部隊の捜査官だ。

「ギン姉〜！」

「スバル〜♪」

子犬のように駆け寄るスバルの手を取るギンガ。
お互いの顔に浮かんだ満面の笑みを見れば、この姉妹の仲が良い事はティアナにも理解出来た。

「1ヶ月ぶり〜、元気だった？」

「もちろん！スバルも元気そうね。」

テンション高いなぁ、などと思いつつ眺めていたティアナの前で、いきなりパンチの応酬が始まった。
もちろん敵意を持ったモノではなく、スキンシップのレベルで軽く拳を合わせる程度のモノだが、それでも双方鍛えているだけあって、一般人には洒落にならないくらい鋭く速い。
周りの人々も驚きに目を見張っている。
こちらを見られている事に気恥ずかしさを感じていると、2人の会話の矛先がこちらに向いたのに気付く。

「そうだギン姉、こちら御剣さん。」

「はじめまして、スバルがいつもお世話になってます。」

「ど、どうも…」

自身の感情には蓋をして、表情を取り繕って会釈を返す。
ギンガの落ち着いた物腰は、スバルとは似ても似つかない。

だが、なんとなく似た雰囲気があった。
軽い自己紹介を交わしながら、ティアナは仲のいい二人の絆に少しだけ羨ましくなる。
自分にああやって笑いかけてくれた兄は、もうこの世にいない。
内心の思いを笑い飛ばすようにティアナは苦笑してスバルに言う。

「自慢するだけあって、いいお姉さんね。大事にしなさいよ？」

「え…う、うん！」

唐突に掛けられた言葉と微笑みに、スバルは戸惑いながらも嬉しそうに頷いた。

「あら、スバルったら御剣さんに何言ったの？恥ずかしいわ……」

「手紙が届くたびに、喜んで話してくれましたよ。お会いできて光栄です。」

「そんなに固くならないで。ごめんなさいね、いつもうちのスバルが迷惑かけちゃってるみたいで。」

「いえ……妹さんは優秀ですよ。
訓練校でも年少組ですけど、よくやってますし、何より努力しています。」

「ほんとに？よかった。」

「…み、御剣さんが褒めてくれた！？
大変だ！明日は槍が降って来る！！！」

「…あんたがあたしをどういう風に思っているか良く分かったわ。」

珍しいティアナの褒め言葉に恐怖するスバルを冷静にツッコむティアナ。

そんな二人の慣れたやりとりを、ギンガは優しい笑顔で見つめていた。

「御剣さん。ご家族は？」

…それは何気ない話題の広げ方だったのだろう。

ごく自然に切り出したギンガの言葉に、ティアナは気まずげに言い淀む。

素直に言えば気を使わせてしまうだろう。

しかし、だからといって嘘をついてこの場を取り繕っても意味はない。

自分自身でも、ある程度は割りきれている事でもある。

少しだけ考えて、ティアナは結局言うことにした。

「私、肉親はもう居ないんです。

両親は私が生まれてすぐの頃、育ててくれた兄も三年前…天涯孤独ってやつですね」

出来るだけ自然に言ったつもりだったが、果たしてそれが表情にも伝わっていたか、自信はなかった。

兄の死は、今でも心の痛みを伴う。

ギンガとスバル、この優しい姉妹の顔に悲しみが映るのを、ティアナは見てしまった。

「ごめんなさい……」

「お気になさらず。…肉親はもういませんが、代わりに騒がしい家族はいますんで。」

そう言いつつ視線を横に逸らす。
ギンガの謝罪に、ティアナは努めて軽い口調で返した。
それは沈んだ空気を緩和させる為の気遣いもあったが、何よりも丁度そのタイミングを見計らったかのように近づく知った顔を視界に捉えたせいもあった。
肩よりも長く、腰より短い黒髪、銀縁の細めの眼鏡。右目は顎まである髪で隠れている。
黒いスラックスには紅い線が入っており、上は体にフィットした白いシャツ。
開いた胸元には銀のネックレスが見えている。
更にはその上から赤黒い無地の背広を羽織っている。
何処かのホストクラブにでも居そうな格好の所為で、異様な存在感を放っている。
こちらを視界に捕えたのか、人混みを掻き分けて、否、一直線にこちらに歩いて来る。
人混みが割れる様は、さながら話に聞いたモーセの海割りの様だ。

「ふむ。戸籍上の繋がりとは言え、父親に酷い言い草だね。ティア？」

こちらの会話を聞いていたのか、そう言って来る。

「騒がしいのは事実でしょう？
静かだった日が1日でもあの店であった？」

「そう返されれば反論の仕様も無いな。」

突然声を掛けてきた長身の美形と、偶に見せる片側の口角だけを吊り上げる笑みを浮かべたティアナの反応に、姉妹が呆気に取られる中、二人は声を合わせて笑い合う。

「久しぶり。元気そうで何よりだ。
少し背が伸びたか？」

片手をティアナの頭頂部辺りでひらひらさせながら御剣が言う。

「まだ半年も経ってないじゃない。」

「どこかの誰かさんが、連絡の１つも寄越さんのでね。
端末のアドレスは知っているだろうに。」

「こっちも色々忙しくてね。そう言えば亮と宗一は？」

「厳正なる審議の結果、あの二人は留守番だ。」

「そう。…また殴り合ったの？」

ティアナはジト目で御剣を見る。
そんな視線など気にもせず御剣は答えた。

「いいや？私がこちらに来る用が有ったのでね。
そのついで、さ。」

胸によみがえるのはあの黴臭い店の中。
ティアナは御剣との数ヶ月ぶりの再会を素直に楽しんだ。

「あのぅ…もしかして…御剣　仁特別執務官補佐官殿であられます

か？」

そんな2人の会話に割り込んだのはギンガ。
御剣の方を見詰めつつ、おずおずと問う。

「そうだが？」

御剣の返答を聞き、わたわたと慌てた後、敬礼するギンガ。

「わ、私はギンガ・ナカジマ二等陸士であります！
以前の空港火災の件では、妹が大変お世話になりました！」

「あぁ、黒峰が助けたって言っていた陸士候補生の子か。
元気そうで何より「あ、あの！！！」ん？」

首を巡らせた御剣の視界に飛び込んできたのは首まで真っ赤にしたスバル。
しかし声をかけたのは良いが何と言いだそうか考えあぐねているようだった。

「あ、あの…その…ええと…」

「ふむ。立ち話もなんだ。どこかに座ろうか。」

パークロード内　喫茶店

そこはごく普通の喫茶店だったが、その一角だけは何やら異彩を放っていた。
四人掛けのテーブルに座るのは少女三人、男一人。

ギンガ、スバル、ティアナはそれぞれタイプは違えど、皆、美少女と呼んで差し支えない容姿だ。
それだけならば、いい意味で注目される集団だが、加えて頭一つ分飛び出た御剣の存在が奇妙なインパクトを与えていた。
十代半ばがせいぜいの少女達の輪の中に、ホストみたいな格好の美形が混じっていたら、それはもう違和感丸出しである。
そんな奇異の視線を集めておきながら、何食わぬ顔でテーブルを囲む四人に、注文の品が届いた。

「お、お待たせしました。
ご注文のコーヒー2つ、ロイヤルミルクティー、アイスパフェになります。
ご、ごゆっくり。」

いそいそと注文の品を置いて立ち去るウェイトレス。

「しかし、奇妙な縁も有ったものね。
まさか、あの空港火災に居合わせた人間が、偶然知り合うなんて。」

「実は、あの場に居た全員が、妙な能力に目覚めていたりしてな。
それで引かれあうとか。」

「そんな奇妙な冒険は始まらないから。
奇妙で思い出したけど、何?その格好?
ホストみたいよ?」

「言ったろう?こちらに用が有ったと。
先方への嫌がらせも含めて、失礼にならない程度に着こんでみた。」

「いや、完全に失礼だからその格好。」

２人にとっては他愛ない、いつもの会話。
スバルはいつもとは違うパートナーの笑顔に戸惑いつつ、こんな所で会うとは思わなかった憧れの人との出会いに慌てる。
ギンガは妹の様子に気づいては居るものの、何と声をかけていいやら計りかねている。
４人の休日はまだ始まったばかりだ。

## 6章－4　再会（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：お待たせしました6章4話、御剣登場です。

実は、ここで黒峰か原口を登場させようかとも思ったのですが、なんだかしっくりきませんでした。
もう主人公達って言えないかも…

黒峰「一重に、お前がへっぽこだからだろうが。」

原口「同情するなら出番くれ。」

…頑張る。

## 6章ー5　呼び名（前書き）

急遽実家に帰っていたので更新が遅くなりました。

## 6章ー5　呼び名

「そ、それにしても！！！」

気まずげに言いだしたのはスバル。
ただ、緊張の所為か、一般的な声量を遥かに超える大音声だが。

「御剣さんも人が悪いなぁ…御剣さんとお知り合いなんて！
…？なんかややこしい…」

「私の事は仁でいいよ。
後、ティアは知り合いでは無く、娘だよ。」

「は、はい！…え〝！？」

どういう事か、と問いただす様にティアナを見つめるスバル。
それをしれっと受け流し、答えるティアナ。

「別に、取り立てて言う程の事でも無いでしょ。
それを言ったら、あんただって部隊長の娘でしょう。」

「え？いやいや、家のおとーさんと仁さんを一緒にしちゃいけない様な。」

「対して変わんないわよ。
階級的には、あんたのお父さんの方が上でしょ？」

「知名度で言ったら段違いだよ。
いくつもの事件を解決したとか、反管理局組織をいくつも潰したり

だとか！」

「…へ～ぇ…

時々ふらっと居なくなると思ったら、そんな事してたんだ。」

ティアナの目は鋭く、きつく御剣を射抜く。

「何で私に黙ってたのよ。」とでも言わんばかりの目だ。

さりげなく視線を逸らしつつ、言い訳をする御剣。

「…些事だったからな。

一々言う程の事でも無かった。

事実どれも1日で帰ってきていただろう。」

…いくつか大事になって、反管理局組織とやらのアジトを『万物薙ぎし光輝の剣（ラウ・ソラス）』で吹きとばしたり、ちょろちょろ逃げる次元犯罪者を『黄橙色の死（クロケア・モルス）』で叩き切ったり、犯罪グループに乗っ取られた次元航行艦を奪還したり、暴走した魔竜を『噛尾刀（カウディ・モルダクス）』で鎮めたりもしたが。

…些事だ些事。

「まぁ、過ぎた事は良いけど。

でも、怒ってはいるからね。」

「了解。ではここの会計は私が払おう。

まぁ、その事が無くともその心算だったが。

もちろん、そちらの2人の分もね。」

御剣の台詞に慌てるギンガとスバル。

片や上官にして妹の命の恩人。

片や命の恩人にして、魔導師を目指す切っ掛けになった憧れの人。

むしろ自分達が払う所だ。

「い、いえ、そんな！
御剣特別執務官補佐殿にそのような！」

「そ、そうですよ！」

「何。大した事でも無いさ。
それに、男は皆、美人や美少女の前では格好付けたがりでね。
私に格好、付けさせて貰えるかな？」

そして発動する光魔法カッコいいポーズに、魅了魔法マリンカリン。
しかも素だ。
赤面して頷くスバルとギンガ。ティアナはまたか…とでも言わんばかりの呆れ顔だ。

喫茶店を出た後も、他愛ない話は続く。

「しかし、ギンガ…さん。
一々名前の後に階級を付けなくても良い。
今日は非番なのだろう？
元々私は非常時以外管理局員では無いし。」

「え！？いや、その、御不快だったでしょうか？」

「それだ。その堅苦しい口調も頂けない。
もっと気さくで良いよ。」

「で、では、仁…さん？」

「そうそう。」

「で、ティアは訓練校でちゃんとやれてるかな?」

「は、はい。すっごく優秀で、皆一目置いてますよ!
カッコよくってクールで頼りになって!」

「止めてよね。そう言う事言うの。」

顔を真っ赤にして、スバルに詰め寄るティアナ。
当然怒りからではなく、羞恥からの赤面だ。

「照れるなよティア。痛っ!」

茶化した御剣が頭を引っ叩かれる。
鈍い音が出た事からも、結構な強さで殴られたらしい。

「ふむ…これなんかどうだ?珍しいし。」

パークロード内のジュエリーショップ。
御剣がティアナに薦めたのは、目の形に意匠された、大粒のアレキサンドライトのネックレス。
アレキサンドライトの周囲を囲むように小粒のダイヤが付いている。

「どれ?ってこれ、猫目効果出てるじゃないの。
せめて猫睛石(クリソベル・キャッツアイ)にでもしといてよ。
こんなの、おちおち付けてられないわ。」

(シャトヤンシー)

「どうせなら、これくらいが良いかと思ったのだがな。
では、こちらはどうだ？」

次に御剣が薦めたのは、銀細工のブレスレット。
艶消し加工されて、シックなイメージを出している。
そして中心部分にはさりげなく、雫型にカットされた虹色蒼月長石（ロイヤルブルームーンストーン・レインボー）が４つ埋め込まれていた。

「ん～…そうね。値段も手頃だし。
これくらいにしておいてあげる。」

「そうかい。…あの２人は何処だ？」

御剣が首を巡らすと、店の入り口付近で固まっていた。
近寄って声を掛けると、何故か２人してビクッとなっている。

「どうかしたのか？
ティアはもう決まったが？」

「い、いいいいえ。私達はあっちのアクセサリーショップで十分ですので。」

「そ、そそそうですよ。
こんな所私達には敷居が高くてとてもとても！」

２人の反応も当然。
この店はこのパークロード内でも有数の、高級ジュエリーを扱う店。
比較的安い品でも１管理局員、それも二等陸士や訓練生では、おいそれとは手が出せない。

ちなみに、先程のティアナに薦めたブレスレットは、日本円で言うなら十数万円近くする。
その前に薦めたネックレスに至っては、千数百万円だ。

「会計、終わったわよ。…なにやってるの？」

なにやら小箱を持って、御剣達の方にやって来るティアナ。
腕に先程買ったブレスレットを付けている所を見るに、恐らく保管用の箱だろう。

「み、みみみ御剣さんからも言って！
ここは私達には高級過ぎるって！」

涙目になりながらティアナに縋りつくスバル。

「いいじゃない。どうせ仁がお金出すんだし。
精々、たかっときなさい。」

「そんな気軽に言わないでぇ～～～！」

結局、普通のアクセサリーショップへ。
先の事もあってか大人しく御剣が支払う事を了承する2人。
その後も色んな店を巡り、気付けば日も暮れかけていた。

ミッドチルダ東部　レールウェイ駅　中央行き改札前

「ではティア。元気でな。」

「…うん。」

ティアナは顔を伏せ、呟くように言った。

「…これが今生の別れってわけでもないだろう？
またいつでも会えるさ。呼べばすぐに来るよ。」

そう言いつつ御剣は、ティアナの頭に手を乗せ、髪を梳くように撫でる。

「…いつもそうやって子ども扱いする。」

「実際子どもだろうに。
親ってのは、子どもが幾つになろうと親だからな。
面倒見たくなるのさ。」

「…馬鹿。」

中央行き電車の発車のアナウンスが流れ、御剣は改札に向かう。

「ティア。」

「何？」

「元気でな。」

「2回も言わなくても分かってるわよ。
…うん。…仁も。心配するだけ無駄だろうけど。」

「全く。減らず口を。」

「1つしかない口が減ったら大変よ。」

「違いない。
ま、さっきも言ったが何かあったらすぐに言え。」

「だから心配し過ぎだってば。
大丈夫よ。上手くやって行くわ。」

「ならいいさ。では。またな。」

そう言うと御剣は改札を通り、振り向きもせずにホームに行ってしまった。

「…また、か。」

呟き、腕に嵌めたブレスレットを撫でるティアナ。

「どうしたの?御剣さん?」

「みゃっ!?」

不意に掛けられた声に、珍妙な声をあげてしまうティアナ。
首が捻じ切れるのではないか、と思う程の勢いで振り向けば、果たしてそこに居たのはスバルだった。

「な、何でも無いわよ。
それよりギンガさんは?もう行っちゃった?」

「うん。御剣さんによろしくって。」

「そう。折角だから、御別れ言っときたかったんだけど。
しかし、今日はしこたま遊んじゃったわね。
来週からは1期試験なんだし、また帰って訓練ね。」

「うん！
またトップ取ろうね！」

「当然よ。
…あんたは猪突猛進馬鹿だし、ドジだし、おっちょこちょいだし、
「み、御剣さん？いきなり何？」でも、それを補って余りある体力
と魔力があるわ。」

「え？え～と？」

「…あんたは優秀よ。
だからこそ、コンビでいる間は、私の足引っ張るような真似は許さ
ないわよ？
……スバル。」

一瞬、呆けたように口を開くスバル。
自分の頬を抓り、涙目になりつつ、答えた。

「うん……！ティア！」

## 6章－5　呼び名（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：6章5話です。

6章1話からの話が某SSに酷似しているとのご意見が出ましたので、書き直します。

大筋は変更しません。

数日で済むか、数週間かかるかは分かりませんが、その間、更新はお休みさせていただきます。

今後、このような事の無い様に気を付けます。

更新を待って下さった方には申し訳ありませんが、ご理解の程よろしくお願いします。

『万物薙ぎし光輝の剣（クラウ・ソラス）』：対城宝具ランクA＋＋　レンジ99　最大補足999人

銀の腕のヌァザが持つ魔剣。

炎と光を放って輝く宝剣で、魔の四都のひとつ、フィンジアスが奉戴しウスキアスが守護していた剣であり、ダーナ神族の至高の四宝のひとつでもある。

その刀身には呪文が刻み込まれ、一度鞘から抜き払われれば敵はその一撃から逃れ得ないとされ、魔族フォモールとの死闘・モイトゥラの戦いでは敵軍の大将である剛力王インジッヒの首を、一閃で打ち飛ばしたという。

『黄橙色の死（クロケア・モルス）』：対人宝具ランクB　レンジ3　最大補足1人

ジュリアス・シーザーの持つ剣。
黄金で作られ、決して壊れることがないという。
この剣を用いた攻撃は決して回避できない。

『噛尾刀（カウディ・モルダクス）』：対人宝具ランクC＋　レンジ2　最大補足1人

この剣はかつて偉大な竜退治の名人、ベロマリウスが所持していた剣であり、竜たちに非常に恐れられていた。
竜が近くにいると、勝手に鞘から飛び出してしまい鞘に収めることができない。
竜の因子を持つ者は、この剣の所有者に逆らえない。
それ以外の者にはただの長剣。

# 外伝・反管理局掃討作戦

時空管理局本局

「御呼びでしょうか？ミラン・フォード中将閣下」
「おぉ、良く来てくれた。まぁ掛けたまえ」
「失礼します。
して、御用件とは何でしょうか？」
「君の所の…何と言ったかな？あの傭兵…」
「御剣達の事でしょうか？」
「おぉ、そうだ。
少々困った事になっていてね。君に彼らへの仲介をお願いしたいんだ」
「仲介？彼らに依頼せねばならぬような事態が起きているのですか？
それは一体どのような事件でしょうか？」

フォード中将は無言でモニターを開く。
そこに書かれた文章を読み、クロノは絶句した。

「これは…成程。分かりました。
ただちに御剣達に鎮圧に向かわせます」

そう言って席を立つクロノ。
しかしそこを中将に呼びとめられた。

「勘違いしてもらっては困るよ。クロノ提督。
私が彼らに依頼したいのは鎮圧では無い。掃討だよ」

「…それはどういう事か、お聞きしてもよろしいでしょうか？」
「何、聡明な君の事だ。凡その察しは付いているだろう？」
「…」
無言で押し黙るクロノ。
しかしすぐさま踵を返し、自身の船であるクラウディアへと向かった。

第１１２無人世界　衛星軌道上

「で？私達をこんな所まで連れて来て、何の用だ？クロノ？」
急にクロノから連絡が有り、聞けばすぐにクラウディアに来て欲しいとの事。
重要な用らしいので行ってみれば、そのままここまで連れて来られた。

「…怒るなよ？」
「私が怒る様な用で呼んだんだな？
…まぁいい。言うだけ言ってみろ」
「この星を滅ぼして欲しい」
「…帰る」
即座に3人揃って踵を返すと腕をクロノに掴まれた。
振りほどくのは楽だが…一応話を聞いてやる事に。

「ここは第１１２無人世界。
草1本生えない不毛の地で、管理局の目も届きにくい世界だったせいか、いつの間にか反管理局組織の巣窟となっていた。

推定人数は約１０万人。管理局としても迂闊には手が出せない程の勢力となっている」
「…それで私達が呼ばれた訳か。
しかし、星ごとやる必要があるのか？」
「これだけの反管理局組織が存在した事自体が、管理局体制に影響を与えかねない。
それなら…」
「これだけ集まろうと管理局には勝てない、というアピールに変えるのか。
成程。合理的だ。」
「それで…行ってくれるか？」

…一応呼び付けた事は悪いと思っているのか、断られる事を前提に聞いてくるクロノ。
ここまで来たんだ。別に良いだろう。あまり気の進む話では無いが。
２人に視線で確認を取ると、２人共頷いた。

「仕方ないな。いいぞ。
ただ、手加減してる余裕はない。捕縛は諦めて良いか？」
「一応警告だけしてくれればいい。
まぁ、首謀者辺りは捕えて欲しい所だが、無理にとは言わない」
「そうか。まぁ、どうでもいいが礼金ははずめよ？」

反管理局連合

流石に１０万近い人間が生活しているだけあって、かなり大きな町が作られている。
周りは城壁に囲まれ、中々に堅牢そうだ。まるで要塞の様でもある。
正規の軍では落とすのも難しそうだ。

「と言う訳で降伏するなら今のうちだが？」

私達の転移反応を察知したのか、待ち構えられていた。
ざっと見た所５万人程だろうか。
よくもまぁ、すぐにこんなに集めたものだ。
一応、警告（せんせんふこく）はしておいたが、聞く耳持たないようだ。

「ふざけんな！やれぇぇぇ！！！！」

怒号と共に様々な色の魔力砲が飛んでくる。
交渉は決裂の様だ。愚かな。

「お前の言い方が悪いんじゃね？」
「何故だ？懇切丁寧にいかに私達には勝てないかを説いてやったのに」
「だからだろ」

そんな事を言い合いながら右手を前に翳す。

「『燭天覆う七つの円環（ロー・アイアス）』」

例によってアイアスで防ぐ。
いつもなら『破魔の赤薔薇（ゲイ・ジャルグ）』でも出す所だが…
正直５万も相手にするのは面倒くさい。
そうだな…爆煙が晴れる前に仕込みを済ます。

「『剣軍（ソード・アーミー）』、『整列（ライン）』」

その台詞と同時に虚空より顕れる無数の剣。

いずれも英雄が所有していたとされる名剣、宝剣だ。
それが幾千幾万と御剣の頭上に顕れた。
右手を頭の高さまで上げると同時に、切っ先を相手の方に向けて待機させる。

「『突撃(アヘッド)』」

振り下ろされる御剣の右手。そして放たれる剣弾。
爆煙を引き裂き飛ぶその様は、さながら矢の様でも有った。
突然の攻撃になすすべもなく吹き飛んで行く反管理局組織の構成員たち。
1通りの攻撃が終わった後、残っていたのは最初の3分の1にも満たなかった。
残っている者もその殆どが、どこかしらに手傷を負っていた。

「ふむ。拍子抜けだな。もう少し残るかと思ったが」
「数ばっかの寄せ集めじゃな。オーバーSランクが2、3人居ればいいとこじゃね？」
「寧ろ、これで相手も戦意喪失するだろ」
「逃げられると面倒だな…原口、頼む」
「了解」

振るい掛け程度の心算で軽めに撃ったのだが、どうやら思ったより減ってしまった。
この程度、守護騎士(ヴォルケンリッター)やなのは達には通じないのだが…
まぁ、無傷で残った連中は相応に楽しめるだろう。
そう思っていると、突如現れた奴に横合いから蹴りつけられる。
恐らくは転移系のレアスキル持ちだ。
だが、蹴ってきた足を掴んで振り回してぶん投げる。
ついでに剣を1本射出して撃ち抜いておく。

先程の攻撃と違い、本気で射出した剣は衝撃波（ソニックブーム）を纏って相手に突っ込み、命中と同時に相手を四散させた。

「君たちは哀れだ。だが許しはしない。実を結ばぬ烈花の様に死ね。蝶の様に舞い、蜂の様に死ね」

「なんだ、やればできるんじゃあないか」

「ヘルシング乙」

ふと要塞の方へ目をやれば、視界一杯の魔力弾が降り注いでくる。色からして３００人以上が放っているだろう。

「…ここまで来ると逆に綺麗だな」

「で？どうする？」

「私は少し準備をする。適当にあしらっていろ」

「わかった」

黒峰の周囲から渦巻くように立ち上った粒子に防がれ、魔力弾は御剣達にかすりもしない。

粒子はそのまま構成員達の方へ流れて行く。

「『電磁焼却（マイクロ・バースト）』」

構成員達が途端に苦しみ出す。全身からは湯気が吹きあがり、肌は膨れ上がって行く。

やがて構成員達は内側から破裂するように死んでいった。

「…グロイな」

「…自分でやっといて何なんだけど、正直ここまでとは」

黒峰の能力は原子サイズの粒子の操作。

先程は粒子1つ1つを振動させ、マイクロ波を発生させたのだった。
結果、体内の水分が沸騰。構成員たちは熱殺された。

「ん？あれは転送魔法陣か？」

戦場の一角に大規模な魔法陣が発動している。
しばらく見ていると、数十の光が上空へ舞い上がり

ゴッ！

「あ、ぶつかった」
「あれだ。ドラクエで室内でルーラ使ったみたいな」

上空で何か見えない壁にぶつかった様に落ちてくる。
原口の張った結界に引っかかったらしい。
外からは容易に入れ、絶対に出れないという、いやらしい結界らしい。

「お、なんか集まってる」

黒峰の台詞に戦場に目をやれば、いつの間にやら人が増えていた。
恐らくは総勢でこちらに攻撃する気なのだろう。
逃げられないと分かり、やけになったようだ。

「ま、一所に集まってもらえて好都合だ。
来い。クラウ・ソラス」

先程から準備していたクラウ・ソラスを呼び出す。
御剣の左手に鞘に入った豪奢な剣が顕れた。

「薙ぎ払え、『万物薙ぎし光輝の剣（クラウ・ソラス）』！」

御剣がクラウ・ソラスを鞘から抜くと同時に、戦場を光が走り、要塞めいた城壁に線が走る。
線は戦場の人間全員の首にも刻まれ、まるで首輪の様だ。
線はやがて光を放ち、光が目も開けられなくなる程強くなったかと思うと、城壁ごと街が根こそぎ吹き飛んだ。

「これで戦闘員全滅＆ａｍｐ;アジト壊滅、と」
「あとはこの星自体か。御剣、まかす」
「私、少し疲れたんだが。…まぁいいか」

御剣が右手で天を指さし、それを振り下ろすと、天空から超大な剣が降ってきた。
柄の方は霞んで刃渡りは見当もつかない程だが、６，００ｋｍを超えている。
幅も検討もつかず、剣の端も見えぬ程だ。
それが地面に突き立つ。
卵にナイフを突き立てるかの様に、剣は容易く地殻を叩き割り、コアにまで届いた。
その影響でマントルの流れが阻害され、突き立った場所から次々に噴火が始まる。

「さて、行くか」
「実質１時間程か。結構掛かったな」
「残党を出さない様にアフターサービスに気を使ったからな」
「お気づかいの紳士と呼んでやろう」
「いらん」

クラウディア艦橋

「で？あれは何だ？」

クラウディアに戻ると、クロノが怒り心頭で詰め寄ってきた。
指さす先には御剣が突き刺した超大剣。
衛星軌道上からでも、大気圏外にでた柄がはっきりと見えている。
大気圏内では噴火による噴煙が蔓延している。さながらスーパープルームだ。
最早1人も生きてはいないだろう。

「なにって…依頼通り星を滅ぼしたが？」
「考えてやってくれ！危うくこちらも影響を受ける所だった！」
「なんだ。いたのか。ならいると言え」
「無茶を言うな君は。まぁ今に始まった事ではないけれど」

クロノも、もう呆れたように言って来る。
ちなみにこの場には私とクロノ、あとはクルーしかいない。
あの2人は早々に部屋に引っ込んだ。後始末の為に、私だけはここにいるが。

「さて、ではあの星と距離を取れ。ここでは被害を受けるぞ？」
「何をする気だ？まぁ良いが。
推力最大！衛星軌道上から離れよ！」

そして星がバスケットボール程の大きさになった時、おもむろに御剣が指を弾いた。
すると星が爆発。閃光と共に消滅した。
眼前で起こった事が信じられない様に、こちらを見てクロノが問うてくる。

「…何をした？」
「あの星に突き刺した剣、あれを爆発させた。
あれ自体はただの馬鹿でかい剣だが、魔力で構成されているからな」
「…あんな馬鹿でかいものを作り出す、君の馬鹿馬鹿しい魔力量に
驚くべきか、そんなとんでもない事をサラリと言われた事に驚くべ
きか悩む所だ」
「そう褒めるな」
「別に褒めてはいない」

そう言って盛大に溜息を吐くクロノ。
依頼通りに事を済ませたのに、何が不満なのか。

「しかし、これで稀代の殺人者か。特に感慨も沸かんが」
「…頼んだ僕が言う事ではないが、すまないと思っている」
「謝るな。大方お前も本意では無いのだろう。
命令による結果の責任は、全て命令を発した者が受ける。
軍隊の基本だ。精々胸を張って生きて行け」
「…気付いていたのか？」
「いつものお前らしくなかったからな。
いきなり現場まで連れて来たり、断られても良い様に聞いてきたり。
大方上層部の差し金だろう。ま、いつかはこんな依頼も来るかとは
思っていた」
「…」

無言で押し黙ってしまうクロノ。
やはり割り切れてはいない様だ。

「…さっさと帰るぞ。家でティアが待っている。
お前も偶には家族に顔でも見せに行け」

「…あぁ。そうするとしよう」

## 外伝・反管理局掃討作戦（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：だからこいつらに勝てる相手なんてｒｙ

三人組無双。

ぶっちゃけ現時点ではこの3人に勝てる相手はリリなの世界に居ません。

他のチート主人公ならともかく。

ネギまのリョウメンスクナノカミを片手で倒せますから…

前回の感想でいろんな方に言われてますが、ティアナに彼氏できねぇ。

指南頂いた様に、書き方を変えてみました。

ではまた次話で。

# 外伝・神速の男

御剣古美術店　応接室

前回の依頼から1週間程。
またクロノが用が有るとかで来ていた。

「先日はご苦労だった。
一応、君たちは10万の相手を『鎮圧』した事になっている。
その心算でいて欲しい」
「…やっておいて何だが、『鎮圧』でいいのか？
それでは私達の存在が抑止力にならないのでは？」
「…こちらとしても予想外なんだ。
てっきり僕は君に言った通り、君達を次元犯罪者への牽制に使うものだと思っていたのだが…
今回の件は管理局内での、君達の知名度が上がったぐらいだよ。」
「…どうもまだ真意が読めんが…まぁいいさ。
今日来た用件は何だ？」
「今回は通常通りの依頼になる。
この男を捕えて欲しい。これは、定点監視カメラが捉えた画像だ。」

そう言うとクロノは一枚の写真を裏向きに差し出す。
そのまま机の上に写真を置くと、すぐさま手を引っ込めてしまった。

「…普通は私に見えるように置かないか？
というか何なんだ？その反応は？」
「…君も見れば分かるよ。」
「…では」

御剣は裏返された写真を捲り、一瞥するとすぐさま元の様に戻した。

「…理解して貰えただろうか。」

「…あぁ。とても良くな。で？こいつは何なんだ？」

「こいつの名はゴードス・ピード。

元次元航行艦付きの武装隊員だ。ロストロギア回収任務中にそのロストロギアを奪って逃走。

一時行方を晦ましていたが、最近になって出没する様になった。

逃走時とは容姿が変わっていたが、画像解析の結果一致した。

まぁ、他にも本人断定の理由はあったが、これは後で言おう。

主な罪状は重要遺失物保持、管理局員への攻撃、及び…いや、これはいいな。それと…」

「…及びなんだ？

良い所で区切るなよ。気になるだろうが」

「…猥褻物陳列、だ」

2人の視線が机に置かれた写真に集中する。

御剣は再度写真を引っ繰り返す。

そこには腕の筋肉を強調するように両腕を上げた男が写っていた。

頭髪から体毛に至るまで、全ての毛は抜け落ちている様で、一本も見当たらない。

その体は完全な逆三角形で、贅肉などは一片も見て取れぬ程に引き締まっていた。

それだけならばいいのだが、なぜかこの男、一切の衣類を身に纏っていないのだ。

御剣は無言で写真を再び裏返す。

「…」

「…全力で今回の依頼、断らせて貰う」
「待ってくれ。君に断られると、こいつに対処できる人材が居なくなるんだ！頼む！」
「…この程度なら私で無くとも、その辺の管理局員でも出来るだろう」
「いや。それは絶対に無理だ」
「…どう言う事だ？」
「この写真は定点カメラが補足した、と言ったな？
こいつが写っているのはこの一瞬のみ。
こいつの普段の移動スピードは恐らく目にも止まらない程だろう」

その台詞を聞いた御剣の顔が引き攣る。

「…その一瞬でこんなポーズを取っているのか…真正の変態だな…
良くこんな映像を見つけたな。偶然か？」
「いや、違う。こいつが最近出没するようになった理由は、窃盗の為だ」
「窃盗？」
「そうだ。そのスピードを使って、各次元世界の財宝を宝石類を中心に盗んで回っている。
ほら、その写真の右手にも持っているだろう」

嫌々ながらに再々度、御剣が写真を引っ繰り返して見ると、確かに右手に何か持っている。
それを確認するやいなや、御剣はまた元の様に裏返して置いた。

「…どうしても私で無ければ駄目なのか？
スピード自慢の相手なら、フェイトでもいいだろう。そちらに回してみたらどうだ？」
「フェイトは執務官の任務で忙しいし、確かにロストロギア絡みで

はあるが、管轄外だ。
何よりも、こんな相手と対面したら失神してしまうだろう」
「…確かに。
仕方が無い。では受けるとしよう。
しかし、こいつの出現場所が分からなくては追い様がないぞ？
その辺はどうなんだ？」
「心配無い。
こいつは犯行の前にいつもこんな物を送りつけてくるらしい。
故に、一連の事件の犯人は、こいつだとすぐに分かったんだが」

クロノが懐から出したのはビニール袋に入った一枚の紙。
そこにはこう書かれていた。

『明後日　現地時間午後１１：００　第１５管理世界の至宝　蒼天の星を頂きます

ゴードス・ピード』

「…この写真の件と言い、よほど自己顕示欲の高い奴らしいな。
否、ただの馬鹿の可能性もあるが」
「どちらかと言えば、管理局への挑発だろう。
次元犯罪者には、偶にそう言った手合いもいるからな」
「まぁいいさ。ここにある明後日ってのはいつから数えて明後日だ？」
「消印からすれば明日が予告の日だが、第１５管理世界とここは時差が有ってね。
今から行って貰う」
「今から？まぁいいが。
所で、この蒼天の星と言うのは何なんだ？」
「詳しくは知らないが、なんでも人の握り拳程も有るスターサファ

イアだとか」
「…それは至宝だな」

第１５管理世界　Ｐ．ｍ１０：５５

「（そろそろ予告の時間だが、首尾はどうだ？）」

蒼天の星を所蔵している博物館の屋上で待機しているとクロノから通信が入る。

「問題無い。警備担当者と話を付けて来た。
蒼天の星はそれを入れたケースごと現地の銀行の金庫に預けてあるよ。
更に物理的な防護に加えて、私以外がケースを空けると呪いがかかる様になっている」
「（…僕も偶に怪盗物の本は読むが、それはかなり卑怯な手口ではないか？）」
「それで取られては元も子も無いだろう。
相手が持っていては、戦闘になった際傷つける恐れもある」
「（それはそうだが）」
「っと、お客さんの様だ。切るぞ」

博物館の四方へ、独鈷を刺して展開した結界に反応があった。
侵入時の速度から見て奴で間違いなさそうだ。

「（あぁ。頼んだ。だが、今回に限っては捕縛を最優先としてくれ）」

博物館金庫内

「どういう事よ！何で無いのよ！」

だだっ広い金庫の中央に一人の男が立っている。
中央の台の上のケースは空になっているが、言動からしてこの男が盗んだ訳では無さそうだ。
金庫内外の厳重な警備を潜り抜け、金庫の中に侵入したまでは良いが、肝心の物が見当たらない。
金庫の中はもぬけの殻だった。
不意に金庫の扉が閉まる音がする。
ピードが扉の方を振り向けば、そこには御剣が立っていた。

「わざわざ御苦労さん。
蒼天の星は私が預かって…」

そこまで言った所で上体を逸らす。
金庫の中央に立っていた筈のピードは私の後ろに立っていた。

「ちっ！避けるんじゃないわよ！この卑怯者！」
「それは避けた事か？それとも蒼天の星を隠した事か？」
「両方よ！こういうのはロマンでしょうが！」
「…全裸でマッチョでオカマ口調の男にロマンを語られてもな…
だがその格好、成程。意味は有る様だな」

バリアジャケットに回す分の魔力の殆どを速度に費やし、速さのみを追求した超高機動特化形態。
自身を覆うのは高速移動用の防護フィールドのみ。
それはフェイトの真ソニックフォーム以上だ。…色んな意味で。露出度とか。

「ふふふ。ワタシの攻撃を避けただけでなく、一目でそこまで見抜くなんて…
アナタ、やるわね。お名前、窺ってもいいかしら？」
「御剣　仁特別執務官補佐官だ」
「そう。アナタが」
「私の事を知っているのか？」
「えぇ。アナタ、裏界隈では有名よ？」
「そうか。まぁどうでもいいさ。
私の事を知っているなら、大人しく捕まって貰えるか？」
「ダメよ。ワタシは予告状を出した。
ならばお宝を見もせずに引く事なんて出来ない。
アナタに在りかを吐かせてまた奪いに行くわ」
「…それもロマンか？」
「そう。美学と言っても良いわ。故に…」

そう言いつつ構えを取るピード。
御剣もゲイボルグを出し、構える。

「いいだろう。私に勝てれば、蒼天の星の場所を教えよう。
装填（セット）　『刺し穿つ死棘の槍（ゲイボルグ）』　降霊（ロード）」

紡ぐ呪言。
御剣は英霊クーフーリンのスキルを得た。
しばし無言のにらみ合いが続く。

「ハアァ！」

掛け声とともに先手を打ったのはピード。
一直線に踏み込んでの正拳突き。

だが、そのスピードは通常のそれの比では無い。
拳速に本人の加速を上乗せしたそれは、音速に迫る勢いで放たれる。
御剣も横っ跳びに避けるも、そのままピードも付いてくる。
御剣もゲイボルグで突き、払い、振り下ろしを駆使し攻めるが、お互いに一撃も掠らぬまま、１０分程が経過した。

「…ちっ…埒があかねぇな…」
「そうね。スピードはほぼ互角。このままでは千日手ね」
「…その互角ってのがありえねぇんだがな。
人類の守護者、英霊の中でも最速レベルであるこのクーフーリンに付いて来れるなんざぁな。
…ロストロギア」
「なに？」
「てめぇ、ロストロギアを持って逃げたんだろ？
ならそのロストロギアはどうした？なぜ逃走時とは容姿が違う？
…まさかとは思うが…」
「そうよ。
私の心臓の上、胸の中心に私が奪ったロストロギア、『生命の実（エデンズ・シード）』が埋め込んであるわ」
「やはりな。てめぇの胸のあたりに違和感が有ると思った。
直に見た訳ではねぇから断定はできねぇが、恐らく効果は肉体の強化と魔力量の増大。
単純ゆえに強力だ」
「ふふふ。いいわぁ。アナタが敵でなければ、私と組んで欲しい所よ」
「断るぜ。お前見てぇなのは趣味じゃねぇんだ」
「でしょうね。さて、どうするの？
ワタシもアナタもこのまま続けても決着は付きそうにないわ。
ここらで手打ちにしてくれない？」
「…廃莢（リリース）。

それも断ろう。速度で争うのはもう止めた」

そう言うと御剣はゲイボルグを仕舞い、金で出来た豪奢な剣を取り出す。
柄にはルビーと瑠璃（ラピスラズリ）が嵌めこまれている。

「ジュリアス・シーザーの名に於いて、我が敵に断絶の刃を。
我が敵よ、跪け。汝が敵は皇帝である。『黄橙色の死（クロケア・モルス）』」

その言葉に従うように膝をつくピード。
だが、本人は何が起こっているのか分からない、といった風情だ。

「な、なに？何なのこれ！？」
「初めからこうしておけばよかったな。
様子見と思って、慎重になり過ぎるのが私の悪い癖だ」

そう言って頭を振る御剣。
そのまま、膝立ちのピードに黄金の剣を振り下ろす。

「ガッ…グッ…」

ピードの肩口から袈裟切りに剣が食い込む。
しかし剣は心臓の辺りで止まっていた。
御剣は剣を返し、胸を抉る。

「ガァァァアア！！！」

ピードの叫び声とともに、胸から赤い宝珠が転がりでる。
それを御剣は拾い上げ、眺め透かししている。

「ふん。『生命の実（エデンズ・シード）』とは名ばかりだな。
実物には遠く及ばん。
さて、まだ生きている筈だ。どうする？頼みの綱はこうして私の手に渡ったぞ？
大人しく投降しろ。そうすればその傷も癒してやろう。
ＹＥＳなら１回、ＮＯなら２回頷け」

暫くピードの反応は無かったが、微かに２度頷いた。

「…強情な。『医神携えし蛇の杖（カデュケウス）』」

御剣が取りだした杖でピードを指し示すと、傷は次第に癒え、跡形も無くなった。

「…どういうつもり？」
「なに。今回の私の仕事はお前を生きて捕える事でね。
死なれては困るのさ」
「ふん。管理局の狗ってわけね」
「勘違いされちゃ困る。私は管理局になびいた事などないよ。
頼まれた事が私には可能で、それをすれば報酬が手に入る。
それだけの事。まぁ、知り合いの顔を立ててやる、と言うのもあるかな」
「…アナタは傭兵なんてもんじゃないわね。もっと別の何かよ」
「そうか？まぁ、何でもいいさ。さて、お前を捕えるとしよう」
「ワタシが大人しく捕まると思うの？アナタはワタシを殺せないのよね？
ならワタシにも勝機はあるわ」
「ないよ。毛ほども無い」
「その自信、打ち砕いてあげる」

そう言うとピードの足元にベルカ式の魔法陣が発生し、体には凄まじい魔力が集中する。
恐らくは体に残った魔力の全てを次の一撃に注ぎ込む気なのだろう。
「…ふぅ。全くしょうがないな。いいさ。これが最後の抵抗の様だし」
対する御剣は完全に無手だ。
特に構えも見せずに棒立ちに突っ立っている。
「受けるがいいわ！『スタン・ピード』！」
そう言って叫びながら突っ込んでくるピード。
体には高速回転する魔力を纏い、顔だけ出して突撃してくる様は、超級覇王電影弾以外の何物でも無かった。
目前まで迫ったピードに何一つ動じず、御剣はそれを避けた。
勢い余って壁に突っ込んでいくピード。
が、壁に接触した瞬間、元のスピードの倍以上のスピードで跳ねるピード。
金庫の中で反射を繰り返し、既に御剣の目でも追い切れない程のスピードに達する。
「…これは…」
「これぞ最終奥義『スタン・ピード』！無限に加速を続けるワタシに追いつけるかしら！？」
「成程。確かに厄介だ。だが…」
そう言って御剣は右手を上げる。
その手には懐中時計が握られていた。

「そんなもの、私には通じない。『ド・マリニーの時計』。時よ、止まれ」

一瞬でボロ雑巾の様になって落ちるピード。
辛うじて息は有るようだが、完全に気絶している。

「これなら、『落魂鐘(らっこんしょう)』の方がよかったか？
…いや、それだと死んでしまうか。
まぁいい。縛れ、『羂索(けんじゃく)』」

そう言いつつ縄をピードの方へ放り投げる御剣。
縄は独りでにピードに絡みつき、雁字搦めにした。

「さて、クロノに報告して帰るか」

後日

「（みぃつぅるぅぎぃぃぃぃぃぃ！！！！）」

いきなり鳴りだした端末に出てみれば、かなりの剣幕でクロノが叫んできた。

「…どうしたクロノ。何かあったのか？」
「（何かあったのか？じゃない！
蒼天の星を入れたケースに何かしただろう！）」
「…あぁ、そう言えば。すっかり忘れていた。
すまない。うっかりしていた様だ」
「（全く。誰も開けられなくなって困っている。
すぐさま行って開けて来てくれ）」

「了解。しかし、開けた訳で無くてよかった」
「（ん？開けると何かあったのか？）」
「開けた奴にはしゃっくりと、体中の痒みが止まらなくなる呪いがかかる」
「（地味に嫌な呪いだな…）」
「致死性は無いがな。奪われた際の事も考えての事だ。まぁ、杞憂だったが」

## 外伝・神速の男（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：お待たせしてしまい申し訳ありませんでした。

ストックをコピペする時に間違って削除したうえ、編集を更新してしまったので全消去の憂き目に会いましたｏｒｚ
今回、実は今までで一番長いです。
そんな時に限ってこんな…

ピードは誰もが分かる様に神速→ゴットスピード→ゴードス・ピードです。
オカマです。
今後登場の予定は一切ありません。

ではまた次話で。

『生命の実（エデンズ・シード）』（真）：対人宝具ランクＥＸ　レンジ０　最大補足１人

エデンの園の中央に植えられた生命の木の実。
知恵の実、生命の実をともに手に入れると、神に等しき存在になるとされている。
故に人間が食べると、神に等しい力を得る。
本編で登場したのは、その名を冠しただけのロストロギア。

『ド・マリニーの時計』：対時宝具ランクＥＸ　レンジ９９　最大補足９９９人

見た目は銀製の懐中時計。
敵の時間を巻き戻して攻撃前の状態に戻したり、敵のスロー化、停止、自らの倍速化等が可能。
敵の攻撃と自分と敵自身を同時に巻き戻し、敵の攻撃を放たれていなかった状態にする事が出来たり、自分だけを攻撃を受ける前の状態に戻す事も可能。
ちなみに、この時自分自身の意識まで戻ってしまったりはしない。
攻撃を打ったことだけを残し、仮定をすっ飛ばす事も可能。
効果範囲及び時間停止できる大きさの限界は共に単一宇宙規模　。
時間停止の効果時間は、主観時間で約１０秒。
ただし、その直後にはまた再始動可能。
効果の同時使用も問題なく可能。

『落魂鐘（らっこんしょう）』：対軍宝具ランクＡ　レンジ３０　最大補足１００人

崑崙（こんろん）十二仙、霊宝大法師（れいほうだいほうし）の持つ宝具（パオペイ）。
ハンドベルの様な見た目ながら、それから発せられる音を聞いたものは魂を抜かれ、絶命する。
防ぐには純粋に耳を塞ぐか、使用者以上の魔力を持っていなければならない。

『羂索（けんじゃく）』：対人宝具ランクＢ＋　レンジ１０　最大補足１人

不動明王の持つ、悪を縛り上げ、また煩悩から抜け出せない人々を救い上げるための投げ縄。
相手が悪人で有ればある程拘束はきつく、羂索自身も丈夫になる。

# 6章－6　模擬戦　ｉｎ　訓練校

時空管理局武装隊　ミッドチルダ北部　第４陸士訓練学校　５月　掲示板前

「模擬戦？」
「そう。今までの総括と、今月末にある、期末の考査も兼ねてでしょ。
時期も時期だし」

ティアナとスバルのコンビが入学してから、早１年が経とうとしていた。
来月には卒業、訓練生たちは其々の配属先へ巣立っていく。
期末試験はそんな訓練生達の最後の試練でもある。
この成績如何では希望の配属先に行けるかどうかも決まるのだ。

「でも、あたしとティアのコンビなら楽勝だよね！
どんな人が相手でも大丈夫！」
「あんたは…本当に能天気ね」

呆れたように頭を振って見せるティアナ。
それでも、口元には嘲笑では無い微笑みが浮かんでいた。

「随分と余裕ぶっこいてらっしゃいますわね、お二方？」
「「？」」

不意に掛かった声に振り向くティアナとスバル。
そこにいたのは時代錯誤も甚だしいような、金髪縦ロールのお嬢様染みた少女だった。

「その模擬戦、私(わたくし)が相手だと知ってもその余裕、続きますかしら？」
「…え～と…」
「誰？」
「んなぁ！！？」

スバルが言い淀んだ隣で、すっぱりと聞くティアナ。
スバルの脳内では「流石ティア！私に出来ない事を平然とやってのける！そこに痺れる！憧れるぅ！」とか流れていた。
その返答は予想外だったのか、大口開けて驚く縦ロール。

「わ、私(わたくし)の事を御存じありませんの！？」
「うん。だから聞いたんだけど？それともどこかで会ったことが有った？」
「ふ、ふふふふふふふ…良いですわ。その耳かっぽじって良くお聞きなさい！
私(わたくし)の名はクラウン！カリーナ・クラウンですわ！」
「わかった。覚えとくわ」
「反応が薄い！？
お、おのれティアナ・Ｌ・御剣…許しませんわ！」

万感の思いを込めて見栄を切ったにもかかわらず、薄い反応のティアナに半ば切れかけのクラウン。
そして何故相手が怒っているのか、イマイチ分かっていないティアナ。
そんな２人に挟まれてオロオロしているスバル。

「良く分からないけど、悪い事したなら謝るわ。
で？そのクラウンさんが私達に何の用？」
「ですから！模擬戦の！相手が！私（わたくし）だと！言っている！でしょうが！！」
「そんなにどならなくても聞こえてるわ。
そうなの。お互い頑張りましょうね」
「くぅ…その私（わたくし）など歯牙にもかけないと言わんばかりのその態度！
常時トップだからと奢っていては、すぐさま足元を掬われましてよ！
この私（わたくし）にね！では失礼しますわ！」

言いたい事だけ言って行ってしまったクラウンの後ろ姿を見つつ、ティアナは掲示板に向き直る。

「…あ、本当ね。さっきの人、私達の相手になってるわ。
パートナーは…ゴルト・クラウン？兄弟かしら？」
「私からご説明させていただきます！」

突如ティアナの横に現れたのは、長い黒髪を後ろで縛った髪型の眼鏡をかけた、小柄な少女だ。

「うわっ吃驚した…えぇと？」
「私の事など、御剣様の高貴な頭脳の一端において頂くさえ勿体無き事。
どうぞお気になさらぬよう」
「そ、そう。で？説明って？」
「はい。彼等クラウン兄妹は双子のコンビで、聖王教会の騎士の家系です。
双子ゆえの息の合ったコンビネーションを見せ、教官に勝利した事もあるとか。
ただ、考査の成績は常に2位。

故に常時トップの御剣様達を敵視しているとの事です」
「へぇ～。騎士の家系って事はベルカ式なんだね？」
「…」
スバルが彼女に問うも、彼女は答えないどころか一瞥もしない。
無視された悲しさで涙目になりつつ、助けを請う様にスバルはティアナを見た。
「…騎士の家系って事はベルカ式なのね？」
「はい。流石御剣様。聡明でいらっしゃる。
兄の方は長剣型、妹は槍型のアームドデバイスを使用しています」
「そう…ありがとう。色々教えてくれて助かった…わ…」
少し考え込んで下を向いた一瞬の隙にその少女は消えていた。
「…狐狸の類って訳じゃなさそうね」
「ティアも大変だね」
のほほんと言うスバルだが、さり気に一番大変なのは彼女だったりする。
憧れの的であるティアナと入学当初からコンビを組み、大体いつも傍にいる彼女への嫉妬は半端ではない。
直接的に何かされた事は無いが、陰口をたたかれる事などしょっちゅうだ。
まぁ、彼女自身も優秀で学年トップである事からも、そこまで酷い事は言われていないが。
認める派も存在している。ただ、その方向がスバ×ティアだのティア×スバだのなのは内緒だ。

模擬戦当日　模擬戦用フィールド内

午前から始まった模擬戦も夕刻を過ぎ、あと残す所1試合となった。
学年主席、スバルとティアナのコンビと、学年次席、クラウン兄妹の試合だ。

「両者前へ！」

教官の号令で、少し離れて向かい合うように並ぶ両チーム。
クラウン兄妹の妹の方はその縦ロールにふさわしく?ドレスを模したかのようなバリアジャケットを身につけている。
兄の方はまさに筋骨隆々、武人らしい厳つい風貌で、甲冑を模したバリアジャケットを身につけている。

「私達（わたくし）の実力、その目に焼き付けるがいいですわ！ね、兄様！？」
「…（コクリ）」

饒舌な妹とは対象的に、兄の方は殆ど喋らない。
というかこの双子、全く似ていない。
ドレスの様なバリアジャケットと金髪の縦ロールが相まって、人形の様な印象を与える妹に対して、黒髪の短髪で大柄、筋骨隆々の兄は岩の様にどっしりした印象を与える。

「…遺伝子の神秘ね（ぼそり）」
「ティア?何か言った?」
「何でもないわ。そろそろ始まるわよ。打ち合わせ通りにね」
「うん！」

腕時計を見ていた教官が右手を上げた。
張りつめる空気。

「…初め！」
「はぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

号令と共に響くスバルの裂帛の気合。
その勢いにクラウン兄妹は一瞬怯む。
その一瞬で十分だった。

ゴンッ！！！

スバルが地面に叩き付けた拳によって膨大な量の土煙が上がる。
土煙はそのままスバルとティアナの姿を覆い隠して行った。

「ひ、卑怯な！正々堂々と戦いなさい！！！」
「…（ふるふる）」
「兄様…そうですわね。
これも戦術。ならばこの土煙にまぎれてくる筈…」

憤るカリーナを諫めるゴルト。
それによって冷静さを取り戻したカリーナ。
周囲に気を張り、スバルとティアナの襲撃に備える。

「…あら？」
「…」

しかし、土煙が晴れると、そこには2人の影も形も無かった。
この模擬戦用フィールドには森林や岩陰も含まれている。
姿が見えないと言う事はそういった場所に逃げ込んだのだろう。

「…罠、でしょうか？
それとも私達を分断するために？」
「……2手に分かれる」
「承知しましたわ。兄様」

Ｓｉｄｅティアナ

「…よし。イタクァ、バレル展開」
「Ｙｅｓ，ｍｙ　ｌａｄｙ」

ティアナが居るのはフィールドの端に位置する森林。その中でも一番高い木の上だ。
こちらに標的が向かってきている事を確認し、狙撃体勢に移行する。
イタクァの銃身の周囲にオレンジ色の環状魔法陣が発動する。

「補正開始。ワントリガー、フルバースト…」

周囲の風速や太陽の向きと言った情報を受け、イタクァが弾道を計算する。
ティアナが選択したのは一回引き金を引くだけで、全弾を発射するモード。
一撃に全てを賭ける必殺の魔弾を行使するためのモード。

「チェック、集中集束（コンセントレイト）ファントムブレイザー！」

ガガガガオン！！

響く銃声。

獲物が気付いた時には既に遅い。
ティアナの魔弾は、音よりも早く相手を捕える。
オレンジの光条が空を裂き奔る。
大気との摩擦で電光を発しながら奔るその一撃は、狙い違わずカリーナ・クラウンの脳天を撃ち抜いた。

「…動きは無い…わね」

そのまま狙撃スコープで見張っていたティアナだったが、相手がピクリとも動かない事を確認して移動を開始した。
こちらの戦闘スタイルは知っていたであろうに、一直線にこちらに向かっていた事から、何かしらの対策でも有るのかと思っていたのだが、杞憂だったようだ。
木から降り、轟音が響くフィールドの反対側へ向かう。
森から出た途端、遠くで土煙が上がっているのが見えた…その時だった。

ビュオン！

ティアナは咄嗟に横っ跳びに避け、振り下ろされた槍をかわす。
襲撃者はそのまま突き、薙ぎ、払いあの手この手でティアナを襲う。
イタクァの銃剣で受け止め、拮抗状態に持ちこみ相手の顔を見てみれば、それは確かに脳天を撃ち抜いた筈のカリーナ・クラウンだった。

Ｓｉｄｅスバル

「はぁぁぁぁあああぁぁ！！！」
「…」

ギャイン！ガン！ゴカン！

一合打ち合う毎に、周囲の空気が震える。
ゴルトの長剣型デバイスと、スバルのリボルバーナックル。
リーチの差を、スバルは持ち前の機動力でカバーする事で、互角に戦っていた。
否。互角では無い。
先程から一方的にスバルが殴りかかり、それをゴルトが受け流す、といった状態が続いている。
一見スバルが優勢に見えるがその実、押されているのはスバルだ。
ゴルトはスバルの攻撃を完璧に受け流し、反動さえも受けていない。
一方のスバルは要所要所で反撃を受け、僅かずつではあるがダメージが蓄積していた。

「っつぅ～…強いなぁ…でも！」
「…」

自分の信じる相棒が、自分を信じて任せてくれた仕事だ。
それに答えられなくて何が相棒か！

「うおりゃぁぁぁぁぁ！！！」
「…！」

一瞬の隙を突き、ゴルトの懐に潜り込む。
ゴルトが長剣の柄で殴りかかってきたが、それを弾き飛ばす。

「一撃！」

右腕に渾身の魔力と力を込める。
カートリッジが全弾消費され、リボルバー式のマガジンが廃莢される。
魔力を注ぎ込まれたリボルバーナックルは、主の求めに応じてギアの回転を高め、解き放たれる時を待つ。

「必倒ぉ！！」

スバルの背に現れたのは、青い3対6枚の翼。
自らの全力の一撃を受けとめる為の緩衝材として、そして憧れの人の背を目指す翼として。

「ベオウルフ・ゾディアック！！！」

そしてスバルの右拳がゴルトの腹部に叩きこまれる。

…ドゴン！！！

一瞬の静寂の後、炸裂する様な音と共に吹き飛ぶゴルト。
数回地面を跳ねた後、岩山に激突して盛大な土煙が上がった。

「…はぁ…はぁ…はぁ…」

文字通り渾身、自分に放てる最大の一撃は確実に相手を捕えた。
岩盤さえ砕くスバルの腕力に加え、接触面から放たれる膨大な魔力。
その相乗効果で、それは凡そ人に耐え切れる一撃では無くなっていた。
バリアジャケットも無い相手に使えば、ミンチよりひでぇ事になる

のは間違いない。

「…流石だ」

「え？」

にも関わらず、ゴルトは立ち上がる。

鎧状のバリアジャケットは砕け散り、胴体の前面部は殆ど残っていない。

吹き飛ばされて尚放さなかった長剣を構え直し、スバルを睨みつけていた。

Ｓｉｄｅティアナ

「イタクァ、バルザイモード」

「Ｙｅｓ，ｍｙ　ｌａｄｙ」

イタクァの銃身が上に持ちあがり、銃剣部が伸びて、さながら片手持ちの剣の様になる。

相手の槍を抱くように自らに引き寄せ、そのまま腰払いをかけてカリーナを投げ飛ばす。

カリーナは地面に叩きつけられるも、すぐさま転がって距離を取った。

「お聞きになりませんの？

攻撃が当たった筈なのに！だとか、何故まだ立てる！？とか」

「聞いた所で意味は無いわ。あんたが立ちあがって来る限り、それを打ち倒すだけよ」

「まぁ、可愛げのない事。折角ですから教えて差し上げますわ。

私達（わたくし）クラウン一族は古の王の血を引いておりますの。

それによって私達（わたくし）は鋼の様な肉体を得ているのですわ。
特に兄様は歴代最硬。兄様に傷を付けられる相手など、おりませんわ！」
「…で？言いたい事はそれだけ？
要するにあんたは、さっきまで気絶したふりしてたわけね」
「身も蓋も無い言い方ですわね。
それにしても、お友達が心配ではありませんの？
お兄様と1対1など、正気の沙汰ではありませんわ」

芝居がかった様に言うカリーナの台詞を聞いて、ティアナは薄く笑った。

「…何が可笑しいんですの？
恐怖のあまり頭がおかしくなりましたか？」
「いいえ。この采配で合ってたわ。
ねぇ、ダイアモンドって知ってる？」
「当然ですわ。私達（わたくし）の家の家紋でも有りますもの。
世界最硬且つ美しき輝きを持つ貴石。それが何か？」
「ふふっ。良い事教えてあげる。
ダイアモンドは砕けるのよ（・・・・・・・・・・・・）」
「何を…」

ズドン！

「っ！？兄様！！？」
「ね？」

タイミングを見計らったかのように、空から落ちて来たのはゴルト・クラウンその人だった。
それを追うように走ってきたのはスバル。

ゴルトの全身には至る所に痣が出来ており、呼吸も苦しそうだ。
腹部に至っては痣が紫に変色している。

「ティア、頼まれた事済んだよ」
「ん。御苦労さま。これで2対1ね。
どうする?降参しても良いわよ?」
「兄様!?兄様!?ど、どうして!?
我が一族の鋼の肉体は鉄壁の筈!」
「相性が悪かったわね。
知ってた?硬いものほど衝撃には脆いのよ?」
「ティア?何の話?」
「大した事じゃ無いわ。さぁ、どうするの?」
「…我が一族の誇りにかけて…負けることは許されませんわ!
いざ!尋常に!」
「ま、そうなるわよね。スバル、下がっててていいわ」
「え、うん」

カリーナは槍を構え、柄尻のカートリッジをロードする。
対するティアナはクトゥグアを抜き、右手を前に両腕を軽く胸の前で交差させる。

「はぁぁぁぁぁ!!!疾風怒濤!!!」

カリーナの柄尻から魔力が噴出され、一気にティアナに向けて突っ込んでくる。
更には回転も加わり、さながらドリルの様だ。

「…チェックメイト」

ガキュン!!!

交差は一瞬。
カリーナはティアナの背後５ｍ程の場所に立っていた。
そして、そのまま崩れ落ちた。

「あ、足が…？
足が言う事を聞きませんわ…」
「鋼の肉体も、脳震盪には弱いみたいね」

ティアナは交差の一瞬、イタクァで槍を受け流し、回転するカリーナの顎の先を掠めるように魔力弾を放ったのだ。
脳を揺らされたカリーナは最早立てず、ここにスバルとティアナの勝利が確定した。

## ３２号室

「かんぱ～い！」
「もう遅いんだから、あんまり大声出さないの」
「あ、あう。でも、折角勝ったんだし、ちょっとくらい良いと思う」
「…そうね。少しならね」
「えへへ。そういえばティア、今日の模擬戦の事だけどさ」
「何？あぁ、そう言えばあんたが伸したゴルトだっけ？
中央の病院まで運ばれたそうよ。内臓破裂一歩手前だったらしいわ。
どんだけ殴ったのよ？」
「うぇえ！？そんなに？
だってあの人、どんだけ殴っても平然と立って来るんだもん。
しょうがないからアッパーで意識刈ったんだけど…」
「…ま、相手もこういうとこ来てるんだから、覚悟はしてるでしょ。

で？あんたの聞きたい事って何？」
「あ、うん。ティアさ、今日は幻術とアンカー使わなかったよね。何で？」
「何でも何も、使う所が無かっただけよ。それにあれは一応、隠し玉みたいなもんだし。あんたも、ホイホイ人にいうんじゃないわよ？」
「い、言わないよ。あたし、こう見えても口は堅いんだから！」
「はいはい」
「あ～信用してない～」
「そんな事無いわよ。信用してるわ」
「うぇ、あ、うん。ありがとう」

２人の会話は深夜近くまで続いた…

# ６章－６　模擬戦　ｉｎ　訓練校（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：６章６話、ティアナ＆ａｍｐ；スバル模擬戦編です。

まぁ、最近の外伝ラッシュに読者の方々も辟易しているでしょうから、少し本編を進行。

これで６章は終わりになります。

７章はやや日常寄りの話になります。

Ｓｔｓ直前までですね。

８章はＳｔｓ前編、ヴィヴィオが出る辺りまで。

９章で後編。

１０章はＳｔｓ後日談になります。その後続けるかは読者様方の要望次第且つ、作者の意欲次第になります。

一応既に山場は越え、大方のプロットは出来ているのですが、肉付けが思うままに行きません。

書けないんじゃないんです。書き過ぎてしまうんです。

そのせいで前に進めない…

今回も６５００字を越えてしまいました。

プロット時では１０００程度しか無かったのに…

そんなこんなで遅くなりそうですが、今後ともよろしくお願いします。

では次話で。

# 7章－1　やがみけ

２０１３年　海鳴市　市街地　御剣古美術店

今日も今日とて、偶に来る客の為に店番。
まぁ、人気のある店でも無いから、暇なのは今に始まった事ではないが。
時刻は昼前。そろそろ昼食にするかと思っていると、間の悪い事に客が来る。

「いらっしゃ…何だ。お前らか」
「お邪魔します。御剣殿」

店の扉を開けて入ってきたのは、シグナムとリインフォース。
特に何かを買う訳でもないが、ちょくちょく顔を出す常連の様な物になっている。
いつも店に来ては店内の物を物色しては帰って行く。

「…なにやら久しぶりな気がするな」
「先日もお邪魔したではありませんか」
「それはそうだが…まぁいい。
私は昼食にするから、適当に見て行ってくれ。
帰る時に一声かけてくれればそれでいいから」
「ありがとうございます」

シグナムにそう言い残し、御剣はリビングへ。
リインフォースは店内の棚に置かれた壺と睨み合っている。
…気に入ったのか？

「どうした?リインフォース?」
「いえ。この壺、中々に惹かれるものがありまして。見ていて飽きない程です」
「ふむ。確かにそれは、久々に鑑定能力無しで良いものだと分かる物だったからな。
だからこうして店頭に飾っている訳だが」
「ほう。ちなみに、御幾らで?」
「ん~仕入れ値なら端金だが…一般に売るとなれば数百万は堅いな。造られてからだいぶ経っているが、保存状態も良い」
「…同じ古物でも私とは大きな違いですね。
こうして人を惹き付け、価値も高い。
私は呪われ、行く先々で破壊を撒き散らしてきた。
今でこそ平穏の中にいますが、それは奇跡の様なものだ」
「…リインフォース」
「なんでしょうか?痛っ」

こちらを向いたリインフォースの額へデコピンをかます。
軽くでは有るが、当たった所は少し赤らんでいる。

「今の台詞、同じようにはやての前で言ってみろ。
烈火の如く怒るぞ。」
「そう…でしょうか?」
「あぁ。賭けても良い。
自分の家族が、自分を卑下していると知ったら悲しむだろうしな。
あまり自虐的になるな。お前はもう闇の書ではない。
夜天の主、八神はやてに仕える夜天の書だろう」
「そうですね。あぁ、本当に私は幸せだ」
「わかれば良し。では、私は上にいる。何かあれば言え」
「わかりました」

昼食を終えて店に戻ると、2人はまだそこにいた。
2人して巻物を読み漁っている。
一度奥へ入り、茶を人数分煎れて来る。

「粗茶だが」
「「ありがとうございます」」
「しかし、2人ともこんな所にいて面白いか？」
「えぇ。ここは落ち着きます」
「そうですね。興味深い物も数多くありますし」
「ふむ。そんなものか。そう言えばシグナム、最近の稽古はどうだ？」
「…いいですね。子どもと言うものは」

急に遠い目をして語り出すシグナム。

「急にどうした？」
「いえ。私が稽古を始めてからずっと教えている生徒が、この前全国大会で優勝しまして」
「ほぉ。それは師匠としても鼻が高いのでは？」
「それはまぁ、そうなのですが。
ふと思わされたのです。止まっている私に比べて、彼等の生の輝きの眩しい事。
それが少し羨ましくなりまして」
「烈火…」
「何を言っている。シグナムだって生きているだろう」
「いえ。私達は闇の書の守護騎士。
この身は老いも朽ちもせぬプログラム体。
…そんな私は生きているなどとは…」

そんなシグナムに、御剣はふと思い立ったように問う。

「…『生活』ってどう書くか知ってるか？」

「え？生きるに活かす、ですが」

「そうだ。誰かに生かしてもらい、誰かを活かす。だから生活って言うんだよ。

シグナムは、はやてに生かされ、優勝した生徒は、シグナムに活かされて優勝できた。

ならシグナムは『生活』している。生きているよ」

「…成程。そうですね…確かにそうだ」

「しかし、どいつもこいつも自虐的になって。

助けなかった方がよかったのか？」

「い、いえ。その様な事は」

「そうです。その事に関しては、御剣殿には感謝してもしきれません」

「別に感謝されたいからした訳ではないが、だったら自分に胸張って生きろ。

不老の身だというなら、はやてが逝くその時まで傍にいてやれるだろう。

ま、私の方が早いだろうから、その時にも看取って貰うか」

そう言って茶を啜る御剣。

その様子を見て、シグナムはおずおずと口を開く。

「御剣殿…御剣殿は老いは恐ろしくないのですか？

御剣殿の能力であれば、不老はおろか、不死さえなれるでしょうに」

「それで、この世界が終わるまで生きろと？

確かに私の能力ならば不死身にもなれるさ。だが、そんな事に意味はない。

私は私のままで生きていくさ。別に不死身が悪いと言っている訳じゃない。
私が面白くない、ただそれだけだよ。」
「永遠の命と言えば権力者の夢だと言うのに、随分と冷めた様に言うのですね」
「権力が欲しいなら、今すぐ時空管理局のトップの首挿げ替えてそこに収まるさ。
だが、そんな事に興味は無いし、意味も感じない。
私にはこの店だけで十分だよ。」
「そういうものですか」
「私にとってはね」

その後も少々の話をしてから2人は帰って行った。
時刻は間もなく4時。
店のカウンターで茶を啜りつつ目録の整理をしていると、ドアに付けた鈴が鳴る。

「み～つ～る～ぎ～来てやったぞ～っているのかよ」

入ってきたのはザフィーラを連れたヴィータ。
ザフィーラは仔犬フォームでは無く、本来の狼の姿になっている。
一年程は仔犬のままだったが、流石にずっとそのままと言う訳にもいかず、こうして成長した振りをしている。

「ヴィータか。散歩の帰りか？」
「おう。今日は反対の町外れまで行ってきた」

巨大な犬を連れて走り回る幼女。
ある意味では、このあたりでの名物だ。

以前、ひったくりを捕まえて以来、ザフィーラもすっかり有名になった。
まぁ、町によくいる、おりこうわんちゃんとしてだが。

「よくもまぁ、そんなに走り回れるものだな」
「なめんなよ?あたしは騎士だ。こんぐらいしないと、体が鈍っちまうよ」
「我等は劣化せぬがな」
「うっせぇ。気分の問題だよ。気分!」
「あぁ、そういえば」

先程までシグナムとリインフォースが来ていた事を告げ、シグナムの話をした。

「って言ってたのだが。どう思う?」
「相っ変わらず頭固いなぁ、うちの将は」
「しかし、シグナムの言う事もまた事実。
我等は生命活動こそ行っているものの、それらは疑似的なものに過ぎん」
「まぁ、確かに息もしてるし飯も食うけど、別に必須ってわけでも無いもんな。
その気になれば一ヶ月以上は断食できるし。
ま、はやての飯を食わないなんて事ないけどな。
あ、そうだった。御剣、もう今日の飯の準備したか?」
「いや?まだ、というかこれからする所だが?」
「そりゃ丁度良かった。はやてが今日、家に来ないかってさ。」
「はやてが?分かった。黒峰と原口にも伝えておこう。」

海鳴市内　八神家　キッチン

「こ、これでどうですか？御剣さん？」
「…ふむ、いいぞ。シャマルも、だいぶ味付けが出来るようになったな」
「それでも偶に、とんでもないもん作るけどな」
「ヴィ、ヴィータちゃん！？」

キッチンにて、定期的に行っていたシャマルへのお料理教室の成果確認。
シャマルの料理の成功率は、本人の努力も有ってかかなり上がった。
…まぁ、失敗した時には、その上がった料理スキルが暴走して、とんでもないものが出来上がるが。

「それでも、料理が出来るようになった事は良い事だ。失敗自体は誰でもする事だしな。」
「そう言ってくれると嬉しいです。料理が出来るようになったのも、御剣さんの御蔭ですし」
「何、私は大したことはしていない。レシピと、ちょっとした技術を教えただけさ」
「…それでも、ほんの数年前に比べれば自分でも驚くぐらいの成果です。これは間違いなく、御剣さんの御蔭ですよ」
「そうか？では素直に受け取っておこう」
「…本当に、何もかも夢なんじゃいかと思う程です。私達『守護騎士（ヴォルケンリッター）』がこんなに平穏に笑って過ごせる日がくるなんて…昔の私達に言っても、絶対に信じないでしょうね」
「なんなら頬でも抓ってやろうか？人生なんてそんなもんさ。一寸先は闇、だが、その先が薔薇色でないと誰が決めた？」
「御剣さん…ありがとうございます」

「礼を言われる様な事をした覚えは無いんだが…まぁいい。さっさと料理を持っていこう。」
「はいっ！」

「すいません。御剣さん。折角来ていただいたのに、手伝いさせてしもうて」
「構いはしない。シャマルに料理を教えると言いだしたのは私だ。その成果確認も兼ねている」

はやてとシャマルが作った夕食を全員そろって綺麗に平らげ、私達以外は居間で寛いでいる。
私とはやては片づけ。
御馳走になったお礼にと皿洗いを申し出たのだが、はやてに断られ、お互いの妥協点として一緒に皿洗いをしている。

「それでもです。
あ、それと、何かシャマルやリインフォースやシグナムがお世話になったらしいですね。
ありがとうございました」
「私は月並みな事しか言っていない。
誰でも出来る事の代わりをしたに過ぎんさ」
「言うのは誰でも出来るでしょうけど、あの子らの心に届かせるのは御剣さんで無いと出来んかったと思いますよ？」
「私にそんな事が出来るとは思わんが…はやてがそう言うのならばそうなのかね」
「そうですよ」
「ふむ。そういった父親然とするのが板についてきたという事かね。あんな大きな子どもは持った覚えは無いが」
「あはは。そういう事も…え？父親？」

そう言ったきりはやての動きが止まる。
何やら「……あの子らは私の子どもみたいなもん…その父親に御剣さんが…と言う事は…はぅ！」とか聞こえてくる。
意味があまり掴めんが。

「ん？あぁ、そうだ。ティアが近況を手紙に書いてきていた。ミッド南部の災害対策部隊に配属になったらしい」
「へ？災害担当？そんな危ないとこで大丈夫なんですか？」
「問題無いだろう。そんなに柔には鍛えていない。頼れる相棒もいるようだしな」
「相棒？あぁ、スバルちゃんやっけ？よかった。
あの子、結構ツンツンしたとこあるから、友達できんのじゃないかって心配しとったんよ。」
「そのくせ面倒見はいいから、私はそこまで心配はしていなかったがね。
まぁ、元気でやってくれればそれでいいさ。
春には一度帰って来るらしい」
「そっか。それは楽しみやねぇ」

他愛も無い会話。
変わり映えしない日常。これは幕間。嵐の前の小休止である。

## 7章－1　やがみけ（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：7章1話です。

八神家その後、です。

ストックの解放ですので、割と早く更新出来ました。

が、次のがやや難航しているので次は遅くなると思います。

# 7章－2　異分子

２０１３年　海鳴市　１０月　御剣古美術店

「こんにちわ～ってあれ？珍しいですね。黒峰さん」
「この場合珍しいのはお前だろ。仕事は良いのか？なのは」

黒峰が店番をしていると、ドアベルの音と共に扉が開く。
現れたのはなのは。普段はミッドチルダに住んでいるが、極偶に顔を見せに来ていた。

「はい。ちょっと有給が溜まり過ぎちゃって。ついでに里帰りです。御剣さんいます？」
「タイミングが悪かったな。ちょっと前に出ていった。町内会の会合だそうだ」

なのはの目が大きく見開かれる。
相当驚いている様だ。

「…御剣さん、そんなのにも出てるんですか！？」
「何をそこまで驚いてんだ？」
「いえ、なんかイメージが合わないなぁ～と」
「ご近所付き合いこそが、社会性の生き物たる人間の務め何だとさ。御剣に用なら、また後の方がいいぞ」
「いえ、特に用ってわけでも無いですし。ご挨拶に伺っただけですから」
「そうか。言伝があれば伝えるぞ？」
「是非模擬戦を！」

黒峰は呆れた様になのはを見る。

「…懲りないな。もうずっと負け続きだろうが。
前1回引き分けたっきりだろう。それもその時は、フェイトが居たから拾えたようなもんだ。
その次は惨敗だったし。
というか、前から聞きたかったんだが、何でそんなに御剣に勝ちたいんだ？
お前は既に、管理局の中じゃかなり強い方だろう？」

「確かに、私は局の中じゃ『エース・オブ・エース』とか言われてます。
でも、局の中で幾ら強くても、私の中で私はちっとも強くない。
現に御剣さんに1対1じゃ、手も足も出ない」

「あいつと1対1で戦えるだけで十分だと思うが…」

「黒峰さんは、御剣さんと引き分けられるくらい強いから、分からないんですよ」

「いや、あの時の事（※外伝・御剣VS黒峰　参照）を言っているんだろうが、あれはお互い相手を殺さない様にしてたし、御剣がその気になったら俺の攻撃なんて当たらんぞ？」

「え？」

「あいつの取って置きには、自身を別世界に置いて、一切の干渉を拒絶するってのもある。
それを使われたら俺にはお手上げ。それこそ手も足もでない」

それを聞いて、なのはは黙りこんでしまう。

「ま、あいつに勝とうと思えば最低限、あいつの能力を無効化出来て、元の身体能力を上回ってる奴じゃないと無理だな」

「そんな人いる訳ないじゃないですか」

「そうでもないぞ？」

ドアベルが鳴ると同時に、不意に後ろから声がする。
そこには、紙袋を抱えた御剣が立っていた。

「この広い次元世界、いつかは居たかも知れない。
これから現れるかもしれない。今もうどこかに居るかもしれない。
私達の様な異分子（イレギュラー）がいるんだ。どこかにそんな奴が居ても、私は驚かないね」

「立ち聞きか？趣味が悪いな。
まぁ御帰り。早かったな」

「聞こえて来た物はしょうが無いだろう。
今回は確認事項程度だったからな。店を理由に抜けて来た。
他の人は酒盛り中だ。
これ、冷蔵庫に入れて来てくれ。町内会の方から頂いた柿だ」

「自分で行けばいいだろう。
あぁ、そうだ。原口が出かけてるぜ。何か用事だとさ」

「原口が？あぁ、私が頼んだ事があってね。それだろう」

「そうかい。というか、キッチン行くなら序でに茶を煎れて来てくれ」

「お前な、客が来ているのに茶も出さんとは…
と言うか何故私が…」

「どうせなら旨い茶が飲みたい。頼む」

「…少し待て」

そう言って奥へ入って行く御剣。
それを傍目で見送って、再度なのはの方へ向く。

「ま、無駄とは言わないけど、御剣に勝つのはかなりきついぜ？
言ってみれば、今は遊んでるみたいなもんだし。

その気になれば～何て言ったけど、あいつが殺しにかかれば大抵の奴はそこで御終い。
身内には甘い奴だから、その辺の隙でもつけば勝てるかもしれないな」
「…ティアは勝ったんですよね？」
「あぁ、ただし、制限付きでな。
ま、お前等とやるときにも、ある意味御剣は制限付けてるけどな。
即死系や必中系、お前等のスキルでどうしようもない物は使ってないし」
「…それでも…」
「ん？」
「それでも、私は御剣さんに勝たないと、前に進めない気がするんです。
私は8年前の、御剣さんに負けた時から動けない」

そこまで言って俯くなのは。
そんななのはを見て、躊躇いがちに黒峰は、なのはの頭に手を置く。
一瞬ビクリとしたなのはだったが、その後はされるがままにして居た。
暫くして手を離す黒峰。頭を上げるなのは。
一瞬目を合わせた後、恥ずかしそうにお互い目を逸らす。
「…御剣（あいつ）の真似で悪いな」
「い、いえ。ありがとうございました。
話聞いて頂いて嬉しかったです。改めて、今日はありがとうございました」

そう言って店を出るなのは。
それを見送った後、黒峰はじっと自分の手を見る。

「…馴れ馴れし過ぎたか？」
「いや？そんな事は無いと思うぞ」
「おうはぁ！？」
「何だ？素っ頓狂な声を上げて？」
「い、いきなり声を掛けんな！ビックリしただろうが！」
「問われたから答えただけだが？茶を頼んだのはお前だろう。ほれ。なのはは帰ったのか」
「あ、あぁ。ありがと」
「しかし、お前となのはか…意外だな…」
「ゴッゴフゥゥゥ！ゲフッ！ゲヘゴフッ！」

黒峰が啜っていた茶を噴き出す。
気管に入ったらしくだいぶ噎せている。

「汚いな。ほれ、雑巾」
「あ、ありがと…じゃなくて！
どっからそんなセリフが出るんだよ！」
「先程まで良い感じの雰囲気を出していたくせに、白々しい事だ」
「うっせぇよ！自分でも似合わない事して恥ずいんだよ！放っとけよ！
大体、あれくらいの雰囲気だったらお前、はやてとしょっちゅう出してるじゃねぇか！
それはどうなんだよ！」
「ん？あれはあれだ。兄貴分と妹分の他愛無いスキンシップだ」
「じゃぁ俺のもそう解釈しろよ！」
「それは無理だな。お前となのはの間には、それほどの物は無いだろう」
「いや、そりゃそうだが…もう良い。
ったく…ん？御剣、聞きたい事があるが、いいか？」
「構わんが…何だ？改まって」

「お前、はやての事どう思ってる？」
「先程も言ったろう。妹分だ」
「…嫁に来いだのの、はやてからの求婚については？」
「私をからかおうと言う、はやての冗談だろう？」
「…」

今の黒峰の心境を表すならばこうだった。
『駄目だこいつ！早く何とかしないと！』

「…どうした？」
「…本来ならこう言う事は、はやて本人が言うべきなんだろうが…」
「何だ？」
「お前、はやてに好かれてるぞ？」
「知っている」
「…は？」
「でなければ食事に招かれないだろうし、家を訪ねてきたりもすまい」
「いや、Ｌｉｋｅじゃなくてｌｏｖｅの意味で好かれている、って言ったんだが？」
「だから知っているさ。理由までは知らんが」
「…待て、じゃぁ何か？お前はそれを知ってて、はやての行動を冗談だと思ってるのか？」

黒峰が御剣に食って掛かる。

「冗談だ、と本当に思っている訳じゃない。
私だって木石じゃないんだ。はやてからの好意なんてとっくの昔に気付いてるよ。
光栄だとも思っている。
だがな、黒峰。私達は異分子だ。本来ここにいない、居てはいけな

い筈のモノだ。
それがこの世界と交わった所為で、世界は大きく撓んでいる。
後数年もしないうちに、撓んだ世界は元に戻ろうとするだろう。
その際にどんな事が起こるかは、私にも分からない。
私達がこの世界からはじき出されるか、消滅するならまだ良い方だろう。
この世界にも抑止力が有るのなら、私達を排除しに来るかもしれない。
その時に、はやてを巻き込む様な事にはしたくない」
「…お前の言いたい事は分かった。
でもな、だったら何ではやてに関わった？
図書館の件はともかくとしても、その後の闇の書事件への介入は？
あのまま放っておいた所で、はやては助かっていただろうさ。
そしてそのまま原作通りに事は進んだだろう。
ティアの事にしてもそうだ。
いきなり連れて来て、娘にするだのぬかしやがって。
結局、原作以上の力を付けて管理局に入っちまった。
ざっと原作関係挙げてもこんなもんだ。細かいとこまで言ってたら切りがねぇ。
もう俺達はこの世界に生きてるんだよ。それは事実だ。変えられない。
だからだ、自分の行動には責任取れ。いっつもお前が偉そうに言ってる事だろう」
「…ふん。黒峰の癖に生意気な。
良いだろう。だが、私からは、はやてには何も言わんぞ？
私は今のままでいいんだから。」
「今流行りの草食系男子気取りか。この草食系肉食男子が」
「…どっちだ」

## 7章－2　異分子（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：7章2話です。

この後半が故に遅くなりました。
自分でもまだ推敲の余地が有りそうな気がするのですが…
その内書き直すかもしれません。

ではまた次話で。

# 7章－3　帰省

２０１４年　４月２日　海鳴市　御剣古美術店

チリンチリン

いつもの様に店番をしていると、ドアベルが鳴った。
読んでいた新聞から顔を上げれば、そこには懐かしくも見慣れた顔が有った。

「おや、御帰り、ティア」
「ただいま…もう少し何か無いの？久しぶりに会ったって言うのに」
「では期待に答えて、ハグでもしてやろう。こっちにおいで」
「いいわよ。…ほら」

そう言うとティアナはこちらに歩いて来ると、両手を広げたままでこちらを見ている。
…軽口の心算だったんだが。
まぁ、折角なので精一杯の愛情を込めて抱きしめてやる。
と、ティアナの肩越しに見知った顔を見つける。

「いらっしゃい。
いつもティアがお世話になっているね。スバル」
「い、いえ！いつもお世話になっているのは、私の方です！」
「人の肩越しに挨拶ってのは、親としてはどうなの？
まぁ、兄としてもどうかと思うけど」
「ふむ。それも一理あるね」

「いいよ、ティア。
私はお邪魔する身なんだし…」

今回のティアの帰省には、スバルも同行していた。
ティアナ達の所属する陸上警備隊第３８６部隊は、部隊編成に伴ってしばしの休養が与えられた。
災害救助には代わって本局武装隊が当たる事になっている。
降って湧いた休暇に、ティアナは以前から考えていた帰省を実行する事にした。
すると、ある事に気付く。スバルだ。
スバルの家族は管理局員。休暇だからと言って、家族も休暇とはいかない。
折悪く、１０８部隊は現在抱えている案件の所為で、休暇を取っていられる状況では無い。
そこでティアナが折角だから、と今回の帰省ついでにスバルを誘ったのだ。
自身の憧れの人の元へ行けるとあれば、スバルはその誘いに一も二も無く飛び付いた。

「いやいや。確かに失礼だった。
すまないね。愛しの愛娘と久々に会えた喜びのあまり、とんだ無礼を働いてしまった。
許して欲しい」
「い、いえいえいえ、そんな頭を下げて貰う程の事では！」

ティアナを放すとスバルの前に立ち、頭を下げる御剣。
一方スバルはどうしていいやらテンパる一方だ。

「もういいでしょ？
こっちよ、スバル。私の部屋に案内するから、荷物置いて来るわよ」

「え、あ、うん。それじゃ、失礼します」
「あぁ、また後でね。」
「？」

意味ありげな御剣の台詞に首を傾げながら、ティアナに促されながら階段を上って行くスバル。
それを見送ると、御剣は店のシャッターを下ろす準備を始めた。

海鳴市　近郊　山中　夕刻

ガキュン！ガキュン！　ドゴン！

日の陰り始めた森の中に、銃声が響く。
連続して響いた銃声の後、一条の光線が空を裂き奔る。
着弾と同時に響く轟音。同時に山の中腹から土煙が上がった。

「ふむ。幾らか腕を上げたか？」
「当然。これでも訓練校じゃ努力家で通ってたのよ」

御剣が瞠目したのは、ティアナの魔法弾の集束率の上昇。
2年前の時点で既に、カートリッジ1発の魔力を全て魔力弾として集束させる事が出来ていたが、現在のティアナはカートリッジの魔力2発分を1発の魔力弾に込める事が出来るようになっていた。
そして、それでいて魔力弾のサイズは変わっていない。
これは凝縮率の上昇と共に、魔力弾形成の際に弾殻を限りなく薄く、それでいて強靭に作り上げ、均一に圧縮する、その魔力運用の精密

さが上昇した事を示していた。
限りなく限界まで膨らませた風船を押しつぶして、本来の大きさの１０分の１にする事の難しさを想像して貰えば、ティアナの魔力運用の精密さが分かって貰えると思う。

「『集中集束（コンセントレイト）・ファントムブレイザー』の改良版も構想中。
こっちはもう少し時間が掛かるわね」
「やれやれ。軽い気持ちで１枚の落ち葉に火を付けたら、それが山火事になってしまったかの様な心境だよ。」
「もう少し言い方が有るんじゃない？と言うか、それは軽く不謹慎よ？」
「む。それもそうだ」

そんな事を言い合っている御剣とティアナの後ろで、立ちつくすスバル。
荷物を置いてすぐ、訓練着に着替えるよう言われ、あれよあれよとここまで連れて来られた。
どうやらティアナの成長確認である事はすぐに予想がついたが、何故自分までここにいるかが今一つ掴めない。

「さて、では次はスバルか。こっちへおいで」
「へ？は、はい！」

そうしている内に御剣に呼ばれる。
５ｍ程を空け、向かい合う御剣とスバル。
御剣の体が光に包まれたかと思うと、身に着けていた鎧が変わっていた。
いつもの白銀の軽装では無く、黒と赤の重装だ。
関節部分からは棘が飛び出し、禍々しい印象を持たせるデザインになっている。

「あ、あの、一体何を？」
「あぁ、して貰う事は実に単純だ。
全力で私に攻撃して来る。それだけだよ」
「…え？どういう事ですか？」
「私は避けないし、反撃もしない。
安心して全力で掛かっておいで。」
「え？えぇ！？」

そう言われても相手は命の恩人、憧れの人。それを殴れと言われて、スバルは困ってしまった。

「大丈夫よ。
仁がそう言っているんだもの。本気で殴りなさい」
「え、で、でも…」
「私も舐められた物だね。訓練校を出てたった1年しか経っていない様なひよっこが、私にダメージを与えられると？」
「え、いや、そんなつもりは全然無くて…」
「いいから。だったら1撃だけで良い。それに全力を込めて打ってくればいい。
それで終わりだよ」
「…分かりました」

そう言うと、スバルは構えを取る。
左手は小指と薬指だけを握って顔の高さに前へ突き出す。
右手は軽く握って腰溜めに構える。

「…ほぅ」
「行きます！」

その構えを見て、何か気付いた様な顔をする御剣。
その表情を見て、スバルは気勢を高める。

「一撃！」

掛け声と共に、右腕に渾身の魔力と力を込める。
カートリッジが全弾消費され、リボルバー式のマガジンが廃莢された。
以前と同じように踏まれる展開プロセス。だが、その後が少し以前と異なっていた。

「必倒ぉ！！！」

スバルの左手に、拳サイズのスフィアが形成された。
通常のスフィアの周りを環状魔法陣が3重に取り巻いている。

「ベオウルフ・ゾディアック…」

そしてスバルの背に展開される、青い3対6枚の翼。
それと同時にスバルのローラーブーツが加速する。
さながら地上を飛ぶように加速し、スバルは一瞬で御剣の眼前に現れた。

「…一気通貫（アクセラレーション）！！！」

そして左手を御剣の水月に叩きこむ。
と同時に、左手に展開していたスフィアが御剣に付着した。
そして、スバルの右拳がそのスフィア目掛けて打ち込まれる。
…そして、その場にいた人間全ての視界が閃光に包まれた。

結果から言うなれば、宣言通り御剣は避けも反撃もせず、それどころか防御らしい防御も取らず、まともにスバルの1撃を受けた。
にも拘らず、御剣はなお自らの足で立ち、ダメージを受けた様子も見られなかった。
その身に纏った鎧にも、傷一つ見当たらない。

「…ふむ。成程、左手に形成したスフィアはその本体より、周りの環状魔法陣が本命か。
1つ目で弾殻を固定し、接触面で対象に付着させる。
2つ目で接近した右拳を更に加速。拳撃自体の威力を向上させる。
そして3つ目、スフィアの内部魔力に指向性を持たせた上で炸裂させる。
これによって只でさえ威力の高い一撃を、更に増強させたか。
しかし、これの部類は何だ?砲撃でもあるし…魔力付与攻撃でもあるな」

そう言って考え込む御剣を、スバルは信じられない物を見る様な眼で見る。
自分の技が絶対とは言わない。
だが、それでもそれなりに自信は持っていた。
何よりも、自身の相棒から褒められた長所を生かして生み出した技だ。
名前こそ目の前の憧れの人が使っていた物を借りたが、それでも自分の最高峰の一撃だった。
それを受け流した訳でも、魔法を用いて防いだ訳でも無く、純粋に肉体の防御力だけで受け止められた。
その事実は、スバルに大きなショックを与えた。
自分はこの人に全く追いつけてなどいないのだ。

自信とこの人との間には、絶対的と言っても良い程の溝があるのを知覚する。
それは…それはとても…

「ふむ。ま、どちらでもいいか。
そこまで重要では無いし。おや、もうこんな時間か。
さて、2人とも、帰るとしよう。」
「いぃよっしゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

御剣が2人に声を掛けると同時に、俯いていたスバルが突然大声を上げる。
否。もはや大声と言うよりは、咆哮と言った方が近かった。
真横にいたティアナは耳を押さえているし、御剣は驚いた様にスバルを見ている。

「うふふ…ははははは…」
「…ティアナ。スバルがこう言う状態になる事に心当たりは？」

続いて笑いだすスバル。その様を見た御剣はティアナに問うた。

「い、いえ。無いわ。
必死に考えた必殺技が通じなかったから、絶望したとか？」
「いや、それにしては笑い方がおかしい。
もっと違うなにかだな」

御剣の予想通り、スバルは悔しさのあまりおかしくなった訳ではない。
まして御剣が倒せない事はおろか、ダメージすら与えられなかった事が原因でも無い。

単純な話、嬉しかったのだ。
今の自身の限界まで振り絞った全力ですら、目標の人には届かない。
それはスバルにとって、とても…越え甲斐のある相手だった。

海鳴市内　御剣古美術店　リビング

『いただきます』

一斉に唱和される食事の合図。
本来なら食卓には人数分の食事が用意されている筈だが、今日は大皿にミートボール入りのスパゲッティが山の様に盛られている。
それも1皿では無く、4皿用意されていた。
其々の前には、取り皿が置かれている。

「ティアから良く食べると聞いていたからね。
遠慮せずに食べると良い」
「す、すみません」
「何。作る分には対して差は無いさ。気兼ねなどしなくていい。
どうせ、そこの無駄飯食らい共の分も、作らねばならんのだしな」
「誰が無駄飯食らいだって？」
「お前ら以外に誰かいるのか？」
「何を～！！」

自分がここを出た時と、なんら変わらない風景。
その只中にいる事で、自身が帰ってきたのだ、という実感がティアナには湧いていた。

「…？」
「私は、少し上にあがっている。皿は水に浸けておいてくれ」

「分かった」

だがそんな中、御剣の様子が常とは違う事に気付く。
普段からそれほど食べる方ではないが、今日は殆ど食事に手を付けていない。
それを不審に思っていると、御剣は上階へ上がって行った。

「…む…流石にきついな…」
「やっぱりね」
「ん？どうかしたか？ティア？」
「いいから見せて」

御剣が寝台の上でへばっていると扉が開き、ティアナが顔を出した。
平静を装う御剣を無視し、御剣が着ているシャツを捲る。
そこには、痛々しいまでに変色した腹部があった。

「やっぱりね。そんな事だと思ったわ。
大丈夫なの？」
「見た目ほど酷くは無いさ。いやしかし、油断した。
耐え切れると思ったんだがな…」
「…そんな判断も出来なくなったの？耄碌したわね」
「まだ、私は三十路前だが？
威力を測るには、実際に受けてみるのが一番手っ取り早いからね。
魔法自体は鎧の対魔力で相殺したし、幾ら強化されようと、女性の拳ぐらい受け止められると思ったんだがな…
まさか鎧を貫通して衝撃が襲ってくるとは…完全破壊攻撃（パーフェクト・アブソリュート・ショット）か？」
「…まぁね。色々あるのよ」

そう言って軽く視線をずらしたティアナを見つつ、話を逸らす。

「…ふむ。そうか。
しかしベオウルフ・ゾディアックとはね。知っていたのか？ティア？」

「えぇ。スバルは、あれが仁が星の数程持っている必殺技の中の１つだ、とは知らないみたいだけど」

「確かに目の前で撃ったが…最早別物になっていたぞ？
同じ所は翼が生えるくらいだ。」

「完全に再現するには、構成が甘いらしくてね。遠距離にも届く様にすると威力が落ちる、らしいわ。
実質の射程範囲は２ｍも無いわよ。
でも、あれはあれで強いし、何より本人に合ってるわ」

「まぁ、近代ベルカ式の様だしな。威力は私が自信を持って保障しよう。
この有様だしね」

「…見てて痛々しいから、さっさと治してくれない？」

「急ぐ必要は無いさ。見た目が酷いのは、軽く腹筋が裂けて内出血しているからだ。
明日の朝には治っているよ」

そうあっさり言ってのける御剣に、溜息を吐きつつ呆れた様にティアナは首を振った。

「毎度毎度あり得ない回復力よね。何か宝具でも使ってるの？」

「いや？魔力を傷口に回せばこの程度、何も問題は無い。
軽いヒーリングみたいなものだ」

「魔法式も組まずに、そんな高等技術を力押しで実行してる所は凄いと思うわ」

「そう褒めるな。照れる」

「別に褒めてないわよ」
「そうだ。折角帰って来たんだ。皆を集めて何かやるか」
「別に良いわよ。大げさな事しなくても」
「お前に合いたい人も居るだろうさ。
そうだな。時期も時期だし、久しぶりに花見でも行くか。
来週までは居るのだろう？」
「えぇ。こっちには火曜まで居るつもりよ？」
「では、今週末に花見といくか」

## 7章－3　帰省（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：7章3話です。

遅くなって申し訳ありませんでした。

今回御剣が纏った鎧は対魔力C（第二節以下の詠唱による魔術を無効化する。だが、大魔術・儀礼呪法など大がかりな魔術は防げない。）を持っています。
普段の白銀の鎧は対魔力B（魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。大魔術、儀礼呪法等を以ってしても、傷つけるのは難しい。）を持っています。
また、御剣の鎧はこれ以外のも当然あります。
そちらは追々。

次回は地球組ほぼ全員集合で花見です。
ではまた次話で。

## 7章－4　花見（前書き）

注意！未成年の飲酒は法律で禁じられています！！！

# 7章－4　花見

２０１４年　４月　海鳴市近郊　自然公園　昼

「では、乾杯！」
『かんぱ～い！』

黒峰の音頭で全員が一斉に杯を掲げる。
今日は久々に集まって花見…と言うのは建前。
全員集まって飲んで騒ごう、という趣旨の花見だ。
所謂花より団子である。

「何度も言うが、例え勧められても酒は呑むなよ。はやて、ティア」
「言われなくても分かってるわよ」
「え～御剣さんは呑む癖に～」
「…はやて？」
「はい。分かりました」

少し不満そうなはやてに、視線で釘を刺しておく。
流石に、未成年に飲酒させる訳にはいかない。

「しかし、スバルも来ればよかったのにな」
「しょうが無いわよ。お姉さんの方が休暇取れたんだから、そっちにも行かないと」
「それもそうだ」

スバルは昨日まで泊っていたが、ギンガが休暇が取れたそうなので、ミッドに帰って行った。

ギンガも呼べばいいと言ったのだが、遠慮したのか断られてしまった。
姉も良く食べるので迷惑になる、との事だったが、その程度のエンゲル係数の上昇など屁でも無いのだがな。

「それにしても、改めてみると凄いメンツよね。
時空管理局の提督に元提督で総務統括官、無限書庫書記長、本局次元航行部隊のエリート魔導師、極め付けにエース・オブ・エース。
管理局関係でも、これだけの人材が集まる事は早々無いわよ？」

周囲を見渡したティアナが感嘆の声を上げる。
急な呼びかけにも関わらず、殆ど全員が二つ返事で参加を表明した。
管理局関係は殆ど集まらないだろう、と思っていたのだが…
ハラオウン家は育児休暇中のエイミィとその双子はもちろんの事、丁度帰っていたリンディさんも参加。
フェイトとクロノは艦隊の一斉メンテで丁度休暇中。
なのはも有給の消化。ユーノも最近は暇が出来たらしく、参加すると言ってきた。
まぁ、なのはも来ると言ったら即決だったが。

「序でに言うなら、バニングス家も月村家も地元の名士だ。
更に言うなら、高町家は桃子さんとなのはを除いて、古武術の心得がある。
その桃子さんも世界レベルのパティシエだ。
この場に一般人は一人もいないと言っても良いな」
「海鳴ってすごい所よね。色んな意味で」

この場には高町家、ハラオウン家、八神家、バニングス家、月村家、ユーノ、そして私達、御剣古美術店一行が居る。
…ティアナの台詞には頷く以外の事は出来んな。

「…しかし、はやても来年には大学生か。
時の経つのは、早い物だ」
「仁、言ってる事がオヤジ臭い通り越して、お爺さんになってる」
「あはは。そうですね。御剣さんと出会ってもう9年になるんですね。
そう考えると人生の半分を、御剣さんと過ごしている事になりますね」
「そうとも言えるが…何が言いたい？」
「いえ、その辺の夫婦よりも年期は入ってますよね？」
「…大体次に何を言う気か分かったんだが、聞かなくて良いか？」
「こうなったら籍を入れるしか！」
「あ～はいはい」
「生返事！？乙女の一世一代の告白を、何だと思ってるんですか！？」
「一世一代なら、乱発しない方がいいわよ？はやて姉さん（ひそひそ）」
「一回言ったくらいじゃ、通じんから仕方ないんよ…（ひそひそ）」
「だからって、何回も言えば良いってものじゃない様な…（ひそひそ）」
「何をこそこそと…」
「御剣！ちょっとこっち来い！！」

御剣がはやて達のヒソヒソ話に突っ込みを入れようとした瞬間、
黒峰から声が掛かる。
はやてが黒峰の方に目をやれば、御剣に気付かれないように親指を立てていた。

Ｓｉｄｅ黒峰

ふ、ふはははは。
流石の御剣も気付くまい。今回の花見の目的は、はやてと御剣をくっつける事だと…！
いい加減やきもきした八神家と、面白そうだからと乗ったハラオウン家と高町家、ついでにはやてを応援しているバニングス家に月村家の連合軍による絶対包囲！
今回で恋人まで行かずとも、幾らかの進展はさせてみせる！
いい加減、本人だけ気付いて無い状態は飽きた！
さしあたっては御剣(こいつ)を酔わせる事から始めるとするか。

3時間後

「…御剣、酔って無いのか？」
「ん？いや？お前も知ってるだろう。私は酒には強いぞ？」

そう。すっかり忘れていたが、こいつは妙に酒に強いんだった。
酔い潰れた事はおろか、顔を赤らめることすら滅多に無い。
さっきから、御剣の前には一升瓶が並んで行く。
だと言うのに、御剣は顔色一つ変えていない。仕方ない…作戦変更！

「御剣、はやてのとこ行って来い」
「…どうした急に？こちらに呼んだのはお前だろう？」
「もういいよ。お前といると、こっちが先に酔い潰れちまう」
「…そうか。程々にしておけよ？」

そう言い残すと御剣ははやて達の方へ歩いて行った。

…その足取りに酔いは見られない。
頼んだぞ！ティア、なのは、フェイト！

Ｓｉｄｅティアナ

…馬鹿らしい。
今回の企みを亮から聞いた時の素直な感想はそれだった。
そんな物、本人達にまかせておけばいいじゃないかと。
だが、確かにこのまま本人達に任せておけば、進展は殆ど見られないだろう事も予想できた。
何よりも、周りが乗り気なのだ。水を差すのも悪いだろう。
そう思っていると、こちらに仁が歩いてきた。

「亮の用は何だったの？」
「分からん。次から次へ酒を呑まされたが…それだけだった」

…恐らくは酔い潰れた仁を、はやて姉さんに介抱させようと考えたのだろう。
それはどうやら失敗に終わったらしいが。
と言うか、仁がえらく酒臭い。
近くにいるだけで、酒に弱い人なら酔ってしまいそうだ。

「仁、お水。口だけでも漱いで」
「ん？あぁ、すまん」

言いたい事を分かってくれたらしく、差し出したミネラルウォーターを口に含む仁。

「で？はやて。御剣さんとはもう、キスの１つも済ませたの？」
「なぁぁあ！？」

ブッフゥゥゥゥ！！！

…丁度フェイトさんが、とんでもない質問をはやて姉さんにしていた。
明後日の方向を向いて、口の中のミネラルウォーターを噴き出す仁。うっすらと虹が掛かっている。綺麗だとは思えないが。

「フェ、フェイトちゃん！？な、何いきなり言うとんの！？」
「だってはやて、昔っから御剣さん御剣さん言ってるし、もう済ませちゃったのかな？って」
「な、な、な…」

顔を真っ赤にして震えているはやて姉さん。
フェイトさん、直球すぎます。

「もう、フェイトちゃん！駄目じゃない」
「な、なのは」
「せ、せや！もっと言うたってや、なのはちゃん！」
「そんな、当たり前の事聞いちゃ！」

はやて姉さんがずっこけた。
効果音をあえて言うなら、ドンガラガッシャーン、と言った感じで。ちなみに私の横で仁は顔を手で覆っている。やれやれ、と言った風情だ。

「…ティア、私はしばしここから離れる。はやての事…頼んだぞ？」
「…そうね。あそこに仁が行ったら火に油、いいえ、火にダイナマイトだわ」
「ではな」
「えぇ」

その背後では相変わらずはやて姉さんが弄られていた。
でも私にはどうする事も出来なかった。私に出来る事は只一つ。
弄り尽くされたはやて姉さんの愚痴を聞くくらいだ。

Ｓｉｄｅ御剣

どうも周りの様子がおかしい。
デビットさんと士郎さんが呑んでいる所へお邪魔すれば、家庭を持つ事の素晴らしさを語られ、桃子さんやリンディ総務統括官の所へ行けば、子どもには母親が必要だ、と言った内容の事を語られ、クロノ達一家の所へ行けば、息子と娘自慢をされた。
…クロノの所はいつもと変わらんな。

「何だと言うのだ一体…」
「御剣さ～ん…」
「ん？」

何やらふやけた様な声が聞こえたと思えば、背後に誰かがしがみ付いて来る。

「…どうしたはやて…酒臭いぞ？」
「そうれふかぁ…？おかしいれすね…ジュースしか飲んでませんよ

お？」

はやて達の居た方へ目をやれば、そこに転がっているのはチューハイの缶。
…未成年の飲酒は法律で禁止されています。

「誰だ…呑ませたのは…確かにチューハイなんてジュースみたいな物だが…（注：酒飲みの発言です）」
「ろうしたんですか～」

もはや、はやては呂律が回っていない。
泥酔一歩手前…いや、もう片足は突っ込んでいるな。

「はやて、これを飲め」
「何れすか～これ…？」
「水だ。飲み干してしまっていいぞ」
「ありがろうございまふ…さっきから喉乾いてて…」

はやてに先程のミネラルウォーターのペットボトルを渡す。
クーラーボックスに入れて凍らせておいたので、まだ幾らか冷たい。
酔っている時は、水分を取って血中アルコール濃度を低くするに限る。
ついでにアルコールの分解は加水分解。これで幾らかマシになるだろう。

「ん…ん…ん…ぷふぅ…
ありがとうございらした…」
「どういたしまして」

冷水を飲んだ所為で幾らか酔いも醒めたのか、呂律は戻りつつあ

るようだ。
後は安静にさせておこう。
と、はやての方に目をやれば、ペットボトルの口を凝視している。
「御剣さん…これ、口空いてましたよね？」
「あぁ。先程私が飲んだからな」
「と…言う事は…間接…！」
…こちらとしては何を今更、と言った感じなのだが。
鍋物や同じ盛り皿の料理を一緒に突いている時点で、唾液の交換など済んで…
ゾクゥ！
突如背筋に悪寒が走る。
振り向けば、なのはとフェイト、それにすずかとアリサがこちらを睨んでいた。
…全員目が据わっているのだが…まさか呑んで…いるのだろうな。
…繰り返すが、未成年の飲酒は法律で禁じられています！
「御剣さん…」
「ん？どうした、はやて？」
「御剣さんは、キスした事あります？」
…先程の会話と、間接キスの所為か。
さて、どう答えたものか…
「…あるよ」

「…！……そう、ですか」

答えた私の言葉にビクリと震えるはやて。
と言っても、主観的には遥か昔、まだ小学生だった頃の話だ。

「やっぱり…御剣さんは…子どもには興味は有りませんか？」

…先程からどうも答えづらい質問が続くな。
だが、答えないとなれば背後の連中から罵倒されるだろう。
しかも人数は先程よりも増えている。否。花見の参加者全員がそこにいた。
と言うか、もしかしてその遠聴の魔法がばれてない、とでも思っているのか。
足元の魔法陣でバレバレなのだが。

「…まぁね」
「……そう…ですよね」

背後からの視線が強くなる。
先程の質問に正解はあったのか？あったなら、是非教えて欲しい所だ。

「じゃぁ…その…迷惑でしたか？」
「え？」
「私が…御剣さんをご飯に誘ったり、お茶して貰ったり、お店に遊びに行ったり、好きだとか、結婚してだとか、そういうの全部、迷惑でしたか？」
「それは…」

一瞬、一瞬だけ言い淀んだ。

その一瞬の内に私が答える間も無く、はやては駆け出してしまった。

「はやて！」

それを追おうとした。だが、足が動かない。

追い掛けて…どうする？そんな声が頭の中に浮かぶ。

私は所詮異邦人。ここにはいない人間だ。

いつかは消えてしまうかもしれない。

否、それならばまだ良い。私達が消えるのはまだ良い。

元有った状態にこの世界が戻るだけだ。だが、その影響がはやて達に出たら？

抑止力が海鳴を襲ったら…

ツドッゴン！！！

そこまでは考えられた。次の瞬間、世界が真っ白になった。

次に見えたのは拳を振り切った体勢の黒峰。

あぁ、成程。先程の轟音は私が殴られて、吹き飛ばされた音か。

「…この馬鹿が…」

「何？済まんが殴られたせいで良く聞こえない。もう一度言え。」

「お前は馬鹿だって言ってんだよ！」

「…」

「どうせお前の事だから、またウジウジ考えてんだろうけど、だから馬鹿だってんだ！

前も言ってたよな？俺達がここに来た所為で、世界が撓んだだの、抑止が来るかも知れないとか。

そんなもん、全部何とかすれば良いだろうが！！！俺達にはそれが

出来るだろう！」

　黒峰の言い分に、あっけに取られる。
何とかすれば良い？そんなアバウトな。抑止と言うのは起こった事を鎮圧するために出てくる物だ。
つまり、予想は出来ないが、私達に匹敵するモノが送り込まれて来るかも知れない。
それを何とかする？…ふん。

「…お前に馬鹿と言われるのは、納得がいかんな。この単純脳筋馬鹿が」
「あんだとぉ！？」
「…ありがとう」

　そう黒峰に告げ、はやてが走り去った方へ足を向ける。
そうだな。起こってもいない事にウジウジしてもしょうがない。
まずは…今起こっている事を何とかしようか。

「黒峰」
「何だ？」
「ありがとう」
「二度も三度も言わなくても良い。気持ち悪い」
「ふん。あ、後ろの連中への説明は頼んだぞ？」
「は？」

　馬鹿め。
私達の出自だのは、出来るだけ言わなかったと言うのにばらしたな。
精々質問攻めにされろ。私は…色々と決着を付けるとしよう。
そして私は走り出した。

## 7章－4　花見（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：7章4話です。

繰り返し、繰り返し言いますが、未成年の飲酒は法律で禁じられています。

山中へ走り去ったはやてを追う御剣。
今まで隠して来た真実を告げる為に。
次回、『告白』。
お楽しみに。

# 7章ー5　告白

海鳴市　近郊　山中

「はやて…」
「来んといて下さい！！！」

はやてはすぐさま見つかった。
と言うか、花見をしていた場所からほんの数百mもしない所にいた。
が、先程から木の根に座り込み、声を掛けても全くこちらを見ようとしない。

「…言っておきたい…いや、言わなければならない事がある。
そのままで良いから聞いてくれ」

はやての反応は無い。私は構わず話し始めた。

「そうだな…まず、私はこの世界の出身では無い。
否、この次元世界の何処にも私達の出身世界など無い。
私達はね、この世界の平行世界からやってきた。言わば異分子（イレギュラー）だ」

そこまで言って、はやての方を向く。
相変わらずこちらを見ようともしない。そのまま私は続ける。

「少し…荒唐無稽な話になるだろう。だが、最後まで聞いて欲しい。
私達の身に起こった奇妙な出来事を…」

そして私は語り始めた。事の始まりを。
隕石に押しつぶされた事、死神と出会った事、この世界に来たばかりの頃の事、はやてと会うまでの事を。

「その後は、はやても知っての通りだ。
私達は偶然君に出会った。君が闇の書…夜天の書の主になるであろう事は、その頃から知っていた。
そして蒐集に参加、闇の書の防衛プログラムの破壊を行った」

…はやてのリアクションは一切無い。
少し不安になりつつ、切りだした。

「その後、私達は管理局からの監視を軽減する事を条件に、様々な依頼をこなした。
世界単位の殺害を行ったロストロギアの破壊に始まり、色々やった。
次元犯罪者の確保も、強奪された艦船の奪還、暴れる魔竜を鎮めたり、それに…
…反管理局組織を壊滅…否。惨殺した」

ようやく、ようやくはやては反応を見せた。
顔を上げ、こちらをじっと見て来る。私もその目を見返す。
数分の後、はやては口を開いた。

「…それが今、何の関係が有るんです？」
「…そう言われると身も蓋も無いな…だが、最後まで聞いて欲しい。
…今までの所で質問は？」
「…一つだけ。…御剣さんは…人を殺した事が有るんですね？」
「…あぁ。先程言った通りだ。反管理局組織の構成員、９８，２１６人。
それが私が奪った命の数だ」

「…後悔は？」
「無いよ。
むしゃくしゃしていた訳でも、誰でも良かった訳でもないが、反省もしていないし、後悔もしていない。
金に困った訳でも無ければ、恨みが有った訳でも無い。
管理局の正義なんてこれっぽっちも信じていないし、彼等反管理局組織が何か大がかりな、それこそ世界を揺るがすような犯罪計画を立てていた訳でも無い」
「…じゃぁ、何でですか？」
「頼まれて、私にはそれが出来たから。それだけだ」
「え？」
「私にとっては、そこにある小石を拾ってくれ、と言われたのと何も変わらんさ」
「でも、さっきの話だと、御剣さん達は元々は普通の人だったんですよね？
じゃぁ…何で？何でですか？」
「彼等は私と何も関係が無いからね。
元々私の世界に居なかった人間なんて、どうでもいいのさ」
「…！じゃぁ…私も…誰かに頼まれたら…私も殺すんですか？」
「…殺す」
「…！」
「それを頼んできた相手をね」

私の台詞に身を竦ませるはやて。
しかし、私が続けていった言葉に、はやてはどう言う事か分かりかねる様子でこちらを見て来た。

「え？」
「言い方がまずかったか。この場合の私の世界と言うのは、元々私達が居た世界の事では無い。

私の、この両目、両耳、そしてこの手と足が届く距離。それが私の世界さ」
「…じゃぁ？」
「元居た世界は、もう私の手の届かない場所だ。
私にとってはもう、ここが私の世界だよ。
あの店と、この街とで私の世界は完結するが、まぁお零れでこの地球も守ってやろう」
「…」
「話を戻していいか？
でだ、ここからが本題になる。
私達は先程言った様に、元々この次元世界の住人では無い。
其々の世界への移住は何も問題は無い。次元世界の中での、人数の総量は変わっていないからな。
だが、私達がこの世界に来た事で、この次元世界が撓み始めた」
「…撓み？」
「この言い方以外なら、溢れる、歪む、元々の容積以上が器に無理やり押し込められた状態だ。
ここで問題になるのは、この撓みだ。
撓む、つまり本来の形とは変わってしまった世界は、自ら元に戻ろうとする。
その為にはどうすればいいか、答えは簡単。撓んだ原因を断てばいい。
つまりは、私達を消す事さ」
「…え！？」
「と言っても、どうやら私達をいきなり消したりは出来ない様だな。
今私達がここに居る、と言う事はそう言う事だ。
となれば次に来るのは、『抑止力』だ」
「『抑止力』？」
「そう。世界の守護者の様なモノさ。
世界の端末。世界を維持するために送りこまれて来る使者だ。」

「世界の…守護者…まるで御剣さん達が、世界の敵みたいじゃないですか」
「みたい、ではなく、事実私達は世界にとっては敵なのだよ。只の人間一人二人なら、恐らく世界は撓んだりなどしなかっただろう。
だが、私達は手に入れてしまったのさ。只の人間には分不相応な神に等しき力をね」
「神？」

次々と出てくる話にはやては些か付いて来れていない様だ。

「そう。私は世界に名だたる英霊たちの力だけでなく、神霊の能力さえ行使できる。
黒峰はその粒子によって、大体の物理現象は起こせる。
原口に至っては、新世界の創造だ。
私達一人一人が、この世界に喧嘩を売っている様な存在なのさ」
「…いい加減、本題に入って下さい。何で、今ここでそんな話をするんですか？」
「そうだな。とは言え、今までも無駄話をしていた訳じゃない。
そう。私達一人一人が神にも等しい力を持っている。
なら、それを排除するために送りこまれる抑止力は、一体どれほどの力を持っているか分からない。
仮に抑止が発現した場合、良くてこの国が、最悪この世界が焦土と化すだろう。
…そうなった時、はやて達を巻き込まないようにはするつもりだ。
その準備も今している」
「そんな…なんで…」
「世界に限らず、変化した物は元の形に戻ろうとする性質を持っている事が多い。
物理で言う作用反作用の法則とも言える。

加えられた力には、同程度の反作用が働く。
私達によって本来有るべき形から歪められた世界は、元に戻る為にそれ相応の力を持ったモノを送り込んで来る。
私達が抵抗しようがすまいが、余波だけでも影響は凄まじいものになるだろう。」
「そんな事を聞いとるんじゃありません!!!」
「では何を?」
「なんで、私達を頼ってくれんのですか!?
私の命は御剣さん達に助けてもらった物です。
だったら、この命は御剣さん達の為に使いたい!」
「いきなり何を言い出すかと思えば…そんな事を私は望んでいない。
はやてが生き永らえたのは、幾つかの偶然が重なった結果だ。
私達だけの力でもないしな。
私達の御蔭だと言うなら、精一杯生きて欲しい」
「…私は…御剣さんにだったら、私をあげても良いと思ってます。
最初はからかってたのも有りましたけど、途中から…闇の書事件の後、守護騎士の皆から本当に助けてくれたのは御剣さんだ、って聞いてから…
私はあのままやったら死んでたって聞いて、そんで間違ったやり方を止めてくれたのが御剣さんで…
その後も、何かと気にかけてくれて、私らの監視の期間が短くなったのも御剣さん達の御蔭やって、クロノくんから聞いて、」

…要らん事を。クロノ…後で〆る。

「私…どうしたらええかって、どうしたら御剣さんに恩返し出来るかって、さんざん考えて…」
「…その結果が求婚か…」

発想が二段飛ばしどころか、数段飛ばして着陸失敗、機長クビな

レベルだろうそれは。

「自分で言うのもなんですけど、私、割と可愛い方だと思うし、胸も…シグナム程じゃないけど有ると思うし…」

…それは、比較対象が間違っていると思うが。

「…でも、迷惑でした…よね。
こんな小娘に言い寄られても、御剣さんは…」
「…嬉しくない、とは一言も言っていないが？」
「え？」
「私とて木石では無い。
可愛い女の子に言い寄られて嬉しくない訳は無いし…その…何だ。
最近はもう小娘、と言う訳でもないし」
「…それって…」
「…はやての事が迷惑だ、等と思った事は一度も無い。
好きか嫌いかで言えば好きだし、『世界』で…1番大事な人だ」
「…あ、ありがとうございます。
…でも誤魔化されませんよ？私の事、恋愛対象として見てます？」
「む…それは…だな」
「…いいですよ」
「何？」
「いいです。さっき言ってた『抑止力』とか言うのが有って、それに御剣さん達が負けて消えちゃうかもしれないから、私と付き合えないんですよね？」
「…えらく強気に出たな…まぁ…概ねそうだ。
勝てると断言できる相手でも無いし、無事で済む保証も無い」
「だったらこうしましょう。
勝って無事に帰って来て下さい。ご褒美は、ワ・タ・シ」
「…はやて？冗談にしては笑えないんだが？」

「…恥ずかしいから誤魔化すために言った、って気付いて下さいよ」
「…それは随分と難易度の高い話だな。
だが…確かに豪華な景品だ。少しやる気は出たよ」

そんな事をされずとも、大人しく消されてやる気は無い。
こちらは向こうの死神のミスの所為で死んだ、言わば被害者だ。
徹底的に抗ってやろう。

## 7章ー5　告白（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：7章5話です…が！
はっきり言って自分でも納得いって無いので、その内書き直します。
恋愛描写ってどうやったら上手くなるんだろう…

時空管理局、そして御剣達に忍び寄る影。
次回、『影（シャドウ）』。
お楽しみに。

# 7章－6　影

２０１４年　５月　時空管理局本局　応接室

ソファに座った老人がクロノに声を掛けた。

「…彼はいつ頃？」

「はい。到着時刻は予定通りに。もう間もなくかと」

「そうか」

その台詞と同時に扉が開く。

現れたのは派手派手しい格好をした御剣。

いつぞやのホストスーツだ。

「ちょっ！御剣！君は何て格好をしているんだ！？」

「ふむ。私の一丁羅に何か問題でも？」

「大ありだ！こちらにいらっしゃる方々をどなたと心得る！」

「…老人会の爺婆か？」

「そんな訳がないだろうがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「何だいきなり大声を出して。少し落ち着け。血管切れるぞ」

「…もういい。こちらにいらっしゃるのは、「レオーネ・フィリス法務顧問相談役、ラルゴ・キール武装隊名誉元帥、ミゼット・クローベル本局統幕議長だろう？」…わかってて言っていたのか…」

クロノの背中が煤けて見える。少し弄り過ぎたか。

「で、その御三方がなぜこんな所に？

と言うか私は何故呼ばれたのだ？」
「それは、「それは私から言いましょう」クローベル本局統幕議長…わかりました」
「では、ご説明しましょう。
今、時空管理局には、未曾有の危機が迫っているのです」
「危機？」
「そう。とある予言によって示された、時空管理局体制の崩壊、それによる大混乱。
その口火として、ミッドチルダの地上本部が襲撃される可能性が高いのです。
それを避けるために、私達に力を貸して下さいませんか？」

黙って話を聞いていた御剣だが、ゆっくりと目蓋を開け、きっぱりと言い放った。

「…だ「場の雰囲気を読め」っち。いい加減先読みもされるか。
しかし、テンパって無いクロノなどつまらんな」
「どういう意味だそれは！？」
「そのままの意味だ。それに、冗談やおふざけで断るわけではない。
まず1つ、私が今現在対処している事に追われていると言う事。
2つ、こうして時空管理局のＴＯＰが出張ってきている事から、私に碌でも無い事を押し付けようとしていそうだから。
そしてなにより3つ目、その期間、どの程度の負担かは知らんが、確実に面倒臭い事になりそうだからな」
「1つ目はともかくその他はただの君の無精じゃないか」
「そうとも言う」
「それ以外言わん」
「私達が今他の事にかまけている余裕が無い事は、黒峰から聞いている筈だろう？」
「し、しかしだな…」

一通りクロノと会話した後、御剣はクローベル本局統幕議長の方を向く。

「…わかったよ。聞くだけは聞いてやろう。
ＴＯＰが出張っている、と言う事は少なくとも時空管理局も形振り構っていられる状態では無い、と言う事だしな」
「感謝します。
まず、貴方にお願いする事、それは新設部隊を率いてほしい、と言う事です」
「…は？」
「それに伴い、貴方の三階級特進、大隊指揮官、戦力統御の資格授与、部隊編成の全権を委任します」
「…なんとも…で？」
「報酬は前金でいつもの１０倍。成功報酬としては更にその３倍。
それでどうだろう？」

そう言いつつクロノが小切手を差し出してくる。

「…何やら、私が受ける事を前提に話が進んでいるのだが？」
「…この件に関しては、君に拒否権は無いと言っておこう。
こちらとしても…受けて貰わなければならないんだ！」

パチン

御剣が指を鳴らす。
と同時に、御剣以外の室内の人間の喉元へ、短刀が１本ずつ突き付けられる。
短刀は浮いているが、何かに支えられている様に、しっかりとその場に固定されている。

「…っ！」
「…いい加減私も怒るぞ、クロノ？
近頃私達を随分気易く呼び出すが…ここらで立場の再確認と行こうか？
私はこれからも、お前とは仲良くやっていきたいと思っているんだ。
こんな下らない事で、仲違いしたくはない」

御剣はにっこりと微笑む。だが、その目は全く笑っていない。
その目に射竦められたクロノは思わず生唾を飲み込む。

「…この次元世界の平和を保っているのは、間違いなく管理局だ。
それが崩壊すれば、間違い無く事件も激増する。
事件の経過次第ではミッドチルダが戦火の嵐に呑まれかねん。
それを見過ごすことに正義はあるのか！？
っ！？」

ほんの僅かだが、クロノの首筋に短刀が食い込む。
血はそれほど出ていないが、僅かでも誤れば頸動脈を傷つけかねない。

「世界の平和？そんな事、私にはどうでもいいよ。
今日の夕食の献立並みにどうでもいい。ミッドが滅ぼうが管理局が滅ぼうと知った事か。
いつぞやは気まぐれで受けてやったが、今回は事が面倒くさすぎる。
私には今、そこまでの時間が無い。
それに、私は正義の味方になった覚えなど無いが？」

心底呆れたように言う御剣。
そしてそのまま席を立つ。

「どうやら無駄足だった様だね。私はこの辺で失礼するよ？」
「待て！御剣！っ痛！」

クロノの喉からはかなりの量の血が流れている。
即、命に関わる訳ではないが、このまま放置すればまずい事になるだろう。

「無茶をするな。死にたいのか？」
「それで君が受けてくれるならね。この命、喜んで差し出そう」
「…全く…そういう言い方は卑怯じゃないか？」

パチン

再び御剣が指を鳴らすと、短刀は跡形も残らず消えた。
と同時にクロノの首の傷も消える。

「『朧（おぼろ）の短刀』だ。痛みや傷は幻覚だよ。
ま、死んだら肉体が精神のフィードバックを受けて、ショック死するが」
「…人が悪いな」
「まぁね。だが、まだ受けると決めた訳ではない。
と言うか、受ける気は更々無いよ。他を当たってくれ」
「待って下さい。」

口を開いたのはまたしてもクローベル本局統幕議長。
横の爺さん2人は置物か？

「現状、貴方以外の適任はいないのです。
圧倒的大多数を抑え込める戦略、並の管理局員では手も足も出ない

相手を軽く抑え込める戦術。
そして、咄嗟の判断力、魔竜と相対する胆力。
いずれを取っても、貴方以上の人材はこの管理局には…」
「もう良い」
「では？」

クローベル本局統幕議長の顔に喜色が宿る。
だが、御剣は全く異にも介さず続けた。

「勘違いするな。それ以上並べても無駄だからもう良い、と言ったのだ。
成程。少し前に妙に依頼が増えたのは、そういう魂胆か。
私の管理局内での知名度を上げ、新設部隊とやらの設置の為に利用した、と。
…クロノ、一つだけ聞こう。お前はこれが目的で私に依頼を持ってきたのか？」
「…僕がこの事を知ったのはつい先日だ。
それまでは他意など無かった。信じてくれ」
「そうか。それだけ聞ければ十分だ。私は忙しいんだ。そんな依頼を受けている余裕は無い。
ではさようなら、管理局の諸君」
「待て！御剣！」

クロノの制止に今一度振り向く御剣。

「…いい加減にしろよ？いかな私とて怒るぞ？」
「…これを見てくれ」

そういって投影スクリーンを開くクロノ。
そこにはまだ幼い頃のなのはが写っていた。

「…これは？」
「以前、なのはが墜ちた時の記録だ。
部外秘となっていたが、今回の依頼と関係する可能性が有るので開示を要求した」
「…で？今更こんな物を見せて、どうしようと言うのかね？」
「少し待ってくれ」

クロノの台詞と共に映像が早送りされる。
数分した後、ある一点で一時停止される。

「…何だ？こいつは？」
「…君にも分からないのか？」
「私が分かるのは、モノに関係する事だけだ。
ロストロギア絡みの事なら大体の事は分かるが、こいつはそうじゃない」
「そうか。我々時空管理局では、こいつを『影（シャドウ）』と呼んでいる」

そう言ってスクリーンに視線を向けるクロノ。
そこには…端的に言えば、黒いのっぺらぼうの男…
分かりやすく言えば、黒いペプシマンが居た。

「…『影（シャドウ）』か。こいつが私達への依頼の理由だと？」
「そうだ。こいつは一切の魔力攻撃を無効化…いや、吸収して増幅、撃ち返して来るらしい。
なのはのディバインバスターですら、無効化されたらしい」
「…魔法攻撃を無効化される以上、時空管理局に為す術は無し、と言った訳か」
「そう。だからこそ、君達に依頼をしたい。
こいつ等の解析、原因の捜索、そして破壊。これらが君に依頼する

事だ」
「…それならそうと言えば良いだろう。
私を部隊長にするなどと言うから、話が拗れただろうが」
「いや、部隊長にはなって貰う」
「…話がまったく掴めないのだが？」
「この『影（シャドウ）』と、君を部隊長にする事とはまた別件なんだ。
この事件と同時に発生する可能性が高い事件がもう一つ、それが時空管理局地上本部の壊滅だ」
「…それも予言か？」
「そうだ」

クロノの台詞を聞いてから、しばし考え込む様にする御剣。
溜息を1つ吐いたかと思えば、その手にはカードの束があった。

「少し待て。『一秘せし神秘解き明かす宝札（アルカナフォース）』」

そうクロノに告げると、御剣はカードを空中にばら撒く。
カードは床に落ちる事無く宙に浮き、ランダムに球を描くように回りだす。
その中から無造作に1枚取りだす御剣。
カードは独りでに纏まり、御剣の手の内に収まった。

「…良いだろう。その依頼、受けよう」
「本当か！？」
「あぁ。どうやらここで断っても、結局この事件に私達は巻き込まれる様だ」
「そうか…では後日、こちらから連絡をしよう」
「だが、部隊長になる件だけは断る。
人を率いて戦える程、私は器用ではないし、第一、一番の戦力を後ろに下げるメリットは無いだろう」

「だからと言って、君が人の命令を聞くたまでも無いだろう」
「当然だ」

腕を組み、胸を張って断言する御剣。

「…そこで即答されても困るんだが…」
「いつも通りの扱いで良いだろう。
私は誰の指揮下にも入らず、ワンマンアーミーを貫かせてもらう」
「…分かった。君を二階級特進とし、本局監査として参加して貰う。
戦闘時には自由にして貰って構わない」
「先程も思ったが、そんなにポンポン階級とは上がる物なのか？」
「君達の場合は特例だよ。
もし管理局に在籍して居れば、君たちはとっくに一佐になっていても
もおかしくは無いんだ」
「そうか。しかし、本局監査？時空管理局本局が主導では無いのか
？」

先程の会話で、ふと気になった所を詰める。

「あぁ。今回新設される部隊は表向きは古代遺物管理部　機動六課
として発足される。
ただ、今回の事件はミッドで起きる可能性が高い。
だからミッドチルダに部隊を置く必要があってね。故に、陸の影響
の強い部隊にならざるを得ない。
君が部隊長を断った以上、他に適任者を探さなくてはな」
「そうか。まぁ頑張れ。細かい所はそちらに任せよう」

そう言って御剣は部屋を出る。
その手には1枚のカード。先程の物だ。そのカードをじっと見つめ
る御剣。

自身がこの事件に関わった場合、その結果を占ったものだ。

「…縁起でも無いな」

そのカードには黒いローブに大鎌を持った骸骨が描かれている。

それはタロットカードの??、『死神』のカードだった。

## 7章－6　影（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：7章6話です。
日常編はこれで終了。
次回は8章、ＳｔＳ本編です。

Bランク試験を受けるスバルとティアナ。
その前に現れたのは…
次回、『始動』。
お楽しみに。

『朧（おぼろ）の短刀』：対人宝具ランクＤ　レンジ3　最大補足１０人

とある忍者の里に伝わる、拷問用の短刀。
この短刀で傷つけられた傷は全て幻覚であり、どれだけ相手を傷つけようが、刀身を鞘に納めればその傷は元に戻る。
１０本セット。

『一秘せし神秘解き明かす宝札（アルカナフォース）』：占術宝具ランクＡ＋　レンジ９９　最大補足９９９人

大アルカナ２２枚、小アルカナ５６枚からなるカードの束。
とある事柄に関して念じながらカードを引けば、必ずその未来に関係のあるカードが示される。
だが、詳細な説明は一切無い為、カードを引いた当人の解釈次第になるのが欠点。

# 8章ー1　始動

２０１５年　４月　ミッドチルダ北部　廃棄都市区画　廃ビル屋上

「ふっ！！」

息を鋭く吐き出し、立て続けに拳を繰り出す。
見えない敵へ、的確に拳を叩きこむイメージ。
とどめにハイキックをかまし、その場でステップ。
体調は良好。万全とも言えた。

「スバル。あんまり暴れてると、試験中にそのオンボロローラーが逝っちゃうわよ」
「えぇ～ティア～あんまり嫌なこと言わないでよ～ちゃんと油も注してきた！」

そう言いつつも、不安げにローラーブーツの感触を確かめるスバル。
それを横目で見つつ、ティアナは自らのデバイス、イタクァとクトゥグアの点検を済ませ、専用の弾丸（カートリッジ）を込めていく。
一通りの確認が済んだ所で時計を確認すれば、時刻は丁度試験開始時刻だった。
ブザーが鳴ると同時に、空中に投影スクリーンが浮かび上がる。

「（おはよう。あぁ、挨拶は返さずとも良いよ。さて、魔導師試験受験者二名。そろっているかな？）」
「「はい！！」」

スクリーンを見据え返事を返す、スバルとティアナ。
スクリーンに映し出されているのは２０代前半の男性だった。

「（では、本人確認を行う。時空管理局陸士３８６部隊所属、局員ＩＤ：ＪＭＢ０４７３２１－０４６５５９８７２　スバル・ナカジマ二等陸士）」
「はいっ！」
『同じく陸士３８６部隊所属、局員ＩＤ：ＪＭＢ０４７３２１－０４６５５９８６４　ティアナ・Ｌ・御剣二等陸士）」
「はい」

それぞれ諸所の確認に力強く頷くスバルとティアナ。
スバルとティアナが所有する、魔導師ランク陸戦Ｃランクから陸戦Ｂランクへの昇格試験。
実戦要素が介入する、エースへの登竜門というべき試験だ。
ティアナはこの試験に気負う事など無かったが、その相棒は若干緊張気味だ。
スクリーンの男性が名乗っているが、そんな事はどうでもいい。

「（…スバル？）」
「（ふぇっ！？な、何？どうしたのティア？今は試験内容の確認だよ！？）」
「（良いから聞きなさい。
緊張すると視野が狭まるのは、アンタの悪い癖よ。そこだけ注意しなさい）」
「（え？……うん！ありがとう！気を付けるよ！）」

世話の焼ける相棒へ檄を飛ばし、再度スクリーンを見つめる。
スクリーンでは、丁度試験内容の説明が始まった所だった。

「…以上が今回の試験の流れになる。
では、質問が有れば受け付ける。何かあれば遠慮なく聞く様に。
あぁ、当然のことながら、試験に関する質問は一切受け付けないので、そのつもりで」
「ありません」
「同じく！」
「よろしい。ではスタートまであと少しだ。ゴール地点で会おう。
貴君等の健闘を祈る」

そう試験官は告げ、敬礼と共に通信は切れた。
と同時に表示されるシグナルランプ。
それを見た2人はすぐさま身構える。
徐々に消えるシグナル。
最後の1つが消え、Ｓｔａｒｔの文字が表示されると同時に2人は走り出した。
道のあちこちに置かれたターゲットを墜としながら、最初のポイントであるビルまでたどり着く。

「スバル！しっかり掴まってなさい！」
「オッケー、ティア！」

ティアナの掛け声に合わせるように答えるスバル。

「『アトラック＝ナチャ』！」

クトゥグアの下部に設置されたレーザーポインタ部から伸びるオレンジの糸。
それはビルの一角へ狙い違わず命中し、接地面に魔法陣が展開され

た。

「ビルの中は任せたわよ！」

「了解！」

振り子の様に弧を描き、窓に突っ込むスバル。

それを見届けると、ティアナはアトラック＝ナチャを縮め、屋上に登る。

「さて、見せ場ってわけね」

眼下にはビルの窓から覗くターゲット群。

ダミーターゲットも混ざっているようだ。

「スバルが出て来るまで凡そ2分って所かしら…ま、何とかしましょうか。」

そう呟くと、ティアナは焦点を絞るのを止めた。

即座に脳裏に浮かび上がる周囲の地図とその上に現れるターゲット群の配置。

これぞ、御剣との訓練の成果、『天眼（てんがん）』だ。

それはその名の通り、まるで周囲の状況を上空から俯瞰しているかのように知覚する、超認識能力。

武術における秘伝、『観の目』と並列思考を組み合わせる事で、膨大な情報量を処理。

通常の視界と合わせ、非常に広い範囲に対応できるのだ。

「１０…２０…２３ね。さぁ、いくわよ」

そう呟くと両手の愛銃を構える。

静止したのは一瞬。すぐさま銃撃が始まる。
まるで踊るかのように体勢を入れ替え、次々とターゲットを打ち抜いて行くティアナ。
次々に吐き出されていくカートリッジの空薬莢。
ビルの屋上を所狭しと駆け巡り、きっちり２３発撃ち終わった時には、屋上から見える位置のターゲットは全て破壊されていた。
その間凡そ１分。しばし立ち止り、カートリッジを込め直した後、ティアナはビルから飛び降りた。

「スバル！」
「ティア！」

地上すれすれで、ビルから飛び出て来たスバルに受け止められ、そのまま着地する。
軋みを上げるローラーブーツ。それでも無事、２人分の着地の衝撃を受け止め走り出す。

「良いタイムだね！」
「そうね。５分掛かって無いわ。この調子で気を抜かずに行くわよ？」
「了解！」

次々と襲い来るオートスフィアを撃ち落とし、次に２人が辿り付いたのは多重構造になったハイウェイだった。
すぐさま最下層部のスフィアとターゲットを破壊し、次の階層にスバルが向かおうとする。

「待ちなさいスバル。ショートカットするわよ」
「え？この天井の穴の事？

でも、穴の周りはオートスフィアの反応だらけだよ？」
「問題無いわ。目と耳塞いで口を開けて、足を開いて立ってなさい」
「まさか…アレやる気？」
「そのまさかよ。イタクァ、弾種選択（バレット・セレクト）。炸裂弾（アルター）」
「Ｙｅｓ，ｍｙ　ｌａｄｙ」

イタクァはカートリッジを2発ロードする。
そして銃口に展開される魔法陣。そのままティアナは銃口を天井の穴に向ける。

「時限信管セット０．５秒。発射」
「Ｆｉｒｅ」

そして放たれる魔弾。
そして瞬時に上階で響く炸裂音。
空気が震え、老朽化したハイウェイの柱に罅が入る。
煙もまだ残る上階へスバルとティアナが上がれば、そこには破壊されたターゲットが転がっていた。

「…ダミーは無いみたいね」
「え゛!?確認してたから撃ったんじゃないの!?もし破壊してたらどうするつもりだったの!?」
「その時はその時よ。さ、残りもいないみたいだし、さっさと次行くわよ」
「相変わらず心臓に毛が生えてるよね。ティアは。きっと剛毛がもうボウボウだよ」
「スバル？おつむの風通し良くして欲しかったら、何時でも言いなさい？」
「え、遠慮します！」

軽口を叩きながら最上部一歩手前まで移動する。

「さて、ここは流石にきついわね…大型スフィアが一体だけらしいけど…」

「正面突破は、無理そうだね」

「今までそうだったんだから、多分大型スフィアも射撃強化型でしょうね。

定石通りなら高所に配置して、狙い撃ってくるわ。

かわしながら進める自信ある？」

「魔力弾の速度と正確性しだいかなぁ…ちょっと厳しいかも」

「そうね…スバル。アンタ、私に命預ける気、有る？」

「うん！」

結構深刻な質問をしたのにも関わらず、あっさりと頷く相方に、ティアナは呆れた様な表情をする。

「いや、命ってのは大げさだけど、失敗したら私はともかく、アンタは確実に試験に落ちるわよ？」

「大丈夫！あたし、ティアの事信じてるから！」

そう言って、真っ直ぐティアナの目を見返すスバル。

その視線を受け、諦めた様に溜息を吐くティアナ。

「じゃ、説明するからよく聞きなさい」

「うん！」

数分の作戦会議の後、最上部に姿を現す2人。

すぐさまスバルは屈み、クラウチングスタートの体勢をとる。

「行くわよ！」
「うん！」

スバルを先頭に2人が走り出したと同時に、遠くのビルから魔力弾が飛んでくる。
咄嗟に頭を下げてかわすスバル。
後方で炸裂する魔力弾。その余波だけで十分威力は伝わった。
もし直撃すれば、非殺傷設定と言えど、ただでは済まないだろう。
だが、これで大型スフィアの位置は分かった。
襲い来る魔力弾をいなしかわし、遂に2人は大型スフィアの居る廃ビルの近くまでたどり着く。

「ティア！」
「分かってるわ。先に行ってなさい」

相棒が立ち止ってチャージに入ったのを見て、スバルは意志を固める。
ここからは前衛（フロントアタッカー）の本領発揮だ。

「『ウィングロード』！！！」

スバル自身は飛ぶことは叶わない。
ただ浮くだけなら出来るが、高速で飛行する為に必要な並列処理が苦手なのだ。
だが、自らの拳を狙った相手に届かせるための手段なら持っていた。
スバルが右拳を地面に叩き付けると同時に、青白い帯状の魔法陣がビルのある階へ一直線に伸びていく。

「スバル。道は私が開いてあげる。アンタは只真っ直ぐ進みなさい」
「わかった！」

「行って来なさい！イタクァ！『ファントム・ブレイザー』！！！」

ティアナの左手のイタクァからオレンジの閃光が迸る。
それはビルの壁面に直撃し、大穴を開けた。
しかし、その穴からたちまち大量の魔力弾が襲い来る。

「甘い！クトゥグア！『バレットシャワー』！！！」

右手のクトゥグアからは1発の魔法弾が放たれる。
当然、只の魔法弾である筈も無い。
弾丸はスバルの肩の上を通り過ぎ、スバルの前方へ向かって破裂した。
破裂と同時に、大量の魔力弾がスバルの前を覆い尽くす。
これによって、向かって来る大型スフィアの魔力弾はあらかた相殺された。
ビルに空いた穴から中に飛び込むスバル。
そこには悠然と浮かぶ大型スフィアが有った。

「はぁあああああ！！！」

渾身の一撃。
しかし、大型スフィアもそれをバリアで防ぐ。
拮抗したのは数瞬。
スバルの拳がバリアを貫いた。大型スフィアも必死に抵抗して来る。
流石のスバルも拳を振り切ったままの体勢では、放たれた魔力弾をかわす事は叶わず、咄嗟に受け止め後退する。

「こんのぉぉおおおおお！！！」

それでもめげずに前へ進むスバル。

拳を握り、地を踏みしめる。

「一撃！」

掛け声と共に、右腕に渾身の魔力と力を込める。
カートリッジが全弾消費され、リボルバー式のマガジンが廃莢された。

「必倒ぉ！！！」

スバルの左手に、拳サイズのスフィアが形成された。スフィアの周りを環状魔法陣が３重に取り巻く。

「ベオウルフ・ゾディアック…」

そしてスバルの背に展開される、青い３対６枚の翼。
それと同時にスバルのローラーブーツが加速する。
さながら地上を飛ぶように加速し、スバルは一瞬で大型スフィアの眼前に現れた。

「…一気通貫（アクセラレーション）！！！」

スバルの拳が、大型スフィアのボディにめり込む。
と同時に、反対側の装甲板が弾け飛び、内部の機械をぶちまけた。
暫くバチバチと音がしていたが、それも止んだかと思うと、大型スフィアは爆散した。

「…終わったみたいね」

その音をハイウェイの上から聞いていたティアナは、少し気を抜

く。
これで後はゴールを目指すだけだ。残り時間も十分にある。
そう思いゴールの方を向く…と同時に自身の頭上が陰ったのに気付いた。

「え？」

不審に思い上を見上げれば、何かがこちらに降って来る。

「ティア！」

相棒の声に我に返り、咄嗟に横っ跳びに避ける。
と同時にティアナの立っていた場所に、何かがぶつかった。
その衝撃に耐え切れず、ハイウェイが大きく震える。
ソレの着地地点にはクモの巣状に罅が入り、衝撃の凄まじさを知らしめていた。
ふと、ソレが動く。
近くでよく見れば、それは人の形をしていた。
全身は黒い西洋鎧で覆われ、背中には巨大な剣を背負っていた。
否。剣と呼ぶにも生ぬるい。
ソレ自体が２ｍは有ろうかと言う巨躯だと言うのに、その剣もソレの身の丈とほぼ同じ大きさだった。

「どっせぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇい！！」

その異様さにティアナが呆気に取られていると、スバルがその異形に躍り懸かり、横合いから蹴りつけた。
が、何事も無かったかの様に身じろぎ一つしない異形の騎士。

「この馬鹿！スバル！なんて無茶すんのよ！

相手の特性も不明なまま突っ込む馬鹿が何処に居るのよ！」
「でもティア！そんな事言ってられ無さそうだよ！？
本気で蹴ったのに全然効いて無いもん！アレ！」

確かにそうだ。
ビルの中程からの落下の勢いも利用した一撃を受けて尚、アレは立っている。
詰まり、こいつには生半可な攻撃は通用しないと言う事。

「スバル！フォーメーションD！一気に！…？」

腹を括り、異常を察した試験官の到着まで時間を稼ぐ気で、スバルに指示を出していたティアナの眼前では、不可解な事が起きていた。
その対象が消えていたのである。
辺りを見回し、何も居ない事を確かめる。

「…どう言う事？」
「…分からないわ。２人揃って同じ幻覚を見たって訳じゃなさそうね」

その証拠に、ハイウェイに入った罅はそのままだ。

「…行きましょう。あれも試験の一環なのかもしれないわ。
ここで話していてもしょうがないし、ゴールを目指しましょう」
「う、うん」

結論からいえば、試験官はこの事態に何も気付いていなかった。
監視用のサーチャーには何も映っておらず、行き成りハイウェイに

罅が入っている。
この件は上層部に回される事となり、2人は別室で合否判定を待つよう言われた。
そして十数分後、戻ってきた試験官の後ろに、2人は見知った顔を見た。

「やぁ、Bランク合格おめでとう」
「ちょっと御剣さん！こう言う事はもっと溜めてからですね」
「別に良いだろう。それで合否が変わる訳で無し」

そこに居たのはティアナの義理の父にして、スバルの命の恩人兼憧れの人、御剣だった。

「…何でここに居る訳？
ていうか何でその制服着てるの？」
「あえて2番目の質問から答えるならば、今度の依頼は長期の物でね。
管理局内をうろつくならこれを着ろ、とクロノに言われたからさ。
そして、ここに居る理由はその依頼に関係する」
「仁達の依頼が？私達に何かやらせる気？」
「単刀直入に言おう。君達2人を新部隊へ勧誘しに来た」
「新部隊？」
「そう。時空管理局本局、古代遺物管理部、機動六課！」

# 8章－1　始動（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：8章1話です。

遂に…というべきか…皆さまの御蔭で３００万ＰＶを突破致しました。

御礼に何か番外編でも書こうと思います。

その事でアンケートでも。

1．御剣とはやてが恋人ルート
2．黒峰メイン話
3．原口メイン話
4．いつもの短編集
5．その他

5．のその他の場合は具体的にお願いいたします。

5は多分一番少なくなるでしょうが、面白そうだと作者が思えば別に書くかもしれません。

ご応募待ってます。

機動六課に集う者達。

其々の思惑を胸に今、動き出す。

次回『集結』

お楽しみに。

# 8章―2　集結

２０１５　４月２９日　ミッドチルダ中央区画　機動六課隊舎

「では、部隊発足に伴い、機動六課課長及び部隊長、ゲンヤ・ナカジマ陸上二佐より、ご挨拶を頂きたいと思います。
では、部隊長」
「おう」

壇上に立っているのは、元陸士１０８部隊部隊長ゲンヤ・ナカジマ陸上二佐だ。
以前、スバルが家に遊びに来た際、１０８の方がゴタゴタしていたのは、この為だったらしい。
私が部隊長に就任した受けた場合も、陸士１０８部隊は機動六課に吸収される事になっていたらしい。
私が断ったので、そのまま部隊長はナカジマ二佐になったとの事だ。
ちなみに、当然の様にギンガはいる。
というか、原作キャラで居ないのは、はやてとヴォルケンズ位なものだ。
なのは、フェイト、そしてフォワード陣、ヘリパイロットも見た事のある顔だ。
交代部隊やバックスは殆ど１０８部隊のままらしい。
どちらかと言えば、１０８部隊に増員して機動六課の体を成したと言った方が近いだろう。
私達の立ち位置は、本来クロノが行う機動六課の監査を代行する、という名目で派遣される事になった。

全員三佐待遇。現場に出た場合、臨時で指揮を執る権限も持っている。
まぁ、私は使う気は無いが。
「では続きまして、監査代行のお三方を代表して、御剣　仁特別提督補佐にお言葉を頂きます。
では、御剣特別提督補佐。お願いします」
「あぁ」

ちなみに、今回の昇進で私達の役職は変わっている。
特別執務官補佐から、特別提督補佐にジョブチェンジと言う訳だ。
どうでもいいが、上の連中は特別と頭に付ければそれでいいと思ってないか？

「ただいまご紹介に預かりました、御剣です。
ここにいる2人と共に、この機動六課の監査として派遣されてきました。
ただ、後見人たるクロノ提督からの依頼ですので、機動六課に不利になる報告をする気は有りません。
まぁ、隠し様の無い事さえしなければ、私達が何かを報告する事は有りませんのでご心配なく」

そんなこんなで恙無く式典も終わった。
私の挨拶のあとに若干変な空気になっていたが。
フォワード陣が招集されている。恐らくは行き成り訓練だろう。
フェイトとナカジマ二佐は、これから地上本部へ行くそうだ。
さて、監査とは言え、月1回の定例報告以外は殆どする事は無い。
早い話が暇なのだ。

「御剣ぃ、どうせならティア達の訓練見に行かねぇか？」
「…そうだな。

ここに居てもする事は無いし。他の人の邪魔にならない様にするか」
「いや、僕らって一応三佐だよね？そんな謙らなくても…」
「必死で働いてる蟻の横に、遊んでばかりのキリギリスが居たら不愉快だろう？
そう言う事さ」
「ま、あちこち見て回るのが監査って事で」

Ｓｉｄｅティアナ

いよいよ始まった機動六課。
特定ロストロギアの捜索、対応を目的として作られた部隊。
ここで１年頑張れば、自分の夢である執務官までの最短距離になる！

「…そう思っていた時期が私にもありました…」
「え？ティア、どうしたの？急に」
「何でも無いわ。自分の迂闊さに呆れかえってるだけ」

仁の淀みない説明に、うっかり納得してしまったのが運のつきだ。
あの３人が絡んでいる時点で、碌でも無い事が起こるに決まっている。
と言うか、この部隊は正直言って異常だ。過剰と言っても良い。
『エース・オブ・エース』高町　なのは一等空尉に加えてフェイト・Ｔ・ハラオウン執務官。
この二人が揃っていると言うだけでも充分だろうに、そこへ私達フォワード陣。
まぁ、これは置いておいても、陸戦Ａランクのギンガ・ナカジマ陸曹。

捜査官としては、かなり有名だと聞いている。
極めつけは、わざわざあの3人を監査という立場で呼んでいる事。
監査はその任務の性質上、部隊には正式には配属されていない。
故に、保有魔導師制限も適用されず、全力で行動できる訳だ。
まぁ、どうやったらあの3人を縛れるのかは知らないけれど。

「（皆、聞こえる？）」

唐突に届くなのはさんからの念話。

「「「「はい！」」」」
「（本局監査の方もいらしてるから、しっかりね）」
「（別段、気負う必要は無いがな）」
「（そうそう。いつも通りで良いよ。僕等はそれを報告するだけだから）」
「（原口、それは人によってはプレッシャーになるぞ？）」

続いて聞こえてくるいつも通りの会話。
まぁ、私はどうって事無いんだけど…他の3人が目に見えて委縮している。

「が、ががが頑張ろうね！ティア」
「が、頑張ります！」
「頑張るであります！」
「はい、そこまで。変に気負わないの」
「で、でもティア…」
「何を気負う事が有るのよ？私達は新人で、今は教えてもらう立場。なら私達のする事は、間違えない事じゃなくて、間違えた事から学び、同じ間違いを犯さない事。
あと、そこのチビッ子二人！」

「「は、はい！」」
「堅っ苦しい。
さっき会ったばかりで慣れないのも分かるけど、これから1年間一緒にやって行く仲間でしょ？
もう少しフランクになりなさい」
「は、はい！」

いきなり言われても無理だったか、と苦笑しつつも前に向き直る。
いよいよ機動六課での初の訓練だ。

Ｓｉｄｅティアナ　Ｆｉｎ

「（じゃぁ、早速ターゲットを出して行くよ。
まずは軽く8体から）」

なのはの指示に合わせて、シャーリーの指がコンソールの上をリズミカルに舞う。

「（私達の仕事は、捜索指定ロストロギアの保守管理。
その目的の為に、私達が戦う事になる相手が…これ！）」

一旦区切られたなのはの言葉と同時に、フォワード陣の前に魔法陣が8つ展開される。
光る魔法陣の中から現れたのは、カプセルを縦にした様な形の機械だった。

「（自律行動型の魔導機械。通称『ガジェット・ドローン』。
これは、近づくと攻撃して来るタイプね。攻撃は結構鋭いよ？）」

シャーリーの補足説明が入る。

「では、第一回模擬戦訓練。
ミッション目的、逃走するターゲットを破壊、若しくは捕獲。１５分以内。」
「「「はい！」」」
「それでは！」
「ミッション」
「「スタート！」」」

ガンガンガンガンガンガンガンガキュン

シャーリーとなのはの号令と共に逃げだしたガジェット達が、一斉に吹き飛ぶ。
スバルが横の相棒に目をやれば、構えたクトゥグアから白煙が上がっていた。
起き上ったガジェット達は、一目散に逃げ出した。
それを追いもせず、ティアナは他の３人に向き直る

「全員聞いて。試しに魔力弾を撃ったけど、防がれたか何かしたみたいね。
バリア…いえ、フィールドね。ＡＭＦ（アンチ・マギリンク・フィールド）が使われてるわ。
魔力結合が解除されるから、注意しなさい。スバルはウィングロード使用禁止。
エリオはスバルと組んで２対１になる様に１体ずつ倒して行きなさい。
え～と、キャロだっけ？ブースト魔法が使えるのよね？私の弾丸の威力強化お願い。」
「う、うん！」

「「はい！」」
「じゃ、行くわよ！」

「…凄いですね。あのティアナって子。
行き成り攻撃したかと思えば、その後は冷静に相手の事を判断してる。
当然の様にリーダーになってますね」
「しかもＡＭＦの事まで。これも訓練の賜物かな？御剣さん？」
「まぁね。ＡＭＦについては原口の担当だがな。
ティアの集束技術は高ＡＭＦ下で鍛えられた物だ。
生半可な物では完全に防ぐ事は出来ん。
先程も貫通こそしなかったものの、内部へダメージは与えているようだ。
その所為でガジェット共の動きも鈍いし、そう時間は掛かるまい。
５分も有れば片が付くよ。」

果たして御剣の読み通り、フォワードの４人は初めての訓練だと言うのに、５分足らずで８体のガジェットを破壊した。
その後、夜まで訓練は続き、解散時には全員バテていた。
一番マシなのはティアナだったが、それでも疲労の色は隠せていない。
残りの３人、特にエリオとキャロについては疲れて眠ってしまっていた。
何とかエリオを男子寮まで運び、寮監に引き渡して、キャロを部屋まで連れて行って寝かせた時には、既に１０時を回っていた。

「流石にきついねぇ～…もうクタクタだよ…」
「そうね。でも、かなり濃度の高い訓練だったわ。
今日やったのは基礎固めだから、多分今後はもっと厳しくなるわね。

」
「うぅぅ…覚悟はしてたつもりだったけど、甘かったなぁ…」
「何？もう弱音？」
「そうじゃないけど…うん。頑張るよ」
「じゃぁ、明日の為にさっさと寝ましょ。明日も早いんだから」
「うん」

午後１１：００　海浜部

「なのは」
「あれ？御剣さん？ちょっと待って下さいね。今これ終わらせちゃいますから」
「いや、急がずとも良い。ほれ。もうすぐ5月とはいえ、夜はまだ冷える。差し入れだ」
「ありがとうございます」

一人コンソールを弄って、明日の訓練のスケジュールを考えていたなのはの元に、御剣がやってきた。
御剣は手に持ったコーヒーを差し出し、なのはの横に立つ。

「で？新人達はどうだ？」
「ん～伸び代は結構ありそうですね。
スバルもエリオもキャロも。ただ、ティアナが…」
「ティアがどうかしたのか？」
「方向性が今一つ分からなくて。
ポジション的には中衛（センターガード）なんですけど、それだとあの突破力を生かしきれない気がするし、かといって遊撃（ガードウィング）に回すと指揮が執り辛くなりそうで」
「別にその括りに入れる事は無いだろう。

中衛が移動してはいけないってわけでもないし。移動しつつ全体の指揮を執ればいいだろう。
まぁ、ティアの負担が増えるが。いずれにせよ個人技能の強化はまだ先の話だろう？
なら暫くは中衛としての訓練で良いと思うが」
「それはそうですけど…そうですね。
ありがとうございました」

そう言って一礼するなのは。
それを苦笑しつつ受け取る御剣。

「どういたしまして。私はもう戻るがどうする？なんなら送って行くが？」
「大丈夫ですよ。もうすぐ終わりますし。
それに、六課の敷地内で変質者も無いでしょう」
「まぁそうだな。では。あまり根を詰め過ぎるなよ？」
「分かってますよ。御剣さんに教わった事は、ちゃんと守ってますから」
「そうか。また明日な」
「はい。また明日」

# 8章－2　集結（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：8章2話です。

前回行ったアンケートですが

1．御剣とはやてが恋人ルート…2票
2．黒峰メイン話…0票
3．原口メイン話…2票
4．いつもの短編集…0
5．その他…2票

となりました。
アンケートに答えて頂いた方々には、この場を借りて御礼申し上げます。

1と3が横並びですので、この際ですから両方書きます。
5につきましては、ｍｐ７ａ１ｍ９様のリクエストにお答えしたいと思います。

今後とも、拙作を宜しくお願い致します。

厳しい訓練の中でも、穏やかに過ぎる日常。
それを引き裂く警報の音。
次回『ファースト・アラート』
お楽しみに。

# 8章－3　ファースト・アラート

２０１５年５月　ミッドチルダ中央区画　機動六課　訓練用シュミレーター

「はい、全員注目」

一通りの基礎訓練を終えた所で、なのはが新人たちに声を掛ける。
全員息こそ切らせているものの、まだ体力は残っているようだ。

「じゃあ、本日の早朝訓練、最後は弾丸回避訓練（シュートイベーション）をするよ。
私の攻撃を５分間かわし続けるか、私に一撃入れたらクリア。
誰か一人でも被弾したら最初からやり直し。出来るかな？」

「「「「はい！」」」」

「そう。じゃあ…レディ…ゴー！」

新人たちが訓練にいそしんでいるのと同時刻。
機動六課内のデバイスルームで、シャーリーと御剣が向かい合っていた。

「…難しい、か？」

「そうですね…流石にこれ以上は」

「やはり、マリエルを呼ばなければ無理か…」

「すみません。私の力が足りないばっかりに」

「いや、シャーリーはよくやってくれているよ。
ただ、私の要求が高過ぎた、それだけだ」

「それに答えられないのが、私としては不甲斐ないですね…」

なにやらモニターを覗きこみ、相談をしている様だ。
モニターには、何かの設計図らしきものが写っている。
ピピピピピピピピ

と、その時、シャーリーの端末に通信が入る。
開いていたモニターをいったん閉じて回線を開くと、それはなのはからだった

「（シャーリー？フォワードの皆のデバイス、もう出来てる？）」
「はい！ばっちりですよ！でもどうしたんですか？急に？」
「（え～とね。スバルのローラーブーツと、ティアナのクトゥグアがちょっと）」
「ちょっとどうしたんですか？」
「（ローラーブーツは火を噴いちゃったし、クトゥグアの方は部品が摩耗しちゃってるみたいなんだ。
訓練も次の段階に進めようと思ってたし、ちょうどいいからデバイスも新しくしようと思って）」
「そうですか。じゃぁお待ちしてますんで、こちらに来て下さい」
「うん。じゃぁ後でね」

そうしてモニターを閉じたシャーリーは御剣の方に向き直る。

「そう言う訳で、御所望の物はマリエル先輩に依頼して下さい。」
「わかった。新人たちにデバイスを渡すのに、私も立ち会って良いかな？」
「どうぞどうぞ。御剣さんも協力者ですから」
「ありがとう。…協力者と言うよりは共犯者だがね。私達は…」
「…そうとも言いますね」

暫くして、デバイスルームの扉が開くと、なのは達が入ってきた。
「あれ？御剣さん、どうしてここに？」
「新人たちに、新しいデバイスが渡されると聞いてね。
私も開発には一枚噛んでいるから、一応ね」
「み、御剣さんが手を加えたんですか！？」
「無茶な事はしてないよ。精々が少し口と手を出しただけさ」
「…シャーリー？」
「見てのお楽しみです。
それでは！どうぞご覧ください！」

シャーリーが指を鳴らすと同時に、デバイスルームの中央にあるメンテ用の台に明かりが灯る。
そこには、待機状態の４機のデバイスが並んでいた。

「左から順に、スバル専用のデバイス『マッハキャリバー』、ティアナ専用のデバイス『イタクァ＆クトゥグア　ＭＫ＝２』、エリオ専用のデバイス『ストラーダ』、キャロ専用のデバイス『ケリュケイオン』。
皆、手に取って見て。」

シャーリーに促され、各々がデバイスを手に取って見る。
マッハキャリバー以下、待機状態は原作と変わらない。
イタクァ＆クトゥグア　ＭＫ＝２の待機状態は、枠の中に「」の字に銃が向かい合ったデザインのカードだ。

「あ、エリオとキャロは今付けてるデバイスを渡して？ＡＩを写すから」
「「はい！」」

チビッ子組がシャーリーに自らのデバイスを渡しているのを横目に見つつ、御剣はティアナに目をやる。
先程からこちらの視線を避けるようにしているのだ。
御剣は1つ溜息を吐くと、ティアナの前に歩み寄る。

「何やってんだ？」
「…！」
「さっきからこちらをチラチラ見ては視線を逸らして。言いたい事でも有るのか？」
「…うん。仁達から貰ったクトゥグア、壊しちゃったから。謝ろうと思って」
「ふん。そんな事を気にしていたのか？物はいつか壊れる。遅かれ早かれな。ならば、お前が今する事は私に謝る事ではなく、今まで付き合ってくれたそいつらを労ってやれ」
「…うん」

そう言いつつティアナの頭を撫でてやる。
顔を赤くしつつも、されるままにしているティアナ。

「え～と、説明しても良いですか？」

その空気を破ったのはシャーリー。
申し訳なさそうにしつつもこちらに言って来る。

「あぁ。すまない。
では宜しく頼むよ、シャーリー」
「はい。
まず最初に言っておく事は、その子たちには何段階かリミッターが掛かってるの。

だから、いきなりとんでもない性能とかは出ないわ」
「リミッターの解除は私やフェイト隊長、それとシャーリーが相談して、その都度解除していくようになるね。」
「素人が名刀を持っても、しょうがないからな。丁度、一緒にレベルアップしていく様な物だ。
こう言っては何だが、正直いきなりリミッター無しで使っても、デバイスに振り回されて終わり。
まずは慣れる事だ」
「…御剣さん？本当に無茶な事はしてませんか？」
「していないとも。なぁ、シャーリー」

ジト目で見て来るなのはから目を逸らし、シャーリーに同意を求める御剣。

「そう…ですね。無茶”は”してません」
「…”は”？」
「追及はその辺にして、次の話に移るぞ？
これは、私達監査に関係する事なので言っておく。
私達3人には、君達への…なのはとフェイトも含めてだが、現場での指揮権限を持っている。
だが、私達はこの指揮権限を高町なのは一等空尉、及びフェイト・T・ハラオウン執務官に委譲する。
これは、ナカジマ・ゲンヤ部隊長の承認も得ている事だ。
まぁ…薄々感づいている者もいる事だろうが、私達がこの部隊に派遣されてきたのには理由がある。
ここで全てを明かす事は出来ないが、権限委譲もその任務の為と理解して欲しい。
何か質問は？」

御剣の促しにおずおずと手を上げたのはスバルだった。

「では、スバル。何だね？」
「あのぅ…それを今仰る理由を窺ってもよろしいでしょうか？」
「ふむ。理由か。それはな…」

ヴィーーーーッ　ヴィーーーーッ

「…こういうことだ」
「このアラートって！？」
「1級警戒態勢！？」

鳴り響くアラート。
デバイスルーム内部のモニターに、ナカジマ部隊長の姿が写った。
背後を見ればカリムもいる。やはりこのタイミングでリニアの暴走だったようだ。
なのはとフェイトがナカジマ部隊長と話している間に、黒峰と原口もやってきた。
…だが、気にかかる事が1つ。
現場の映像を見る限り、明らかに原作よりもガジェットの数が多い。
弐型は空を覆い、リニアは壱型のアームで覆われてしまっている。
…スカリエッティめ。私達が機動六課に居る事を知ったな？まぁ、隠す気も無かったが。

「ナカジマ部隊長。私達も出ます。手は多い方が良いでしょう。なのはとフェイト、そして黒峰は作戦空域の確保を。私とフォワード陣はリニアへ」
「頼む。俺もすぐそっちもどるから、それまでに片付けておいてくれ」
「大船に乗った心算で居て下さい。部隊長が戻る頃には、事後処理だけですから。

機動六課（ここ）には原口を残します。原口。頼んだぞ？」
「うん。分かった」
「さて、では機動六課初出動と行こうか」

## 8章ー3　ファースト・アラート（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：8章3話です。
御剣が出張り過ぎですね。いつもの事ですが。
次回は黒峰の話になります。

作戦空域の確保の為出撃したなのは、フェイト、黒峰。
待ち受けるのは無数のガジェット弐型。
3人の実力ならば何と言う事は無い相手だった筈が…
次回『星と雷と黒鬼』
お楽しみに。

# 8章－4　星と雷と黒鬼

作戦空域周辺ヘリ内部

後部メインハッチが開かれ、黒峰が身を乗り出した所で振り返る。

「じゃ、行って来る」
「あぁ、さっさと片付けて合流しろ」
「何だ？そんなにてこずりそうなら、代わってやろうか？」
「ぬかせ。気を付けろよ？」
「楽勝さ。ただのガジェットだろ？」
「…今の所は、な」

今まで軽口をたたき合っていた御剣の顔が僅かに曇る。

「あん？気になる言い方すんなよ。言いたい事ははっきり言え。直感持ちのお前が言うと、何か怖いんだよ」
「いや、ただ漠然と嫌な予感がするだけだ。説明はし辛いが…いずれにせよ、あまり原作知識に頼るな。既にガジェットの数が桁違いだしな」

事実、ヘリの前方はガジェットの所為で空が若干暗い。
アレを掃討し、ヘリを作戦空域に送り込む事が黒峰達の任務だ。

「大丈夫さ。いざとなっても俺には秘策がある！」
「…一応聞いてやろう」
「逃げるんだよぉ～～！…冗談だ。そんな目で見んなよ」
「その場合は、容赦なく敵前逃亡で裁いてやる。介錯は任せろ」

シャリンシャリン

「止めて！っつうか、マジで剣を擦り合わせるの止めてくれ。怖いから」

「…あの～旦那方？そろそろ着きますぜ？」

会話に割り込んできたのはヘリパイロットのヴァイス・グランセニック軍曹。

ヘリパイロットの腕はトップクラス。数少ないヘリ操縦資格Ａ級ライセンス持ちだ。

男仲間で飲んでから、何故か御剣達の事を旦那と呼んでいる。

「あぁ、すまない。では黒峰、任せたぞ？」

「あいよ。じゃ、行くか。なのは、フェイト」

「…本当にやるんですか？」

珍しく、渋る様に言いだすなのは。フェイトもその後ろで、やや身を引いている。

「当然」

「黒峰さん、一人でも飛べるんじゃないんですか？」

「俺は粒子固めて、足場作ってるだけ。高速飛行にはついてけないのさ。

マッハ超えると痛いし」

「…飛行魔法も無しに、マッハ超えないで下さい」

「はっはっは。まぁ良いじゃないか」

「「はぁ…」」

嘆息するなのはとフェイト。観念したのか、諦めた様に片手を差

し出す。
その手を握り、なのはとフェイトに挟まれる様に立つ黒峰。

「両手に花って所かな？」
「良いからとっとと行って来い。
なのは、フェイト。うっとおしかったら放り捨てて良いぞ」
「「分かりました」」
「え？２人共俺の事嫌い！？」
「…嫌いじゃないですけど…」
「偶に言動がおじさんみたいで…」
「…御剣…俺、精神に多大なダメージ受けたから帰って良い？」
「うっさい。早く行けと言っているだろうが」
「冷たいよな。まったく…」
「…黒峰」
「あん？」

御剣は振り向いた黒峰に何かをを放り渡す。
それは細い包帯の様な物でグルグル巻きにされていた。

「持っていけ。御守りみたいなもんだ」
「御守りって…これがか？」
「一応な。困ったら使え。使い方は封印の表面を見ろ」
「…この封印…御守りっつうかお呪い…いや、もう呪いを感じるレベルの禍々しさなんだが。
…まぁ良いけど。じゃ、行って来る」

開いたハッチから飛び降りていく３人。
それを横目で見つつ、御剣はリニアの走っているであろう方向を向いた。

「さて、どうなる事やら…」

Ｓｉｄｅ黒峰

ヘリを離れて約3分程。
ようやく、ガジェット弐型の一機一機が見える距離まで来た。

「黒峰さん、どうします?私がディバインバスターで薙ぎ払いましょうか?」
「今、素で薙ぎ払うって言ったよな?
…まぁいいや。いや、あんだけガジェットが居たら、ＡＭＦも相当だろう。
俺が切り込むよ。後から悠々とついて来ると良いさ」

そう言うと黒峰は2人の手を放す。と同時に両手を合わせ、腰溜めに構えた。

「かー!めー!はー!めー!」

黒峰の周囲を粒子が渦巻く。
それは徐々に集束し、黒峰の掌中に集まって行く。

「波ー!!!」

黒峰が両掌を突きだすと同時に、直径５０ｍはあろうかと言う塊がガジェットに向かって飛んで行った。
塊がガジェットの群れに突っ込むと同時に、無数の爆発が起きる。
爆煙が晴れると、ガジェットの包囲網のど真ん中に大穴が空いていた。

そしてすぐさま、後方から加速してきたヘリがその穴を通ってリニアに向かって行く。

「…今のって…」
「うん。クロノが持ってた漫画の技だよね？」
「本家への敬意とリスペクトの精神を持って撃ってみた。反省はしている。だが後悔はしていない。なぜならば！」
「「…」」
「なぜならば！」
「…何でですか？」
「男だからだ！」
「…そうですか」

げんなりした表情のなのはとフェイトと対照的に、何かやり切ったと言った風な表情の黒峰。
ちなみにクロノが持っていた訳ではなく、漫画を読んだ事がない、と言ったクロノに黒峰が押し付けた物だ。
クロノも割りとハマったらしい。
無限書庫に行けば、漫画もリリなの関係以外は全巻揃うらしいが、それはまた別の話。

「さて、配達人（サンタ）も送ったし、後は足止めか。適当にやっとく…か！」

おもむろに黒峰が群れの方に掌を向けると、何かを潰す様にして掌を握った。
と同時に、群れの一角が爆散する。
先程の偽・かめはめ波で撃ちだした粒子を操り、対象空域のガジェットを圧砕したのだ。

「それ！次！！偽・月牙天衝！！！」

続いて握った拳を開き、手刀で前方を薙ぐようにする。
その動きに連動して、黒峰の指先から極薄の黒刃が飛んでいく。
今度はガジェットの群れが、袈裟切りに爆発する。

「まだまだ！」

叫ぶと同時に、黒峰はガジェットの群れに突っ込んでいく。
当然襲い来るガジェット達。光線、触手、ミサイル。
ありとあらゆる攻撃手段で黒峰を迎え撃たんとする。
だが、それも…

「無駄無駄無駄

「…私達ここに居る意味あるのかな？」
「もう黒峰さん1人で良いんじゃないかな？」

なのは達のぼやきもなんのその。
結局、黒峰はガジェットの大半を1人で粉砕してしまった。
至近距離でガジェットの爆煙を受けているにもかかわらず、その制服には汚れ一つない。

「ん～暴れ足りないな…ちょっとリニアの方行って来る」
「まだやる気ですか。それなら御剣さんに言ってからの方が良くないですか？」
「そうだな～…勝手に行って怒られたら、シャレにならんからな…
……ん？」
「どうしたんですか？」
「妙だな…念話が通じん。
なのは、フェイト、お前等の方はどうだ？」
「え？」
「分かりました。やってみます……
……駄目ですね。御剣さんだけじゃ無くて、フォワード陣にも通じません」
「何か有ったのか？リニアの周辺には特に不審な物は無いが…
行って見て来るかな？なのは、フェイト、ここの後始末頼…」

ザクッ

「…な…に？」
「く…黒峰さん？」
「え？何が…？」

ソレは、いきなりそこに現れた。

否。あたかも初めからそこに居たかのようだった。
ソレは一か月前、ティアナとスバルのBクラス試験に現れた黒騎士だ。
黒騎士は手にした大剣を諸手で構え、黒峰の胸に背後から突き立てていた。
当然、そんなモノが刺さった黒峰が無事で済む筈もなく。

「ぐ…がはぁ…！」

口から大量の血を吐きながら、前方に倒れ込んだ。
倒れ込んだと言ってもここは空中。
力無く崩れ落ちた黒峰は、そのまま地上に向かって落下していく。

「黒峰さん！！」
「なのは！黒峰さんをお願い！」
「うん！」

すぐさまなのはが回収に向かい、地上に叩きつけられる事も無く黒峰は掬いあげられた。

「ご…っぷぁ！はぁ…はぁ…な…のは」
「黒峰さん！？気が付いたんですか？…！駄目です！喋っちゃ！」

吐血しつつも一応の意識を取り戻した黒峰。
だが、その顔は蒼白で意識があるのがやっとの様だった。

「…聞け。何かあったのは……御剣の方じゃない。俺達だ。
…さっきから…っく…原口にも念話で通信してみたが、一向に繋がらない。
恐らくはここ一体に…ジャミングが掛けられている。

アレと戦うな。すぐ逃げろ。お前らじゃどうにもならん。俺が行く」
「駄目です！黒峰さんだけ置いて行けません！」
「くっくくく。何だ。俺が死ぬみたいじゃないか。
縁起でも無いな。止めてくれよ」
「でも黒峰さん、そんな…傷…じゃ？」

なのはの視線は黒峰の胸に向く。だが、そこには傷一つ無かった。
服に付いた血と傷の跡こそ残っているものの、黒峰の体に付けられた傷はきれいさっぱり治っている。

「ふぅ…塞がったか…これで良し」
「どうなってるんですか？回復魔法にしては…」
「何。粒子操作ってのは割と万能でね。
切断された細胞同士をくっ付けた。後、今は粒子が血液の代わりをしてる。
俺は極端に死に難いのさ。ま、頭フッ飛ばされたり、首切られたりしたら死ぬけど」
「…それ、アリですか？」
「アリアリ。じゃ、行って来る」

呆れ顔のなのはを置いて、上空に飛び上がる黒峰。
目指す先では、フェイトが黒騎士に切りかかっている。
が、其の悉くはかわされ、一撃も痛打を与えられてはいなかった。

「フェイト！下がれ！後は俺がやる！」
「く、黒峰さん！？大丈夫なんですか！！？」
「俺を誰だと思って居やがる！あんなもん唾付けたら治った！」

そう叫ぶと同時に、飛び上がってきた勢いもそのままに黒騎士へ蹴りを入れる。

が、黒峰の足先が黒騎士に触れようとした瞬間、黒騎士の姿が掻き消えた。
まるで煙に映った映像へ攻撃を加えたかのように、黒騎士の姿は消えてしまったのだ。
が、少し離れた所に黒騎士は現れた。
それも、また唐突にだ。

「…不可思議」
「しゃ、喋った!?黒峰さん!アレ、喋りましたよ!!?」
「人型してんだ。そりゃ喋るだろ」
「先刻貴様ニ与エシ一撃ハ、確実ニ肺臓ヲ貫イタ。何故マダ動ケル」

その声はどこか無機質で、まるで機械を通したかのような抑揚のない話し方だった。

「不思議なのはこっちだっての。お前、どうやって俺に不意討った?俺に奇襲かますなんざ、御剣だって出来ゃしねぇってのに。超スピードとか、催眠術とかの類でも無いな。もっと恐ろしい物の片鱗を感じるぜ」

補足して言うならば、黒峰は常に自身の周囲に粒子を漂わせている。
そも、粒子は黒峰の末端であり、体の一部だ。
それを周囲に広げる事で黒峰は探知を行っている。つまり、黒峰にとって背後は死角では無い。
また、周囲に漂う粒子は衝撃に反応して自動的に集束され、防壁の役割を果たす。
だが、黒騎士の攻撃はそれさえもすり抜けていきなり黒峰の体に届いた。

「…」
「だんまりか。まぁいいさ。やる事に変わりはねぇ。なのは！フェイト！」
「「はい！」」
「下がってろ。作戦空域よりも遠くな」
「そ、それは！」
「さっさと行け！本気で俺が戦って、四方十里に居る内は巻き込んで殺さない自信はねぇ！！！」

## 8章－4　星と雷と黒鬼（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：8章4話です。
機動六課の元が108部隊なので、ナカジマ部隊長の運転手はラッド・カルタス
二等陸尉がやってます。
ギンガも同伴。なので今回はお休み。

次話は強いて言うなればエリキャロメインです。

暴走するリニア。現れる強敵。
槍騎士の少年と、竜召喚士の少女は初の実戦を迎える。
次回『星と雷と天剣』
お楽しみに。

# 8章－5　星と雷と天剣

黒峰がガジェット群を一掃している時と、時を同じくしてリニア上空。

「まずは、私が車体に張り付いているガジェット共を剥ぎ落とす。その後その部分から内部に侵入。事前のソナーによって内部に空間がある事は確かだ。
だが、いつどこからガジェットの攻撃が来るか分からん。十二分に注意するように」
「「「「はい！」」」」
「それと、ティアナ以外の3人に言っておく。
私が機体のガジェットを剥がしきるまで、高ＡＭＦが機体内部に満ちていると思われる。
私が許可を出した場所以外への侵入を禁ず。
では、暫時出撃を許可する。現場では、ティアの指示に従う事。以上」
「「「「了解！」」」」

フォワード陣の返事に御剣は頷き、後部ハッチから飛び降りた。
と同時に御剣の周囲には大量の刀剣が顕れ、リニアの表面を削る様に撃ち出されていく。
何十何百と言う刀剣が次々に撃ち出され、瞬く間にリニアの中腹部のガジェットは排除された。

「じゃぁ全員、あの部分目掛けて降下！
バリアジャケットの展開は空中で完了する事！行くわよ！」

「「「はい！」」」

台詞に続いてティアナ、スバル、エリオとキャロの順に飛び降りていく。

「マッハキャリバー！」
「イタクァ！クトゥグア！」
「ストラーダ！」
「ケリュケイオン！」
「「「「セーットアーップ！！！」」」」
「「「Ｓｔａｎｄｂｙ，ｒｅａｄｙ」」」
「「Ｓｅｔ　ｕｐ」」」

空中に４つの光球が顕れ、その中から４人の戦士達が飛び出す。先陣を切ったのはスバル。真っ先に車体の上に着地し…その天井を踏み抜いた。

「…え？」

本来ならばその天井に着地する筈が、ガジェットに穴が開けられていた事と、御剣によって表面が削られていた所為で、外装が着地の衝撃に耐え切れずに壊れたのだ。

「うわうわうわ！」

着地の目測を誤った上、一度着地した事で気を緩めたスバルは突然の事態に対応しきれずに、頭から床に叩き付け「Ｗｉｎｇ　Ｒｏａｄ」られなかった。
マッハキャリバーの自立機能によって発動したウィングロードを走り、弧を描く様に車内で半回転して足から着地するスバル。

「今の…マッハキャリバー、お前が助けてくれたの？もしかして…お前ってかなり凄い？
加速とか、グリップコントロールとか」
「Ｂｅｃａｕｓｅ　Ｉ　ｗａｓ　ｍａｄｅ　ｔｏ　ｍａｋｅ　ｙｏｕ　ｒｕｎ　ｓｔｒｏｎｇｅｒ　ａｎｄ　ｆａｓｔｅｒ．（私はあなたをより強く、より速く走らせるために作り出されましたから）」
「うん。でも、マッハキャリバーはＡＩとは言え、心が有るんでしょう？
だったら、ちょっと言い変えよう。お前はね、あたしと一緒に走る為に生まれて来たんだよ」
「Ｉ　ｆｅｅｌ　ｉｔ　ｔｈｅ　ｓａｍｅ　ｗａｙ．（同じ意味に感じます）」
「違うんだよ。色々と」
「Ｉ'ｌｌ　ｔｈｉｎｋ　ａｂｏｕｔ　ｉｔ．（考えておきます）」
「スバル！無事！？」
「う、うんティア！無事だよ！今行く！」

そのまま、ウィングロードを伸ばして車外に出るスバル。

「さてと…ん？」
「どうしたの？ティア？」
「いや、私もあんたも、エリオもキャロもだけど、バリアジャケットがいつもと違うと思って」
「バリアジャケットも新型なのかな？」
「どうやら各分隊長のバリアジャケットと、それぞれ同じコンセプトらしいわね」

それぞれのバリアジャケットは前衛であるスバルと、そのコンビであるティアナは重装甲、高出力かつ長時間展開可能な、なのはの

アグレッサーモードを。
機動力を主眼に置くエリオと、その補助役であるキャロには高速機動補助をベースに、防御面にも考慮したバランスの良いフェイトのインパルスモードを基調として、各個人に調整されたバリアジャケットとなっている。
原作との相違点としては、スバルには左腕に装備された腕甲と、胸部から背面を覆う銀色の軽装。
腕甲の手首の部分には、デバイスコアと思しきクリスタルが埋め込まれている。
それ以外は変更は無し。
ティアナはベルト部分にマガジンスロットが追加され、左手首にはブレスレットが付いている。
イタクァとクトゥグアに外見的な変化は無い。
エリオの主な変更点はストラーダに有った。
穂先の部分に、赤色の直線的な線が入っている事と、石突の部分が扁平になっている事。
キャロはバリアジャケットもデバイスにも外見的な差異は見られなかった。

「まずはこの車両ね。皆、準備は良い？」
「「はい！」」
「うん！」
「スバルが開けた穴から入るわよ？
ま、怪我の功名ね。ガジェット共が集まって来てる可能性もあるわ。
各員、注意を怠らないで！」
「「「了解！」」」
「行くわよ！」

４人が内部に侵入した直後、御剣から通信で外部に取りついていたガジェットの排除が完了した、との連絡が入った。

後は内部のガジェットの殲滅のみ。
スターズ分隊、ライトニング分隊に分かれ、車内のガジェットを撃破しつつ、前方部に向かうスターズ分隊はリニアのコントロール奪還を。後方部に向かうライトニング分隊はレリックの確保を目指す事になった。

「スバル！前方４体！後ろは私がやる！」
「了解！もう！切りがないよ！」

スターズ分隊の現在地は2号車。次の車両の先頭部分にコントロールルームがある。
ここまでは順調に進んできた2人だったが、この車両に入った途端、挟撃を受けた。
それ以降断続的にガジェットが現れ、あと少しでコントロールルームだというのに一向に前に進めていない。

「どうなってるの？さっきから、小出しにしか敵が出てこない…」
「その分、楽だけどね」
「ったく、仁との連絡も途絶えちゃったし、この分だとチビッ子達の方も心配ね…
スバル。私が一掃するから、その間にコントロールルームに向かいなさい！」
「分かった！マッハキャリバー、ちょっと手伝ってね？」
「ｄｏｎ'ｔ　ｗｏｒｒｙ.　（ご心配なく。）
Ｂｅｃａｕｓｅ　Ｉ　ｗａｓ　ｂｏｒｎ　ｔｏ　ｂｅ　ｕｓｅｆｕｌ　ｆｏｒ　ｙｏｕ（私は貴方の為に生まれて来たのですから）」
「ありがとう！行っくよ～～！！！」
「クトゥグア！弾種選択（バレット・セレクト）、乱反射弾（プリズムバレット）！」

スバルがクラウチングスタートの体勢を取り、マッハキャリバー

に魔力を送り込む。
今にも飛び出しそうになるのを必死に押さえつけ、相棒の号砲を待つ。
ティアナが撃ちだした弾丸は、銃口の向きとは関係なく地面に飛んでいき、そのまま凄まじいスピードで車内を反射していった。
壁でだけ反射し、ガジェット達は貫通されて次々爆散していく。
最後の一体を弾丸が貫いた瞬間、スバルはマッハキャリバーを解き放った。
凄まじい加速とそれに伴うG。
スバルはほんの1、2秒で2号車の後方から、1号車のコントロールルームまで到達した。

「スバル！運転手席側の右手！緊急停止装置があるわ！それを起動させて！」
「了解！」

相棒の指示に従ってスバルはプラスチックの板を叩き割り、そのままの勢いで中のボタンを押した。
すると運転手側シートの横から一本のレバーが現れた。

「それを思いっきり引きなさい！！あんたならやれるわ！」
「うん！ふんぬぅぅぅぅぅぅぅぅりゃあああああ！！！！！！」

スバルが渾身の力で引くも、レバーはびくともしなかった。
が、膨大な魔力がスバルの体から噴出し、徐々に嫌な音を立てて動くレバー。
リニアは目に見えて減速し、遂には止まった。

「ティア！やったよ！」

「そうね。こっちも全部片付けたわ。
チビッ子達と合流しに後部車両へ行くわよ！」
「了解！」

場所は変わってリニア後方部、８号車貨物室。

「うぉりゃぁあああああああ！！！！！！」

エリオの咆哮と共に新型、ガジェット参型にストラーダが振り下ろされる。
しかし、その一撃は参型の装甲に防がれてしまう。すぐさま離脱して距離を取るエリオ。

「っく…あの球面装甲じゃ刃筋が立て辛い…なら！ストラーダ！」
「Ｓｐｅｅｒｓｃｈｎｅｉｄｅｎ」

次撃の為に穂先に魔力を集中させるエリオ。
だが、空間に違和感が波打ったかと思うと、エリオはおろか、後方でブースト魔法の準備をしていたキャロの魔法陣まで消えてしまった。

「ＡＭＦ！？」
「こんな遠くまで！？」

魔力結合を解除されてしまえば、エリオもキャロも、ただの子どもにすぎない。
魔法無しでガジェットに立ち向かえるのは、古いベルカの騎士位なものだ。
当然、後はただ一方的な展開が続くだけ。

攻める参型、防ぐエリオ。キャロはフリードで援護射撃を試みるも、ガジェットとエリオの距離が近過ぎて不可能だった。

「ぐ…っあああ！！」

「エリオ君！！！」

遂にエリオは参型のケーブルに捕えられてしまう。

振りほどくには非力すぎるエリオ、なすすべなく見ている事しか出来ないキャロ。

参型のケーブルは勢いを付けると、エリオを車外へと放り投げた。

絞めあげられ気絶したエリオは成すすべなく崖下へと落下していく。

「エリオくぅーーーーーーーーーーーーん！！！！！」

それを追い、キャロも飛び降りる。

脳裏に浮かぶのは、空港で出会った時の事。訓練中の事。出撃前の事。

いつも自分を気に掛けてくれた。いつも自分の傍にいてくれた。

生まれた村を追われ、フェイトに引き取られるまであちこちの研究施設を盥回しにされた。

こんな自分でも、必要としてくれる人が居る。傷つけるだけだったこの力にも、使い道があるのなら！

「…守りたい…優しい人…私に笑い掛けてくれる人…自分の力で…守りたい！！！」

「Ｄｒｉｖｅ　ｉｇｎｉｔｉｏｎ」

キャロの意志に呼応するように、ケリュケイオンのデバイスコアが輝き出す。

輝きはキャロ、エリオ、フリードを包み込む。

「フリード、お願い。いつも窮屈な思いさせてごめんね。
私…ちゃんと制御するから…行くよ！龍魂召喚！！！」

ケリュケイオンの輝きは最高潮に達し、目も眩まんばかりの閃光が当たりを包む。

「蒼穹（そうきゅう）を走る白き閃光。我が翼となり、天を駆けよ。
来（こ）よ、我が竜フリードリヒ。竜魂召喚！」

主の意志に答え、フリードは己が本来の力を解放する。
体躯は比較にならぬ程膨れ上がる。その内に秘めた魔力も龍種に相応しき莫大な量へと。
その身に満ちてゆく解放感。その歓喜のままに、白銀の竜が大空へと舞い上がった。

「Ｔｈｅ　ｓｕｃｃｅｓｓ　ｉｎ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｓｕｍｍｏｎ　ｗａｓ　ｃｏｎｆｉｒｍｅｄ. Ｔｈｅ　ｍｏｄｅ　ｉｓ　ｃｈａｎｇｅｄ　ｔｏ　Ｂｒｉｄｌｅ　ｏｆ　ｋｎｉｇｈｔ' ｓ　ｇｌｏｒｙ（龍魂召喚の成功を確認しました。騎英（ベルレフォーン）の手綱モードへ変更します）」
「え？ケリュケイオン？」

ケリュケイオンは、その台詞と共に再度輝きに包まれる。
光は形を変え、手綱を伝いフリードの全身を覆って行く。
輝きは更に形を変え、それが消えた時にはフリードの全身に金色に輝く装具が装着されていた。

「これって…ケリュケイオンの力なの？」
「Ａｆｆｉｒｍａｔｉｖｅ（そうです）」

「これなら…フリード！ブラストレイ！」

キィイイイイイン

フリードの口腔に魔力が充填されていく。
魔力は炎熱変換され、フリードの前方に巨大な火球が生み出される。
その熱は大気を焦がし、膨大な熱量を振り撒いている。
その火球は徐々に集束され、色は赤から白へと変わっていった。

「ファイア！！！」

主の命を受け、火球を解き放つフリード。
集束された膨大な熱量は指向性を持ち、丁度天井を破って現れたガジェット参型に命中する。
参型もフィールドを展開し防ぐも、外部に出ていたコードやアームは融け落ち、機体の上部が熱で融解していた。
それでも尚レーザーで反撃して来る参型。
キャロはフリードを操り全弾避けた。

「やっぱり堅い…」
「僕に…任せて」
「エリオ君！？気が付いたの？」
「あの装甲は避弾経始が働いてる。砲撃じゃ抜き辛いよ。僕とストラーダがやる！ブーストお願い！」
「うん！我が乞うは、清銀の剣（つるぎ）。若き槍騎士（そう）の刃（やいば）に、祝福の光を、猛きその身に、力を与える祈りの光を！！！ツインブースト！スラッシュ＆ストライク！」
「Ｅｎｃｈａｎｔｅｄ　Ｆｉｅｌｄ　Ｉｎｖａｌｉｄ．Ｂｏｏｓｔ　Ｕｐ．　Ｓｔｒｉｋｅ　Ｐｏｗｅｒ．」

キャロのブーストによって、ストラーダの穂先に魔力が集中する。
「行くよ！ストラーダ！」
「Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ．Ｍｅｓｓｅｒａｎｇｒｉｆｆ」
カートリッジが2発使われ、ストラーダの魔力刃が巨大化する。
「一閃必中！でぇりゃあああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！」
裂帛の気合と共に突撃するエリオ。だが、参型が展開したシールドによって防がれる。
「そんな！？」
「まだ…まだぁ！！」
しかし、事実ストラーダの突撃は阻まれていた。
以前ブースターでの加速は続いているにもかかわらず、バリアを貫けずにいる。
「あと…少しなんだ…届け……届けぇえええええ！！！！」
「Ｅｉｎｅ　Ｆｏｒｍ？ｎｄｅｒｕｎｇ．Ｓｔｕｒｍ　ｕｎｄ　Ｄｒａｎｇ（モードチェンジ。疾風怒濤）」
今度はストラーダが、エリオの思いに呼応するように輝き出す。
穂先の赤い線から赤色の光が放たれた。
そして青い装甲部分が横にスライドし、内部構造が露出する。
その中央にはタービンが鎮座し、エリオの魔力を吸って激しく回転しだす。
ブースターから噴き出る魔力はタービンの回転が増すたびに強くなり、均衡は徐々に崩れ、遂にはストラーダの穂先は参型を貫いた。

「はぁあああああ！！！！！！！！！」

エリオは貫通した魔力刃を上に押し上げ、ガジェット参型を切り裂いた。

内部構造が見える程に裂かれた参型は堪らず爆散する。

ここに、ライトニング分隊の初陣は終わった。

周囲一面の白い世界。

だだっ広いその世界には何もなかった。

否。その世界の中央には人影が2つあった。

「…中々ヤルデハナイカ。オ前ノ部下ハ」

「お褒め頂き光栄だ。素直に受け取っておこう。

こちらとしては、ちゃんと説明してから使わせてやりたかったが。

ぶっつけ本番など、させるものではないな。見ているこちらの心臓に悪い」

「…余裕ダナ。今自分ガ置カレタ状況ヲ理解出来ヌ訳デハアルマイ？」

会話をしているのは、なのはが落ちた時の映像に映っていた黒い人影と御剣だった。

「さしあたっては閉じ込められた、と言った所かな？

この空間は貴様の能力か…いや、貴様の懐…核(コア)だな。つまりここは礼装で作られた異界と言う訳か」
「…ソノ能力。分カッテハイタガ些カ厄介ダナ」
「分かっていた…か。私達の事…能力までも知っているとはね。と言う事は、考えられるのは2つ。管理局に内通者が居る、私達に怨みのある次元犯罪者か…」
「貴様等ヲ抹殺スルタメ送リ込マレタ『抑止』カ」

『抑止』と言う単語を聞いて、余裕を見せていた御剣の顔から笑みが消える。
雰囲気も変わり、常人ならば卒倒しかねない殺気が御剣の体から噴き出す。

「クッ…ククククク。只人デアッタ貴様モ経験ヲ積メバ、コレ位ハ出来ヨウナ。
否、貴様ノソレハ英霊憑依ニ依ルモノカ」
「…別に貴様と会話する気は無いが、これだけは聞いておこう。お前達は何人だ?」
「ソノ様ナ事ヲ聞イテ如何スル?マァイイ。答エテヤロウ。貴様等ト同ジ、3人ダ」

それを聞いた御剣の口元が吊り上がる。

「成程成程成程。好都合、実に好都合。一人一殺!まずは私が貴様を倒してやろう!!」

## 8章ー5　星と雷と天剣（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：8章5話です。
御剣が手を出した結果、ストラーダは突進力強化、ケリュケイオンは龍魂召喚時専用形態を手に入れました。
未だ其々1つ隠された形態があります。そっちは終盤で。

黒騎士と対峙する黒峰。
攻撃は通らず、一方的にダメージを受けていく。
状況を打開するために黒峰がとった行動は？
次回、『黒鬼と天剣と影2つ』
お楽しみに。

# 8章－6　黒鬼と天剣と影2つ

エリオとキャロがガジェット参型を破壊したのと、時を同じくして作戦空域上空。

「うぉりゃあああああああああああ！！！！！！！！！」

「…」

そこでは黒峰と黒騎士の空中戦が繰り広げられていた。

しかし、其の攻防は一方的なものであった。

黒峰は殴りかかってはかわされ、いつもは粒子が防ぐような攻撃を受け、傷が増える一方。

疲労よりも失血によるダメージで黒峰の息は乱れていた

「はぁ～～～…はぁ～～～…はぁ～～～」

「無駄ダ。幾ラヤッテモ貴様デハ我ニハ勝テン」

「はぁ～～～…それは…どうかな？やっと勝ち目が見えて来たってのに…」

「負ケ惜シミヲ。足掻ケバ晩節ヲ汚ス事ニナロウゾ」

黒峰はその台詞に対して薄く笑みを浮かべると、懐から一本の剃刀を取り出した。

「…何ノ真似ダ？ヨモヤソノ様ナチャチナ物デ我ガ一撃ヲ防ゴウト言ウノカ？」

黒峰は答えず、剃刀を手に黒騎士に向かう。

横薙ぎに振るわれた大剣を跳躍してかわし、鎧に一筋の傷を付けた。
「負け惜しみかどうか、その身で味わいな！『天綴空羅（てんていくうら）』！！！」
遂に黒峰が声高に叫ぶ…しかし何も起こらなかった。
「…終イニハはったりカ。モウ良イ。ココデ貴様ハ死ネ」
黒騎士は特に感慨もない様子で大剣を構え…振り下ろした。
「…何？」
「くっくっく…ふふふふ…はぁ～～～っはっはっは！！！
引っ掛かったなダボが！ハッタリ？負け惜しみ？そんなわきゃあねぇだろうが！！！」
黒騎士は大剣を振り下ろした体勢のまま、固まっていた。
時折何かが軋む音がするのは、動こうとしてそれが叶わず鎧が軋む音だろう。
「ド…ドウ言ウ事ダ？何故我ニ貴様ノ技ガ通ジル！？」
「いやはや騙された。
てっきり、俺はあんたの能力で俺の粒子が効かないんだと思ってたんだが…そんなわきゃぁ無いよな？
答えはシンプル。
其の鎧と剣に魔導生成物質を消滅させる…いや、分解して魔力に戻してから吸収する効果があるらしいな。
俺は最悪、時間操作まで想定してたんだが。それなら話は早い。その鎧の効果を無効化してやれば良いからな」
「馬…鹿ナ。コノ鎧ハ如何ナル魔法効果モ受ケ付ケヌ！
効果を無効化ナド出来ル筈ガ無イ！！」

急にうろたえ取り乱す黒騎士。

「いや、俺も良く知らないんだけどな?この剃刀は『オッカムの剃刀』っつってな。
ありとあらゆる概念武装を無効化しちまうんだとさ」
「馬鹿ナ!馬鹿ナ馬鹿ナ馬鹿ナ!!!
宝具ヲ使ウノハ御剣　仁ノ筈!何故貴様ガ宝具ヲ使エル!!?」
「俺も、何でもかんでも宝具が使える訳じゃねぇよ。
ただ、これの元は哲学主題らしくてな。誰でも使えるんだと。残念だったな。
さて、そろそろ時間だ」
「時間?」
「天綴空羅は時間が掛かるんでな。そら、来たぞ」

黒峰の台詞と同時に、俄かに空がかき曇る。
雲間からは稲光が走り、大気が震え戦慄(わなな)いていた

「何ダコレハ…何ガ起コッテイルノダ…」
「原子単位の糸で以て大気を練り、天候を自在に操る。故に『天綴空羅』ってところか。
さて、準備も整ったな」

黒峰が掌を上に向けると、その掌中に小さな旋風が起こった。
旋風は徐々に勢いを増し、黒峰と黒騎士を取り巻き、竜巻となって行く。
宇宙から見れば、この地方一帯を中心に巨大な竜巻が発生しているのが見えただろう。
竜巻は積乱雲を呑み込み、黒峰の粒子を核に積乱雲はさらに巨大になって行く。

雲の中の雷光は凄まじく、雲全体が発光しているかのようだった。

「ではさよならだ。お前が何処の誰かは興味無い。
誰に喧嘩を売ったのか、よく考えて悔いて死ね」

「マ、待テ！」

「待たない。『天綴空羅（てんていくうら）・神鳴（かみなり）』」

ッドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！！！

周囲に轟音…否。それを音として認識できる者など居なかった。
瞬時に空気は電離してプラズマ化し、大地はマグマを通り越して昇華され大量の土砂が消滅した。
黒峰が集めに集めた雨雲は雨を降らせ、ここは後に巨大なカルデラ湖になり、観光名所として栄えるのだが、今はどうでもいい話だ。

「…無茶ヲスルナ、貴様ノ仲間ハ」

「それについては全く以て同感だ。…リニアの方にまで影響が出ているな」

空間内部に投影されている映像…と言っても今は噴煙で何も見えないが。
御剣が視線を別にやれば、そこには止まったリニアにしがみ付くフォワード陣の姿が映し出されていた。
正確にはしがみ付いているのはスバルとティアナで、残るチビッ子2人は抱きかかえられている。
恐らくは魔力切れと疲労で気絶しているのだろう。
スバルの背にはアタッシュケースが括りつけられている。恐らくはレリックだろう。

「さて、これにて機動六課の初陣は終了。出来れば、大人しく私に殺されて欲しいんだが？」
「ソウ言ウ訳ニハイカナイナ」

ガシャン

不意に何か重いモノが倒れ込む音がした。
御剣がそちらに視線をやれば、そこには所々から黒煙を上げる黒騎士が倒れ込んでいた。
恐らくはこの目の前の男が、ギリギリの所でこの空間に引き込んだのだろう。
先程の映像もこの為だったのかもしれない。
若しくは、頃合いを見て黒峰もこちらに引きずり込む気だったのか。

「フゥ…情ケナイ。鎧ヲ無効化サレタ程度デ冷静サヲ欠クトハ」
「私の勘も捨てた物では無いな。丁度有効な物を渡していたとは。
ま、黒峰が苦戦するなど何かしらの魔術礼装でも無ければ有りえんが」

一応補足するならば、あの鎧は一切の攻撃を無効化するという一級の鎧。
黒峰の言った事は的外れとまでは言わないが、微妙に違う。

「さて…」

パチン　ザン！

御剣が指を鳴らすと同時に、黒騎士の体に無数の剣が突き刺さる。
その様は、まるで針鼠…否。剣鼠だった。

「…妨害されると思ったが…まぁいい。
次は貴様だ。さっさと片付けてここを出させて貰う」
「…」
「急にだんまりか？ならばそこで座して死ね」

そう言うと御剣は、背後の空間から乖離剣を取り出す。

「エヌマ・エリシュ。ラナ・ブウ。シャマ・ム。（上にある、天には未だ、名前無く）
シャプ・リシュ。アムマ・トゥム。シュマラ・ザク・ラト。（下にある、地にもまだ、名がなかった時のこと）
ギパ・ラ。ラキ・イス・スル。ス・サァ。ラ、シェ・ウー。（世界には形なく、水も大地も見あたらず）
エヌマ・ラ・エア。シュプウ・マナマ。（ただ風が吹くのみで、まだ何も存在しなかった）」

御剣が読み上げるのは、天地開闢の物語の冒頭。
かつて混沌としていた太古の地球。その世界を天地に分けた天地開闢・天地乖離の神器。
天地創造の法典にして太古の原典たる乖離剣は、御剣の詠唱によって未だ嘗て無い程の暴風を発する。
その余波だけで、御剣達の居る世界は軋み、空間が悲鳴をあげている。

「『天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）』！！」

そして真名と共に解放される暴風。
御剣が前方に突き出した乖離剣からは、世界を切り裂く烈風が放たれた。

目に見える程の空気の対流によって、次々に空間に裂け目が入って行く。
遂には世界を構築する骨子が切り裂かれ、硝子が砕ける様な音と共に御剣は元の作戦空域に戻ってきた。

「…逃がしたか」

一通り辺りを見回すと御剣はそう呟いた。
とは言え、周囲は黒峰の呼び寄せた積乱雲からの豪雨と、エヌマ・エリシュの余波の暴風で大嵐の体だったが。
御剣が放ったのは普段の対城宝具の様な使用法では無く、乖離剣の『世界を切り開いた』と言う対界宝具の面を強化して放った一撃だった。
故に範囲が広がり過ぎ、物理的な破壊力は薄まってしまい、恐らく致命傷にはなっていない。

「しかし、幾らかのダメージは有る筈。しばらくの猶予も有るだろう」

次の襲撃に備える必要も有るだろう。しかし気がかりなのは…

「この場に居たのが2人、と言う事…後1人は何処に？」

キュン！

「…！？『熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）』！！！」

突如空を裂いて飛来する何か。
咄嗟にアイアスを展開してソレを防ぐ御剣。
そして弾いた物を見て驚愕する。

「…『赤原猟犬（フルンティング）』！？」

それは、太古の英雄ベオウルフが振るったとされる対象追尾の能力を持つ剣。
その能力に従い、再度飛来するフルンティング。

ガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガッ！！！

「く…このままでは…」

アイアスは飛び道具に対しては鉄壁と言っても良い防御力を誇る。
だが、いくら防ごうとフルンティングは幾度となく戻って来る。
そしてアイアス無しでは御剣と言えど、音速を超える攻撃を避け続ける事は不可能だ。

「…一か八か…」

御剣は開いている左手に新たに籠手を呼び出す。
吸い込まれそうな程の漆黒をしたその籠手は、どこにでも有りそうな平凡な造形とは裏腹に、どこか禍々しい雰囲気を発していた。

ガィン！！

一際大きな音を立ててフルンティングが弾かれる。
戻って来るまで凡そ1秒。御剣はアイアスを仕舞うと同時に左手を前に突き出す。

ガシィン！！

甲高い音が辺りに響く。
が、それを最後に辺りには風と雨の音以外はしなくなった。

「…っはぁ…はぁ…」

御剣の左手にはフルンティングが握られている。
しかし、その表面にはまるで血管の様な黒い文様が浮かび上がっていた。
『騎士(ナイト・オブ・オーナー)は徒手にて死せず』。かの湖の騎士ランスロットの持つ宝具能力。
御剣はそれを籠手を依り代に発動する事で、フルンティングの制御を奪ったのだ。

「見事」

不意に御剣の頭上から声がする。
辺りには未だ嵐が吹き荒れ、まともな声など聞こえないだろうに、その声は妙に御剣には鮮明に聞こえた。

「成程。我等ガ出ルニハ些カ牛刀ニ過ギルト思ッテイタガ…成程」
「…残りの1人のお出まし、か」
「否。今日ノ所ハ我ハコレ以上手ヲ出サヌ。コレ以上ノ交戦ハ無意味故ナ」
「無意味?どう言う事だ?貴様等は私達を排除しに来た『抑止』だろう?
ここで引く理由でもあるのか?」
「本音ヲ言エバ、コノママデハ此方ガ不利故ニナ。暫ク時間ヲ取ラセテ貰オウ。
他ノ2人ノ治癒モセネバナラヌシナ」

「治癒？私を閉じ込めた奴はともかく、鎧の方は剣弾を叩きこんだ以上、生きているとは思えんが？」
「ソウ思ウナラバソウ思エ。イズレ又会ウ事ニナロウ」
そして声は聞こえなくなった。
辺りの嵐も徐々に治まり、遠くには晴れ間も見えている。
「…『赤原猟犬（フルンティング）』」
御剣が背後に手を伸ばして、真名を呼ぶもフルンティングは顕れない。
それはつまり、今手の中にあるフルンティングは座から呼び出された本物だと言う事。
「…予想以上に厄介かもな。これは…」
御剣の独白は宙に溶け、ここに機動六課の初出動は終わりを告げた。

## 8章－6　黒鬼と天剣と影2つ（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：8章6話です。
3人目登場。

欲望渦巻くオークション会場。
ある品が出品されるとのタレコミで警護に向かう機動六課。
しかし、そこにもスカリエッティの魔の手が忍び寄る。
次回『ホテル・アグスタ』
お楽しみに。

『オッカムの剃刀』：対概念宝具ランクA　レンジ1　最大補足1個

14世紀の神学者オッカムが考えた哲学主題であり、「むやみに実体の数を増やしてはならない」　とするもの。
幾つかの事柄で十分説明できるにも拘らず、説明に最低限必要でない余計な存在がある場合、それらは不必要なものなのであるから削ぎ落とすべきである、とする考え方であり、この場合の剃刀とは、不要な仮説、概念を削ぎ落とすという行為のための比喩である。
それを刃として具現化したこの剃刀は、その物体本来が持つ概念以外を削ぎ落としてしまう。
幻想殺しと、この剃刀の相違点としては、前者は対象を消滅させるのに対し、後者は概念のみを消去するため、破壊はしないと言う点。
究極の反概念付与（アンチ・イデアエンチャント）。

# 8章ー7　ホテル・アグスタ

リニア暴走事件から1週間後　機動六課　ブリーフィングルーム

薄暗い室内には、なのは、フェイト、ナカジマ部隊長、グリフィスが居た。

「ジェイル・スカリエッティ？」

「そう。広域指名手配次元犯罪者。今まで殆ど尻尾を掴ませなかったんだけど…」

「それが先日のガジェット参型の分析結果で浮かび挙がってきた、と」

ブリーフィングルーム中央に設置された全周スクリーンには、スカリエッティの名前の入った金属板が映し出されている。

愉快犯とも取れるこの行動の真意は分からないが…

「…なんにせよ、犯人（ホシ）の目星がついた事は僥倖だ。

こちらとしても対策が取りやすくなるだろう。」

「「はい！」」

丁度そこでギンガがコーヒーを持ってきたので、一旦休憩となった。

「…そう言えば御剣さん達は？」

「確かに。どうしたんだろう？」

「御剣特別提督補佐以下御三方は、本局へ報告に向かわれました。本日の夕刻には戻られる予定です」

なのはとフェイトの疑問の声に、グリフィスが手元のファイルを見つつ答える。

「…影（シャドウ）の事だね」

「はい」

時空管理局本局　クロノ・ハラオウン提督執務室

「…以上が今回で判明した影（シャドウ）の情報、及びそれらの情報を元にして私が出した考察だ」

「…これは…なんとも…」

「…まぁ、驚くのも無理は無いだろう。私とて、考え違いであって欲しいものだ。影（シャドウ）とは、私達の情報を元に次元世界が生み出した擬似生命体だ、等と」

目には目を、歯には歯を。単純な事だ。だが、私達に最も有効な相手だろう。

「し、しかしだ。全くの同一人物、と言う訳では無いんだろう？」

「あぁ。少なくとも原口に相当するであろう奴の能力は、原口のそれとは異なっていた。影（シャドウ）の方は展開に核（コア）らしきものを必要とする様だ。どちらが優れているかは断言しかねるが…どちらにしろ、同系統の能力を持っていると見て良い。私の影（シャドウ）は座

から宝具を呼び出していた」

そこでクロノの顔色が変わる。

「ま、待て！相手も宝具を使うのか！？」

「あぁ。それも先に影（シャドウ）に出されると、私は同じ物を出せない。全く以て難儀な事だ」

「そんな落ち付いている場合か！？最悪、君の能力が封じられるかもしれないんだぞ！？」

「一部はな。だが、恐らくは『剣軍師団（けんぐんしだん）』と『大魔導原典（だいまどうげんてん）』は大丈夫だろう。

アレは私のオリジナルだ。その存在を知っていても、私以外に呼び出す事は出来ん」

「そもそも、座と接続できるのがお前とその影（シャドウ）だけだがな」

黒峰の尤もな突っ込みを受け、肩を竦める御剣。

「まぁ、影（シャドウ）については、また出た時にでも対処するとしよう。で、もう1つの案件だが…」

「あ、あぁ。とあるオークションでロストロギアが出品されるというタレコミが有った。

調査の結果、確かに幾つか危険度の低いロストロギアが出品されている。

そこで、機動六課、ひいては君達にこのオークションの警護に出向いて貰いたい」

「…クロノ。機動六課の表向きの御題目を言ってみろ」

「事件に対する即時対応と言う新しい形式を確立させること。

ソレを広める事で、管理局の事件への対応力を上げる事だが？」

「ならば、私達が出向く事でもあるまい。まだ事件が起こると確定している訳ではない。

別の地上部隊を回せば良いだろう」

そう御剣が言うと、クロノは眉間に皺を寄せつつ、重苦しく口を開いた。

「…確かにお門違いなのは承知している。こう言うと君達は気分を害するかもしれないが…今回は上からの指名なんだ…」

「…何？」

「今回のオークションの護衛には機動六課を付ける様に、とのね。加えて、正規の護衛部隊も派遣される事になっている。正直言って、君の言っている事の方が正しい事は、僕も分かっている」

「…キナ臭いな…ただのオークションにしては警備が厳重すぎるだろう。本当にそのロストロギアの危険度は低いのだろうな？」

「あぁ、管理局にデータ登録もされているE級ロストロギアだ」

「写真か…映像でも良い。そう言った物はあるか？」

「いや、データ上に記載されているだけだ。写真の類は報告に上がって来なかった」

クロノの台詞に眉を顰め考え込む御剣。数分の後、再度御剣は口を開いた。

「…分かった。私達も赴くとしよう」

「いいのか？正直言って怪しい所だらけだぞ？」

「虎穴に入らずんば虎児を得ず。それに例え何か危険があったとして、そんなものは正面から撃ち破って見せよう」

「よくもまぁ、抜け抜けと言うよね。何があるかは大体知ってるくせに」
「出品される品の中にスカリエッティが欲しがっている物が有って、それを奪いにルーテシアが来るんだったっけか。
もう、かなりうろ覚えだな…」

ミッドへの転送準備待ちをしている間に、黒峰と原口が御剣に話しかける。

「概ねの所はその流れで合っていた筈だ。
スカリエッティが欲しがっている物や、その理由までは知らんが…まぁ、やはり上は黒か」
「断定するのは危険じゃないか？とか言ってみたものの、だろうな…」
「僕等とスカリエッティを共倒れにでもさせる気かな？」
「さてな。共倒れを狙うにしては行動が甘過ぎる。
…考えられる事としては、最高評議会はスカリエッティの味方で、今回の件にはえげつない罠が張られている、か」
「無いとは言い切れないな。と言うか、お前の直感はなんて言ってんだ？」
「危険だとは断定は出来ないが、何らかの警鐘は鳴らしている、と言った感じだ。」
「アバウトだな」
「勘だからな」
「勘って言っても、この１０年で蓄積した英霊の経験からの推察だろ？

的中確率はほぼ未来予知の領域の癖に」
「判断材料が足りん。渦中のロストロギアでも見れば何か分かるかも知れんがな」

第1世界ミッドチルダ中央区画　機動六課隊舎　ブリーフィングルーム

「と言う訳で、クロノ提督よりの要請で機動六課にホテル・アグスタで行われるオークションの警護にあたって貰います」
「…別に構わねぇんだがよ。そりゃあ俺も行くのか？」
「…部隊長には参加して頂く必要は特には有りません。あくまで警護、と言う形ですので、フォワード陣に隊長2名、それに私達で十分かと。
先程も言いましたが、正規の警備部隊も配置されていますので」
「ならいいんだ。そんな所に行ってお偉いさんの相手すんのは御免だからな」
「あの、すみません。私は行かなくてもいいんでしょうか？」

おずおずとギンガが手を挙げる。

「ギンガには隊舎に残り、調べて欲しい事がある。
カルタス二尉と共に、今回のオークションで出品されるロストロギアの出品者を当たってくれ」
「出品者…ですか？」
「あぁ。頼めるか？」
「了解です」

第1世界ミッドチルダ中央区画　首都南東（クラナガン）　ホテル・アグスタ

「いらっしゃいま…せ…しょ、招待状を拝見してもよろしいでしょうか？」
「あぁ、私達はこういう者でして」
ホテル・アグスタの受付は目の前に現れた、共に美女を連れた２人組の男に驚きつつも職務を果たそうとし、男の片方が差し出された身分証に更に驚く事になる。
「どうも。管理局本局古代遺物管理部機動六課です。本日のオークションの会場内警護を担当します、御剣　仁三佐相当官、以下３名です」
「は、はい！少々お待ち下さい！」
受付が奥へ引っ込んでいる間に、幾つかの確認事項を済ませておく。
因みに、御剣と黒峰はタキシード。なのはとフェイトはそれぞれピンクと黄色のドレスで着飾っている。
「なのは、新人達は？」
「それぞれの分隊で配置済み。陸士隊の人たちだけじゃカバーしきれない場所に行って貰ってる」
「そうか。（原口、そっちはどうだ？）」
ホテル屋上で周囲の哨戒を担当している原口に通信で確認を取る御剣。
「（問題無し。いざとなったらこのホテルごと隔離して保護するから大丈夫）」
「（…つくづく防衛戦向きだな。お前は）」

「（まぁね）」
「（では、引き続き頼む。）黒峰、ホテル内部に異常は？」
次に御剣は黒峰に会場内部やホテルの裏に異常は無いか問う。
「いや、予め貰った見取り図と変わった所は無い。爆発物の類も多分無い」
「そうか」
「お待たせしました」
一通り確認を終えた所で受付が戻って来る。
「機動六課の皆さま、本日は宜しくお願い致します。立食パーティーがございますので、オークション開始までそちらでお待ち下さい」

ホテル・アグスタ　小ホール

受付に案内され、ホールに入って暫くするとあっという間になのはとフェイトは男共に囲まれてしまった。
少し離れた所で黒川と見ていたが、正直あのオッサン共の目が気に食わない。
そろそろ助けに入るかと御剣が思っていると、2人揃ってこちらに向かってきた。
「お疲れ。災難だったな。ほれ、2人共これでも飲むと良い」
「あ、有難うございます…これ、お酒ですか？」
「否、普通の葡萄ジュースだ。流石の私も職務中に酒は呑まんよ」
「しっかし何だあのオッサン共。目がモロ好色じゃねぇか」

心底嫌そうな顔で言う黒峰。
その顔を見つつ皮肉そうに御剣も口を開く
「まぁ、私達ももう三十路だからな。オッサンと言えばオッサンだが」
「…そう言えばそうでしたね。御剣さん達、見た目があんまり変わらないから、すっかり忘れてました」
「うん。もう１０年なんだよね」
「そりゃそうだ。あの小さかった2人ももう大人だろ。ま、だからこそあんな連中が寄って来るんだが。客寄せパンダじゃねぇんだぞ」
「まぁ、2人共に美人だからな。仕方ないと言えば仕方ない」

そう御剣が入った途端なのはもフェイトも顔を赤くする。

「も、もう御剣さんったら…はやてちゃんに言いつけますよ?」
「…何故そこで、はやての名前が出る…」
「そう言えば、はやてとは連絡取ってるんですか?」
「ん?あぁ。2、3日置きに電話しているが」
「え～!!!駄目ですよ!毎日しないと!!!」
「そうですよ!」

途端に言い募られる御剣。
2人の剣幕に、さしもの御剣もたじたじになる。

『御歓談中失礼いたします。
間もなくオークションを開始致します。お客様方に置かれましては、大ホールへおいで下さいませ』
「む。どうやらオークションが始まる様だな。では行くぞ」

「…逃げたな」
「後でまた言いますからね」

## 8章－7　ホテル・アグスタ（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：8章7話です。
ちょっと切りが悪いですが、次回に続く。

オークション警護に当たる機動六課。
しかし、やはりスカリエッティの魔の手は忍び寄る。
襲い来る強化型ガジェットに翻弄される陸士部隊。
次回『化物』お楽しみに。

# 8章－8　化物

オークション開始時刻　ホテル・アグスタ　屋上

「（各員に通達。オークションが始まった。より一層の警戒を強化する事）」

『了解』

幾つかの投影モニターを前に展開し、各部隊の配置を見直す原口。

周囲の警戒は、原口自身の結界と御剣の独鈷による結界で万全。

例外が有るとすればセインのディープダイバー位だが、ホテル内部に現れれば黒峰の粒子に引っかかる。

いずれにせよ、少し強化された程度のガジェットではどうにもならない防御陣が構成されていた。

「…御剣は油断するなって言ったけど…」

御剣が言うには、一度接触してきた以上、いつ影（シャドウ）が現れてもおかしくは無いらしい。

更に、スカリエッティは原口達が機動六課に居る事を掴んでいるだろう、とも御剣は言っていた。

確かに今回の件はスカリエッティと上層部の共謀と言う線が一番濃い。

前回のリニアでも、原作よりも大量のガジェットが現れた…らしい。

「はぁ…こんな事になるなら原作、見とけばよかったかな？」

3人の中で、原口だけは原作知識が無い。
御剣や黒峰に勧められつつも、時間が無くて見ていなかったのだ。
そんな益体も無い事をぼやきつつ、フォワード陣の様子を見る。

「…ん？」

原口の目に留まったのは、数ある投影モニターの1つ。
そこには、陸士部隊の隊士に絡まれるティアナの姿が有った。

数分前

「スバル、そっちはどう？」
「問題無いよ、ティア」

ティアナとスバルが任されたのは、直接オークション品の保管庫に通じるホテル裏の搬入口。
今回の任務に於ける最重要ポイントの1つだ。
当然、2人の気も自然と引き締まる。
ただ…

「あ～…ダリィなぁ…こんなかったるい任務なんざ引き受けんじゃねぇよ。
ったくうちの隊長ときたら」
「だよな。こんなオークションに俺らが出張る必要ねぇって」

…正規の警護担当である陸士部隊の態度には目を覆う物が有った。
向こうも同じく2人組。
ただ、受ける印象が管理局員と言うよりは、日本の地方都市の裏路地辺りにいるチンピラの方が近い。

（ミッドの都市では区画整理や管理局のセンサーの御蔭で、裏路地や人目に付かない場所が数少ない。
その分廃棄区画等にはそう言った連中が屯（たむろ）しているが。）

「…ティア、一応注意しておいた方がいいかな？」
「ほっときなさい。ああいった手合いには何を言っても無駄。
それに、やる気が無い人がいたって足手纏いよ」

オロオロと問うてくるスバルに何の事は無さそうに答えるティアナ。
だが、相手方がティアナのその台詞を聞き付けたのか、こちらに歩いてやってきた。

「おい。俺らに何か言いたい事でもあんのかよ」
「別に無いわ。怠けてたいなら勝手にどうぞ。言い付けたりする気は無いし。
私達の邪魔にならない所に行ってくれるなら、それに越した事は無いけど」

冷めた目で一瞥した限り視線を向けず、淡々と言い放つティアナ。
だが男達はそのティアナの態度が気に入らなかったのか、目に見えて怒りだす。

「手前ぇ…チョーシくれてんのか？あぁ！？」
「…それ何語？せめて一般的な文化人に通じる言葉で喋ってくれる？
生憎と私、お猿さんの言語には精通してないの」
「ティ、ティア、まずいよ。この人達三尉さんだよ？」

デバイスを介してティアナに送られてきた男達の認識票には、確かに三尉とある。

一方の相手方はスバルの台詞から優位に立ったと思ったのか、下卑た笑みを顔に張り付け更に高圧的に詰め寄って来る。

「そう言う事だ。手前ぇら二等陸士だろ？分かったらとっとと謝れよ。そうだな…全裸で土下座でもすれば許してやらない事もないぜ？」

「ギャハハハハ！いいねそれ、サイコー！」

「ティ、ティア！どうす…る……の…」

半泣きになりながら相棒に縋ったスバルが目にしたのは、恐ろしいまでの冷たい目をしたティアナだった。

先程までがうっとうしい羽虫を見る様な眼だとすれば、今のティアナの目は害虫を見る時のソレだ。

さしもの男達も気押され一歩引く。

「な、なんだよ。上官に逆らう気か！？あぁ！？」

「黙れ」

ガキュン！

次の瞬間、ティアナはクトゥグアを抜き撃ちざまに発砲する。

ティアナの魔弾は狙い違わず、後方に展開された転送魔法陣から現れたガジェット壱型を撃ち抜いた。

「…え？」

「スバル、敵襲よ。しゃきっとしなさい」

同時刻　ホテル・アグスタ　屋上

「（宗一、ガジェット出現。数5…9…まだ増えるわ）」
「（…うん。こっちでも確認した。
その場で戦線構築、ホテル内部への侵入を許さない様に――）」

落ちついた口調とは裏腹に、原口は内心驚愕していた。
確かに転送技術なら『世界』の壁を超える事も不可能ではない。
御剣が設置したのは、あくまで侵入感知の結界。
元々侵入自体を防ぐ物では無い。だが、原口の張った結界はそうではない。
純粋にホテル・アグスタを位相を少しずらした空間内に隔離しているのだ。
ただ単純に転送で侵入する事は不可能だ。
その為には、原口がずらした位相を逆算し、正確に転送しなければならない。
もし僅かでも位相がずれれば、転送された物は位相の狭間に吹き飛び、まず戻って来られなくなる。
送り込むのが無機物と言う事で多少の無理はきくだろうが、それでもやはり信じ難い。

「（――こっちの結界は突破されてる。
位相を変動させては見るけど、そっちに掛かり切りになるから援護は出来ない。
隊長陣と御剣、黒峰をやるから少し待って欲しい）」
「（了解）」

原口はティアナとの通信を終えると、すぐさま御剣に連絡を取った。

「（御剣、敵出現。ガジェット壱型、数不明。対処に当たってくれ）」

ホテル・アグスタ　大ホール　オークション会場

「（…そうしたい所だがな、こちらも今手が離せん）」
「（どうしたの？何か問題が有った？）」
「（問題も何も大問題だ。例の出品されたロストロギア――）」

御剣が視線を前方に向ける。そこにはグロテスクな肉の柱が幾つも立っていた。
所々から伸びた肉の管からは毒々しい色をした液体が吐き出されている。
液体は異臭を放ち、液が触れた床は溶け、蒸気を上げている。

「（――とんでもない代物だったぞ）」

ここでまた、時を数分遡る。
オークション開始と同時に運び込まれたのは、３つのロストロギア。
いずれも確かに報告通り、保有する魔力量は大したことは無かった。
だが、ユーノが（オークションの品物紹介や解説で呼ばれていたらしい。お偉いさんに囲まれてこちらには来れなかった様だが）解説をしようとしたその時、異変は起こった。
突如ロストロギアから衝撃波が放たれ、壇上にいたユーノと司会、それと最前列の客が吹き飛ばされた。
続いて現れたのは何本もの触手。手近な客を縛り上げ、宙づりにする。

「御剣っ！」
「分かっている。『剣軍（ソード・アーミー）』『突撃（アヘッド）』！」

御剣の撃ち出した剣弾が触手を射抜き、落下する客達を黒峰の粒子が受け止める。

「なのは！フェイト！ここは私達がやる！客を誘導して避難させた後、フォワード陣の援護に向かえ！」

「「わ、分かりました！」」

返事と共に客を宥めつつ、なのはとフェイトが入口に辿りつく。だが…

「御剣さん！！！扉が開きません！！！」

「何っ！？」

男の客数名が扉に体当たりするも、扉はびくともしない。

「黒峰ぇ！！！」

「応！！！」

御剣の叫びに応じて、黒峰が一足飛びに扉に殴りかかる。が、黒峰の拳は甲高い音と共に弾かれた。

「なっ！？」

「黒峰の馬鹿力でも開かないだと…こいつの仕業か？黒峰、そのまま殴り続けろ！私はこいつをやる！」

「あいよ！」

ガイン！ガキン！バキン！

黒峰が扉を殴る音を背に、御剣はロストロギアの方へ向き直る。と言っても、既に肝心のロストロギアは肉に埋もれ、その姿は見え

なくなっていた。

「…さて、これがスカリエッティの罠か？原作ではこんな事は無かった筈だからな」

御剣がそう呟くと同時に、触手の群れが御剣に向かって来る。
その悉くは御剣に切り払われ、嫌な色の液体が飛び散る。
数本は客の方にも向かっていたが、御剣の剣閃によってそれも切り落とされていた。

「…さっさと終わらせてもらう。『約束（エクス）された――」

御剣がエクスカリバーを振りかぶった瞬間、その背筋に悪寒が走る。
発動しかけたエクスカリバーを抑え込み、御剣は観察するように注意深く触手（ロストロギア）の発生源を睨みつける。

「御剣、どうした！？何で撃たない！？」
「…まずい。アレを高出力の攻撃で焼き払うとそのエネルギーを吸収して爆発する」
「何！？」
「私やお前、バリアジャケットを着ているなのはとフェイトはともかく、客はまず無事では済まん。
しかもこいつ――」

御剣は視線を切り落とした触手に向ける。
そこには地に根を張り、徐々に上へ伸びていく肉柱が有った。

「――斬撃は無意味、かといって打撃ではあまり効果は無さそうだな…そっちはどうだ？」

「駄目だ。ビクともしない。結界みたいなもので塞がれてやがる」
「代われ。私がやってみる。『破魔の赤薔薇（ゲイ・ジャルグ）』」
「頼む。おりゃぁあああ！！」

黒峰が両手を触手の方に向けると、触手達は地面に張り付けにされたかのように動かなくなった。
粒子で膜を作り、それで触手を押さえつけたのだ。
その隙に、座から取りだしたゲイジャルグで御剣が扉を突くが、扉には傷1つ付かない。

「これでは無理か…なら…『閻魔刀（やまと）』」

それは人と魔を分かつ刀。
御剣は閻魔刀（やまと）を腰溜めに構えると息を大きく吸い、ゆっくりと吐き出しながら精神を集中させる。

「疾（ち）っ！」

聞こえたのは鍔鳴りの音だけ。
やがて扉に幾つも線が走り、次の瞬間には扉が崩れ落ちた。

「や、やった！？」
「ど、どけ！！わしが先にっ！」
「な、待て！！」

バチュン…ドシャッ

御剣の制止も虚しく、我先にと飛び出した客の一人がホールから飛び出た途端、廊下にはみ出した部分が消滅し、残った半分が倒れ込んできた。

「キャァァァァァァアアアアアアアアア！！！！」
「ま、前には化物、出口からは出られない…御終いだ…もう駄目だ…」
「あんたら管理局員だろ！！何とかしろよ！！！」

その光景を目の当たりにして恐慌状態に陥る客達。
誰も彼もが冷静では無く、なのはやフェイトに食って掛かる者もいた。

「落ちついて…落ちついて下さい！」
「大丈夫です！必ず助かりますから！」

なのは達も必死に宥めるが、客達は一向に聞く耳を持たない。

「（なのは、フェイト、目と耳を塞げ）」
「「え？」」

突然の御剣からの念話。
それでもすぐさま指示に従うなのはとフェイト。
その数瞬もしないうちにホール内部は閃光と轟音で満たされた。

暫くして閃光の余韻も消え、なのはとフェイトは恐る恐る目を開けた。
すると、そこには気絶した客達が倒れ込んでいた。

「み、御剣さん…何を？」
「ただの閃光音響魔法（スタン・グレネード）だ。ヴィータのアイゼンゲ・ホイルと似た様な物だな。

悪いがこいつ等には眠っていて貰おう。邪魔だ」

そう言う御剣の手には『大魔導原典（グラン・グリモワール）』があった。

「さてと、残る問題はあいつか…ん？」

「どうしました？」

「原口から念話だ。外でも厄介な事になっているな。ガジェットが結界内部に現れたらしい。

今はフォワード陣が対処しているそうだ」

「フォワード陣がって…正規の陸士部隊はどうしたんですか！？」

「…それがな、魔法が通じないと分かったら駄々崩れ、だとさ」

## 8章－8　化物（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：8章8話です。
しかしあれですね。
作中で出て来た下衆2人。自分で書いててうわぁ…ってなりました。
御剣がその場にいたら、問答無用で切り捨てられるレベル。

予告詐欺になってしまいました。
本来はもう少し先まで入れるつもりだったのですが…
気を取り直して。

隔離されてしまった機動六課主力。
絶え間なく襲い来るガジェット達に、徐々に疲弊して行くフォワード陣。
状況を打開するため、原口はある策をとる。
次回『ホテル・アグスタ防衛戦線』
お楽しみに。

『闇魔刀（やまと）』：対界宝具ランクA＋　レンジ20　最大補足20人
「人と魔を分かつ」刀、または「闇を切り裂き食らい尽くす」とも言われている刀。
『魔界』に通じるとされる地獄門を起動させる鍵であると同時に、地獄門を破壊するための剣でもある。

# 8章－9　ホテル・アグスタ防衛戦線

ホテル・アグスタ　資材搬入口

ガキュン！ガキュン！

「うおぉぉぉおりゃぁあああああああああ！！！！」
「スバル！突っ込み過ぎ！寄ってきた奴から順に叩きなさい！」

手早くクトゥグアに新しいマガジンを叩きこみつつ、突出し過ぎたスバルを窘めるティアナ。
そのままクトゥグアで迫りくるガジェットに魔力弾を撃ち込んでいく。
だが…

「駄目か…ＡＭＦが濃過ぎる…」

ティアナの魔力弾は全て命中しているが、ガジェットの装甲板を凹ませるばかりで貫通させる事が出来ない。
イタクァの砲撃なら幾らかのダメージは与えられているが、それも完全に破壊させるには至っていない。
高ＡＭＦ下での魔法使役に慣れたティアナでさえ、それなのだ。
そう言った訓練はおろか、対ガジェットの訓練さえ受けていない陸士部隊はと言えば…

「来るな！来るな来るな！来るなぁあああああ！！！！」
「ひぃぃぃぃぃ！！！」

…あの有様である。
先程の威勢は何処に行ったのか、見当違いの方向に魔力弾を乱射したり、頭を抱えて物陰にうずくまっている。
正確に言えば、機動力も強化されているガジェットに必中させるティアナが異常なのであって、その陸士が殊更に駄目な訳ではない。

「…せめて囮にでも使えないかしら…アレ。鬱陶しい事この上無いんだけど」
「ティ…ティア…」

他の陸士もガジェットの進行を止める事は出来ず、結局裏口と正面に配置された機動六課フォワード陣だけがまともに戦闘出来ていた。
だが、それももう長くは続かない。
正面玄関前で戦うエリオは最早体力の限界も近く、キャロもエリオの強化にフリードの制御で魔力が尽きかけていた。
ティアナのカートリッジの残数も減ってきている。
このままでは後１０分もしないうちに弾切れになるだろう。

「せっ！やぁ！！たぁ！！！」
「スバル！出過ぎだって言ってるでしょ！」
「分かってる！でも、このままじゃ皆やられちゃう！だったらアタシが一体でも多く倒さないと！」
「…っ！」

スバルのその台詞にティアナは身を固くする。
スバルの言う事は正鵠を射ていた。
確かに自分は強くなった。だが、それはカートリッジを大量に消費する事で成り立つ戦法。

長期戦には元々向いていない。
カートリッジ無しでいつもの調子で撃ち続ければ、1分と魔力が持つまい。
己が身の非力に歯噛みする。だが、今はその時ではない。
すぐさま思考を切り替えるティアナ。悔しいが、今の自分たちでは現状を打破できない。

「（宗一、仁と亮、隊長達は？）」
「（生憎と向こうも手が離せないみたいだ。…こっちももう無駄みたいだね）」
「（無駄？何が？）」
「（位相の変更さ。変更した所で一分もしないうちに新手が転送されて来る。
多分外で解析されてるんだと思う。そうじゃなきゃこんな簡単に侵入されるもんか）」
「（じゃあどうするの？）」
「（…）」
「（宗一？）」
「『機動六課及び周辺の管理局員全員に通達、ホテル・アグスタ内部まで撤退せよ。
繰り返す。至急、ホテル・アグスタ内部へ撤退せよ』」
「（宗一？何を…）」
「（早く！仕方が無いからね。僕がやるよ）」
「（宗一が？でも…）」
「（巻き込まれなくなかったら、さっさとホテルの中へ行くように）」
「（…分かった。）スバル、行くわよ！」
「う、うん！」

スバルとティアナがホテル内部に滑り込むと同時に、周囲に猛烈

な違和感が走る。
今まで南国にいたにもかかわらず、突然雪国に放り出されたかのような、突然空気が入れ替わったかのような得体の知れない状況に戸惑うティアナ。
総身に鳥肌が立つ。隣のスバルも落ち着かない様子で辺りを見回していた。
だが、ティアナはその気配には覚えが有る気がした。

「…仁？」
「え？」

頭上を見上げ呟くティアナに反応するスバル。
いぶかしむ様なスバルの視線に気づかずにティアナは天井を見つめ続けた。

ホテル・アグスタ　大ホール　元オークション会場

「で？これからどうするんだ、御剣？」
「知れた事。あの異形を打倒しここを出て、フォワード陣の救援だ」
「だから、あれは高出力で吹き飛ばすと爆発するんだろ？どうすんだ？凍らせるか？」
「否、あれを見ろ」

御剣が指さした方には、触手が切り落とされた際に飛び散った体液が床を溶かしていた。

「凍らせた所で、残骸や体液の処理の問題が残る。焼却してしまうのが一番良いのだ」
「なら、俺達やなのは達は兎も角、客達はどうすんだよ。見捨てる

のか？」
「まさか。護衛対象を見殺しにはしないさ。なのは！」
「は、はい！」

なのはは突然御剣に声を掛けられ驚くが、すぐにこちらに向き直った。

「その辺にユーノが倒れてるから叩き起こせ。
黒峰はそのまま奴等を押さえつけておいてくれ。
フェイトは私と共に、客達を出来るだけ一ヶ所に集めるぞ」
「「はい！」」
「応」

「ユーノ君、ユーノ君！起きて！」
「…ううん…あれ？なのは…何だ夢か」
「違うよ！ユーノ君！しっかりして！」
「なのはが起こしてくれるなんてそんな幸せな事、夢でもなきゃあり得ないよ…
仕事のしすぎで疲れてるんだ…寝よう…」
「ユーノ君ってば！！！」
「なのは、そこを退いて」
「え？フェイトちゃん？」

なのはが声の聞こえた方向を向くと、バルディッシュを構えたフェイトが仁王立ちしていた。

「この駄フェレット…なのはに起こして貰いながら、すぐに起きないなんて…」
「駄！？フェイトちゃん、どうしたの！？」

「止めないでなのは。大丈夫。非殺傷だから、どれだけやっても死なない」
「そういう問題じゃないよ!?」
なんだか揉めている3人の方を半目で見遣りつつ、客を移動させる御剣。
「…今、わりとピンチな状況だと思うんだが。どうでもいいが、ユーノには協力させるから、必要以上に痛めつけるなよ?」
「痛めつける事を止めてやれよ…」
緊張感の無さに御剣が突っ込み、更にその台詞に黒峰が突っ込む。何だかんだとグダグダしながらも、御剣が客を集め終わる頃にはユーノも意識がはっきりしていた。
「ハッキリさせられた、と言った方が正しいけどね。非殺傷でも、ハーケンで首刈られたら目茶苦茶痛いんだよ?」
「それを私に言われてもな。やったのはフェイトだ。文句は後でここを出てからそちらに言え」
「そうする。で?僕は何をすればいいの?」
「話が早くて助かる。客を保護、必要であれば治癒も施して欲しい。私はあちらを対処せねばならんのでな」
「わかった。でも、僕じゃあんまり強い余波は防げないからね?」
「問題無い。それほど被害は出さんよ」
そう言うと御剣は黒峰の方に歩いて行ってしまう。ユーノは溜息をつくと結界を展開させた。
「ラウンドガーダー・エクステンド、スフィアプロテクション」

それを確認しつつ、御剣はエクスカリバーを座に返した。
代わりに『大魔導原典（だいまどうげんてん）』を座から呼び出す。

「黒峰。あの触手を出来るだけ一か所に集めてくれ。出来ればロストロギアの有る辺りが良い」
「了解。少し待ってくれ」

黒峰がそう言うと、地面に張り付けにされていた触手達が、一か所に押し込められる様にして集められていく。

「完了。こんなもんで良いか？」
「十分だ。では、始めよう」

御剣は左手に『大魔導原典（だいまどうげんてん）』を持ち、右手を前に出して詠唱を始めた。

「光射す世界に　汝ら暗黒　棲まう場所無し！
渇かず　飢えず　無に還れ！『レムリア・インパクト』！！！」」

触手達は御剣の結界に成す術も無く囚われた。
そして御剣はその内部に異界の無限熱量を放射。
魔力の奔流によってあらゆる存在は灼き尽くされ、さらに無限重力で圧殺される。
内部の物を消滅させた後、業名を叫ぶと同時に結界そのものを握りこむように消滅させた。

「…済んだのか？」
「あぁ。ロストロギアも丸ごと破壊してしまったが、構うまい」

「終わりは、えらくあっけ無かったな」
「これでも大変だったのだが。
限定空間内に客（足手纏い）が居る、と言うのはこれで最後にして貰いたいものだ」
「違いない」
「あの～」
「「ん？」」

2人が振り返ると、処置を終えたのだろうユーノがそこにいた。

「あぁ、もう済んだからこの部屋からは出られるぞ？」
「そう言う事では無くてですね、この後皆さんはどうするのか、と」
「…周囲の警戒や後の処理が残っているので、まだなのはを帰す訳にはいかんな」
「べ、別になのはの事じゃないですよ！？」

ならば何故吃(ども)る。大方図星だったのだろう。

「…言っておくがユーノ。私は殊更には手助けはしてやらんからな？何せ、他にも居るのでな」
「え？」
「ククッさて、後片づけと行くか」

ホテル・アグスタ　屋上

スバル達前線メンバーをホテル内部に下げてからと言うもの、ガジェットの数は増える一方だった。
しかし、ホテル内部に侵入できたガジェットは1体たりとて居なかった。

「…やっぱりね」

原口は独り語散る。

外側に張っている物と同様の結界をもう一層展開しただけで、ガジェット達はそれ以上先に転移して来る事は無かった。

やはり原口が予想した通り外部から解析され、それを元にガジェットは送り込まれて来たのだろう。

変更された座標情報の解析には、相応の装備が必要となる。

更には仮にそれをガジェットに搭載したとして、破壊された時の場合を考えれば、最前線に送り込んでくる事はまず無いだろう。

「…つまりは外に解析装置か、それに準ずる能力を持ったナンバーズ…クアットロだっけ？が居る筈だけど…

そっちは今は放置…そろそろ良いかな」

原口は原作を見ておらず、御剣達から大まかな話しか聞いていない為勘違いしているが、解析等に優れているのはＮｏ．１、ウーノである。

Ｎｏ．４、クアットロの能力は幻覚。全く違う。

「…『世界崩壊（ワールド・ディストラクション）』！」

突き出された原口の右手が握られると同時に、外側の結界が砕け散る。

硝子が砕ける様な音の後に訪れたのは、圧倒的なまでの破砕の嵐だった。

内側の結界と外側の結界の間の空間の物はもちろんの事、外側の縁から２００ｍはごっそりと抉り取られてしまった。

上から眺めれば、ホテルを中心としたドーナッツ状の地形になっているのが確認できるだろう。

「さて、と！」

そしてすぐさま内側の結界を元の外側の結界の有った場所まで広げ、新たに内側に結界を展開する。

これなら間隙無く敵の侵入を防げる。と、そこで唐突に敵の侵入が止んだ。

「…？」

恐らくは、これ以上の攻撃は無駄だと察知したのだろう。

索敵をしても周囲に人影や不審物は無い。

「…終わり…かな？」

そう呟く原口だったが、その周囲を見回すと溜息を吐く。

仕方が無かったとは言え、ホテル・アグスタ周辺の環境を著しく破壊してしまった。

『世界崩壊（ワールド・ディストラクション）』は効果対象を選ばず破壊する殲滅技。

故に、原口も使用には相応の注意が居るものだった。

そして、文字通り大きな爪痕を残しつつも、ホテル・アグスタ防衛戦はここに幕を閉じた。

## 8章－9　ホテル・アグスタ防衛戦線（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：8章9話です。
私事ではありますが、大学のテストが近い為、暫く更新をお休みさせて頂きます。
テストが終わり次第更新を再開しますので、皆様方にはお待ち頂けるようお願い申し上げます。

戻ってきた平穏な日常。
そんな中、持ち上がった隊長戦の話。
それはまた、機動六課に騒動の種を蒔く。
次回『Ａｌｌ　ｏｒ　Ｎｏｔｈｉｎｇ』
お楽しみに。

# 8章－10　All　or　Nothing

ホテル・アグスタ防衛戦から数日後。
機動六課内は喧騒に包まれていた。
正確には、喧騒に包まれているのはヘリ格納庫。
その奥まった一角は、大勢の人だかりで熱気に満ちていた。

「さぁさぁ張った張った！
高町隊長とスターズ分隊の隊長戦だ！
オッズは現在１．３対６０．２！！！一発狙う勇者は居ないか！？」
「スターズ分隊！！」
「お、やるな！他には居ないか！？」
「隊長で！」
「俺もだ！」
「私も！！」

壇上で声を張り上げているのはヴァイス陸曹。
周囲には人が群がり、口々に叫んでいる。

「さぁ、まだまだいける！明日の模擬戦まで盛り上がって行こうぜぇえええ！！！」
『おぉおおおおおおおお！！！』

機動六課　部隊長執務室

「何？賭けだぁ？」
「はい。数名が元締めとなって、明日の隊長戦を賭けの対象にして

いるようです。
必要とあれば止めさせますが」
「ほっとけほっとけ。
止めさせたところで、大っぴらにはやらなくなるだけだ。
裏でこそこそされるより、隊員達のガス抜きに利用させて貰うとしよう」
「了解しました」
「監査を前にして大胆な物言いですね。部隊長？」

別件で部隊長室を訪れていた御剣が口を開く。
だがその言い方の割には、愉快そうに口元が歪んでいる。

「で、では中止させましょうか？」
「グリフィス、少しは冗談も解せ」
「…冗談で言って良い事では無いと思いますが」
「しかし、その倍率で良く賭けが成立するものだ。
いや、そもそもエース・オブ・エースと新人で賭けが成立している事の方がおかしいが。
まぁ、勝手に賭ける分には構わんさ。
隊の運営には利益も無いが、害も無い。業務に支障が無い以上は、部隊長の仰る通りに好きにさせておくのが良いだろう」
「はい」
「では部隊長。私はこれで」
「あぁ。すまんな」
「いえ。失礼します」

会釈をして部屋を出る御剣。
時刻は昼前。午前の業務ももうすぐ終わる頃だ。
そう思った御剣の足は、自然と食堂に向かった。

「あれ？御剣さん？」

食堂の傍まで来た所で、聞きなれた声が御剣の耳に入ってきた。
声の聞こえた方向に振り返れば、そこには機動六課の制服を着たなのはが立っていた。

「なのはか。これから昼食か？」
「はい。フォワードの子たちと一緒に。御剣さんもどうですか？」
「御一緒させて貰おう。…そう言えば明日の模擬戦だが」
「なんですか？」
「…その…だな」

御剣の脳裏には、先程聞いた賭けの事が浮かんでいた。
だが、別に言う必要も無いと判断し、言おうと思っていた事を変える。

「今で無ければならないのか？
私としては、全員が第二段階に進んだあたりかと思っていたのだが」
「…実はですね、最近ティアの様子がおかしいんです」
「ティアが？」

なのはの口から飛び出した言葉に驚く御剣。
だが、それは一旦押し込め、なのはに続きを促す。

「焦っている…とも違うと思うんですけど…すみません。
上手く言葉にし辛くて」
「…具体的には？」
「早朝と深夜、正規の訓練とは別に自主練しているみたいで」
「それはいつもの事では？」
機動六課（ここ）が始まった頃からのティアの日課の筈だが」

今なのはがティアナに教えているのは、あくまでも集団戦闘を目的としたセンターガードの戦い方。
それとは別に、私達が教えた個人戦闘技能の鍛練をティアナはいつも行っていた。

「はい。でもそれも、より激しくなってるみたいで、早朝訓練はまだしも、昼前になると大分疲れの色が見えるようになってますし」
「ティアが疲れた様子を？」
「え、はい。表面上はともかく、反応が一瞬遅れる事が有って」
「成程な。分かった。私の方からも言っておこう」

機動六課　食堂

「ハグハグモフグフハフガツガッ」
「モグモグゴクモグゴクモグモッ」

御剣の目の前にあるのは、うず高く積み上がったスパゲッティの山が２つ。
その山の向こうからは咀嚼し、嚥下する音が響く。

「…いつもこうなのか？」
「えぇ。昼は大体こうよ」

やや呆れた様子で隣に座るティアナに聞けば、もう慣れたと言わんばかりの返答が返ってきた。
山の向こうに居るのはスバルとエリオ。
カロリー消費が激しく、且つ育ち盛りの２人組である。

「とは言え食べ過ぎではないのか？
…以前家に招いた時は、これほど食べていなかったと記憶しているが」
「あの時は緊張も有ったんだろうけど、遠慮してたんでしょ。
あの子の胃袋は割と底無しよ」
「成程。これでギンガも呼んではどうかと聞いた時、遠慮していた理由が分かった」

これはエンゲル係数以前に、調理の手が追いつかないだろう。
そう思っていると、受け取り口の方から丁度ギンガがやってきた。
…と言っても、その顔は積み上げられたスパゲッティで見えず、髪の色や髪型から判断出来ただけだ。

「ガツガッ…ゴクン。あれ？ギン姉、今日そんだけ？」
「うん。ここの所あんまり動いて無いし」

そんな会話をスパゲッティがしている。
少なくともこの御剣からのアングルでは、そうとしか見えなかった。
嘆息しつつ、自身の定食プレートを片付ける御剣。
このままでは、見ているだけで満腹になりそうと判断した故の行動だった。
食事を済ませ隣を見れば、ティアナも丁度食事を終えた所だった。

「ティア、少し話が有る。この後いいか？」
「この後…ここじゃ駄目なの？」
「まぁね」
「…わかった」

機動六課　監査執務室

「で？話って？」

部屋に入って開口一番。ティアナは振り向くと同時に聞いて来る。

「少し待て。茶ぐらい出すから、そこのソファーにでも座っていてくれ」

御剣はそう言うと、備え付けの給湯機でポットを温め始めた。

その様子を見ながら、ティアナは言われた通りソファーに腰掛ける。

数分後、ティーセット一式を持って御剣も席に着き、２人は向かい合った形になる。

注がれた紅茶を口に含み、ティアナは御剣の言葉を待つ。

と言っても、ティアナも御剣が何を言いだすかは予想していた。

「…最近、随分と根を詰めているらしいな」

あぁ、やっぱり。

ティアナはそう思った。

恐らくはなのはさんからだろう、とティアナは当たりを付ける。

今日の訓練では、危うくインターセプトトレーニングの弾に当たりかけた。

取り繕ったつもりだったが、やはり見抜かれたのだろう。

「…そうね。自分でもやり過ぎたと思う。

大丈夫よ。明日は控えるから」

そう返したティアナの腕を、御剣は無言で捕り――

「ちょっと！仁？！」
「ここまでしてか？」
――ティアナの制服の左袖を捲り返した。
すると、そこに有ったのは細い細いオレンジの魔力糸。
それはティアナのバインド。アトラック＝ナチャ。
巻き付いた対象の魔力を拡散させ続ける、特異効果を持ったバインド。
それをティアナは効果を最小に抑え、帯状に形を変えて目立たない様に身に纏っていた。
「…敢えて永続的に魔力を消耗し続ける事で、保有魔力量の底上げ、か。
確かに方法の一つとして提示はしたが、効果が薄い上に即効性も無く、しかも負担が大きいと付け加えた筈だが？」
「…クトゥグア、バインド解除」
「ｙｅｓ，ｓｉｇｎｏｒｉｎａ（はい、御嬢様）」
ティアナの腕からはバインドは消え、御剣も掴んでいた手を放し、席に座り直す。
が、しばしお互い無言の時が過ぎる。
次に口を開いたのはティアナだった。
「…仁はさ、あたしの魔力量の事、最初に何て言ったっけ？」
「超一流（オーバーＳ）は目指せんが、一流（ニアＳ）にはなれる。そう言ったと記憶しているが？」
それを聞いてティアナが薄く笑う。
「本当にね。折角仁達に教えて貰った戦い方も、弾丸（カートリッジ）が無くちゃ碌

に出来やしない」
「ティア」
「弾丸（カートリッジ）があっても、今の私じゃガジェットを倒す事も出来ない」
「ティア！」
「スバルがいなきゃ、前回だってやられてたかもしれない」
「ティア！！」
「私は！もっと、力が欲しい！一人でも、何かに、誰かに頼らなくても戦える力が！」
「ティア！！！！！」

御剣の怒号。
その勢いに興奮していたティアナも気勢を削がれ、押し黙る。
そして、再び静寂が場を支配した。
そして、またしても口を開いたのはティアナだった。

「ごめん。仁」
「その謝罪は何に対してだ？」
「全部。仁の助言を無視した事。仁達の教えてくれた事を否定する様な言い方した事。
誰の助けも要らないみたいに言った事」
「もう一つ足りないな」
「え？」
「自分を大事にしなかった事、だ」
「…うん」

御剣は一つ嘆息すると、紅茶を啜る。時間が経った所為か、少し冷めていた。
そして、どうしたものかと思案する。
ティアナのこれは暴走、とまでは行っていない。精々、焦って努力が空回りと言ったところか。

ふと、御剣は先刻の部隊長室での事を思い出す。

「…さて、反省した所で御仕置きタイムだ」
「…え？」
「当然だ。信賞必罰。相応の事はせねばな」
「う…はい」
「素直でよろしい。では、賭けをしようか。ティア」
「……え？」
「明日の模擬戦。勝てば更なる力をやろう」
「え？罰…なのよね？」

御剣の言いだした事が理解できず、戸惑うティアナ。だが、それも次の御剣のセリフで凍りついた。

「負ければティア、お前の魔導の全てを封印する」
「…え？」

先程から自分はこれしか言ってない、とどこか冷静な自分が分析する一方、ティアナは混乱の極地に居た。
縋る様な目で御剣を見るも、御剣の目は冷たく感情の色は一切無く、御剣はそのまま続けた。

「少し休んでみるのもいいだろう。あくまで負ければ、の話だ。
あぁ、だからと言って、当然無茶な事をすれば私が止めに入る。
自分の出来る範囲で何が出来るか、良く考える事だ」

そう言うと御剣は自らの執務室を出て行った。
残されたティアナは茫然としていたが、暫くすると、幽鬼の様にふらふらとその場を立ち去った。

機動六課　廊下

Ｓｉｄｅ御剣

…あぁは言ったが、どうなるか。
さて、この後は…いつも通り暇だな。夕飯までどこかで暇でも潰すか。

ドドドドドドドドドドドド

ん？何だ、この音は？

「「この馬鹿ーーーーー！！！！！！」」
「む？危ないだろうが」

飛びかかってきたのは黒峰と原口。
寸での所で避けたからいい物の、当たっていたら割と痛い事になっていただろう。

「危ないだろうが、じゃねぇよ！何考えてるんだお前は！？」
「暇だからどこかで時間を潰そうかと」
「今考えてる事じゃ無ぇよ！
何でティアを諫めるどころか、追い込む様な真似してんだよ！！」
「僕等がティアを暴走させない様にしてたのは、御剣の提案でしょ！？
何で自分からそんな真似してるのさ！？」
「というか途中まで甘デレモード突入かと思ってたのに、どうしてこうなった！？」
「このフラグクラッシャー！はやて以外には目もくれない気か！？」

さては扉の前で聞き耳立ててていたな。こいつ等。
と言うか、途中から言っている事がおかしい。

「落ちつけ。私も考え無しに、あぁ言った訳ではない」
「じゃあ何だってんだよ」
「少し耳を貸せ」
「残念ながら取り外しはきかなくて」

原口がふざけた事を言って来るので突き離す。

「なら原口には聞かせん」
「冗談です御免なさい」
「いいか?ゴニョゴニョゴニョ」
「あん?それで?」
「ゴニョゴニョゴニョーラゴニョリータ」
「…そう上手くいくかな?」
「さてな、割と賭けだ」
「んな無責任な」

さて、どう転ぶかな。どっちにしろ保険はかけてあるが。
…何か忘れているのは気のせいか?

## 8章－10　All　or　Nothing（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：8章10話です。
試験勉強の合間に執筆…これはあれですね。物書きの悪癖ですよね。
そんな訳で暫くは不定期更新です。

無情にもティアナに告げられた御剣からの宣告。
果たしてティアナの運命は、御剣の真意は如何に。
次回『ティアナ』
お楽しみに。

# 8章－11　ティアナ

ミッドチルダ中央区画　機動六課　訓練用シュミレーター

とあるビルの屋上。
そこには、御剣をはじめとした監査3人組とライトニング分隊が立っていた。
そこへ慌ただしく扉を開いて現れる影。

「す、すみません。書類の処理で遅くなっちゃって。もう始まってますか？」
「否、あと2分程余裕は有る。ギリギリと言えばそうだがな」
「よ、よかった」

現れたのはフェイト。
最近捜査官としての仕事で隊舎を空けていた為、書類が溜まっていたらしい。
昨日から、執務室に篭り切りで片付けていた様だ。

「…なんだか空気が張り詰めてますね。特にティアナ…」
「やはり、分かるか？」
「えぇ。ただ事ではない決意…でしょうか。そんな感じです」
「正解だ。今まさにティアの心境は不退転といった所か」
「…何が有ったんですか？」

フェイトは真剣な表情で御剣を見つめる。
それに対して御剣は特に気負うでもなく、平然と口にした。

「何、これでティアが負ければティアの魔導を封じる。そうティアに言っただけだ」
「あぁそういう…え゛？」

驚きのあまり、フェイトの顔が崩れる。
美人はどんな顔してても美人だな、などと御剣が場違いな感想を抱いていると、フェイトは御剣に食って掛かった。

「ど、どうしてそんな事！？
幾ら御剣さんでも、そんな暴挙が許される筈が有りません！」
「暴挙、ねぇ。なら言い方を変えよう。
無茶をしたティアを問答無用で魔導封印するのではなく温情として、なのはに勝てたら封印せずに更にパワーアップさせる、とね」
「そ、それって詭弁なんじゃないですか？」
「詭弁さ。言い方受け取り方の違いだからね。まぁ、もう始まるし、ここで事の顛末を見ていくと良い」

御剣が上空に視線を移すと同時に、試合開始のブザーが鳴り響いた。

Ｓｉｄｅティアナ

私の魔法を封じる。
仁はそう言った。その時は何を言われたか分からなかった。
分かった時には、目の前に仁は居なかった。
もしまだその場に仁が居たら、私はどうしただろう。
泣き縋って、それだけは嫌だと言っただろうか。

泣いて泣いて、涙が枯れるまでそうしたかもしれない。
気付いた時は、私は寮に戻っていた。その間の記憶は全く無い。
部屋に戻ってきたスバルに問い正され、事の次第を話した時も、まるで他人事の様だった。
自分の夢が断たれるなんて。執務官だけじゃ無い。魔導師ですら居られなくなる。
仁が封印すると言う事は、それは私じゃ解けないだろう。
自分が家族の様に思っていた相手に、自らの夢を断たれる。
その事に私はすっかり打ちひしがれていた。

「だったら、勝とうよ！」

そうスバルが言った台詞も、私の心を動かす事は無かった。
いや、別の方向には動かした。黒く淀んだタールの様な感情が、私の内に湧き出て来る。

「勝てば全部丸く済むじゃない！」
「…いいわよね。あんたは能天気で」
「え？」

口から出てきたその一言に釣られる様に、私の口からは次々に言葉が吐き出される。

「あんたは勝っても負けても大差ないから、そんなに気楽に言えるのよ。
自分が言ってる事分かってる？あのエース・オブ・エース高町なのは一等空尉と模擬戦よ？
対してこっちは入局して2年のペーペーの新人2人組。
どう考えたって勝てる訳無いでしょ？」
「勝てるよ！ティアなら勝てる！」

「そうやってまた根拠のない事を…一応聞いたげるけど、どうやって勝つつもり？」
「え…とそれは…その…」
「もういいわ。やっぱりその場の思いつき任せで喋ってるだけじゃない。
だから能天気だって言ってるのよ。
十分な体力と魔力に恵まれてるあんたには分からないかも知れないけど――」

そこまで言った所で我に返った。
これは八つ当たりだ。スバルは何も悪くない。無理をした自分こそが悪いのだ。

「――ごめん。八つ当たりだわ…駄目ね。寧ろあんたには余計な事言っちゃったのに」
「ううん。そんな事無いよ。
…アタシはもっと、ティアに頼って欲しい。ティアを支えたい。
今のアタシが有るのは、間違い無くティアの御蔭だから」
「…あんたは…いえ。確かに泣きごと言ってても仕方ないわね。
明日の事、詰めておきましょう」
「うん！」

この娘は本当にいい娘だ。まっすぐで、いつでもひた向きで。
自分は一人じゃ無い。そう思うと胸の靄がスッと晴れた気がした。
自分は何を焦っていたのだろう。自分で出来ない事を他人に頼る事は決して悪い事では無い。
自分もその人が困った時に助ければ良いだけだ。何も難しい事では無い。

「スバル」

「何？ティア」
「…ありがとう」
「え？何？ティア、もしかしてデレ！？いやっほう！」
…前言撤回。少し不安になって来た。

Ｓｉｄｅなのは

模擬戦が始まって早3分。
2人はスバルが前衛（フロントアタッカー）、ティアが中衛（センターガード）のオーソドックスな陣形。基本に忠実で隙が少ない。
スバルを去なして追撃しようとすると、すかさずティアのカバーが入ってくる。
教えた事をしっかり活かしてくれてるのは嬉しいけど、このまま終わりなのかな？
それなら――

「御免なさい。なのはさん」

――そんな台詞を目の前のスバルが言った。
その瞬間、視界の端にオレンジ色の閃光が走る。

「Ｏｖａｌ　Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ．」

咄嗟にバリアで防ぐ。迫る2発の魔弾。
正面からはスバル。囲い込む様な軌道。なら――全て受け止める！

ガガガガガガガガガガガガッ

「バリアァァァ――」
「…バースト」
「なっ！」

…驚いた。もう少しでバリアを割られる所だった。スバルのバリアブレイクもそうだけど、ティアの魔力弾。
魔力弾がバリアに噛みついてブレイクしてくるなんて。誇張でも自慢でも無く、私じゃ無ければ破られていた。
そんな事を思って少し気を抜いていたからだろうか。
いや、完全に狙われたんだろう。
バリアバーストでスバルを吹き飛ばすと同時に、私の左肩で何かが炸裂した。
オレンジの閃光。裂けるバリアジャケット。
それは…間違い無くティアの魔弾が私のバリアジャケットを撃ち抜いた瞬間だった。

Ｓｉｄｅティアナ

「…ヒット」

なのはさんの肩部分に命中した事だけを確認して、すぐさまその場を移動する。
見間違いで無ければ、確かに私の弾はバリアジャケットを抜いていた。
惜しむらくは、一撃で頭部を撃ち抜けなかった事だが、そこまで言っては贅沢が過ぎるだろう。

「（スバル、無事？）」
「（な、なんとか）」

「（作戦は第二段階へ移行。引き続き囮をお願い）」
「（了解！それにしても、あのなのはさんに一撃入れられるなんて、さすがティア！）」
「（伊達に、仁となのはさん達の模擬戦を見て育ってないわよ）」

そう。今回狙ったのは、なのはさんの癖。
なのはさんは元々高機動タイプじゃ無い。
しっかり腰を落ち着けて、固い装甲と大火力で押し切る移動砲台の様な人だ。
だからこそ、接近されて懐に入られるのを嫌う。
そして懐に入られた時は、高確率でバリアバーストで相手を弾き飛ばして距離を取ろうとする。
隙はそこに有った。
バリアバーストは受け止めた相手を、バリアに指向性を持たせて炸裂させる事で弾き飛ばす魔法。
防御力がそのまま攻撃力になる優れた技術だ。
だが、裏を返せば防御手段を攻撃手段に回している事になる。なら、その瞬間の防御は？
如何になのはさんが並列思考に優れていたとしても、『飛行しながら』『バリアを展開しつつ』『バリアに指向性を持たせて炸裂させる』。
この３つを同時にこなして、更に咄嗟に魔法を使うのは不可能だ。
バリアバースト直後にはどうしても隙が出来る。
発生する閃光と反動による、決定的な技発動後の硬直があるのだ。
１対１なら何も問題は無いだろう。相手は吹き飛んでいる。
例え１対多でもそこまでの問題にはならないだろう。魔力弾が飛んで来るまでに硬直は解除される。
だが、その一瞬の隙を撃ち抜く弾なら？僅かな間隙を逃さぬ魔弾ならば？

「（ま、運も有ったわよ。
ディバインシューターかアクセルシューターで対応されたら、流石のあんたもきつかったでしょ）」
「（だね。よし！指定位置に着いたよ？）」
「（じゃ、第二弾行くわよ？）」
「（了解！）」

もう悩まない。ここで駄目ならもう無理。そう割り切る。
ここが分水嶺だ。全てを出し切り…そして勝つ！！！

Ｉｎｔｅｒｌａｒｄ－ｏｕｔ

ミッドチルダ中央区画　機動六課　訓練用シュミレーター内
ビル屋上

「ふむ。そう来たか」
「あっさり言うけどさ。今の、神業に近いよ？」
「確かに。幾らなのはの視界が遮られるとは言え、それは撃つ側のティアも同じだろ？
あぁも的確に当てるなんて…」

ビルの屋上で談笑する3人組。
そちらには目もくれず、ライトニング隊は唖然としていた。
フェイトは言うまでもないが、エリオの心中には驚嘆が満ちていた。
以前、弾丸回避訓練（シュート・イベーション）を行った際、全身全霊の突撃（チャージ）をなのはに敢行したが、バリアジャケットに傷一つ負わせる事は出来なかったのだ。
それをただ一発の魔力弾で成し遂げたティアナへ畏敬の念を抱かず

には居られなかった。

「っと、そうこうしている内に、なのはが動くぞ？」

御剣の台詞に、全員の視線がなのはへ向く。
と同時になのはの体が光に包まれたかと思うと、バリアジャケットの形状が変わっていた。
それに合わせて、レイジングハートもエクシードモードになっている。

「おいおい。エクシードモードかよ。なのはの奴、本気だぜ？」

黒峰の台詞通り、普段のアグレッサーモードを汎用型とするなら、今のエクシードモードは戦闘用。
少なくとも格下相手に使うものでは無い。

「アグレッサーでは装甲を貫かれると判断したんだろう。事実、肩部分を吹き飛ばされたからな。
…さて、ティアはどう出るかな？」

一方その頃。
有体に言えば、スバルはテンパっていた。

「（どどどうしようティア！なのはさん本気だよ！？）」
「（落ち着きなさい。予定が早まっただけよ…まぁ、流石にきつくなるだろうけど）」
「（そんなあっさりと！）」
「（だから落ち着きなさいってば。あのモードのデメリットは低機動、そして魔力の消費量が大きい事よ。そこを突くわ）」

「（…ちなみにティア？あのモードのメリットって何？）」
「（高火力で重装甲。なのはさんの特性を、極限まで活かすためのモードよ）」
「（…）」
「（…）」

お互い無言になる2人。
だが、不意に背筋を走り抜けた悪寒に、ティアナはなのはの方を振り仰ぐ。
するとそこには体を捻り、レイジングハートを振り被ったなのはの姿が有った。

「（スバル！今すぐなのはさんの方へ向けてシールド展開！必要ならカートリッジも使って良いわ！！）」
「（う、うん。分かった！）」

スバルへ指示を飛ばすと同時に、自身もシールドを展開するティアナ。
ティアナがシールドを展開すると同時に、周囲は桜色の閃光に包まれた。

「…今、なのは…何やった？」
「ディバインバスターで横薙ぎにビル群を吹き飛ばした。端的に言えばこうなるな。
正確には『ディバインエクスターミネーション』と言うらしいが」
「エクスターミネーションって…殲滅って事？」
「そう。ディバインバスターの出力を押さえる事で、効果範囲を広げたモノだ。発射しながら移動も出来る。
私と模擬戦をやった結果、考え付いたモノらしい」

因みに、命中したらしたでそのまま出力を上げてディバインバスターが飛んで来る。
そんな殲滅魔法を受けたビル群は次々に倒壊し、凄まじいまでの土煙が上がっていた。
このシュミレーターで投影されるものは、魔力を使用して生み出された魔導生成物質で出来ている。
故に非殺傷設定でも破壊できるのだが…

「しかし、なのはも本気だな。最早教導の域は越えているぞ？」
「そう言えばそうだな。やり過ぎの気もするし」

そう思い、御剣がなのはに通信を開こうとした瞬間、土煙を切り裂き、なのはに向かって魔力弾が襲いかかった。

「――つっ！」

咄嗟になのはもシールドを展開したが、先頭の一発はシールドが展開しきる前に再度左肩に着弾。
今度はバリアジャケットを貫通するまでには至らなかったが、それでもなのはは少しよろめいた。
しかし、すぐさま砲撃を魔力弾の飛んできた方向に撃つなのは。
極太の魔力砲が土煙ごと対象区域を吹き飛ばす。が、今度は先程魔力弾が飛んできた方向とは真逆から攻撃がなのはを襲う。

「くぁっ！」

攻撃中の無防備な背中に魔力弾の直撃を受け、たまらず体勢を崩すなのは。

「Ｏｖａｌ　Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ．」

再度バリアを展開し、戦況の把握に努める。

ティアナの魔力弾はもう襲ってこない。向こうからはこちらの様子が把握出来ている。

「この土埃の中で…？」

疑念を抱くなのは。だが、なのはにとっての災難はまだ続く。

自らがビルを破壊した事によって発生した土煙がなのはの方に流れ、視界が包まれてしまったのだ。

このままではまずい。だが、ここでバリアを解除すれば、またティアナの魔力弾が襲ってくるかも知れない。

その一瞬の思考を読んだかのように、周囲からローラーの音が響く。

薄れゆく土煙に隠されてはいるが、辺りにはウィングロードが張り巡らされていた。

「…レイジングハート、バリア解除」

「Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．Ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ．」

このままバリアを維持し続けても意味は無い。先程の二の舞だ。

なら――

「Ｓａｃｒｅｄ　ｃｌｕｓｔｅｒ．」

――拡散攻撃（クラスター）で仕留める！

「シュート！」

術者（なのは）の命令に従い、四方八方へ散らばる魔力弾。

その内のいくつかはスバルに襲いかかり――

バシュンバシュンバシュン

――目標の寸前で四散した。

「…やっぱり」

ティアナは何らかの手段を用いて周囲の状況、特になのはの位置や状況を把握している。

そう確信を持ったなのはの行動は早かった。自身の全速を以てその場を離脱。上空へと舞い上がる。

そして、手品の種はすぐさま見つかった。なのはを追う様に着いて来る極僅かな魔力反応。

その場で反転と同時にアクセルシューター―でその座標を打ち抜く。

オレンジの閃光と共に何かが炸裂した。

「サーチャー…それも高度に隠蔽されて、魔導生成物質の粉塵の中じゃ見つけられない程の…

こんな技術をティアが？」

なのはがそこまで考えた途端、未だ漂う土煙を引き裂きオレンジの魔力弾が雨霰と飛来する。

咄嗟にシールドで防ぐなのは。

今回は今までの変幻自在な攻撃では無く、一方向からの集中攻撃。

しかし…

「…？軽い？」

そう。なのはが言う様に確かに量こそ多いが、一発一発の威力は

かなり下がっている。
それでも、並みの魔導師の射撃魔法弾よりは威力が上だが。しかし
これでは、なのはのバリアジャケットは貫けない。
考えられる事は――

「…牽制！」

――なのはの後方から猛スピードで直進して来る反応。スバルだ。
ウィングロードの先端に位置取り、空を走っているかの様になのは
へ向かう。

「アクセルシューター！」

そうはさせじと、なのはもアクセルシューター―で対応しようとす
る。だが。

バシュシュシュン

シューターのスフィアは発生とほぼ同時に、オレンジの魔弾に撃
ち落とされ霧散した。

「ティア…」

地上を見ればビルの屋上に陣取ったティアナの姿。狙撃用バレル
を展開し、なのはに狙いを定めていた。
今からティアナの対応に時間を裂けば、すかさずスバルが襲いかか
って来る。今はスバルを！

「ディバイン！」
「（させません）」

突如なのはの脳裏に響く念話。その声とほぼ同時に、ディバインバスターのスフィアさえ撃ち落とされる。

「でぇえええりゃぁあああああああ！！！！」

「…くっ！！」

遂にスバルの拳がなのはを捕えた。

ギャィィイイイイイイイイ！！！！

スバルの拳となのはのシールドが衝突する凄まじい摩擦音が辺りに響く。

「バリアァァァァ…」

「んっ…！」

スバルの拳が開かれ、なのはに向かって指が突き出される。すると、徐々にスバルの指がなのはのバリアを障子に指を突き込む様に浸食して行った。

なのはも抵抗するも、スバルのバリアブレイクは一向に食い止める事はできず、そして遂にスバルの五指が第二関節までバリアを突き抜けた。

「ブレェェエイク！！！」

「きゃあ！？」

すかさずスバルは拳を握りこむ様にバリアを砕く。

その衝撃でたまらず仰け反るなのは。

「一撃…必倒…！！」

そしてスバルは準備に入った。自身の全力、最高の威力を誇る一撃を放つ為の準備に。

「ベオウルフ・ゾディアック…！」

スバルの背に3対6枚の翼が展開される。

なのはの体勢は未だ崩れたまま。バリアを破壊された事に依る反動から、魔法での防御は不可能…！

好機は今！！

「一気通貫（アクセラレーション）！！！！！！」

スバルの渾身の一撃。

それは狙い過たず、なのはを捕え、十分な手応えをスバルに与えつつ、なのはを吹き飛ばした。

ミッドチルダ中央区画　機動六課　訓練用シュミレーター内

ビル屋上

「なのは！！？」

「…直撃したな。バリアの展開も確認出来なかった」

悲鳴に近い声を上げビルから身を乗り出すフェイトと、対象的に淡々とした御剣の台詞。

「しかし、なんでスバルになのはのバリアが破れたんだ？そこまでの技能はまだ無い筈だろ？」

黒峰が呟くように言う。

「ティアだ」

「ティア？」

それに答える御剣。

「さっきの衝突の時、狙撃用バレルを仕舞ってクトゥグアに向かって何かしていた。

恐らくはデバイスを介して、スバルのバリアブレイクを補助していたんだろう。

スバルの魔力出力と怪力、ティアのバリアブレイクプログラム。

組み合わせれば如何になのはのバリアと言えどそう長くは持たなかったと言う訳だ」

「…そんな事できるのか？」

「可能不可能で言うなら可能です。

バリアブレイクは防御魔法を構築しているプログラムに介入して防御魔法を侵食・破壊する魔法。

対象のバリアを解析して味方に転送して、それに応じたプログラムを受け取って発動する。ただそれだけの事ですから。

普通ならそんな無駄な事はしませんけど」

更なる黒峰の質問に答えたのはフェイト。

「だが、結果はご覧の通りだ。まぁ、あの2人がお互いに補い合った結果と言う訳だ」

「成程。で？この模擬戦はティアとスバルの勝ちで終わりか？」

「いや。なにせ、今まさにスバルが落とされたからな」

「「え？」」

ドガァァァン

御剣の台詞とほぼ同時に響く爆発音。
爆煙が晴れた後には、力無くウィングロードの上に横たわるスバルの姿が有った。

「な、何が！？」
「なのはが吹き飛びながらリカバリー、そのままショートバスターでスバルを打ち抜いたな。
ショートバスターとは言え、あれでは暫く立てまい」
「…えらく淡々と言うけどな、お前。どっちの味方だよ」
「どちらでも無いさ。強いて言うなら、どちらの味方でも有る」
「なんだそりゃ」
「さて、そんな事よりいよいよ佳境（クライマックス）だぞ？」

御剣に促され、全員の視線はとあるビルの一角に向かう。
そこには、ティアナとなのはが真正面に向かい合っていた。

「ティア。これで1対1。降参するならもう止めるけど？」
「冗談きついですね、なのはさん。次元犯罪者にも同じ事言うんですか？」
「言うよ。痛い目には合わせたくないからね」

2人の会話はあくまで穏やかに進む。

「まぁ、確かにスバルはあそこで伸びてるし、弾丸（カートリッジ）も尽きかけ。私の勝ち目は薄いですね」
「私も大分ダメージ受けたからね。この後の業務に差し支えない様

に、もう終わりたいんだけど…」

なのはのバリアジャケットは、既にアグレッサーモードに戻っている。

高出力で維持に魔力を大量に消耗するエクシードモードを維持するだけの余力が、もうなのはには残されていなかった。

あえてティアナに近づいたのも、残り少ない魔力を温存する為。

浮遊魔法に使う僅かな魔力さえ、次の一撃に込める為に。

そこまでなのはを追い詰めたのは間違いなくスバルの功績だ。なら、それを無碍にすることなど、ティアナに出来る筈も無い。

「お断りします」

ここで下がれば、自身の為に全力を尽くしてくれた相棒に面目が立たない。

相棒の全力に応える為、ティアナもまた、全力を尽くす。

「だよね」

予め決められたレールの上を走る様に、2人の会話は終着点に。

お互いにデバイスを構える2人。周囲の空気が張り詰める。

一触即発。西部劇のガンマンの様に早撃ち勝負。

ティアナは高速徹甲弾を。なのははショートバスターを。

お互いの最速を以て相手を打倒する。

ガドン！！！

…勝負は一瞬で付いた。ビルの屋上にはピンクの爆煙。

なのはのショートバスターが着弾した証だった。

晴れる爆煙。１人の人影。立っていたのは…なのはだった。

「…御剣さん」

「お疲れ」

背後に降り立った良く知る気配に、振り向かず声をかけるなのは。

「ティア、こんなに強くなってたんですね」

「ティアだけの功績では無いさ。スバルとのコンビだからこそ、だろうな」

それを聞いてなのはの肩が震える。恐らくは笑ったのだろう。

「そうですね。ティアは本当に運が良いですよね」

「運、か。運も実力の内、と言う奴か」

「えぇ。と言う訳でこの勝負。…引き分けです」

そこまで言った所で、なのはは崩れ落ちた。

「…さて、３人を医務室に運ばなくてはな」

機動六課　医務室

「…ん…」

目を覚ましたティアナにまず見えたのは、病院や医務室に付き物の白い天井。

起き上ろうとした所、全身を淡い痺れが襲った。

「…っ…やっぱ効くわね…なのはさんの訓練用魔法弾…」
「それはお互いさまだと思うなぁ…」

不意に聞こえた声。
その正体を突きとめるべく、首を捻ったティアナの前に現れたのは、起こされたベットに背を預けているなのはの姿だった。

「…あれ？」
「スバルに殴られた所は痛いし、その上からティアに撃たれた所為で、自分じゃ上体起こせないんだよ？」
「…何でなのはさんまで医務室（ここ）に？」
「相討ちだったからだ」
「…仁？」

ティアナの質問への返答は、医務室の入り口から返って来た。
正確には、丁度入って来た御剣からだが。

「両者ＫＯ。依って、この模擬戦は引き分けとする。以上。ほれ、なのは。食堂から粥を貰って来た。
食べてからこの薬を飲め。しばらくすれば痛みは引く」
「ありがとうございます」
「…つまりどう言う事？」
「そのままの意味だ。両者共に魔力ダメージに依るＫＯ（ノックアウト）。
早い話が引き分けだな」
「…そっか。……あれ？じゃあ賭けは？」
「賭け？あちっ！」

事の次第を知らないなのはが首を傾げ、舌を火傷した。どうでもいいので無視する。

「勝っても負けてもいないからな。ノーコンテストが妥当と言った所だな。普通なら」

その台詞にティアナが安堵する事が出来なかったのは、御剣が最後に付け加えた一言の所為だろう。

「…で？私はどうなるの？」
「…イタクァ、ｃｏｄｅ５５１起動」
「ｓｉｒ．ｙｅｓ，ｓｉｒ」
「イタクァ？」

御剣が呟くと、ティアナの傍らに置かれていたイタクァが答えた。と同時に、ティアナの左手首にブレスレットが現れ、すぐさま腕甲に変わった。

「…何？これ…」
「ティア、魔導の全てを封印する、と言ったな」
「えぇ。これがその為の物って事？」
「更なる力を与える、とも」
「…で？これはどっちの為の物なの？」

苛立ちを隠しもせずに言い放つティアナ。

「どちらも、だ。試しにスフィアを作ってみると良い」
「…わかったわ」

しぶしぶと言った感じで御剣の言葉に従い、掌中にスフィアを形成しようとしたティアナだったが、その意志に反して何も起こらない。
暫くすると、オレンジの靄の様な物が現れすぐに消えた。

「…そういう事。だからどちらも、ってわけね」
「そう言う事だ」
「どう言う事なんですか？」

すっかり蚊帳の外だったなのはが聞いて来る。

「これは、魔法力を徹底的に拡散させるアイテムだ。
もとは魔術師の囚人を拘束するための物でな。ＡＭＦを見に纏わせる様な代物だ」
「それがどうして更なる力なんですか？」
「これを装備した状態でスフィア形成が出来れば、外した時の集束力は飛躍的に上がる。
実際のＡＭＦなど物ともしなくなる程の、な」

そこまで言って御剣は立ちあがり、ティアナの方を向き直る。

「外して欲しくなったらいつでも言え。別にペナルティを課す訳でも無い」
「そう。分かったわ。それは良いのだけれど」
「何だ？」

何気なく答えた御剣をティアナは睨みつける。

「結局勝っても負けてもこうなったんじゃないの」
「いや？負けた場合は説明なしで放置する心算だったが。それでも、いつか気付くと信じていたがね」
「…はぁ。いいわよ。もう終わった事だし」
「そうか。では3人とも、お大事に」

そう言って御剣は医務室を出て行った。

「…そう言う事だったの」
「えぇ。そう言う事だったんです。
スバルも悪かったわね。巻き込んじゃって」
「ううん。巻き込まれたって言うか、アタシは首突っ込んだだけだし」

いつの間にか起きていたスバルに、ティアナは謝罪した。
だが、スバルは気にしていないと言う。ならそれ以上言っても抉れるだけだ。

「じゃぁティア、明後日からその辺の訓練から始めようか」
「え？」
「元々ね、明後日からの訓練は個人技能訓練に移ろうと思ってたの。
多分御剣さんはその辺も見越して、そう言う事をしたんじゃないかな」
「…はい。宜しくお願いします…そう言えば、なのはさんは私に付いてくれるとなると、スバルはどうなるんですか？」
「スバルには黒峰さんがキャロには御剣さんがそれぞれ付く事になってるの。
何か手伝えることは無いか、って言ってくれてね」
「亮はともかく…キャロに仁が？」
「ずっとマンツーマンってわけじゃないけどね。私もキャロに射撃魔法を教えてあげないといけないし。
ローテーションみたいな感じかな。と言う訳で、これからもよろしくね」
「…はい」
「次の隊長戦は最初っから本気で行くから覚悟しといてね」
「……はい」

「……ティアァ…」

つい涙目になった2人だった。

機動六課　ヘリ格納庫

「っだぁあああああああ!!!負けた畜生!!!」
「誰が予想できるんだよ引き分けとか!!!」
「いや、何でも当てた奴がいたらしいぞ」
「マジか!?誰だよ?」
「御剣提督補佐」
「「……身内じゃん!!!」」

機動六課　監査執務室

「…とりあえず言っとく。この卑怯者」
「何がだ」
「黄金律＋直感って…幸運（ラック）のランク低い癖に…」
「というか僕らって相応に金持ちなんだから別に賭けになんか参加しなくても…」
「一個間違ってるぞ原口。金持ちなのは俺らじゃねぇ。法律上、俺らの金は大部分が御剣のだ」
「そんなに金が欲しいのか!この金の亡者!!!」
「有って困る物でも無いからな」

…そう。念には念を。

## 8章－11　ティアナ（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：お待たせ…本当にお待たせしました。8章11話です。

ティアナが着ける事になった腕甲は言わずもがな、某オサレ系漂白剤の某眼鏡の手袋が元ネタです。

これで8章を終え、次話からは9章、ＳｔＳ後編になります。

機動六課フォワード陣に与えられた、束の間の休息。
それぞれ思い思いの休日を過ごしていた。
だが、謎の少女によって事態は急変する。
次回「機動六課のある休日（前編）」
お楽しみに。

# 9章－1　機動六課のある休日（前編）

2週間後　5：44　機動六課　女子寮

「ティア～ティ～ア～朝だよ～」

ここはティアナとスバルの部屋。

「ん…んん～」
「今日は練習場セットの当番なんだから早く～」
「ん～～～～～～…」
「…にひっ」

毛布を剥ぎ取り揺すっても起きないティアナを見て、スバルは厭らしい笑みを浮かべる。

「ティ～～ア～～～～」
「ん…」

再度声をかけ起きない事を確認してから、ティアナに跨るスバル。
流石に自身の体重が掛かれば起きてしまうだろう事を考慮し、跨りつつも座りはしない。
そして、スバルはその手をティアナの乳房に当てると、柔らかく揉みしだき始めた。

「ん…ふっ…」
「～♪」

鼻歌交じりに一定のリズムでティアナの胸を揉むスバル。
ティアナの顔には僅かに朱が差し、息も次第に熱が入り始める。

「はぁ…ん…っ」
「…」

その色気に、おふざけで始めたスバルも次第におかしな気分になり――

「…ん？」
「ん～～～～」

…目覚めたティアナの眼前に有ったのは、唇を突き出し、こちらに迫って来るスバルの顔。
両者の距離は、どちらかが少しでも動けば唇同士が触れ合う程だった。

「……ふん！！！」
「おふぅ！！」

状況を把握した瞬間、ティアナはスバルを腹筋で跳ね飛ばす。
そこから流れる様に蹴撃。自身の寝台からスバルを蹴り出した。

「で？どう言うつもり？」
「痛い痛い痛い痛いです！！！踏まないで！って言うか踵で踏み躙らないで！変な性癖に目覚めそうだから！！！」

そのままスバルの方へ歩いて行くと、全くの容赦無しにその臀部を踏みつけるティアナ。

視線は冷たく、視線に殺傷能力が有れば確実にスバルは死んでいたであろう鋭さだ。

「もう目覚めてるでしょうに。同性愛者に偏見は無いけど、やるなら余所でやってくれる？私にそっちのケは無いの」

「アタシだって無いよ！誤解だよ！ティアナが変な声上げるからアタシも変な気分になっちゃっただけでぃたいいたいいたいたい！！！」

「また私にセクハラしてたのね？良く分かったわ。そんな理由で！私のファーストキスを！奪おうと！するな！！！」

「止めっ！痛っ！うっ！…あっ」

「…！？」

機動六課　訓練用シュミレーター

「はい、今朝の訓練と模擬戦、終了！」

「「「「ありがとうございました！」」」」

横一列に並ぶ新人４人の前に立っているのは、なのは、フェイト、御剣、黒峰。

新人４人にはそれぞれ程度の差はあれど、疲労の色が見える。

「さて、実は今日の訓練は第二段階の終了試験だったんだけど…」

「「「「えぇっ！？」」」」

「全員合格だ」

「仁、相変わらず早過ぎ」

「そうですよ、御剣さん。こう言うのはちゃんと溜めないと」

「でも、早く言ってあげた方が良いんじゃないかな？」
「どっちでもいいから先進めろよ」

さっさと結果を発表してしまった御剣に苦言を呈すティアナとなのは。
それを擁護するフェイトに、我関せずの黒峰。
黒峰の指摘に、なのはは咳払いを1つしてから続けた。

「デバイスのリミッターも壱段階解除するから、後でシャーリーの所に預けに行ってね」
「今後は全員セカンドモードでの訓練を基本とする。…なのは」
「はい？」

御剣の呼びかけに一度窺うように視線を向けてから、得心が入ったかのように視線を前に戻した。

「ティアはもうその腕甲の影響下でも、スフィア形成が出来る様になったし、御剣さんと相談して、もう外してもいいかな、という結論になったんだけど、どうする？」
「…いいんですか？」
「うん。でも、そのまま着けていれば、まだ集束能力の向上は見込める…でしたよね？」
「あぁ。今ティアが出来るのは、あくまでスフィア形成。そこからの更なる集束を習得すれば、以前とは比べ物にならん程になるだろう」
「…」

御剣の台詞を受け、考え込むティアナ。

「何も今すぐ答えを出せとは言わんさ。明日までに答えを決めてお

け」
「…明日？」
「あぁ。訓練再開は明日からだ」
御剣の台詞に顔を見合わせるＦＷ陣。
「私達も、隊舎で待機する予定だし」
「皆、入隊日から纏まったお休みは無かったしね」
「そんな訳で、今日は皆、１日お休みです。町にでも出かけて、遊んで来ると良いよ」
なのはの台詞に、歓声を上げて喜ぶＦＷ陣。
こうして、機動六課ＦＷ陣の休みの１日が始まった。

機動六課　ヘリ格納庫　搬入口

「貸すのは良いけど、こかすなよ。プロテクターは？」
「自前です」
スバルと２人で街の方へ遊びに行くと決めたティアナは、ヴァイス陸曹にバイクを借りに来ていた。
「…よし。良い調子だ。ほれ！」
「おっと」
ティアナはヴァイスが放ったバイクのキーを受け取る。
「じゃぁ、遠慮なく借りていきますね。ガソリンは満タンにして返しますから」

「そこまで気ぃ回さなくても良いって。楽しんできな」
「はい。この借りはいずれ」
「借りだなんて大げさな…まぁ、折角だからお言葉に甘えるとしますか。
今度飯にでも付き合ってくれよ。それで良い」
「奢りですか？まぁ良いですけど。じゃ、行って来ます！」
「気ぃ付けてな！」

そうヴァイスが声を掛けると、ティアナは満面の笑みでこちらに頭を下げて来た。

「…行ったか。て言うか、そういう意味じゃねぇんだけどな…まぁいいか」

ヴァイスが見惚れている間に、走り去って行ったティアナの後ろ姿を暫く見つめた後、少しぼやくヴァイス。
仕事に戻ろうと振り返ろうとした時、後ろから肩を掴まれた。

「ひぃ！！？って御剣の旦那！？どうしてここに？」
「何。ティアが街に行くと小耳に挟んだ。ならば足が要るだろうから、バイクを貸そうと思ってな」

御剣の背後には白銀の大型バイクが鎮座していた。
鏃の様なトータルフェンダー、武骨ながらもシャープなフォルム。
複雑な機械である筈のソレは、何故か大海を泳ぐ鮫をイメージさせた。

「…それをアイツに？」
「あぁ…まぁ良いか。そう。それはどうでもいいが…」
「痛たたたた旦那！！！指！指が肩に食い込んでますよ！？」

「逢引きとは感心せんな。ティアはまだ１６だぞ？」

ヴァイスの肩を掴んだまま、やれやれと言わんばかりに頭を振る御剣。
その間も当然ヴァイスの肩は万力の如く絞めつけられている。

「ぬうぅううう…（耐えろ俺…ここで弁明しないと…Ｄｉｅ！）い、いや、そういう意味では無くてですね？純粋に食事でもどうかな、と思っただけです肩？げる！！！」

「それはデートに誘う常套句だろう。ティアの好感度が足りないうちに誘った事が貴様の死亡フラグと知れ。
ポイントにすれば後６と言った所だ。因みに貴様の現在好感度は１。最高好感度は私達を除けばスバルの７だ」

「スバルの嬢ちゃんも入ってるんですかって俺惨敗！！！」

「諦めろ。更に言うなら選択肢を誤れば、即私達が現れる。
今回は警告も兼ねる故止めは刺さんが、肝に銘じておくと吉だ」

今にも砕けそうだった肩が解き放たれる。
痛みのあまりに呼吸もままならなかった事に気付き、荒く息を吐く。
顔を上げれば、先程のバイクに御剣が跨っていた。…制服のままで。
どことなくシュールな絵だ。

「ではな」

そう御剣が言い、バイクのクラッチを繋いだ瞬間、御剣は爆音を立ててバイクごとヴァイスの視界から消失した。

「！？」

呆気にとられたヴァイスだったが、御剣の駆るバイクが猛スピー

ドで発進したのだと気付いた。
遥か遠方に、御剣の後ろ姿が米粒の様に見える。

「…ただの処刑装置じゃねぇか。アレ」

呆れた様に呟いて、今度こそ仕事に戻るヴァイス。
肩には痣はおろか痛みさえ残っておらず、先程の事が夢ではないかと思える程だ。
だが…

「…絶対諦めねぇぞ。畜生め」

そう呟くと同時にキョロキョロと周囲を見回すヴァイス。
御剣達の影が見えない事を確認し、一息ついて作業を開始した。
…ヴァイスの恋路、前途は多難である。

数時間後　ミッドチルダ中央部　繁華街　ショッピングモール

久々の休日を満喫したスバルとティアナ。

「「ん？」」

一通りの店を回り、そろそろ隊舎に帰ろうかと話していた時、唐突にデバイスから呼び出しが掛かった。

「キャロから全体通信？」
「何かあったのかしら」

『こちらライトニング４！緊急事態に付き現場状況を報告します！
サードアベニューＦ－２３の路地裏にて、レリックと思しきケース
を発見。
ケースを持っていたのは小さな女の子が一人』
『女の子は意識不明です』
『指示を！』

ミッドチルダ中央部　近郊

ギャキャキャキャキャキャ！！！

御剣の駆るバイクが金切り声を上げて方向転換する。

「（御剣、聞こえたか？）」
「あぁ。丁度近くにいる。私が先行するので後から来い」
「（了解。このタイミングって事は…）」
「間違い無いだろう。準備しておけ。あいつらが来るぞ」
「（応！）」

## 9章－1　機動六課のある休日（前編）（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：新章突入！9章1話です。

…あとがきに書く事もそれほどありませんね。
キャラへの質問とか受け付けましょうか。
疑問、質問、ありましたら感想へどうぞ。

キャロからの通信と同時に出現した、ガジェットへの対処に出動する機動六課。
そこへ襲いかかる怪しい影。謎の少女の正体とは。
次回「機動六課のある休日（後編）」
お楽しみに。

# 9章－2　機動六課のある休日（後編）

ミッドチルダ中央部　繁華街近郊

「では部隊長。予定を変更して、このまま現場へ向かいます」
「（あぁ、そうしてくれ）」
「黒峰を残し、原口をこちらに回します。
現地に原口が着き次第、例の少女とレリックをそちらに転送しますので、回収して下さい」
「（そっちは任せたぞ）」
「諒解です」

そう応えて御剣は回線を閉じた。
本来は本局へ定例報告に向かう予定だったのだが、こうなっては仕方が無い。
クロノには後で事情でも伝えておけば良いだろう。
…と言うのは建前。今日、つまり機動六課ＦＷ陣が休みの日、それがナンバーズ初襲来の日でも有る事は
原作知識（もうかなり薄れて来ているが）を元に知っていた。
それを前提に、本局への報告の日を今日にずらし、御剣はすぐに対応できる様に近場で張っていた。

「原口」
「（分かってる。現場に着いたら位置情報の転送宜しく）」
「それに付いて私も戻る。その後黒峰を現場にやるから、そう言っておいてくれ」
「（諒解）」

ミッドチルダ中央部　サードアベニューＦ－２３

「あっ来た！」
「早かったわね。もう少し掛かるかと思ったのに」

スバルの声に振り向けば、確かに御剣がこちらにやって来るのがティアナにも見えた。

「待たせたな。例の子は？」
「はい。こっちです。年齢は5才程。身元を確認できる物はありませんでした。ケースは封印処理済みです」
「所持品はこのケースだけか」
「はい。ただ、この鎖の先に、何かが付けられていた跡があります。もしかしたらレリックのケースかもしれません」
「ふむ。ではロングアーチにスキャンさせよう。その結果次第では、レリックの回収もやって貰う事になる」

そう御剣が言った瞬間、一切の前触れ無しに原口が現れた。

「お待たせ」
「「わっ」」
「きゃっ」

それに驚き声を上げるスバル、エリオ、キャロ。
対して御剣とティアナは平然としていた。

「あぁ、この子だ。転送頼む。序でに私もな」
「諒解」
「仁はこっちに残らないの？」
「あぁ。この後、地下水路の探索に移る。私よりも黒峰が適任だ」
「そう言う事」

「じゃ、行くよ？」
「あぁ」

少女を片手で抱き、ケースを持ったまま、御剣の姿は虚空に掻き消えた。
数瞬もしないうちに、入れ替わる様に黒峰が姿を現す。

「はい到着。じゃあ、僕も戻るよ」
「おう。任せとけ」

そう言って、原口の姿もまた掻き消える。
次々に人間が消えたり現れたりする光景に、ティアナを除いたＦＷ陣は目を白黒させていた。

「ど、どう言う事なんですか？」
「転送や召喚とも違いますよね？」
「あぁ、原口の転送見るのは初めてか。あいつの転送は魔法での転送とは違って、結界を利用した物だからな」
「結界魔法の応用であんな事が出来るんですか！？」
「結界っつうとまた違うけどな。Ａ点にあるものの周囲に結界を張って、その中の物をＢ点に張った結界に移すって感じか。一種のワープだな。
さて、そんな事よりその子供が出て来たって言うマンホールに行くぞ。楽しい楽しいピクニックだ」
「その目的地が下水道ってのはどうなのよ」

機動六課　医務室

「では、頼む」

「はい。お任せ下さい」

少女を医務室に預け、司令部に向かう御剣。

「さて、そろそろか？」

御剣が呟くと同時に、呼び出し音が鳴り響いた。

「はい。こちら御剣」

「（おぉ。戻ってたんだな。とんぼ返りで悪いが、海上にガジェットが出た。飛行型が群れを成して大挙して来てやがる。頼めるか？）」

「えぇ。例の子は医務室に。レリックも回収済みです」

「北西は両隊長に頼んである。南西の方を頼む」

「諒解」

御剣は通信用ウィンドウを閉じると、踵を返し走り出した。

外に出た所で御剣が身構えると、制服姿は一変し、白銀の軽装へと変わる。

「『天空翔けし黄金の船（ヴィマーナ）』」

更に御剣は黄金とエメラルドで構成された船を呼び出し、それに飛び乗った。

「速力最大。南西に進路を。ヴィマーナ、発進！」

そう御剣が叫んだ瞬間、ヴィマーナは南西の空へ飛び去った。

周囲を無数の線が奔って行く。そう感じられるほどにヴィマーナの速度は凄まじく、数秒と掛からずに南西の海上に出た。

「『空翔（タラリア）ける靴』」

御剣はヴィマーナを仕舞い、空中に降り立つ。
洋上へ目をやれば、ガジェット弐型の大編隊がこちらに向かって来るのが確認できた。

「さてと、一気に殲滅するとしよう。来い、ガラティーン」

それはアーサー王伝説に謡われし、もう一振りの神造兵器。
柄に封じられた擬似太陽の灼熱を以て、相対するもの一切合財を焼き払う。
その力を御剣が極限まで高め、解き放たんとしたその時だった。

「…何？」

突如、ガジェットの大群が御剣の眼前から消えてしまった。姿だけでは無い。
先程まで周囲に響いていた、ガジェット弐型の飛行音すらもまるで無かった事の様に消えてしまった。

「…幻影？だがこの感じ…っ！」

いぶかしみ、ぼやく御剣だったが、何かを感じ取ったかのように突如身を捩る。
すると、先程まで御剣の頭の有った場所を、高速で何かが通り抜けて行った。
もしその場に留まっていれば、一切の回避行動を取っていなければ、さしもの御剣も首と胴体が泣き別れしていただろう。

「…実際相手にすると、姿が見えない、と言うのは厄介だな…
だが惜しかったな。この程度ならどうとでもなる。『転輪する勝利の剣（エクスカリバー・ガラティーン）』！！！」

御剣が真名を唱えると、白銀の刃が閃光に包まれる。
光は周囲を照らし出し、ガジェット弐型の機影を映し出していた。
その聖剣の輝きは、日輪の輝き。多くの神話に謳われる、真実を照らし出す光。

「まとめて燃え散れ！！！」

叫ぶが早いか、御剣はその聖剣を横一文字に振るう。
御剣の放った一撃は、限りなく真名解放に近い物だったが、あくまで近いだけ。
本来の真名解放には及ばない。だが、その余波でさえガジェットを墜とすには十二分に過ぎた。
放たれた熱波はガジェットを襲い、そのガジェットが発する熱は周囲のガジェットに伝播して行く。
連鎖的に爆発を繰り返すガジェット弐型の大群。
結局、その一振りで南西方向の制空権は、御剣に握られた。

御剣とガジェットの交戦地点から凡そ２Ｋｍ程離れた場所に、その人影は居た。
シルエットから察するに、恐らくは女性。身に纏うは銀のマント。
周囲に展開した投影型モニターを操作しながら、女は不敵に笑っていた。

「くふふ…予想通りですね。あんな鉄屑ごときでは、箸にも棒にも掛かりませんか。

見えないなら居るであろう場所ごとフッ飛ばす。その発想は嫌いじゃないですね～
ま、そうでないとドクターがあんなに張りきる訳が無いですし」

そう言いつつ、女の視線は幾つか展開されたモニターの内、１つに向けられる。
そこには周囲をガジェット弐型の大群に囲まれるなのはとフェイトの姿が有った。

「さ～てと。マテリアルとレリック１つはさっさと転送されたし、こっちはあっさりやられちゃいましたけど、あっちはまだまだ行きますよぉ？
このクアットロのＩＳ、『幻惑の銀幕（シルバーカーテン）』。嘘と幻のイリュージョンで回って貰いましょ」
「悪いが、その目論見は外れだ」
「え？」

振り返ったクアットロの眼に映ったのは、自らに向けて今にも刃を振り下ろさんとする御剣の姿だった。

「ひっ！ひがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

とっさに避けたのは良いものの、御剣が振り下ろした刃の切っ先はクアットロを捕えていた。
自分の右腕がそこにない事を確認するように視線を彷徨わせるクアットロに対して、特に興味も無さそうに言い放つ御剣。

「ど、どうして私の姿がぁぁぁ！？
五感は当然、レーダーや電子システムでさえ騙しおおせるこの『幻惑の銀幕（ルバーカーテン）』に穴は無い筈！！」

「…ネタの割れた手品師程、みじめな物は無いな。後々面倒な事になる前に、お前だけはここで捕えさせて貰う」
「サセンヨ」
「おっと」

今度は御剣が横っ跳びに避ける番だった。
先程のクアットロは無様に逃げていたのに対し、御剣はある程度予測していた様にかわしている。
さも、横槍が入る事を予想していたかの様に。

「…え？」

そして展開に付いて行けないクアットロ。
先程まで劣勢だった己は解放されたものの、状況が未だ把握できずその場に立ちつくしていた。
しかし、それも数瞬。自身を苛む失われた右腕の痛みに耐えかね、その場を脱兎の如くクアットロは逃げ出した。

「…」

それを横目で見やり、特に執着するそぶりも見せずに御剣は眼前の相手を見据えた。
その身に纏うのは黒金の軽鎧。全体的にシンプルな造りだが、要所要所に鋭く尖った棘が突き出している。
そして、肩甲骨辺りまで伸びる白髪。艶やかな光沢をもつそれは、加齢によるものでは無く元々そう言う物なのだと語っていた。
そして何よりも御剣が注目したのはその顔。
毎朝鏡を見ればこちらを覗く姿。そう。その顔は御剣に生き写しだった。
違いと言えば、肌と眼の色。その白髪と相反するようにその肌は浅

黒く、瞳は血の色をしている。
そして、御剣はある確信を持っていた。こいつは自分の影（シャドウ）だと。

「…あまり気分の良い物では無いな。自分と同じ姿のモノが居る、というのは」
「何。コノ姿ハタダノ借り物ヨ。貴様ト言ウ存在ヲ元ニ造ラレタ我ガ、コノ姿ニナルノハ自明ノ事デアロウ？」

御剣がため息交じりにぼやけば、それに答える黒御剣（仮）。

「ふん。造られた、か。『世界』も回りくどい事をする。
そんな事をせずとも、守護者を手当たり次第に呼び出して来れば良い物を。
その方が、私も分かりやすくて楽なのだが」
「ソノ試算ハ既ニ行ワレタ。
結果、ソノ場合ノ『世界』ガ受ケル影響ハ、我ラガ派遣サレルヨリモ大キイ物ニナルト判明。
故ニ我ラガ派遣サレタノダ」

歪みを修正させるのに、更なる歪みを生じさせる事は本末転倒。
つまりはそう言う事だ。

「一々答えるとは律義な奴め。まぁ、お前が出て来た理由はこの場から去ったぞ？どうする？」
「愚問」

一言だけ言い放つと、黒御剣はその手に持った剣を構える。
先程は容姿ばかりに気を取られていたが、あれは『無毀なる湖光（アロンダイト）』。
奇しくも、今御剣が持っている『転輪する勝利の剣（エクスカリバー・ガラティーン）』とは好敵手の様な関係だ。

否、奇しくも、と言うのは間違いだろう。
相手は確実に意図的にアロンダイトを選んでいる。
ガラティーンの所有者であるガウェインは、アロンダイトの所有者であるランスロットに敗れ、その傷が原因となって死んでいるのだ。

「だろうな」

故に御剣はその掌中の剣を変える。
何故ならば、御剣の能力『剣軍師団（けんぐんしだん）』はその宝具の所有者の能力を得る。
と同時に、その伝説の背景も得るのだ。
例えば、かのアーサー王は泉の精霊の加護に依り水面を走る事が出来る。
御剣は一時的にアーサー王と自身を同一の存在とする事で、泉の精霊の加護を受ける事が出来るのだ。
だが、伝説には終わりが付き物だ。英雄譚の殆どは主人公の死によって終わる。
アーサー王は息子に裏切られ、クー・フーリンはゲッシュに縛られ、そしてガウェインはランスロットに敗れる。
この筋書きには御剣も逆らえない。故に、ガラティーンではアロンダイトに勝てないのだ。
新たに御剣が取りだしたのは一振りの長剣。
黄金の柄を持つその剣は、うっすらと刃の色彩を変えていた。

「…『不滅（デュランダル）なる絶世の剣』カ」
「…流石に一目瞭然か」

それはフランスの叙事詩、『ローランの歌』に謳われる英雄ローランが持つ剣。
天使から与えられ、多くの聖遺物を柄に内包する正真正銘の聖剣。

決して折れる事無き不滅の刃。

「…」

「…」

互いに向かい合ったまま、両者は空中で制止する。

数秒後、示し合わせたかのようにお互いに向かって走り出す。

遂に、伝説と伝説の剣舞の幕は切って落とされた。

## 9章－2　機動六課のある休日（後編）（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：9章2話です。

…例によって書く事が無いですね。

あぁ、一つだけ。

今後クアットロは出て来る度に酷い目に遭いますので、クアットロ好きの方はご了承ください。

…居るんだろうか。クアットロ好きな人って。

遂に明確な姿を見せた影（シャドウ）。

しかし、それは御剣と瓜二つな姿だった。

同様にその能力もほぼ同じ。戦いは膠着状態に陥る。

しかし、遂に御剣の奥の手が…

次回『剣舞』お楽しみに。

『不滅（デュランダル）なる絶世の剣』：対人宝具ランクＡ＋＋　レンジ３　最大補足１人

フランスの叙事詩、『ローランの歌』に謳われる英雄ローランが持つ剣。

出自には様々な伝承が有り、ローランの歌では天使からローランに授けられた剣として登場する。

窮地に陥ったローランがデュランダルを奪われまいと大理石に叩き付けた所、剣は折れず、逆に大理石が裂けた伝承はあまりに有名。

対人宝具としては、その切れ味によって防具に依る防御力の上昇を無効化する能力を持つ。

だが、相手の武器、防具に同様の『傷付かない』伝承が有った場合、その対象を弾き飛ばす。

# 9章－3　剣舞

ミッドチルダ中央部　上空

「はぁあああああああ！！！！」
「オォォォオオオオオオオ！！！！」

真っ向から、激しく切結ぶ御剣とその影。
唐竹（からたけ）、袈裟斬（けさぎり）、右薙（みぎなぎ）、右斬上（みぎきりあげ）、逆風（さかかぜ）、左斬上（ひだりきりあげ）、左薙（ひだりなぎ）、逆袈裟（さかげさ）、刺突（つき）。
長物ならば切斬、刺突、打撃、薙ぎ、払い。
大空を舞台に、上へ下へと目まぐるしく両者の立ち位置は変わる。
先程まで優勢だった側が、相手の出した新しい宝具に依って劣勢になり、また新たな宝具に依ってその劣勢は打破される。
先程からその繰り返しで戦況は一向に進展しなかった。
両者が共に使った宝具の数は合計すれば既に１００は軽く超え、今の所持宝具は御剣が『刺し穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルグ）』そして影が『轟く五星（ブリューナク）』である。
共に槍を構え睨み合っていたが、御剣は不意に背後へ跳び退くとその構えを解いた。

「…埒が開かん。やり方を変えさせて貰うぞ」

そう御剣が良い放つと同時に、御剣の背後の空間が歪む。
それに答える様に、影の背後の空間も歪んで行った。
そして顕れる名剣、神剣、宝剣、魔剣、神槍、魔槍と言った宝具の数々。
それぞれの使役者の敵に狙いを定め、食らいつかんとしている。

先に解き放たれたのは御剣側の宝具。
僅かな召喚開始の差で優位に立とうとしたが、初撃の殆どは影のブリューナクに防がれ、影側の宝具が打ち出され始めた事により、結局また膠着状態に陥った。
神剣には神剣が。魔剣には魔剣が。それぞれ相殺し合い、砕け弾かれ散って行く。
それその物が膨大な魔力の塊である宝具の激突は周囲の空間さえ歪ませ、天は陰り地が轟き海は渦巻く有様だ。

「その心臓…貰い受ける」

その只中に突っ込んで行く御剣。
その身に宿る矢除けの加護を以て雨霞と迫り来る剣弾を潜り抜け、影の眼前に踊り出る。

「『刺し穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルグ）』！！！」

そして放たれる因果逆転の魔槍。
放たれる前に心臓に命中すると言う因果を決定づけるその一撃は、紛う事無く影の心臓を貫いた――

「…」

――筈だった。
ゲイボルグの穂先は、影の胸の中心を確実に貫いた。
にも拘らず、影は無言でゲイボルグを掴むと、その手に持つブリューナクで御剣を穿たんとする。

「くっ！？」

済んでの所でゲイボルグを送還し、そのまま距離を取る御剣。
ブリューナクは僅かに鎧の肩口を掠めたが、御剣にダメージは無い。
にも拘らず、御剣に顔色は芳しくは無かった。
なぜならば――

「不死…いや、まさか」

――心臓を貫かれ死なない理由など、そうは無い。
不死種（イモータル）、それも最高位（ハイエンド）ならばともかく、大方の不死の弱点は心臓だ。
心臓はただの血液ポンプと言うだけでは無い。その名の通り心の蔵。
霊格の根幹がそこにはあるのだ。
心臓移植手術を受けた人間の記憶や嗜好に変化が現れ、それがドナーの物と一致した、と言う話は幾つかある。
吸血鬼は心臓を杭で穿たれれば死ぬ。人狼は心臓に銀の銃弾を打ち込まれれば死ぬ。その共通点は心臓を貫く事。
これによって歪められた霊格は正され人間に戻り、血液ポンプとしての心臓を貫かれた事で死に至る。
それでも心臓を貫かれ尚死なない存在、例えば真祖、例えば死の概念の無いモノ、例えば他に魂が有る為それに体が引きずられ死ねない体、命のストックを無数に持つ体、霊格に依る治癒能力では無い為心臓が弱点では無い、と言った例外は存在する。
だが、相手は御剣の影――座から宝具を呼び出す能力を持つモノ。
ならば答えは自明である。御剣自身が呼び出した事の無い、否、呼び出せなかった宝具。

「『全て遠き理想郷（アヴァロン）』…！」

ゲイボルグに胸を貫かれ、それを癒さんと発動した事で、御剣にはそれが感知できた。
それは「『世界』最強の守り」と形容され、最早防御というよりは

遮断の領域にある宝具。
あらゆる物理干渉・魔術は勿論の事、五つの魔法ですら例外ではなく、並行世界からのトランスライナー、多次元からの交信（六次元まで）をもシャットアウトし、極め付けには時間からも遮断する。
不老不死や傷の再生はこれの副作用でしかない。
そして所持するだけで所有者を癒し老化を停滞させ、あらゆる傷を治す。
何者にも侵害されぬ究極の一であり、魔法の域にある宝具。

「…厄介な…だが」

如何な御剣とて、その攻撃が届かなければ相手を打倒する事など叶わない。
相手は最上の守り。最強の矛たる乖離剣エアでさえあの守りの前には弾かれるのだ。
それでも。それでもアヴァロンは完璧では無い。
あらゆる物理干渉・魔術、五つの魔法く、並行世界からのトランスライナー、多次元からの交信（六次元まで）、時間をも遮断する、その鉄壁の守りを打ち崩す破城鎚。
それは――

「来い、エクスカリバー」

――既に御剣の手中にある。
本来その収まるべき剣が、鞘に攻撃する。あり得ない矛盾。その矛盾に依って鉄壁の守りは打破される。

「所詮は木偶か。自我は有るようだが、稚拙過ぎる」
「肯定スル。我ハ世界ノ端末。自由意志ナド大シテ重要トシナイ。我等ガ目的ハ、貴様等ノ抹殺及ビ世界ノ修正ヲ完遂スルコト」

「…そうして受け答えをするのもプログラムの一環か？
まぁ、大方の予想通りだがね。では止めをくれてやる前に幾つか問おう。
一つ、何故被害者とも言える私達を狙う？
私達は死神とやらのミスでこの世界に来た。文句はそちらに言ってくれ」
「……我等ハソノ件ニ関知シナイ。我等ハ世界ヲ歪マセル存在ヲ抹消スルノミ」
「…二つ目、私達が世界を歪ませるなら、それと同等なお前達はどうなる？更なる歪みを招くだけでは無いのか？」
「……我等ハ、コノ世界ノ住人トシテ生ミ出サレタ。故ニ、我等ノ存在ハ世界ヲ歪マセナイ」
「…そうか、大体読めた。最後の質問だが、貴様が倒されるとどうなる？」
「止ムオエヌ事ダガ、本来ノ意味デノ抑止ノ守護者ガ召喚サレル。
貴様等ニ関ワッタ全テノ存在ヲ抹消シ、世界ヲ修正スル。
コレハ『世界』カラノ警告デアル。我等ノ応答ぷろぐらむハコノ為ニ用意サレタ。
大人シク抹消サレルノデアレバ、貴様等以外ヲ傷付ケル事ハ無イ。
コレハ最後通牒デアｒ」

ドドッ

「…ア？」
「愚鈍。愚昧愚劣極まりない。だから稚拙だと言ったのだ莫迦め」

影の胸に突き刺さったのは2振りの剣。
一本はエクスカリバー、もう一振りは漆黒の長剣。
アヴァロンの守りはエクスカリバーに依って無効化される。
そして、もう一振りこそが御剣の本命。吸魂剣・ストームブリンガ

ー。

「貴様は私と同様に、座から宝具を呼び出せる。
だがそれだけだ。私の様にスキルを得られていない。所有者ではあるが使役者では無い。
私と真っ向打ち合えていたのは、一重に私が手加減したからだ。
でなくば、ゲイボルグとブリューナクが打ち合える訳が無いだろう。
気付いて居なかったのか？」

「何故…ソノ様ナ」

「油断させるため、それと大方何らかの防御手段を講じているだろうと踏んだからだ
そして、その３つ目の回答で、私が大人しく首を差し出すと思ったのか？
聞き出したかったのは２つ目だ。貴様はこの世界の住人として生み出されたと言ったな？
ならば、私達と同じだけの魂の比重を持っていると言う事。
ならば、それを奪い取る、乃至消滅させてしまえば空きが出来るだろう？」

「キ、貴様…良心ノ呵責ハ無イノカ！？殺害シタ相手ヲ更ニ辱メルナド！
我ノ魂ハ、貴様等ガ殺シタ者達ノ物ダゾ！？」

その台詞を聞き、御剣は形容しがたいほど厭らしい笑みを浮かべる。
心底相手を小馬鹿にしきったその表情は、雄弁に「知った事か」と語っていた。

「私が大切なのは私の世界の人間だけさ。
私、黒峰と原口、ティアとはやてとその守護騎士達、なのはとフェイト、ｅｔｃ。

他の連中が死のうが生きようがどうでもいい」
「グ…ガ…」
「やはり時間が掛かったな。凡そ３０万人分と言った所か。あの金ぴかと同等とは、私達もなかなかのモノだ。
さて、それでは永久に、さようなら」

そう御剣が言った途端、影は剣に吸い込まれる様に消失した。
魂はおろか、その血肉の一片までも痕跡を残さず、御剣の影はストームブリンガーに吸い尽された。

「１人目、と。しかし、なんだ。
自分と同じ顔で、似た様な能力持ちが噛ませ犬だと、正直微妙な気分になるな…」

そうぼやきつつ、御剣はその手に携えたストームブリンガーを座に還す。
これで、この世界の歪みは幾分か改善される筈だ。

「さて、では戻るか。あちらも気になる事だし」

御剣は再度ヴィマーナを呼び出すと、市街地の方へ飛び去った。
その数刻後。荒れ狂っていた海も大分落ち着いた頃、その影は現れた。
黒く、表情はおろか、顔すらない頭部。
だが、その影からは落胆と憤りが感じられる。
影はそこに暫く佇んでいたが、掻き消える様に消え去った。

## 9章－3　剣舞（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：9章3話です。
強敵かと思いきや、結局その能力を使い切れずに敗北。情けなし御剣の影。
と言うか、作中でも御剣が言っていますが、あの影達は基本戦術が稚拙、と言うかお粗末です。
究極的に言ってしまえば彼等は力の塊なので、一々考えながら戦わなければならない御剣の能力は彼等の性質に向いていません。
と言っても、エクスカリバーや乖離剣ぶっ放すだけで十分強いですが。
御剣が相手だからこその圧勝とも言えます。
原口、黒峰が相手だったら辛勝、乃至敗北です。アヴァロンを破れませんから。

奥の手、と言ったわりには地味なストームブリンガーですが、これはこれで恐ろしく凶悪です。
詳しくは下に書いていますのでどうぞ。

御剣が影と戦っていた同時刻。
黒峰達は謎の集団と出くわす。彼女達は自身をナンバーズと名乗った。
次回「ナンバーズ」
お楽しみに。

『魂啜り漆黒の剣（ストームブリンガー）』：対人宝具ランクＡ　レンジ２　最大補足１人

法と混沌のバランスをとるために、法によって鍛えられた混沌の力を持つ剣。
刀身の至る所にルーン文字が刻まれたこの漆黒の長剣は、マイケル・ムアコックのファンタジー小説『エルリック・サーガ』に登場する。
この剣の最大の特徴としては、独自の自我を持ち、傷付けた相手の魂を吸い取る事である。
この剣は度々所有者の手を勝手に離れ、自身の赴くままに殺戮を行う。
そしてその殺戮の対象は『所有者の最も愛する者』と言う呪われた魔剣でもある。
殆どのモノを切る事が出来るが、野生動物からは魂を吸い取れないと言う弱点も持つ。
この剣は所有者に力を与え、幸運以外の全てのステータスを2ランクアップさせる。だが、その原典である魔剣ダーインスレイブ同様、一度抜けば誰かの魂を吸わせなければ収まる事は無い。

# 9章－4　ナンバーズ

ミッドチルダ中央部　地下水路

御剣が機動六課の隊舎に戻り黒峰達が地下水路に入ると、それを待ち構えていたかの様にガジェットの反応が現れた。

「（ガジェットは四機編成で接近中！１８、１９、２０、２１、２２、２３、まだ増えます！！）」
「…多いわね」
「はっ！問題無ぇ…よっと！！」

そう言って黒峰が掌を握ると同時に、遠方から爆発音が響く。

「…これならすぐに済みそうね」
「あぁ。後は、ロングアーチがレリックの在処を探し出すだけだが…」

黒峰がそう言った途端、そのロングアーチから通信が入る。
今黒峰達がいる場所から直線距離で１００ｍの地点にレリックの反応を感知した、との事だった。

「と、言う訳だ。行くぞ～」

そう気軽に言ってのける黒峰。因みに、今も手を握っては開き、その度に爆発音が聞こえている。

「…私達の出番、無いわね」

「そんな事ぁ無ぇよ。俺は封印処理なんざ出来ねぇからな…あん？」
「どうしたの？」

黒峰が急に立ち止まる。
それに疑問を持ったティアナが黒峰に問うが、黒峰はそれに答えず掌を構えると前方へ向けた。
と、同時に黒峰の前方の空間が破裂した――かに見えた。
そこにいたのは赤いマフラーを巻いた人型のシルエット。
全体的に昆虫の様な印象を受けるソレは、黒峰に対して拳を突き出していた。
黒峰はそれを受け止め、その際の音が先程の炸裂音だったのだろう。
相手は続け様に2発3発と次々に拳を打ち出して来る。
その全てを黒峰は同じく拳で撃ち落として行く。

「…ラッシュの速さ比べか…面白い！！」

両者の拳は残像を生み出す程速く、鋭く、周囲に轟音を響かせ続ける。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラァ！！！！」
「…！」

最後の一撃に耐え切れず、弾き飛ばされる黒い虫人。
だが、空中で器用に宙返りすると、両の足でしっかりと地面に降り立った。

「…」
「…硬いな…その見た目は伊達じゃ無いって事か」

睨み合う両者。
そこに濃紫の魔力弾が飛んで来る――が。

「無駄よ」

それを察知したティアナの魔力弾がその魔力弾を打ち抜く。
一発の撃ち洩らしも無く、全ての魔力弾は相殺し合った。

「そこ！」

そして放たれる追撃の一発。
魔力弾の飛来した方向へ向けて放たれたそれは、黒峰と対峙していた相手によって弾かれた。
その際の閃光が、暗がりから少女を連れだす。
年の頃は9差異程だろうか。紫の髪に黒い服…否、バリアジャケットを身に纏っている。

「ありがとう。ガリュー」

その台詞に答えるかのように黒い虫人は頷く。

「ガリュー…？」
「あの黒いのの名前だろ。
さて、そこのお嬢ちゃん。こちらに攻撃して来るって事は、俺らの敵って事で良いんだよな？」
「ちょ、ちょっと黒峰さん、そんな乱暴な」
「…ガリュー」

黒峰の問いには答えず…否、ある意味答えるかの様に、再度虫人――ガリューが黒峰に襲いかかる。

まるで、引き絞られた弓から放たれる矢の様に一直線に黒峰へ向かったガリューは――

「ふん！！！」

――黒峰の右拳に呆気なく殴り飛ばされた。

錐揉み回転をしつつ、地下水道の壁に叩きつけられるガリュー。

そして叩きつけられた勢いのまま、背中から壁にめり込んでしまっていた。

「…投降するなら今の内だぜ？」

「どっちが悪役か、分かんなくなりそうな台詞ね」

そうティアナがぼやいた瞬間、周囲が閃光と轟音に包まれた。

「…ちっ」

黒峰が目を逸らしたのは一瞬。自身の粒子で視界を覆い、閃光を防いだ時だけ。

にも拘らず、ガリューと少女はその場から姿を消していた。

「…さて、レリックを確保しに行くぞ」

「追わなくて良いの？」

「こっちに構ってる余裕が有るならそうするが、今はレリック確保の方が優先だ。

居場所は分かってるし、あのダメージなら放っておいても問題無い」

「でも」

「問題無い。そっち方面のアプローチは今頃、御剣がやってるだろうしな」

「仁が？どう言う事？」

「まぁ、その内な。じゃ、行くとするか」
「…戻ったら説明して貰うからね」

黒峰達から５０ｍ程離れた地点。
少しばかり開けたその場所に、ガリューと少女はいた。
ガリューの方は肩部分の装甲が砕け、胸の所が陥没している。黒峰の攻撃によって負った物だ。
少なくとも、すぐに戦闘に参加できる程軽いダメージでは無い。

「ガリュー…大丈夫？」
「…」

気遣う様な少女の言葉に、無言で頷くガリュー。

「危なかったな～！ルールー！！！だがもう安心だ！何てたってこの烈火の剣精、アギト様が来たんだからな！！！」
「…アギト」

不意に２人に声が掛かる。
少女が視線を向けた先に居たのは、体長３０ｃｍ程の小人で、妖精か悪魔の様な風貌をしていた。
登場と同時に背後に花火らしきものが上がっているが、少女にそれに関してのリアクションは無い。

「旦那も心配してたぜ？ガリューも怪我してるし、もう引こう？」
「駄目。レリックのナンバーをまだ確認してない」
「ん～…でもなぁ…アイツがいる限り、おいそれと手を出せないし…スターレンゲホイルもそんなに効果無かったし…」

宙に浮きながら腕を組み悩み込むアギト。

「（御嬢様）」

「あん？」

そんなアギトの真横に、通信用のウィンドウが開かれる。

映っているのは紫の髪をショートカットにした女性。

「トーレ？今回は参加しないんじゃ無かったの？」

「（状況がそれを許しません。

レリックの1つは既に回収され、先程クアットロが撃墜されたとの報が有りました。

ディエチと共にそちらに向かいます）」

「分かった。座標を送るね」

そう少女が言うと、トーレは一礼して通信を切った。

「へん！あの陰険眼鏡、やられたのか。良い気味だぜ」

「…」

心底嬉しそうに言うアギトに構いもせず、少女はガリューに歩み寄る。

「ガリュー」

「…」

少女の声に答える様に、ガリューは1つ頷く。

「レリック…お母さんの為に…！」

少女のその呟きには、常の物には無い熱意が篭っていた。

地下水路　放水路

地下水路の中でも特に開けたその一角。そこにレリックは落ちていた。

「…このケース、何でこんなとこまで」
「流されたんじゃない？水の流れ、大分強かったし」
「まぁいいか。さてキャロ、封印処理頼むぞ」
「は、はい！」

レリックのケースをキャロに渡し、周囲の警戒をしていた黒峰が不意に通路の方を向く。

「…来たの？」
「あぁ。人数も増えている…来た」

黒峰の台詞と同時に、橙色の光条が放水路に通じる通路から奔った。

「甘ぇ」

そう黒峰が呟くと同時に、黒峰達の前に赤黒い壁が現れる。轟音を立ててぶつかり合う光線と壁。
耳を塞ぎ堪える様にしているＦＷ陣に対して、黒峰は余裕の体を崩していない。が、不意にＦＷ陣の方を向くと、腕を一薙ぎした。

「うわっ！？」
「え？」
「何？」

聞こえたのは聞きなれない声。驚いたＦＷ陣が声のした方へ振り向けば、そこにある筈の物が無くなっていた。

「レリックが無い！？」
「さっきまでそこに有ったのに！」

スバルとエリオが声を上げるが早いか、通路へ駆けだす黒峰。が、その通路から何かが飛び出して来た。その影と黒峰は、数度空中で激突すると、地上へ降り立った。

「誰だ」
「ナンバーズ、Ｎｏ，３。トーレ」
「何の真似だ」
「レリックを頂く」
「させると思うか？」
「押し通る。ライドインパルス！！！」

…短い問答の後、トーレは黒峰に殴りかかる。
それは先程のガリューの比では無く、ＦＷ陣の中ではティアナとエリオが何とか目で追えるかどうか、と言った速さだった。
が、その高速の攻撃を黒峰は悠々と避けていく。

「ふふん」
「くっ！」

トーレの顔に焦りが顔に浮かぶ。だが、それは攻撃が当たらない

から、と言う理由だけでは無かった。
全身を包む違和感。常よりも遅い拳速。拳速だけでは無い。自身の体に得体の知れない重圧が圧し掛かって来る様な。
その正体を見極めようと考えた瞬間、黒峰の拳が自身の顎を捕えたのをトーレは知覚した。
首から上を吹き飛ばされたかのような衝撃の後、トーレは自身が大地に叩きつけられた事を知る。
ただ殴り飛ばされたにしては、滞空時間が長かった上に、重力の方向が定まらなかった。
恐らくは空中で数回転したのだろう。頭から落ちなかったのは僥倖だ。

「さて、一応言っとくぜ。お前には弁護士を呼ぶ権利が有る。希望は有るか？」
「…」

皮肉の1つでも言おうとしたが、顎が動かない。完全に砕けている様だ。
たった一撃でこの有様。他の姉妹、ノーヴェでも勝つ事はおろか、一撃入れる事さえ不可能だろう。
ならば、これで正解だった。時間はもう十分に稼げたのだから。

「何！？」

トーレの下の地面が波打つ。そこから腕が生えたかと思うと、そのままトーレは地面に潜ってしまった。
差し詰め水の中に潜る様に。そして、地面が揺れ出す。

「…地震！？」
「ちっ！走るぞ！生き埋めになりたくなかったら急げ！掘りだすの

が面倒だ！」

「……やられたか」

黒峰の眼前に広がるのは、完全に崩れ落ちた廃棄区画。
どうやら、あの地下水路は廃棄区画に通じていたらしい。

「完全に亮のミス…とも言い難いわね。私達、何も出来なかったし」
「そうでも無いだろ？」

そう言いつつ黒峰はキャロの帽子を取る。
そこに有ったのは一輪の花…を模したカチューシャだった。

「何だ。知ってたの」

ティアナが指を弾くと、ポンと間抜けな音を立ててカチューシャがレリックに変わる。
スバルとエリオの顔が驚きのあまりえらい事に成っているが、流して黒峰は歩きだす。

「さて、帰るぞ。レリックは確保したし、相手の正体も名前は知れたし」
「ナンバーズ…ね」
「ズって事は、複数いるって事だよね。あんなのが何人もいるのかな…」
「さてな。明日からは覚悟しとけよ？訓練、厳しくなるぞ？」
「「「「望む所です（よ）！！！」」」」

威勢の良いＦＷ陣の声に苦笑しつつ、黒峰はヘリとの合流地点へ

足を向けた。

# 9章－4　ナンバーズ（後書き）

あとがき（と言う名の良い訳）：お久しぶりです。9章4話です。

本当にお待たせしてしまいました。申し訳ありません。

留年の危機だったり、前歯の神経が腐ったりと立て込んでいた所為も有りますが、今後は出来るだけ遅れない様にしたいと思います。

保護した少女、その名はヴィヴィオ。

里親が見つかるまで機動六課で保護する事になった。

次回『Ｍｏｔｈｅｒｓ　＆ａｍｐ；　ｃｈｉｌｄｒｅｎ』

お楽しみに

# 9章－5　Mothers &' children

翌日　機動六課　　陸戦シュミレーター

「はい。準備運動はそこまで。一旦集合して！」
「「「「はい！！！」」」」

なのはの号令に合わせて集まるＦＷ陣。
途中から現れた御剣が持っているアタッシュケースに、全員の視線は集中している。

「さて、全員の２ｎｄフォームへの移行も済んだ。シャーリーから受け取って来たから、それぞれ取りに来るように。まずはスバルからだ」
「はい！」

スバルから順に自身の愛機を受け取るＦＷ陣。当然ながら待機状態では見た目は変わっていない。

「さて、と。全員黒峰と一緒にいたから実感が無いだろうが、昨日現れた敵はそれなりに強い。
お前等では１対１だと相手にすらならないだろう。此処らで…絶対的な強者との戦闘も経験しておくべきだ、と言う事で私となのはで意見が一致した」
「隊長戦、ですか？でも、もうそれなら」
「喜べ。相手は私だ」

笑顔で言い放つ御剣。
対象的にＦＷ陣の顔は一気に蒼ざめる。全員の視線がなのはに縋る

様に注がれるが、当のなのはは苦笑している。

「私の魔力に耐えうるデバイスも出来た事だし、遠慮なく行かせて貰おう」

「デ、デバイス！？」

「あぁ、シャーリー経由でマリエルに頼んでいた物が完成した。起きろ、無銘（ナナシ）」

そう言いつつデバイスを呼び出す御剣。その手に握られているのは一丁の拳銃と、細身の長剣。

細身と言っても、剣自体の長さが御剣と同じ程ある為そう見えるだけで、実際は普通の剣より少し細い程度だ。

拳銃は自動拳銃（オートマチック）。銃身に施された装飾等、ティアナのクトゥグアに何処かしら似ている。

「カートリッジシステムも無く、ただのストレージだが…私が全力で魔力を注ぎ込んでも壊れない様に造られている。手加減しての試合には丁度良い。非殺傷にも出来るからな」

「じゃあお願いしますね。私は昨日保護された子に会いに、病院に行って来ますから」

「任された。さて、新人共。楽しい楽しい追いかけっこの時間だ」

「「「ひぃ～～～～！！！！」」」

「はぁ…」

「（で、だ。病院から連れ帰ったは良いが、懐いてしまい離れてくれない、と言う訳か）」

「（はい…）」

聖王教会系列の病院に保護した少女を迎えに行ったなのはから、

慌てた様子で御剣に通信が入った。
要領を得ない内容だったが、要約すれば困っているから部屋に来て欲しいとの事らしい。
執務室で暇そうにしていた黒峰と原口も連れて、御剣がなのは達の私室に向かうと、扉を開けた途端凄まじい泣き声が聞こえて来た。

「（…で、私にどうしろと言うのだ。子守りでもしろと？）」
「（出来ればお願いします。本当は、ＦＷの子たちに任せようと思っていたんですけど…）」

扉側に目をやれば、申し訳なさそうに佇む４人組。

「（…やるだけやってみるが、期待はするなよ？）」

御剣は嘆息すると、火の付いた様に泣いている少女に歩み寄る。
膝を折り、少女と目の高さを合わせると、御剣は優しく語りかけ始めた。

「お嬢ちゃん、お名前は？」
「ひっく！ひっ…ん…ヴィヴィオ」
「そうか。良い名だ」

先程まで泣いていたのが嘘の様に、少女は舌っ足らずに答えた。
名を聞き、声だけでなく御剣の雰囲気全体が柔らかくなる。

「ヴィヴィオ。なのはと一緒に居たいか？」
「…うん」

御剣の問いにしっかりと答えるヴィヴィオ。譲る気は無いらしい。

「だが、なのはにはこれから大事な用が有る。ヴィヴィオが我が儘を言えば、なのはを困らせる事になるぞ？」
「…ん…」
「ヴィヴィオ。ヴィヴィオはなのはを困らせたい訳では無いだろう？」
「……ぅん…」
「なら、良い子で待とう。私もここに居る」
「…うん」

渋々、と言った風になのはから手を離すヴィヴィオ。
その目には涙が浮かんでいる。

「ありがとうね、ヴィヴィオ。ちょっとお出かけして来るだけだから」
「…うん…お名前」
「ん？私か？」

不意にヴィヴィオが御剣の方を向き、問い掛ける。

「私の名前は御剣。御剣　仁だ」
「みつうび？」
「み・つ・る・ぎ・だ。言えるか？」
「みつるぎ」
「そうだ。偉いぞ」

そう言って御剣はヴィヴィオの頭を撫でる。

「と、言う訳だ。聖王教会へ行くのだろう？さっさと行って戻って来い。」
「は、はい。流石ですね」

「何。有る人物を真似ただけだ」

そう御剣が言った所で気持ち良さそうに目を閉じ、されるままにしていたヴィヴィオが口を開いた。

「みつるぎ」
「何だ？ヴィヴィオ」
「みつるぎおじちゃん」

――それを聞いた御剣は、穏やかな微笑みを浮かべ……両膝から崩れ落ちた。

「み、御剣さん！？ど、どうしたんですか！？」
「な、何。思いの外ダメージが大きくてな。大丈夫。大丈夫だとも。ふふふ…ふはは…くっくっく…」
「ぜ、全然大丈夫そうに見えないんですけど…」
「…？」

さらに翌日　機動六課　監査執務室

「…さて、一昨日の襲撃で判明した事を纏めるか」
「本当なら昨日やる事だよね」
「しかたないだろ。俺達はともかく、直接面と向かって言われた御剣のダメージがでか過ぎたんだから」
「…さて、影（シャドウ）の出現する条件についてだ」
「流したな」
「五月蝿い。奴等は、私達が原作と違う動きをしようとすると現れる。最初のなのはが襲われた理由も、恐らくはこれだろう」
「あん？俺らは関わって無ぇじゃねえか」

「否、私の忠告でなのはは休息を頻繁に取る様にしていた。そうすれば、なのはが一度落ちる、と言う事実が無くなってしまう」
「待って。じゃあティアの事は？原作とはかけ離れてるけど、あいつらはまだ出て無いよ？」
「もう出ている。Bランク魔導師試験の際に姿を現したそうだ。ティアから聞いた。特に何もせずに消えたらしいが、その理由までは分からん。
はやてとリインフォース、守護騎士（ヴォルケンリッター）は原口が張った結界に守られているから、そこまでの心配はいらないだろう。今、奴等は原因である私達に掛かりきりの様だしな」
「御剣が1人倒したって言うか消滅させたからね。今後は少し楽になるかな？」
「どうかな。数の上では3VS2だが、奴等は神出鬼没だ。各個撃破には注意せねばな」
「そうだね」
「さてと、次はいよいよ公開意見陳述会だな」
「あぁ。その前にも幾つかイベントは有った筈だが、ここが正念場だ。私達のすべき事は1つ。ヴィヴィオの死守だ」
「地上本部は良いのか？」
「あぁ。ヴィヴィオがいなければ、ゆりかごは動かない。そして、影達にとってゆりかごは動かなければならない。ならば…」
「あいつらをここへ誘き寄せて」
「2人一気に倒す！」
「さて、反攻の時間だ」

数日後　機動六課　食堂

「ママ～」
「…ママ？」
「はい。ママです」

昼食を摂りに御剣が食堂に向かうと、聞こえて来たのは聞き覚えのある舌っ足らずな声。
そう呼ばれた対象に顔を向けて問えば、返って来たのはにこやかな笑顔。

「…成程。保護責任者か」
「はい。良い引き取り先が見つかるまでですけど」
「…そうか。頑張れよ。親と言うのは色々と大変だぞ?」
「あははは…そう言えばティアは今、本局ですか?」

ふと思い出したように、なのはが言う。

「あぁ。部隊長とクロノには直接的な面識は無いからな。その折衝も兼ねて行って貰っている。
私が行くよりも良いだろう。クロノと顔を合わせると、ついからかってしまうからな」
「…あははは…あれ?ギンガ?」

先程の笑いとは異なる乾いた笑いを浮かべていたなのはが、食堂の入口の方を向いて言う。
御剣がそちらに目をやれば、そこに立っていたのはギンガだった。

「御剣さん、こちらでしたか。ご依頼の」
「あぁ、執務室で話すとしよう。ではな、なのは、ヴィヴィオ」
「あ、はい」
「バイバイ」

「…割れたか」

「はい。オークションに例の品を出品した人物。手古摺りましたが、なんとか。こちらがそのデータです」

そう言ってギンガが差し出したＵＳＢメモリを受け取る御剣。

「ありがとう」
「…ですが…これは」
「何。気にするな。と言うか忘れろ」
「誰だか気付いていたんですね」
「…確証は無かったがな。だからこそ調査を頼んだ訳だが」
「…分かりました。この事は黙っておきます」
「助かる。あぁ、明日からは訓練に合流すると良い」
「はい。では、失礼します」

ギンガが退室してから、御剣はデスクに備え付けのパソコンを起動してＵＳＢメモリ内のファイルを開いた。
そこに納められていたのは、幾つかの書類の写しと映像データ。
それ単体では何の意味も無いであろうその情報は、集まる事である人物の名を浮かび上がらせる。
その名は――

「レジアス・ゲイズ…か」

## 9章－5　Ｍｏｔｈｅｒｓ　＆ａｍｐ；　ｃｈｉｌｄｒｅｎ（後書き）

あとがき（と言う名の良い訳）：９章５話です。…どんどん更新速度が遅くなる…あぁ、初期は文字数が少なかったとはいえ、毎日更新だったのに…

今回出て来た御剣のデバイス、その名も無銘（ナナシ）です。…銘が無いのにその名も…と言うのも変ですが。世間一般では最強系主人公にデバイスを持たせる場合、持ち主に負けず劣らずのチートスペックを持っている物ですが、こいつは何の特殊能力も持っていません。
登録されている魔法も、魔力砲と魔力刃の２つだけです。簡易的なＡＩすら積んでません。
唯一の取り柄はその頑強なフレーム。御剣が全力で魔力を注ぎ込もうと耐え切る事が出来ます。
そしてこれを使う何よりの利点。それは、御剣が全力を出しても相手が死なない事。まぁ、これを使う事自体が手加減している様な物ですが。
…因みに、ＡＩこそ入っていませんが、Ｃ．Ｖ：植田佳奈です。殆ど喋りませんが。

日々は過ぎて行く。穏やかに。
次回『Ｆａｔｈｅｒｓ＆ａｍｐ；Ｄａｕｇｈｔｅｒｓ』お楽しみに。

# 9章－6　Fathers&Daughters

機動六課　陸戦シュミレーター

「集中集束（コンセントレイト）ファントム・ブレイザー！！！」

「甘い」

ティアナの放った渾身の一撃。それはあっさりと無銘（ナナシ）の一閃に切り払われる。

が――

「甘いのは…どっちかしらね！」

――突如御剣の背後にティアナが踊り出る。

同時にファントムブレイザーを放ったティアナは砕け散り、跡形も無く消える。

渾身の一撃こそデコイ。背面からの奇襲！

「だから甘いと言ったろう？」

「がっ！」

だが、御剣もそれを当然の様に見越し、切り払った勢いのままティアナに斬りつける。

魔力刃に袈裟切りにされ、ティアナの動きが完全に止まる。

「以前と同じ作戦が通じるとでも思ったか…おや、そう来たか」

瞬時に御剣の体が鎖で縛られる。両腕は塞がれ、最早満足に剣を振るう事は出来ない。
錬鉄召喚、アルケミックチェーン。今御剣が立っているポイントにキャロが発動した罠。

「はあぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
「てやぁあああああ！！！！！」」

そこへ襲い来るのはスバルとエリオ、そしてギンガの三方向からの挟撃。

「っと」
「っな！？」
「嘘！？」
「力点をずらして去なされた！？」

御剣は縛られたまま器用に剣先を操りエリオのストラーダの穂先を、柄でギンガの拳を、足でスバルの拳を去なして流す。
殆ど時間差の無い3人の攻撃を瞬時に去なし、背後を見せた3人の首筋に一撃ずつ加え、意識を刈り取った。
そこでふと感じた魔力に御剣が空を見上げると、そこには――

「…やれやれだ」
「ディバイィィィン…バスターーーーーーー！！！！！」
「トライデント……スマッシャーーーーーーー！！！！！」

――上空からのなのはとフェイトの砲撃。
1対7と言う、凡そ模擬戦では有り得ない対戦カード。それが成し得る戦力の一点集中運用。
そして、中空で起こる爆発。

「「え？」」

爆煙の晴れた向こうからなのはとフェイトに見えたのは、こちらに銃口を向ける御剣の姿。

「シュート」
「Ｓｈｏｏｔ　Ｂａｒｒｅｔ．」
「あらら…」
「はぁ…」

響く轟音。咄嗟に張ったシールドも虚しく貫かれ、なのはとフェイトは落ちていく。

「…さて、まだやるか？」
「ふえっ！？こ、降参です！」

鎖を引き千切りながら御剣が問うたのは、未だ健在なキャロ。が、本来キャロはフルバック。フリードがいるとは言え、前線が全て墜ちては勝負になりようも無い。
こうして、早朝の訓練は幕を閉じた。

機動六課　食堂

「あ、ありえない…」
「まさか1対7で負けるなんて…」
「しかもあれで本気じゃ無いなんて…」

ショックを受けているのはスバル、エリオ、ギンガの3人。残り

の面子は苦笑いを浮かべている。

「以前から勝てないな～とは思ってたけど…」
「まだ底が有ったからだったんだね…ティアはよく1対1で勝てたね」
「完全に手を抜かれてましたから。勝てたと言っても、強力な攻撃宝具無しのハンデ戦ですよ？直感すら使われてませんでしたし」
「今まさに、一切の宝具を使わせる事無く負けたんだけどね。私達」
「いや、正直な話、私としては宝具を使ってやっていた時より楽だったぞ」
「御剣さん」

遅れてやって来た御剣に視線が集まる。

「何せ手加減をしなくて良い。例えば今日、ティアを袈裟切りに切り捨てた訳だが、あれが真剣だったなら間違い無く殺してしまっていたからな」
「さらっと怖い事言わないでよ…」
「おっと。だが、今日は少々驚いた。まさか全員一点集中とはな」
「基本でしょ。全員で出来る事をやっただけよ」
「それが意外と難しい。いや、そうさせる状況を作るのが特に難しい。よくやったな。ティア」

今日の模擬戦の作戦立案、指揮はティアナが行っていた。
新人育成の為の訓練なのだから当然だが。

「べ、別に…相手が仁だったから読めただけよ。他の相手だったらこうは行かなかったわ」
「ティア、そもそも相手が御剣さんじゃないと、1対7で苦戦とか有り得ないからね。そもそもこっちにオーバーSが2人もいたんだ

よ？」
「う、うっさい！結局負けたんだから、どれだけ作戦がうまく行こうと意味無いわよ！と言うか全員正面切って負けるってどういう事よ！？」
「あはは…」
「痛いとこ突くね、ティア」
「あ〝っいや、その、なのはさん達は悪くないんですよ？一重に私の作戦ミスが」
「おや？その作戦自体は私が今褒めた所だが？素直に賛辞を受け取って欲しい所だが…」
「えっあの…その…ご、ごちそうさまでした！！！」
「ちょっとティア！待ってよ！し、失礼します！！」

逃げる様に席を立ったティアナを追いかけてスバルも走り去って行く。

「人が悪いですね。御剣さん」
「おや？始めたのは、なのはだろう？」
「そこで御剣さんが流せば、話は問題なく進んだと思いますよ？」
「お互い様だな」
「そうですね」
「もう…2人とも…」

日々は穏やかに、だが確実に進んで行く。
公開意見陳述会まで、後1ヵ月。

そこは薄暗い地下だった。

立ち並ぶのは無数の有機ポッド。室内の明かりはそのポッドから放たれるもののみだった。
そのポッド達の大半は己が役割を果たしては居なかった。否、既に終えていた。
ポットの数は１２。端から順に、？から？までの番号が振られている。
その内たった一つだけ、中に人が浮かんでいる。番号は？。先日の戦闘で右腕を切り落とされたクアットロだった。

―ピー

不意に響く電子音。
それと同時にポッドが開き、中の液体が排出される。
液体が排出され切ったと同時に、クアットロの眼が開く。

「…」

何かを確かめる様に、右手を握ったり開いたりするクアットロ。
そう。切り落とされたにも関わらず、クアットロの右腕は完治していた。
数度握り開きを繰り返した所で、その右手は何かを握り潰す様に握りしめられる。

「…あっの糞眼鏡！！」

吐き出されたのは呪言にも等しい程、怨みの籠った悪態。

「もう良い様だね。クアットロ」

ふと、暗がりからクアットロに声が掛かる。

ポットからの明かりでは薄ぼんやりとしか見えなかったが、声の主がポッドに近付いた事で姿が認識できるようになる。

「…ドクター」

「いやはや。君がほうほうの体でアジトに逃げ帰って来た時は驚いたよ。
まさか君が手傷を負うとはね。彼は手ごわかっただろう？」

ニヤニヤと人の悪そうな笑みを浮かべて言うＤｒ．スカリエッティ。
クアットロも一瞬顔を顰めるが、気を取り直したかのように口を開いた。

「…はい。どう言う原理かは不明ですが、シルバーカーテンが通じませんでした。
例の隊長陣は騙しとおせていたので、あの男だけに通じなかった可能性が高いです」

それを聞いて、スカリエッティのニヤニヤ笑いは一層増す。
最早ニタニタと言った風だ。

「ドクター？負けた話をしている時に嬉しそうにされると、あんまりいい気はしないんですけどぉ？」

「あぁ、悪いね」

口ではそう言いつつ、全く悪びれる風も無い。
そんなスカリエッティの様子に嘆息しつつ、クアットロはポッドを出る。
室温は一定に保たれているが、いつまでも全裸なのは些か心許無い。

「で？計画の方はどうですか？」

傍に置かれていたナンバーズ共通のボディスーツを着込みながら、クアットロはスカリエッティに問う。

「少々の狂いが出たが、修正範囲内だ。計画に支障は無いさ」

「…あぁ、トーレお姉さまがやられたんですね。それでレリックは2つ共回収ならず、と」

「昨日まで君の隣に居たんだがね。顎の骨は完全に粉砕骨折。歯が口の中に刺さってるし、眼底骨折で目玉が下に落ちかけてるしで、整形が大変だったよ」

「…女として同情します。それ。しっかし、トーレお姉さまに一撃入れるなんて、ホント反則ですね。あの連中は」

髪を結び、眼鏡を掛けていつもの格好に戻ったクアットロが言う。

「そう。彼等は言うなれば反則だ。規則に反している。だからこそ、審判者がいるのさ」

そう言ってスカリエッティはウィンドウを開く。

そこに移っていたのは先日消滅した御剣の影（シャドウ）だった。

「君が使っていたサーチャーを借りたよ。御蔭で良い画が撮れた」

「…でも、こいつもやられちゃいましたよ？何で私を助けたのか知りませんけど、審判者には役者不足じゃありません？」

「そこだよ。私が彼らに惹かれるのはそこだ。この正体不明の存在と彼等とはどうやら対になっている。

その戦闘方法もほぼ同一だった。にも拘らず、勝ったのは彼だった…興味がそそられるだろう？」

「…そうですね…ヒトを超越した存在…その骨子（バックボーン）。彼等を彼等たら

しめるもの…ウフフッ…良いですね」

そう言ってクアットロが浮かべた笑顔は、スカリエッティのそれによく似ていた。

顔の造形や、笑い方が似ているのではない。ただ、その内に孕む狂気こそが彼等の共通点だった。

「クアットロ。君は私の因子を特に濃く継いでくれた。言わば私の後継者。真の娘。君には、期待しているよ」

「うっふふのふ～…そう言われては、この不肖の娘クアットロ。はりきっちゃいますよ？」

「あぁ。大いに、盛大に盛り上げようじゃないか。祭りの日は…近いのだから」

## 9章－6　Ｆａｔｈｅｒｓ&ａｍｐ;Ｄａｕｇｈｔｅｒｓ（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：９章６話です。

眼鏡復活！眼鏡復活！眼鏡復活！…誰得…ッ寧ろトーレ復活の方が…

と言う訳でさり気に初スカリエッティサイドです。次回もナンバーズはちょろっとだけ出ます。

孤独な少女。彼女は戦う。母を取り戻す為。

自身に感情を生み出す為。たった一人の従者と共に。

次回『Ｔｈｅ　ｇｉｒｌ　ｗｈｏ　ｌｏｓｔ　ａｌｌ』お楽しみに。

# 9章ー7　The girl who lost all

少女は夢を見ていた。
暖かな、優しい腕に抱かれている夢。
少女はその相手の顔を見ようとする。だが、ぼんやりと白んでハッキリとは見えない。
当然だ。その相手の顔は知っている。毎日のように思っているのだから。
なぜならば…

「……ん……」

ふと、少女はそこで目を覚ます。
ここはミッドチルダ。クラナガン近郊の森の中だ。
傍には野宿した際に熾した焚火の後。
少女が寝入る直前までと違う所と言えば、その1点ともう1つ、何かと世話焼きな旅の同行者が見当たらない事だった。

「……アギト？」

少女がその名を呼んでも、返事は返って来ない。この近くには居ないのだろう。
自分の声が聞こえる範囲で呼んだなら、すぐさま文字通りに飛んで来てくれる筈だからだ。
まぁ、少女の声は少し小さい為、単純の聞こえなかったのかも知れないが。

「……ふぅ」
「（おはよう、ルーテシア）」

「……おはよう。ドクター」

不意に通信用のウィンドウが開かれる。
少女のデバイス、アスクレピオスを通じているにも拘らず、所有者の意志とは無関係にその通信は開かれた。
このデバイスを渡して来たのは目の前の男だ。何か仕掛けでも有るのだろう。それに、いつもの事だ。
そう考えた少女は特に何も言わず、極一般的な返事を返す。

「……何か、ご用事？」
「（何、用事という程の事も無いんだがね。おや、騎士ゼストはどうしたのかな？）」
「……知らないわ。それより、レリックが見つかったの？」
「（残念ながらそう言う話では無いんだ。うちのクアットロが君に見せたいものが有る、と言っていてね。付き合ってやってはくれないだろうか？）」
「いいよ」

今度は三点リーダー無しで即答する。
少女にとって、クアットロは家庭教師の様な物だ。その行動に無意味なものは殆ど無い。
一見無意味に思えても、どこかしらで目的と繋がっている。
ならば今回も、少女の目的に則した事なのだろう。そう少女は考えた。

「（分かった。クアットロに伝えておくよ。
日時は後日伝えると言っていたから、また連絡させて貰おう。ではルーテシア、ごきげんよう）」
「……ごきげんよう、ドクター」

ドクター…スカリエッティは少女をルーテシアと呼んで通信を切った。そう。少女の名はルーテシア。
ルーテシア・アルピーノ。

日の光の一切届かぬ地下研究施設。
ナンバーズ専用の生体ポッドとは別の生体ポッドの立ち並ぶ一角。
そこには、1人の女性が眠りに就いていた。紫の髪。整った目鼻立ち。それは丁度、ルーテシアをそのまま大人にしたかの様だった。
しかしてその実は逆である。彼女がルーテシアに似ているのではない。
ルーテシアが彼女に似ているのだ。彼女の名はメガーヌ・アルピーノ。
かつてスバル、ギンガの母、クイント・ナカジマと共に戦闘機人事件を追っていた捜査官であり、ルーテシアの実母である。
戦闘機人プラントへの突入捜査の際に、スカリエッティに確保されたが、人造魔導師素体としての適合度が高かったため、こうして生体ポッドに入れられ保管されている。
そして、その高い人造魔導師素体適性が娘であるルーテシアにも受け継がれており、その事が原因でルーテシアは幼い頃、最高評議会の手回しによってスカリエッティの手に渡り、数々の『処置』を施された。
その『処置』によって、ルーテシアは常人を凌駕する魔力と特異技能を獲得した。
本来想定されていたレリックウェポンとして想定されたほどの戦闘力は持ち合わせなかったが、生体維持活動に支障がない1つの完成形としてスカリエッティや最高評議会には認知されている。
そして、ルーテシアを縛る鎖が、このメガーヌである。
メガーヌのポッドに刻まれている数字は?。

ルーテシアは母を目覚めさせる為、この数字と同じ刻印ナンバーのレリックを探している。
だが、それはルーテシアがスカリエッティに協力するように仕向ける為の嘘だ。
それを知らず、今日もルーテシアはレリックを探し求める。母が復活した時、その身の内に『心』が生まれると信じて――

「――な～んて、笑っちゃいますよね？」
「…そう言うものでも有るまい。我々は試験官から生まれた。母親の顔など知らんし、知る気も起きん。
だが、御嬢様にとってそれは、自己の確認なのだろう」

同じく地下研究所の一角。
ただ、こちらは白い壁に囲まれ、きちんと照明のついた清潔感のある休憩室の様な場所だ。
向かい合わせに座っているのはＮＯ．３、トーレとＮＯ．４、クアットロ。
前回の出動で負傷した組である。スカリエッティの外科処置と生体ポッドの修復機能によって、傷は跡形も無く消えているが、未だ安静の為に他の姉妹同様に訓練に参加出来ないので、こうして休憩室で見学している。だからこそ雑談に興じていたわけだが。

「…さて、残り一ヶ月。姉妹たちの調整はどうだ？」
「セッテ、オットー、ディードの最後発組３人が調整中。私達の治療が終わった事で、既に調整終了組は問題なし。任務中のドゥーエお姉さま以外は、いつでも出撃可能です」
「そうか…この後出かけるそうだな。何か仕掛けるのか？」
「いえいえ。弐型の改良実験の結果発表ですよ。序でにルーテシア御嬢様を誘っただけで。

あの過保護チビや無口な騎士ゼストと一緒じゃ、御嬢様も気が晴れないでしょうからね」
「…まぁ、気を付けてな」
「えぇ。では、行ってきま～す」
そう言ってクアットロは席を立ち、休憩室を後にした。

「何を考えているのか、今一つ分からん奴だ」
「お姉さま」
「ん？セッテか、どうした？」
「空戦シムの使用を許可して頂きたく」
「あぁ、好きに使うと良い。私も行こう」
「はい」

第七海岸区画付近　夕刻

「（フリード！ブラストレイ！）」
「（はぁあああ！！！）」

モニターに映し出されているのは、エリオ、キャロ、そして――

「（トライデント……スマッシャーーーー！！！）」

――フェイトの３人。
ガジェットは壱型１２機、弐型１８機。
空中の弐型をフェイトが、地上の壱型をエリオとキャロ、フリードが次々破壊して行く。

「あ～ららぁ…やっぱりあれくらいだと瞬殺ですかぁ…結構弄った

のにこれじゃあ、クアットロの面目丸つぶれですねぇ、ルー御嬢様」
「……クアットロが見せたかったのって、あんなの？」
「半分正解半分間違い～お見せしたかったのは、ガジェットが壊される所では無く…あの召喚師と少年の方です」

そう言ってクアットロはコンソールを叩く。
すると、モニターはキャロとエリオをアップで映し出す。

「……召喚師…」
「御嬢様は辛くても1人で頑張っていらっしゃるのに、あの子たちはいつも兄妹一緒。お母さんも一緒で破壊活動ですよぉ？全く無神経な人たちですねぇ？」
「……人の幸せを羨んでも仕方無いって、ゼストが言ってた」
「ちっちっち。それは正論ですが…ただの強がりです。あの部隊の前線メンバーに於いて、御嬢様の究極召喚、白天王に唯一対抗できそうなのが、あの召喚師。あの白い竜以外にもう一騎、真竜クラスを持っているらしいですから」
「……あの子が…」
「あのチビッ子槍騎士も、ガリューとはそれなりに良い勝負をするでしょうし…」
「負けない。ガリューも白天王も…無敵だから」

その無敵、という単語に若干顔を顰め、右腕に触れるクアットロ。だがすぐさま、それをルーテシアに気取られる前に、取り繕うかの様に続けた。

「ならいいんです。ルーテシア御嬢様のレリック探し、そのお邪魔になりそうな相手の予習講座。
このクアットロの余計なお節介で済むのなら、それが一番です」

「……ありがとう、クアットロ。じゃあ、ごきげんよう」
「はい、ごきげんよう……仕込みはオッケー。これであの御嬢様も、大分扱いやすくなる…ふっふっふっふ…」

クアットロが投影していたモニター。画面は移り変わり、そこに映っているのはスターズ分隊。
それを歪んだ笑みで見つめるクアットロ。月の無い夜空にクアットロの笑い声が響き渡っていた。

機動六課　監査執務室

「…みつるぎおじちゃん？」
「…何だ？ヴィヴィオ？」
「呼んだだけ」
「…そうか」
「うん…えへへ」

執務室のソファーに腰架けた御剣の膝の上で、ヴィヴィオが御剣にじゃれついている。
眼鏡に触れようとしたり、御剣が読んでいる本を覗き込んだり、御剣の飲んでいた紅茶に口を付けては顔を顰め。
それを窘めつつ、基本的に御剣はヴィヴィオの好きにさせていた。

「（御剣さん、こっちは片付いたので、もうすぐ戻れると思います。ヴィヴィオ、大人しくしてますか？）」
「なのはか。問題無い。良い子にしているよ」

不意に開く通信ウィンドウ。映っているのは、なのは。背後にはスバルとティアナも映っている。

夕刻に起こった緊急事態、ガジェットの群れが居住区付近に出現した。
御剣達の攻撃は周囲の影響が大きい為出撃を見送られ、運悪くアイナさんが帰ってしまっていた所為で1人になってしまうヴィヴィオを預かる事になった。

「ヴィヴィオ…ん？」
「（どうしました？）」
「…寝てしまったようだ。つい先ほどまで起きていたのだが…」
「（あはは…御剣さんも随分懐かれましたね）」

御剣の膝に座ったまま、体を預ける様にヴィヴィオは寝入っていた。
初対面以降、おじちゃん呼ばわりは変わっていないが、その辺りは御剣が折れてそのまま。
黒峰と原口も共におじちゃん呼ばわりだが、2人はそう呼ばれるとまだ少し複雑そうな表情になる。

「…良い引き取り手は見つかったのか？」
「…あ～…それが…」
「…そうか」

ヴィヴィオの引き取り手は様々な伝手で探されている。が、一向に良い引き取り手は見つかっていない。

「まぁ、機動六課解散までに見つければいいんだ。時間は有るし、いざとなれば管理局の…エリオが育った様な施設に預けるのも、悪い事ではないと思うぞ？」
「（…そうですね）」
「さて、このまま起きないようなら、私がヴィヴィオをロビーまで

連れて行こう。
六課の近くまで戻ったら、また通信をくれ」
「はい。では後ほど」

そう言ってなのはは通信を切った。
御剣はヴィヴィオの体をそっとソファーに横たえる。
備え付けの毛布をかぶせ、一定のゆったりとしたリズムでヴィヴィオの体を優しく叩く。

「…引き取り手、か」

原作に於いては、なのはの養女となる筈だが…最早、原作知識など、有る程度の指標でしか無い。
それなりに原作に即した流れではあるが、所々大きな違いがある。
その最たるものが機動六課に於けるはやて、守護騎士（ヴォルケンリッター）の不在。
つまり、騎士ゼストの相手がいないのだ。
ゼストの目的もそうだが、スカリエッティの目的も殊更邪魔する気は無いのでどちらでもいい、と御剣は考えているが。

「さて、どうなる事か…」

# 9章－7　The girl who lost all（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：9章7話です。作中にSS02の内容を含んでいます。念の為。

なんだか今回は、若干冗長さが増した気が…いつもの事か。
適切な文字数ってどの位なんでしょうね…もう今更ですが。
出番の皆無だったルーテシア救済回？…それを言えばゼストとか…
名前すら出て無いキャラもちらほら…いますよ？ちゃんと。アルトとか、ロッサとか…

ヴィヴィオと御剣の距離感はこんな感じです。…保父と園児？祖父と孫？
因みに黒峰と原口は子守が嫌で逃げました。出番が無いのはその代償。
…おじちゃん呼ばわりが嫌な様で。

長い間次回は強さの意味、と言う事で放置していましたが、この話は本編にあまり絡まないので、その内番外として公開します。

いよいよ行われる公開意見陳述会。
機動六課もその警備に地上本部へ。だが、そこに御剣達の姿は無く…
次回『その日、機動六課（前編）』お楽しみに。

## 9章－8　その日、機動六課（前編）

9月11日　XV級艦船「クラウディア」　応接室

「いよいよ明日、公開意見陳述会が行われる」

重苦しく口を開いたのは窓際に立つクロノ。
窓から見えるのは不可思議な色をした空間。現在、クラウディアはミッドチルダへ向けて航行中だ。

「そんな事は知っている。数日前からTVでも頻繁に宣伝されているからな」

答えたのは御剣。応接室の客用ソファに、ふんぞり返って座っている。
1、2年に一度行われる、公開意見陳述会。その模様はミッドチルダのみならず、各次元世界でも公開される。
特に今回は地上防衛用の巨大魔力攻撃兵器『アインヘリアル』の運用に対する注目が集まっている。
逆に言えば、何かをしでかすには絶好の機会でもあった。

「その事を知らせる為に君達を呼んだ訳じゃない。君たちにもこの公開意見陳述会の護衛に参加して貰う」
「だが断る」

当然の様に、必然の様に即答する御剣。だが、その表情は今までの物とは異なり真剣そのものだった。

「…久しぶりに聞いたな。その台詞」

「そうだな」
「…断られた理由は、黒峰と原口がいない事にも関係するのかい」
「…あぁ」

今回クロノがクラウディアに呼んだのは御剣だけでなく、黒峰と原口もだ。
だが、姿を現したのは御剣だけ。

「…影（シャドウ）か？」
「そうだ」
「現れるのか？」
「十中八九。機動六課に」
「だから公開意見陳述会の護衛には行かないと？」
「あぁ」

そして沈黙がその場を支配する。
見つめるクロノ。見返す御剣。その均衡も、クロノが口を開く事で崩れる。

「…六課に何か有るのか？影（シャドウ）を誘き寄せる様な何かが」
「それは言えん」
「…僕は君の上官なんだが？」
「知った事か」
「…」
「…」
「…ヴィヴィオ」
「…」

ただ簡潔に。だが、確信を持っているかの様にその名を口に出すクロノ。

御剣の態度には一切の揺るぎは無い。だが、諦めた様に御剣は口を開いた。

「あぁ、あの子はレリックウェポンだ」
「レリック？それは…あのレリックか？」
「そうだ。古代ベルカ王族血統にのみ許された、ロストロギア移植による人体強化技術。その対象者をレリックウェポンと言う」
「ロストロギアの移植？…どこかで」
「あの変t…ゴードス・ピードもその実験台だった可能性がある。本来ロストロギアを人体に取り込むには適正もそうだが、外部からの調整も必要になる。ただ埋め込んではい終わり、では誰もが真似をするだろうしな」
「つまり、あの件にもスカリエッティが絡んでいたと？」
「さてな、絡んでいたのはスカリエッティか、それとももっと大きな組織か…」
「……」
「心当たりは有る。だが、口には出したくない、と言った顔だな」
「……人造魔導師」
「…やはりな」

人造魔導師。それは人間に対して、主に外科的な処置・調整によって強力な魔力や魔法行使能力を持たせる技術。
魔法文化が全盛となって以来、幾度も試みられた研究で、最終的に生命操作技術によって適合率の高い「素体」を作成するスタイルにまで到達したが、倫理的問題から次第に禁忌とされ、成功率の低さも相まって過去の技術となりつつある。
主な手法は前述の「素体」に適合する高エネルギー結晶体、例えばレリックを埋め込む事。

「…管理局も一時研究に関係していた。まさか…ピードは…」

「その実験体の内の一体だったのかもな。今となってはどうでもいい事だが。どうしても知りたいなら本人に聞けば良いだろう」
「無理だ」
「何？」
「元管理局次元航行艦付き武装隊員、ゴードス・ピードは獄中で死亡している。
死因は急激な衰弱死。苦しみ始めて数分で骨と皮になって果てたらしい」
「…副作用…か。口封じも見越しての事か？」
「恐らくは、な」

クロノは顎に手を当て考え込む。
管理局が完全無欠な正義の味方だ、等と青臭い事をいまさらクロノも言うまい。
だが、倫理的な面で問題が多く、現在は管理局法により研究・実用化が厳しく制限されている技術を、その管理局が使用しているとなれば…

「話が逸れたが、ヴィヴィオはレリックウェポン。それも正統な、だ」
「正統な？どう言う意味だ？」
「…あの子は古代ベルカの王、聖王のクローンだ」
「……な…に…？」

空いた口が塞がらない、と言った風情のクロノ。
そこへ畳みかけるかのように御剣は続けた。

「私の鑑定能力で確認済みだ。この局面で現れた聖王のクローン。事件と関係無いとは言うまい？」
「な、ならば、聖王教会へ連絡して匿って貰えば！」

「私と、黒峰と、原口の守る機動六課か聖王教会。どちらが安全か、一々論争する気か？」
「む…」
「何と言われ様が、私達は機動六課を動かん。仕込みもそちらにあるしな」
「…せめて１人」
「…そこまで言うなら良いだろう。地上本部にも原口に結界を張って貰う。中からは出られるが、外からは入れない、という類の物をな。二層構造なら転移で突破される事も無いそうだから、それである程度は防げるだろう」
「…分かった。それで良い」
「分かってくれてありがたい。何、影（シャドウ）の方は明日で方がつくさ」

そう言いつつ、御剣は応接室の出口へ向かう。

「御剣」
「何だ？まだ何かあるのか？」
「気を付けてな」
「…お前は私に死亡フラグを立てる気か？」
「フラグ？何だそれは？」
「いや、何でも無い。では、またな」

同日　１９：３４　機動六課　廊下

「あれ、仁。戻ったんだ」
「ティアか。あぁ。これから地上本部か？」

クラウディアから戻った御剣は、廊下でばったりティアナと出会う。

「うん。ＦＷ陣総出でね。仁達は違うの？」
「いい加減、片づけなければならない事があるからな」
「…そう。気をつけてね」
「…そうだな」
「心配なんてしてないけど。はやて姉さんを泣かせちゃだめよ？」
「問題ない。ほれ、集合に遅れるぞ？行って来い」
「うん。じゃあね」
「あぁ。そちらこそ…気をつけて、な」

最後の言葉は呟くように。ティアナの耳には届かなかったようで、振り向くことも無くティアナはヘリポートに向かう。
その後ろ姿を暫し見送り、御剣は執務室へと向かった。

９月１２日　公開意見陳述会当日　夕刻　機動六課　屋上

「原口」
「…御剣？」

屋上で何かを行っていた原口に、御剣が声を掛ける。御剣の背後には黒峰も立っていた。

「首尾は？」
「上々。そっちは？」
「問題無ぇ。いつでも行ける」
「そう。いよいよ、だね」
「あぁ。日も暮れてきた。そろそろ…」

ビシシッ

御剣がそう言った途端、不穏な音が2人の耳に届く。
何かが軋む音。その音の正体は上を見ればすぐに知れた。
真っ赤に燃える夕暮の空。そこに幾筋もの罅が入っている。
罅は確実に広がり、そして遂に

ガシャアン！！

甲高い音を立てて透明な何かが砕け散った。ガラスの欠片の様な物が周囲に降り注ぐ。
が、その欠片は高熱に晒された氷の様に、空中へ溶けて消えて行った。

「…予想はしてたけど。結構ショックだね。だいぶ頑丈に創ったんだけどな」
「同系統ってだけじゃなく、同程度の能力でもあるってのは確定らしいな」
「どれだけ頑丈に作ろうと、壊されるときは壊されるものだ。
さて、ようこそ。機動六課へ。御用向きは…聞くまでもないか」

空中を見上げる御剣、原口、黒峰。3人の視線の先にいたのは、黒づくめの男2人。
以前の姿とは異なり、明確に元となったであろう人物の姿を取っている。
即ち――

「…気分悪ぃな。自分と同じ顔の奴がいるってのは」
「同感」

――それぞれ黒峰と原口の姿を取っていた。

とは言え、着ている制服、肌、髪、瞳の色が反転している等の違いはあるが。

「……我等ヲ待チ構エテイタ、ト言ッタ風情ダナ」
「流石ニ奴等モ、ソコマデ暗愚デハ無カロウ。仮ニモ我等ノ元トナッタ者共ゾ」
「…何か勝手言ってやがんな」
「腹立つね。御剣」
「あぁ。『六魂幡(りくこんはん)』」

影達(シャドウ)が駄弁っている間に、御剣が先制する。
御剣が腕を一振りすると、その身は漆黒のマントに覆われた。と、同時にマントの裾が周囲に凄まじい勢いで伸びていく。

「ム」
「コレハ…！？」

原口が改めて張った結界はすぐさま六魂幡に満たされ、影達(シャドウ)は瞬く間に六魂幡に呑まれた。

「影達(シャドウ)を収束せよ」

闇の中から御剣の声が響く。
主の命を受け、徐々に縮まって行く六魂幡。その途中で表面が伸び上がり、黒峰と原口が顔を出す。

「気持ち悪っ！！！」
「コールタールに落ちたら、こんな感じなのかな…」

等とぼやきつつ、２人は収縮を続ける六魂幡から離れる。

既に収束も佳境。六魂幡も５ｍ程になっていた。

「…これで終わり？」
「…なら随分楽だろうけどな」

そう黒峰が言った瞬間だった。
六魂幡の収束がピタリと止まる。次の瞬間、六魂幡が膨れ上がり、風船が割れるかのように弾け飛んだ。

「ぬおっ！？」
「…血！？じゃない…これって」

そして内部からあふれ出たのは大量の血液…とも見紛う程の粒子の海だった。
黒峰のそれと同じ色をした粒子の海の中から、２人分の人影が浮かんで来る。
それは黒峰の影（シャドウ）、そして原口の影（シャドウ）だった。

「…流石ニ焦ッタゾ」
「ナニ。我ガ粒子ニ掛カレバ、アノ程度何ノ事モ無イ」

そう言いつつ掌中で自らの出した粒子を弄ぶ黒峰（影）。

「…って御剣は？」
「…おい…まさか」
「御剣！？御剣！！？」
「呼んだか？」
「うおぅ！？」

六魂幡が破られたにも関わらず、未だ姿を見せない御剣に焦った

のか、原口が大声で御剣の名を呼ぶと、返答はすぐ背後からあった。
「いるならいるって言えよ!?」
「いや、六魂幡が弾けた衝撃で弾き飛ばされてな。戻るのに少しばかり時間がかかった」
「…って言うか、何でアレが弾けるんだよ。呑み込んだモノを片っ端から無にする宝貝だろ?」
「あの粒子だ」
「粒子って…あっちの俺の出している奴か?」
「あぁ。あの粒子、此方が消去するよりも多く出されて来た様だ」
「…何の捻りも無い正面突破かよ…」
「だが、それで六魂幡が敗れる、と言うのは有り得ないのだが…」

そう言いつつ御剣は眼下に海の如く溜まった粒子を見つめる。
原口の結界が張られている事で、実際の六課に影響は無いが、六課の建物や敷地内の構造物が次々に呑み込まれていく。

「…虚数、か」
「虚数?」
「あの粒子、特性なのかは知らんが虚数属性を持っている。と言うか、ディラックの海に通じている様だな」
「ディラックって…」
「六魂幡の内部に発生したディラックの海。六魂幡が無に出来るのはあくまでそこに存在するモノ、『有』だけだ。『無』を無にする事など出来る筈が無いからな」
「つまり?」
「さっさとアイツを消滅させて終わらせる事は出来ない、と言う訳だ」

そう言いつつ、御剣は乖離剣を手に取る。

「正攻法でぶっ飛ばす、か。分かりやすいけどよ」
「じゃ、僕は準備に入るから、2人とも相手頑張ってね」
「「おう」」

短く答えると、御剣は原口の影（シャドウ）の方へ。黒峰は自身の影（シャドウ）の方へ向かって行った。

「さて、お前の相手は私だ」
「我ニ挑ムカ。良カロウ。貴様ノ影如（シャドウ）キト我ヲ同ジト思ウナ」
「あぁ。アレが私の影（シャドウ）、というのは私も不本意だ。私の全力で、アレの汚名を雪いでやるとしよう」

「で、俺がお前の相手、か…やっぱ気持ち悪ぃな。自分と同じ顔が目の前にあるってのは」
「ソレハ我ノ台詞ヨ。以前ノ様ニハイカヌト思エ。最早我ガ力ヲ秘匿スル必要モ無イ。全力デ挑ンデ来ルガヨイ！！」
「何で俺が挑戦者みたいになってんだよ…全力ねぇ。まだ…出せねぇな！！」

こうして戦いの火蓋は切って落とされる。
ぶつかり合う2組を遠方から眺めながら、原口も自らの戦いに身を浸す。

「座標認識。界種選択。1次元から6次元までの接続カット」

原口が目を閉じ口上を述べると、原口の掌の上に幾何学的な立体文様が浮かび上がる。
ある種のテンプレートの様にも見えるそれは、原口が言葉を紡ぐた

びに形を整えていく。

「!?止メロォ!!!」

同じ系統の能力者として何かに気付いたのか、原口の影(シャドウ)が黒峰の影(シャドウ)に向かって叫ぶ。
それを受け、黒峰の影(シャドウ)が原口の方へ向かおうとした。

「通すかよ。もっとゆっくりして行けや」
「クッ…!」

だが、黒峰によって阻まれる。原口の影(シャドウ)も同様に御剣に阻まれ、原口に近づけない。
その間にも文様は秩序あるカタチへと変わって行く。

「世界を再構築。『包括世界(ほうかつせかい)・釈迦掌陣(しゃかしょうじん)』!!」

そして、世界は書き変わる。
先程までの六課近郊の風景は一変。何も無い真っ白な世界に塗りつぶされていく。
その果ては見えず、３６０度地平線が広がり、空にも果ては有る様に見えない。

「…何ダ…コレハ…何ガ…」
「我ガ力ガ…及バヌ?何ナノダ…コノ世界ハ…!?」

目に見えて狼狽える影達(シャドウ)。特に原口の影(シャドウ)の狼狽え振りは著しい。
結界を破壊しようとしているのか、幾度も手を前に翳しているが、周囲に変化は一切見られない。

「上手くいった様だな」
「うん。これで…少なくとも僕の影（シャドウ）は無力化出来た筈。ま、ここの維持に能力を大分割く所為で、僕も自分の身を守る程度にしか能力を使えないけど」

今回、原口が展開した、否、創造したのは至って単純な物。
内部に存在するモノに影響を一切与えない代わりに、内部からの影響を一切受けない、と言うもの。
それ単体では、原口１人では意味を全くなさない物である。だが、それこそが重要なのだ。

「十分だ。さ～て、全力で来いって言ってた奴もいたし？全力、出させて貰おうか！！！」

そう黒峰が言うと、黒峰の周囲から粒子の柱が立ち上る。天高く吹き上がった粒子は、やがて巨大な人型を模して行った。その人型は文字通り天を突き、頭部が霞むどころか腰辺りすら見えない程。だが、それも暫くすると収束され、５０m程に収まる。だが、その身を構成するのは膨大な粒子。
その質量は通常空間、惑星上に存在すれば、その惑星の自転、公転、地軸に影響を与えるであろう程。

「私もそうさせて貰おうか。一度に有るか無いかの機会。一切の遠慮無く、魂魄の欠片も残さず消し去ってやろう」

そう言い放つ御剣の手に有るのは、『ド・マリニーの時計』。
と、次の瞬間、御剣の掌中に現れたのは青銅の剣。それは紛う事無き『剣軍師団（けんぐんしだん）』だった。

「って、なんでいきなり出てんだ？それ。５分程掛かるんじゃ無か

ったのか？」
「『ド・マリニーの時計』で『剣軍師団』を出すのに必要な過程を吹き飛ばした。さて…」
ふと、御剣は自身の持つ剣軍師団を逆手に構えると
ドッ
自分の胸に突き刺した。
「…は？」
「…へ？」
呆気にとられた様にその様を見つめる黒峰、原口。
そうしている間にも、剣軍師団はどんどん御剣の体内に収まって行く。
「ん…ふぅ」
遂に剣軍師団は柄尻まで御剣の中に収まってしまった。
と、次の瞬間。御剣の周囲に気が立ち上る。それは闘気では無く、それよりももっと神々しいもの。
紛う事無き神気だった。
「…ふむ」
等と呟きつつ、御剣はその手を眺め透かししている。その度に大気は震え、戦慄く。
今、御剣の中に有るのは1つの世界。あらゆる時間軸とは切り離された次元。

そう。御剣は『剣軍師団』を介して、『座』と一体化していた。
古今東西、守護者から神霊に至るまでの英霊を英霊たらしめる宝具。
その集合体をその身に修めた今、御剣の体は髪の毛一筋から細胞の一片に至るまでが濃密な神秘で構成されている。
その霊格は通常の空間では耐え切れず、御剣が軽く腕を振るだけで次元が裂け、世界が滅びるだろう。
だが、原口の究極結界『包括世界・釈迦掌陣』はそれさえも内部に収め切る。
その中の出来事は、あたかも釈迦の掌の内で踊る孫悟空の様な些細な事。外界に影響を及ぼす事は一切無い。
その基本骨子に用いられた宝具は『全て遠き理想郷(アヴァロン)』。
あらゆる物理干渉・魔術は勿論の事、五つの魔法ですら例外ではなく、並行世界からのトランスライナー、多次元からの交信（六次元まで）をもシャットアウトし、極め付けには時間からも遮断するかの宝具を反転させ、外界からの干渉を遮断するのではなく、内部からの影響を遮断する様に。

「ナァアアアメェエエエエルゥウウウウナァアアアア！！！！！」
「おぉ？」

不意に響く絶叫。
黒峰がその声の方へ目をやれば、そこに居たのは当然…というか、黒峰の影(シャドウ)だった。
絶叫と共にその体は膨れ上がり、異形を成して行く。

「まぁ、黒峰に出来る事ならあいつにも出来る事だな」
「俺は此処まで趣味悪くないぜ？」
「て言うか…何これ？邪神？」

３人の眼前に現れたのは元が何だったのか察する事すら不可能なほどに膨れ上がった異形だった。
身の丈は優に３，０００ｋｍを超えるだろうその巨体。
月にも匹敵するその大質量に周囲の大気は引き寄せられ、大嵐の如く荒れ狂っている。

ゴオァアアアアアァァアアアアアア！！！！

何か言葉を発しているのか、巨体が轟く様に声を上げるが、最早聞きとる事は出来ない。

「やれやれ、こちらとしては的がでかくなっただけだがな」
「そう言ってやンなって。さっさと片付けて帰ろうぜ？」
「雑魚扱いには変わりないんだね…ま、大体こう言うのは昔から…」
「巨大化した悪役が、ヒーローに勝った試しは無ぇんだよ！！！」
「…私達の方がどちらかと言えば悪役だがな」
「…それは言いっこ無しだぜ…」

# 9章－8　その日、機動六課（前編）（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：9章8話です。

長っ！あぁ、いえ。お待たせした分の分量は有ると思いますし、もっと多い小説も有るのでしょうが。
大分削ったんですがね…コレ以上入れると、その日、機動六課（前編その1）とかになりそうだったので要らない部分は大分カット…

御剣神霊化。黒峰巨大化。
実際、地球やミッドチルダではやってはいけません。
因みに、作中で明言しませんでしたが、黒峰の質量は1．３　×１０の２２乗ｋｇ。
冥王星と同程度です。ギリ惑星じゃない。
影の方は7．３４×１０の２２乗ｋｇ。月と同程度。

全力全壊。
次回『その日、機動六課（中編）』お楽しみに。

『六魂幡（りくこんはん）』：対軍宝具ランクＥＸ　レンジ1～９９　最大補足９９９人

金鰲山の教主、通天教主の宝貝。スーパー宝貝の一つ。着衣が渦となって相手を飲み潰す。究極的には飲み込んだ相手を“無”にまで縮めることができる。
仙人界二大教主の持つ宝貝にふさわしいだけの能力を持つ。
また、身に纏う事で攻撃を吸収する防具としても使用可能。

# 9章ー9　その日、機動六課（中編）

ゴォアォアアアアアアアア！！！！　周囲に響き渡る轟音。異形と化した黒峰の影（シャドウ）から発せられるのは、最早声とは言えぬものだった。
初めは球体だったその姿も、あちらこちらから腕の様な物が突き出し、より一層禍々しさを増している。

「怒ってんなぁ」
「の、様だな。だが、そんな事は私達に関係ない。あのデカブツを倒して、今回の件を終わらせる。行くぞ」

そう言うと御剣は黒峰の影（シャドウ）へ向けて左手刀を大上段に構える。
黒峰の影（シャドウ）もそれに気付いたのか、腕を数本束ねてより巨大な腕を作り出し、拳を繰り出して来た。
彼我の大きさは歴然。相手は星1つに匹敵する程の巨体。だが、御剣は一切の躊躇い無く手刀を振り下ろす。
そこから放たれたのは極光を放つ大斬撃。エクスカリバーの一撃さえ軽く凌駕するであろうその斬撃は、その拳ごと影（シャドウ）の巨体を容赦なく袈裟懸けに切り裂いた。

「…疾！」

続けて御剣が繰り出したのは右正拳突き。ただ一度、パンッと音を立てて虚空へ放たれたそれは、影（シャドウ）に穴を穿たんばかりの勢いで衝撃波を叩き付ける。

「…風！」

更に御剣は一度相手に背を向け、体を捻り左足刀を放つ。
再び放たれた極光の斬撃は影（シャドウ）を横一文字に切り裂く。

「…迅！」

最後に御剣は影（シャドウ）の真上へ縦に回転しながら跳び上がると右足を高々と挙げる。頭上に掲げられたその踵は引き絞られた弓の如く力を溜めこみ、解き放たれる時を待っていた。

「…雷！！！」

そして放たれる一撃。
御剣が踵を振り下ろすと同時に雷が放たれる。
幾千幾万の雷を束ねたかのようなソレが黒峰の影（シャドウ）を撃ち抜くと同時に、周囲は閃光に包まれる。
暫くすると、空中から御剣が原口の横に降り立った。これだけの事をしておきながら、息1つ乱していない。

「…ふむ。こんなものか」
「いやいや、なにあっさりと言ってるのさ。何これ。何この有様。遂に人間辞めたの？」
「ある意味そうだな。『剣軍師団』を取り込んだ事で、今の私は神霊とほぼ同一の存在になっている。
どうせなら剣軍師団を突き立てる時に、『私は人間を辞めるぞ、原口～！！！』とでも言った方が良かったか」
「…呆れて物も言えないよ。で――」

原口は会話の途中だと言うのに視線を逸らす。

その方向は黒峰の影（シャドウ）があった…否、今も有る方向。
あれだけの攻撃を受けていながら、その巨体は依然としてそこに聳えている。

「――あれはどう言う事？」
「ふむ。あの粒子には虚数属性が付加されている様だな。
それが寄り集まったアレは最早、ディラックの海そのもの。
故に物理的なダメージを無効化されたのだろう。切断や打撃は意味が無いとみて良いな」
「…落ち着いてる場合？」
「虚数は１５００年代になって発明されたモノ。伝説（わたし）では殆ど対抗手段が無い。
まぁ、宝具による攻撃だけが私の手では無いがな」
「俺と同じ方法で出してるなら、あれも魔力で出来てるんじゃ無ぇの？というか、さっきの攻撃、多分効いて無い訳じゃないと思うぜ？」

頭上から黒峰の声が降って来る。
自ら出した巨人の中に入っていた筈の黒峰が、上から飛び降りて来ていた。

「どう言う事だ？」
「いや、俺とアイツの粒子が混じり過ぎてて分かりにくかったけど、御剣の攻撃であの巨体を構成してる粒子が吹き飛んだのは確かだ。
無効化…と言うか吸収しきれなかったんだろ。その後すぐ補充して元に戻したんじゃね？」
「…それは効いて無いのと同義なんじゃ…」
「否、意味は有る。アイツはあの中に居るのだから、全て消し飛ばせばいいだけの事」

と、御剣がそう言った途端、黒峰の影（シャドウ）が動き出す。
その無数の腕が内側へ引き込まれる様に収まって行く。そしてほぼ完全な球体になったかと思うと、徐々にその形は楕円に近付いて行った。

「…どうやらこちらの会話は筒抜けの様だ…来るぞ」
「みたいだな」

その前触れは一瞬の閃光だった。標的となったのは御剣。
先程の攻撃の意趣返しの心算だろうか。放たれたのは一筋の閃光。
それはディラックの海から取り出された反陽子。黒峰の影（シャドウ）は、それを自身で加速させ放って来たのだ。
即ち、荷電粒子砲である。反陽子を打ち出すには膨大な電力を必要とするが、皮肉にもその電力は先程御剣が放った雷撃で賄われていた。
荷電粒子砲が御剣に直撃する寸前、咲き誇ったのは7枚の花弁。
『燭天覆う七つの円環（ロー・アイアス）』。トロイア戦争において大英雄の投擲を防いだという、七重、皮張りの盾。
開いた花弁が如き形であるのは、かつて担い手が死に際し、流した血からアイリスの花が咲いたという伝説に由来する。
投擲及び使い手より放たれた凶器に対してならば、ほぼ無敵を誇る結界宝具。
その伝承に加え、御剣から供給される魔力により補強された盾は遂に1枚たりとて欠ける事無く、黒峰の影（シャドウ）の砲撃を防ぎきった。

「…どうやら、宝具の効果が底上げされているらしいな」
「自分の事だろ？把握しとけよ…」
「何分初めてでな。出来るだろう、と思ったからやっただけだ」
「…行き当たりばったりかよ」
「今回は上手く行った様だな。さて、次が来るらしいぞ」

そう言って御剣が視線を向けた先に有ったのは、巨大な掌。
飛び道具が防がれたので今度は直接攻撃。実にシンプルで、分かりやすい攻撃手段だった。
その巨体故に緩慢に見えるその掌も、実測値はマッハ等軽く超えているだろう。

「ハエ叩きかよ」
「私達等、奴のサイズからすれば塵芥だろうさ」
「しかし、昔の偉い人は言ってるぜ？」
「全くだ」
「そうそう」
「「「『当たらなければどうと言う事は無い』」」」

その言葉と共に3人は散開。
3人纏めて叩き潰さんと迫る掌を悠々とかわし、黒峰の影（シャドウ）に迫る。

「『箱庭』を起動するよ。2人共、後宜しく」
「諒解」
「任された！」

そう言った原口の掌中に現れたのは透明な立方体。
その表面には無数の文様が奔り、刻一刻と流動している。

「と、言う訳でお前はここで釘付けだ」

黒峰の台詞と共に、黒峰の巨人が黒峰の影（シャドウ）に襲いかかる。
巨人が影（シャドウ）の表面に取りついた瞬間、巨人は溶けるかのように形を崩した。
同じ色なので分かり辛いが、よく見れば影（シャドウ）の表面を膜が覆って行く。

影（シャドウ）も逃れようと足掻くも、遂には全て覆われてしまった。
内部で暴れているのか、球体だったソレは著しく形を崩していた。

「さて、そして幾らか間引かせて貰おう。
闇よりもなお昏きもの
夜よりもなお深きもの
混沌の海よ　たゆたいし存在
金色なりし闇の王
我ここに　汝に願う
我ここに　汝に誓う
我が前に立ち塞がりし
すべての愚かなるものに
我と汝が力もて
等しく滅びを与えんことを！『重破斬（ギガ・スレイブ）』！！！」

呪文の完成と共に暴れていた影（シャドウ）の動きが止まる。
何かに抗う様に小刻みに震えると、その巨体が一瞬で縮んでしまった。

「消せないならば、ソレ自体が混沌である空間に飛ばせば良いだけの事だ。」
「…あれ？終わり？『箱庭（コレ）』どうすんのさ」
「もしそうなら大分話は楽だが…そんな訳が無いだろうな」
「…あぁ。中でなんか動いてる」
「…ほらな」

拍子抜けしたかのように原口が呟くと、傍に降り立った御剣が即座に否定し、黒峰がそれに同調する。
すると御剣の言った通り、黒峰が作っていた膜（覆っていた物が小さくなった為に球体と化していたが）を破り、中から人型の物が現

れた。
さながら卵を割って雛が孵るかのように出て来たそれは、まさしく異形だった。
端的にそれを表すならば、人の左腕が人の形をしていた。
それは肩からまっとうな腕が生えていると言う意味では無く、左腕がそっくりそのまま人になっていたのだ。
背骨と腕の骨が一体となったかのような有様のそれは、人が人型の盾を構えている様でもあった。

「ヨモヤ…ココマデトハ…」
「左様…侮ッテイタ訳デハ無イ。元ヨリ2対3。我等ガ不利ナ事ハ自明デアッタ」
「ダガ、我等ハ引ク訳ニ行カン。我等ノ敗北ハ、即チ世界ノ敗北」
「故ニ我等、我ヲ捨テ一心トナラン」
「我ト我ヲ束ネ一体トナラン」
「「全テハ『世界』ヲ守ル為ニ」」

その台詞と同時に影達（シャドウ）が粒子に包まれる。黒峰の物では無い。
自身の内から噴き出る様に現れたその粒子をその身に纏い、影（シャドウ）は御剣達の方へ飛び降りる。
彼我の距離は凡そ１００m。そこに降り立った影（シャドウ）は、その異形を骸骨を模したかのような鎧で包んだソレは、左腕に棺桶の様な盾を構えると（人が中に入っている、と言う意味では正しく棺桶だ）右手には大きな剣を携える。

「まるで俺らが悪者みたいで気分悪ぃんだけど」
「事実、奴等にとって私達は悪者さ。私達にとって奴等が悪者である様に」
「世知辛いねぇ」
「さて、原口の準備が整うまで、時間稼ぎだ。原口、どの程度掛か

る？」

「後４分程。その間、足止め宜しく」

「足止めするのは構わんが…別に倒してしまっても構わんのだろう？」

「…その台詞を言うのに私の声真似をする意味は…まぁいい。」

半目で黒峰を睨みつつ、構える御剣。

その身の内から湧き出る様に零れた光が収束したかと思えば、御剣の身は煌びやかな宝具に包まれていた。

その身に纏うのは『雷霆（アルゲス）の光輝』。ギリシャ神話の主神ゼウスの持つ光の鎧。

その手に担うのは煌炎剣リットゥ。バビロニア神話最強の神、マルドゥクの持つ炎剣。

「冗談だって。そんな睨むなよ」

御剣からの視線を受け流しながら、黒峰もまた構える。

大気中に漂っていた粒子を巻き込み自身を覆わせると、その粒子は徐々に形を変えて行く。

十数秒後、そこに居たのは一体の竜だった。当然、本物の竜では無い。

だが竜を模した全身鎧（フルメタルアーマー）でありながら、その質感、威圧感、何よりも存在感。

背から生える翼。臀部から伸びる尾。

異形でありながら、どこか神々しささえも感じるその姿は伝説に謳われる竜種と比べても遜色は無い。

「はっ！！！」

「ぜやっ！！！」

御剣と黒峰。2人は同時に影（シャドウ）へと攻め込む。
黒峰の攻撃は単純極まりない。その拳で殴りかかるだけ。
だが、今の黒峰の体重は月にも匹敵する。その圧倒的質量を拳と言う星に比べれば極小の点と言っても過言ではない面積に集約し放つ。
さらにはその拳の速度は先程の影（シャドウ）同様、マッハ等軽く超越した速度で放たれる。
まさしく星をも砕く一撃。
御剣の攻撃もまた、単純な物だった。
肩越しに振りかぶった剣を振り下ろす、という剣での攻撃の中でも基本中の基本。
だがソレは、神霊と化した御剣がリットゥを用いて放つだけで至高の一撃となる。
御剣の魔力を喰らい、リットゥの鋸刃が始動する。
リットゥの刀身に刃は無く、噴き出し回転する焔で対象を焼き切る鎖刃鋸（チェーンソー）。
しかし今、ほぼ無限に等しい御剣の魔力によって生み出されたその焔刃は、超新星爆発に等しいエネルギーを内包していた。
だが――

キィン…！

――通らない。星を砕く一撃も、超新星爆発に等しい一撃も、影（シャドウ）の構えた棺桶の様な盾に全て防がれる。
続けて放たれた黒峰の右足刀、御剣の横薙ぎ、黒峰の竜尾に依る薙ぎ払い、御剣の突き。
その何れも影（シャドウ）は揺らぐ事すらなく受け切った。
それでも尚、御剣達は攻撃の手を緩め無い。
放たれた攻撃は全てが一級品。
ただの人間ならば掠っただけどころか、余波の余波の余波でさえ消し飛ぶだろう。

そんな攻撃の全てを受け切り、影の盾（シャドウ）は傷一つ無くそこにあった。

「…ちっ」

「…はぁ」

黒峰が舌打ち1つ、御剣が嘆息1つすると、2人は大きく飛び退って再度距離を取る。

「…どうなってんだよ、あの盾。茶化して言ったけど、俺は本気で倒す気でやってんだ。

傷一つ付かないってのは軽くショックだぜ？」

「…恐らくはあの盾の中に居る原口の影（シャドウ）の仕業だろう。

この空間内では奴の能力が無効化される。だからこそ、別空間である黒峰の影（シャドウ）の粒子の中に存在するディラックの海の中に引き籠ったか」

「で？結局、何されてるんだよ」

「推測だが、黒峰の影（シャドウ）が出す粒子の持つ特性、虚数属性に絡んだ事だな。

大方、吸収したエネルギーを別の空間に受け流しているのか。ディラックの海は私単体でも突破出来た事を考えれば、別の世界に繋げているのだろう。

奴は盾で防いではいるが実際の所、全身でそれが可能だろうな」

「…て事は何か？アイツを倒したかったら世界を壊す勢いでやれって事か」

「だろうな。しかも、『天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）』の様な対界宝具も意味は無さそうだ。

通るのは効果では無くエネルギーだからな。純粋に世界を破壊するだけのダメージを与える必要がある」

「…」

「…と言う訳で、私達は足止めに専念だ。幸い、あちらの攻撃手段

は今の所あの剣のみの様だし…なっ！！」

そう言うと御剣は再度、影（シャドウ）へと切りかかる。
先程同様、斬撃の全ては盾に阻まれ影（シャドウ）に届く事は無い。
数十合に及ぶ斬撃を放つも、相も変わらず小揺るぎすらしない影（シャドウ）。
だが一瞬、盾の防御が緩む。
見えたのは影（シャドウ）の首元。もしそこが盾以下の防御力なら。攻撃を盾で防ぐのは盾以外では防げないからでは。
そんな思惑が御剣の脳裏をよぎる。が、御剣はその思惑に乗らない。
ただ足止めの為に剣を振るい続ける。追いついた黒峰と共に、影（シャドウ）をその場に釘付けにし続ける。
原口が攻撃に参加していない事から何かを企んでいる事を看破したのか、影（シャドウ）も積極的に原口の方へ向かおうとし始めた。
だが、それは御剣と黒峰の連携によって悉く阻まれる。
そして、その時は来た。

「『箱庭（はこにわ）』展開完了！いくよ御剣！黒峰！」

響く原口の声。
その声と同時に、周囲の世界が書き変わって行く。
今までの白一色の世界から、どこか電脳空間を思わせる様相の世界へと。

「宣言――英雄譚（ヒロイック・サーガ）は悠久不滅の理を示す！！英雄の前に立ちふさがる物は邪悪である！！！」

それは世界に打ち込まれる楔。

「宣言――英雄譚（ヒロイック・サーガ）は悠久不滅の理を示す！！邪悪は英雄によって討滅されるべし！！！」

それは世界を縛る鎖。

「宣言――英雄譚（ヒロイック・サーガ）は悠久不滅の理を示す！！英雄は勝利する！！！！！」

それは世界に敷かれる大宣布。これがこの世界のルール。

『箱庭（はこにわ）』。それは限定空間内に於けるルールの施行。

原口の定めたルールこそが至上となる世界。この空間内に於いて、何者もルールから逃れる事は出来ない。

「御剣！黒峰！やっちゃって！！！」

「「応！！！」」

原口の声に合わせ放たれる御剣と黒峰、両者の攻撃。

それを今まで通りに影（シャドウ）は盾で防ごうとする。が、ソレは叶わない。

全てのダメージを吸収する筈の盾は無残に砕け散り、影（シャドウ）は彼方へと吹き飛び盾の内部に居た原口の影（シャドウ）が露わとなる。

「さて、と。喰らえ、リットゥ」

御剣はリットゥへ更に魔力を注ぎ込む。

リットゥの焔刃は蒼炎に包まれ、更に温度と回転速度を高めて行く。

それは超新星爆発（スーパーノヴァ）さえも越えた極超新星（ハイパーノヴァ）、そしてそれを更に超えた始原大爆発（ビッグバン）。

その熱量に周囲の大気が耐え切れず電離し、リットゥの周りを稲妻が奔り始めた。

「『天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）』！！！」

そして、そのエネルギーが遂に解き放たれた。
まず奔ったのはリットゥの周りを取り巻いていた雷撃。その後を追う様に世界が切り裂かれていく。
世界の始まりが焔（ビッグバン）ならば、世界の終わりもまた焔（ビッグバン）。
現世に存在するモノ全てを消し飛ばす一撃は違わず影（シャドウ）へと直撃した。
影（シャドウ）も粒子を放出し防御するも焼け石に水。
出した端から粒子は昇華され消滅して行く。
リットゥの刀身から全ての炎が吐き出され終わる頃には、影の粒子（シャドウ）も尽きたのか、その身を覆っていた鎧の大半が焼失していた。

「辰気収斂！！！」

すかさず黒峰が追撃に入る。
その両拳を胸の前で重ねると、その前に黒い穴が空く。
それは何も写さない漆黒の球体の様であり、光を放つ球体の様でも有った。
その球体に、黒峰が纏っていた鎧、粒子が集まって行く。

「『飢餓虚空（ブラックホール）――――魔王星（フェアリーズ）』」

ただ、それだけ。その一言で世界は侵された。
放たれた黒球が影（シャドウ）に接触すると同時、全てを呑み込む辰気の地獄が顕現する。
光さえ逃さぬ暗黒の超重力の前には、虚数空間など泡沫の飛沫に過ぎない。
だが、流石と言うべきか。重力崩壊が収まった後、そこには横たわる影達（シャドウ）の姿があった。

「ガ…グ…何…故…」

とは言え、瀕死と言って良いだろう。原形を保っている事が奇跡の様な物だ。
最早抵抗する事すら叶うまい。

「さて、リットゥで殺してしまう訳には行かんからな。言い残す事は有るか？」
「…」
「では」

御剣が取りだしたのは一口の鐘、『落魂鐘』。
御剣がハンドベルの様なそれを打ち鳴らすと、影達（シャドウ）は砂の様に崩れ落ちた。

「…終わったのか？」
「恐らくはな。少なくとも、私達がこの世界に来た事に依る撓みはもう無い筈だ」
「…はぁ～～…何かドッと疲れた…」
「さて、と。では、後は頼んだ」
「は？」

御剣がそう言うと同時にその体は地面に倒れ込む。煌々と輝いていたその体から輝きは消え、その顔は土気色になっている。
力無く横たわるその体は、起き上る気配を見せなかった。

「ちょ…御剣？御剣！？」
「おい！おい！！冗談だろう！？御剣ぃ！！！」
「五月蝿い」
「うおっ！！！？」

まるで人形か何かの様に唐突に首を巡らして御剣が言い放つ。

「…脅かすなよ。死んだかと思っただろ」
「死にはせん…死にはせんが全身が痛い。しばらくは動けんなこれは」
「…まさかとは思うけど」
「予想通り、神霊化の反動だ。全身筋肉痛…と言うか肉離れ、更には魔力の枯渇。1週間は動けんな」
「…実は俺も、もう魔力残って無かったり」
「…実は僕も、もう此処を維持出来なかったり」
「…全員ダウンか」
「…じゃ、『箱庭（はこにわ）』解除するよ」
「あぁ」
「おう」

機動六課

「…は？」
「…へ？」
「…どういう…事だ？」

『箱庭（はこにわ）』から出た3人の前に現れた光景、ソレは崩壊した機動六課だった。
隊舎は大半が崩れ落ち、火災でも起きたのか所々焼け焦げている。
そして何よりも、空には日が昇っていた。

「…俺達があの中に居たのは…」
「凡そ30分だ。浦島太郎じゃあるまいし、どう言う事だこれは…？原口」
「分からない。そんな設定はしてない！」

「では…」
「御剣さん!!?」

声の聞こえた方に3人が振り向くと、そこにはなのはが居た。

「なのは、聞きたい事が有るんだが」
「無事だったんですね!!」
「…聞きたい事がある。今は、いつだ。」
「…9月14日…機動六課壊滅から2日…です」
「一体これは…何事だ…それより…壊滅?」
「…はい。機動六課はご覧の通りです。地上本部も陥落、今は復興作業中です。…それと…」
「まさか…ヴィヴィオが浚われたのか?」
「…はい。それと…ティアが…浚われました」
「……は?」

# 9章－9　その日、機動六課（中編）（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：生きてました。9章9話です！！

これにて影戦（シャドウ）終了です。

大方の予想通りヴィヴィオは浚われましたが…ティアナも浚われました。

あれ？ヒロインはやてだよね？このままだとティアナヒロイン？

ご心配なく。ハーレムや三角関係はありません。作者が書けませんから。

黒峰と原口の使った技について少し説明を。御剣の宝具はいつも通り←です。

『飢餓虚空魔王星（ブラックホール　フェアリーズ）』。

分かる人には分かるこのネタ。マイクロブラックホールを生み出す。

ただ、発生方法がアレとは違い、粒子を収束させて質量、重力無限の特異点を作りだしています。

予備動作は拳を前で重ねるだけ。特異点が発生した時点で相手はそれに向かって吸い寄せられるので回避不可。

『箱庭（はこにわ）』

感想等で散々引っ張った、御剣が原口と戦いたくない、原口の方が強い、と言い続けた原因。

展開した『箱庭（はこにわ）』内部に居る相手に、原口が決めたルールを強制的に適用する。

今回原口が行ったのは英雄譚（ヒロイック・サーガ）の適用。

御剣達を英雄と定義する事で、それに則したルールを布いた。

ルールによって、御剣達の邪魔をする物は悪である。御剣達の邪魔をする物は御剣達によって倒される。御剣達は勝利する。以上のルールが適用される。

影の盾（シャドウ）はルールの施行に邪魔なので無効化された。

世界にルールを浸透させる為、予め発動した結界内部でしか使えず、発動まで時間が掛かるが、原口自身が結界による防御力を持つので、これの発動はそう難しい事では無い。

結界内部に引き籠り、これの発動を待ち、発動後は自分に有利になった空間内部で戦闘する。

破る方法は原口を倒す事のみ。

だが、仮に今回と同様のルールが布かれた場合、英雄譚（ヒロイック・サーガ）で悪役が勝つ程の難易度が要求される。

早い話が不可能である。

と、原口のチート加減が輪を掛けて酷い事に。

因みに、御剣の神霊化中のステータスは、全てＥＸ、魔力自動瞬時回復、体力無尽、ＨＰ自動回復、使用宝具能力強化。

御剣達の不在。その時、機動六課で、地上本部で何が有ったのか。

何故、御剣達は2日もずれた時間軸に戻ったのか。

次回、『９章－１０　その日、機動六課（後編）』

お楽しみに。

『雷霆（アルゲス）の光輝』：対人宝具ランクＡ＋＋　レンジ０　最大補足１人

ギリシャ神話の主神ゼウスの持つ身軽な鎧。ゼウスの持つ雷神としての力を鎧としたもの。

雷霆で編まれたこの鎧の前には並大抵の武器では歯が立たないどこ

ろか逆に消し炭にされてしまう。
また、鎧の放つ光は強力で人間では耐え切れず、対峙しただけで灰になってしまう。
ゼウスはこれの他にも、『雷霆（ポポス）の恐怖』という鎧も持つ。

『煌炎剣リットゥ』：対人宝具ランクＥＸ　レンジ１～３　最大補足１人

バビロニア神話最強の神、マルドゥクの持つ炎剣。
リットゥは、智天使ケルビムとともにエデンを守るために置かれた剣の炎の原型。
人の望みによって作られながら、人の意思に影響されず生まれる「神造兵器」の一つ。
その象徴は『焔』。世界が生み出された頃の熱量を柄の中に収めている。
刀身に刃は無く、噴き出し回転する焔で対象を焼き切る鎖刃鋸（チェーンソー）。
その熱はありとあらゆるものをプラズマまで昇華する程。

『天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）』：対界宝具ランクＥＸ　レンジ１～９９　最大補足９９９人

かつて混沌とした世界から天地を分けた究極の一撃。神の肉体から天地を生み出した剣から放たれる空間切断。圧倒的な熱量は擬似的な時空断層までも生み出す。
軽減するには対粛清ＡＣ（自然災害や神罰、世界干渉等への抵抗値）、相殺には同威力のダメージを与える攻撃が必要。
元来、エヌマ・エリシュに記された天地開闢の物語はマルドゥク神がティアマトの肉体から天地を生み出す、と言うものであり、そ

の意味ではリットゥを用いたエヌマ・エリシュこそが正しいとも言える。

# 9章－10　その日、機動六課（後編）

9月12日　公開意見陳述会当日　早朝　ミッドチルダ地上本部

「さて。じゃ、私はそろそろ中に入るよ」
「「はい！」」

周辺警備に就いていた、なのは、ギンガ、スバル。ティアナはライトニング分隊と共に警護している。

「でね。内部警備の時、デバイスは持ちこめないそうだから。スバル、レイジングハートの事、お願いして良い？」
「あ、はい！」
「後から来るフェイト隊長のデバイスも、前線メンバーの皆で預かっておいてね？」
「はい！」
「あの、なのはさん」
「ん？」

声をかけたのはギンガ。どこか落ち着かない様子で更に続けた。

「聖王教会の予言…でしたっけ？それが的中するとして、内部のクーデターと言う線は薄いんですよね？」
「うん。御剣さん達も本局の査察官に協力して、その辺は徹底的に洗ったらしいから。嘘を吐くと鼻が伸びる呪いとか使ってね」
「…その方法には色々言いたいですが…では、考えられるのは外部

からのテロ行為。ですが…目的は？
やはり、あのナンバーズと言う戦闘機人が？」
「兵器開発者なら、恰好のデモンストレーションにはなるね。マスコミもたくさん来ているし。管理局の本部を壊滅できる兵器や戦力を用意出来る、となれば反管理局組織からは引く手数多だろうね」
「ですが、威力証明にしてはリスクが高すぎませんか？こう言っては何ですが、他の場所なんて幾らでも…」
「そうだね。でも、私達がここで考えていても仕方ない。私達は私達の出来る事をしよう？」
「…はい」
「ギン姉、話終わった？」

手持無沙汰にしていたスバルが口を挟む。2人の会話内容はあまり気にしていない様だ。

「うん。では、なのはさん、行ってらっしゃい」
「あはは。うん。行って来るよ。あ、スバル」
「何ですか？」
「フェイト隊長が到着したら、ティアナと組んで警備。ギンガはライトニングについてあげてね」
「「はい！」」

本部に入って行くなのはの背を見送りつつも、尚ギンガの懸念は晴れていなかった。
脳裏によぎるのは、以前に御剣から依頼された調査の事。
ホテル・アグスタでの一件の原因となったロストロギア、その出所。
レジアス・ゲイズ。管理局中将にして、地上の守護者との呼び声も高い。
そんな彼が何故？

「ギン姉？どうしたの？」
「…ううん。なんでもないよ。行こうか」
「うん！」

だが、此処で悩んでいても、なのはの言う通りに自分にはどうする事も出来はしない。
ならば、今は自分に出来る事をするのみ。そう決意したギンガに目に曇りはもはや無かった。

9月12日　公開意見陳述会当日　夕刻　ミッドチルダ地上本部

「…何も起こらないね」
「それに越した事は無いけど、だからって警備中に気は抜かない！」

拍子抜けした風に言うスバルとそれを諫めるティアナ。
地上本部周辺には厳戒な警備が敷かれ、管理局員も多数集まっている。
何よりも周囲にはりめぐらされた原口の結界。ホテル・アグスタの件を教訓として最初から2層構造になっている。
生半可な事では突破されぬであろう警備。それでもティアナは嫌な予感がしていた。

「忘れたの？仁の影（シャドウ）は倒されたとしても、まだ亮と宗一の影（シャドウ）は残ってる。
あいつらが出てきたら私たちじゃどうしようも無いわ。そこん所分かってる？」
「あぅ…でもでも、その為に御剣さん達は六課に残ってるんだよね？じゃあこっちには来ないんじゃないかな？」

「最高戦力がこの場に居ない事に変わりは無いわよ。あのガジェットの親玉…ナンバーズが出て来る可能性だって有るんだから」

ガシャァン！

そうティアナが言った途端、周囲に甲高い音が響く。
空を見上げたティアナの視界に映ったのは、粉雪の様に舞う原口の結界の欠片と、それを張った主によく似た…だが、決定的に何かが違う人影。

「……フッ」
「え？」

だが、それも一瞬。こちらを見遣った瞬間に僅かな笑みを浮かべたかと思うと、その人影は消え去った。

「…今のは…？」
「……ティア！！なのはさんと連絡が取れない！」
「何ですって……ジャミングね。周囲に展開されてるわ。なのはさんの所に行くわよ！レイジングハートを届けないと！」
「じゃあ、それはアタシが行く！」
「…確かにアンタだけの方が速い。でも、ライトニングに合流してからよ。単独行動は禁物」
「…うん。分かった」

地上本部近辺上空

「…何だったんでしょうね、アレ」
「（恐らくは影（シャドウ）と呼ばれる存在だろう。私達の味方、と言う訳では無さそうだが、好都合だ。感謝はさせて貰おう。さぁ、始めようじ

ゃ無いか！！！）」

中に浮かぶのはクアットロ。周囲に展開されたコンソールのウィンドウの１つにはＤｒ．スカリエッティが映っている。

「でもドクター、さっきまでの結界の所為で、まだシスターズの配置は不十分ですよ？」

「（…号砲は鳴ったと言うのに、スタートを切れないとは…もどかしいものだね）」

「予定とはずれましたが、私のする事に変わりはありませんね～…通信管制システムに侵入開始。チャチな防壁だ事。このクアットロさんのＩＳ、シルバーカーテン。電子の織り成す銀幕芝居をお楽しみあれ！」

「（こちらチンク。所定の位置に着いた）」

「（こちらセイン！準備万端！）」

「では、予定通りに」

「「（了解！）」」

「……防壁出力減少。チンクちゃん御苦労さま。じゃ、御嬢様～」

「（分かってる。遠隔召喚…開始）」

地上本部付近各所

「な、何だ？」

「魔法陣？」

「どう言う事だ？」

慌てふためく管理局員の眼の前に、展開された魔法陣からガジェット達が次々と現れる。

壱型、弐型、参型。ＡＭＦの影響下に置かれた管理局員達は成す術

も無く蹂躙されて行った。

「さてと。どんどん行きましょ。お祭りはこれからよ～」

地上本部　地下通路

「なのはさん達と通信は…駄目。まだ通じないよ」
「ギンガさんとも連絡がつきません…」
「北ゲートに報告に行ったまま…」
「合流地点は事前に決めてあるわ。まずはそこに…！スバル！」
「…ッ！」

突如現れた人影に蹴り飛ばされるスバル。
更に、ティアナ達は周囲に現れたスフィアに囲まれてしまった。

「ノーヴェ～作業内容忘れて無いっスか？捕獲対象４名、生かして連れて帰るんスよ？」
「うっせえよ。分かってるってのウェンディ。仮にもタイプゼロが、あの程度でくたばるかよ」
「ま、まずは３人。幸先が良いっスね」

ガガガガガガガガガガッ！！

「！？」
「スバルッ！！！」
「オオオオオオオオオオオオ！！！！！！」
「ッ！！？このっ！！！」

連続して響く銃声。

それを合図にしたかの様に、意趣返しと言わんばかりに今度はスバルがノーヴェに殴りかかる。
だが、ノーヴェも当たる寸前でバリアを展開し、瞬時に反撃する。

「ぶっ潰れろぉぉぉぉ！！！」
「はぁぁぁぁあああ！！！」

お互いに寸での所でかわし、決定打を入れる事は出来ていない。
両者の立ち位置は絶え間なく変わり続け、射撃による支援を困難なものにしていた。
それはティアナであれ、ウェンディであれ同じ事。ならば――

「ＩＳ発動、エリアルレイヴ！」
「させると思う？」

ウェンディの声に応じてライディングボードは浮き上がり、その周囲に無数の誘導弾のスフィアを生み出した。
が、数発の銃声と共に全て爆散してしまう。
視線を移したウェンディの眼に映ったのは、煙を上げるクトゥグアの銃口だった。
それは微塵の揺らぎも無く、ウェンディの眉間に向けられている。

「…」
「動かない方が良いわ。貴方が思っているより、この引き金は軽いわよ？」
「お生憎様。そんな脅しで引く程、２発や３発で倒される程、柔じゃ無いっスよ」
「そう。だったら――」

発砲。その弾丸は違わずウェンディの眉間に命中する。

当然、弾丸は非殺傷。
普通の人間ならいざ知らず、骨格から強化された戦闘機人には戦闘行動に支障を来す程の事も無い。

「いだっ！でもこれで！！！」

ウェンディの狙ったのはこの一瞬。
よろける様に体勢をあえて崩し、ライディングボードを盾とする。
そしてその盾を挟んで誘導弾を形成。あとはそれをあの生意気なターゲットに放つだけ。

「これで？何なのかしら」

が、叶わない。
響く無数の銃声。展開した誘導弾は悉く撃ち落とされ、盾で遮られているにも拘らず、兆弾で正確に四肢を打ち抜かれる。

「がっ！！」
「『集中集束（コンセントレイト）ファントム・ブレイザー』」

極め付けには、その盾が吹き飛ばんばかりの威力の砲撃がウェンディを襲った。
何とか耐え切った事に一息吐く間も無く、ティアナの猛攻は続く。

「イタクァ、弾種選択（バレット・セレクト）。炸裂弾（アルター）、時限信管セット０．３秒。発射」

すぐさま構え直したライディングボードの横をその弾丸が通り過ぎた瞬間、ウェンディの背後で爆発した。
今度こそ、掛値無しにウェンディの体は吹き飛ばされる。盾を構えていた方向とは反対方向からの衝撃。

拠り所で有る筈のライディングボードごと地面に投げ出されたウェンディを待っていたのは、ティアナからの容赦無い踏みつけだった。

「痛たたたた！！」

「さて、2、3発じゃ効果が無いのよね？実際眉間に命中させたのに物ともして無かったし」

「そ、そうっスよ！無駄な事は止めて足をどけるっス！！！」

「あんた馬鹿？そう言われてどける程、お人好しじゃないのよ」

必死にもがくウェンディを尻目に、イタクァとクトゥグアのマガジンをやけにゆっくりと交換するティアナ。

戦闘機人の膂力は人の数倍に及ぶ。だが、まるで手慣れた…否、足慣れた様子でティアナはウェンディを踏みつけ続けた。

そして、マガジンの交換をようやく終えると、2つの銃口をウェンディに向ける。

「さて、何発まで耐え切れるかしらね？」

「ちょ、待っ！！！」

「待たない」

ガンドンガンガンドンガンガンドンガンガン！！！！！――ウェンディの体は弾丸を打ち込まれる度、陸に上がった魚の様に跳ねていたが、銃弾が2桁に届こうかと言う所で遂にはピクリともしなくなった。

それでも尚警戒したのか動かないウェンディに数発撃ちこみ、ようやくティアナは銃口を降ろした。

「…さて、スバルは…まだか。しょうが無いわね。エリオ、キャロ」

「「は、はいぃ！！！」」

「ん？」

涙目で見つめて来る2人に疑問符を浮かべつつ、ティアナは続けた。

「2人はこのまま集合地点に向かってちょうだい。そこでなのはさん達と合流出来たらここに戻って来て。
まだなのはさん達が到着していないようなら、その場で待機。敵からの襲撃を受けた場合、交戦せずに退避する事。いいわね」
「で、でもそれじゃ！」
「いいから行きなさい。ここを片付けたら私達もそっちに行くわ」
「…分かりました」
「すぐに戻って来ます！」

駆け出した2人の背を目の端で見やりつつ、ティアナはスバル達の方へと目を向けた。
この局面で戦力を分ける。それは愚策とも言えるとティアナは理解していた。
だが先程、ウェンディが放った台詞がティアナには気に掛かっていた。
ターゲットは4人。内3人がこの場に居る。
どんな理由かは知らないが、自分達は犯人側にとって確保したい対象らしい。
事前に知らされたジェイル・スカリエッティのデータから推察すれば…
プロジェクトFに関係するらしいエリオ。
レアスキル、竜使役を持つキャロ。
そして、スバル。恐らくはこの3人だろう。
此処から集合場所まで距離は有るが、ほぼ一本道。ここで敵を食い止めれば、あの2人が襲撃される可能性は無いと言っても良い。
ティアナはそう考え、スバルの方へ視線を向けた。

「はあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
「うおりゃあああああああああああ！！！！！」

そこには、未だ激しくぶつかり合うスバルとノーヴェ。
が、ウェンディが倒された事で焦ったのか、ノーヴェの挙動が先程に比べると精彩を欠いていた。
所々大振りになり、その隙を的確にスバルが狙い打つ。
互角で有った筈の両者だが、蓄積したダメージが響いたのか、徐々にノーヴェが押されていった。

「…これは私の手は要らないか」

そう一人語散た所で、ティアナは先程の戦闘機人を拘束していなかった事に気付く。
慌てて振り向くも、そこには変わらず横たわるウェンディの姿が有った。

「…ふぅ。クトゥグア、『アトラック＝ナチャ』「させはしない」っ！？」

不意に割り込む声。
と同時に、ティアナの右手に硬質な手応えが有った。そちらを見やれば、クトゥグアの銃身の中程に、何かが刺さっている。それは小振りのナイフだった。

「ＩＳ発動、ランブルデトネイター」
「クトゥグア！イタクァ！待機形態！！」

背筋に走る悪寒に突き動かされる様に、ティアナは咄嗟にカード

型の待機形態へと自身のデバイスを変化させる。
魔道生成物質で構成されるデバイスは主の要求に従い、己が姿を変えた。
だが、変化した後のカードの横には浮遊するナイフ。
逡巡の間も無く、ティアナは横っ跳びに迫りくる何かを回避する。
その何かの正体はすぐさまに知れた。響き渡る轟音。突如何の変哲も無いナイフが中空で爆発したのだ。
その衝撃は凄まじく。先程のウェンディと同様に、今度はティアナが吹き飛ぶ事となった。

「がっ！ぐ…」
「ふむ。ウェンディ！無事か？」
「……な、なんとか…」

壁に叩きつけられ苦悶するティアナを余所に声が響く。
現れたのは小柄な少女。だが、その幼い気な容姿に反し、右目の眼帯が異彩を放っていた。

「ティア！」
「よそ見してる場合か…よ！！！」
「っ！きゃあっ！！！」

吹き飛ばされたティアナに、注意が逸れたスバル。
その隙をノーヴェは見逃さず、渾身の蹴りをスバルに叩きこんだ。
防御もままならず、ティアナから遠く離れた壁に叩きつけられるスバル。

「チンク姉、どうしてここに？」
「何。お前達を信用していない訳ではないが、姉として心配になったのでな」

「……出来れば助け起こして欲しいんスけど」
「すまんが、それはターゲット確保の後だな。今はゆっくり休むと良い」
そう言うと、チンク――そう呼ばれた少女はスバルの方へ向き直る。
「待ちなさいよ」
「ん？」
が、その背中に声が掛かる。
そこには立ち上がったティアナ。だが、バリアジャケットのあちらこちらは破れ、至る所から出血している有様だった。
「…まだ立てるとは。咄嗟に後方に飛んでダメージを軽減したのか？大した判断力だ…だが」
そう言ったチンクの視線はティアナの右手に向けられる。
全身に限って言うなれば、チンクの言うとおり、背後に飛び退った事で致命的なダメージは無い。
だが、爆発の間近にあった右手に関してだけは話は別だった。
バリアジャケットの防護すら意味は成さず、ティアナの右手からは白煙が上がり、表面は焼け爛れ、時折不規則に痙攣している。
状態の深刻さを表す様に、ティアナの額には油汗が浮かび、表情も苦痛に歪んでいる。
「その手ではもうデバイスは握れまい。いや、そもそも先程の爆発で何処かへ行ってしまった様だな」
「そうね。どこで眠りこけてるのか応答も無いわ。で？それがどうかした？」

「どうもこうも。右手は使い物にならず、デバイスも無い。そんな状態で我等を相手に逃げおおせられると？」
「勘違いが有る様だから訂正してあげる。逃げるだなんて、誰が言ったのかしら？」
「…」
「チンク姉、こいつからやっちゃおう。何か気味悪いし」
「…そうだな。ＩＳ発動、ランブルデトネイター」

そこでティアナが取った行動は、２人の意表を突いた物だった。
突進。言葉にすればそれだけだ。近接戦闘に於いては何の変哲も無い。
だが、この時この場に限って言えば、それは完全に度外視される事だった。
手負いの上、武器も無い。時間から考えて増援も期待できない。
そんな状況下において、少しでもまともな精神が有れば普通は逃げる。
自分の身を囮として、相手に背後を振り向かせない様にする以外には。

「チンク姉！後ろ！！！」
「何！？」
「『ベオウルフ・ゾディアック――」

振り返ったチンクの眼に映ったのは、青い翼を展開したスバルの姿。
彼我の差は１ｍも無い。最早目と鼻の先。
そして、チンクに注意を促したため、ノーヴェもティアナから目を放していた。
当然である。ティアナはフェイクだったのだ。そう、思い込んで。

「え？」
「折角だから大サービスよ。この右手、アンタにあげるわ」
次にノーヴェがティアナを視界に収めた時、既にティアナはノーヴェの至近距離に居た。
ボロボロになったその右手に、一本のマガジンを持って。
「――一気通貫（アクセラレーション）『着火（イグニッション）』！！！」
同時に響き渡る轟音。周囲は粉塵に包まれ、数寸先も定かではない。
その粉塵が晴れた時、立っていたのは2人だった。
拳を打ち付けた体勢のまま固まっているスバルと、それをシールドで受け止めたままの体勢のチンク。
チンクの身を守ったのはその身に纏う固有武装、シェルコート。
バリアとＡＭＦの併用により、スバルの攻撃の威力を最小限に抑えていた。
「ＩＳ発動。ランブルデトネイター」
「っ！」
そして、両者の間に小規模な爆発が起こる。チンクが距離を取る為に放った物だった。
そして、距離を取ったスバルの眼に映ったのは、右脇腹がごっそり抉れ、大の字に倒れたノーヴェと、全身から血を流したまま倒れ伏し動かない、ティアナの姿だった。
その右手は肘付近まで消失していたが、不幸中の幸いにしてその傷口は焼き潰れていた。
このまま放置したとしても、失血死だけは免れられる。その程度の

幸いではあったが。

「…てぃあ？」

「…ノーヴェっ！！」

「だ、大丈夫。これ位…ガフッ！」

「無理をするな。ウェンディ、もう動けるだろう。ノーヴェとそいつを連れて下がれ。姉はこいつを片付ける」

「…りょ、了解っス。しっかしコイツ、無茶するっスねぇ。ウチらでもしませんよ。肉弾幸とか」

「…うっさい…わよ…アンタ達に…スバルを…渡す…もんですか…」

「…もう止めておけ。お前、死ぬぞ？」

ウェンディの台詞に反応したのか、ティアナが動き出す。

だが、その四肢に力は無く、起き上る事すらままならない様子だった。

それでも、上げた瞳からは意志は失われていない。光は消えていない。

「ティア！動いちゃ駄目！」

「うっ…さい…馬鹿スバル…」

「…ウェンディ…」

「っス」

チンクの声に答え、ウェンディがティアナの首筋に手刀を加え、意識を奪う。

少しうめいた後、ティアナは身動き一つ取らなくなった。

ウェンディはティアナの体を抱えあげると、ライディングボードの内部スペースから取り出したトランクにティアナを押し込んだ。

「ティア！ティア！！！」

「五月蝿いっスね。お前は自分の心配してた方がいいっスよ。こいつはあんまり傷付けるなって言われてるけど、お前は別っスから」
「…え？」
「あぁ、もしかして勘違いしてたっスか。残念、あたしらの目的はあんたら2人共っス。
それをアンタだけ逃がす様にして、挙句あっさり捕まって。無駄死に…いや、死んじゃいないか」
「黙れ」
「あん？」
「ティアを…」

ふと、ウェンディは周囲の空気が入れ換わった様な錯覚を受けた。
戦場の空気には違いない。だが、先程までの物を青とするならば、今の空気は赤。
強烈なまでの闘志。その発生源はもちろん眼前のターゲット、スバルだった。
その身から溢れ出す、膨大なまでの魔力。
そして、文字通りにスバルの眼の色が変わる。普段の碧から金へと。

「ティアを…返せっ！！！」

一瞬だった。
対峙していたチンクはおろか、スバルに視線を注いでいたウェンディすら、スバルの動きを知覚する事はできなかった。
ウェンディがその一撃を防げたのはまさに僥倖。
咄嗟に展開させたシールドが功を奏し、スバルの拳はウェンディの顔面数センチ先で停止していた。
が、それも束の間。身を捩ったウェンディのすぐ横を通り抜けて行くスバルの拳。
ウェンディの固有武装である、ライディングボードの上にはノーヴ

ェが。そしてその後部には、ターゲットであるティアナを閉じ込めたトランクがある。
ウェンディに残された防御手段は自身の力だけで発動させる魔法のみ。
あわや絶体絶命か、とその時。

「ウェンディ！！」

鋭い一言と共にスバルヘダガーが襲い来る。
しかし、スバルはそのダガーを一瞥もせずにかわし、目的のトランクへと手を伸ばす。

「させないっス…よ！！」
「…っ！！？」

突如、スバルの眼の前で炸裂する閃光。
ウェンディの放った魔力弾がスバルの額に直撃した。

「今だ！ウェンディ！」
「了解っス！！」

その隙を突き、ウェンディがライディングボードを奔らせる。
その後部にはティアナの囚われたトランク。
視界を取り戻したスバルの眼が捕えたのは、通路の奥へと消えて行くトランクだった。

「…」
「…タイプゼロセカンド。お前も我々と共に来て貰おう」

スバルに近寄りながら淡々と言うチンク。だが、スバルはその台

詞も聞こえていないかの様に、ウェンディが逃げて行った方向を見つめていた。

「…ティア…」

茫然自失、と言った体で立ちつくすスバルに、チンクはダガーを投げつける。
それらは狙い違わずスバルの四肢に命中し……スバルの体から溢れる魔力で弾き飛ばされた。

「…何？」

スバルの身を覆うのは、先程以上の青い魔力の奔流。
スバルの感情の爆発に合わせた様に吹き上がるそれは、次第にマッハキャリバーに注ぎ込まれていく。
そして、クラウチングスタートの体勢を取ると同時に、スバルは爆発的な加速で前方へ飛びだした。

「させん！！！」
「そこをぉ…どけぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！」

スバルの思惑を読み取り、加速し切る前にチンクはその眼前に立ちはだかる。
先程の焼き直しかの様に、拳を打ち付けた体勢のまま固まるスバルと、それをシールドで受け止めたままの体勢のチンク。
だが、今回はそれだけで終わりはしなかった。

「おおぉぉおおおおおおお！！！！！！」
「くっ…これ…は…！」

チンクのシールドへ奔る無数の罅。
バリアブレイクプログラムの介入さえも必要としない、圧倒的なまでの力技。
チンクの張ったシールド、その身に纏う固有武装シェルコート。
どちらもスバルの一撃を防ぐ要因足り得ず、チンクはガードごと吹き飛ばされ、地面に叩きつけられた後も二転三転と勢い余って転がる有様だった。

「ティア…ティア…！」

そして、最早チンクには目もくれずにスバルは走り出す。
自身の相棒を、掛け替えの無い親友を救うために。だが、それは最早叶わなかった。

「I…S発動…ランブル…デトネイター」

ゴッ…ズン…

響く轟音。巻き起こる粉塵。大規模な振動。そして、何かが崩れる音。
その余りの衝撃に驀進していたスバルでさえ怯み、その場で急ブレーキをかけた。
そして、その判断は奇しくもスバルの身を救った。
ほんの目と鼻の先に、通路の天井が崩れ落ちて来たのだ。
もしそのまま進んでいれば、間違い無くスバルはその下敷きとなっていただろう。

「っくぁぁぁあああああああ！！！！」

殴る。殴る。殴り続ける。

自身の障害となるその壁を。たとえ拳から血が滲もうと。

「はぁあああああ！！！」

だが、完全に埋まってしまった通路はビクともしない。
表面の土砂こそ吹き飛ばせるが、幾らやっても果てなど無い。

「はぁ…はぁ…ベオウルフ・ゾディアック！！！」

スバルの背から青色の翼が展開される。
スバルが最も信を置く、自身の持つ全力を注ぎ込む一撃。

「一気通貫（アクセラレーション）！！！」

そしてスバルの渾身の一撃が炸裂する。
常でさえ岩盤を砕くスバルの拳。今のスバルならば、土壁如き容易く打ち破る。
…それがただの土壁ならば。
だが、ここは地下通路。
その崩落は広範囲にわたり、今スバルが居る地点から崩落していない地点までは凡そ８０ｍ。
先程の一撃で削れたのは約５ｍ。単純計算で１６回ベオウルフ・ゾディアックを放つ必要が有る。
だが…

「ベオウルフ・ゾディアック一気通貫（アクセラレーション）！！！」
「ベオウルフ…ゾディアック一気通貫（アクセラレーション）！！！」
「ベオ…ウルフ…ゾディアック…一気通貫（アクセラレーション）！！」
「ベオウルフ…ゾディ…アック一気通貫（アクセラレーション）！！」
「ベオ…ウル…フ…ゾディアッ…ク…一気通貫（アクセラレーション）！」

それは不可能だ。
ベオウルフ・ゾディアック一気通貫（アクセラレーション）は連発する事を想定していない為、極めて燃費が悪い。
更に、発動にはカートリッジ6発を消費する。
いかにスバルが人並み以上の魔力を有そうと、カートリッジの補助無しには精々1発が限度。
加えて…

ドドドドドド…

「え？」

スバルが殴る衝撃で、只でさえ不安定だった通路が崩壊を始めた。
このままではスバルも生き埋めになってしまうだろう。

「スバル！」

そこに現れたのは、なのは。
明らかに危険な状態にも関わらず尚、土壁を殴り続けるスバルを必死に制止する。

「スバル！ここはもう…！」
「放して下さい…ティアが…ティアが…！」

だが、聞く耳を持たないスバル。
なのはは無理やりにでもスバルを抱き上げ、崩落の危険の薄い場所まで運びだした。
それでも、スバルは諦めては居なかった。
覚束無い足取りで、しかし固く拳を握りしめ、眼前の障害を打ち破

らんと進む。

「スバル！落ち着いて！スバル！！」
「あ…う…うあああああああああ！！！！！！」

だが、無情にもスバルが空けた穴も、崩落で塞がってしまう。
響くスバルの慟哭。それは延々と、ただ虚しく地下通路に響き続けた…

9月14日　ミッドチルダ北部　聖王医療院

「以上が本局で起こった事です。私が駆け付けた時には、既にスバル達と交戦した戦闘機人は逃走していた様です」

御剣達は公開意見陳述会の日、何が起こったかをなのはから聞いていた。
原口が張った結界は何者かによって破壊。その後、戦闘機人とガジェットの襲撃を受けて本局は壊滅。

「六課からの救援で、向かったフェイト隊長も途中で戦闘機人の足止めに遭い、それを撃退する頃には既に手遅れで…
先行したキャロの究極召喚、真竜ヴォルテールの力でガジェットは全て撃退されたものの…ヴィヴィオは…連れ去られ…」

戦闘機人の内数名は『聖王の器』であるヴィヴィオを浚う為に六課を襲撃。
前線メンバーの出払っていた六課では対処しきれず、六課も壊滅。
数名の重傷者、無数の軽傷者の被害を出したものの、死者は0。そして。

「ティアが浚われた、と」
「はい。スバルの話では、最初からティアも狙われていたそうです。」
「…そこが分からないね。ティアを浚ってメリットが何かあるとは思えない。人質ならヴィヴィオだけで良いだろうし」
原口がヴィヴィオの話をした途端、なのはの顔に陰りが出来た。
「で？六課はこの後どうなるんだ？あの有様じゃ、隊舎は暫くは使い物に無らねぇだろ」
話題を逸らす様に黒峰が口を開く。
「…今、ナカジマ二佐が仮設隊舎の手配をして下さっています。その後は本局と共同で、この事件の解決に当たる事になるかと」
「ま、それが妥当だろうな…残る問題は」
「僕達が暫く戦闘出来ない事、だね」
「あぁ。俺は魔力切れだ。回復には…3日ほど掛かるな」
「同じく。僕の方は2日程だけど…で、御剣は…」
「…」
原口に話を振られても、返事はおろか反応すらしない御剣。
正確に言うならば、反応しないのではなく…
「へんじがない　ただの　しかばねの　ようだ」
「会話さえできない程の重体、と。魔力も減衰してるし、僕等の中では御剣が一番深刻かな？」
出来ない、と言った方が正しい。

本来人の身に余る神霊化。その代償が延々と全身を襲う激痛だった。
命に関わりはしないものの、今の御剣にとっては呼吸ですら苦痛でしかない。
因みに、今なのは達が居るのは御剣の病室だった。
なのはが語り始めてから数分で御剣が倒れ、この病院に搬送される次第となった。

「御剣さん…大丈夫ですか？」
「…ヒューッ」

なのはが御剣に声をかけるも、返って来たのは掠れた虫の息だけ。
それでも御剣にとっては精一杯の返答だった。

「駄目だな、こりゃ。医者は何て？」
「全身の筋肉がズタズタだってさ。骨もボロボロ。内臓器官も弱ってるらしいよ」
「…重体だな」
「容体は安定してるし、意識もはっきりしてるから、安静にしてる事、だとさ」
「早い話が動けない、と。しかもアレ使ったんじゃ能力の使用も無理か」
「使えるならエリクサーなりソーマなり出してるだろうしね。」
「アレ？何ですか、アレって」
「『剣軍師団（けんぐんしだん）』だよ。しかも使い方も割と無茶だったからな。元々、使えば暫く御剣は能力が使えない物なんだが…」

病室に漂う暗い雰囲気。

「せめて俺らが戻ってきたのが、事件当日だったならな。まだ御剣も動けただろうに」

「それなんだけど、多分結界内で暴れ過ぎたせいだと思う。結界の破壊までには至らなくても、外と中の時間軸がずれる程度の影響は受けちゃったんだろうね」
「…せめて過去にずれれば良かったのにな」
「それはあり得ないよ。時の流れは基本的に不可逆なんだから」

暫くして、六課移設の為の後処理がまだ残っている、となのはは病室を出て行った。

「…大分まいってるみたいだな」
「なのはの事？そりゃね。ヴィヴィオが連れ去られた訳だし」
「そしてティアも、か。全く意味が分からん。原作だとギンガの筈なんだが」
「おい、御剣。見当ついてるなら言え…って無理か。じゃぁ見当ついてるなら瞬きを一回、ついてないなら二回しろ」

御剣の瞬きの回数は2回。
この場に居る誰も、ティアナが浚われた理由は分からずにいた。

「ま、いずれにせよ、今俺達に出来るのは回復に専念する事だな」
「そうだね。御剣、僕等は一旦六課に戻るよ。置いてあった物とか見に行かないと」
「そう言えば俺らの私物が置きっぱなし…まぁ、残ってりゃ御の字か。じゃな、御剣」
「じゃね」

そう言って2人は病室を出て行った。残されたのは御剣1人。
自身の現状は自分の招いた結果。だが、あの時点ではあぁするのが最善だった。
だが、それはティアナが浚われる、という結果で返ってきた。

ならば、それは自分の所為だ。
力無く握られる御剣の拳。だが、そこには意志と、決意が宿っていた。

# ９章－１０　その日、機動六課（後編）（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：お待たせ致しました。９章最終話、その日、機動六課（後編）です！

本当は本局スバルＳｉｄｅと病院御剣Ｓｉｄｅの間に、機動六課での戦闘が入る筈だったのですが、ほぼ原作通りの流れ（シャマルとザフィーラが居ないので原作よりも早く落ちますが）なのでカット。

：エリオ、キャロ、ヴァイスの見せ場ではあったのですが、正直冗長なだけだったので。

別個にして、ゆりかご戦前にそれぞれの回想として書きます。

傷ついた翼達。

だが、下ばかり見てなどいられはしない。

次回、『１０章－１　翼、ふたたび』

お楽しみに。

# 10章－1　翼、ふたたび

9月16日　ミッドチルダ北部　聖王医療院

「…ふむ」

ここは御剣の病室。
寝たきりだった御剣も、ようやく上体を起こせる程には回復していた。
失われていた魔力もほぼ元に戻り、状態は医者が目を見張るほどの勢いで回復していた。
しかし…

「能力が使えない…か」

掌を眺め透かしながら独り語散る御剣。
それは最大の懸念、自身の能力の源、座への接続が出来ないままと言う事だった。
座とのリンクが限りなく薄くしか感じられない。
元々、『剣軍師団（けんぐんしだん）』にあんな使い方は無かった。
アレはあくまでも武器の概念の総体であり、取り込んだり等は武器の使い方としては有り得ない。
『剣軍師団（けんぐんしだん）』自体に使用すれば丸1日能力が使えなくなるデメリットが有る事を差し引いても、現状は御剣の想定以上に深刻なものになっていた。

「…さて、どうしたものか…」

「御剣～起きてるか～？」

と、そこで病室の扉が開く。

現れたのは黒峰。その手には果物の詰め合わせらしき籠を持っていた。

「あぁ。体の方は順調だ。明日か明後日には全快するだろう。お前はどうだ？」

「元々魔力切れ以外は何とも無かったからな。そっちも、もう問題無ぇ。

原口の方も全快だ。今は六課の移設作業の手伝いしてる」

「そうか。アースラに移設されるんだったな」

近況を確認しつつ、黒峰が持ってきた見舞いの封を解く。

そこに入っていたのは、見舞いの定番であるメロン、林檎、梨等々の果物。

「おい、皮を剥かないと食べにくい物ばかり持ってきてどうする。ここに果物ナイフなぞ無いぞ」

「何言ってんだよ。そんなもん、お前が出せるんだから要らねぇだろ…ってまさか」

「そのまさかだ…仕方が無いな。売店に売っているから買って来い。ついでに紙皿もな」

「了～解」

そう言って病室を出て行く黒峰。

数分後、戻ってきた黒峰から受け取った果物ナイフで林檎を剥く御剣。

シャリシャリと断続的な音が続く。

「よく考えたら、お前がこうやって臥せってんだから能力が使えないってのは道理か。いやうっかりうっかり」
「魔力は戻ったのだが、座の存在が薄くしか感じられん。以前『剣軍師団（けんぐんしだん）』を使用した時もだったが、あの時以上だな。…魔力が回復しているから、能力が無くなった訳ではないだろうが」
「そういやお前の魔力の元って座だったな。俺は周りのマナ吸収して使ってるけど」
「その癖、お前にリンカーコアは無いがな。言うなればその粒子自体がリンカーコアの様な物だが」

話しながらでも、御剣の手は淀みなく動き、程無く紙皿の上には林檎の兎が並んだ。

「…普通に剥きゃいいだろ。何で兎…」
「いつもの癖でな」
「あぁ、ティアが昔から好きだったな…で、どうすんだ？」
「何がだ？…」
「ティアだよ。助けんだろ？」
「…いずれにせよ、ヴィヴィオの誘拐を阻止できなかった時点で今回はこちらの負けだ。
次に奴等が行動を開始する時…ゆりかごが復活し、ナンバーズ達を一網打尽に出来る機会を待たなければならん…」
「あぁ、プロジェクトFを応用したアレか。厄介だよな…ナンバーズを1人でも逃すとまたスカリエッティが復活するとか」

ナンバーズの体内には極小サイズのカプセルに収められたスカリエッティのクローンとなる「種」が簡易な外科的処置で埋め込まれている。
これにより、スカリエッティが万が一捕らえられたとしても、プロ

ジェクトFの応用技術を用いて、体内に仕込まれているスカリエッティのクローンが約一ヶ月で記憶を受け継ぎ新たなスカリエッティとして産まれてくる。
旧暦時代の権力者の間では、このように自身の予備を準備するのは常識だった。

「手を拱いて待っているのは癪だがな…」
「そう言やぁ…何でティアは浚われたんだろうな…御剣、何か見当ついたか？」
「さっぱりだ。候補こそあれど、これだ、と言うのはどうもな。別段ティアが重要な情報を持っている訳ではないだろうし…
洗脳して私達に当てる気か…若しくは単純に人質か。その辺りしか思いつかんな」
「ま、普通に考えたらそうなるよな。原作じゃ浚われたギンガはナンバーズ？？としてスバルと戦ったけど、アレは元々戦闘機人だったからだろ？」
「コンシデレーション・コンソール　、所謂条件付けだな。生体には下準備が要るだろうが…薬物を使えば短期間の洗脳は不可能ではない。
まぁ、ティアについては詳細が分かってから対策をするとしようか…
ほかのフォワード陣は？」
「スバルはまだ此処に入院。エリオとキャロは軽傷だったからもう退院した。
なのはとフェイトは六課の移設作業に追われてる。後、ヴァイスも此処に入院してるぜ。六課を守ろうと孤軍奮闘してたんだとさ」
「…そうか。全て片付いたら労ってやるとしよう」

更に2日後、9月18日　ミッドチルダ北部　聖王医療院

ようやく全快し、御剣は今日で退院する事になっていた。
薄れ切った原作知識だと、ゆりかごが復活するのは地上本部壊滅から1週間後。
つまりは明日だ。その意味では間に合ったとも言える。だが、一向に能力は戻らずにいた。
今の御剣に残された戦闘手段は『無銘(ナナシ)』のみ。
幸いにも魔力だけは元に戻った為、ミッドチルダ式の魔法を使うのに支障は無い。

コン…コンコン

「ん？」

退院の準備をする御剣の耳に飛び込んだのは躊躇いがちなノックの音。
返答し、中に入る様促せば、開いたドアの向こうに立っていたのはスバルだった。

「御剣さんが退院するって聞いて…私ももう今日で退院なのでご挨拶に…」
「そうか。随分と掛かった様だが、もう体は大丈夫なのか？」
「あ、はい。私の体…人とはちょっと違うんで…」

スバルの体は所謂サイボーグ、即ち戦闘機人である。
今回スバルの入院が長引いた原因の1つは、ベオウルフ・ゾディアック一気通貫(アクセラレーション)を連発し過ぎた為、両腕、特に右腕の骨格フレームが歪んでしまった事。
ただ肉や外皮に傷がついただけならばともかく、歪んでしまった骨格フレーム全体を取り替えた為、スバルの入院は此処まで長引いた

のだった。

「さて、スバル。この後、用事は有るかな？」
「あ、はい。マリーさんの所に…マッハキャリバーにも無茶、させちゃいましたから…」
「そうか。私もマリーに頼んでおいた事が有る。事の序でだ。同行しよう」

時空管理局本局　次元航行艦ドッグ　アースラ　デバイス調整室前

「さて、懐かしの、と言った所か」
「御剣さん、この艦に居た事が？」
「あぁ。クロノが提督になってからはもっぱらクラウディアだったが、それまではな」

このアースラ自体は退艦寸前の旧型だが、御剣達の眼の前に有るデバイス調整室だけは現在の部屋の主達の意向によって、機材は最新式の物が集められていた。

「マリー、シャーリー、久しぶり」
「御剣さん！？　もう退院されたんですか？」
「お久しぶりです。御剣さん」

驚いた様子でこちらを見やるシャーリーとは裏腹に、落ちついた様子で挨拶を返して来るマリー。
とは言え、マリーは御剣達のデタラメさをよく知っている為、驚くのにも慣れただけではあるが。

「頼んでいた件、どうなったかな」
「はい。ついでに御剣さんの使用データを『無銘（ナナシ）』に反映しておきました。大分使いやすくなっていると思いますよ」
「ほぅ――見せてくれ」
「此方へ」

マリーが指し示したのは部屋の奥に有る作業台。
その上には確かに御剣のデバイス、『無銘（ナナシ）』が鎮座していた。
御剣は長剣を手に取ると、透かす様に見る。そして、マリーが口を開いた。

「形式番号ＸＣ－００『無銘（ナナシ）』。今回の改修で拳銃にカートリッジシステムを搭載。装弾数５、ティアナの大口径カートリッジと同規格の弾丸です」
「――刀身の長さは？」
「刃渡り１４０ｃｍ、柄の長さ４０ｃｍ」
「――銃のスペックは？」
「全長　５５０ｍｍ、全高　２１０ｍｍ、最大幅　６９ｍｍ、銃身長　３３５ｍｍ、サイト長　４４０ｍｍ、ライフリング　７条右回り」
「――重量は？」
「長剣８ｋｇ、拳銃６ｋｇ」
「――フレームは？」
「以前搭載していた物を更に改良いたしました。
御剣さんの魔力に耐えるのではなく、魔力によってより頑強性が増す新素材を使用しています」
「――完璧（パーフェクト）だ。マリー」
「感謝の極み」

胸に手を当てて一礼するマリー。

振ったのは自分の癖に、それに対応してきたマリーに苦笑しつつ、御剣は『無銘（ナナシ）』を待機状態にした。
因みに、『無銘（ナナシ）』の待機形態はティアナと同じカード型。剣と銃が交差したデザインになっている。

「さて、じゃあ次はスバルだね」
「え？　あたしですか？」

御剣とマリーのやり取りに茫然としていたスバルだったが、不意にシャーリーに声を掛けられ、驚きながらもそちらへ移動する。
そこには円筒状の調整槽の中に、待機形態で浮かぶスバルの相棒、マッハキャリバーの姿が有った。

「マッハキャリバーね、修理ついでにって強化システムのプランを自分で考えちゃったのよ」
「え？」
「アウトフレームの強化とか、装甲強度のアップとか」
「かなり重くなるし、扱いづらくもなるだろうから、スバルに聞かないと、って言ったんだけど」

スバルがモニターを覗き込むと、そこには確かにマッハキャリバーの強化プランが表示されていた。

「魔力消費…1．4倍…本体重量2．5倍…やれます！」
「…御剣さん」
「…そうだな。スバル、お前のバリアジャケットの左腕に腕甲が付いていただろう」
「え？はい」
「あれはな。『光狼（ベオウルフ）の咆哮』を元に私が造ったデバイスだ」
「えぇ！？」

「マッハキャリバー、ｃｏｄｅ６６６起動」
「Ｔｈｅ　ｓｅａｌ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｂｅｏｗｕｌｆ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｉｍｉｔａｔｉｏｎ　ｗａｓ　ｌｉｂｅｒａｔｅｄ．（『偽・光狼（ベオウルフ）の咆哮』、封印解放されました）」

マッハキャリバーの電子音声と共に、スバルの左腕にデバイスが展開される。
元の腕甲としての姿では無く、拳全体を覆う様なデザイン。
狼を意匠したその形は、かつてスバルが見た彼の宝具に酷似していた。

「あくまで元にしただけで、機能としては劣化も良い所だ…が、ベオウルフの名に恥じない程度には仕上がっている」
「これ…でも…私は…」
「何が言いたいかはある程度察している。だからこそ、その先の台詞は言わずとも良い。
私が聞きたいのは、これからスバルがどうするか、だ」
「私は…」

自分にそれが出来るのか。現に、自分は守れなかった。スバルの中ではソレは既に形になっている。だが、口に出せない。意志が足りない。勇気が足りない。
それでも。今この手に宿るのはあの時の輝き（あこがれ）。
共に駆けると決めた相棒と、かつて自身を救ってくれた恩人も傍に居る。
そして、何よりも。

「…ティアを…助けます！！！」

今の自分が有るのは彼女の御蔭。

いつも自分を支え、教え導いてくれた彼女。厳しく優しい彼女。いつも守って暮れた彼女。
今度は、自分が彼女を助ける番だ。

「そうだ。奪われたなら奪い返す。今回の事を失態と思うのならば、その手で取り戻せ。
…さぁ…反撃だ」

# １０章－１　翼、ふたたび（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：１０章１話、投稿です。御剣、まさかの絶不調。

これでいよいよＳｔＳ終章。物語同様ラストスパート…と出来たら良いなぁ…

遂に、遂に拙作も５００万アクセスを突破致しました。これも一重に皆様の御蔭です。

初期の頃から読んで下さっている方には申し訳無いと思う今日この頃の更新速度ですが、それでも、もう暫しお付き合い頂ければ幸いです。

折悪く、外伝をやるには本編の切りが今一つ、と言った所です。

しかし、代わりと言えるかどうか分かりませんが、以前行ったアンケートの５、その他をこの作品終了まで受け付け致します。

尚、御剣×はやて、黒峰メイン話、原口メイン話等ももちろん受け付けます。

公開は作品終結後、それも暫く掛かると思いますが、それでも宜しければどうぞ。

以前、活動報告にも書きましたが、作者が考えたオリ宝具をまとめた物を番外の一番上に置いてあります。

２万字以上有るのでお暇な時にどうぞ。

遂に姿を現した古の戦艦。

果たして御剣は、なのはは、奪われた人を取り戻す事が出来るのか。

次回、『１０章－２　ゆりかご』

お楽しみに。

# 10章－2　ゆりかご

時は2日程遡る。
薄暗い室内。立ち並ぶ円筒状の水槽。部屋の光源はその水槽を照らすライトのみ。
ローマ数字で刻印の記された水槽の1つ、？の刻印が刻まれた水槽の中に、少女が眠っていた。
銀の長髪。以前は眼帯で覆われていた左目には縦一閃の傷跡。
彼女は戦闘機人？？、チンク。先日の地上本部襲撃の際、スバルと交戦した戦闘機人の1人だった。

「チンク姉の様子は？」

部屋に入って来るなり声を上げたのは戦闘機人？？、セイン。

「あら、セインちゃん…基礎フレームの損傷が思ったより酷いわ…あの子、タイプゼロ・セカンドのＩＳ振動破砕って、私達の体内の電子部品とかフレームに対して物凄い威力が出るのね…
もちろん、対人や対物に使ってもかなりの威力だろうけど」

それに答えたのは水槽の傍で作業をしていた戦闘機人？？、クアットロ。
しかし、答えた彼女の視線は自身の展開したコンソールに固定されたまま。
いつものふざけた口調すら消え、かなり真剣に作業している様子だった。

「…まともに当たりゃ間違い無く一撃必殺…か」
「…ノーヴェちゃんも結構な手術が要りそうね。ゆりかごの起動ま

でに間に合うかしら…

…で、セインちゃんは邪魔しに来たの？　用が無いなら、気が散るから出て行って欲しいんだけど？」

「違うよ。あの…何てったけ？　タイプゼロ・セカンドと一緒に居た…」

「ティアナ・Ｌ・御剣？」

「そう！　そいつ！！　意識が戻ったから、それを伝えに来たのさ。アレ、ドクターからクア姉に一任されてんだろ？」

「…そう。分かったわ。」

そう答えると、クアットロは手早くコンソールに何かを打ち込み、それを仕舞ってセインに一瞥もくれずに部屋を後にする。

ただ、その際に浮かんだ表情は…どこか嗜虐的なものだった。

クアットロが作業していた調整槽から直線にして１００ｍ程。

無機質な白塗りの壁。簡素な寝台に申し訳程度の鏡付きの洗面台、衝立の向こうは恐らく便所だろう。

部屋の一辺は大きく開けた檻。冷たい輝きを放つ金属で作られた格子が一面に嵌っていた。

そこは所謂独房。

ティアナが目を覚まし、周囲の確認をして得られた情報は、あまり芳しい物とは言えなかった。

ティアナの右足首と、地面に固定された寝台は鎖で繋がれている。

鎖の長さからしてこの独房内なら移動は容易だろうが、それ以上の行動は制限されていた。

「…はぁ…」

ティアナの口から洩れたのは溜息。

自分が浚われる寸前、トランクに押し込められた後、暫くの記憶は残っている。
トランク内部から聞き取れた情報を元にすれば、どう言う訳か自分も捕獲対象だったらしい。
竜召喚のレアスキルよりも、平凡な1陸士を捕獲する目的なんて幾つかしか思い浮かばないが、そのどれもが効果的だとは思えない。

「やっとお目覚めぇ？暢気なものねぇ。流石、甘やかされて育てられただけはあるわねぇ」

不意に聞こえる甘ったるい声。何処か芝居めいた、作った様な声。
声の方向にティアナが顔を向ければ、そこに立っていたのは眼鏡をかけた女性。
その身を包むのは、ティアナにも見覚えのあるボディスーツ。

「初めましてぇ。ナンバーズＮｏ．４、クアットロよ。以後宜しく」
「…で？何しに来たのか聞いても良いかしら？」

あからさまに、ティアナを見縊った態度で語りかけるクアットロ。
ティアナの口調も自然と棘のあるものとなる。

「あら、何で浚われたのかを聞くかと思ったのに…意外ね」
「そんな事聞いた所で、今の私に出来る事なんて無いわ。
それで？何しに来たの？まさかわざわざ私の顔でも見に？」
「まっさかぁ。そんな趣味はお宅の隊長さん達だけでやって下さ～い。
そう、聞きたくないなら言わなくても良いかしら。貴方を浚ったり・ゆ・う」
「結構よ。大方想像もつくわ」
「あ～らぁ…じゃぁ、答え合わせしてあげるわ。で？私達は何で貴

方を浚ったのでしょ～うか」
「……人質でしょう。六課に対してでは無く、ひと…御剣特別提督補佐達に対する」
「ん～…３３点。やっぱり貴方程度じゃそんなものよね～」
「…そう。用が無いならもう帰って貰えるかしら。こう見えて疲れてるのよ」
「…ホント可愛くないわね。そこまで頑なだと逆に言いたくなる物よね～…
正解は、人質兼、囮兼、餌、でした～もちろん、対象は貴方の言った通りだけれど」

それを聞いて尚、ティアナは眉１つ動かさない。まるで、それも予想していた様に。
まぁ、人を浚っておいてする事など有る程度限られるものだが。

「そう。言いたい事はそれだけかしら」
「…なぁにぃ？その余裕。まさか、助けが来るとかお間抜けな事、考えてるのかしらぁ？」
「ええ。そうよ。貴方達では無理。幾重に罠を張り巡らせようと、どれだけの非道を行おうと、彼等はそれを正面から打ち破って来るわ。私を助けにね」
「…ほんっきでイライラするわ、貴方。誰が貴方の命を握っているか分かってるのかしら？」
「その台詞、そっくりそのまま返すわ」

そう言うとティアナは立ち上がり、柵の前に立つ。
ジャラジャラと鎖がティアナの後を付けて来る。だが、その音さえ、ティアナが放つ威圧感の一助になっているかの様だった。
開けた格子の前に立ち、クアットロをねめつけるティアナ。

「今、貴方達の命を握っているのが誰か、ですって？面白い事を言うわね。
もう貴方達に残された道なんて無いのに」
「何…を」
「貴方達に残っている道は2つ。徹底的に抵抗して死ぬか、大人しく死ぬか、この二択。
そして、私の命だけがそれを回避できる唯一と言っても良い蜘蛛の糸。
貴方達は仁を、御剣　仁を甘く見過ぎた。来るわよ、貴方達の――」

そこまで言ってティアナは急に踵を返し、部屋の中央まで歩くと、更に唐突に肩越しに振り返ると、こう言い捨てた。

「――死神が」

そして、暫くクアットロの顔を見つめると、興味を失ったかのようにティアナは寝台に座り込んだ。

「は、ははっ甘く見た？　それはこっちの台詞よ小娘。あまり私達を甘く見ないでもらえるかしら？
今、貴方の頼りの綱がどうなっているか教えてあげるわ。彼、入院してるのよ。それもかなりの重体。医者の見立てだと全治半年じゃきかない程の。これでどうやって此処まで来るって言うのかしら」

それを聞いても、ティアナの表情に変化は無い。
それどころかクアットロを見る視線にすら感情は殆ど見られず。
それはそう、例えるならば、養豚場の豚を見る目。『かわいそうだけど明日の朝にはお肉屋にならぶ運命なのね』とでも言いたげな目。

「こっの！」

激昂し掛けたクアットロの脳裏に響くのは電子音。
通信端末からの呼び出し音だった。発信者は…Ｄｒ．スカリエッティ。

「（はい。クアットロです）」
「（器の準備が整った。君も来たまえ）」
「（了解しました）」

通信を終え、ティアナの方へ振り向いたクアットロに、最早精神的動揺は見られなかった。
優位に立っているのはこちらだ、と言う確信、勝つのは自分たちだと言う自信。
切り札たる『聖王の器』の準備の整った今、敗北など有り得ない。

「さて、いい加減貴方に付き合ってる暇も無くなったしぃ？お暇させて貰うわねぇ」
「最初から言っているでしょう。こっちには元々そっちと話す用なんて無いんだから」
「…まぁ、そこでいつまでも待ってると良いわ。永遠に来ない王子様をね。囚われのお・姫・様」

コツコツと、足音を立てながら去って行くクアットロ。
その背を横目に眇めつつ、クアットロが立ち去ったのを確認してから、ティアナは大きく息を吐いた。
脳裏に浮かぶのは、クアットロの言った台詞。御剣は今、重体で入院している。と言う台詞。
御剣の回復能力の高さはティアナも知っている。何よりも、御剣の持つ宝具には死人さえ蘇る薬さえあるのだから。

だが、その御剣が入院。これは…ただ事ではないのだろう。

「仁…」

御剣にそれだけの手傷を負わせる様な相手は限られる。
世界の抑止力、御剣達の影。それのせいだろうか。はたまた何か別の理由が有ったのか。
悩むティアナは口元に右手を当てようとして…それが出来ない状態にある事に気が付いた。
いや、気付いてはいた。ただ、考えたくなかっただけだ。
あの時は動かなくて邪魔だ、としか考えず、早々に切り捨てたが…今となっては馬鹿な事をした物だ、とも思う。
これではクトゥグアが握れない。そんなどこかずれた思いを持ちつつ、ティアナは視線を天井に向ける。
ふと、照明が滲む。

「…自業自得だけどね」

ティアナの独白が宙に浮かび…消えた。

9月19日　機動六課本部アースラ　艦橋

そこには六課の主要メンバーが勢ぞろいしていた。
全員の視線の先に有るのは大型投影スクリーン。そこに映し出されていたのは一面の森林だった。
だが、その森が揺らぐ。無数の鳥が飛び立ち、その異様さを更に際立たせる。
時は来た。森がそのまま浮上するかのように持ちあげられ、更にはその下の地層まで。

そして、現れた明らかに人の手によって生み出されたもの。上に乗っていた森は崩れ落ち、遂にその姿は明らかになる。
全長は数キロに及ぶだろうか。濃紺と金で構成されたその巨体。遥か古に存在し、そして今また復活した悪魔の英知、その結晶。かつて聖王の元、世界を席巻した超大型質量兵器『聖王のゆりかご』。

「見えるかい？　古代の技術と英知の結晶は…遂に待ち望んだ主を得て、今その力を発揮する」

祝詞の如く響くＤｒ．スカリエッティの声。
映像は映り替わる。どこかの室内。否、その造形、明らかにあの戦艦の内部の物だった。
そして映し出されたのは…

「ママ…ッ！！　痛い…痛いよ…もう嫌だよ……ママ！！　ママァーーーーー！！！！　…ッグ…ア、アァ…ア、ア゛ア゛ァァァァァァ！！！！！！！！」

――ヴィヴィオ。
厳めしい玉座の上で苦痛に喘ぐその姿は、僅かなりでも良心の有る者ならば、正視に耐えがたい物だった。

「さぁ…！！！　此処から夢の始まりだ！！！　ハハハ…アハハハハハハハ！！！！！」

響くスカリエッティの哄笑。
艦橋に立ちすくむ機動六課の面々の顔は一様に蒼褪め、引き攣っていた。
狂気を目の当たりにした正気の人間の反応らしく。なのはなど、顔

はおろか、握りしめた拳が蒼白になっている。

「…さて」

そこに響くのはまずは前置き、と言わんばかりに放たれた声。
先程のスカリエッティの声同様に場を打つ。

「アインヘリアルの陥落、地上本部に接近する戦闘機人、復活した古の戦艦。
成程成程。問題は山積みだ。では、そこで諦めるかね？」

少しの間を置く。
まるで、言葉がその場の人間に染渡るのを待つかのように。
そして、それを逐一確かめたかのようなタイミングで、また声は放たれた。

「否、否否否。断じて、否。諦めは人を殺す。そこに座して死ぬ暇が有るならば。その命。私に寄越せ」

火勢の裂帛に。氷結の如く静謐に。
言葉は場を満たす。それこそが真理だと。それこそが真実だと。

「私は行く。全てをこの手に取り戻しに。何。事は単純だ。全て事が終わった時、あっけ無く感じる程に。
行って、あの馬鹿共を全て伸して、終わり」

どうだ？　と言わんばかりに、御剣は艦橋を見渡す。
暫し後、起こったのは笑い。だが、どちらかと言えば苦笑に近い物だった。

「…御剣さんだから言える台詞ですよ？　それ。根拠も何もないじゃないですか」

何処か硬い表情のまま、なのはが言う。
当然だ。浚われたのは一時とは言え預かっていた子。その子が苦痛に叫ぶ声が、未だになのはの脳裏には焼き付いている。
そう気が楽になる事などない。

「根拠など無い。否、必要無い」
「…っ！！　御剣さんだって！　御剣さんだってティアの事が心配じゃないんですか！！？」
「心配だとも。だからこそ、私は行く。ここで立ち止まってなど居られるものか。
今すぐにでも飛び出して行きたい気持ちでいっぱいだが？」

その台詞に、なのははぐっと詰まった様になる。
そして視線を逸らし、ようやく、絞り出す様に言葉を吐き出した。

「…御剣さんは…強いからそんな事が言えるんです」
「そうだ。私は強いよ。最強だ。この世界で私と対等に戦える相手など、片手はおろか、2本の指で足りる程しかいない。だが、私は強いから行くのではない。
ただ、私は勝つ為に行くのだ。例え私に力が無くとも、弱くとも。私の身内を救う為ならばな」
「…ぁ…」
「幸いにして、私は最強だ。何度でも言おう。私は強い。だから…心配するな」

そう言うと御剣は踵を返し、艦橋出口に向かう。
と、不意に立ち止まり、肩越しに振り返ると、付け加えるかのよう

に告げた。

「そうそう。先程、根拠も無しに、と言ったね？
そう、私は根拠もなく最強だ。根拠のある最強など存在せんよ。
私は無敵だ。――だから諸君。君たちも、根拠もなく安心したまえ」

そして御剣は、今度は振り返る事無く出て行き、その後を黒峰と原口が出て行く。
その背をなのはは見送り…追いかけた。自分の成すべき事を、成す為に。

## １０章－２　ゆりかご（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：どうも。１０章２話、更新です。

いよいよ次回からＳｔＳ決戦！　…なのですが。書き上がっているのはクアットロフルボッコシーンとゆりかご撃滅シーンとＳｔＳエピローグのみ！　…はぁ。

更に言うなら、クアットロフルボッコも書き直す可能性大。

いや…だって無理ですよこれ。〇〇が××の〇〇でクアットロを××××様にして〇〇続けるとか。

苦情で済んだら良い方な気も。

と言う訳でティアが浚われた理由は人質兼、囮兼、餌でした～

正解者には…何も有りません。

裏の裏は表！　みたいな物です。と言ってもそのまま言葉通り単純な訳もないですが。

追記：御剣を出演させて頂いている3次創作、ｃ．ｍ．様著『物語を紡ぐもの』にて、御剣のイラストをフルカラーで描いて頂きました。

皆様是非ご覧下さいませ。

遂に火蓋が切って落とされた。

浮かぶゆりかご、待ち受ける戦闘機人。向かうフォワード陣。

そして、御剣は。

次回、『無限の欲望、無限の剣』

お楽しみに。

# 短編・エイプリル・フール（前書き）

時系列は御剣×はやて恋人編後。
いつものように御剣×はやて…ですが…？

# 短編・エイプリル・フール

２０１５年　４月１日　１０：５４　海鳴市　市街地　御剣古美術店

「私、御剣さんが大嫌いです」

…唐突に。はやては店に入ると同時にそう言い放った。
店の空気は完全凍結。店の手伝いをしていた黒峰、原口、そして丁度帰省していたティアナ。
彼等は一言も放つ事無く、その視線を同時に移す。
その先に居たのは、新聞を開き、店の入り口を見つめたまま固まる御剣。

「じゃあ私はこれで！！！」

そして、はやてはその台詞だけを残して店を出て行く。
ピシャン、と言う音と共に閉ざされた扉。その一点を見つめていた御剣は、おもむろに眼鏡を外すと、さて、と呟く。

「…一応聞こう。私の目に間違いが無ければ…今のは…はやてだったな」
「そうね。はやて姉さんだったわ」
「私の耳がおかしくなったのでは無ければ、はやては有る単語を言って行ったな」
「うん。そうだね。僕にも聞こえたよ」
「…その単語とは…」

「大嫌い、だな。御剣、何やらかしたんだ？」

そこまで一通り確認を取った御剣は、その手に持つ新聞を畳むと、傍に置かれたティーカップを口に当てる。

「…御剣、それさっき飲み干したんじゃ無かったの…？」
「…あぁ、そうだな。さて、では朝食を作って来るとしよう」
「今はもう１１時よ。次は昼食じゃない？」
「…あぁ、そうだな。さて、では昼食は満漢全席でいいな」
「そんなもん作ってどうすんだよ。って言うかさっきから冷静にテンパってんじゃ無ぇよ」

というか。御剣の目が死んでいる。
その瞳に光は無く、何処を見ているのやら、焦点も定まっている様には見えない。
普段の無駄に溢れる自信も見る影は無く、何処となく、いや、気のせいでは無く御剣の輪郭が淡い。

「で？何か心当たりとか無いの？　はやてに嫌われた原因とか」
「……無い。断言できる」
「じゃあ、何かの誤解とか？だったら今からでも追い掛けて、はやて姉さんに直接聞いたら？」
「それは…そうなのだが…」

御剣の態度は煮え切らない。
常の彼ならば、すぐさま飛び出して、はやてに事の次第を聞いているだろう。
そも、御剣は人に嫌われる事が嫌な訳ではない。自分とその身内以外はどうでもいいと本気で考えているからだ。
だがしかし、今回の場合は…

「…慣れていなくてな…その…親しい人間に嫌い、と言われる事に」

そう。御剣は身内に甘い。

基本的に相手の意を汲む上、徹底的に相手を甘やかそうとする。

目上の相手であれ、礼節を保ち、相手を立てる。

そう言った事から、御剣は親しくなった相手からは大体の場合で好意を持たれる。

それ故に、今回の事は御剣の精神に多大なダメージを与えていた。

自惚れで無ければ、はやてには好かれていると思っていた。自分には勿体無い事だと。

しかし。

「その、何だ。しばらく間を置かせてくれ。今はやての元に行っても、言葉が出んかもしれん…」

「ちょっと、仁！」

そう告げると、御剣は階上へと向かって行く。

呼びとめるティアナの声にも耳を貸す様子は無く、御剣の姿は消えて行った。

Ｓｉｄｅ　御剣

４月１日　１３：１４　海鳴市　市街地　御剣古美術店　３Ｆ

御剣自室

「…何故だ…？」

自問する。視界には天井。自分の寝台に横たわったまま、答えの返って来ない問いを放つ。
私は何か、はやての意に沿わぬ事をしただろうか。
昨日も、八神家、私達、そこにアリサとすずかも加えて夕食を摂った。
その時に何か…そういえば、別れ際のはやての様子はいつもとは違っていた。
こちらの顔を見ようとはせず、頬には朱が差していた。
あの時は分からなかったが…そうか。あれは…怒っていたのだな。
自分でも気付かぬうちに、はやてを傷付けたのだ。
で、あるならば。

「謝らなければ」

する事は1つだ。
復縁など望みはしない。ただの自己満足だ。
はやてが望むならば、二度と彼女の前にも現れない様に…
等と考えつつ、寝台から身を起こす。と、そこにノックの音が響く。

「鍵ならば開いている」

そう告げたと同時、飛び込んできたのは1つの影。とっさに受け止める。
相手など、顔を見るまでも無く理解していた。故に、私は言わなければならない。

「…原因が定かでは無い時に、この台詞を言うべきではないと思っている。
だが、言わせて欲しい。すまなかった。私に非が有るならば、出来れば教えて欲しい」

「…っぅ…ぁ…」
「…はやて？」

そう。飛び込んできたのは、はやて。
だが、様子がおかしい。私の胸に顔を押し付けたまま、声を漏らしている。これは…

「はやて？　…泣いているのか？」
「ご…ごめ…ぅ…」

反応がおかしい。第一、大嫌いだと言った相手にこうして縋りつくと言うのもおかしい。
とりあえず、はやてを落ち着かせる。少し躊躇ったが、私はその頭に手を乗せ、優しく撫でた。

「何か、私達の間に誤解が有った様だね。良ければ、話して欲しい」
「ぅ…きょ、今日は…」
「今日？」

今日は何か有った日だろうか…？
はやての誕生日は2ヵ月程先。何かの記念日…でも無い。
4月1日、その日付と私の事を大嫌いだ、と言った意味…？
まさか…

「…四月馬鹿か」
「…はい…」

幾分か落ち着いたはやてが答える。
…ふと、気が抜けた。自分の考えていた事は杞憂だったと。
私は、はやてに嫌われていたのでは…無かったのだと。

「すっかり忘れていたよ。そういえば、そんな風習も有ったか。それで、私の事を大嫌いだ、と」
「…はい」
「どうして急にまた。以前はそんな事しなかっただろうに」
「昨日…アリサちゃんと話してた時に…こうすれば御剣さんが私の事をどう思ってるか分かるから…って」
「…なんとも…」

そんな事とはね。
で、有るならば、やはり悪いのは私だ。
それならば。

「はやて、顔を上げて」
「え…？　んっ！？」

はやてが顔を上げた、その口元に唇を合わせる。
少々不意打ちで申し訳ないが…

「ん…」
「～！…ちゅっ…」

驚いた様子だったはやても、おずおずと口付けを返して来てくれる。
そう。今までは、はやてが大事だから、等と言い訳を付けてこう言った事はしてこなかった。
だが、それではやてを悲しませては元も子もない。
唇を放し、はやてに告げなくては。

「はやて、私は…」

「御剣さん？」

と、そこで言い掛けていた台詞を呑み込む。

この場合、どちらが正解なのか。確か午後は駄目なのでは無かったか…まぁいい。

「私は…はやてが大嫌いだ」

「…はい！」

## 短編・エイプリル・フール（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：短編・エイプリル・フールです。

地域によっては午後は嘘を吐いてはいけなくて、逆に正直に過ごすそうですね。

最新話として投稿していますが、その内番外・短編の方に移します。

次は本編の続きでお会いしましょう。では！！！

# 番外・イラスト集　（注・挿絵有り）

>i218999—786<

>i218993—786<

>i218994—786<

>i218995—786<

>i218998—786<

>i219000—786<

>i219001—786<

>i219002—786<

>i2191212—7866<

>i2191211—7866<

>i2191210—7866<

>i2190909—7866<

>i2190908—7866<

>i2190907—7866<

>i2190906—7866<

>i2190905—7866<

>i2190904—7866<

>i2190903—7866<

Ｈａｇａｌａｚ「と言う訳で、タイトル通りな訳だけれども」

御剣「…多いな」

黒峰「て言うか俺フィーバーじゃね？　どしてよ」

Ｈａｇａｌａｚ「それはね、黒峰。君の元になった友人がこの絵師だからだよ」

御剣「…ナルシスト？」

Ｈａｇａｌａｚ「あいつの名誉の為に代弁してやると、『感情移入しやすくてついつい黒峰ばかり描いてしまった。後悔も反省もしていない』…だそうだ」

黒峰「…まぁ、何にせよ俺にゃあ良い事だ。でもなぁ…何でダンテチックなんだよ。悪魔も泣きだしそうだな、おい」

Ｈａｇａｌａｚ「君の戦闘時の衣装は特に設定していない…と言うか君は粒子で服を補強して鎧の様にするから設定の必要が無いんだよね。

　そこに、絵師が黒峰の戦闘衣装どんなん？　と聞いて来たから、お前の好きにしろ、と答えた結果がご覧のあり様だよ！！！」

御剣「幾つか私達の頭身が下がっているのは何故だ？」

Ｈａｇａｌａｚ「アイツの趣味…と言うと語弊が有るな。今アイツが書いてる漫画のキャラが少年サイズでな。その練習ついで、だと」

黒峰「…で、言って良いのかさっきからずっと思ってたんだがよぉ…原口は？」

御剣「…そうだな。原口は一枚もイラストが無い。どう言う事だ？」

Ｈａｇａｌａｚ「…絵師の中でイメージが固まってないから描けない…だとさ」

御剣「…」

黒峰「…」

Ｈａｇａｌａｚ「まぁ、イメージ固まって且つ暇になったら描くって言ってたから、その内出来るんじゃない？」

御剣「…絵師がイメージ固められないのは、貴様が原口をあまり作中に出していないからでは？」

Ｈａｇａｌａｚ「…ギクゥ！！！」

黒峰「…大量に描いて貰った俺が言うのもなんだが…依怙贔屓は良く無ぇな」

御剣「…原口には暫く黙っておくか」

Ｈａｇａｌａｚ「…で、ではさしあたって今日の所はこの当たりで。

では！！！」

御剣「逃げたな」

黒峰「あぁ、逃げたな」

# 10章－3　無限の欲望、無限の剣

9月19日　ミッドチルダ東部　森林地帯

鬱蒼と生い茂る森。そこを抜けた先、僅かに開けた場所にそれは有った。
綿密に張り巡らされた認識妨害魔法。只人には視認できない様に偽装されたその入り口。
壁に人1人が入れるかどうか、と言った様な裂け目が奔っている。
仮にこの裂け目を見た所で、まず気付きはしないだろう。
ここが、次元世界に広く指名手配された天才のアジトだ、等と。

「…ここが報告の有った洞穴、か。成程。周囲に散らばるガジェットの残骸。これほど分かりやすい目印もそうは無い、か」
「気を付けて下さい。此処は既に奴等の監視下に有る可能性が高いです」

その前に立つ2人の人影。
1人は白銀の鎧に身を包んだ御剣。もう1人はフェイト。
あの後、御剣達は3手に分かれた。スカリエッティのアジトに乗り込む役、ゆりかごに向かう役、市街地を守る役。
誰がどの役を選ぶかはすぐに決まった。
御剣はティアナを救う為にアジトへ。市街地守護は原口が最適任。
そしてガジェットが大量に出て来る事が予想される為、黒峰がゆりかごへ。

「分かっているよ。さて、では行くとしようか」
「ま、待って下さい。御剣さん、そのバリアジャケットまだ慣れて無いんでしょう?そんなに突っ込んで行ったら」

そう。いつもと変わらぬ姿の御剣だったが、その鎧には…神秘が感じられなかった。
それもそのはず。今御剣が身につけているのはバリアジャケット。単体での防御能力が低い為、御剣は普段鎧を纏っていたが、能力が封じられてはそれを補う事もままならない。
その為に、御剣は一度『無銘（ナナシ）』をマリーに預け、オミットしていたバリアジャケット構築プログラムを組み込んで貰っていた。

「問題無い。どうも、奴は私に会いたがっている様だ。私が奴の眼前に立つまでは、妨害もそうは無いだろう」
「ど、どう言う事ですか！？」
「本当に会いたいかどうかは別としてもな。ティアを浚った事、さ。仮にティアが私を此処に誘き寄せる為の罠だったとして、こんな入り口で妨害しても仕方が無い。
もっと奥深く。仕掛けて来るとすれば、そうそう地上に戻れなくなった辺りだろう。
となると、警戒すべきは分断策か。あまり私から離れるなよ、フェイト」

そう言うと御剣は奥へ奥へと進んでゆく。
フェイトは溜息を吐きつつ、その背を慌てながらも追った。
洞窟そのままだったのは入ってから１０ｍ程の所まで。そこから先はパイプや床のタイル、そして僅かではあるが薄暗い照明等、明らかに人の手が入っている事を示していた。
が、センサー類も見当たらない上、これだけ堂々と侵入しているにも関わらず、警報すら鳴りはしない。

「…本当に何も有りませんね」
「その様だ。居留守か？　まぁ、私達が侵入しているのはばれてい

るだろう。
…と。さて、分断策、その1、か」

御剣の声にフェイトが薄暗い通路先を見つめる。
そこに有ったのは2又に分かれた道。どちらか片方が当たりで、もう片方は何処とも知れない場所に繋がっているか、罠が仕掛けられている、と言った所だろう。

「ふむ、ではこちらだ」

が、御剣はまるで迷うことなく片側の道を選ぶと進んでゆく。
フェイトもその後を慌てて追えば、背後で物音がしたかと思うと、シャッターの様な物が降り、完全に出口を塞いでしまった。

「み、御剣さん！　こっちが罠だったんじゃ…！」
「それは無い。私の直感がこちらだと告げている」
「直感って…！　御剣さん、今は能力が使えないんじゃ！？」
「使えないのは武装を呼び出す事だけだ。第一、完全に能力が失われているならば、私からは魔力が消失する筈だしな」

そう言うと御剣は先へ先へと進んでゆく。その足取りは一定ではあったが、やや速足。
ふと、フェイトもそれに気付く。いつもならば相手に歩幅を合わせる御剣が、これほどにまで急ぐ理由。

「…」
「…」

ふと、無言になる。響くのは御剣の具足が立てるカチャカチャと言う音と、床を踏む甲高い音だけ。

幾つかの分かれ道を過ぎて暫くすると、ついにやや開けた場所に出た。
今までとは違い、壁にも土は露出しておらず、完全に金属で固められている。

「…当たりの様だな」
「ですね」

それだけの会話を交わすと、再び御剣とフェイトは無言で進む。
いつ周囲からの襲撃が来ても良い様に備え、警戒は怠らない。
が、それさえも杞憂だったかの様に、結局一切の妨害の無いまま、御剣達は３ｍは有ろうかと言う巨大な鉄門の前までたどり着いた。

「さて、と」

そう呟いた御剣の手に握られているのは『無銘（ナナシ）』の長剣。
どうする心算なのかとフェイトがいぶかしんでいると、御剣はソレを大上段に構え、魔力刃を展開させた。
と、同時に。御剣の体が淡く光る。それは威光。それは圧力。それは御剣からあふれ出た魔力だった。
それらがそのまま長剣に流れ込む。
長剣は魔力を吸い上げ、その力を使役者の望むカタチへと変えて行く。
そして、魔力刃も変質を始める。綺麗に整えられた濃い藍色の刃、それが今や雷光を放つ漆黒の刃へと変わっていた。
御剣はそれを再度大上段に振り被り、袈裟切り、返す刀で逆袈裟に鉄門を切り裂く。
大きく×の字に切り裂かれた鉄門は、軋みを上げ、ゆっくりと倒れて行く。
果たして、その向こうには１人の女性の影が有った。

ウェーブで紫がかった銀髪に、金色の瞳。制服の様な物を着た、秘書の様な印象を与える女性。

「ようこそおいでくださいました。どうぞこちらへ。ドクターがお待ちです」

それだけを告げると、彼女は背を向け歩きだした。

ナンバーズＮｏ．１、ウーノ。ナンバーズ最古参にして、スカリエッティの秘書。

彼女が現れた事に御剣は驚きつつも、その後について行く。

「み、御剣さん、そんな簡単に付いて行って良いんですか？　罠かもしれませんというか罠ですよ」

「問題無い。私にとって懸念だったのはスカリエッティと接触できない事、だったからな。

願ったり叶ったり、と言う所だ」

「そのスカリエッティの所に連れて行くって言うのが嘘だったら…いえ、もう良いです…」

何を言おうが歩みを止めない御剣に、諦めた様に溜息を吐くフェイト。

そのまま暫し歩き続ける事数分。更に開けた場所に、その男は立っていた。

「久しぶり、と言うのもおかしな話だが…健勝そうで何よりだよ。御剣　仁特別提督補佐」

闇の中から現れたのは、青み掛かった髪に、ややこけた頬、そして白衣を纏っている男だった。

先に上げた、どの特徴より何よりも印象的なのは、その目。

淀んだ泥濘の様でも有り、純真な子どもの様な輝きも持っている様な目。

「そちらも、ますます天才振りに磨きが掛かっている様だな。Ｄｒ．ジェイル・スカリエッティ」

「いやいや。それほどでもないさ。これでも苦手なものはいくらでもあるよ。例えば、人心掌握とかね。

君たちを引き込めなかった事は、実に痛い失敗だった」

「これでも私は出無精でね。あの店に居る時が一番落ち着くのだよ」

「おや。そう言いつつも管理局には手を貸すのだね。君ほどの者が」

「私は管理局に手を貸した覚えなど無いよ。私が手を貸しているのは私の身内だけだ。他の者など知った事か」

「フフフ…」

「くっくっく…」

ひとしきり言葉を交わしたかと思えば、何かを分かり合った様に笑いあう2人。

見様によっては、旧来の友人との会話にも取れる両者のやり取りに、慌てた様にフェイトが口を挟む

「み、御剣さん!?　奴と知り合いだったんですか!!?」

「以前、あちらからコンタクトを取って来てね。協力して欲しい、と。

まぁ、その時素気（すげ）無く断った程度の仲さ」

が、その返答を聞き、ほっとした表情を浮かべたのも束の間。

険しい顔でフェイトはスカリエッティに向き直り、デバイスを突き付ける。

「ジェイル・スカリエッティ!!　世界規模テロリズム、違法医学

の実行、その他多数の罪状で貴方を拘束します！！！」
「ふむ。こういう時、何と言うのだったかね。あぁ、そうそう。こうか。
だが断る」
どこかで聞いた様な台詞をスカリエッティが吐くと同時、空間に歪みが生じた。
波紋の様に広がったその歪みは瞬く間に通路を満たす。
「…む？」
御剣の長剣に展開されていた魔力刃が一瞬揺らいだかと思えば、霞の様に掻き消えた。
それだけでは無い。フェイトのバリアジャケット、そのコート部分の端、スカートの裾辺りまで影響が出始めた。御剣の鎧も先端部が尖った、即ち薄い部分から徐々に薄れ消えて行く。
魔導生成物質で構成されたバリアジャケットにまでも影響を与える程のＡＭＦ。
それが今までのＡＭＦとは一線を画している事は明らかだった。
「Ａ・ＡＭＦ（アブソリュート・マギリンクフィールド）、とでも言うべきかな。
完全魔力遮断空間。その中に於いて、君達魔導師の行動は著しく制限される。故に」
スカリエッティはそう言いつつ、指を一度鳴らす。
その音を合図に、通路の至る所からガジェット達が現れた。壱型と参型のみではあるが、その数およそ５０。
「普段ならば何と言う事も無いだろう？さぁ、頑張ってくれたまえ」

そして、スカリエッティの指がもう一度高らかに鳴り響いた。
弾かれた様に御剣達に襲いかかるガジェット達。そのケーブルで以て、フェイトの前に立っていた御剣を絡め取らんとし――

「嘗めているのか貴様」

――その胴体を御剣の手刀で断ち割られた。
長剣を手放した御剣は正しく無手。スカリエッティが先程言った様に、今現在この通路では魔力の存在は許されない。
それは即ち、御剣はその膂力のみを用いて金属で構成されたガジェットを破壊した事を示していた。

「ふん。自信満々に語り始めるから、何か有るとは思っていたが…この程度か」

そう言いつつ、御剣の攻撃は止みはしない。
その身一つを用い、次々とガジェット達を破壊して行く。
御剣が手刀を放てば、先程の再現の様にガジェットは断ち割られ、続け様に放たれた足刀でまた別のガジェットが砕かれる。
そして更には抜き手で貫いた参型に更にもう片方の手を突き刺すと、そのまま割り広げ真っ二つに引き裂いた。
踊る様に、舞う様に。御剣の身が通り抜けた端から、残骸の山が積み上がって行く。
ガジェットが身を守らんと展開したシールドさえ何する物ぞ。まるで障子紙の様に引き裂かれ、数瞬後にはその骸を晒す事となる。
人の身に有るまじき暴虐の嵐に、スカリエッティだけでなくフェイトも目を見張る。
と、フェイトも我を取り戻すと、スカリエッティの元に駆け寄った。
例え魔法が使えずとも、デバイスは変わらずそこに有る。
ミッドチルダ式の魔導師では珍しく格闘も可能なフェイトならば、

戦闘継続は可能だった。
だが、目前まで迫った所でスカリエッティの背後から2つの影が踊り出て、フェイトに襲いかかる。
片方の影はその手に持った巨大なブーメランで斬りかかり、もう片方の影はその腕から生えたエネルギー翼で斬りかかる。
いずれも第一線級のベルカ騎士の一撃に勝るとも劣りはしない。
普段ならば受け止められて当然のその攻撃を、フェイトはまともに受けてしまった。
高い耐衝撃機能を持つバリアジャケットも、この空間内ではただの衣服同然。
弾き飛ばされ、背中を強く打ちつけたフェイトの動きは一瞬止まる。
そこへ奔ったのは数本の糸。赤黒い色をしたそれは瞬く間にフェイトを絡め取ると、その場に縛り付け拘束してしまった。糸の出所はスカリエッティ、その左手に装備された手袋の様な物。

「さて、そこまでだよ。御剣特別提督補佐」

その声に御剣は反応して振り向く。
だが、それまでにガジェットの群れは軒並み破壊され、その残骸を御剣の足元に晒していた。

「…人質、とでも言いたいのかね？」
「端的に言ってしまえばそうだね。そして…」

御剣の台詞を受け、スカリエッティが腕を一振りすると、投影モニターが浮かぶ。
そこに映っているのは…独房に閉じ込められたティアナだった。
御剣の表情に変化は見られない。それは予想できたことでも有ったし、ここで持ち出されるであろう事も含めて予想の範疇だった。

「…分かるね。御剣特別提督補佐。君達は此処に足を踏み入れた時点で敗北しているのだよ。
君が如何に強い力を持とうと、その心は人間だ。さて、君はこの2人を見捨てられるかな？」
「…今日日、その辺の三下でも言わない様な台詞を聞く事になろうとはね。
で？要求は何かね、誘拐犯？」
「話をしよう」
「…話だと？時間稼ぎの心算か？」
「いや。以前に聞き忘れた事が有ってね。それに答えて貰いたいだけさ」

呆れた様な半目を正すと、御剣は改めてスカリエッティに向き直る。

「…良いだろう。では、問うが良い。私に答えられる事なら答えてやろう。ジェイル・スカリエッティ」
「感謝するよ。では問おう。君は…君達は何故人の枠に居るのだね」
「…質問の意味が良く分からないのだが」

が、その台詞を聞くと同時に御剣の目は薄まり、再び半目になった。
それに構う事無く、スカリエッティは続ける。

「君達は明らかに人を超越している。先程の戦闘とも言えぬ殲滅。それ一つ取っても、君達は異常だ。
だからこそ疑問に思う。君達は、何故人の柵に自ら囚われる。それだけの力が、能力が有りながら！」
「…聞きたい事はそれだけかね？」
「そうだ」

「成程。ジェイル・スカリエッティ。私は君に関しての評価を少々修正する必要があるね。
私は過ちを認めた場合、前言を撤回する主義なのだが、今ここで行っても良いかね？」
「どうぞ？」
「暗愚（バカ）が」

端的に、しかしその中に明らかな侮蔑の感情を込め、御剣は言い放つ。

「…で、私の質問には答えて貰えるのかね？」
「あぁ、そちらは問題無く答えてやろう。単純な事だ。たった1つのシンプルな答えだ。
私は人間だからだよ」
「…何？」
「何か大層な理由でも有ると思っていたかね？ならば、それは期待外れだったな。
私は人として生を得た。少々の手違いは有ったが、今も変わらずこの身は人だ。
…まぁ、正直な所ギリギリだという自覚はあるがね」

そして、御剣は歩を進める。
その視線は揺るぎ無く、真っ向からスカリエッティと睨み合いながら。

「ヒトとして生まれたから、ヒトの枠に収まり暮らす。何か、問題が有るかね？」
「…正直に言わせてもらえれば…失望したよ。御剣特別提督補佐。
その力さえあれば、この世さえ統べる事も可能な男が…その程度とはね」

「この世？　そんな物に興味は無い。面倒くさいだけだろう。
私には私の世界で全てが事足りる。それ以上など望まないだけさ」
「…やはり、私と君は相容れないね」
「当然だ。無限の欲望たる貴様と違って私は謙虚なのでね。身の程を知っているのさ」

さて、と呟き御剣は歩を止める。視線の先には立ち塞がる2人のナンバーズ。
大型のブーメランを構えたナンバーズＮｏ．７セッテ、その四肢にエネルギー翼を展開したナンバーズＮｏ．３トーレ。

「怪我をしたくなければ退くが良い。」

2人の戦闘機人は御剣の言に耳など貸さず、それぞれの装備で御剣に襲いかかる。
先行したトーレの紫電が如き一閃を御剣が首を傾けかわした所に、セッテのブーメランが迫る。
そして御剣の背後では、トーレが振り向かず、しかし正確無比に鋏討ちにすべく足刀を放った。
ブーメランは首を、足刀は胴を。いずれか片方だけでも並みの人間には致命傷だろう。
だが――

「「！？？」」

――ここに立つ男は間違っても並みの人間などでは無い。
あろう事か、ブーメランも、足刀も、その両の手で以て抓む様に、軽く指先で挟むだけで止めてしまった。
そして御剣はそのままその場で一回転。セッテは咄嗟にブーメランを手放したが、足を掴まれたままのトーレは地面に叩きつけられる。

「がっ！？」

そして、そら、という気軽な声が聞こえると共に、セッテの眼前にトーレの背が文字通りに飛び込んでくる。
セッテは咄嗟に受け止め足を踏ん張るも、勢いは殺し切れず、通路の壁にそのまま叩きつけられてしまった。

「さて、私もそこまで鬼では無い。今すぐフェイトを解放してティアを返すなら、腕か足の2、3本で済ませてやろう」
「おや、随分と甘い事だね。話に聞いていた限りでは、私はこの場で殺されてもおかしくは無い筈だが」
「この件が早々に片付くに越した事は無いのでね。それと、流石に許可なく死人を出すと後が面倒だ。
あくまでも貴様の身柄は拘束せねば、私がここに居る大義名分が通らんのでな」

そう言いながら、御剣は歩みを止めない。
手放していた長剣を拾い上げると、そのまま一直線にスカリエッティの元に向かって行く。

「かかったね」
「む？」

瞬間、御剣の周囲を硬質な輝きを放つ光の膜が囲う。
咄嗟に御剣もその手に握る長剣を振るも、一切の手応え無く長剣は振り切られる。
しかし、光の膜を越えた筈の長剣はスカリエッティに届く事無く、まるで消えてしまったかの様に空を切る。

「これは…」
「まさかとは思うけれど、私がなんの対策も無しに君をここに招き入れるとでも思っていたのかね？
君なら既に察しは付いているだろう？」
「結界…否、位相をずらす事による空間断絶。原口の能力…その一端か」
「正解。いやはや、やはり一目瞭然かね。
そう。君の友人である彼の力をヒントに、簡易的ではあるが時空操作を可能とした、と言う訳さ。
驚いたかね？」

そうスカリエッティは気軽に言うが、事はそれほど単純では無い。位相をずらした空間を作り出す、と言うのは口で言う程簡単な事では無いのだ。
よほど強力な結界、それこそ世界に匹敵する程の物で無ければたちまちのうちに位相は修正されて立ち消えるだろう。

「妙な自身の元はコレか。さて、私もここまで意見を二転三転させるのは初めてだよ。
流石は天才と呼ばれる程の事はある、か。しかし、この程度で私が留め置ける、と？」
「当然さ。何故なら今の君ではそこから抜けられないからね。
力を削がれているのだろう？」

にやり、と言う擬音が良く似合う程に歪むスカリエッティの顔。
対する御剣は溜息を1つ吐くと口を開いた。

「一応部外秘だったのだが。聖王教会直営の病院にまで耳が有るとは羨ましい事だね」
「お褒めに預かり光栄だよ。さて、では私と共に見届けようではな

いか。
新たな秩序の創造を。何者にも妨げられることの無い楽園の創造を！！！」
「御剣さん！！！」

フェイトの悲痛な声が響く。
普段の御剣ならばともかく、能力を大きく制限されている今の状態では果たして脱出が叶うのか。
が、そんなフェイトの疑念など何のその、と言わんばかりに御剣の表情は涼しげだった。

「…随分と余裕だね。いくら君とて飲まず食わずではいずれ耐え切れないだろうに」
「さて、どうやら私達の間には見解の相違が有るようだな。もう一度言ってやろう。この程度で私が留め置けると本気で思っているのかね？」
「何を言って…」
「まさかとは思うが、私が何の対策も無しに敵の懐に飛び込むとでも思っていたのか？」
「何？」
「それほど難しい事でも無い。鞘に収まったまま切れる剣など存在しない、と言う事だ」

御剣はその胸を右手で軽く叩く。と、そこに変化が現れた。
御剣の胸の前の空間が一瞬揺らぐと、現れたのは青銅製の柄。
御剣はそれを掴む。と、凄まじいまでの雷光が奔り、御剣の顔が苦痛に歪む。
まるでその柄が御剣から離れることを拒む様に。一体となった物が引き裂かれる事を拒む様に。
しかし、数秒の後、その柄は引き抜かれた。

そこに握られていたのは紛う事無き『剣軍師団（けんぐんしだん）』。
御剣と言う鞘から抜き放たれた、原初にして終焉の剣は御剣が手を放すとすぐさま掻き消える。
代わりに御剣の手に収まるのは、刀身の部分が3つの円筒の重なった形の剣。
その表面には楔に似た文様が刻まれていた。
その円筒が唸りを上げて回転を始める。
回転は加速を続け、遠心力を加え、剣の威力をさらに高めていた。
回転した接続部分から漏れ出してくる膨大な魔力。
円筒は回転数を高め、人知を超えた烈風を巻き起こす。
極限を超えて高まった風圧は、世界をも切断する刃となって乖離剣から噴出していった。

「『天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）』！！！」

そして、御剣が腕を振り抜くと同時に世界が割れた。と同時に通路の四方が爆発した。
それと同時に、御剣とスカリエッティを隔てる光膜は跡形も無く砕け散り雲散霧消する。
それが有った事を示すのは乖離剣の余波で吹き荒れる旋風のみ。
さて、と呟きつつ御剣は指弾を1つ。
その音と共に現れた剣達に依って、フェイトを縛っていた魔力糸は1本残らず断ち切れてしまった。

「さてフェイト、私は少々やる事が有るのでこの場は任せるぞ」
「…はい」
「気負うな。お前なら問題など無いさ。さっさと終わらせてしまえ」

それだけ言うと御剣は踵を返す。さもここに最早用は無い、と言わんばかりに。

「何処へ行こうと言うのかね？」
「ティアが居ないこんな場所に、最早用など無いからな」
「…何故ここに居ないと断言できるのかな？」
「その発言はここにティアが居ないと言っているも同然なのだがな。強いて言うならば…直感だ」

御剣はそれだけ言うと、スカリエッティから完全に背を向けて歩き出す。
と、そこへトーレとセッテが襲いかかる。
先程通路の壁に叩きつけられた影響は毛ほども見られず、完全に背を向けてしまった御剣を不意討つには十分。

「フェイト」
「はい」

…それは、この場に居るのが御剣一人であったならば、の話ではあるが。
トーレの拳もセッテのブーメランも、纏めてフェイトのバルディッシュに受け止められる。

「やれやれ、仮にも私は今回の主犯格だよ？　それを捕えるのはやはり君の様な存在では無くては舞台が盛り上がらないだろうに。
そうは考えないのかね？　御剣特別提督補佐？」
「全く。小指の甘皮程にも思わんね。適材適所と言う言葉を知っているか？
犯罪者を捕えるのは」
「執務官（わたし）の仕事です」

御剣の台詞を受け継ぐ様に、フェイトはそう口にする。

と同時に流れる様にデバイスを繰り、トーレとセッテを纏めて地面に叩き付けた。
当然、戦闘機人がその程度のダメージで行動不能になる事は無く、すぐさま体勢を立て直すと、両者共にフェイトに襲いかかる。

「バルディッシュ、グレイヴフォーム」
「Ｙｅｓ，ｓｉｒ」

フェイトの言葉に従い、バルディッシュがその姿を斧から長刀へと変えた。
トーレの高速の拳撃、セッテのブーメランによる痛打、そのどちらもフェイトのバルディッシュが防ぎ、受け流す。
当然、フェイトもただ防ぐだけでは無い。２人の攻撃の隙をつき、柄、刃部、石突での打撃を的確に急所に打ち込んで行く。
数分と経たない内に、片膝を付いて肩で息をするトーレ、セッテと、それを悠然と見るフェイト、と言う構図ができあがった。

「魔導師が…魔法を封じられた魔導師に何故私達が」
「経験の差です」

フェイトはそれだけ言い放つと∞を描く様にトーレとセッテの顎先を打ち抜く。
戦闘機人と言えど、脳を揺らされては流石に成す術は無く、その場に倒れ伏し動かなくなった。

「…」
「と、言う訳だ。Ｄｒ．ジェイル・スカリエッティ。私はもうここに要らないから別の場所に行く。
何か間違ったかね？」

御剣はそれだけ言うと今度は本当に立ち去ってしまった。
御剣が消えた通路から断続的な爆発音が聞こえる。スカリエッティが発動させたトラップ、シャッター、ガジェットと言った妨害を一蹴して御剣は地上へと向かって行く。

「広域指定次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティ。
世界規模テロリズム、違法医学の実行、その他多数の罪状で貴方を拘束します」

その音をＢＧＭに、フェイトは再度告げた。

# １０章－３　無限の欲望、無限の剣（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：大変遅くなりました。１０章３話、ようやくお届け出来ました。

御剣とスカリエッティの対話シーン。
正直今回こんなに遅くなったのはここの所為だったり。
ここのシーンへの持って行き方が…フェイトがアホの子か咬ませチックに…いつもの事ながら要反省。
御剣の根底には、人は１人では生きられない、と言う思想が有ります。
それは最強クラスと言う自負を持つ御剣自身とて例外では無く、御剣は誰かとの繋がりをかなり重視します。
少し言葉を交わしただけのはやてに関わった事、ティーダの妹であるティアナを育てた事はその辺に起因しています。

あっさり復活御剣の能力。
元々対して引っ張る気も無かったので、早々に復活して貰いました。
ですが、作中でやらかしたように、あの状態でもガジェット程度歯牙にも掛けていません。
御剣と言う鞘に入ったままの剣軍師団を振りまわしている様なものなので、その力は絶大。
回復に時間が掛かっていたのは、御剣の体が剣軍師団に完全に適応する為です。
とはいえ、再度剣軍師団を使えば、また能力は暫く封印されますが。
融合を繰り返せば繰り返す程、融合したままで力を使えば使う程、御剣の魂魄と剣軍師団は一体化し、最終的には同化してしまいます。
この場合は御剣の魂魄が『座』に呑み込まれてしまう、と言う事ですが。

御剣も霊格が上がったとはいえ、まだ世界を内包出来る程の器ではありませんから。まだ。

御剣達がＤｒ．スカリエッティと対峙していた時を同じくして、首都クラナガンに侵攻する聖王のゆりかご。
雲霞の如く湧くガジェットに、管理局の魔導師は防戦一方だった。
次回、『クラナガン防衛戦線』
お楽しみに。

# １０章－４　クラナガン防衛戦線

９月１９日　ミッドチルダ　クラナガン　廃棄都市区画

「来たぞ！　構えろ！！！」

司令官らしき人物の声に合わせ、４０人程が隊列を組み並ぶ。
その身に纏うのは管理局陸上警備隊の防護服（バリアジャケット）。
その手に携えた杖が狙うは無数に飛来するガジェット達。
接敵までは凡そ１、２分と言った所か。
警備部隊員達の目に映るのは空一面を覆い尽くす程の敵軍（ガジェット）。
壱、弐、参号機揃い踏み。未だ嘗て無い程の大軍勢。

「糞っ糞糞糞！！！　武装隊は何やってんだよ…！　こんな時の為にあいつ等がでかい顔してんの見逃してんだろうがっ…！！！」

緊張に耐えかねたのか、絞り出す様に若い隊員の１人が叫ぶ。
それは、この場に居る者達の心情を代弁していた。

「その汚い口を噤め二等陸士。あそこは要請だけじゃ無く、上層部（うえ）の指示が要る。
レジアス・ゲイズ中将暗殺以来、上もゴタゴタ続きだ」
「そんなもん知ったこっちゃ無いがね。一介の警備隊員にアレは荷が重すぎるっての」

と、今度は別の隊員が口を開く。
顔こそ顔褪めてはいるものの、その表情は飄々としていた。

「だったらどうする？　尻まくって逃げるか？」

そう問われたその隊員は、は、と自嘲するかの様に口を開くと答えた。

「そりゃぁ良い…と言いたいとこだが、生憎クラナガンには家族が居るんだ。
もうすぐ子どもも産まれる。女の子なんだよ」
「…そうか。じゃぁ、死んでも生きて帰らなきゃな」
「…あぁ」

眼前には何の冗談かと思う程のガジェットの群れ。
ソレは機械故に殺気等は無い。が、その感情の無さが逆に不気味さを助長する。
無数の無機質なレンズに睨まれ、怯まない隊員の方が少ない程だ。

「撃てぇ！！！」

隊長の声に弾かれたかのように、尾を引いて色取り取りの魔力弾がガジェット達に殺到する。
魔力弾だけでは無く砲撃も無数に打ち込まれ、流れ弾が廃棄都市区画のビル群を倒壊させる程の飽和攻撃。
だが、ガジェット達はただの機械では無い。
希代の天才、ジェイル・スカリエッティが制作したもの。
例えそれが本人にとっては手慰み程度の作品であろうと、その完成度は常識を遥かに超える。

「…嘘だろ」

無傷。
ビルが崩れた際に巻き起こった土埃の中から現れたガジェット達の

ボディには、傷1つ無かった。
隊列を組んで身じろぎもしないその様はまるで壁。
ＡＭＦ（アンチ・マギリンク・フィールド）。それは魔法技術偏重の管理局員達には絶対の盾と言っても良い程の代物。
ＡＡランククラスの魔法を用いなければミッド式魔導師には打ち抜く事は叶わず、純粋に鉄塊を破壊するだけの膂力が無ければベルカ式騎士には打ち倒す事は能わず。
そして。

「…！？」

空間に奇妙な波紋が広がる。
それと同時にガジェット達は攻撃を開始した。
機体正面に備え付けられた射撃装置からの熱線、機体横に装備されたミサイルランチャー。
当然、それを警備隊員達もただ黙って受ける訳も無く、防御しようとシールドを展開した。
筈だった。

「ぐっ！？…え？」

ある警備隊員はシールドを展開しようと翳した手を熱線で焼かれ。

「きゃあっ！！」

ある警備隊員はバリアジャケットを素通りしたミサイルの爆風に肌を焼かれ。

「何だこれ…どうなってんだよ！」
「防御が…出来ない…！！」

「全員遮蔽物に身を隠せ！　このままじゃ的だぞ！！！」

警備隊の隊長の叫びに応じて、隊員たちは手近な物陰に身を潜める。

その影からデバイスの先端を出して魔力弾を打ち出すも、やはり霞の様に掻き消えてガジェット達には些かのダメージも与えられていない。

「ちっ冗談じゃないぜ。話に聞いてたよりも随分ひどいじゃねぇか」

「何言ってんだ。ガジェットの数に応じてＡＭＦの効果は上がる。その報告は有っただろ」

「あぁ、あれか。にしたって手詰まりだなこりゃ。俺たちじゃどうしようもない」

「…おいお前等。あそこ、あのビルの壁の所撃てるか？」

遮蔽物に身を隠しながらぼやいていた2人組に、別の隊員が声を掛ける。

「あん？　そりゃぁ仮にも射撃型だぜ？　撃てない方がおかしいっての」

「なら俺の合図で撃て。いいな」

「なんだってんだよ…あぁ、成程ね。了解」

「行くぞ。今！！！」

掛け声と共に、３本の光条が廃棄都市区画ビルの外壁を打ち抜く。劣化し切っていたコンクリートはさしたる抵抗も見せずに崩れ落ち、その直下にいたガジェットの群れを一息に呑み込んだ。

「うっしゃぁ！！！」

「魔力弾が通じないなら副次効果でダメージを与える。訓練でやっ

た事だがここまで上手く行くとはな」

が、しかし。

それでも残りのガジェット達は変わらず押し寄せている。

それだけでは無い。生き埋めになった筈のガジェット達も瓦礫を押しのけて現れて来ていた。

流石に無傷では無かったが、それでも行動可能な事に変わりは無い。

「おいおいおい、駄目じゃねぇか！　倒し切れて無いぞ！　どうすんだよ！！！」

「落ち着け。別に俺達が倒す必要は無いだろ」

「何言ってんだよ！　武装隊の連中が来ないんじゃここは俺達で何とかするしか」

「だから、武装隊が来るまで俺達で足止めすればいいだけだろ。

あいつ等、ジェネレータの関係かなんか知らないが、俺達の攻撃を受ける時は固まって動きを止めている。

さっきみたいに物理的に埋めてやっても良い。ほら、だから俺達のする事は単純。

相手の攻撃を受けない様に物陰から撃って撃って撃ちまくればそれで良い。

俺達は『警護隊』だ。護るのが仕事だろ？」

そういうとその隊員はその言葉通りに射撃を開始した。

その攻撃はガジェット達に微かな痛痒さえも与えていない。が、それでも、彼の言うとおりにガジェット達は動きを止めていた。

もちろん、彼一人では全てのガジェットを押しとどめておく事など出来ない。

だが、その姿に後押され、１発、また１発と放たれる魔力弾は増えて行く。

質では無く量を。１発の砲撃よりも１０発の魔力弾を。

間断無く隙間無く、怒濤の様に放たれる攻撃。それは正に壁。
それはガジェット達には何のダメージも与えられないものだったが、
確かにガジェット達をその場に押しとどめていた。
と、そんな中、ある隊員が気付く。居ない。
先程まで確かにいた筈のガジェット参号機達が姿を消していた。
しかし、気付いた時には既に遅かった。地面を砕き警備隊員たちの
背後から現れるガジェット達。

「馬鹿な！！！　どうやって！！！」
「まさか…下水道！！？」

そう。廃棄都市区画にも上下水道はある。
ガジェット達はそこに潜り込み、参号のアームで地表までの道を掘
削して現れたのだ。
前後に挟まれた形になる警備隊員達。今まで集中させていた事でガ
ジェット達を押しとどめていた攻撃も、それを二手に分かれさせて
しまえば脆く。
瞬く間に迫るガジェット達。距離を取っていたが故にカバー出来て
いた両翼に、遂に綻びが生じる。
その隙間を縫って押し通ろうとするガジェットが6機。
手一杯が故に生じた綻びを当然カバーする事など出来ず。警備隊員
達はただそれを見送る事しか出来なかった。

「甘いです」

と、そんな声が隊員達の耳に届いたかと思うと、突破したガジェ
ット達が爆散した。
と同時に警備隊員の背後に回り込んでいたガジェット達も次々破壊
されて行く。
そして、軒並みガジェット達が破壊された後、地面に降り立つ影。

その数６。

「本局航空武装隊１２４５部隊所属、第１分隊隊長チルル・パッソ一等空尉以下５名。ただいま到着しました。遅れて申し訳ありません」

「…武装隊？　じゃぁ申請は通ったのか！？」

「いえ。残念ながらこれは私の独断専行です。他にも何隊かは出張っている様ですがっ！」

そう言いながらもチルルの拳は次々にガジェットを破壊して行く。舞う様に駆ける彼女の通り抜けた後にはただ、うず高く積み上がるガジェットの残骸が転がるのみ。

と、その残骸の中から閃光が奔る。僅かに機能を残したガジェットが放った１撃は完全な不意討ち。回避など不可能。

例え即座に反応したとして、今この場は強力なＡＭＦに覆われている。

シールド、バリア、フィールド、ありとあらゆる防御手段は取れず、閃光はチルルの体を貫…かなかった。

閃光を弾いたのは不可視の壁。

弾かれた際の閃光の散り様によってのみ映し出されたそれは、チルルにとっては忘れ得ぬ物。

「あれ、パッソさん久しぶり。こんな所で会うなんて奇遇だね」

と、一切の前触れ無くチルルの眼前に現れる人影。

これと言って特徴も無い管理局員に支給される制服。

戦場で見るにはひどく不釣合いな服装でありながら、その男はまるでそこが絶対の安全地帯だとでも言わんばかりに気負いは無い。

「な、なななな」

「菜？」
「何で貴方がここに居るんですか！！！　原口提督補佐！！！」
提督補佐ぁ！！？　等と周りから声が上がるが、当の本人は素知らぬ顔で飄々としている。
「何でと言われてもね。クラナガン防衛が僕のやる事だからだけど？これでも防御には自身が有るからね」
「…で、ですが、貴方は防御には向いていますが攻撃には向きません。貴方が守備、私が攻撃でどうですか？」
「それも普段なら良かったんだけど、ね」
チルルの提案を聞くふりをして受け流し、原口は上、下、左、右と1回ずつ指弾を十字を切る様に打つ。
と、先程までいた大量のガジェット達が瞬く間に消える。
「何をしたんですか」
呆気に取られている警備隊員達を尻目に、チルルは原口に詰め寄る。
原口は特に答えもせず、ただ右掌を上に向けた。
と、その掌の上に映像が投影される。そこに移るのはガジェットの大群。
その量は先程この区画の警備隊が戦っていた数より大分多い。
それは今現在、クラナガン周辺に居るガジェット達全てだった。
「『箱庭（はこにわ）・八獄（はちごく）其の漆、大焦熱地獄（だいしょうねつ）』」
原口の声と同時に、投影されていたガジェット達が一瞬にして消滅した。

「…何をしたんですか？」
「別に？　極炎で一瞬の内に昇華させただけだよ。　本来のモノと違って残念だけど、あいつらに苦痛なんて与えようがないし」
さらっとそんな事を言ってのける原口に、チルルだけでなく警備隊員達もげんなりした顔になる。
言葉にするならこうだろう。そんな理不尽な、と。
「という訳で」
そんな周囲の事など気にも留めず、原口は口を開く。
「僕はちょっと入りこんだ鼠を捕まえて来るので。チルルさん、ここ、後よろしく」
「え？　ちょっと！」
慌てたチルルだったが、時すでに遅し。
次の瞬間には最早原口の姿は無く。置いて行かれたチルルがただ佇むだけ。
その背後では部下達が溜息を吐いていた。
「…なぁ、言って良いか？」
「あぁ、どうせ同じ考えだから一緒に言おうぜ。せ～の」
「「俺らの頑張りって何だったのさ…」」
そんな警備隊員達の言葉に、返事は帰って来る事は無く。

Ｓｉｄｅ　黒峰

９月１９日　ミッドチルダ　クラナガン郊外　東部

「ぅおおおおりゃぁ！！！」

響き渡る黒峰の雄たけび。
広大な戦域を飛び回りながら次々にガジェットを破壊していく様は、さながら彗星の如く。

「塵に…還りやがれぇぇぇえええええええええ！！！」

そして巻き起こる粒子を含んだ竜巻。
否、竜巻等という言葉すら、おこがましく感じる程巨大な粒子の大瀑布。
その粒子一粒一粒がガジェット達の装甲を濡れ半紙もかくやと言わんばかりに貫き、削り、先の台詞通りに塵になるまでズタズタに引き裂いて行った。

「…ちっ…どうなってんだこりゃ…」

数分後、砂塵の納まった中空に浮かぶ黒峰。
その眼前に聳えるのは未だ悠然と飛び続ける『聖王のゆりかご』。
暴虐と表現してなお足らぬ程の攻撃を受けても、その威容に変わりなく、その船体には傷一つ付いてはいなかった。
ただのシールド、防御フィールドではありえぬ事。
そして何より異様なのは、その船体に黒峰の粒子が触れ得ぬ事。
黒峰の粒子の直径は水素原子とほぼ同等、１０の－１０乗ｍ。
それが通れぬということは、ゆりかごは完全に周囲と断絶されているという事。

それはあたかも、異なった世界に身を置いているかのように。

「…で、またかよ」

はぁ、と嘆息する黒峰。

その視線の先にあるのはガジェットの大群。

まるで先ほどの焼き直し。この繰り返しは優に１０度は繰り返されていた。

この場にいるガジェットの数は、およそ１０万。それが１０回で単純に１００万機のガジェットがこれまでに現れている事になる。

まるで本当に時間を巻き戻されているかの様な現象に、さすがの黒峰も頭を抱えたくなっていた。

「御剣が居りゃぁ何か取っ掛かりが出来そうなもんだけど…」

そう言いつつ、黒峰は右手の指を揃えて前に向け構え、その薬指と小指だけを曲げる。

それは子供が手遊びで表す銃の形。当然、黒峰はそんな心算でしたわけではない。

と、次の瞬間、黒峰の中指と人差し指から竜巻が奔った。

その竜巻が僅かに掠っただけでガジェット達は次々と爆散していく。

だが、これはあくまでも前座。前準備に過ぎなかった。

「あいつ任せってのも気にくわねぇから…なっ！！！」

そして、その台詞とともに、竜巻の中を一条の黒光が奔る。

それはまさに光速。限りなく光に近い速さで放たれた一撃は刹那の拮抗の後、確かにゆりかごの舳先を吹き飛ばした。

# １０章－４　クラナガン防衛戦線（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：１０章４話、お待たせいたしました。

『とある最強系主人公の超圧縮粒子砲（ビームキャノン）』

最強と最強が交差する時、物語が始まりません。

というか能力的に言えば冷蔵庫こと、垣根提督ですね。

（ここまで前置き）お久しぶりです。

今回はちょっとばかり主人公達とは無関係なところで開始。

警備隊員達の奮戦場面。ちょっとばかり練習もかねて書いてみました。

そんなことしてるから遅くなる？　はい。その通りです。

さらりと流されましたがレジアス・ゲイズ中将、暗殺されました。

死体は発見されていませんが、現場には大量の血痕。それがゲイズ中将のものと判明。

管理局の一大事に上層部大混乱。命令系統は碌に働いていません。

後釜は誰だの、現状への対処だので大わらわ。

まさかの再登場、チルル・パッソ一等空尉。

誰こいつ？　という方は、番外・３００万アクセス記念・その２原口、模擬戦をするの巻を参照の程よろしくお願いします。

しかしまぁ、原口の戦闘のあっけ無い事。

御剣や黒峰よりも無敵感が…

ちなみに、本来のモノ云々は大焦熱地獄に罪人が囚われる時間の事です。

大焦熱地獄に罪人が囚われる時間は半中劫、二千七百万年。

…気が遠くなりそうな時間ですね。その間ずっと極炎に焼かれては復活し続けるそうですよ。考えた人は確実にSですね。

まさかの黒峰攻めあぐね。
通常の攻撃ではダメージが通らない程のゆりかごの堅牢さ。
中にヴィヴィオが居るので、黒峰が手加減している所為も有りますが。
そして倒しても倒しても現れるガジェット達。
果たしてそのカラクリとは!!?
ちなみに、巻き込まれかねないので、なのはは後方待機してます。

漸く通った黒峰の攻撃。
しかし、それさえも無に帰す事態が起こる。
次回、『ゆりかご突入作戦』
お楽しみに。

## １０章－５　ゆりかご突破作戦

９月１９日　ミッドチルダ　クラナガン郊外　東部

「やった！！」

そんな声が俄かに起こる。
黒峰とゆりかごの交戦地点から１０ｋｍ後方。
声を上げたのは、本局航空隊の面々。
ゆりかご出現の報を受け出動したは良いものの、圧倒的なまでのガジェットの数の暴力に押されていた所へ黒峰が現れ、後方へ下げさせていた。

「あぁっ！！！」

と、今度は別の隊員たちの声から悲嘆の声が漏れる。
先程、確かに黒峰が吹き飛ばした、ゆりかごの舳先。そこが何事も無かったかのように元通りになっていた。
それは再生などと言う言葉で片付けて良いものでは無かった。
まるでフィルムをコマ送りにしたかのように、文字通り一瞬。
さも、攻撃など受けていなかったかと錯覚しかねない程の速度。
ガジェット達が現れる時と同様に前触れさえなく、時間が巻き戻っているかの様な現象。
明らかに自分たちより格上の黒峰が些かも突破口を見つけられない事実に、航空隊員達の顔に絶望の顔が色濃く浮き上がる。

「全員、航空支援砲撃準備！！！」

だが、その空気を凛とした声が吹き飛ばす。
航空隊員達の視線の先には、既にエクシードモードに換装したなのは。
その手に携えるのは『魔導師の杖』、不屈の心（レイジング・ハート）ＥＸ。

その姿を見た航空隊員たちも慌てて杖を構える。
真剣に、ひたむきに、ゆりかごを見つめる彼女の視線の強さに、かつて教導を受けた教導官のスパルタっぷりを思い出して寒気が走ったわけではない。断じてない。

「黒峰さん！　航空支援砲撃、行きます！！！　ガジェットは私達が！！！」

その声は確かに黒峰に届いた。
同時に、黒峰の意識は唯一つ、ゆりかごに集中する。ガジェットは慮外。今自分がすべき事を成す為に。
再度形作られる手銃。その照準は舳先では無く、ゆりかご、その中央部。
当然、ガジェット達が黙って見ている訳も無く。次々に黒峰に迫る。
竜巻の発生している黒峰の前方のガジェット郡は大破しても、側面からの挟撃は防げない。
粒子操作に集中している今、黒峰はいつも展開している粒子の自動防御を発動させていない。
しかし、黒峰の直近に迫ったガジェット参号は桃色の光条に貫かれ、爆裂四散する。
その後に続く色取り取りの魔力光による砲撃。桃色の砲撃以外はＡＭＦに減衰されながらも、それでも数本が1体のガジェットを破壊していく。

「行ぃぃぃ…けぇえええええ！！！！」

そして放たれる2発目の粒子砲。
粒子の竜巻が生み出した真空の中を、高密度に圧縮された黒峰の粒子が駆け抜ける。
奔った黒い閃光は確かにゆりかごのどてっ腹を撃ち抜く。が、そこまで。
この世に耐え切る防壁など存在せぬその1撃は、突如として出現したシールドに弾かれた。
しかし、それが魔法によって成されたならば当然でもある。
この世界の魔法とは即ち、エネルギーを構築式（プログラム）によって運用するモノ。
ならば、十分なエネルギーさえあれば、星を砕く一撃であろうと防ぐことは可能となる。
問題は、そのエネルギーの出所だが。

「だったらよぉ…！！　これなら…どぉだぁ！！！！」

果たして、黒峰はその真理に直感で至る。
中にヴィヴィオがいるからこそ抑えていたが、それではこの防壁は破れない。自身の全力を以って挑む必要がある。そう黒峰は判断した。
そして黒峰が取ったのは、先程とは異なる構え。腰溜めに掌を合わせ、粒子をそこへ集中させる。
今度はその掌の合わせ目を中心に旋風が巻き起こる。
森羅万象あらゆる物を？み込む空間の落とし穴。

「辰気収斂！！！　…『飢餓虚空魔王星（ブラックホール フェアリーズ）　極小（ミニ）』！！！」

以前、原口の結界内で使用したときと違い、仮にもし、今この場

で全力で飢餓虚空魔王星（ブラックホール フェアリーズ）を放てばミッドチルダが消滅するが故に、黒峰は威力と効果範囲を極限まで抑えたソレを発動させた。
周囲への影響を抑える為に、その効果範囲は黒峰の掌中から約５ｍ。最大の効果を発揮させるには、ゆりかごの至近距離で発動させる必要がある。
だが、それは何の問題も無かった。
後方からの航空支援でガジェットの群れは半壊。その合間を突っ切って黒峰はゆりかごに至る。
黒峰の攻撃を防ぐべく放たれたビーム砲、背後からのガジェットのミサイルやビーム。
その全てが黒峰の掌中へと吸い込まれていく。
そして最後に立ちはだかる件のシールドさえも薄氷の如く叩き割り、ついに黒峰はその掌をゆりかごの外壁に押し付けた。
その途端、空間ごと抉り取るようにゆりかごの外壁に大穴が開く。

「うっしゃ！！…なッ！！！」

しかし、それとほぼ同時、突然の内に黒峰は自身の体を捻じ切らんとせんばかりの圧力を感じた。

「ガァッ…！」

目の前が痛みのあまり、暗くなったり白くなったりを繰り返す。
骨から肉を直接剥がされているかの様な苦痛。骨が捻じ切れ、全ての間接があらぬ方向へと曲げられていく。
血液が逆流する。心臓が逆回しにされる。肺から酸素が放出され、二酸化炭素が取り込まれる。
一瞬とも永劫とも取れる時間の後、黒峰はゆりかごの傍から落下した。

急ぎ駆けつけ、落下した黒峰を何とか空中で受け止めたなのはだったが、その顔は蒼白だった。
その腕の中には有るのは、よく言えば絞られた襤褸雑巾と言った代物だった。
まず、人であるかどうかも一見では判別し辛い。
身に纏っていたであろう衣服は血に濡れ、今なお赤い雫が滴っている。
常人であれば、まず間違いなく見ただけで死んでいると評す有様。

「嘘…ですよね…」

なのはの口から零れ落ちたのはそんな台詞。
今、目の前にある光景を受け入れられない。そんな心情が吐露された言葉。

「黒峰さん…黒峰さん！　…黒峰さん！！　…黒峰さん！！！」

なのはの慟哭が、空に響く。

ＳＩＤＥ　黒峰

暗ぇ。体が重い。違う。体の感触が無ぇ。

「……さん……く…ね……ろ峰…ん！！！」

何かにすがるような誰かの声。あぁ、この声は。
答えてやろうと口を開いても、口から溢れたのはゴポッ、等と言う嫌な音。
あぁ、これではあいつが泣いちまう。
餓鬼の癖に、身の程知らずな重責を自ら背負う聞かん坊。
自分じゃどうする事も出来ねぇ事も自分１人でどうにかしようとする頑固者。
危なっかしくて見ていられない。だが、俺はそのプライドを傷つけずにあいつを守る術を知らない。
だから…俺は…こんなところで倒れてやれない！！

「…黒峰さん！　…え…これって…！？」

あいつの声が聞こえる…体が解けて行く様な。
あぁ、世界が広がる。今までよりも。自分がどこまでも広がる感覚。
これは…

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

黒峰であったものを抱えたまま動かぬなのは。
当然、それをただ放置するほど、ガジェット達は甘くなど無かった。
敵を排除すべく接近し、そのボディに備え付けられたビーム砲でなのはを撃つ。
茫然自失としているなのははそれに気づくのに遅れ、その身に襲い掛かるであろう衝撃に身構え、腕の中のモノを守るべく抱きしめる。
いかに重装甲のバリアジャケットを纏ったなのはであろうと、１０万を超えるガジェットの一斉射撃を受ければ唯ではすまないだろう。

と、そこで黒峰に異変が起こった。
なのはが抱きしめた所為か、その身が砂の様に崩れ落ちたのだ。
それに何より驚いたのは、当然なのは。自分が黒峰に止めを刺してしまったのではないかと、唯でさえ青白い顔をさらに蒼褪めさせる。
他所事に気を取られたなのは。その身を襲う光弾からその身を守る術は既に無く。
宙に咲く爆炎。過剰とも言える光弾の嵐に呑まれ、なのはは死さえも覚悟した。
…ところが、一向にその爆炎はなのはの身を焼かない。
響くのは轟音のみ。それもどこかフィルターが掛けられているかのようにくぐもっている。
目を開けたなのはの周りを取り巻くのは赤黒い粒子の渦。
そこを境に、爆炎はその熱を些かも通る事を許されず遮断されている。

「…黒峰…さん…？」

こんな芸当が出来るのは、なのはの知る限りではたった1人。
しかし、その相手は先程崩れ落ちてしまった。
思考がまとまらないなのはの前に粒子が渦を巻く。
地面と平行に巻き起こる渦がゆっくりと上に昇る。
最初に現れたのは足。そして順次に粒子は人の形を成していく。
そして渦の中から現れたのは先程と変わらぬ姿の黒峰だった。

「え…」
「ただいま。なのは」

呆然としながら、なのははその腕の中にある血塗れの管理局員の制服を見る。
否。今はもうソレは血塗れではない。ボロボロであることに変わり

は無いが、その服を濡らしていた黒峰の血液は崩れ落ち粒子となって宙に散って行く。

「身代わり…？」

「あん？　違う違う。ちゃんと俺は死にかけたってのただ、あのままだと体が使い物にならなくなってたんでな。粒子に食わせた」

「食わせた？」

「一か八かだったけどな。失敗してたら帰って来れずにミッドチルダの土になるところだったし」

あっけらかんとそんなことを言う黒峰になんと言っていいのやら、と言った風な表情になるなのは。

しかし、黒峰の言う食わせた、と言うのは言葉ほど単純な事ではない。

元々黒峰の粒子は周囲の魔力素を『喰らい』、魔力にして黒峰に還元していた。

これが黒峰自体を『喰らった』場合どうなるか。元々黒峰の魔力で構成されている粒子がその大元である黒峰を喰らってしまえば、その還元先を失ってしまう。

すると、粒子はそのまま黒峰を取り込み同化してしまったのだ。

いまや黒峰は粒子であり、粒子こそが黒峰でもある。

「さて、と。なんか出来る事も増えたみてぇだし。ちょっと行って来るぜ」

「あ、はい」

「それとありがとな、なのは。正直助かった」

黒峰はそれだけ言うと、光弾を弾き飛ばしながらガジェットに向かって行った。

残されたのは、なのはのみ。
今は如何なる心情か、その頬には朱が差していた。

「さぁてと！！！」

ある程度までガジェットに近づいた黒峰は、その両手を一旦合わせると軽く離す。
すると、そこには粒子の球体が浮かんでいた。
だが、ソレは今までのモノとは異なり、完全なる漆黒だった。
黒峰の粒子の色は赤黒。それゆえに今まで粒子で構成された物は基本的にその色だったのだが、これは違った。
光をも吸い込み離さないブラックホールの如き黒。
しかし、それはブラックホールではなかった。その証拠に、その球体の周囲の空気は小揺るぎもしていない。
だが、その黒さはまさにブラックホールのソレ。
見続ければ魂さえも吸い込まれて仕舞いそうなほどの漆黒。
そして、黒峰は再度手を合わせる。
すると、黒峰を中心にその漆黒が広がり、ソレは瞬く間にガジェット達を呑みこんでしまった。
漆黒の拡大はやがて収まり、風船が萎む様に元に戻っていき、残ったのは黒峰ただ1人。
先程までいたガジェットは1機たりとて残ってはおらず、僅かに漆黒に触れられたゆりかごの装甲はプリンをスプーンで刳り貫いたかのごとくあっさりと抉れていた。
が、そちらはまたすぐに直ってしまったが。

「なにやら、変わった事になっているな。黒峰」

と、そこに黒峰が聞きなれた声が頭上から降ってくる。
黒峰が見上げれば、そこに浮いていたのは金とエメラルドで出来た船。
御剣の『空翔(ヴィマーナ)け し黄金の船』だった。

「分かんのかよ、アレ」
「分かるとも。あのカラクリも、今のお前がどうなっているかも」

ヴィマーナの甲板に立ち、2人はゆりかごを見る。

「手を貸して欲しいか？」
「手を貸させてやるよ」

そう言い合い背を向け合う黒峰と御剣。
御剣の両手足には白銀の装甲が現れる。その名は『光狼(ベオウルフ)の咆哮』。

「狙うはゆりかご後方部、動力炉だ」
「OK。でもよ、さっきお前も見たとおりに壊れた場所はすぐ直るぜ？」
「問題ない。あれのカラクリの大本は動力炉だ。そこさえ潰せば最早修復などできんさ」
「あいも変わらず、何でも知ってるみたいな口の利き方だよな、お前」
「何を今更。それともこう言えばいいのか？　何でもなど知らん。知っていることだけだ、と」

軽口を叩き合いながらも、2人の目は真剣なまま。ゆりかごを見つめる。

「で、どうすんだ？　動力炉ってかなり奥だろ。さっきから攻撃し

てるが、あいつ滅茶苦茶硬いぜ？
突っ込んだら訳も分から無ぇ内にボロボロにされたしよ」
「そちらも問題ない。装甲の修復にお前が巻き込まれただけだ。
ソレには一瞬のタイムラグが有る。それ以上の速度で突っ込めば良いだけの事」
「了解。んじゃ、邪魔が増える前に行くか」

そう言った黒峰の視界にはまた現れたガジェット達。
しかし、そんなものが最早何の役に立つというのか。黒峰1人でさえ歯牙にもかけられなかったガジェットなど、御剣もこの場に加わった今、宙を漂う塵芥も同然の存在だった。

「では行くぞ。遅れるなよ」
「お前こそ付いて来いって…の！！！

ヴィマーナの甲板が御剣と黒峰が飛び上がった衝撃で大きく撓む。
天高く飛び上がり、2人は太陽を背に構えた。
御剣の頭上で組まれた、御剣のベオウルフの両籠手からは光が。黒峰の両腕からは粒子が放出され、それぞれの体を猛烈な勢いで加速させる。

「スゥーーーパァーーー！！！」
「イナズマァ！！！」
「「キィーーーーーーーック！！！！！！」」

御剣は右足を、黒峰は左足を突き出し、並んでゆりかごへ向かって行く。
2人の足裏は大気摩擦で赤熱し、周囲の空気すら紅く染め上げる。
その余波に触れただけで、ガジェットは軒並み爆散して行った。
そして遂にゆりかごに2人が衝突する寸前、ゆりかごと2人の間に

巨大なシールドが展開される。
…が、拮抗したのは一瞬。飴細工でも砕くかのようにいともたやすくシールドは貫かれ、2人はゆりかごに突入した。

「えいやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」
「てりゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

その瞬間、ゆりかごは衝撃に大きく撓み反り返ったかと思うと、突入した反対側から御剣と黒川が勢いもそのままに飛び出し、大地に激突した。
大地と黒峰、御剣の足の間に挟まれているのは巨大な赤い結晶体。それはゆりかごの動力炉の中枢だった。それがその形を保っていたのも僅か数瞬。
原形も留めぬほどに結晶体は2人に依って踏み砕かれていた。

「さて、これで進行速度は落ちたな。」
「おぉ、本当に穴が開いたままだ…で、なんでだったんだよアレ」
「あの不可解な修復のことか？　どうやら原口の能力の一端をスカリエッティは手に入れていたらしくてな。
大方、衛星軌道上にある2つの月からの魔力供給を結界で繋ぎ、前倒しで得ていたのだろう。
私達が動力炉を破壊した所為で、得た魔力を還元できずに失った、という訳だ。
あの不可解なまでの修復速度は結界を破壊された箇所に展開して、時間ごと巻き戻していたようだな」
「…だからガジェット共もあんなに出てきてたのかよ」
「生産ラインを加速させていたか、ガジェットが全滅するたびに格納庫ごと時間を巻き戻して復活させていたか、その両方か。いずれにせよ、もう済んだ事だ。
ガジェットを殲滅するぞ。その後ゆりかご内で狐狩りだ」

そう言った御剣の背後には大量の宝具が並ぶ。
それを横目で見つつ、黒峰もガジェットの残りを狩るべく粒子を操作する。

「また助けられた、か」
「何か言ったか、黒峰」
「いや、なんでもない。さっさと済ませてヴィヴィオ迎えに行こうぜ」
「ティアもな」
「結局こっちかよ。…さっきの大丈夫だったんだろうな」
「……多分」
「おい！！！」

## １０章－５　ゆりかご突破作戦（後書き）

あとがき（という名の言い訳）：１０章５話です。久しぶりの１週間更新です。惜しむらくは、このペースが維持できないであろう事。

黒峰無双からのまさかの瀕死！　からの復活！！　そして粒子化！！！

詰め込みすぎた感たっぷりですね。
粒子化した黒峰にはもう、物理攻撃は一切効きません。
常時トランザムってる００みたいなものです。

イーナーズーマーキィーック！！
ちゃんと２人でやってるので炎ですよ炎。無敵です。

かつて両親に裏切られた少年。
かつて部族を追われた少女。
未だ母の声を知らぬ少女。
彼らの思いは今、交差する。
次回「Ｐａｉｎ　ｔｏ　Ｐａｉｎ」お楽しみに

# 10章－6　Pain　to　Pain

時は少し遡る。
警備部隊がガジェットの対応に追われていたそのころ、第7廃棄都市区画には数人の侵入者があった。
いずれも揃いのボディスーツに身を包み、かつての高速道をひた走る。
ナンバーズ。Ｎｏ．９ノーヴェ、Ｎｏ．１１ウェンディ、Ｎｏ．１２ディード。そして彼女等を束ねるＮｏ．５チンク。
かつて重傷を負ったノーヴェとチンクだったが、Ｄｒ．スカリエッティの治療は間に合った様で以前と変わらぬ姿をしていた。
とはいえ未だ万全ではないのか、元々の機動力の問題か、チンクはウェンディのボードに乗っているが。

「しっかし、楽勝っスね。こんなに簡単にここまで進入できるとは。あの鉄屑共も役に立つっスね」
「そう言った物ではないぞ、ウェンディ。ヒトとは分かりやすい脅威にこそ対応したがるものだ。
我々5人よりも、大群のガジェットの方が脅威だ、と判断したのだろう。もしくは」

と、チンクはそこで言葉を区切る。
遥か前方、高速道の進路上に2人、上空に1騎。
互いの速度からすれば1分とせずに接敵するだろう。

「少数精鋭で私達を叩くつもりか」
「私ら相手に4人とは、なめてくれたもんっスね。とっとと蹴散ら

すとしますか」
「…待て。オットーから通信があった。奴らを指定ポイントに引き込み分断、あの竜は」
「（私が）」

唐突に開く投影モニター。
そこに映っていたのはルーテシア。その背後にはガリューが控えている。

「分かりました。では我等は転進、オットーの指定したポイントに向かう」
『了解（ッス）』

「ギン姉！　あいつら逃げるよ！」
「交戦を避けた…？　まぁいいわ。追うわよスバル。エリオとキャロは上空から哨戒して」
「でもギンガさん、罠の可能性も高いです。ただ追うだけじゃ」
「分かってる。でも、だからと言って、ここを素通りさせるわけにはいかないわ。
罠だとしても、行くしかないの。大丈夫。警戒はするから」

そう言ってギンガとスバルはナンバーズの後を追う。
が、数分の後、2人との連絡は途絶してしまった。

「（スバルさん！！！　ギンガさん！！！）…エリオ君駄目。繋がらない。
広域ジャミングの所為か、原口さんとも連絡が取れないし」
「やっぱり罠だったんだ…戻って原口さんに直接伝えないと」

「（させない）」
「「！！？」」

不意に脳裏に響く思念通信。
こちらの受信設定を無視した一方通信。その事に驚き気を逸らした2人の体を、断続的に放たれる紫の閃光と共に猛烈な衝撃が襲う。

「フリード！！？」

衝撃の元は攻撃を避けようとしたフリードの急加速に依る物だった。
既に展開していた騎英（ベルレフォーン）の手綱モードに依って、竜種の身にさえ余る程の強化を受けていたフリードの加速は凄まじく、鞍に座っただけのエリオは勿論の事、手綱を持つキャロでさえ振り落とされないようにしがみ付くのが精一杯だった。

「フリード！！！　上空（うえ）へ！！！」

このままでは、遅かれ早かれ逃げ切れなくなるとふんだキャロがフリードに指示を出す。
攻撃の元は地上であり、一定の高度を保つことで命中精度の低下、射角補正によるタイムロスを狙ったのだ。
その判断は間違ってはいなかった。それを目的に相手が攻撃してきたのでなければ、だが。

「キャロ！！！　危ない！！！」
「えっ？」

フリードが上空へ逃げる為に、大きく翼を広げ羽ばたこうと停止した一瞬。

エリオが視界の端に捕らえたのは、棚引く赤いマフラー。
咄嗟にエリオが翳したストラーダから伝わるのは、手が痺れる程の衝撃。
エリオがその苦痛に顔を顰めながらも自らのデバイスに目をやれば、ストラーダがその穂先で受け止めていたのは漆黒(くろ)い虫人の左腕部から生えた鉤爪。
続く右拳での強烈な1撃にエリオは耐え切れず、フリードの上から叩き落されてしまった。

「そんな、エリオ君!!!　きゃっ!」

叫ぶキャロの声は、別の理由でまた悲鳴をあげた。
腕を掠めたのは画鋲に翅と肢の生えた虫。気付けばキャロの周りは召喚虫インゼクトに囲まれていた。

「ケリュケイオン!」
「Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　Ｒａｙ」

だが、キャロもただやられるだけでない。
生み出した2つの翼状スフィアから放たれた光弾は次々にインゼクトを打ち落としていく。
その数が2桁に達しようとする頃、地上では落下から体勢を立て直し着地したエリオと漆黒(くろ)い虫人、ガリューがその刃を交えていた。
仮に観戦者がいたならば、その攻防には息を呑んだことだろう。
目にも留まらぬ高速戦闘。常人に見えるのはただ、槍と爪が交差した事を示す火花のみ。

「速い…でも黒峰さん程じゃない!!!」
「…」

仮にガリューに人語を発することが出来るならば、あんな怪物と一緒にするな、とでも言っていた事だろう。
以前の地下水道での戦闘を経て、黒峰はエリオに徹底的に高速戦闘のノウハウを叩き込んでいた。
元々エリオのデバイス・ストラーダは突撃槍型（ランス）であり、高速で移動して一瞬の交差に全力を込める事は得意分野と言っても良かった。
が、如何せんエリオの体は未発達であり、その膂力は将来得られるであろうそれには遠く及ばない。
それでは相手も高速戦闘を得意とする場合、競り負けてしまう事は想像に難くない。
そこで、黒峰は唯一つの事を徹底してエリオに教え込んだ。
ソレは――

「常に相手の上に立て！！！」

当然、それは力量の事ではない。単純な位置エネルギーの利用である。
高所からの攻撃には全体重と落下の勢いが乗り、相手の突撃の威力は重力によって減衰される事となる。
交差した後は残った勢いとブースターの加速を利用して再度上空へ舞い上がれば良い。
陸戦魔導士専用デバイスでありながら、ブースターを搭載したストラーダだからこそ出来た戦闘法。
仮に相手が飛行技能を持っていようと、持っていないならば尚更に威力を発揮できるこの戦法。
だが――

「くっ！！」
「…」

――先に苦悶の声を漏らしたのはエリオだった。
対してガリューは…元々表情と言うものは無いが、ダメージを受けている様は全く見られない。
ガリューの身を包む昆虫特有のクチクラで構成された外骨格には傷一つ無く、悠然と廃棄都市区画のビルの屋上に立っている。
一方、エリオはと言えばバリアジャケットにはいくつか有効打が通った事を示す鉤裂きと、疲労を示す息切れ。
両者のダメージの差は歴然。
間違いなく先程まで優勢だったのはエリオ。ガリューが攻撃できたのは数える程でしかない。
しかし、この結果が両者の実力の差を示していた。
そも虫人は、虫特有の外骨格と、ヒトが持つ内骨格とを併せ持つ。
今のエリオの力では硬い外骨格の鎧を貫けず、強靭な内骨格から放たれる攻撃を防ぎきれない。
このままでは勝てはしない。だが、たった1つだけ、エリオは持っていた。
この状況を覆す鬼札（ジョーカー）。ストラーダに秘められた第3形態。
だがしかし。ソレはエリオの手に、否、身に余るモノだった。
その第3形態はエリオの体が出来上がってから使用する事を前提に搭載されており、今使用すれば将来、もしくは即座にエリオの体に障害さえ残りかねない程。
その存在は今回の戦いに先駆けて御剣から聞かされていた。だが、それは困ったら使え、と言う様な内容ではなく。寧ろ困っても出来れば使うな、と言った内容だった。
――30秒。それ以上は安全が保障できないとは、御剣の弁。
だが、逆に言えば。30秒までなら問題はないと言う事。

「ストラーダ!!」
「Eine Form?nderung. Sturm und Drang（モードチェンジ。疾風怒濤）」

まずエリオがすべき事は舞台作り。
第3形態の能力は聞いている。ならば、それを用いて一撃で決められる状況を作る。
装甲が展開して露出したタービンは、周囲の大気を呑み込み圧縮、後部のブースターから轟音と共に吐き出して行く。
それを見据え、ガリューも自らの爪を大きく、鋭く変えて作り出したのは手刀を覆う様に張り出した爪刃。
西部劇のガンマンの様にエリオとガリュー。
先に動いたのはエリオ。ストラーダの排気音が高まり、耳を劈かんばかりになった瞬間、ストラーダの穂先とガリューの爪刃は互いに激突していた。

「…っ！　ケリュケイオン！」
「Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　Ｒａｙ」

一方。エリオという優秀な前衛を欠いたキャロはじりじりと、しかし確実に追い込まれつつあった。
打ち落としても打ち落としても、インゼクトは次々現れ、キャロを襲う。

「ねぇ！　聞こえてるんでしょう！！」

キャロは、この戦域の何処かに居るであろう紫の少女に声をかける。

「目的を教えて！　もし、それが悪い事じゃないなら私達にも協力できるかもしれない！！」

それは、受け取り様によっては酷く傲慢な物言いでもあった。
もちろん、キャロに悪意など無い。ただ、キャロは信じていたのだ。
かつての自分がそうであった様に。今、絶望の只中に居ようとも、
誰かの差し出す手で人は救われるのだ、と。

「…無駄」
「えっ！？」

だが、それは既に救われた者の言葉に過ぎなかった。
唐突な声と共に現れたのは、ガジェット弐型に乗ったルーテシア。
その周囲には幾本もの紫の小刀が取り巻き、その切先はキャロに向けられていた。

「貴女の事はクアットロから聞いて知っている。
類稀な程の竜召喚の力を持ちながら、それ故に部族を追われた」
「…そうだよ。でも、私は今、幸せ。フェイトさんに保護してもらって、エリオ君と出会って、ここに居る。
昔は…絶望していたと思う。世界を、里の皆を、そしてこの力を憎んでた。
でも、今は違う！　貴女だって幸せになれる！　その為の手伝いだったら、私！！！」
「…やっぱり、貴女と私は違う」
「…！？」

困惑するキャロ。だが、ルーテシアはそれを意にも介さず召喚を行う。
中空に描かれたのは複数の召喚陣。その１つ１つから現れたのは、巨大な甲虫。
それは以前、地下水道を崩落させたルーテシアの召喚虫、地雷王。

「貴女には絶望があった。でも、私にはそれさえない。
…そう。私はそれを知りたい。感情を、この心の欠けた破片を取り戻したい」

淡々と。感情の色さえ感じさせずに紡がれる言葉。
ルーテシアの背後には、羽ばたき飛ぶ地雷王の群れ。その双角には雷光が奔り、主人の命を待っていた。

「だから、貴女は邪魔なの」
「フリード！　ブラストレイ！！！」

これ以上は無いほどの拒絶の言葉。
同時に、地雷王達の双角からは雷撃が放たれた。
それを迎え撃つ為、咄嗟にキャロはフリードへ指示を出す。
それを受け、フリードの口腔に魔力が充填されていく。
魔力は炎熱変換され、フリードの前方に巨大な火球が生み出される。
その熱は大気を焦がし、膨大な熱量を振り撒き、キャロの視界を朱に染めた。
その火球は急激に集束され、色は赤から白へと変わる。

「ファイア！！！」

主の命を受け、火球を解き放つフリード。
時間にして僅か1秒。だが、その遅れは致命的とは言えないまでも、キャロを不利な立場に追いやった。
雷撃と火球の交差点はお互いの中間では無く、フリードの目と鼻の先だった事。
その所為で、爆発の際に生じた閃光がほんの一瞬とは言え、キャロとフリードの視界を奪った事。
原因があるとすればそこだろう。

雷撃が相殺されたと見るや、突撃してきた地雷王達の突進をフリードはかわし切れず。
その衝撃で、キャロは中空へと投げ出されてしまった。

「キャロ！！！」

が、中空での爆発を見ていたエリオが咄嗟にキャロを救い上げ、廃棄都市区画のビルの屋上に降り立った。

「キャロ、大丈夫？」
「う、うん。ありがとうエリオ君」

キャロの無事を確認し、安堵したかの様に微笑むエリオ。
戦場でありながら、何処か微笑ましい雰囲気。
だが、それを目にしたルーテシアの表情は硬く、その目にはまぎれも無い動揺の色が浮かんでいた。
果たして。心が無い、少なくともそう思い込んでいる少女の一体何が揺れ動いたのか。
しかしながら、この場にそれを指摘する者は居らず、ルーテシア自身にも、その自覚は無かった。

# １０章－６　Ｐａｉｎ　ｔｏ　Ｐａｉｎ（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：大変遅くなりました…１０章６話でございます。

原作との差は数人の登場人物の差と、戦闘描写の違い。
なのに何故こんなに時間がかかったかと言えば、ルーテシアの心情考察故です。
この子、原作のこの時点では殆ど喋らず、声の抑揚も僅かにしか無いのでそれを文章で表現しようとすると意外と難しい…
その結果少しばかり先走って説得入りましたが素気無くお断り。
しかし、この話を書く為にＴＵＴＡＹＡでＤＶＤ借りて見ていたのですが…この子がどうしてＶｉｖｉｄではあんな風になっちゃったんだろうか…いや、明るいのが悪い訳では無いんですけどね。
あれはあれで好ましいですし。

ナンバーズＮｏ．８、オットーの結界で分断されたフォワード陣。
２ＶＳ４の窮地に立たされたギンガとスバル。
機人対機人の戦いが今、幕を開ける。
次回『Ｓｉｓｔｅｒｓ』お楽しみに。

# 10章－7　Sisters

第7廃棄都市、その一画。その一帯はまるで何かに囲われているかの様に、現状の喧騒からは切り離されていた。
太陽が中天を過ぎた頃だろうに、辺りはやや薄暗く、ここが常の空間ではない事を告げる。
ふと、静寂の中に微かに甲高い音が響く。それは硬質の物同士をぶつけた様な。
そんな音が数度鳴ったかと思えば、静謐を打ち破るかの様な轟音が響き、ビルが1つ崩れ落ちた。
崩壊したビルから伸びたのは2本の光帯。
青と紫のそれらの先端をそれぞれ駆けるのはスバルとギンガ。
さらにそれを追う様に伸びたのは黄の光帯。
そしてその先端を奔るナンバーズNo.9ノーヴェ。
ナンバーズNo.11ウェンディの放った光弾がギンガに向かい、ギンガは走りながらもシールドでソレを弾く。
が、そちらに気を裂いた為か、それとも元々の速力の差か、ギンガはノーヴェに追い付かれてしまった。
ノーヴェの脚に装備された、ジェットエッジの後方部から焔が吹き出る。
それは蹴りを加速させる為にジェットエッジに備え付けられた、ジェットノズルからの噴射推進。
シールドで受け止めたギンガをやや後退させる程の威力に加え、ジェットエッジの足首部、ブレイクギアが高速回転してギンガのシールドを擦過し火花を散らす。
受け止めていたギンガが何かに気付いたように視線をノーヴェの背後にやれば、迫るのは誘導性の光弾。

展開したシールドを迂回する様に奔ったその弾丸は、中空に爆炎の花を咲かせた。
が、爆発の残滓として漂う白煙から飛び出したのはギンガ。
その身を包むバリアジャケットに僅かな焦げ付きや、爆炎に照らされた事に起因するだろう肌の赤みこそ在るものの、その身に目に付く様な傷は無い。
その事実に怯んだのか、僅かに速度の落ちたノーヴェを瞬く間に追い上げると、先程の仕返しとばかりに中段回し蹴りをノーヴェに叩き込む。
が、それこそ焼き直し。
先程のギンガ同様に、ノーヴェはシールドを展開してギンガの蹴りを防いだ。
そうした一進一退の攻防が繰り返される。
　転じてスバルはと言えば、ナンバーズＮｏ．１２ディードに足止めを受けていた。
ディードの戦法は典型的なヒット&アウェイ。が、その攻撃は必ず死角から放たれ、スバルが反撃する時にはディードは既にスバルの間合いに居ない。
瞬間的な加速を頻繁に繰り返し、スバルを翻弄。加えてその手に持つ双剣ツインブレイズが更に曲者だった。
　一見ただの紅い直剣の様でありながら刃の弾性を自在に変化させ、刀の様な反りを以って斬撃を放って来るかと思えば、曲刀（ショーテル）の様にスバルのシールドを掻い潜って来る。
更には刀身を鞭刃に変え、スバルの腕を絡め捕ろうとも。
刻一刻と変化する相手の手練手管にスバルは疲弊し、未だ有効打こそ無いものの、それも時間の問題。
スバルとギンガがこの空間に囚われてから、早１０分が経過しようとしていた。

「（ディードは、そのままセカンドを足止め。可能なら倒して良い。

ウェンディは距離を取ってノーヴェを援護して。ノーヴェ、相手は格上だと思って。油断せずに）」

「順調だな」

「姉様、お帰りなさいませ」

「こちらの手筈は整えた。まぁ、後詰程度だが十分だろう。ノーヴェ達の方も上手くやっている様だな」

一連の戦闘を離れた場所から見つめて居るのはナンバーズＮｏ．８オットー、ナンバーズＮｏ．５チンクの２人。

オットーが倒されてはこの結界が消え、折角の分断策が水泡と帰す。それを防ぐ為にも、病み上がりで本調子ではないチンクが護衛として付いていた。

「彼女達の連携は厄介です。今でこそ中衛（センターガード）を欠いているものの、突破力の高い前衛（フォワード）、機動性に優れた遊撃（ガードウィング）、究極召喚に依る殲滅能力を持った最後衛（フルバック）。

連携の練度も高い事は、以前の地上本部襲撃の際に判明済み。

ならば、徹底的に分断して各個撃破が最善。経験で一日の長を持つファーストには念の為２人掛りですが」

「…確かに。この盤面ならば間違いなど起こりようも無い、か」

そう口にしつつも、チンクの顔色は優れない。

それは彼女本人にも説明の付かない、言うなれば戦場の空気に混じっている違和感の様なものを感じているからだった。

「何か気になる事があるのですか？」

「否、ありはしないとも。この世界に於いては我等の勝利は揺るぎはしまい」

オットーはナンバーズ最後発組が故に、Ｄｒ．スカリエッティが手

に入れた最新技術を組み込まれていた。
空間操作。原口の持つ異能の一端であるソレは、オットーの先天固有技能『光渦の嵐（レイストーム）』、その力の一端である対象捕獲技能、『プリズナーボックス』とかなり高いレベルで噛み合い、結界さえも凌駕する『異界』を生み出す程にソレを昇華させた。
対象の檻外への移動や逃走を、物理と魔力の両面で阻害して閉じ込めるのは当然の事、その破壊さえも常の物では不可能とし、仮に彼の艦載兵器アルカンシェルを使用したところで、露程の損害をこの異界を構成する壁には与えられないだろう。

「そう。我等に敗北は無い。何せ」

チンクが不意に右手を前方に翳す。
その視線の先には在るのは、ディードの猛攻から逃れる為にビルとビルの間、路地を走るスバルの姿。

「ここは最早、我等の狩場なのだから」

そう告げると同時、チンクは指弾を打つ。
それに呼応したのはスバルが身を隠すビルの柱、その内部に埋め込まれた鉄筋。
チンクのＩＳ、ランブルデトネイター。余りに巨大な金属塊の場合爆破に必要な力が拡散し、爆発に到らない為サイズ制限があると言う欠点こそあるものの、その威力はチンクの姉妹の１人、ナンバーズＮｏ．１０ディエチの持つ固有武装、イノーメスカノンから放たれる砲撃に勝るとも劣りはしない。
長年の放置状態による劣化断線を起こしていた鉄筋はそのサイズ制限に当てはまらず、ビルを構成する柱が数本まとめて爆裂した。
そして、支えを失った巨大なコンクリートの塊は当然の帰結として、スバルの身に崩壊したビルの瓦礫という形で降り注いでいた。

「スバル！！！」

声を放ったのはギンガ。妹の窮地に駆けようとするも、ノーヴェとウェンディに阻まれ其れは成らず。

倒れこむビルは正に巨大。狭い路地の両側からスバルに向けて倒れこんでいた。

スバルが居るのは路地の丁度中ごろ。両端からスバルを覆い込む様にビルは崩れて行く。無論、それは偶然等では無くチンクが意図的に誘発した事ではあるが、そんな事はスバルにとってはどうでもいい。

如何にスバルが戦闘機人といえど、2棟の高層ビルの総重量、実際には3～4フロア分程だろうが、それでも身に受ければひとたまりも無い。

だが実際問題として最早、スバルに逃げるという選択肢は無いに等しい。

それならば。

「やるよ、マッハキャリバー！　そして！！！」

ゥオオオオオオオォォォォォォォ…

周囲にスバルの左腕から放たれる遠吠えが響く。

正確には、その左腕に装備した腕甲から、その遠吠えは響いていた。

次の瞬間、その腕甲が展開されてスバルの左肩まで覆う狼の意匠の施された腕鎧へと変貌した。

「力を貸して！！！　『偽・光狼（ベオウルフ）の咆哮』！！！」

今度こそ。空間全体が振動しているのではないかと錯覚するほどの轟音が響く。

ソレは歓喜の雄叫び。封じられていたその牙を、主の為へ敵に突き立てる事が出来る、と。
響く轟音の中、構えを取ったスバルの背に翼が展開される。
その色は鮮烈な蒼銀。スバル本来の魔力光とは異なる色。

「ＩＳ！！　発動！！！」

スバルのＩＳ、『振動破砕』。
それは四肢の末端部から目標の物体に振動波を送り、共振現象を発生させる事によって対象を粉砕するモノ。
そして、光とは粒子であり波である。
『偽・光狼の咆哮』は元になった宝具と同じく、魔力を光に変換して装着者の攻撃力を上昇をさせるもの。
しかし、それを裏返せば、物理的にモノに干渉できる光を放っていると言う事。
そして前述の通り、光とは波でもある。
ならば、物質に影響できる光を放つデバイスをスバルが使えば、物体と共振する光を放つことが出来るのは自明の事。
スバルが得たのは唯の遠距離用の魔法ではない。そんな生温(ぬる)いものでは決して無い。
触れるもの全てを粉砕し破砕し滅砕する狼王の牙。

「『滅狼(フェン)の…」

今なお放たれる雄叫びは対象の振動数を測る為のソナー。
ただ主の敵を滅する為だけに。それだけの為に生まれてきたデバイスは、その使命を全うすべく全力で主の要望に答える。
立ちはだかる障害を、主の邪魔となるもの全てを打ち砕く為に。

「咆哮(リーーーール)』！！！！」

そして、スバルの双掌から蒼銀の光条が放たれた。
スバルを圧殺せんと迫るビルの瓦礫は、その光に触れた端から罅が侵食するかのようにその全体を覆い、砂のように崩れ落ちて行く。
スバルの身の数十倍はあろうかという瓦礫でさえ、拮抗出来たのは数瞬。咆哮に依って振動数を割り出されたが最後。飴細工の如く砕き散らされた。
物理的な障害であれば、如何なるモノであろうとその1撃の前には意味を成さない。
それがスバルの新しい力、『滅狼(フェンリル)の咆哮』。
ビルの瓦礫など、初めから無かったかの如く砕き散らされ、後に残るのは微細な塵のみ。
それらは高圧の光が通った事で膨張した空気が巻き起こした暴風に吹き散らされ、スバルの身を汚す事は無い。
そして、瓦礫を砕ききった『滅狼(フェンリル)の咆哮』はと言えば、そのまま異界を形成する壁、『プリズナーボックス』の天井部に激突していた。

「…驚いたけど、無駄」

そう呟くオットーの言葉通り。
如何に物理的な威力があろうとも、あの壁には何の意味も無い。
ここは『異界』。外のミッドチルダとは異なる世界だ。
世界を隔てるのは物理的な壁等ではない。
その壁を越えられるのは物理ではなく、術理。理路整然とした法則に基づいた技術。
故に『滅狼(フェンリル)の咆哮』はその壁を砕けない。

「まだ…まだ!!　『偽・光狼(ベオウルフ)の咆哮』!!!」

だが、スバルは『滅狼(フェンリル)の咆哮』を納めない。

それどころか絞っていく。光波の照射点を一点に。

「…無駄だって言うのに。理解できない」

オットーは自らの視界にあるコンソールを見やる。
そこにあるのは『プリズナーボックス』を制御、管轄する為のプログラム。
そこに示される数値は、あの攻撃が『プリズナーボックス』に負荷を与える事は無いという事を示していた。
だが、天に走る光柱は途切れず天を穿つ。
妨害しようにも、あの攻撃の威力は凄まじい。
精密機械である戦闘機人にとっては掠めただけで致命傷になりかねない。
ならば、このまま自滅を待つ。あれほどの攻撃、際限無く放ち続けられる筈も無い。
そう思案したオットーは淡々と、冷静に言葉を紡ぐ。

「ディードはファーストの方に回って。セカンドは放って置いて良い。今の内にファーストを」

「（了解）」

オットーの判断は概ね正しかっただろう。
自らの能力であるが故に、あの攻撃では『プリズナーボックス』は破れない。
その確信が有った。しかしてその数秒後、オットーはその目を疑う事になる。
『プリズナーボックス』その頂上部、即ち光柱が当たっている場所に僅かながら亀裂が入っていた。

「そんな…馬鹿な！」

常のオットーには有り得ぬほどの激昂。
自らが絶対の信を置いていた能力が、有り得ぬ事で破られようとしている。

「（なんだか知らないけどさ）」

不意に聞こえてきたのは標的、タイプゼロ・セカンドの声。
戦場を把握する為に撒いて置いたカメラとマイクが、偶然その声と映像を拾っていた。
そのモニターに映るのは、不敵な笑みを浮かべたスバル。

「（もう、私の前には何も立ち塞がらせない）」

その時スバルの脳裏に蘇っていたのは1週間前、地上本部襲撃の際の事。
自分の非力で仲間を、大切な相棒を失った。
悲しかった。悔しかった。どうしようもない程に。
だが、それで悲嘆にくれて何になる。
失ったならば取り戻せば良い。その為に、自分の前に立ち塞がる一切合切砕いて進む。

「（超えられない壁は砕いて進めば良い…！
誰にも邪魔なんて…させるもんかぁ！！！）」

更に光量を増す柱。
指向性を持っているとはいえ、その制御は幅を持たせる為に敢えて完全ではない。
そして、その漏れ出た光はいまやスバルの周囲全てを砕き散らしていた。

まさに爆心地と言っても過言ではないだろう。
其れ故に。この帰結はある意味当然でもあった。

「…え？」

甲高い音を立て、スバルの左拳から何かが崩れ落ちる。
と同時に光柱が止んだ。周囲に響いていた咆哮はもう、聞こえない。
崩れて落ちたのは『偽・光狼（ベオウルフ）の咆哮』、その装甲。
過ぎたる焔は身を滅ぼす。そうならない為に御剣があらかじめ仕込んでいたリミッター。
スバルの骨格フレームに悪影響が出る前に、『偽・光狼（ベオウルフ）の咆哮』が停止すると言う。
『振動破砕』はその名の通り、振動を放つ事でその破壊力を生み出す。
ならば、その発振源はどうか。如何なる物をも砕く1撃を放つ媒体は。
スバルは元より、『偽・光狼（ベオウルフ）の咆哮』とてその為に生み出されたもの。
一定以上の耐性は当然持っている。
が、今回は少々勝手が違った。それは1撃必殺の技故に、長時間の連続使用を想定していなかった事。
車のエンジンで言うところのオーバーヒートに至った『偽・光狼（ベオウルフ）の咆哮』は自己と、何よりも己のマスターを守る為に一時的な休止状態に入ったのだ。

「あ……」

しかし、そんな事は今関係無い。
スバルが思ったのは、またか、と言う思い。また自分は届かないのか。

この拳は、手は、自分の欲する物に届きはしないのか。

「よく言ったね」

と、スバルに向けて声が降って来たのはその時だった。
と同時に、天上の壁が罅割れていく。
一条、二条、四条。倍に倍に増えていく罅割れは、何時しか全天に広がり。
硝子の砕けるような音と共に粉々に砕け散った。

「超えれない壁は砕けば良い。うん。なかなか好感の持てる台詞だね。
まぁ、壊せる壁かどうかは置いておいて、だけど」

スバルの頭上。先程まで光柱が当たっていた場所に立つのは、これと言って特徴も無い管理局員に支給される制服を纏った男。

「原口…さん」
「うん。僕だよ」

そう言うと、原口はスバルの元に降りて来る。
いつもの様に超然と、飄々とした態度は、ここが戦場だと言う事を忘れさせる程。

「しかし、正直助かったよ。この結界、基盤は僕みたいだけど構成が病的なまでに遊びが無くてね。
取っ掛かりを見つけるのに難儀してたんだ」
「じゃあ…あたしは役に立てましたか…？」
「うん。立ったよ」
「よかっ…た…」

それだけ言うとスバルは糸の切れた操り人形の様に倒れこむ。
原口はそれを受け止めると、とりあえずその場に寝かせておく。
大量に魔力を使った事による一時的な昏倒。スバルならば2、３０分もあれば回復するだろう。

「さて、と」

そう呟いた原口の姿は一瞬で掻き消える。
が、次の瞬間にはその様子を伺っていたオットーとチンクの背後に現れていた。

「空間操作、か。確かに技術の大本として、ミッドチルダには次元航行技術があるからね。
僕等３人の中で一番再現しやすいのは僕の能力だろうけど」

そこまで言った原口を背後から襲ったのはノーヴェ。
自らの敬愛するチンクに危険が迫ったと判断して、すぐさま駆けつけたのだ。
だが、その攻撃は空しくも、原口を小揺るぎすらさせられない。
『箱庭（はこにわ）・八獄（はちごく）其の壱、等活（とうかつ）地獄』。
それは、物理で破れぬ真性の術理の壁。

「邪魔」

原口がついと視線を向けるだけでノーヴェは巨大なハンマーで殴られたかの様に弾き飛ばされ、ビルの壁面にめり込まんばかりの勢いで叩き付けられる。
しかも、それだけに止まらず、そのビルの壁面からは黒、と言う言葉だけでは表わし切れない程に漆黒を湛えた縄がノーヴェの動きを

拘束した。

「『箱庭（はこにわ）・八獄（はちごく）其の弐、黒縄地獄（こくじょう）』。

無駄な抵抗はしない方がいいよ？　その縄の元、縒り合わさってる糸1本1本が『世界』だから。

力じゃ絶対に千切れない。それを引き千切る前に、君の体が引き千切れるのが先だね」

それだけ言うと、原口はノーヴェに興味を失ったかの様に、最早そちらを一瞥もしない。

原口の視線の先にいたのは、オットー。だが、その視線に割り込み、更には指に挟んだナイフをそのまま投擲する影。

チンクだ。だが、そのナイフは原口の体を貫く事はおろか、触れる事すら適わずに空中で静止する。

だが、それもチンクにとっては織り込み済み。

チンクが指弾を打つと同時、原口の視界は真っ白に染まった。

「…ん～…やるね」

その間ほんの2、3秒。その間にチンク、オットー、更にはギンガと交戦していたウェンディ、ディードも姿を消していた。

「でも、さ」

そう言うと、原口は拍手を一つ打つ。

瞬間、その合掌を基点に透明な膜の様な物が広がっていく。

それはビルをすり抜けて、原口を中心に瞬く間に広がり、凡そ直径10ｋｍ程のドームを生み出していた。

そのドームが1度だけ胎動するかの様に震えると、原口の眼前には姿を消したはずのナンバーズが現れていた。

「な…」

絶句し、目を白黒させるナンバーズを代表するかの様にチンクが声を漏らす。

自分達は逃走した筈なのに、何故またここに戻っているのか。散開して退却した筈なのに何故全員まとめてこの場にいるのか。

「君達、ゲームやった事ある？　ＲＰＧとかさ」

そんな反応は予想していたと、当たり前の反応だと言わんばかりに、原口はナンバーズの反応を意にも介さず口を開く。

「大事なイベント戦、それこそラスボスとかでにげるってコマンドを使っても逃げられないってのはお決まりだよね。

でも、その気になったら、仲間の１人か２人を犠牲にすれば逃げれる筈だよね。実際全滅したら教会言ってやり直し、とかもあるわけだし。

仕様だから？　そんな無粋な事は言ったら駄目さ。

まぁ、ラスボスに限らず雑魚戦でもそうだけど、戦うのはもちろん、逃げるのにもある程度の実力っているよね。

しかしまわりこまれてしまった！　ってね。

さて、柄にも無くペラペラ喋ったけど。何が言いたいかというとさ、君達、僕から逃げれるだけの実力、あるの？」

その台詞を聞いた途端、弾かれる様に反応した者が居た。オットーだ。

原口の身を包む結界を破壊しなければ自分達に勝利は無く、それが出来るのはまがりなりにも、空間操作の能力を持っている自分だけ。

そうオットーは判断したのだ。

出来なければ、などといった後ろ向きな考えは持たない。
ナンバーズ後発組であるオットーは感情が薄い。そう調整されたのだから当然だ。それにオットーは疑問を持った事はない。
だが、兵器として作られたとしても、不要だと断じられようと、その胸に宿る思いは誰から与えられたものでもなく。
自らの半身と言っても過言ではない、同じ遺伝子から培養された、言い換えれば血を分けた妹たるディード。
ディードだけではない。この場にいてもいなくても、オットーには姉が居る。妹が居る。
大事な者を守る。その強い意志は奇跡さえも起こし得る力となる。
一瞬で展開された膨大な投影モニターに表示されるプログラム。その文字1つ1つが原口の結界を、完全不可侵の『世界』を侵し、数瞬の後に砕ききった。

「…あれ?」

硝子の砕ける音と共に聞こえたのは、そんな間の抜けた声。
その瞬間、その場に居たナンバーズは一斉に攻撃した。投じられたナイフは確実に原口の体に命中し、それに続いた砲撃も、伸びた鞭刃も、原口の身を捕らえる。
そして巻き起こったのは、原口が立っていた場所から後ろのビルの屋上が跡形も無く消し飛ぶほどの爆発。
絶対の鎧を纏っていたと言う油断。その意識の隙を突いた攻撃。これ以上無いほどの連携で放たれた絶技。
それを受けては原口も

「…で?」

――等と言う事は無く。
爆炎さえもその身を焦がせず。その肌にはかすり傷1つ無く。

先程と何も変わらぬ姿で、原口はそこに居た。

「馬…鹿な」

その場に居た全員の言葉を代弁してチンクが言う。
有り得ざる事態。絶対防御は砕かれた。それは間違いない。純然たる事実。
では、目の前で起こっているのは一体どういう事なのか。

「…うん？　あぁ、気にしなくていいよ。君たちが弱いとかそういう事じゃないから。
目の付け所は良かったと思うよ。でもさ」

そう言うと原口は天を指差す。そこにあるのは原口が展開した結界。
シャボン玉の様に色彩を変え、今尚そこに有る。

「ここは僕が作った『世界』。さて、問題。一般的に、世界を作った存在を何て呼ぶでしょうか？」

――世界を創造した者。
――天と地を分けた者。
――国土を産み出した者。
――その身が大地となった者。
それらを、人は総じてこう呼ぶ。

「神…」

と。
今、この世界における創造神とは、原口である。

それ故、自動的にこの世界の最高位は原口であり、それ以下の者にその身が侵される事は無い。
その身に宿る神性は紛う事無く最上。
例え御剣であれ黒峰であれ、容易く原口を傷つける事は適わない。

「そう。だからまぁ、そこの君の結界はあくまでも『異界』。結界の領域は超えているけれど、世界には及ばない」

あくまでも淡々と、誇る事さえ無しに原口は告げる。

「さて」

原口は右手を左から右へと水平に1扇ぎする、と。
半球状に展開されていた結界が強固そうな立方体へと変化した。
更に、原口の周囲に薄い膜が張られ、即座に見えなくなる。

「『箱庭(はこにわ)・八獄(はちごく)其の壱、等活(とうかつ)地獄』。
これ作ったのも、もう5年前か。いい加減に型遅れだし、新調するにはいい機会だったかな。
君たちの失策は…強いて言うならここを作ってる結界を壊すのを怠った事、かな」

それは正確な指摘ではない。
正しくはこうだ。目の前の相手を一瞬でも倒せると思った事。それがナンバーズの失策。

「さて、どうする？　僕は御剣よりは優しいから…謝るなら今のうちだよ？
逃げようとしても無駄なのは…もう分かってるよね？
そうだね。一応言っておいてあげようか。

大魔王からは…いや、神からはさ、逃げられないんだよ」

そう告げた原口の顔に浮かぶのは笑顔。だが、その目は笑ってなどいない。

「それとね、らしくも無く饒舌な理由も特別に教えてあげる。そりゃ、貰い物で僕が努力して得た物じゃないけどね。掠め取られるのはいい気分じゃない。

端的に言うとね、僕は今、怒ってるんだ」

ナンバーズの、否、スカリエッティの失策はもう1つ。

普段温厚なこの男の逆鱗に触れた事、であった。

# １０章－７　Ｓｉｓｔｅｒｓ（後書き）

あとがき（と言う名の言い訳）：さて、１０章７話です。

という訳で、スバルの新デバイスお披露目回&原口無双回でした！
…おかしいな…スバルもかなりのチートを手に入れたのに完全に霞んでる…

スバル救出の際、『光狼の咆哮（ベオウルフ）』を使ったのはこの為だったり。
まぁ、あくまで物理防御無効であって、物理干渉できない念動力や『燭天覆う七つの円環（ロー・アイアス）』や原口の結界の様に術理の範疇の防御は破壊できません。

さて、原口無双の方ですが…無双ですね…珍しく原口ご立腹。
出番多目ですが、実は戦闘らしい戦闘してなかったり。でも戦闘シーンだと言い張ってみる。

遂にゆりかごに乗り込んだ御剣達。
ティアナを、ヴィヴィオを救うために進む彼らの前に現れたのは…？
次回『Ｓｔａｒｓ　Ｓｔｒｉｋｅ』お楽しみに。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8471i/

とある最強系主人公達の放蕩記

2011年10月21日09時06分発行